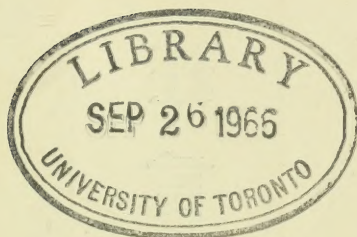
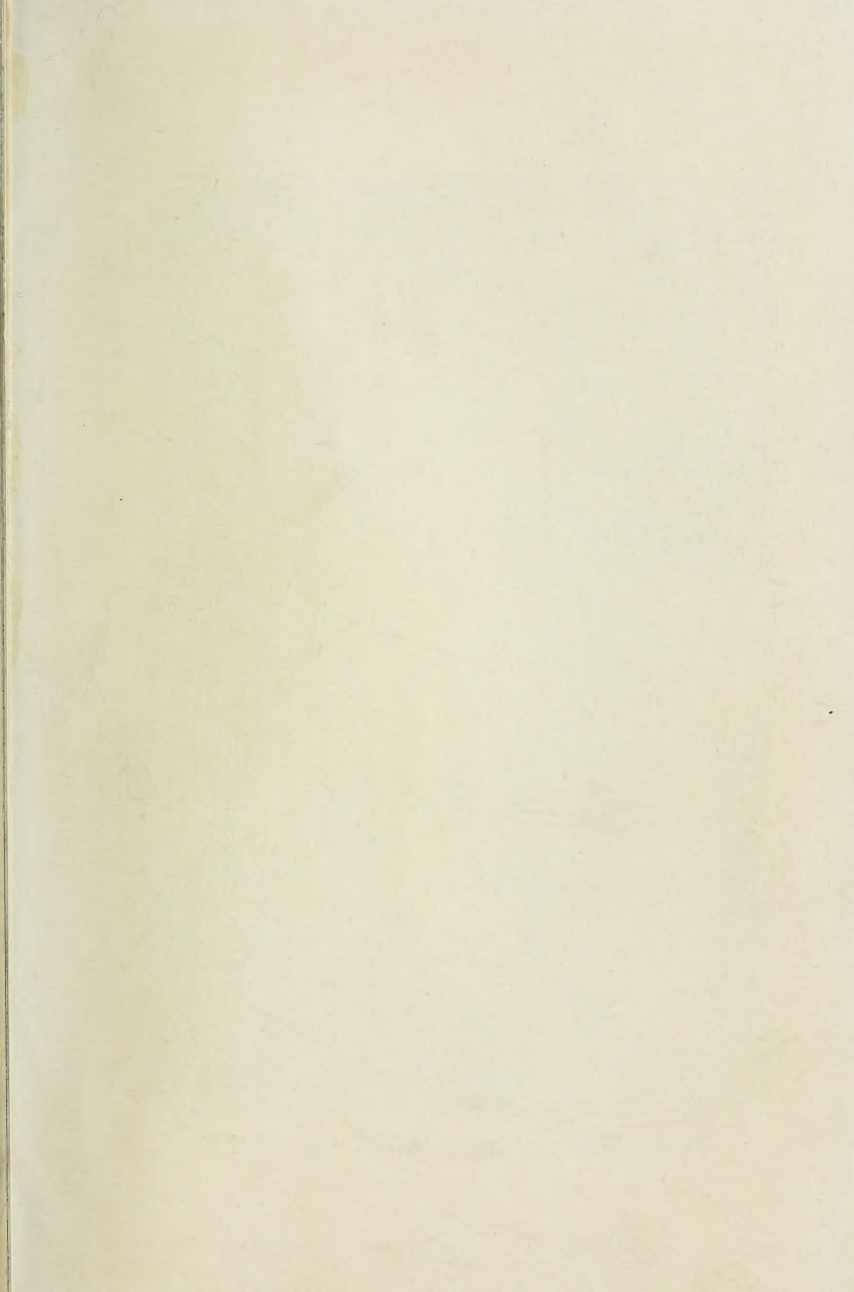
日本戲曲全集
第二十二卷

幕末狂言集

東京
春陽堂版

澤村長十郎の稲野屋半兵衛　（名譽仁政録）

日本戯曲全集 第二十二卷 目次

幕末江戸狂言篇

曆數二千八百年周甲寅當
香蝶樓の畫功を其まゝ歌舞伎に寫
して卯の花の芽出し月　狂言の榮
いろどる筆の拙きは御贔屓のお指
圖に隨ひ釋迦八相の　赤本習而

花觀臺大和文庫

初演の繪番附表紙
(上記の文字は當時の作者の書入れ)

花觀臺大和文庫

序幕

迦毘羅城の場
車匿部屋の場

役名——悉達太子。やすたら姫。烏陀夷妻、命婦。夜叉軍次。伯了和尚。左梵字次郎。郎黨、龜園子。こちく女。らんてん女。軍次妻、吉祥女。舍人、車匿。

本舞臺、常足の上段、上下も杉戸。正面、彩色畫の金襖。すべて天竺、迦毘羅城の體。早舞ひにて幕明く。

ト侍女、こちく女、らんてん女、上手より出で來り

こち　らんてん女、丁度、あたりに人目もなし、この間に早う伯了和尚を。

らん　心得ました。

ト簪を下手の方へ投げつける。これを合圖に伯了和尚、行者の拵らへにて出て

伯了　御兩所樣。

女二　コレ。

こち　しらま國解梵王の太子、提婆さまには、兼ねてやすたら姫に焦れ給へど、悉達太子といふ主ある御身。

伯了　さはさりながら、儀伯、無間が魔術を以て、入內はすれども、一つ床寐をさせぬも行力。

らん　その行力も、年が立てばきかぬと見え、淨飯王の勅命、烏陀夷夫婦が意見について、今宵、奧は婚禮同然。

伯了　サ、よくござる。愚僧、この度三七日の荒行をなし、妙術を以て取寄せし、この一品は、東に當る日本武州板橋の縁切り榎を以て人形を作り、即ち、愚僧が使ひかけの小揚枝を、釘に打ちて呪咀なせば、いつかな枕を交す事ではござらぬ。

こち　如何に惚れて居る姫君でも、上げ干しにして置いたら、巢を替へる氣になるは必定。

伯了　折を見合はせ、引ッ攫つて、提婆太子へ差上ぐれば、忽ち愚僧は一國の主。

らん　それより先に、南瓜女へ、提婆さまからお賴みは、

寳の御劍、盗み取つて送る者には、莫大の恩賞を下さる
ゝと、密書の文體。
伯了　それぞ今宵は祝儀ゆゑ、月桂殿の上段に、飾りある
に疑ひなし。
こち　わたし等が手引きして
らん　仕負ふせたらば、褒美は山分け。
伯了　ハテ、それも合點。
ト向うにて
呼び　上使
こち　あれは上使の、お先觸れ。
伯了　そのどさくさへ持ち込んで
らん　先づ、差當たる
女二　玉の冠。
伯了　ア、コレ……密かに〳〵
ト三人、上下へ別れて入ると、また、上使と呼ぶ。侍
ひ五人、出て、平舞臺へ出迎ふ。向うより、夜叉軍次、
燕手、木綿の長上下、そぐはぬ拵らへにて、三方に菓
子折を載せ持ち、手下、仕丁の拵らへにて、花紅葉の
連理木を携へ、附き添ひ出て來り、舞臺の皆々は、軍
次を見知らぬゆゑ、考へる。軍次、手下に、なんとか
云へと目交ぜする。
手下　オイ〳〵お侍ひ衆、なぜ、いゝ酒が……ではない、
お上使が來たのに、挨拶をしねえのだ。
侍一　ハ、ッ、ついにお見上げ申さぬお方樣。
侍二　存じがけなき無禮の段
五人　眞平、御免下さりませう。
軍次　あやまるなら、堪忍してやらう。そこへ行くから、
貴樣達、兩方へ別れてくれ。
五人　ハッ。
手下　成る程、親分は強的なもんだなア。
軍次　エ、云ひ草云はずと、氣を付けろえ……そんなら
そこへ。
五人　イザ、お通り下さりませう。
ト軍次、舞臺へ來り、手下は、件の鉢臺を眞中へ直し、
扣へる。
侍一　恐れながら、御上使の御假名
五人　承はりたう存じまする。
手下　おらが旦那は、人も知つたる、せんだら國の、しう
じゆくれんと云ふ大名。
侍一　その又お方が、いづれより

五人　御上使でござりまする。
軍次　イヤ、おれが大事の用があれども、この節の流行り風で、家中はみんな頭痛鉢巻。それゆゑ、自身に御出馬と出かけたのだ。
侍二　ハヽツ、これに居並ぶ者どもは、當まかだ國の諸侯の公達。
侍三　身不肖ながら、我れ〱へ
侍三　御上使の趣き
五人　仰せ聞けられませう。
軍次　イヤ、おれが逢つて、話しをするのは、この國の親玉、淨飯大王のかみさんの、けうどんみ。ちよつと、爰へ呼んで下せえ。
侍一　ヤア、忝なくも、十善の天子に對面願ふ、烏滸の曲者。
侍二　殊に、素性も知れざる上、辻褄揃はぬ詞の轉倒。
侍三　敵の間者に疑ひなし。
侍四　イデ、引ッ縛つて、詮議なさん。
侍五　ソレ、方々。
五人　心得ました。
手下　なんだ喧嘩か。面白え。憚りながら、蝦夷が島へ、ギヤツと生れて、金の鮭を横目に睨んで、鱈昆布のおしたぢで、産湯を使つた兄イだ。此奴等ア、蝦夷ッ子を見違へやアがつたかえ。
五人　先づ、おのれから。
　ト立ちかゝらうとする。奥にて
龜團　いづれも、待つた。
　ト龜團子、大名烏帽子、大紋にて出る。
軍次　イヤ、どなたであらうとも、淨飯王か、けうどんみに、直でなくちやア云はねえから、ちよつと呼んで下せえ。聞きやア此方の内も、今夜は、めでてえ事で、取込んで居るさうだ。早く埒を明けてえ。
龜團　ナニサマ、逢はせてやりたきものなれど、春宮に立せ給ふ悉達太子、御發心の思し立ちあるに依り、しだめいき女の后は元より、やすたら姫を遠ざけ給ふに依り、獅子けふ王より、三十八世の時に當つて、帝の寶祚、絶えん事を憂ひ給ひ、この程より、御惱まし〱、青龍殿へ行幸もなき仕合せ。何卒、樣子を某へ。
手下　成る程、そんな噂を聞いて居た。親分……イヤサ、お旦那、いつその事、この三番叟へ聞かせなせえな。
軍次　それよなア。云はゞ内證話しで、奉公人達の耳に入

つても、よくもあるめえと、此方で遠慮をしたのだ。當時、淨飯王が死ねば、共に死なうといふ好容夫人の爲にやア、おれは實の兄だから、今日の祝儀を祝ひながら、近付きになりに來たのよ。

鷄閣　左やうの事とは存じも寄らず、失禮御免……とサ、申したらよからうが、僞はり表裏の紛れ者めが。

軍次　ナニ、紛れ者とは。

鷄閣　オヽ、過ぎつる年、千五百人の宮女を抱へられたるその中に、好容と申すは、摩耶夫人のお側を勤め居りしが、后が逝去に付き、上下の差別なく、長のお暇を賜はりしに、好容一人、何ゆゑあつて留め置かうや。

軍次　アハヽヽヽ、可哀や、何にも知らぬが佛。今お身樣が云ふ通り、摩耶夫人がお死にやられて、筐を貰ひ、附き添つて居た女どもは暇が出たが、どう云ふ事だか、おらが妹の好容は、まだその頃は唐子髷の子供であつて、獨り殘された。併し、悋氣深いけうどんみどのゆゑ、今でも玻璃舍那殿へ圍つて置いて、寵愛さつしやるゆゑ、この頃、男の子、難陀太子を產んだと云ふ事……して見りやア、おれも他人でもねえゆゑ、赤子にも喰へるやうに、日本の豐島町から白雪糖を買つて來た。又あの石臺の花紅葉の連理木は、女嫉ひの悉達太子も、これからあの植木のやうに、引ッついて居さつせえと、心を籠めたつけえ物。こちとらがする事に拔け目があつて堪るものか。但し、好容は玻璃舍那殿に居ねえのか。難陀太子は生れねえのか、おれがやうな兄は持てねえと吐かしたか。エヽ、返答しねえかえ。

手下　親分、とても埒は明かねえ。

軍次　いつその事に、奥へ踏ん込み。

ト立ちかける。奥にて

命婦　アイヤ、參るに及ばず。けうどんみ、對面仕りませうわいなア。

ト命婦、裲襠衣裳にて、以前の腰元大勢、附いて出て來る。

手下　ハテナ、淨飯王の后にしては、吞み込めぬ形恰好。

軍次　ハヽヽヽヽ、一の后のけうどんみゆゑ、つひに逢うた事はあるめえと思ふが、うつそり。十九年後にやア、馬將軍に賴まれて、度々けうどんみの部屋へ忍び、摩耶夫人を調伏の……イヤサ、摩耶夫人の病氣中も、惡魔降伏の禱りの使ひをしたゆゑ、懇親にしたおれだ。その手は喰はねえ、出直さつせえ。

命婦　これは又、事の仔細も申さぬうち、きついお心の廻りやう。妾こそは、太子の三公、烏陀夷が妻、命婦と申す者。其許樣のお入りの樣子、遂一に申し上げしところ、帝は元より、けうどんみさまにも御不例ゆゑ、上意を蒙むり、御名代に參りしからは、取りも直さず后の形代。けうどんみと申せしは、よも僻事ではござりますまい。

軍次　ムウ。サア、さう譯が分れば、角目立つ事もねえ。

命婦　さりながら、好容さま、御親子の事は、內密に致せよとの仰せつけゆゑ、これに列座の方々は御存じないは御尤も。お觸れ出しあらば、其許樣は好容夫人のお兄君。

鍋閑　御外戚同然のお方とも存ぜず

侍一　無禮の段は、幾重にも

五人　御高免下さりませう。

軍次　何しろ、折角土產に持つて來た石臺、悉達どのへ進ぜて下せえ。

鍋閑　ナニサマ、世に珍らしき連理木。

侍一　散らさぬやうに。

五人　ソレ、女中方。

こち　畏まりました。

ト石臺を持つて入る。

軍次　時に命婦どの、こなたの取次ぎで一足飛びに六ヶ國か、七ヶ國の大名に取立てると云ふ、墨附きを貰つてくれるだらうな。

命婦　そりや、二の君の伯父君、御分國の儀は、程なく御沙汰あるは必定。それより先に、下し賜はる大君の御時服。左梵字次郎、急いでこれへ。

次郎　畏まつてござりまする。

ト廣蓋へ衣服を乘せ、袱紗を掛け、持ち、左梵字次郎出て來り、軍次の前へ直して、下手へ扣へる。

ハツ、この度、若宮御誕生の祝ひとあつて、自身の參內大君にも御滿足に思し召され、下し賜はる御裝束、有り難く御受納あつて然るべう存じまする。

軍次　ア、イヤ、例へ綾錦にしろ、大概値打は知れて居る。こんな物より現金でくれるとも、國取りの墨附きを渡すともさつせえ。それ叶はずば、好容は暇を下せえ。サア、二つに一つの返答さつせえ。

命婦　この場を程よく歸さうと、なだめすかせば付け上がり、無禮過言の慮外者。とく／＼爰を立去るまいか。

軍次　イヤ、猪口才な事を蒔き出したな。歸れとは誰れが事。

命婦 云ふまでもない、いま山林へ引籠り、獸を取つて世を渡る、うつば造りの夜叉軍次。好客夫人の兄とは云へど、幼なき頃より勘當受け、身を持ち崩し、樣々の惡事を企み、活計となし、衣服大小、假初めの武家にやつして來れども

龜團 城內に待たせたる供人を拷問なせば、命婦どの〻推量に違はず

次郞 先つ頃、悉達太子、かいゐ國より還幸を待ち伏せして、兄右梵字と戰ひし、提婆が手下に紛れし曲者。

龜團 露顯なせしも、大君の冥罰。

次郞 但し繩かけ

五人 拷問なさうか。

軍次 サア、それは。

侍一 供せし同類、この場へ召連れ

侍二 今一應、白狀さゝうか。

軍次 サア、それは。

命婦 素性を明かすか。

皆々 サア〱〱。

命婦 最早叶はぬ、申してしまや。

手下 ア、、萬歲桑原々々。

ト橋がゝりへ逃げて入る。

軍次 エ、、女の爲に見顯はされしか。殊には、親の勘當と知つたる者は妹の奸婦。その砂利引きも淨飯王。現在、兄に手めを上げさす、どち女め。せめてこの裝束を引裂き捨てるが、當座の腹癒せ。

ト廣蓋の袱紗を取ると、繼々のどんざなり。

ヤ、、こりや最前脫ぎ捨てし

命婦 朝夕着馴れし、汝の衣服。

軍次 それ知られたら。

ト切つてかゝる。その手先をキッと押へ

命婦 女ながらも烏陀夷が女房、邪しま非道のなまくら刃金、この身に立たうか。愚かな事を。

軍次 なにを。

ト振りほどいて、切つてかゝるを、件の菓子折にて受けとめる。これにて折の蓋取れて、藁人形落ちる。龜團子、取つて

龜團 こりや、コレ、慥かに我が君を

女皆 呪咀調伏の

次郞 仕込みし人形。

立皆 イデ、我れ〱が。

ト柄へ手をかける。命婦、軍次の白刃を打ち落し、引きつけ

命婦　ア、コレ、必らず粗忽なさるゝな。親々の勘當あるとても、好客さまの兄とあれば、刃にかくるは君への恐れ。

龜圖　でも、此まゝに捨て置けば

次郎　後日に又もや

侍皆　遺恨を含まば。

命婦　氣遣ひあるな。蟲に等しき彼れらの企み。さりながら、以後の懲しめ、その褞袍に着せ替へさせ、百杖打つて、この場を追放。

皆々　心得ました。

軍次　エ、、なめら三方。

ト逃げにかゝるを、皆々、手取りにして褞袍に着せ替へさせ、縫ひぐるみにて打ち据ゑる。軍次、悶絶する。

命婦　オ、、もうよい〳〵。大君始め太子さまの、お情深く、重罪の者たりとも、命を助けさせよとの倫命なれば、此まゝに見遁がしては歸すものゝ、云はうやうなき重罪人。ハテ、命冥加な。

立皆　いつその事に。

ト柄へ手をかける。

命婦　ア、コレ、萬事は奥にて。

立皆　然らば此まゝ。

命婦　我れらと共に。

女皆　左やうなれば

皆々　命婦の方さま。

命婦　サア、斯うお出でなされませ。

ト軍次にこなしあつて、この一件殘らず、奥へ入る。入相の鐘になり、上手より吉祥女、窺ひながら、茶碗を携へ出て、軍次を抱き起し、湯を含め

吉祥　コレ、こちの人。

ト呼び生ける。軍次、心付き

軍次　オ、、痛え〳〵。

吉祥　心からぢや、堪へさんせ。

軍次　もう破れかぶれだ。

ト吉祥女と心付かず、掴みつく。

吉祥　アイタ、、、コレ、吉祥ぢや。ソレ、其やうに打たれても、めん〳〵の邪しまが、分らぬ程の惡黨どの。お次で樣子を殘らず聞いた。またぞろや提婆に組みし、

コレ、この藁人形は、御兄弟の太子さまを亡きものにして、このまかだ國を提婆に掌握させんと云ふ企みとも露知らず、昔勤めた御縁を以て、小間物商ひに來て、御樣子を聞けば、好谷さまには若君を御平產遊ばせしと、局方のひそ〳〵話し。いづれ血筋を取糺し、いつか一度は召し出され、今の貧苦も昔語りと、空喜びの裏を掻き、先へ廻つて惡事を企む、罰は目前、この有り樣。エヽ、云はうやうない畜生どのではあるぞいなア。

軍次　エヽ、親の意見せえ聞かねえで、勘當されたおれが、どいつが何と云はうとも、お取上げはねえ。一旦仕掛けた謀叛の勝負、やるまでやらにやア置かねえのだ。これから淨飯王か太子の首をぶち落して行かにやア、提婆どのへ男が立たねえ。退きやアがれ。

吉祥　イヽヤ、退かぬ、放さぬもお前の爲。是非叶はずばわたしを先へ。

軍次　馬鹿を云へ。うぬでは百にもなりやアせぬわえ。

吉祥　さう云や、いつそ。

ト軍次の脇差へ手を掛けるを、振り放す。吉祥女、前へのめり、藁人形の大釘を見附け

ソレ……南無阿彌陀佛。

ト咽喉へ突き立てる。軍次、驚き

軍次　エヽ、われに死なれちやア、おれの都合が。

ト介抱をする。隙を窺ひ、軍次の脇差を手早く拔き、また腹へ突き立てる。

エヽ、今度は腹か。待つてくれ〳〵。

ト引き廻すを止める。橋がゝりより伯了、手下、薄暗きこなしにて、窺ひ出て來り

伯了　そこに居るのは、夜叉ぢやアねえか。

手下　ヤア、かみさんは、吐血か〳〵。

軍次　馬鹿を云ふな。腹を切つた。爰をしつかりつらめえて居てくれ。おれは咽喉の釘を拔くから。

手下　とんだ所へ、耳拔きをしたなア……エヽ、おへねえ番狂はせだ。手こずり拔くワ。

伯了　どこぞで、釘拔きを借りて來やうか。

トまた此うち、軍次、釘を拔かうとする。吉祥、その手を捕へ

吉祥　死なうと覺悟極めたもの、助かるやうに突き立てやうや。この苦しみは日頃から、多くの獸を打ち殺した、お前の因果がわたしへ報い、まだその上に、十善の君、太子へ刃向ふ御罰が、忽ち廻るこの苦しみ。こなたのや

初演の繪番附

うな惡人は、共に冥途へ連れて行く。覺悟さしやんせ。
ト腹の脇差を拔き取り、切りつける。軍次、驚く。手下、眉間を切られ
手下　ワア、、切つた／＼。
伯了　靜かに／＼。
軍次　とても助からねえこんな奴に、未練はねえ。
伯了　無盡と女房は、掛捨て／＼。
ト吉祥、兩人に切つてかゝる。軍次、その手元を捕へ
軍次　コリヤ、百年も生きてから行く程に、半座を分けて
トほろりとこなしあつて
エヽ、勝手にしやアがれ。
ト伯了を連れ、橋がゝりへ走り入る。此うちのた打つ手下を軍次と心得、胸倉を捕へ
吉祥　こちの人か。
ト手下、咽喉が詰まりしこなしにて、手を振り
手下　違つた／＼。
吉祥　エヽ、未練な事を。
ト乘りかゝつて、手下を刺し貫き、につこりと思ひ入れあつて落入る。この仕組みよろしく、道具、ぶん廻す。

本舞臺、三間、丸石を塗り込みし練塀。上手の方、彫り物したる額を掛け、よき所に築地門。下手、二間の廐、軒に幣束をかたげたる猿を描きたる額を掛け、よき所に鐵網をかけ、篝を焚き、側に突棒、刺股、幟を飾り立て、日覆より棕櫚の吊り枝。かすめて本釣り鐘、銅鑼、打ち交ぜ、床の淨瑠璃の送り返しにて、道具納まる。
〽風さそふ、頃は如月七日の夜、宵寐まとひの后達、前後も知らず寐入り端。香も心や勞れけん、袖をかたしく高鼾、出離穢土とは爰なりと、虎の尾を踏む思ひにて、築地の小門遁がれ出で
ト悉達太子、出て來り
悉達　ナニサマ、諸佛の教への通り、我が住み馴れし大内なる、築地の内に忍ぶれば、無明の闇に迷ふ習ひ。妻子のほだし絕ち切るには、今この時。何は然れ、車匿の住居は……ムウ、慥かに、それ／＼。
〽あやは分かねど星明り、軒の掛け額、目當にて、廐の軒に佇み給ひ。

ト下手の戸口を打ち叩き

車匿々々。

〽と御身を忘れ、のたまひしが

イヤ〳〵、例へ、夜は更くるとも、麿を守りに衛士が焚く、その篝火の灯影さへ、今を盛りと燃え立つれば、見咎められては何とせん……コレ、車匿舍人、起きてたべ。

〽御聲フッと寐耳に入り。

ト戸を叩く。

車匿　エ、、何奴だ。用があるなら、明日來い。

悉達　ア、、これはしたり、太子ぢやわいやい。

車匿　なんだ、大酒だ。ハア、、御内番所で大酒が始まつたゆゑ、一杯やれと云ふのか。イヤ、、そいつは行かざアなるめえ。

〽着のみ着のまゝ寐ぼけ顔、伸び欠伸して、戸を開き。

ト車匿、仕丁の拵らへにて、戸を明け、出て

今日は大奥の御祝儀で呑んだゆゑ、内へ歸ると、其まゝぶッ倒れた……ヤア、あなたは。

悉達　麿ぢやわいなう。

車匿　ほんに若君。

〽云はんとせしが、氣を取り直し。

どつこいしよ。へ、、その手は喰はねえ。おれが寐て居る所へ付け込み、酒を呑めと衛士に化けたり、また、太子さまに化つたり、忝なくも、悉達太子のお馬添ひだ。出直せ〳〵。

悉達　ア、、左やうな者ならず。故あつて、夜の内に忍び行かねばならぬ入り譯。仔細は道々申し聞かす。金泥駒、早く〳〵。

車匿　そりやこそな。狐を馬へ乘せて堪るものか。

悉達　これはしたり、決して怪しき……さりながら、不審を立つるは無理ならねど、兼ねて汝も知る如く、一旦思ひ立つたる大願、今宵ならでは、いつをか期せん。聞入れなくば、主從の緣はこれ限りぢやぞ。

車匿　ア、、待つて下さりまし。

ト後へ廻り、よく〳〵見て

成る程、我が君に相違ない。左やうなら大君さま始め、烏陀夷さま御夫婦が、さま〴〵御意見申し上げても。

悉達　ヤア、時移らば人目にかゝり、再び内裏へ戻されなば、生き長らへて居らぬ覺悟。サ、、早く〳〵。

車匿　引くは引きませうが、ちよつと烏陀夷さまのお勤め

所まで。

悉達 ヤア、それ申してなるものぞ。いよ〳〵主の詞を背くか。

車匿 どうして、マア勿體ない。

悉達 然らば、金泥、これへ引け。

車匿 でも、烏陀夷さまから、キッと云ひつかつて居りますから。

悉達 ムウ、烏陀夷は麿が臣下ならずや。その家來の詞を用ひて、主の詞は背けと云ふ掟があるか。

〽御氣色變りければ、車匿悔り。

車匿 成る程、御幼少の時分から、お叱りなされた事のないあなたが、よく〳〵の事なればこそお腹立ち。よろしうござります。唐日本までもお供いたしまする。

〽詮方涙押し隱し、馬繫ぎへ入るその折柄、やすだら姫は御跡慕ひ、局々を忍び出で、踏みも習はぬ築地外。それと見るより走りつき、御袖に取り縋り。

トやすたら女出て

やす エヽ、嬉しや、爰に座しましたか。最前よりの一部仔什、どう思ひ直しても、妾は一人、この宮に殘り、人に疎まれ肩身も狹う、例へ、若宮御誕生あるとても、誰れを力に守り立てませう。その差添へにて自らを殺し、御本意をお遂げ遊ばせ。死にたうござりますわいなア。

〽太子にひしと抱きつき、むせび入つたるばかりなり。

悉達 こは、淺ましき申し條。我れ、正覺さへ遂ぐるなら、又の對面なす程に、懷胎の宮を大事にかけ、守り育てゝ待ち給へ。

やす それぢやと申して。

悉達 聞入れなくば、離別なさうか。

やす サア、それは。

兩人 サア〳〵〳〵。

悉達 聞分けてくれいやい。

〽心强くのたまへど、流石恩愛、別れの涙、暫し詞もなき折柄、車匿は馬に黃金の轡、珊瑚の鞍を置きながら、立ち出で、姫を見やり。

ト車匿、飾りつきの白馬を引き出し

車匿 姫君樣も、さぞやお悲しうござりませう。コレ御覽遊ばせ、この金泥駒、畜生でさへ首をうなだれ、涙をこぼして居りまする。アヽ、百萬だら申しても、親御さまの仰せさへお聞入れないものが、なんの下郎が申す事、お取上げあらう筈がない。サヽ、姫君さまも思ひ切つて

おしまひなされませ……私しはお供いたす覺悟にてござりまするが、太子が忍びで落ちさせん事もあらんかと、宮中三十六の御門毎に、明くれば忽ち四十里へ響く鐘を吊り、篝を焚いて、守りの後の嚴しければ、こりやなんとなされまする。

やす　それも最前申し上げしが、お聞濟みなきお胴慾。

悉達　いやとよ、兩人、思ひ立つたる麿が大願、何かは空しくなり果てんや。如何程守り嚴しくとも、いま煩惱のきづなを斷ち、成覺成道なさしめて、普く衆生の助けなる、愛愍納受なさしめ給へ。

〽合掌念誦し給へば、忽ち一天かき曇り、俄かに降り來る雨電、衞士の篝も、あら不思議や、一度に消えて鳥羽玉の、あやめも知れずなりにけり。

やす　ヤヽ、今まで晴れし星明りも

車匿　忽ち村雲一面に、篠突くやうなるこの大雨。

悉達　雨具の用意。

車匿　心得ました。

ト内より、肩簑、竹笠を出す。太子、手早く着て、馬に跨る。

やす　すりや、もうこれが。

悉達　コリヤ、堅固でお居やれ。

やす　モシ。

悉達　ヤア、未練千萬。

やす　それおやと申して。

〽拂ふを縋る愛別離苦、袂振り切り、會者定離、名殘り淚に。

ト袖に縋るを、悉達太子、振り拂ふ。これにて左の片袖ちぎれ、たぢ／＼と上手へ倒れる。

車匿　モシ。

〽出でゝ行く。

ト太子の方を、やすたら姫、見返へる。太子、鐙を打つ。これを木の頭。双方、顏を背け泣き落とす。雷の音を冠せ、

よろしく幕

二幕目

壇特山別れの場

役名——悉達太子。神童子。舍人、車匿。

本舞臺、一面、向う、鏡板まで、二の手、三の手、

奥深に打抜き、異形なる岩組みの遠見。上手、山の裾に唐門の書割り。この側に異形なる建て石、これへ篆字にて發心門と記しある。三筋の瀧、蔦葛など遣心に書割り、上手、切出しの岩山、これへ登る事あり。舞臺前、山川の流れの模様、これへ青蓮花の盛りを見せ、唐松の吊り枝。すべて天竺、檀特山、半腹の模様。一セイ、山嵐しにて幕明く。

ト直ぐに床の淨瑠璃になり

〽行く空の、南天竺の迦毘羅城、宮居を離れて凡そ一千三百里、壇特山と聞えしは、四方岩石峨々たる高峰、落ち來る瀧の靈水は、數丈の谷間に散亂し、鳴神よりも物凄し。かゝる難所をいとひなく、仙法奇持の御心に、花の都を跡にして、車匿を隨へ悉達太子、元より菩薩の結縁に、四天王神守護なして、一夜に法の道のべも、寂寞たる半腹に、暫し佇み休らひて。

ト此うち、向うより悉達太子、後より車匿舍人、馬の手綱を引き、出て來り

悉達　見渡せば、北に當りし高山に、殘んの雪は白雲と、見紛ふばかり仙境は、心も清き瀧津瀬の、心耳を澄ますこの幽谷

車匿　函水の、流れに咲きし青蓮花、絕えず花咲く四つの時、極樂淨土を自然に、悟れど無妙の夢もなく

悉達　鶴の齋に跡消えて

車匿　霜を含める山姫も

悉達　月の雲間に蔦蔓。

車匿　世界にあらぬこの絕景。

悉達　實にも尊き

兩人　靈場ぢやなア。

〽心細道一筋に、駒の四足に立ち兼ねし、嶮岨岩角嫌ひなく、踏みしめつゝも歩み來る。

ト悉達太子、先に、車匿、舞臺へ來り

悉達　この靈山を詠むるに、雪漠々として谷を塡め、月皎皎として心を澄ます。我れ、苟くも迦毘羅城主と生れ、何不足なく世に出でたるも榮華の夢、千花萬花は目前の塵埃、愛惜妄念は煩惱の薪。無妙の猛火に、この身を焦がす殘念さよ。

〽御袖を絞り給へば、舍人は太子に打向ひ。

車匿　昨夜、お忍びの御出門に、再三お諫め申せども、思ひ込んだる御發心。止むを得ずしてお供はなしたれど、思ひ迴せば都にまします、御父君を始めとして、忠臣無

二の烏陀夷夫婦、取分けお痛はしいは、やすだら姫さまには、御懷胎の御身の上、めでたく御出產のその後も、何樂しみに御介抱、そのお歎きを思はれて。

〽後へ心も後ろ髮、只さへ嶮しき嚴壁の。引く駒さへもやう〳〵に、手綱ゆるさぬ心の内。我が君樣には、これまでに、踏みも習はぬこの難所も、峠つ岩に引裂かれ、御足は染みて紅いと。

〽變り果てたる御難行。先にも山の半腹に、跋迦仙と云ふ翁、君に示してのたまふは、壇特山の法嶺は、道のり凡そ四十里と、示し給へど、平地と違ひ、かゝる嶮岨を御登山ありて、もしも御身に凶事ばしあらば、勞して功なき一大事。殊に尊き法嶺ゆゑ、凡體にては叶はぬと、仙翁の戒しめ、只此まゝに還御あらば、舍人が喜びこの上なし。御立願の儀は、只管お止まり下さりませう。

〽面に顯はす誠心の、諫めは實にも道理なり。太子は莞爾と打笑み給ひ。

悉達　賤しき身とて、忠義の二字に隔てなく、舍人に似合はぬ汝が忠言。我れ、出門のその折も、道理をせめて其方が意見、思はぬにはあらねども、抑も今般の立願は、一朝一夕の事にあらず、親族を見限り、發心正覺を遂げん我が一心。如何なる難所に至るとも、最早道のり四十里と限りあらば、難行苦行はこの身の修行。何とて都へ歸らんや……昨夜より多くの道のり、定めし金泥も勞れつらん。心を付けて介抱せよ。

〽仰せに返す詞さへ、泣く〳〵立つて傍へなる、流れの靈水汲み取りて、一息つがす折柄に。

ト車匿、こなしあつて、腰の馬杓にて流れの水を汲み馬の口を洗ふ事あつて

〽遙かあなたの山頂より、麓へ下る一人の童子、莟の花籠携へて、二人を見るより聲を掛け。

ト此うち、上手の岩間より神童、晝面の拵らへ、異形の花の入りし花籠を提げ、出て來り

神童　こは訝かしや、二人の者、何國よりこの靈山へ迷ひ來しぞ。

〽云ふに二人は額づきて

悉達　我れは都、迦毘羅の城主、淨飯大王の一子、悉達太子と申す者。發心正覺の望みを遂げん爲、登山せり。無常隡提清淨たる、當山の法嶺へ、お許しあつて菴室を、御教授願ひ奉る。

神童　〽慇懃に述べければ、神童子はうなづき給ひ。
　　忝なくも當山は、七仙出生の前よりも、顯密二種の靈地にて、牛馬は元より凡族の、通ひ來べき所にあらず。これより先に、正道と云ふ門あり。三心具足せざる者は、登山は叶はず。早々、麓へ下られよ。
〽袖振り切つて行き給ふを、太子はあはて押とゞめ。
悉達　こは情なきその仰せ。親族を見限り、これまで參りし、我が一念、何卒阿羅々仙人の座します、菴へ伴ひ給はらば、生々世々の御高恩。
〽身を投げ伏して禮拜す。神童、重ねて。
神童　發心の望み、思ひも依らず。五逆十惡の罪人なる汝ゆゑ、所詮登山は叶はぬ事。
〽思ひも依らぬ神童の、詞に太子は合點ゆかず。車匿、思はず進み出で。
車匿　合點のゆかぬ今のお詞。これにゐますは主君の若君、稚けなき時よりも、生ある者の命を取らず、況んや人間を聊かも、苦しめたる事もなく、民の撫育は云ふも更なり。然るを五逆十惡とは。
〽聞かまほしやと詰り問ふ。神童、威儀を改めて。
神童　凡夫の身にて、何かは知らん。大罪犯せしその次第、云ひ聞かせん。
　　ト誂らへの鳴り物になり
抑も汝、出生のその始め、胎内にあつて三年母を苦しめ、遂に母たる摩耶夫人、世に亡き魂の露と消え、また父たる者の命に背き、月卿雲客、數多の女官の歎きを思はず、宮中を忍び出で、守りし官人へ越度を付くる、その罪跡、輕からず。父母の恩愛は滄海よりも猶深し。かゝる尊き父母へ、恩を報ぜぬ罪科は、大千世界の土に等し。聊かの善根を勤むと雖ども、いかで望みの叶ふべきや。なんと相違はあるまいがの。
〽星を指されし御詞に、太子を始め車匿も共に、胸に釘打つ心地して、差俯向いて詞なし。やゝあつて、兩手を突き。
悉達　ハ、、かゝる尊き神童に、廻り逢ふこそ、この身の志願、調ふ吉瑞。我が犯せし罪科も、阿羅々仙王のお弟子となり、朝な夕なの給仕は愚か、如何なる水仕業でも聊かいとはぬ我が立願。發心報謝得達の、敎へを受けなば、これまでに、なしたる罪も亡ぶる道理。修行に罪障消滅せば、水行斷食、何にかいとはん。
〽思ひ込んだる念力に、例へ一命召さるゝとも。

いつかないとはぬ我が心底、コレ申し。
〽岩に手を突き頭を下げ、頼む太子の心底は、哀れにも亦殊勝なり。
神童　如何にも汝が云ふ如く、一旦懺悔する時は、五逆十惡の罪を、速かに滅すれば、たゞ發心の修行こそ肝要なれ。
〽詞に太子は飛び立つ嬉しさ。
悉達　アラ嬉しや、喜ばしや、望み叶ふ上からは、修行怠り申すまじ。何卒菴へ導き給へ。お頼み申す。神童子。
〽高位の御身も地に伏して、涙にくれて居たりける。童子は心察しやり。
神童　汝が尋ぬるその菴へ、如何にも導き得させんが、その凡俗の姿にては、いつかな叶はぬ。
車匿　何ゆゑあつて、このお姿では。
神童　その身に纏ひし衣服こそ、數多の蠶を煮殺して糸に取り、あやなせしを着用なし、まつた草木を醸したるその汁を用ひ、種々の染色。紅は火宅の火に象り、煩惱の炎となりて、發心報謝を燒き捨つる。黄色は娑婆の執着にて、親子の栁や愛別離苦、歎き悲しむ涙の色。青きは卽ち假の世の。
〽老少不定を身に抱き、病苦に惱み、衰ろふ色艶。白きか黒きか、墨染を用ゆるなり。煩惱の垢付きし衣服を脫ぎ捨て、穢れし肌を清め、草衣を用ひし上、師弟の契約は執成し得させん。さなくば得達難かるべし。
〽云ひ捨て丶、立つよと見えしが忽ちに、形は消えて山雲の、煙と共に失せにける。
ト大ドロ〳〵、掛け焔硝にて、神童子、消える。これにて兩人、放心して居て、心附き
〽跡に二人は顏見合せ、ホツと溜息つく鐘の、哀れを告ぐる無常の聲。
ト本釣り鐘、床の合ひ方になり、兩人、こなしあつて
悉達　凡そ天地開けてより、世界に三千五百萬、その人間に生れ來て、如何なる前世の宿業にや。
〽思ひ立つたる一念も。
仙家の草衣と云ふ物を、辨まへぬ口惜しさ。それを着用なさゞるうちは、我が立願も叶はぬか。エヽ、口惜しや。
〽我れを忘れて伏し轉び、ワツとばかりに泣き沈む。車匿はいたはり、脊撫でさすり

車匿　御尤もなるそのお歎き。いま神童の告げ給ひし、仙家の草衣は如何なる物やら、我が君さへ御存じなき仕立て物、是非もなき事なれば、一旦都へ還御あり、その上にてお尋ねあらば、夥多の御家令、辨まへし者もござりませう。件の草衣がお手に入らば、再び御登山然るべし。一先づ、都へお供申さん。サヽ、早く〳〵。

〽進むれども、太子は更にいらへなく、こなたの峰に打向ひ。

ト のりの早き合ひ方になり

悉達　我れ凡夫の淺ましく、示し給ひし仙家の草衣、未だ曾て心得ず。さまでつれなくし給はずと、見えて我れに今一度、教へ給へ。

〽一心不亂、鐵石の巖を通す念力に、納受ありしや、以前の童子、又も現はすその姿。

ト 大ドロ〳〵になり、上手の松の大樹より、以前の童子、現はれ出る。

神童　最前云ひしは、汝が心を引き見ん爲。今こそ許す仙家の草衣。八正道の門前にて、與へ得させん、受取られよ。

悉達　ヤヽ、我が誠心を感納あつて、仙家の草衣、お許しあるとや。エヽ、嬉しや、忝なや。

〽夢に夢見し心地して、禮拜なすこそ痛はしき。

ト 太子、車匿、喜ぶこなし。

神童　斯くなる上は、汝が着せし肌付きは、それなる者に持たせやり、疾く〳〵都へ歸されよ。

〽聞いて車匿は打驚ろき

車匿　すりや、なんと仰しやります。いつまでも御主人のお側に居て、御奉公は叶ひませぬか。

神童　汝が主人の立願の妨げ、我れはこれより八正道の、門前にて再會なさん。さらば〳〵。

〽さらば〳〵と云ひ捨てゝ、又も形は消え失せたり。太子は跡を伏し拜み

ト 神童子、掛け煙硝にて消える。

悉達　仙家の草衣、お許し蒙むる上からは、この身の大願成就のしるし……其方はこれより、都へ歸り、父上に見えなば、これまで大恩受けながら、仇になしたる不行跡、よきに詫びをば頼むぞや。また二つには、やすだら姫、我が事はこれまでの、約束事と諦らめて、我れに代つて父君を、大切に御介抱申せよと、傳へてくれよ、コレ車匿。

車匿　これは又、思ひも衣らぬ御仰せ。常に御遊の御時にも、やつがれ、お側を少しも離れず、我が君、お一人殘し置き、どうマア都へ戻られませう。例へ、如何ほど神童のお止めあらうとも、お側に置いて下さりませ。
〽裳に縋り歎くにぞ、太子も不便と涙を拂ひ。
悉達　これまで我れをいたはりて、仕へくれし志し、いつまでも手元に置いてやりたけれど、今云ふ事を、よつく聞きや。
ト床のメリヤスになり
それ娑婆世界は上下ともに、榮華の程を樂しめど、四夫顛倒の憂ひを免かれず。たゞ自然の境界に迷ふばかりにて、後の世を辨まへ知らぬものなれば、翅なくとも鳥類に等し。
〽四足なくとも獸に等し、浮世に迷ふ煩惱の。
一切衆生を救ひ取り、大慈の船に打乘せて、大慈の棹を取らずんば、浮夫の浪はよも越さじ。されば獨りで生れ來て
〽獨りで歸る習ひには、死出の山路はさて措いて。
親しき友も隨はず、土となり、灰となり、無常の別れ如何ならん。我れ正覺だに學びなば、汝を譜代の友とせん。爰の道理を聞分けて、都へ歸り、勤功せよ。
〽理りせめてのたまへば、車匿はさこそと思へども、さしもに別れ惜しまれて。
車匿　仰せは逐一畏まり奉れど、宮中へ歸りなば、御父君、怒り給ひ、愚臣が罪を免し給はで、命を召すは必定なり。すご〳〵歸り、憂き目を見んより、お側で死するがこの身の果報。
〽離れ難なき悲歎の涙。太子はそれを押とゞめ。
悉達　それは汝が僻言なり。例へ、都へ歸りしとて、無下に一命召されんや。却つてお褒めのお詞あらん。都へ筐は……オヽ、幸ひ。
〽飾る錦も故郷へ、自ら上衣を取り給ひ。
この品、都へ持ち歸り、我が筐ぢやと傳へてくれよ。
〽差出し給へば、車匿は涙、呑み込んで
ト太子、上羽織と被布を取つて、差出す。
車匿　如何に仰せが重いとて、昨日までも大切に、京九重の玉殿に、綾錦の褥の上、御安座ありしお身分にて、透洩る風もいとふ御身を
〽刃に等しき山嵐。
御立願とは云ひながら、三代相恩の御主君を、この靈場

にお一人殘し、どうマア都へ歸られませう。こればつかりは、お免しなされて下さりませ。
〽ワッとばかりに泣き沈む。太子は御氣色變はらせ給ひ。
悉達　我が立願を妨げなすのみならず、故鄕へ歸るが不服なら、七生までの勘當ぢやぞ。
車匿　エヽ、イヤ、參らぬではござりませねど。
悉達　そんなら早う戾らぬか。
車匿　それぢやと申して。
悉達　詞を背くか。
車匿　サア、それは。
兩人　サア〳〵〳〵。
悉達　この品持つて、歸り居らう。
車匿　ハア、。
〽ハッとばかりに立ち上がれど、これが別れと主從が、せき來る淚是非なくも、腰に附けたるこうぜうはん、駒の轡に結びつけ、引けども步まぬ有り樣を、見るに車匿は堪りかね。
ト車匿、是非なく立ち上がり、腰に附けたるこうぜうはんを轡に結び、引かんとすれども、馬は動かず、車匿堪まり兼ねし思ひ入れにて
これ御覽ぜよ、我が君樣、畜類でさへこの如く、別れを惜しみ泣き叫ぶを、まして舍人が心の內、御推量なされて下さりませ。
〽前後不覺に泣き叫ぶ。太子も哀れと金泥の、わだ髮取つて撫でさすり。
ト太子、不便と云ふこなしにて馬を撫で
〽我が秘藏なる金泥も、頭をうな垂れ歎くにぞ。御目に溢るゝ御淚。
ト太子、車匿、愁ひの思ひ入れあつて
悉達　如何なればこそ此やうに、主從三世と云ひながら
車匿　寸善尺魔の世の中に
悉達　切磋琢磨の功積みて
車匿　天地に輝く福壽海。
悉達　無量に開く天が下
車匿　その御勵しは、都にて。
悉達　ア、有爲轉變の
兩人　盛衰ぢやなア。
〽主從、手に手を取り交し、堪え〳〵し溜め淚、泣く音を哀れ山彥の、谺に響き谷川の、水量增さるばかりな

り。斯くては果てじと、氣を取り直し。
悉達　ア、思はずも不覺の涙。愛別離苦は世の習ひ。最前約せし神童に、遲刻なしてはこの身の恐れ。先づはこれより八正道へ。
車匿　左やうでござれば私しは、お暇賜はり、都へ戻るでござりませう。
悉達　もう行きやるか。
車匿　隨分ともに御健勝で。
悉達　オヽ、其方も無事で。
〽とお詞も、名殘りは盡きじと故郷へ、送り賜はる御形見、泣く〳〵取上げしほ〳〵と、鞍の前輪に結び附け、涙ながらに引き出づれば、先へ二足、後へは三足、深山颪に足も空、つらき思ひは山々の、花を見捨てゝ雁金の、夢路をたどる心地して。
ト太子二重へ上がる。車匿は馬を引き、花道にかゝる。
〽都の空へぞ歸りける。
トこの仕組み、三重にて、よろしく、幕。

三幕目　烏陀夷館の場

役名――提婆太子。下郎、貫調來。一子、槃特。若黨、龜團子。右梵字太郎。同妻、りんどう女。下郎、舍梨平。南花女。伯了和尙。やすだら姬。羅古羅太子。家老、烏陀夷。

本舞臺、三間の間、松並木。上手、丸石を積み上げし大木戸、植込み。よき所に梵字やうにて、白摩道、これより伊婆那國領、と記せし石の傍示杭、爰に貫調來、鷹を据ゑ、槃特を引据ゑ、これを龜團子、下男舍利平、詫びて居る。後に勢子、割り竹を持ち立ちかゝり居る。禪のツトメにて、幕明く。
龜團　マア、御料簡なされて下さりませ。
勢子　打ち殺せ〳〵。
舍利　ダヽ默りやアがれ。オヽおらが若旦那を、ナヽなんとおも。
龜團　ヤイ、舍利平、譯も知らずにどもくり廻し、默つて居ろ〳〵。
舍利　でも、ムヽむごいめ。

貫調　例へ、高位高官にもしろ、盗みひろいだゆゑ、打ち殺しても大事ねえワ。
緇圍　ア、モシ、こりや聞き捨てになりませぬ。御覽の通りの阿房どのではござれども、ついに盗みをさつしやつた事はござりませぬ。
舍利　ナ、なにが、フ、不足で、又、盗み。
貫調　盗まぬとあれば、ソレ、者ども。
四人　心得ました。
　ト槃特の懷中より鳩を引き出す。
貫調　サア、これ見たか。この度、主人、大願を立て、千羽の鳩を鷹に取らせ、神を祀るに依つて、如何なる者の飼鳥でも、鷹に合はせて取り得よとの仰せ付け。これにて千羽になる都合と合はせしを、この素丁稚めが、此方の鳩と申して懷中へ打込みしは、盗んだに相違あるまいがな。
緇圍　そりや筋が違ひませう。爰はこの子の親御様の拜領地ゆゑ、此方へ取上げたのは、この子の理屈。
貫調　さてはうぬらは、悉達太子の乳人、烏陀夷の家の子か。コリヤ、淨飯王は國政を亂せしゆゑ、我が主人、斛飯王兄弟のよしみにて政事をなし、四天下一統。うぬが主人も、悉達太子に心を寄せると申したが、彼奴が心を探るにや、この餓鬼を囮にして、よし〳〵。
槃特　ヤレ〳〵、嬉しや。よし〳〵と云ふからは、もうよいのぢやな。
　ト立ちかゝる。
貫調　動きやアがるな。
槃特　まだか。隱れんぼうのやうに、もうよしと云うて下んせや。
緇圍　すりや、提婆太子の御家來とな。
貫調　ソレ、引立てろ。
舍利　ナ、ならん〳〵。
緇圍　御覽の通り愚か者、殊に一城の主、烏陀夷の忰なれば、逃げも隱れも仕りませぬ。主人にも達し、お詫びお慈悲を願ひませう程に、私しへお預けなされて下さるまいか。
貫調　鳩一羽でも我が國の掟、死罪は遁がれぬ。連れて歸つて親子の暇乞ひさせ、死裝束で待つて居おらう。まだそれどころではない。斛飯王より御書が下りれば、禁獄いたし居る、やすたら姫は討ち首、羅古羅太子を安穩には置くまい。不義の子忰、疾に首討つ筈なれども、烏陀

夷の心を引き見る爲、姫を口說いて、提婆太子の后に備へ、好客夫人を斛飯王の御心に隨がはさせいと申しつけしが、よも仕負ふせは致すまい。

龜園　フン、すりや兩人とも、御親子のお心に隨へば。

貫調　譜代に取立て、官位昇進、それは格別、我が君のお待ち兼ね。家來、參れ。

ト勢子、附いて、上手へ入ろ。

槃特　コリヤ、これが欲しいか。遣らうか。ハヽヽヽ。いかい阿房もあるものぢやなう。

舍利　エヽ、ナ、情ない、クヽ口惜しい。

龜園　サヽ、われが腹立ちは尤もなれど、刃向ひ立てをしたならば、お家の大事。アヽ、悉達太子さまが都にござつて、御即位をさつしやれたら、この四天下は常闇にはなるまいに。やすたら姫さま、羅古羅さまを忍ぶの君、父なし子と、揚句の果には牢へ打ち込み、それを思へばこの天竺には、神も佛もねえと見えるわいなう。

舍利　ソヽそんなら、イヽ今にも、いざな國から狀が來りや、ヒヽ姫さまのオヽお首は。

龜園　烏陀夷さまが切つて渡さうと、約束さつしやつたとの事。忠義一途の御主人も、提婆へ味方さつしやるお心にならつしやつたか。實の妹御、りんどう女さまは、右梵字どのより、惡人に組みした兄弟ゆゑとて、離緣せられた樣子。御意見申さうと思へども、奧樣は御諫言ゆゑに去り狀書いて追ひ出されたれば、扣へて居る。いよ／＼さうなら、わりや、どうせうと思ふ。

舍利　おりや、シヽ死ぬ。ダヽ旦那どのを、人に惡く云はれちやア、クヽ口惜しい。

龜園　オヽ尤もだ。併し、實正の分らぬうち、早まつた事するなよ。

舍利　シヨ承知々々。

龜園　おれは、若殿のお供して戻るから、お使ひをしまつたら早く歸つてくれ。

槃特　あばゝや。おつむてんてよ。

龜園　エヽ、情ねえ。七つの時までは發明でござつたが、けいそく山の鷲に浚はれしを、御主人が駈けつけて、お助け申して戾つてからのこの御病氣。と云うて返らず……そんなら舍利平。

舍利　ワ、和子を、タヽ賴んだぞよ。

槃特　サア、去の／＼。

ト龜園子、附いて橋がゝりへ入る。舍利平は莨のみ

居る。向うより道中飛脚、刀の先へ籠にて作りし狀箱を括り附け、出て

飛脚　ヤツシツシ〳〵。

ト舞臺へ來る。

舍利　オヽ、コレお飛脚、ソヽそれ、體に山蛭が。

ト取つて捨てる眞似をする。

飛脚　これは忝ない……提婆太子のお假家は、最早なに程ある。

舍利　ソヽその假家は。

飛脚　貴樣は吃りか。一事聞く間に時が切れる。ちよつと指で數へて見せてくれ。

ト舍利平、兩手の指を擴げて見せる。

ヤア、まだ十里。

ト舍利平、頭を振る。

そんなら十町か……ヤレ〳〵、それでは、捗が行き過ぎた。して、何時か。それも指で。

ト舍利平、指を九本、出して、下腹を叩く。

ム、エ、九ツ前と云ふ事か。ヤレ〳〵嬉しや、そんなら一服……やつとこしよ。

ト舍利平、狀箱へ指をさし、平舞臺へ字を書き下す。

なんぢや、籠の内のは蒲鉾か、但しは松露か、下ろして休め……コリヤ、忝なくも、解飯王より、提婆さまへ至急の御狀。この天竺は熱い國ゆゑ、籠入りにせぬと、手紙がすへるに依つての思ひ付きと見える。併し、大君にもおなりなさる御方が御狀ゆゑ、下へ下ろしては罰が當たる。

ト舍利平、せき込み、また書く。

ア、コレ、そんなに早書きにしては讀めぬが、なんとか云ふ女の首を切つて、持つて來いと云ふ火急の御狀といの。

ト舍利平、惘りして立ちつ居つする。

この男は、なにをソワ〳〵。ア、踊りか。國元へ土産になるやうな事があらば、敎へてくれ。

ト舍利平、また書く。

なんぢや、早口踊りが、今、この都で流行る……こりや面白からう。叱りの小唄とやら、サヽ、遣つて見やれ遣つて見やれ。

ト夢中になつて茸のみ居る。舍利平、しすましたりと煽ぐ眞似をして、貸せと云ふ。

なんだ、扇を貸せと云ふのか。今しがた、腰にあつた

が。
ト尋ねる。此うち、舍利平、件の火繩を吹きつけ、狀
籠へ差込む。
サ、結構な扇だぞ。
ト渡す。舍利平、拍子を取り
舍利　り、鯉字砂の川原のとつごろ、みよつころ、法印法
が風の神さんにお酒を呑ませよと、杖に瓢簞ブラ〳〵吊
して、西風、東風、ならいによふつに、さつさと吹かね
ば、大事のお人のお首が危ぶない。パツパと燃へぬか、
煙にならぬか。マヽ儘にならぬ、エヽ。
ト踊りながら、狀箱を煽ぎ、ホツとするこなし。
飛脚　イヤ、面白い〳〵、取分け、云ひ憎さうな文句だが、
云へるのは奇妙な理屈だ……イヤ、刻限が來た。ドレ
ドレ、もう一息だ。
ト立ち上がらうとして、草臥れ、立ちかね
これはしたり、休んだ理屈で、腰がすくんだ理屈だつ
た……コレ〳〵若いの、どうぞ歩ける理屈を工風してく
れ。
ト舍利平、ちよつと考へ、書く。
なんだ、後から扇で煽いでやらう。扇と身との拍子を合
はせ、風にはづめば歩かれる……成る程、帆掛け船の理
屈だな。
ト舍利平、煽ぐ。飛脚、拍子取つて飛びながら歩き、
舞臺を一遍廻る。よき程に籠の內、燃え上がる。舍利
平、〆めたとこなしあつて、早める。これにて合ひ
方、早め、兩人、上手へ入る。道具廻る。
本舞臺、三間、高足、本緣付きげぎやう造り、蓮花
臺の持ち出し。上下、練塀。下手、突棒、刺股、幟
を飾り、軒面に紫の幕。よき所に唐金にて造りし龍
頭の筧、この下手、手水鉢。すべて、烏陀夷屋敷の
體。二重に提婆、床几にかゝり、この下手に南瓜
女、局の拵らへ。平舞臺、上手に貫調來、勢子、扣
へ居る。時の太鼓にて、道具納まる。
提婆　身が申し付けたる鳩を、當家の子忰が盜み取りて返
さぬとな。爰へ引出だせ。
貫調　ハ、ツ、心得ました。
南瓜　ア、、コレ貫調來どの。君には、人並々の者と思し
召しませうが、取り所のない大たわけ。それこそ、烏陀
夷が心を試す詮議のほだし。

貫調　ナニサマ、烏陀夷歸りなば、手討ちに致させ、心底とくと御覽進ぼすが、何より近道。
提婆　イカサマ、これも一理あり。それは格別。憎くいはやすだら姬、未だ親の元に居るうち、艶書を以て口說けども聞入れず、弓馬に達した者ならばと、悉達めと武術を比べしに、運拙なくも、鷹が後れを取りしゆゑ、當國へ入內。その遺恨やる方なく、伯母、けうどんみへ云ひ込み、たうとう悉達めは山流し同然にしたれども、今以て隨はぬ片意地者。それゆゑにこそ獄屋の苦難。
南瓜　サア、未だに色よい返事をせぬは、烏陀夷どのには表向きばかりの夫婦別れにて、夜な〱獄屋へ命婦を通はせ、提婆太子の御心に從つてはならぬと、底を入れるに相違はござりませぬ。
貫調　ア、イヤ、烏陀夷が育てた太子めは、神隱れ同然。世に亡き主人へ達引をせうより、口說き落して我が君へ差上ぐれば、彼奴が懇望の白蓮の御劍、また六ケ國宛て行なふと云ふ有り難い君の嚴命。背に腹ゆゑ、よもや僞はりとも思はれませぬ。
提婆　その僞はりにて思ひ出した。元この劍は、天りん王より三十七代、十善子の讓りもの。我れが所持するを知つて望むは、第一曲者。性根の解るそれまでは、其方の差し料と取替へ置かん。
南瓜　成る程、こりや好い御料簡。
貫調　イザ、恐れながら。
　ト兩人差し替へる。橋がゝりより、りんどう女、武家女房の拵らへにて、侍ひを連れ、出て來り
りん　これまで送り參ればよい程に、女子どもに案じぬやう、言傳してたも。
侍ひ　ハツ、畏まりましてござりまする。左やうならば御機嫌よろしう。
　ト引返して入る。
りん　これはマア、ついにお見受け申しませぬお歷々樣のお入り。外に家內の者も居らぬ樣子。
南瓜　ア、コレ、りんどう女、近付きのわしが居りますわいの。
りん　オヽ、あなたは南瓜女さま。この程、わたしは夫、右梵字の機嫌をそこね、引籠り居りましたゆゑ、お目通りを致しませなんだわいなア。
南瓜　成る程、そのお噂を聞きましたが、畢竟、仲のよ過ぎるから起る事。一夜寐ると、直に仲が直るわいなア。

りん　イエ、右梵字どのに離別いたされましてござります
る。
南瓜　それやマア氣の毒……ハ、ア、兄御の烏陀夷どの
が、これなる提婆太子に御内心を申し上げたゆゑ、それ
を根に持ち、去つたのぢやな。
りん　ナニ、あなた樣が。
提婆　オ、、斛飯王の皇太子、提婆達多とは麿が事だワ。
りん　エ、……さうとも存ぜず無禮の段、眞平、御免なさ
れて下さりませ。
貫調　イヤ、婦人の無禮はお咎めなされた事のない、お慈
悲深い我が君。
南瓜　殊に、爰はお前の里方、御遠慮なしに、爰へござん
せ。
りん　左やうならば、眞平、御免下されませ。
ト二重へ住ふ。
貫調　烏陀夷が歸らぬその前方、囚人めを呼び出して、君
の御心に從ふか、打ち据ゑて、本音を出さゝうではござ
りませぬか。
提婆　ナニサマ、科なき者さへ去られる時節。密夫に事寄
せ、ナウ南瓜女。

南瓜　御尤も至極。ソレ、呼び出し召されい。
貫調　ヤア／＼、やすだら姫を引張り出せ。
官四　ハア。キリ／＼歩め。
トこれより床の淨瑠璃、說教がゝりになり
〽行く水に、面影うつす憂き命、あるかなきかのやすだ
ら姫、盛りの花の粧ひも、夜半の嵐に散りぬれど、纔か
に殘るいとし子の、ほだしの綱に繋がれて、居所の羊の
荒氣なく。
ト此うち、向うより、やすたら姫、木綿縄にかゝり、
官人四人、割り竹を持ち、附いて出る。
官皆　歩め。
ト舞臺、下手へ引据ゑる。
提婆　イヤナニ、やすだら姫、烏陀夷に申しつけ、口説け
ども、麿に恥辱を與ふる不屆き。もう好い加減に得心し
てはどうだ。
やす　身に取つてお嬉しう存じますれど、異夫を迎へて
は、女子の道が、何とも以て。
南瓜　ア、イヤ、その云ひ譯は聞きませぬ。サ、、けうど
んみさまの仰せを受け、お添臥しをお勤め申し、御發心
の根を斷つて、早く若宮さまでも、御出產あつたらうと

思ひしに、あなたは元より、くだみいき女の后方とも、ついに〳〵枕を交した事のないは私しが證據。いま異夫を迎へぬと仰しやつたが、悉達さまの外に男を持たぬあなたが、どうして羅古羅さまをお產みなされたえ。

貫調　そんなら羅古羅と云ふは、悉達太子の實子ではないとお云やるか。

南瓜　サレバイナア、睦言かごとは罌栗ほどもござんせぬのに、いつお胤をお舍しなされたえ。こりや滅多には云はれますまい。

提婆　フム。さては忍び男を引込んだな。

南瓜　サア、それゆゑに御所中で、忍ぶの君と、仇名付けられましたわいなア。

提婆　サア、その密夫は誰れなりと、白狀いたさせい。

りん　サア、御尤もの御意なれども、女子の身にない事でも。

提婆　エヽ、おのれまで姫を疵つて……官人ども、ぶち据ゑい。

官四　ハヽツ、キリ〳〵白狀。

〽叩き立てられ、やすだら姫。

やす　方々、暫し待つてたも。コレ南瓜女、そりや胴慾ぢやわいなう。この程よりも、事を分け、自らが云ひしを聞かざるや。お別れ申せし、その夜半に。

〽例へ、臥戸は隔つとも、愛着の心の行き合へば。

必らず懷妊なすものぞと、仰せも泣く〳〵その日より、只ならぬ身となりけるを、なき名を付けて呵責の笞。其方は鬼か、蛇かいなう。

〽恨み歎かせ給ふにぞ、なぐり情もあら奴とも、流石哀れと身につまされ、振り上ぐる手の片手には、涙押へて後じさる。貫調來は、むくりをにやし。

貫調　ヤア〳〵、そりやなんの眞似。ドレ、おれが代つて、ほざかせてくれう。

〽下部の割り竹押取つて、振り上ぐれば、身を摺りよせ。

やす　サア、殺さば殺せ、打たば打て。

〽覺えなき、無實の汚名受けんより

いつそ死にたい。さりながら

〽息あるうちにいとし子の、羅古羅に一目逢はせてたもと、かき口說けば、初めにも似ぬ荒涙、ワッとばかりにうづくまる。

ト貫調來、泣き落す。

提婆　エヽ手ぬるい。身が手を下ろして。
南瓜　これはしたり、輕々しい。私しの手並、御覽に入れん。
〽割り竹押取り無二無三、既に斯うよと見えける折柄、築地に馬を乘り捨てゝ、主の烏陀夷、眞一文字に。
　ト向うより烏陀夷、上下にて走り出て
烏陀　暫らく〳〵、お止まり下さりませう。
提婆　汝は烏陀夷、姫を庇ふ上からは、さては二心を構へしよな。
烏陀　こは勿體ない御諚。二心なき烏陀夷が心底、言上いたすでござりませう。
　ト舞臺へ來り
かゝる茅屋へ今日、我が君、御入りの儀、廟參いたし途中に承はり、取敢へず、歸宅仕つてござりまする。
南瓜　ナニ烏陀夷さま、提婆太子の仰せを受け、姫君の密夫を詮議いたすを、お止めなされしは、なんぞお心當りでもあつての事か。
烏陀　イヤ、その心當りなきゆゑに、手前が屋敷へ獄屋を拵らへ、主たる姫を日毎の拷問。さりながら、當國の恥を明るみへ出すまい爲の秘密事、他國の太子が、なんの差構ひのあらうや。提婆公へは、姫君を口説き落せば、この身の本意は達すると申すもの。さすれば、やすだら姫は萬乘の君の、お后。そのお方に疵ばしつかば、是非ともその身は重き刑罪。サヽ、そこを思つて、お止め申した。
提婆　イヤ、口賢くも申したり。して又、姫を從へさせる手段があるか。
烏陀　イヤ、工風はさま〳〵。ハテ、何をがな。
貫調　サヽ、木折りで行かぬが戀の道。彼の狐を釣る獵人が、狐の如く身振りをして、罠の鼠に戯るれば、狐の心に狐と心得。つい〳〵罠にかゝると申す事がござりますから、なんと今日、右梵字に去られた妹御を、先づ手前が妻に申し受け、この席で戯れたらば、忽ち姫の心も和らぎ、我が君の御心に從ふまいものでもない。この手段は如何でござるな。
烏陀　すりや、妹には離別されしとな……こりや斯うありさうなもの。ナニ妹、申しつける用事あり、爰へ爰へ。
〽と何氣なき、兄の詞に、氣味惡く、顔を背けて。
　トりんどう女、二重より、下り來り
りん　仰せつけられまする御用の筋は。

烏陀　羅古羅太子を爰へ。
りん　畏まりました。
　ト奥にて
槃特　伯母者人、わしが連れて行くわいなう。
　ト槃特、羅古羅の手を取り、出る。
貫調　ヤア、わりや最前、鳩を盗みし童だな。
槃特　オヽ、わりや、おれをぶつた童だな。
提婆　麿が威光を挫く子悴。
烏陀　アヽイヤ、臣下となれば御心任せ。先づそれよりは
差當る君の望みを。若宮、これへ。
やす　ヤア、若宮か。
羅古　母上樣、逢ひたかつたわいなア。
　ト平舞臺へ下り、やすだら姫に寄らうとするを、烏陀
夷、捕へ
烏陀　イヽヤ、獄屋に繋ぐ罪人に、近寄り給ふは御身の穢
れ。宮の汚名を濯む仕業は、先ツ斯うなして
〽と合圖の礫、打つ間もなく、兼ねてしつらふ筧の瀧津
瀨。
羅古　ヤア、面白い〳〵。
〽わが身にかゝる責苦とも、白洲に浪の立ち兼ねて、目
口も分かぬ卽座の水責め。
　ト筧の水にて羅古羅を責める事。
ワア。
〽もがき苦しむ有樣を、見やる姫君、氣もそゞろ。
やす　ヤ、罪科もなき若君を、何ゆゑありてこの責苦。
烏陀　ヤア、提婆太子の叡慮に背く親の罪、子にかゝると
は御存じなきや。
やす　サヽ、責めで叶はぬ事ならば、自らを、づた〳〵に
してなりと。
〽若宮の命助けてと、御身をもがき、あせり泣き。
烏陀　但しは、色よい御返事あるか。
やす　それぢやと云うて。
烏陀　飽くまで苦痛を。
羅古　苦しいわいなう。
やす　待つてたもいなう。
烏陀　すりや、御得心遊ばして。
　ト愁ひのこなし。
やす　ハア、。
　ト泣き落す。
烏陀　御承引あるからは、君の簾中、かゝりや繫がる大事

切演の繪番附

の若君、召替へ、早う……ソレ、縛めを。
〽下知より先へ紐とく／＼、召させいたはる詞の表裏、
提婆つく／＼感歎なし。
提婆　イヤ、流石は烏陀夷、多年の戀人、得心の上は、今宵はこの家で比翼の床入り。烏陀夷、何かと、世話になり申す。
烏陀　ハ、ツ、打解け給ふ君の御氣色、何より以て手前が大慶。ナニ味、姫君、若君を奥殿へお伴ひ申し、櫛の齒入れて御身を清め、サヽ、早く／＼。
やす　アイヤ、獄屋の住居は宿世の業の深きゆゑ、この後とても囚屋にて、この世で罪を晴らさん心。若宮もろとも、元の獄屋へ。
貫調　斯う譯が解つてしまへば、獄屋とて恐るゝに足らず。
提婆　ナニサマ、都に馴れゝば詩歌連俳。ハテサテ、優しい。
烏陀　左やうござれば、少しも早う。
やす　呵責にまさる。
りん　ア、モシ。
烏陀　お越しあられませう。

トやすだら姫、羅古羅を抱き、りんどう女、四人附いて、橋がゝりへ入る。
槃特　ヤア、わし獨り置いて、お友達が去んでしまうた。
烏陀　又しても聞分けない、扣へて居らう。
提婆　イヤ、烏陀夷、汝が働きを以て、やすだら姫は手に入りしが、この上望みは今宵の饗應。
烏陀　ハ、ツ、萬事は君のお指圖次第。
提婆　ムウ、饗には、その悴の生身が所望サ。料理の手際、見たい／＼。
ト下手に舍利平、鳩を持ち出かゝり居て
舍利　ヤイ、ソ、そこな鬼太子め、ドヾどこの國にか、鳩の代りに下手人取る、ホ、法があるかい。
烏陀　ヤイ／＼、おのれ、主を差措き不屆き至極。エ、下がり居らう。
舍利　サヽ、下がらぬ／＼。
烏陀　まだ申すか。コリヤ、綸言は汗の如し。背かば、從類まで絶ゆるとは、心付かぬか。うろたへ者めが。
〽主の威光におぢ恐れ、暫し詞もなかりしが。
舍利　エ、閻魔さまへ、ネ、願ひがござります。コ、この子の肉を、鳩の目方だけ削いで、それで御料簡。

南瓜　イヤ〳〵、大方おのれが肉を切つて、主人に代る心と見ゆる。

貫調　その肉削ぐには身が撿分。

舍利　イヽいま切らるとも知らつしやらぬが、ゴ、御不便だ。オヽお遊びにそやして、その隙に。

槃特　なんぢや、人形廻しするのぢやと。

提婆　儂が一分、立ちさへ致せば、許してくれう。

南瓜　何は兎もあれ、最前よりさぞ御氣鬱。

貫調　一先づ君には、奧殿の

烏陀　見苦しくとも、設けの席へ。

提婆　烏陀夷、案内。

烏陀　先づ

南貫　お入りあられませう。

〽主從心、奧の間の、帳臺深く。

ト送りになり、音樂を打ち込む。提婆、南瓜女、貫調來、立ちかける。烏陀夷、舍利平と顏を見合はせ、双方、氣味合ひ、この仕組みよろしく、道具、ぶん廻す。

本舞臺、二間半、三方、折り廻し大形の獄屋。いつも所に牢屋格子。爰にやすだら姫、羅古羅を抱き りんどう女、附き添ひ、三方に前幕の悉達太子の片袖を載せ、香を焚き、愁ひの思ひ入れ。送り返しにて、道具納まる。

やす　善惡知れざる烏陀夷が指圖、提婆に枕交さす心か。上邊を濁す深い所存か。

りん　サア、底の心は酌み分かねど、けうどんみさまの御内旨受け、兄の方へ日毎のお使ひ。殊には姫君、御禁獄の後、大君樣は夜のおとゞに押し入れて、日の目もあはず罪人同然。

やす　エヽ、すりや父君にも……たゞ何事も若宮の、御身堅固を思ふばつかり。指圖次第に。

〽後云ひさして身の覺悟、空も小暗き雨もよひ、笠召す月のさし足して、忍ぶも忠義の右梵字が、緣は切れても舅の住居、勝手覺えし裏門の、獄屋の軒にイずめり。

ト右梵字太郎、出て窺ふ。りんどう女、姫の髮を梳き居て

りん　てもマア、艶々しいおぐしを此やうに、これも皆、惡人のさかしらゆゑ。私しとても同じ事、提婆に組みをしと疑ひある者の妹を、誠の武士の妻にはせぬと、事せ

分けての夫の離別。
やす　兎にも角にも我が子の爲、妾も女の道を、捨てる心になつたわいなう。
りん　ア、モシ、それゆゑにこそおぐしを揃へ、いづくの浦へもお連れ申し、もし叶はぬその時は、身替りの工風も疾から。
やす　イヤ、何事も、この身一つに償ふ覺悟。
りん　イエ、あなたは殺さぬ、どこまでも。
太郎　オヽ出かした、女房。姫君にお身を穢さしては、我れ〳〵が忠義も背く。お命は擲捨てさゝぬ。
りん　ヤヽ、さう云ふ聲は、我が夫なるか。
やす　右梵字太郎、なつかしい。
羅古　よう來てたもつた。
三人　逢ひたかつたわいなう。
太郎　足らはぬながらも、我れ〳〵夫婦にお任せあつて。
やす　その志しは、嬉しいが、とても遁がれぬこの身の罪障。
太郎　斯くまでに思し召さば、是非に及ばぬ。ソレ女房。
〽様子は何か白鞘の、懷劍卷きたる一通を、投げ込み、受け取る兩人は。

りん　合點でござんす。
〽夫婦は心、奥と外、別れ〳〵て忍び入る。跡見送つて、やすだら姫、人目の隙に取出だす、君が筐の御片袖。
ト件の袖を取上げ
やす　思へば戀しい、恨めしい、このお筐。君はいづくにましますか。烏陀夷夫婦も變りなく、かしづき仕へ居る事と、思し召すのがおいたはしい……ア、、頼み少なき人心ぢやなア……コレ羅古羅、我が夫、御發心の後は、烏陀夷夫婦を、杖柱と思ひしに。
〽いつが惡には染み易く、聞くもうたてな口說き事。得心せねば、命をば、落すこの身は惜しまねど、何卒、正覺成道あつて、再びまみえ若君の、其方を御覽に入れるまで
〽死にともないと身を慄はせ、包み兼ねたる袖の雨、折柄こなたへ忍びの曲者。
ト正面の格子を打ち破り、伯了和尙、出刃庖丁を腰に差し、經櫃を背負ひ出る。
羅古　アレ、怖いわいなう。
やす　ヤ、、何者なれば、この所へ。

伯了　オ、、聲を立てると餓鬼もろとも、この出刃で芋刺しだぞ。

〽經櫃の蓋取るより早く、手籠めになして引立つる、折に出で逢ふ龜團子。

龜團　ヤ、、さてこそ曲者。

伯了　なにを。

〽姫若宮を一つに打ち込み、錠卸ろす、さうはさせじと引き戻し、挑み爭ひ。

ト立廻り、三重になり、この道具、ぶん廻す。

本舞臺、元の二重へ戻り、平舞臺、眞中に、槃特、小肌脫ぎかけ、誂らへの木偶人形を持ち、遣つて居る。下手に、舍利平、三味線を前へ置き、泣き入つて居る。送り返しにて、道具、納まる。

〽行き迷ふ、袖に涙の玉の緒も、絕ゆるばかりに舍利平は、奧を憚かる忍び泣き、槃特は怪訝顏。

槃特　コレ〳〵、吃よ。まだ愁歎場ではないに、なんで泣くのぢや。

舍利　ナ、泣きやしませぬ。サ、先刻の所を、サ、浚つて居るのぢや……ナ、なんにも知らいで。

槃特　ハテ、人形遣ふ事は知つて居る。早う〳〵。

ト舍利平、三味線を取つて

舍利　ぜ、是非がない……泣いて行くへも白小袖、死出の晴れ着を身に纏ひ、賴むものには竹の杖、憂き事しげき世なれども、幾年經りし好みにて、また歸らじと思ふにぞ、名殘りぞ惜しき育て君、賽の河原は其方ぞと、思ふ心の痛はしや。

ト唄を謳ふ。

〽思ひながらも、拔き放す、劍を見るより。

槃特　ヤ、、吃よ、何するのぢや。

舍利　サ、コ、これは人形の、ア、相手。

槃特　エ、、こりや行列ぢやわい。

舍利　エ、、ム、蟲が知らして……あのいたいけないとし子に、お乳や乳人とかしづきし、我が手に掛けて討つぞとも、知らでうつゝの夢心。

トまた唄を謳ふ。上手の障子を引き拔く。爰にりんどう女、右梵字太郎の膝に縋り、泣き伏して居る。太郎、寢刃を合はす。

宵の稻妻、あしたの露、野邊の烟と消え失せて、父よと呼べど谷の音、谺に響く音ばかり。

ト矢張り諷ふ。

〽時刻移ると拔き放せば、ワツと驚き躓く槃特、舍利平、爰と喰ひしばり、臑切つそぐる、こなたには、覺悟極めて劍の刄音。

ト槃特、逃げ廻るうち、轉げるを舍利平、思ひ切つて槃特の臑の肉を削ぐ。此うち、りんどう女、太郎、よろしくあつて、咽喉へ刄を突き立て、唱名の思ひ入れ。これにて障子を閉し

太郎　エイ。

ト太刀音して、障子へ血煙立ち、槃特は切られ、ワツと悶絶する。太郎、首桶を抱へ

烏陀夷どのには、いづれにある。姫君、承引なきゆゑに、是非なく御首討ち奉れり。

ト烏陀夷、正面の襖を明け、出て來る。

舍利　ダヽ旦那樣、ア、足の肉ならよからうと、キ、切り削いだら、モ、元も粉もなくなつて退けました。ワアア。

〽聲も惜しまぬ悔み泣き。烏陀夷、我が子を見向きもせず、首桶、引寄せ、とくと見て。

烏陀　ホ、オ、三代相恩の主君の簾中、よく討つた。

〽口は立派に云ひ放せど、流石恩愛兄弟の、果敢なき最期を思ひやり、涙は咽喉に突ツかくるを、堪らへ堪ゆるいぢらしさ。互ひに心奥よりも、提婆主從のさばり出で。

ト奥より提婆先に、貫調來、南瓜女、出て來り

提婆　珍らしや右梵字太郎。やすだら姫、承引せぬゆゑ、首討ちしよな……オヽ、いしくも子悴が肉、切り取りしか。

貫調　ドレ。

〽甲斐なき死骸、打ち返し、とくと改め

オ、この屍では目方がたるいが、おツくたばつたら、負けてやらうワ。

ト銀張りの鉢へ肉を受取り

骨折り代に、胴殼をくれてやる。持つてうせう。

舍利　エ、、回向して上げませう。

ト舍利平、死骸を抱へ、入る。

南瓜　それにつけても、槃特の肉、なんぞの藥にでも遊ばしまするか。

提婆　イヤ、さにあらず、いま奥殿にて烏陀夷と主從の契約はなせど、引手にくれる生魚なし。幸ひの悴が肉、烏

陀夷、その場で賞翫なせ。

烏陀　我れ、苟くも主従の契約なす上は、例へ悴が肉たりとも、我が君より賜はれば、取りも直さず山海の珍味。さりながら、悴が肉を食すは初めて。未だ式禮を存ぜねば、御傳授願ひ奉る。

提婆　知らぬ筈〳〵。既に鯉字砂の川上に、小ちかと云へる獸住んで、水を好んで、水面に立ち寄れども、おのが姿の寫るに恐れ、遂に渇して我が子を喰ひ、その膿血に咽喉をうるほす。先ツその如く喰ふべきを、主の情に、まツかうなして。

ト劍を抜き、件の肉を刺き通し、突き出す。

烏陀　フム、大君、七寶のその一つ、のふまくのふし、白蓮の劍、肌身放さず所持なすと、我れを僞る逆賊を、主人にや取らぬ。誠の劍、見るまでは、いつかな姿を動かせぬぞ。

提婆　オヽ、主人にせうと云ひながら、麿を僞はる烏陀夷……右梵字、その首、實檢せうや。

四人　サア〳〵。

提婆　ナヽなんと。

トこの時、橋がゝりより、龜團子、走り出て

龜團　御兩所、一大事でござりますぞ。

烏太　ナニ、一大事とは。

龜團　獄屋の内へ曲者入り込み、姫君若宮、奪ひ取つて逃げ失せました。

烏陀　ヤ、妹に、犬死さすのみか

太郎　お二方を奪はれしとは。

龜團　その歎きの中に歡びは、舎利平が切腹して、槃特さまへ血汐を呑ませしに、御本心にお直り遊ばし、曲者の跡追つて、お出でなされてござりまする。

太郎　先はしれ者、心元なし。

烏陀　いそふれ右梵字。

龜團　拙者も共に。

太郎　さうだ。

ト兩人、向うへ走り入る。下手より舎利平、布にて腹を卷き、抜刀にて出て

舎利　お主の敵。

ト討つてかゝるを、南瓜女、切りつける。提婆、烏陀夷に切りつける。向うより、槃特、脛を布にて卷き、山賊の一人と立廻りながら出て、直ぐに舞臺へ來り、切り返す。

烏陀　汝は、槃特。して〱様子は。
槃特　ハッ……舍利平が精血と、肉を削ぎ、惡血を去りししるしにや、身も輕く、無二無三に駈け付けし、所は山路、賊徒の隱れ家……群がりかゝるを薙ぎ立てる。所へ馳せつく車匿舍人、刃向ふ者は嵐の吹雪、ちり〱ぱつと逃げ散りたり……お二方には御堅固にて、車匿がお供仕れば氣遣ひなし。拙者又も引返し、御先途見屆け奉らん
舍利　お出かしなされた、若旦那。
槃特　ヤ、其方も言舌。
舍利　今際の際に、吃が本腹。
烏陀　行け。
槃特　ハッ。
　ト向うへ走り入る。
提婆　ぬかるな、兩人。
南貫　心得ました。
　ト烏陀夷、舍利平、敵役、渡り合ふ。提婆、受け身になるゆゑ、貫調來、我れを忘れて寶劍を拔くを、烏陀夷、見て
烏陀　ハ、ツ、千辛萬苦の甲斐あつて、不思議に手に入る寶の劍。
提婆　フム、それ取らうばつかりに、羅古羅太子を責めしも僞はり。
烏陀　オ、、水責めと見せしは、兼ねてしつらふ獨參湯。
南瓜　もうこの上は。
　ト懷劍にて突きかゝるを、打ち落し、貫調來の劍を引ツたくり、前へのめらす。提婆、手を負ひ、舍利平と立廻り。
提婆　それ渡しては。
　ト來るを、突き廻し、貫調來を踏まへ、南瓜女を切り下げ
烏陀　王城鎭護の寶の劍。
提婆　ムウ。
　ト來るを
烏陀　ハテ。
　トひらりと見せるを、木の頭。よつく切れます。ハ、。
　ト嘲笑ひ、舍利平、貫調來、落入る。これにて、よろしく。

拍子幕

大詰

淫律和國屋の場
檀特山法嶺の場
鯉宇砂川々端の場

淨瑠璃「降天女嫁入」富本連中

役名――悉達太子。やすたら姫。羅古羅太子。右梵字太郎。新造、金波女。同、銀波女。引舟、もうり女。奴、大藏。高賀童子。京談童子。須賀多民。摩迦牛道。若い者、じんばら。伊喜女。はしみつ太夫 實ハ晉賢菩薩。阿羅々仙人。舍人、車匿。

本舞臺、三間の間、朱塗り、異形なる格子。九尺の入り口、和國屋と記せし暖簾、ギヤマンの燈籠を掛け、軒に金幅更紗の暖簾、唐金燈籠の誰哉。よき所に淫肆と記せし織り出しの幟を建て、下手、練り塀の張り物。長床几に毛氈を掛け、すべて蠻國遊女屋の體。爰に金波女、銀波女、新造。もうり女、番新、眼病にて、後向きに床几にかゝり、めい〳〵、笙篳篥太鼓を打ち立て居る。下手に、伊達模樣の看板着たる陸尺三人、乘り物を舁ぎ、立ちかゝり居る。この棒鼻を、ちり〳〵髭附き着附け、天竺の遊女屋の若い者、じんばら、支へ居る。高賀童子、京談童子、袴、着流し、大小にて立ちかゝり、大藏、股立ち、草履取りの捻切り奴二人、附き添ひ、皆々、若い者と爭ひ居る。花に遊ばゞの騷ぎ唄、音樂にて、幕明く。

じん　ならん〳〵。醫者か病人なら知らぬ事。例へ、どのやうな大々盡でも、唐門から內へ、駕籠で乘り込みはならぬと、衣紋坂の高札に書いてあるが見えぬか。

京談　ヤア、忝なくもこの國の御主。

大藏　女郎買ひにござるに、駕籠で來やうが、馬で乘り込まうが、天地の間に云ひ草を云ふ奴があるものか。

じん　イヤ、昔から、廓の掟を破つても、いゝと云ふ、お觸れはないぞ。

大藏　うぬ、達て强情張ると、その頤骨をふんざばいて。

じん　さう云や、おれが。

ト金波女、銀波女、前へ出て、支へる。侍ひ、奴を支へる。

もう　これサ、じんばらどん、野暮な事をお云ひでないは

な。
金波　お前一人が息精張つても、益ない事。
銀波　それ程思ひなんすなら、會所へ行つて、よう話し合うて見なさんすりや、よい事を。
じん　違ひねえ。どうするか、今に見やァがれ。
ト下手へ行きかける。
高賀　コリヤ若い者、待て。某が申す事、承はり、その上にては兎も角も……廓の法を辨まへずに、主君を乗り物にてお供せしは、我れ〳〵が不念。さりながら、忝なくも淨飯大王の若君、悉達太子、信じ給ふ佛、夢枕に立たせ給ひ、それゆゑに俄のお入り。
京談　お忍びゆゑに、輕々しき御出立ち。
じん　さう云ふお方と知らぬゆゑ、お止め申したは、眞平御免なされませ。併し又、お上樣のお息子樣が女郎買ひにござらうとは、うろたへた事、佛樣も御存じあるまい。殊には、淨飯大王さまの御代になつてより、天竺風をさらりとやめて、日本風に致せよとのお觸れ。この廓に三千人もある天人達も、みな花魁だの、新造衆だのと、日本に變る事はないとの噂。わしは、久しく南天竺へ行つて、去年、此まがた國へ歸りましたゆゑ、つい〳〵お見外れ申しましてござりまする。
金波　又この、じんばらどんは、どのやうに日本の形に姿へても
銀波　ちつとも似合はぬそれゆゑに。
じん　なんの〳〵、色めが、日本風はよしておくれと頼むゆゑ。
もう　ハヽヽ、大笑ひだ。日本には、お前のやうな面の人は一人もないよ。
じん　へヽ、措いてもおくれ。これでも、色と小遣ひには不自由はしねえよ。ほんに天人の面よごしとは、お前の事だ。
京談　コリヤ、あの者も天人ぢやと申すのか。
じん　サア、口ばかり達者で、お客を取らぬゆゑ、天人は天人だが、ひッ天人でござります。
もう　なんとでも云へよ。
金波　さうして、お前は、いづこへ住替へに
銀波　行かしやんすぞいなア。
もう　天人だもの、いづこへ行かれるものか。小塚ッ原へサ。
大藏　ナニ、小塚ッ原へ、

もう　ハテ、天人の小塚ッ原と云ふぢやないかいなア。
高賀　聞きしに勝る天人の境界は、また格別。我が君、この里へ臨御ありしは、御誕生あつて、程なく歿り給ふ摩耶夫人の御姿を、拜みたき大願を立てしところ、城の北に當つて淫肆と云ふ廓あり、これへ尋ねなば、その母に生寫しの女に逢ひ、また、如來を禮拜いたさせんと夢のお告げ。して、其方の宅の家名は。
じん　和國屋と申しまする。
高賀　我が君のお尋ねなさるも、その和國屋。
銀波　さうして、その花魁の
皆々　お名前はえ。
高賀　イヤ、仔細あつて、こちらより名は指さぬ。
京談　抱への天人。
大藏　申してお見やれ。
じん　ヘイ、先づ、爰に居りまするが、金波女に銀波女、お職は氣がよく寐る女、齒ぎしり、寐言、無心下手、脊の低いがちんちくりん、吝いがしみたれ、素寒貧。イヤ、こりや名乘りませうより、お見立てなすつては如何でござりませう。
京談　イヤ〳〵、我が君のお尋ねなさるは、ア、、なんとやら。
大藏　オ、、慥か、はしみつ
高賀　太夫とやら。
じん　エ、、はしみつ太夫さま、それこそは、廓一番の太夫職。
高賀　然らば、座敷へ御座所を設け
京談　はしみつ太夫を、君の御前へ。
じん　左やうならば、お乘り物のまゝ、奧庭へ。
高賀　いづれも案內。
女皆　サア、ござんせいなア。
じん　お客樣よう。
　ト乘り物、先へ、皆々、附き添ひ、暖簾の內へ入る。
おれも餓鬼の時分から、泥水商買をして居るが、大將樣の御子息が、女郞買ひにござつたは初めてだ。どうか巧く胡麻を摺つて、豆藏お公家になりてえものだが、あいつは、歩きやうがむづかしい。ドレ、ちよつとやつて見よう。
　ト扇を半開きにして、下手へ歩み、また上手へ歩む。
此うち、橋がゝりより、摩仁半道、浪人の拵らへ、編笠を持ち、出て來り

摩仁　コリや〳〵、物を尋ねたい……この男は、何を致して居るのか……ハ、ア、狐に化かされたと見えるが、エヽ、性を付けぬかい。

ト脊中をくらはす。

じん　ワア、悧りした。

摩仁　イヤサ、近頃、南天竺より參つた、じんばらと申す者を存じて居らば、教へておくりやれ。

じん　ヤア、さう云ふお主は、摩仁半道。

摩仁　じんばらか。見違へた。先づは息災で、重疊々々。

じん　して、尋ねてござつたは。

摩仁　他聞を憚る一大事。これへ〳〵。

ト床几へかけ

おてまへは知るまいが、斛飯王の王子、提婆達多は悉達太子の妃、やすだら姫に心をかけ、口說けども受けつけぬゆゑ、人知れず悉達太子を討つて捨てなば、驕くは必定。それゆゑに、斯く姿をやつし窺ひしところ、悉達太子は忍びにて、この廓中へ入込みしに違ひない。其方もとも〴〵手分けして。

じん　イヤ、それなれば、たつた今、爰へ來たゆゑ、奧座敷へ通したばかり。併しながら、警固の武士も附き添ひ居れば、天人女郎におだてさせ、酒を勸めて、彼奴等を遠ざけ

摩仁　其うち太子の寢首を掻き、提婆さまへ差上ぐれば、褒美はずつしり。卽ち一國の主に取立てんと云ふ、ソレお墨付き。

ト懷中より立文を出す。

じん　ドレ。

ト開き見て

イヤ、こりや日本の文字ゆゑ、おれは一字も。

摩仁　成る程尤も。讀んで聞かさう。

ト淨瑠璃名題、太夫連名、役人觸れを、眞直に讀み

ハテ、讀む事は讀んだが、なんの事やら、身共には一向に解らぬ。

じん　イヤ、例へ、解らなくつても、これを證據に、恩賞は心の儘。事仕負ふせるそれまでは

摩仁　客に上がつた天竺浪人。

じん　酒でも呑んでいゝりやんさん。

摩仁　それですうこう。

じん　りうせえ。

摩仁　ばまくわい。

初演の繪番附

ト五本の指を擴げ、制し、兩人、暖簾の内へ入る。知らせにつき、正面の張り物を引いて取る。
本舞臺、三間の間、平舞臺、朱塗り極彩色、滅金金物、彫り物したる屋體高欄。下手、樓を半ば見せ、上手、莫大なるしかみ瓦燈口、爰に純帳を掛け、所所にギヤマンの燈籠。正面、打ち拔き、蠻國遊女屋奥庭の遠見。下手の張り物を打ち返す。これと一時に、高欄内より破風造りの欄間を下し、爰に富本連中、居並び、直ぐに前彈きになり、道具納まる。
〽風薫る、玉の臺に花鳥の、色音を慕ふ諸人の、傾賣女色さま〴〵に、菩提の種の戀草を、植えて賑ふ一廓、分け迷ふ六つの街も餘所ならず、障子廊下の分れ道。
ト向うより悉達太子、羽織、着流し、小さ刀、後より高賀童子、刀を持ち、次に新造兩人、京談童子、奴、大藏、附き添ひ出て
悉達　ナニサマ、聞きしにまさる淫肆の樓上。
高賀　太子の御所に引替へて、
銀波　廓の夜は餘所の晝、
金波　世間構はず舞ひ謡ひ、
高賀　戯むれ遊ぶ別世界。
大藏　色氣知らずの下郎さへ、味な氣になつて參じました。
銀波　何は兎もあれ
高賀　設けの御座所へ。
悉達　方々、案内。
金波　サア、お出で遊ばしませいなア。
〽泣くが手管か、引くのが嘘か、なにを夕の思ひ川、よい〳〵〳〵〳〵よいやさ。
ト皆々、舞臺へ來り、上手へ褥を敷き、悉達太子、これに坐り、女形、よき所へ酒肴の器を運び、皆々、住ひ居る。
銀波　ドレ、お酌いたしませうわいなア。
　あなた、憚りながら、お加減を。
ト金波女、こつぷを太子の前へ出す。銀波女、酌に立つ。
大藏　アヽ、コレ、我が君には、御酒よりも花魁を。
金波　ドレ、わたしがちよつと。
ト立ちかける。上手、緞帳の内にて
もう　今お連れ申しんすわいなア。
〽仇し夜を、夢も結ばで浮き草の、憂き身流れの果敢な

さは、紫雲の神に天降る、天女も斯くやおとゝひが、粧ひ飾る假姿、襠補掛きたをやかに。

ト緞帳を絞り、はしみつ太夫、襠補衣裳、下げ髮、傾城の拵らへ。伊喜女、振り袖、新造の形にて、袋入りの長煙管を抱へ、引舟、異形なる貢盆を捧げ持ち、出て位ふ。

悉達　ア、イヤ、遊女たりとも、母摩耶夫人に似たるとあれば、上座は恐れ、其方はこれへ。

はし　アヽモシ、勿體ない。身の程知らぬが勤めの一德。殊には禮儀を正さぬが、この色里の習ひとやら、お許しなされて下されませいなア。

伊喜　それに引替へ自らは、君のお情、受けながら實の親御の馬將軍さまとやらが、あなた樣の繼母君。

金波　けうどんみさまと心を合せ、毒害の事、顯はれもう切腹をした、謀叛の娘ゆゑ

銀波　追放あられて、この廓へ。

高賀　小さい時、別れた姉さんの、この花魁を使つてござんして、

金波　この頃、見世へ出やしやんした伊喜女さん。

銀波　そんなら、色男と云ふは、あの客人でありましたかえ。

金波　ムウ、思ひ設けぬ不思議のお出合ひ。

悉達　おなつかしうござりますわいなア。

はし　堅固の對面、譬も嬉しう思ふわいなう。

伊喜　お前方には。

悉達　ト行けとする。

はし　合點ぢやわいなア。

三人　然らば、我が君。

高賀　御機嫌よろしう。

京談　サ、ござんせいなア。

女三　〽おのがまに〳〵打連れて、ぞめき散らして入りにけり。

ト四人、上手へ入る。高賀も立ちかけるを

悉達　ア、コレ、其方一人たりとも、手廻りに居らねば、何ともつて。

はし　素性知れざる私し等ゆゑ、お心措かれると仰しやりまするか。

伊喜　そりやお胴慾でござりますわいなア。

〽今は賤しい川竹の、苦界の淵に沈むとも、濁りに染まず心には、お側離れぬ宮仕へ。
〽客を歸して夜もすがら　妹が話しを聞いてさへ、ぞつとする程床しさの、その馴れ染めは過ぎし秋、星の祭りの糸竹や。
〽樂の調べも更け渡り、月も入狹の山の端に、さはるともなく手を取れば、身を振り袖の味氣なく。
〽戀の棧橋鵲の、初めて渡る恥かしさ、怖さに胸もだくだくと、打つやうつゝの夢心。
〽そのお情を餘所事に、聞くさへ君の戀しきを、思ひがけなくお姿を、見上げ申して今更に、どう諦らめのなるものぞ。せめて一夜の添臥しを、願うてやいのと打ちつけに、義理も人目も捨小舟、浪に漂ふ風情なり。

ト悉達を眞中に、兩人、口說き模樣ある。

悉達　その志しは嬉しいなれど、忍びて爰へ參りしは、我れ幼なき昔より、産みの母なつかしく、夢にだに見えたしと諸佛諸山へ宿願かけ、夢想に計らず、亡き親を拜せしは、麿が本望。その母君と思ふ其方に、なんと枕が交されうぞいなう。

伊喜　せめて姉さんへの心許し。今宵一夜は私しを。

悉達　でも、一旦、暇を取らせし其方に。

はし　サア、添臥しはならぬ筈、推してわたしが今宵のお伽を。

悉達　ハテ、聞分けのない。

はし　イヽヤ、親に似たわたしの云ふ事、聞かねば不孝でござんせうぞえ。

悉達　なんと。

はし　例へ、無理邪までも、背かぬが孝行の道とやら。但し、大君のお子樣は、親の云ふ事、聞かいでも大事でござんせぬか。

悉達　ア、イヤ、全く以て。

高賀　慈悲萬行の我が君樣が。

伊喜　焦れ死するを、餘所に見捨てるお心か。

悉達　さうではなけれど、勿體ない。

伊喜　ハテ、佛も元は凡夫とやら。

はし　好色菩提と聞くからは。

悉達　すりや、これも修行の

伊喜　道は變らぬ

はし　勤めの所譯に

悉達　擬へて夜とともも

三人　オヽさうぢや。
〽それ娑婆長安の春の花、紅白錦繡の粧ひも、いつかは秋の色に染み、身を紅葉のちりちり〳〵ぱつと夕嵐。
〽間夫に哀別幾夜さも、人目餘に立ち明かし、丁度よい首尾、遣り手場を、忍んでそつと葬頭川、儘に奈落と引寄せて、思ふ煙管の附けざしや、吸ひ殻の火で顔を見る、果敢ない戀のこなたには。
ト伊喜女、はしみつ、羯鼓を胸につけ
〽歌舞の菩薩の舞ひ謳ひ、打つや太鼓の手を盡し、霓裳羽衣の舞ひの曲。これも胡蝶の夢ならん。
ト三人、花紅葉の枝を持ち携へ
〽覺むれば義理に追ひ立てられ、呵責の責めの小刀針、劒の山は目のあたり、無間むしろを阿鼻焦熱、この世からなる地獄の苦しみ、語るも哀れ恐ろしき、實にや顚倒迷妄も、解脱の種とあら不思議や、遊女の粧ひ忽ちに、普賢菩薩の姿を現はし、羅綾の床は白象と、化してせびらに法の徳、有り難かりける。
ト大ドロ〳〵、流しになり、はしみつ、其まゝ、三つ蒲團の上へ住ふ。仕掛けにて、錦の夜具、象に變り、經卷を開き持ちし、はしみつを背に乘せ、立ち上がる。高賀、童子の見得にて、長煙管、鳶に變り、象の口を取り、伊喜女、蓮花の花を持ち、同じく神童の見得。此うち、摩仁半道、抜刀にて悉達に切つてかゝるを、投げ退け、菩薩を禮拜の見得よろしく、セリ込み、紫雲の道具幕をセリ上げ、知らせにつき、鳴り物を打ち揚げ、件の幕を切つて落す。
本舞臺、上下、峨々たる山のなだれ。九十九折りの坂。娑羅双樹、檀特の立ち木。次第、嶮岨の山の張り物。向う、外山の遠山。舞臺、下手、氷の張りし池。すべて檀特山、半腹の體、よろしく、道具納まる。
ト直ぐに、大薩摩になり
〽それ一聲の松の風、池水に寫る月影も、上は菩薩、下は衆生、みな觀念の便りぞと、御身を凝らし難行に、勞れ惱ませ、臥し給ふ。御有樣ぞ殊勝なる。
ト薄ドロ〳〵になり、胡蝶、舞ひ、異形なる水たこと、畚を前に置き、悉達、木の葉の衣にて、枯れ木の枝に縋り、岩臺に居眠り、眞中へセリ上がる。床の淨瑠璃になり

〽無明の夢の跡もなく、目を覺まし、見廻し給ひ。
ト胡蝶、消えて、ドロ〳〵を打ち上げ、あたりを見廻し
悉達　ハテ、心得ぬ。我れ、生れて一七夜に、別れし母をなつかしく思ふ一念、幻に見え給ふ。ムウ、先つ頃、淨居佛の教へを受け、父子夫婦の愛着を斷ち、輪廻を離れて、無漏聖道に至らんと、十善の王位を振り捨て、迦毘羅城を忍び出て、この檀特法嶺へ山籠りなせしも早三年。阿羅々仙師の徒弟となり、今ぞ行ひ澄ませしと、おのれに慢せしゆゑなるか、心にもなき無明の夢に犯され、戒行を破りしは、無爲の修行に至らざるのしるしなるか。但しは外道の障碍なるか。チエヽ、口惜しの、身の業よなア。
〽悔み歎かせ給ひしが。
アヽ、イヤ、遠く八苦の海を過ぎ、近く解脱の岸に至れと、仙翁の教へ怠りし。木の實を拾ひ、過去現在の父母へ供へ、花を手折つて、師匠へ供養を。さうぢや〳〵。
〽裾を結んで肩にかけ、肩を結んで裾野の澤の、菜摘み水汲み、ふし柴の、しばし回向に時移る。
ト草花を手折り、谷へ入れ、池の氷を碎き打ち、水を汲み取り、正面の岩臺を拂ひ、これへ供へ、回向の見得。
〽同じ哀れは、やすだら女、まだいとけなき若宮を、車匿舍人に負はせつゝ、さがしき峯々谷々を、尋ねさまよひ給へども、草引き結ぶ庵もなく、問ふべき人の跡もなし。勞れ果てたる玉鉾の、常なき嶮岨の岩蔭に、暫しとてこそ休らひぬ。
トやすだら姫、羅古羅太子、車匿出る。姫、花道にて躓く。
車匿　アヽ、お危なうございます。お心急きは御尤もながら、最早、提婆が追手の氣遣ひはございませぬ。
やす　妾ほど因果な者が又とあらうか。三年以前、我が夫の、御發心のその跡にて、これなる羅古羅の誕生せしは、忍び男のあつてこそと、既に禁獄のその折柄、若宮もろとも伯了の草庵へ連れ行かれ、提婆達多の執心ゆゑ、我れに入内いたされよ、さなくば、若宮を刺し殺すと、手詰めの場所へ其方が駈けつけ、惡僧を切害なし、一旦虎口を遁がれしかど、世に住む甲斐のなき身ゆゑ、我が夫の在所を尋ね、この若宮に御對面を願はんと、爰までは來れども、どこを限りのよすがもなく、わしや、

悲しい、口惜しいわいなう。
〽泣きこがれ、泣き沈む。道理至極と思へども、心弱くて叶はじと、車匿は諫めて。
車匿　ハヽヽヽ、イヤ、流石は女儀の御尤も。さりながら、三年後にこの山路へお供せしは、斯く申す車匿舍人。モシ羅古羅さま、追ッつけ、父君様に御對面遊ばさせまする。お嬉しうござりませうなア。
羅古　早う、お目にかゝりたいわいなう。
やす　オヽ、道理ぢやわいなう……其方がお別れ申せし檀特山へは、最早、程近いと云やるかや。
車匿　ハテモウ、爰がお山の半腹……併し、これまでは噓僞りを申し上げたればこそ、王城よりは辰巳に當り、千三百里の行程を、女儀の御身で、我が君の跡を慕ひ、この地までお出でありし心根は、又とあるまい貞女の鑑。人の誠ほど、恐ろしいものはござりませぬ。
やす　すりや、この御山が。
車匿　檀特法嶺……向うに見ゆるは雪山に、續く摩迦遮那山、東は名に負ふわしのみ山、麓の池はぎじやく泉とて、鯉字砂の川へ續き、湖の瀾干いたすと云ふ……オヽ、あれに人影が見えまする。

やす　ソレイナウ、あの者に、我が夫の御在所を、早う尋ねてたもいなう。
車匿　心得ました。
〽心いそ／＼勇み立ち、若君抱き走り來て、見れば池水溢れ出で、道隔たれば詮方なく。
オヽ、池水が溢れて渡られぬ。エヽ、鈍な事だなア。
やす　ナウ／＼、それなる人に物問はん。淨飯大王の御太子の御菴室は、いづれなるか、敎へてたべ。
車匿　御息所、若君のお供なし、尋ね參つた譜代の家來。菴へ案内いたしておくりやれ。
やす　賴むわいなう。
〽呼はり給ふ御聲は、谷の嵐に隔てゝも、流石、恩愛不能斷、飛び立つばかりの哀れさに、振返へらんとし給ひしが。
悉達　又しても無明の惡魔。我が心を誑らかす。アラ恐ろしや、愚かやなア。
〽笛に寄る鹿、火に入る蟲、色聲香味觸法の、執着に身を果す。娑婆の苦患の果敢なさよ。
我れ、百敷にありし時は、太子とも云へば云へ、身は墨染めの山鴉、瞿曇沙彌には妻子もなし。

〽園に植えては花紅葉、深山にあれば柴薪、暇惜しやと御杖に縋り、柴を荷ひ立ち上がるを、妃舍人は伸び上がり、遠目に見上げ見下ろして。

やす　ヤヽ、お姿は變れども、正しく我が夫。

車匿　オヽ、さうだ。疑ひもなき我が君樣……岸邊に張りし厚氷、これを渡つて。

やす　オヽ、心得た。

〽甲斐々々しくも裾引き上げ、女の一念危ふくも、氷の劍踏みしたき、難なくこなたへ打ち渡り、走り躓き取り縋り。

マア〳〵待つて下さりませ。元より御發心の御身に對し、穢れ不淨の我れ〳〵が、お側に添ふ筈なけれども。

〽山川萬里をはる〴〵と、越え參りしは外ならず。

君の情を身に宿し、誕生ありしこの若宮、御父君は何國にと、問はるゝ度の哀しさ、辛さ。

〽身も世もあられず御跡慕ひ、幾瀬の思ひにやう〳〵と廻り逢ひしも親子の奇縁。

たつた一言、我が子かと

〽お詞下し給はれと、涙と共に願ふにぞ、車匿はお側へ摺り寄つて

車匿　コレ、我が君樣……生けとし生ける人間は愚か、鳥獸、蟲けらまでも、往生得脫させたい大願立てた、情深いあなた樣が、天上天下にたつた一人の、コヽこの若宮樣、可愛うはござりませぬか。あなたのお胤を御平産あられしかど、姫君には主なき胤を出產せしは、忍び男のありてこそと、馬將軍夫婦が讒言。既に提婆が爲に擒となり、若宮を枷に横戀慕。そこへ下郎が駈せつけて、これまでお供いたせしに、和子か、よく來た、父なるぞと、なぜ仰しやつては下さりませぬ。そりやお胴慾でござるわいなう。

〽口說き立てたる愚痴無智の、恨み涙ぞ道理なり。太子は爰ぞ發願の、破れ口よと御目を閉ぢ。

悉達　生死去來、卽是如夢。アヽ、恐るべし

〽縋る袂を打ち拂ひ、又も枴に手をかくれば、羅古羅太子は取り縋り。

羅古　申し、あなたが父上なら、お側に置いて下されいなう。

やす　オヽ、よう云うた、尤もぢや。

車匿　お道理さまでござりまするわいなう。

〽聲も惜まず右左、歎き栅らむ蔦蔓、太子も今は堪り兼

初演の繪番附

ね、若宮引き寄せ抱き上げ、恩愛涙かき曇り、晴れ間は更になかりける、やゝあつて、執着の愁ひを袖に打ち拂ひ。

悉達　抑も、宮中を出づる時、おことに委しく申せし如く、思ひ立ちたる出家得道、何とて心變ずべき。やがて、正覺成就せば、再び逢ひ見る期もあらん。

〽これまでなりや方々と、御衣の袖掻き合はせ、供養のくさ〴〵打ちかたげ、たどり〳〵の御難行、涙に桶の水增して、肩重げにも痛ましく、峙つ山路攀ぢ登る、御有樣を見送りて。

羅古　父上さまいなう。

やす　我が夫いなう。

車匿　エヽ、風にも當てぬ大事のお身に、幾干の荷を肩に置き、何お命の續きませうや。

やす　せめてもの思ひ出に、その御苦勞を自らに、代らせてたべ、我が君樣。

〽縋り歎けば、身を背け、御涙を浮めながら。

悉達　凡夫一生の樂みは、翻つて、むしゆの苦患となる。それを思へば、今の身の、この難行は數ならず。早々、下山いたされよ。

やす　それは御身の菩提心。自らは、お見捨てあるとも。

車匿　若宮樣はお可愛うはござりませぬか。そりや、あんまりだ。

やす　お情なうござりまする。

悉達　いやとよ兩人、羅古羅一人のみ、我がいとし子ゝな思はれそ。一切衆生は皆我が子、洩らさず濟度なさんが爲のこの苦患。時刻や移る。方々、さらば。

やす　コレナウ、暫し。

〽と聲を上げ、御跡慕ひ攀ぢ登れど、苔滑らかに足止まらず、梢吹き出る山風に、主從谷間へたぢ〳〵〳〵。

トやすだら、蔦蔓へ縋り、車匿、羅古羅を背負ひ、後より上へ登り、三人とも、元の所へすべり戻る。此うち、悉達、頂上へ登り、雲間へ入る。

車匿　いま一度若君に、御姿を拜ませんと思ひしかど、かかる嶮岨の踏み途なく、

やす　凡人業には登られぬ。

〽淺ましや、悲しやと、身を投げ伏して泣き沈む。折もかなたの谷間より、兼ねて期したる須賀多民、組子引き連れ、押取り卷き。

多民　ヤア〳〵車匿、うぬが主人の置き去り女房を、御主

人提婆が達てと懇望。伯了坊に盗ませて、連れて戻つて口說きの最中、おのれがちよいと來て、あつちよ切つて、こつちよ切つて、連れて逃げたるその跡追ツかけ、爰で逢つたが佛のお椀だ。意地むぢ云はずに、姫を渡すか。否だと吐かせば、お命や堪らぬ。舍人、返事は、なんと〳〵。

車匿　ウフ、ハ、、、ヽ、吐かしたりな腹の皮……うぬら何億何萬人、一把に束ねて取卷くとも、獅子にたかつた蚤とも思はぬ。一度にかゝつて、來い〳〵〳〵。

多民　討つて取れ。

〽群がりかゝるを事ともせず、右往左往に投げ退け、蹴退け、勇ましくも亦、目覺まし〻。

ト立廻り、向うへ追ひ駈け入る。此うち、須賀多民、橋がゝりへ小隱れする。

やす　コレナウ車匿、長追ひなして、過ちあらば、誰れを便りにせうぞいなア。

羅古　舍人やアい。

〽呼び給へど、御聲は、谷の嵐に隔てられ、詮方涙後より、窺ひ出でたる須賀多民、妃引摑ゑ、聲張り上げ。

多民　ヤア〳〵者ども、やすだら姬を生捕つたり。牢輿、早く。

ト橋がゝりより、花四天、牢輿を舁ぎ走り出て、下へ直す。

やす　さては、わざと負け色見せ、車匿に深入りさした後で、斯く計らはん手段よな。

多民　ソレ、者ども。

皆々　心得ました。

ト引立てにかゝる。

羅古　母さまイなう。

多民　エヽ、イケ邪魔らこの羅古羅め。池へどんぶり、オオさうだ。

やす　アヽコレ、待つてたも。自らはいとはねども、これなる太子は四天下に、三十七世連綿たる、君の世繼に立つべき身を、池の藻屑となさんとは、天罰知らずの極惡人。やはか太子を渡さうか。

多民　なにを。

〽支へる甲斐も荒し子ども、重なつて引き戾す。その間に若宮引ッたくり、あたりも知れぬ池の中、眞逆さまに打ち込んだり。姬君、今はこれまでと、共に入水と見えけるを、手取りに抑へ牢輿へ、打ち込み、舁き上げ、氣

をいらち。
夛民　急げ。
皆々　心得ました。
〽道を早めて。
ト牢輿を舁ぎ、橋がゝりへ走り入る、山颪を打ち上げ、知らせにつき、この道具、一面にセリ下ろす。
本舞臺、眞中、一面に紅葉、蓮花の形したる小高き岩臺、側に木蓮樹の立ち木、上下、岩石、奥へ入りて、瀧壺。向う一面、遠山の書割り。橋がゝり、峠、岩組み。すべて檀特法嶺の體、爰に阿羅々仙人、木の葉衣、仙人の拵らへにて、香をくゆらし、秘文を照らし居る。迫り返しにて道具納まる。
〽分け登る、抑もこの御山は、忝なくも七佛、出世の未前に開け、顯密二種の靈地とて、爰に端座の老翁こそ、外に類も阿羅々仙人、眼を閉ぢて寂莫たり。かゝる折しも瞿曇沙彌、千辛萬苦にやうやうと、二品携へ立歸り、御前に供じ奉る。
ト悉達、橋がゝりより出て、小腰をかゞめ、件の畚と瓢のたごを、阿羅々仙人の前へ供へ

悉達　師仙には、さぞお待ち兼ね。瞿曇只今、立歸りましてござりまする。
阿羅　やをれ瞿曇、汝二千五百戒の仙法を受けて、無爲の修業をなし遂げんと、我れに誓ひし詞を破り、大犯せし烏滸の曲者。供養のくさぐさ、麓へ捨て、懺悔なして天帝へ詫び、淸きに替へて登山いたせ。
ト畚を蹴返す。
悉達　ハ、ツ、無爲學道の爲に、兼ねて身命を拋ち候へば、露聊かも身を穢がさず。然るを罪人とは、何ゆゑあつて。
阿羅　汝、さかしく奥をさとし、その片端を知らざるうつけ。氷を汲むには瀉水の法あり、菜を摘むには、三持の道あり。
悉達　ア、イヤ、常々師仙の敎化の如く、水には赤白青の三つの龍、主となつて、雨露を施し、艸木を惠みますゆゑ、猥りに汲み減らせし事なく、一束ねの菜を摘むにも三光輪を報じて摘み來り、捧げ申せしこの品を、不淨なりとは心得ず。
阿羅　ウフ、ハ、、。その迷妄を晴らさせん。近寄つて、これを見よ。

悉達　ハヽッ。

ト阿羅々仙人、朱杖を突き立て、上がつて件の瓢の水を好き所へ直し

阿羅　それ、青山は青く、白雲は白し。月舍れば、月を汲み、山移れば山を汲む。これ山月を盜む偸盜戒。のみならず、汝が汲みしこの水は、世に亡き母の面影を慕ひ、夢中に過去の執念に迷ひ、目覺めては、現在に、故鄕の妻子眷屬に、見えし愛着戀慕の、影を移せし穢れ水、まつた本覺大悟の火は、煩惱を燒き盡すと敎化なせしを、今日妻子の念に愛慾起り、修業却つて罪障起り、その業に引かれし薪。これを見よ。

ト枯木の柴を取上げ、祕文の九字を、切りかける。薄ドロ／＼になり、青葉を吹く。

先ツこの如く、枯れても元の生木となる。生きたる梢を切りたるは、殺生戒にあらざるや。

悉達　サア、それは。

阿羅　戒行を破るは、法賊にあらざるか。

兩人　サア／＼／＼。

阿羅　天理の戒しめ、三十棒。

〽思ひ知れやと打つ朱杖、折るばかりの折檻を、堪ゆる弟子の六根淨、御目も眩み撞と伏し、其まゝ息は絕えにけり。仙人驚く氣色もなく、瀉水の法に白毫淸め、傍への石に結迦趺座なし、金剛の印を結び。

天地內外六根 清淨、無量壽覺、般若波羅密……阿宇阿宇。

〽唱へ給ふ讀誦に連れ、不思議や太子、御心附き、五體を撫でつ擦り見つ。只一點の惱みなく、疵つく事もあらざれば。

悉達　ヤ、戒めの笞にて、正しく一命終りしと思ひしに、痛みも痕もあらざるは、さては修法の故なるか。チエヽ忝ない。

〽禮拜するこそ道理なり。仙人ほゝと微笑なし。

阿羅　善哉々々。汝これまで我が杖にて、三度生き替りたれば、聊か六根の穢れなし。今より照普比丘淨光仙と名乘り、まつた雪山の法臺へ移らば、妙舍利仙と改めて、無常正覺の敎へを示し、一切衆生を濟度あられよ。これぞ三光祕事の杖。讓り與ふる、納受あられい。

〽今ぞ大願成就のしるしと、差出し給へば、身も慄ひ、感喜隨喜の有り難涙、師の恩無量廣大無邊と、喜び給ふぞ道理なり。かゝる時しも谷間蔭、傳ふ猿のそれなら

ざ、窺ひ出たる須賀多民。

ト上手の岩蔭より須賀多民、窺ひ出て

多民　さてこそ〳〵、やすだら姫が世迷ひ言、聞いたるゆゑに來て見れば、疑ひもなき悉達太子。覺悟なせ。

ト劍拔き放ち飛びかゝれど、兩仙少しも動じ給はず、金剛合掌し給へば、忽ち五體立ちすくみ、おのれと大地に顚倒、不思議にも又心地よし。

ト須賀多民は、悉達に切つてかゝる。悉達、合掌なし、阿羅々、印を結ぶ。大ドロ〳〵になり、須賀多民、苦しみ悶絶す。

阿羅　目前の罪、目前に罰す。生死去來卽是如夢。

悉達　善惡不二、邪正一如。

阿羅　諸人けいらい。

兩人　諸人けいらい。

ト印を結ぶ。ドロ〳〵になり、須賀多民心づき

多民　ヤ、生れ替つた。

阿羅　いそふれ妙砂利。

悉達　ハッ。

トまた印を結ぶ。ドロ〳〵になり、須賀多民、見事にかへる。

フム、誠に。

ト膝を打ち

阿羅　生死流轉。

悉達　娑婆の境界。

阿羅　會得か。

トまた祕文を唱へ、印を結ぶ。須賀多民また心附く。

悉達　奇妙。

ト力足を踏む。須賀多民、見事にギパを踏む。此まますつぽんにてセリ込み、掛け焔硝立つ。

阿羅　ウフハヽヽヽ。

ト悉達、感心の思ひ入れ。この前へ、紫雲の書絹を卷き下ろし兩人を消す。知らせにつき、この道具、誂らへの鳴り物にてセリ上がる。

本舞臺、一面、雨に柳を描きし道具付いて上がり、中端にて切つて落す。向う下手に寄せて、土藏の横の張り物。上の方、石橋、向う川を隔てゝ、大寺の外構へ、片漏斗にて奧深かの遠見、すべて鯉宇砂川の模樣、よろしく黃檗の勸めにて道具納まる。

ト向うより、花四天の捕り手六人、以前の牢輿を舁ぎ

捕一　足早に出て　車匿めが追ひつかば、事むづかし。

捕二　ちつとも早く、我が君提婆さまへ。

捕三　それにつけても、須賀多民どのには、如何いたした。悉達太子の討手にござつたが、大方、仙術とやらで、大きな目に遭ひはしまいかしらん。

捕四　先日でも、今日でも、褒美が肝腎。

皆々　サア、早く〱。

ト舞臺へ來る。風の音して、高欄より、はやぶさにて、須賀多民、舞臺よき所へ落ちて悶絶する。

捕一　ヤア、人が降つた〱。

捕二　こりや、須賀多民どのではないか。

皆々　須賀多民さまやアい〱。

トこれにて心付き

多民　オヽ、皆の者、爰はどこだ。

捕一　爰は、鯉宇砂川の川端でござります。

多民　エヽ、イヤ、素敵な所へ抛られた。さうして、やすだら姫は。

皆々　即ち、これに。

多民　さうして、これから。

皆々　ハテ、知れた事、提婆さまの別殿へ。

多民　ヤア、あつちへ行つて堪るものか。車匿めが先廻りをしたに違ひない。

皆々　それは險呑。

皆々　どう致しませう。

多民　一先づ、身共が屋敷へ急げ。

皆々　心得ました。

ト向うより

太郎　待ちやアがれ。

ト右梵字太郎、大童にて走り出る。

多民　ヤア、誰れかと思やア、わりやア右梵字

皆々　太郎だな。

太郎　うぬらが昇いた怪しの牢輿。

多民　者ども、ぬかるな。

皆々　心得ました。

太郎　なにを。

ト皆々を追ひ込み、正面の土藏を明け、やすだら姫を内へ忍ばせ、戸前を閉めて、身支度する。花四天、名名矛を持ち立ち戻り

捕一　いそふれ、方々。

六人　覺悟なせ。
太郎　なにを。
　ト立廻り。皆々を投げ退け
南無や七佛、天地神梵天帝釋四大天、愛愍納受なさしめ
給へ。
　ト川中へ飛び込む。向うより以前の捕り手、走り出
る。花四天、起き上がり
捕一　ヤア、遲かつた〳〵。
捕二　ナニ、遲かつたとは。
捕一　サア、やすだら姫を牢輿へ打ち込み
捕三　爰まで來たと思つたら
捕四　右梵字めが追ツついて
捕五　取返されたか。
捕皆　大べら坊め。
捕一　サア、長柄の鉾を用意なし、引返して來たところ、
この川中へ飛び込みしが、とんと、
六人　合點が參らぬ。
捕二　それこそ、羅古羅太子の骸を尋ねに入つたに違ひな
い。
捕三　この早川で、泳ぎ勞れ、上がつて來る所を取圍ま
ば
捕四　袋の鼠も同じ事。必らずともに、ぬかり召さるな。
皆々　合點だ。
　トよき程に太郎、濡れ衣裳にて、莫大なる金龍を抱
き、上がり、十二人を相手に、面白き立廻りあつて、
皆々を投げ殺す。向うより、車匿、四天四人鎗詰めに
立廻りながら出て、直ぐに舞臺へ來る。太郎、うつと
りとなる。この時、戸口を明け、やすだら姫出て
やす　ヤヽ、車匿にも、これに。
車匿　チエヽ、忝なや、御身に恙はなかりしか。
やす　それにつけても、右梵字太郎が、この體は
車匿　コレ、心を慥かに、太郎どの。
　ト呼び生ける。
太郎　姫君樣。オヽ、車匿もこれにか。口惜しい〳〵。無
念なはやい。
やす　ナニ、口惜しい。
車匿　無念とは。
太郎　早瀬の水底、そこ爰と尋ね登れば、川上を瀬切つて
通さぬ、これなる金龍、打ち殺せしが、心氣の勞れは龍
の祟りか、筋骨痺れ動かれず、とても存命思ひも依ら

ず。あなた様は、車匿を連れ、又も追手のかゝらぬうち、烏陀夷さまの下館へ、今宵のうちに、早く〳〵。

車匿　エヽ、日頃に似合はぬ、そりや何事。僅かに殘る忠臣の、この世を去らば、如何にせん。

やす　我が夫には生き別れ、若宮と云ひ、また其方に死別れ、なんと長らへ居られうぞいなう。

太郎　サヽ、あなたの御先途も見屆けず、死にたうはなけれども、最早近づく知死期時。アヽ、苦しや、堪え難やなア。

ト四天四人、起き上がり

四人　覺悟。

トかゝるを、太郎よろぼひながら、立廻る。大ドロ〳〵になり、龍骨割れて、羅古羅、すつくと立ち、四天を投げ退ける。

やす　ヤヽ、丈なる龍と思ひしに

車匿　羅古羅太子で

太郎　在しませしか。

車匿　ヤヽヽ。

羅古　計らず手に入るこの名玉。

やす　ヤ、その玉を

車匿　ドレ……こりや紛失の夜光の名玉

太郎　水底にて、お手に入りしとな。

ト薄ドロ〳〵になり

ヤヽ、この名玉を手に持てば、俄かに心氣清々と、こりや、どうだ。

ト四天、かゝるを投げ返し

やす　そんなら、玉の威德にて

太郎　以前に替らぬ五體のすこやか。

車匿　これも正しく佛の應護。

車太　チエヽ、忝ない。

ト後にて

阿羅　やみなん〳〵。

ト大ドロ〳〵になり、菩提樹の蔭より、上下へ、悉達、阿羅々仙人、佛體に着替へ、高みへ振り出す。空より蓮花降る。

太郎　ヤヽ、紫雲たなびき、現はれ給ふ

車匿　佛體にて、見えしは

やす　我が夫にて在しますか。

悉達　善哉、兩人、正無二如來師佛仙、その昔の諸願、滿足して、諸々の迷ひの衆生、皆佛道に引卒せん。

阿羅　我れは大通智生佛、光照世界の契りを違へず、阿羅羅仙人と現じ、正覺成就なせし上は
悉達　これより婆羅那國へ、師と共に乘雲なし、億萬劫を守るべし。
阿悉　ゆめ〳〵疑ふ事勿れ。
やす　斯くとも知らず、夫と結び
太郎　君と仕へし結緣は
車匿　御法も深き他生業。
三人　チエヽ、有り難や、尊やなア。
　ト須賀多民出て
多民　もう破れかぶれ。
　トかゝる。これと一時に捕り手大勢もかゝるを、羅古羅、太郎、車匿立廻り、皆々を投げ返へす。
阿悉　さらば
三人　おさらば。
　ト大ドロ〳〵になり、音樂、和歌。太郎、軍兵を積み重れ、羅古羅を乘せ、捕り手へ踏まへ、やすだら姫、悉達の方を伏し拜む。車匿、須賀多民を引きつけ、双方引ッ張りの見得、よろしく、打込みにて、
幕

花觀臺大和文庫（終り）

月梅攝景清

源平の對面

直に打てば五條坂廻れば三里清水へ願事はかる左次太夫が道は替らぬ忠孝の誠あかしの人丸は漕ぎ放れゆく追風の元船千手の功力忽ちに今吹き返す天津風盲龜の浮木優曇華のハテ珍らしい

初演の繪番附

月梅攝景清

日向島の場

役名――秩父庄司重忠。土屋三郎常義。三浦之介義村。三保の谷四郎國俊。番場忠太。景清娘、人丸。船人、左次太夫。惡七兵衛景清。

本舞臺、向う一面の浪幕、下手より橋がゝりへかけて、波打寄せ磯の張り物。よき所に松の立ち木、日覆よりも同じく吊り枝、爰に四人の船大工、煙草をのみ、立ちかゝり居る見得。てんつゝ、浪の音にて幕明く。

大一　なんでもお代官から、骨ッ切り精を出せと云ひつけられても、早出居殘りより外、體が續かねえもんだなア。

大二　それでも手めえ、變に居殘りに居て、人の來ねえ時よりましだらう。

大三　イヤ、無駄は措いて、急き立てるゆゑ、もう仕上げをするばかりになつた。

大四　併し、あの元船は何を積むのか。手丈夫に牢屋のやうな物を拵らへたが、何を入れるのだらう。

大一　お主達に知れるものか。急に和蘭へ渡つて、今度は大きな白い象を持つて來て、兩國へ見せ物に出す積りだ。

大二　おれも象だ牢と思つた。

大三　同じ事なら三疋入れて持つて來て、江戸の春狂言の間に合はすけれど。

大四　象を三疋、そう三もねえ事だ。

大一　コレ〳〵、三疋象を牢へ入れて、春狂言の間に合はせるとは、無理こぢつけで

三人　あらうがな。

大三　さんぞうらう〳〵。

ト時致の見得。

三人　面ア見やアがれ。ハヽヽヽ。サア〳〵急がう〳〵。

ト煙管をしまひ、花道へかゝる。時の太鼓やうの浪の

音になり、忠太、侍烏帽子、半素袍、股立ち、赤塗り立てにて、軍兵四人引連れ、足早に出て來り、皆々を睨め廻し

忠太　ヤイ〳〵〳〵、町人ども、すさり居らう。

大一　へイ、私しどもは

四人　町人ではござりませぬ。

忠太　町人でなくば、この島へ流された流人どもよな。

大一　そんな嫌味な者ぢやござりません。ハイ、船大工の

四人　職人でござりまする。

忠太　職人でも科人でも頓着はない。すさり居らう。

四人　へエ、。

ト舞臺へ追ひ戻し、四人、下へ蹲まる。

忠太　ヤイ、匹夫ども、某を存じ居るか。

大一　へイ〳〵、存じて居ります。昨年中もお出でなされた

四人　ころり樣。

忠太　默りやアがれ。某こそは、兼ねて音にも聞きつらん、梶原の郎黨、番場の忠太と申すもの。當日向の國順檢の役目は表向き、誠は先達てこの國へ流され來たりし惡七兵衞景清、親類緣者の者尋ね來つたら、早速代官方へ注進いたせと、あたり近所を駈け廻つて觸れて參れ。

大二　私しどもは急な仕事を。

忠太　エ、、鎌倉どのゝ嚴命だぞ。

大三　鎌倉屋の源兵衞と云ふ人は、この近所にはねえが。

忠太　エ、、うしやアがれ。

四人　ハイ〳〵。早くうせる方がいゝ〳〵。

ト捨ぜりふにて、橋がゝりへ逃げて入る。後見送り思ひ入れあつて、この時、下手より國俊、時代なる半天、紐付き股引、大小、くり下げ五十日鬘、竹笠をかざし出て、忠太と顏見合せ

忠太　ヤ、これは〳〵、三保の谷の四郎國俊さまでござるか。

國俊　先づは一別以來、其許にも息才にて、大慶至極に存じ申す。

忠太　某は小田原より出立いたして、十日以前に着いたしたが、各々方には、只今着岸召されしか。

國俊　如何にも。商人船に忍び乘り、やう〳〵着岸いたした。それにつけてもこの三保の谷の、廣い世界を肩身狹く暮らすのも、去んぬる八島の戰ひに、景清が爲めに不覺を取り、鎌倉凱陣の着到にも洩れ、その無念やむ事な

く、然るところ當の敵の景清は、盲目となりたるゆゑ、この日向の宮崎へ流し者となりしと聞き、おのれ怨敵、首掻き切つて、會稽の恥辱を雪ぎ、それを功に歸參を願はんと、渡りし折柄、貴殿順檢と承り、取る物も取り敢へず、面押拭うて久々の對面。貴殿を問はんと尋ね申した。

忠太　なにサ〳〵、勝負ば時の運。それはさて措き秩父の重忠、景清を赦免させんと、御前を繕ろふと聞き、主人景清、その鼻をはぢかん爲、人知れず討つて捨てよとの云ひつけ。

國俊　それゆゑにこそ我れらまで、斯くの如くに心を痛め、猶この上にも舵子に出立ち、討ち取る所存。

忠太　歸參を推擧は手前が主人。

國俊　然らばこれより。

忠太　各々方と。

國俊　御同道仕らう。

ト　また時の太皷めいたる浪の音になり、忠太先に國俊、軍兵附き添ひ上手へ入る。知らせにつき、正面の浪幕を切つて落す。

本舞臺、一面鏡板まで打抜き、浪打ち寄せの地がすりより三の手まで、だん〳〵に遠見の波手摺り、向う遠山の書き起し。上の方へ寄せて九尺船板廂、皮つきの丸木柱、吹き寄せの朽木を並べ、床下にしたる心、軒面に破れたる菰垂れを卷き下ろし、この前に丸もの〻岩臺、枯れ蘆の浪板、下手に誂らへ磯馴れ松を植えたる岩臺。所々小松、日覆より松の吊り枝、橋がゝりより苫をかけたるはしけ船を出しかけ東西向う正面、一面の波手摺り、すべて宮崎配所の體よろしく、直ぐに竹本の淨瑠璃に衍、波の音になり、道具納まる。

〽松門ひとり閉ぢて年月を送り、自ら清光を見ざれば時の移るをも辨まへず。

〽春や昔の春ならん、故郷の空はいづくぞや、憂き事茂る草の原、牛飼び樵夫賤の女の、情の食に命を繋ぎ、名のみ自在に破れ石も、時の役とぞ立つる茶の、哀れ昔を忘れ草。

ト　始終衍、波の音をかぶせ、よき程に正面の菰垂れを卷き上げる。爰に朽木の自在に古釜をかけ、汐木吹き寄せの物を茶器に見立て前へ置き、景清、茶を立て居る

ろ見得。
〽忘れぬ義心君恩を、思ひ出して平砂に下り、枯木の杖によろ〳〵と、よろぼひ巖に辿り寄り。
ト此うちよろしく含嗽手水を使ひ、舞臺へ探り下り、杖を探り取つて、上手の岩臺の前へ座る。
〽首にかけたる袋を開き取出せば、錦の包みに恭々しく押し戴き〳〵、石上に据ゑ供へ。
ト頭陀袋より錦の袱紗に包みし位牌を出し、岩の上へ直し、屋體より手籠やうの物に供物を載せ、桐の葉に粟の飯を載せ、件の袱紗を敷きて上へ載せ合掌して
景清 南無小松內大臣重盛卿、淨蓮大居士即生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々。
〽唱ふる聲もかきくれて、消え入るばかりの悲歎の涙。
天晴れ君は三世を見拔く日本の賢人、治承の空に雲隱れし給ひしより、源平數ケ度の戰ひ、闇に嶮岨の山坂を越ゆるが如く、斯く申す景清を始め、一騎當千の者どもまで、何となく心臆し
〽雜兵の手に落命し、御一門悉く、遂に赤間ケ關とめても、歸らぬ昔物語り。
よし人はともあれ景清一人、生き存らへて賴朝が首取つて、討死なしたる人々の、供養憂憤を散ぜんと、思ひし一念の通らぬのみか、乞食盲目の恥を曝すとは、
〽よつく摩利支天の冥加にも、盡き果てたるか口惜しやと、恩愛義理に身をかきつめり、拳を握り、落涙五臟を絞りしが。
せめては君が爲、花一本と水一滴、手向けんものと存ずれど。
〽庵の內は臣が不淨の臥し所、恐れを存じ、この石を、七寶の佛壇と觀じ。
とは云ひながら、如何に世に住み侘ぶればとて、手づから煮焚の調味して、捧ぐる程の便りもなく。
〽匹夫の竈を分けし粟の飯、木の葉の折敷、萩の折り箸。
これが。
〽太政大臣清盛入道が御嫡子。
內大臣重盛公へ靈供と云ひ。
〽平家方の侍ひ大將、惡七兵衛景清が、供ふる膳か、情なき世の成行きと、大地に撞と身を投げ伏し、前後も知らず泣き居たる。
トよろしくあつて泣き伏す。この時向うにて

左次　これはしたり、わしが附いて居る。氣を丈夫に持つて、ごんせ〳〵。

〽すは人こそと御位牌、袋に納る折柄に。

ト位牌を頭陀袋へ入れろ。よき程にテンツヽになり、向うより左次太夫、泣いて居る人丸の手を引き、捨ぜりふにて出て來り

ハテよいわい。甲が舍利になつても、爰まで海山越えて來たもの、逢はせずには措かぬわいの。

人丸　もし此まゝに逢はれずば、わたしや死にたうござります。

左次　ハテ、わしに任せて置かんせ。サヽ、これから彼方の方を尋ねて見よう。

人丸　其やうに云うて下さんすと、わしやどのやうにか嬉しいけれど、爰が尋ねる宮崎とやらなら、片時も早う父上樣の、お顏が見たうござんすわいなう。

左次　オヽ、尤もぢや〳〵。マヽ、わしに附いて、ござれござれ。

ト捨ぜりふ云ひながら、本舞臺へ來り

何しろ誰れぞに、樣子を問うて見ずばなるまいか。

人丸　サア〳〵、早う問うて見て下さんせ。

〽人聲するに立ち上がり、庵に隱れ入らんとす、影を見附けて聲をかけ。

ト景清、考へ、こなしあつて、杖を便りに行きかけろ。人丸、左次、景清を見て

左次　アヽ、コレ〳〵乞食どの、こなたにちと尋ねたい事がござる。

景清　尋ねたいとは、わしが事かな。

左次　オイヤイ、外の事でもない、この娘御が尋ねる人、知つてなら敎へて下され。

景清　ハヽ。こなお人わいの。盲目を捉へて、藪から棒に

人丸　ソレイナア、お前のやうに云うては、誰れの事やら知れぬわいなう。

左次　オツと誤まつた。餘りうろたへたゆゑ譯は云はず、ハヽヽ……時に斯うぢや。この島へ都から來てござる、平家の侍ひ、惡七兵衛景清さまに、はる〳〵と尋ねに來た者ぢや。どうぞ敎へてくれさつしやれ。

景清　その人を尋ぬるは、そりや何者か。

人丸　ハイ、忘れ形見の娘の人丸。

景清　ヤ。

左次　千辛萬苦でやう〳〵と、尋ね來ましたこの娘、どうぞ教へて
兩人　下されいなう。
〽胸にぎつくり恩愛の、悟られまじと何氣なく。
景清　左樣か。話しを聞いた事もあつたれど、見らるゝ通りの盲目、ついに逢うた事もない。
〽詞少なに入らんとす、袂にひしと縋りつき
人丸　ナウ、マア待つて下さりませ。そのお詞の樣子といひ、乳母が常に話しに聞いた、父上の面ざし格好、疑ひもない父上樣。
景清　これは又迷惑千萬、爰放さつしやれ。
人丸　如何程に仰しやらうと、眞實眞身の親子ぢやもの、お見違へ申してよいものかいなア。
左次　さうぢや〳〵、こな樣が景清さまとやらなら、たつた一言、名乘つて進ぜて下さりませ。
人丸　モシ、手を合せて拜みますわいなア。
〽縋り歎けば景清も、不便やとは思へども、所の掟且は又、斯く落ちぶれし形を見せ、いとゞ歎きを增さんよりは、名乘らで歸すが娘の爲と、思案定めて振り拂ひ、杖を小楯に聲荒らげ。

景清　ヤア、寄るな〳〵、盲目の打ち杖、咎めはなし。近寄つて叩かれな。元より我れは景清ならず、親ではないぞ。さりながら、當所初めてとならば知らぬも理り。日向一國の習ひとして、貧福貴賤の差別なく、兩眼盲ゐれば此の島に捨てられ、乞食となり、この世で因果の業を果し、未來の佛果を願ふゆゑ、我れら如きの乞食盲目、何十人といふ數を知らず、粗忽して咎められな。エヽ、とつとゝ爰を、歸らつしやれ。
〽心強くも云ひ放てば、娘は本意なく、あるにもあられず。
人丸　そんなら、あなたではござりませぬか。
　　ト云ひながら、いろ〳〵景清を見て
どうも最前からのお詞といひ、父上のやうに思はれて、わたしや爰が去にともない。
〽去にともないと淚ぐむ。
左次　オヽ、さうぢや〳〵。如何にしても破れ口ではあれど、小袖の模樣……イヤナニお前、もしこの娘の親でありながら、名乘り逢はずに行つたなら、この娘御は死ぬると云ひますわいの。老先のある者を、見殺しにするがいとしいわい。もしこなたなら聞分けて、どうぞ名乘つ

て下さりませ。
人丸　死ぬるこの身はいとはねど、未來へ行つて母さんに、なんと云ひ譯ござりませう。
左次　コレ〳〵、其やうに知らぬ顔してござるとは、そりや、胴慾ぢや〳〵。
人丸　お胴慾でござりますわいなア。
〽泣きつ口說きつ縋るにぞ、景清殆んどもてあまし。
景清　アヽ、人の上にも身の上にも、哀れを見るが哀しさに、景清が在所知らぬと云ひしは僞りなり。
左次　そりやそこそな〳〵。
人丸　矢ツ張りあなたが父上樣。
景清　イヤ〳〵、その景清は。
兩人　景清さまは。
景清　サア、爰より奧にさまよひしが、誠は去年。
兩人　どうなされました。
景清　飢え死して、なくなり申した。
兩人　エヽ。
景清　オヽ、土になりしと知らざるも、神ならぬ身は是非もなし。アヽ、肉身の娘なら、さぞ悲しくもありつらん。その砌りには塚の印もありつらめ。今はそれさへ跡もなく、只松風の訪るゝのみ。
人丸　すりや眞實父上樣には、お果てなされましたかいなア。
景清　なに僞りを申さうぞ。
左次　さうして、そのお死骸の埋めし所は。
景清　どこへ埋めしやら、我れも盲目の事なれば、所も知らず……サヽ、日の暮れぬうち、早くお行きやれ。
〽我れと我が身の僞りも、親子火宅の輪廻を切り、けんによもなげに入りにけり。
トよろしくあつて、小家の內へ入り、垂れを下ろす。
〽娘はされども逢ひ見んの、心便りも樂しみも、情も力も弱り果て。
人丸　すりや父上は、お果てなされたのかいなア。コレ、左次さま、わしやどうせう〳〵ぞいなア。
〽わつとばかりに泣き沈み、其まゝそこに伏し轉ぶ、左次も淚にくれながら。
左次　オヽ、その歎きは尤もぢや、道理ぢや〳〵、さりながら、吉野初瀨の櫻でも、不斷咲いてあると思ふは不覺。咲くからには散る筈、生きるからは死ぬる筈ぢや。併し、三百里餘りの海山越え、逢ひに來た一念なら、そ

の埋めた所の骨になりと、逢うて詞を交さうとは思はずか……サヽ、悲しいは尤もぢやが、歎いて居ても仕方がない。なんでも尋ねて白骨に回向をさつしやれ。ハテマア、ござれと云ふに。

〽尋ねて見ばやこなたへと、抱き起せども泣き入りて、詞なぎさの小夜千鳥、餘所の見る目も哀れなり。

ト泣き入りし人丸を、左次、介抱して立ちかゝる。

〽折柄里人二人連れ、摺れ違うて行き過ぎるを。

トよき程に向うより常義、義村、輕衫、船大工棟梁の拵らへ、手斧、差し金を持つて出て來り、直ぐに舞臺の方へ來る。左次太夫、人丸、入れ替つて

左次　アイヤ、モシ、ちよつと物が尋ねたうござります。

常義　オヽ、こなさん達は、他國の衆と見えますの。

義村　ほんに、このあたりには見馴れぬ人達。尋ねたいと云はつしやるは。

左次　イヤ、外でもござらぬ。わしらは遙か遠い國の者でござるが、去年中死なれた、惡七兵衞景清と云ふお人の、埋めてござる所御存じなら、どうぞ敎へて下さりませ。

常義　ナニ、埋めた所……ハヽヽ、ハヽヽ、當人が聞いたら、さぞ腹を立てるであらう。

義村　コレ〳〵、其やうな麁相な事を云はつしやるな。その景清と云ふ者は、アレ〳〵、あの茅屋に居る盲目乞食の事ぢやわいなう。

人丸　エヽ、そんなら矢ッ張り今のお方が、父上樣でござんしたか。

常義　ハア、そんならお前方、あの人に尋ねさつしやつたか。

左次　サヽ、最前船上りの時尋ねたりや、けんもほろゝの挨拶。段々事を分けて聞いたれば、景清と云ふ者は、去年死んだと云ふに依つて。

義村　ハヽア、解つた。ツイわしでござると云はれぬは、こなさん達は兎も角も、この島の掟で、盲目どのは名乘合ひをするが最後。お代官の牢へ入れられて、恐ろしい目に遭ひますわいのう。

常義　イヤ〳〵、それを怖がる景清どのでもあるまいが、あのやうに落ちぶれた姿を見せうよりはと、身を諦らめて名乘らぬのであらう。

人丸　さう云ふ父上のお心なら、所詮名乘つては下さんすまい。こりやどうせう〳〵ぞいなア。

左次 オヽ尤もぢや。あのやうな姿になられても、昔忘れぬ武士氣質。こりやマア、ひよんな事になつたなア。

義村 オヽ、そんなら何と云はるゝ。この娘御が、あの景清どのゝ。

ト常義と顔見合せ

ヤレ／＼、笑止な事ぢや。コレ／＼、もう泣くには及ばぬ。わしらは船大工で、向うに見える船へ、毎日來るゆゑ心安うなり

常義 多勢の職人へ辨當を運ぶゆゑ、朝夕飯を進ぜるよしみもあれば、こちら二人で譯を云つたら、素氣なうも云はれまい。

左次 それはマア、有り難うござります。これがほんの地獄で佛とは、お前方の事ぢや……エヽコレ、泣かずとお二人へ、何分よろしう。

人丸 どうぞお願ひ申しまする。

兩人 オヽ、よいてや……サ、ごんせ／＼。

〽云ふにいそ／＼立ち上がり、元の所へ立歸る。里人小家に立ち寄つて。

ト義村、先に皆々本舞臺へ來り、義村は上、常義は下、小家の左右に立ちかゝり、謠詞にて

義村 ナウ／＼、惡七兵衛景清はおはするか。

福 我れは船の番匠なり、景清どのへ

兩人 物申さん。

〽物申さんと呼はれば。

ト此うち小家の内にて

景清 ヤア、かしまし／＼。今はこの世に亡き者と、思ひ切つたる乞食を、惡七兵衛景清と、呼べばこれにと答ふべきや。

〽隔ての菅菰引ちぎり。

トこの文句にて菰垂れを切つて落す。景清、立ちかゝり。

〽その上住居もこの國の、日向とは日に向ふ、向うたる名を呼びもせず、情なくも捨てし梓弓、引けば引かるゝ惡心を、また起させて弄るのか。エヽ。

〽あら腹立たやと出でんとせしが〽所に住みながら、御扶持ある方々に。

〽憎まれ申すものならば、偏へに盲目の杖を失ふに似たるべし。片輪なる身の癖として、よしなき云ひ事、赦してたべ。エヽ、古巣に捨てし雛鶴の。

〽餘所にわぶるも恩愛の。

〽親はなけれど鳥屋出して
〽千里をかけり尋ね來て。
父よと泣けど身を恥ぢて、我れは答へず夜の鶴、腸を斷つ思ひぞや。
〽推量あれと差俯向く、娘はそれと聞くからに。
人丸　ナウ懷しや、矢ツ張りあなたが父上樣、逢ひたかつた〳〵わいなア。
景清　ヤ、、すりや最前からアノ爰に。
義村　さればいの。あんまり志しが痛はしさに、かけ構ひないこちとらなれど
常義　折角遠々の所を尋ねて來た心根、名乘らぬ仔細もあらうなれど、懇意にするこちとらの顏を立て。
義村　逢うて進ぜて
兩人　下されいの。
景清　すりや、日頃世話になるこなた衆が取持つて
義村　嚴しき所の法度なれど……コレ、わしら二人より外に、知つた者はない程に
常義　どうぞ親子の名乘りして
兩人　やらつしやれいなう。
景清　ア、、イヤ〳〵里人、我れを親ぢやと慕ひ來し娘、なんぞ子といふ證あつてか。
〽聞くに娘は差寄つて。
人丸　サア、その證といふは、幼ない時より聞き傳ふ、父上樣の念じ佛、閻浮陀金のこの尊像。
ト尊像を出す。景清、こなしあつて
景清　合點のゆかぬその尊像、過ぎし八島の戰ひに、失せ給ひしを、どうしておことが。
人丸　サア、不思議とわたしが、手に入る御佛。
左次　守護して來たも謎きせぬ緣、早く親御へ見せさつしやれ。
人丸　アイ〳〵。
〽娘はアッと走り寄り、渡せば景清、手に取上げ
ト人丸は景清へ件の尊像を渡す。景清、こなしあつて
景清　オ、、これぞ我が念じ佛、千年の靈像。
トよく〳〵に探り、こなしあつて
再び我が手に戻らせ給ふか。チェ、、忝ない。
〽手探りに、紛ふ方なき念じ佛、捧げ拜して喜ぶ體。
トこれにて義村常義囁き合ひ
〽番匠二人もさてこそと、囁き合うて忍び入る。

ト兩人、小蔭へ入る。

〽娘は差寄り縋りつき

人丸　コレイナウ父上樣、乳母が今際の物語り。

〽日向の方はいづれぞや、今はどうしてましますかと。明暮れ戀しう思へども、誰れに便らんよすがもなく

〽神や佛をお力に、辛い切ない思ひして、はる〴〵尋ねて來たものを、娘よう來た不便やと、一言云うたら科にならうか。

そりやお胴慾でござりますわいなア。

ト人丸よろしくこなし

左次　さうぢや〳〵、思ふ樣恨みを云うた〳〵。三百里餘りの海山越えて、年端も行かいで尋ねて來るは、並大抵の事かいの。

人丸　この島の法度ゆゑ、この身の罪にならぬやう、思し召してのお心遣ひか。そりや。

〽聞えませぬと泣きむせぶ。父も引寄せ撫でさすり、もしやと我が子の顏見たげに、指で瞼を押し明けても、暗きに迷ふ盲目の、心の闇にかきくれて、前後も分かず見えにける。

ト景清、人丸を引寄せ、愁ひのこなしあつて

景清　我れ熱田の大宮司が娘衣笠を娶り、其方を儲く。平家の成行きを見破り、足手まとひと乳母が娘にくれたれば、今は子でなし親でなし。我が子ありとも思はざりしに。

〽血筋程ある志し、親は子に迷はねど、子は親に迷うたるか。

不便や乳母もてこねしか。孤兒の年端も行かず、誰れを力に暮らせしぞ。その譯聞かせてくれいやい。

〽聞かせてくれとありければ。

人丸　アイ。

〽あいとは云へど云ひ兼ねて、わつと泣き入るばかりなり、左次太夫も目をしばたゝき。

左次　我れは御息女のお供し、共にお在所を尋ねし、左次太夫と申す者。お物語り申し上げん。一通り聞いて下され。

ト合ひ方になり

昔の御身分ならば、公家高家の歷々にも御縁組み。それは今申しても詮ない事。その時々の繪を畫くとか云ふ世の譬へ。日蔭のこなた樣の娘御なれば、世間晴れては貰ふ人も遠慮勝ち。そちこち致すうち、幸ひの縁あつて、

即ち我れら仲人いたし、相模の國で田地持ちの、大百姓へ氏系圖を土産にして、去年の婚禮さらりと相濟み、案じさつしやるな。不自由な事も何もござらぬ。其許様の身の上、聟どのゝ親御が聞き及び、此方へ呼び寄せて、養はせるは易けれど、天下の掟、ア、氣の毒なこつちや、こりや斯うせい。官を取つて、お身を樂にして上げましや、金持たして人やるも合點なれど、孝行にもならう、お顔見がてら嫁女、わが身直ぐに持つて行て進ぜいと、何から何まで氣が附いて、側に見るさへ、涙が流れますわいの。

〽差出す財布と文箱は、胸の內こそ不知火の、心づくしぞ哀れなる。景清面色筋あらゝげ。

ト左次太夫、財布と文箱を出す。景清キツとなり

景清 ヤイ、左次太夫とやら、長の海陸いつかい世話。連れて來て、逢はせた、一旦の禮は云ふ。茲な人賣りめ、すりめ、なぜ景清が娘を、土百姓の畠かぢり、むぐらもちの女房には仲人した。幼くとも其方もコレ、この父を見よ。頼朝に從へば、國郡の主となる活計歡樂。それを振り捨て、この島の渦蟲めらが、五器の剩りを啜るもナ、弓矢取る身の我と云ふ者。喰ひ物に盡きたらば、なぜのたつてはくたはらぬ。この金で官登りせよとは、親まで土ほぜりの名を穢さすか。エ、憎い女郎め。

ト金を投げつけ

〽打ち殺さうか。

踏み殺さうか。

〽それも腕よごし足けがれ。

よい〳〵、自滅するに好い物くれん。

〽探り寄つて庵の內より、痣丸の銘刀取出し、がばと投げつけ

ト小家へ探り入り、袋入りの短刀を投げつけ

コリヤ、それを見よ。景清が錆びぬ勇士の心は、この太刀、われにくれる。うろ〳〵なさば我が手にかけうか。恐ろしくば早く立て。左次とやら、連れて行け、立て……エ、この眼が自由になるならば、たつた一目……睨み殺してくれうもの。

〽見張る眼にはら〳〵と、こぼる涙を幼な氣に、誠に叱ると悲しき辛さ、せき上げ〳〵泣きければ、始終を見聞く左次太夫も、さては心を殘させぬ、詞の邪慳と心の慈悲、顏と目色に見てとれど、分けては云はれず差俯向き、共に涙にくれけるが、左次太夫は心附き。

左次　アヽ怖や、恐ろしや。長居せばこの上に、どんな憂き目に遭ふも知れぬ。サ、お娘を連れて歸りませう。折角の旅、かけて持つて來たなれど、蹴散らす程入らぬ金なら、持つて去なう。國土の費え。

〽拾ひ集めて里人に、目まぜで渡せば目で受け取り

ト此うち常義、義村、出る。左次太夫、兩人へ頼む。兩人、思ひ入れあつて金を受取り

常義　怪我のないうち

兩人　早う辭へ。

景清　エヽ、まだそこに居るか。ほえて居るな。うぬ、只一打ちに打ち殺してくれうか。

常義　アヽコレ、それは短氣な、もうよいわい。

義村　今船へ乘りかけて居るところ。これはしたり、待たつしやい。

景清　ヤア、退いた／＼。

〽杖振り上ぐるも拍子にて。

人丸　イエ／＼、例へ打ち殺されても、この世の名殘りに今暫し。

左次　アヽコレ、左次が乘せます。サ、お娘、エヽ、乘らつしやい、殺されるわいの。

人丸　イエ／＼、例へ殺されても、この世の名殘りに今一言。

〽暫らくなうと身を沈め、焦れ歎くも痛々しく、弱る心の父は猶、杖とぼ／＼とよろめく姿。

常義　これはしたり、殺されてはならぬ。

義村　マア／＼、船へ乘らつしやれ。

兩人　早う／＼。

〽嚇しつすかしつ、袖を引き立て、手を引き立て。

ト また側へ行くを引き放す。浪の音にて小家を上手へ引ッ込む。花道へ浪板セリ上げ、出しかけの艀船、花道の付け際へ直し、岩臺をよき所へ直す。

〽抱き乘すれば船人は、友綱といて漕ぎ出す。

ト 皆々捨ぜりふにて、人丸を乘せ、船頭、漕ぎ出す。景清、下の岩臺へよろぼひ上り

〽船よりは扇を上げ、陸には聲の立てかぎり。

景清　ヤレ娘、今叱りしは皆僞り、人に憎まれ笑はれず、夫婦仲よう長生きせよ。與へし劍を父と思ひ、肌身離さず回向せよ。重ねて逢ふは、冥途で／＼。

〽さらば／＼と云ふ聲も、涙に曇る汐ぐもり、追ひ手の風の心なく、親を殘して沖津浪、元船さして。

ト此うち人丸、伸び上がるを左次、抱き留める。扇を開き岡を招き、よろしく向うへ入る。景清、こなしあつて

ハア丶、船はもう出たか。可愛やなア。

〽前後も知らず泣き叫ぶ。里人いたはり、平砂へ伴ひ。

ト元の所へ連れて來る。浪の音、トヒヨをかすめて

義村　ハア丶、逢ひに來て追ひ返さるゝ娘の本意なさと、いとしい我が子を片時も、側に置かぬ親の慈悲。七珠萬寶多しと云へど、子に勝つたる寶もあるまじ。

常義　コレ〳〵、爰に最前殘し置かれし文箱と財布……イザ、改めて受取られよ。

〽受取り給へと差出せば。

景清　ヤ丶丶、さては盲目の心を察し、置いて行つたか………ムウ。して、文箱とは何やらん。御苦勞ながら其うちを。

常義　オ丶、心得た。ソレ文箱を。

ト此うち義村、文箱を明け、封じを開き見て

義村　ナニ、書置の事。

景清　ナニ丶、書置とは氣遣はしい。早う讀んで聞かして下され。

〽心そゞろに氣をいらつ。

義村　ナニ〳〵、荒磯の島人となり給ふ上に、兩眼盲ゐさせ給ふと聞き。

ト常義、取つて

常義　餘りに悲しさやる方なく、官を上げ御一生を安々暮らさせ申さん爲。

景清　その後は〳〵。

常義　我が身を手越の遊君に賣り代なしちて。

景清　ヤア丶丶。

〽聞いて悔り。

ヤアレ、その子は賣るまじ。左次太夫、娘やアい。船よなう〳〵。

〽返せ戻せと聲を上げ、心亂るゝ足弱車。

ト下手の岩臺へ探り登り

〽呼べど叫べど甲斐もなき、渚に群るゝ磯千鳥、〽なく音も共に聲枯れて、辿り廻れば抱き留め

ト此うち兩人よろしく景清を留めて

義村　サ丶、その歎きは尤もながら、はや元船へ乘り移り、アレ〳〵、沖の方に帆かけて走るは、慥かに娘御を乘せた船。

常義　オヽ、さう云ふ間に、帆影もかすかに霧隱れ。
義村　この文箱を娘御の、形見と思ひ
常義　諦らめさつしやれ。
兩人　景清どの。
〽云ひ聞かされて景清は、はつと平砂に伏し弱り。
景清　アヽ、斯程まで佛神の、三方に捨てられ奉り、亡びし平家の運命の、たまさか殘る景清にも、その積惡の報い來て、孝道立てる我が子まで、君傾城に身を落し、娘が身の油にて。
〽老の命を繋がんこと、我が子の體を喰ふも同然、恨めしの黄金やと、大地にかばと打ちつけて、見えぬ目玉の飛び出るばかり、身もだへすれば躓く文箱。
アヽ、涙の種のこの文箱、手に觸るさへむやくしい。
〽口惜しの形見やと、浪間に打込み泣き口說く。
ト件の文箱を前の浪間へ打込む。
〽斷りせめて哀れなり、始終を聞き居る里人も、共に淚にくれけるが。
常義　だん〳〵の心根、承つて察し入る。左程こなたが思はるゝ、娘御の身を賣つたるこの金。
義村　今宵の出船に屆けなば、今行く船も伊豫の宇和島、一時待たず同じ港へ着くは必定。賴もしき人を見立て、事の仔細を委しく語り。
常義　左次太夫とやら云ふ人に、慥かに渡し娘御の、苦界を助けて進ぜませう。
景清　ナニ、すりや今宵出船があると申さるゝか。
兩人　如何にも。
景清　チエ、忝ない。ちつとも早う、その金を。
兩人　オヽ、心得た。
〽情は人に荒磯の、濱邊をさして走り行く、景清あたりに氣をくばり、聞き手なければ聲を上げ、わつとばかりにむせびしが。
ト此うち兩人上手へ入る。
景清　アヽ、世にある人は皆深切、それに引替へ邪慳にも、はる〴〵尋ね來た娘、それと打明け云はれねば、叱り、り歸したを、さぞや恨んでゐやらうが、コリヤ、微塵さうした心ぢやない。譜代相恩の主ながら、入道どのの邪慳放逸、めぐり〳〵て平家の成行き、この景清に緣ある時は、其方も矢ッ張り一生埋れ木、それゆゑにこそ斯くの仕合せ。また左次太夫とやらが心ざし、如何なるゆかりの人なるか、長の波濤を介抱して、親子の對面さ

すのみか、娘が末の納まりまで、世話してくれるを悪口たらく〱。免して下され、コレ左次どの、堪えてくれよ、コレ娘。

〽前後も亂るゝ憂き思ひ、岩も碎ける荒汐の、風に誘ふぞ哀れなる。

ト景清、思ひ入れあつて泣き落す。

〽身も魂ひも弱り行く、その虚を付け込む四郎國俊、芦間かき分けのさばり出で。

トよき程に上手の蘆間を分け、國俊、窺ひ出る。後より濱七、磯七、水主の拵らへにて付き從ひ出る。

國俊　世にある人は皆深切、世界に鬼がないと云へど、世界に鬼がないとは云はれぬ。しかも眼前景清とて、娘の肉を賣つて喰ふは、取りも直さず餓鬼畜生、その苦しみを助けんと、はる〱尋ねて來た某、後とも云はず今爰で、この世の暇を取らしてくれん。忝ないと三拜なし、覺悟極めて、それへ直れ。

〽それへ直れと呼はれば。

景清　ハテ、心得ぬ、鎌倉どのゝ嚴命にて、流人となりし某を。

國俊　オヽ、どう盲目には解らぬ筈。名乘らず殺すも卑怯の至り。汝が爲に不覺を取りし、三保の谷四郎國俊。浪人なしてこの年月、歸參を願ふ折に幸ひ、この宮崎に乞食となつて居ると聞き、取るものも取りあへず、着岸なせしは外ならず、おのれが素ツ首ぶち落し、鎌倉へ歸參の手土產。觀念ひろげ。

〽覺悟ひろげと息まけば。

景清　ハヽヽ、盲目のその上に、飢に疲れし某が、腰拔け武士にはよい相手……サア來い國俊。

〽すつくと立つて身構へたり。

ト此うち蘆間より浪七、汐七、同じ拵らへにて出で、四人囁き合ふ。

國俊　それが世に云ふ引かれものゝ小唄とやら。イデ、舌の根を。

景清　なにを。

〽利き腕取つて引きつくる、四郎が脇腹早速の當て身、群りかゝる水主かんどり、右往左往に渡り合ふ、强氣の程こそ恐ろしゝ。

ト此うち國俊、引立てにかゝるを、手早く當てゝ杖を探り取り、二人を打ち返し、二人とちよつと立廻る。國俊、起き上がるを見得よく留め

景清　ヤア、荷擔人頼む卑怯者。やわからぬらが手に合はうや。
國俊　なにを。
ト四人も振りほどき立廻る。此うち國俊、景清の眉間へ切りつける。
〽さしもの景清たぢ〳〵〳〵、たぢろぐ弱身へ付け込む荷擔人。
ト景清、疵口を押へ、よろ〳〵として、浪七にあたり、直ぐに投げ返し　濱七、磯七、一度にかゝるを投げ退け、磯七を摑み殺す。これにて目玉飛び出る。國俊、また切りつけるを掻いくゞり、汐七を投げ退け、濱七と國俊を杖にて支へる。この時大ドロ〳〵になり、景清、皆々たぢ〳〵として悶絶する。
〽勢ひ込んで戰ふ折柄、俄に山川鳴動して、共に五體も立ちすくみ、滲ふ隙もあら不思議や　景清兩眼くわつと見開き。
ト此うち浪七、汐七、心附き、景清にかゝるを、ちよつと立廻つて、兩人を投げ退け、打つて來る國俊を杖にてキッと留め
景清　ハテ心得ぬ。

國俊　怪しやなア。
景清　五體惱亂なすと等しく、年頃盲ゐたる兩眼の、昔に返り明かなるは。
皆々　なにを。
ト兩人かゝるを、上下へ切り返す。ドロ〳〵になり、紫雲棚引く。景清、國俊、キッと見得。早めの合ひ方になり
國俊　すりや某が切りつけし、眉間の疵に毒氣去つて、盲目めの目が明いたか。
景清　さては最前我が娘、持ち來りし千年の靈像。念彼觀音の佛力なるか。アラ嬉しや喜ばしやなア。
ト景清、懷中より靈像を出て戴く。ドロ〳〵打上げ。
國俊　景清めが目明きとなつたら、油斷はならぬ。身共は此うち忠太どのへ……跡にて景清、討つて取れ。
皆々　心得ました。
〽四郎は逸足景清は、組みつく二人を事ともせず、遥かの沖をキッと見やり。
ト國俊、下手へ入る。此うち向う正面へ、帆かけし元船顯はれる。
景清　アレ〳〵、遥かの沖に見ゆる帆影は、慥かに娘を乘

せたる元船……最前出帆なしたれども、浪風荒く漂ふと覺えたり。斯くまで心を盡せし娘、左次太夫が深切も、此まゝに捨て置かば、浪に卷かれて破船は必定。……オオそれよ、かゝる利益を蒙むる上は、猶一心に祈念なし、あの船再びこの島へ、祈り戻さで置くべきか。

〽潮を結んで手水なし、諸肌押脱ぎ珠數押揉み。

ト此うち皆々かゝるを、立廻りながら、頭陀袋の中よりいらたかの珠數を出し、祈りのこなしよろしくあつて、岩臺へ上り、床と下座掛合ひの合ひ方。

抑々我が朝に靈神靈佛跡を垂れ、應護のなどかなからんや、正に利益を目前に、現はし給へ、たび給へ。

ト祈りの模樣よろしく

〽一に矜迦羅、二に制多迦、三に倶梨迦羅四天王、五大明王、六觀音。

七佛藥師は大龍王、東風吹く風を吹きとぢて、西方淨土の風を起し

〽浪路の擁護は飛龍權現、瀧本千手觀世音、不動明王のざつくの繩を船につけ、例へ萬里の蒼海たりとも、瞬くうちにこの岸へ、吹き返しつけ給へ。

奇妙頂禮々々々々々。

〽躍り上がり飛び上がり、肝膽碎いて祈りける。

トよろしく祈りの體。これへノットの鼓、浪の音のあしらひよろしく。

〽時に海鳴轟き起り、東風忽ち西風と、手の裏返す海の面。

ト浪の音ドロ〳〵のやうにして、此うち向う正面の元船、これまでいろ〳〵に搖れ動く事、風變りし體にてこの船吹き戻され

〽男浪女浪の逆卷き合ひ、船を搖り上げ搖り下ろし、元の渚へ。

ト船を引込む。此うち下座の方より誂へ元船を眞中へ押出し、花道の浪手摺り引込む。景清、沖を見やり、こなしあつて

諸佛も感應まし〳〵て、娘が命恙なく、戻らせ給ふか。チエヽ、忝ない。

ト尊像を岩臺へ載せ、禮拜の思ひ入れ。

〽天を拜し地を拜し、喜ぶ心ぞ道理なる。かゝる折柄番番の忠太、組子引連れ走せ來り。

トどん〳〵になり、以前の忠太、組子を從へ出てキッとなり

忠太　ヤア、死損ひの悪七兵衛、イケ邪魔なその観音。者ども早く巻き上げい。
皆々　心得ました。
ト皆々立寄り、尊像を取らんとする。景清、千鳥に入れ替り、此うち忠太、尊像を取上げ、景清と奪ひ合ふはずみ、忠太は尊像を船櫓の中へ投げ込む。
景清　南無三。
〽渡さじものと元船の、櫓の内へ。
ト岩臺を足代に船の内へ駈け入る。この時忠太、目くばせする。組子、牢格子の扉を立て、閂を下ろす。
皆々　サア〳〵、しめた〳〵。
忠太　オヽ、出かした〳〵。兼ねて斯く計らはんと、拵へ置きたる獄屋船、厨子を餌に、おのれと入つた升落し鼠に劣りしうろたへ者。よい態〳〵。
浪七　この上は直さま水主を呼び集め
濱七　御出帆の御用意が肝心。
忠太　オヽ、これより直ぐに千里一飛び、由井ケ濱邊へ引上げて、景清めは縛り首。ちつとも早く船出の支度。者ども、参れ。
皆々　ハア。

〽打連れかしこへ走り行く。
ト忠太、皆々を連れ、上の方へ入る。
〽折から番場の郎黨が、人丸圍み礒傳ひ。
ト浪の音、バタ〳〵になり、下座の鳴り物あしらひ、人丸、少し亂れたる拵らへ、片肌脱ぎ、褄端折り、船の阿迦柄杓を持ち、郎黨二人と立廻りながら出て來り
郎黨　吹き戻されし
兩人　女郎め、覺悟。
〽覺悟ひろげと押取巻く、人丸につこと打笑ひ。
人丸　父さんへ刃向ふ悪人ども、かよはき女の身ながらも、景清が娘の人丸、おのれら如きに、搦められうか。
兩人　さう云ふ、われを。
トこれより好みの鳴り物、あしらひ、立廻りよろしく、此うち上手より忠太、脱ぎかけにて出て、これを見やり
〽忠太は見やり聲をかけ。
忠太　ヤア、聞き及んだる景清が娘の人丸、流罪の親を尋ね來て、掟を破りし大罪人。身動きさせずと、引ツ縛れ。
ト帆綱を投げてやる。

兩人　ハア。

〽討取るよりは搦めんと、投げる帆綱を潜りぬけ、ちやつと飛びのく女の身輕。

ト綱にて繩かけんとする立廻り。人丸潜りぬけ立廻り。忠太も櫂を取り打つてかゝる。人丸、岩蔭を逃げ廻り、この綱敵役の足へからみ、人丸引ッ張る。敵役ころぶ事あり。

〽こりや手剛しと忠太が下知々々、からむ繩手のくるくる〳〵、くんずほぐれつ捕へるを、ひしやくのあしらひ浪の音、潮をざんぶり砂まぶれ。はんま千鳥や目なし鳥。持てあましたるその折柄。

ト人丸、柄杓にて潮や砂を浴せる立廻り。忠太、當てられる。

トばた〳〵にて國俊走り出て

國俊　さてこそ人丸、これにうせたか。

人丸　三保の谷さまか。

ト逃げんとする。

國俊　逃ぐるとて逃がさうや。流人を慕ひ來る者は、直ぐにその場で首ぶち落す。それを知りつゝ景淸に、逢ひに來りし娘の人丸、覺悟して、それへ直れ。

〽成敗せんと立ちかゝる。

人丸　サア、父上にも生別れ、世に住み甲斐のないこの身の上、死ぬる覺悟はしたれども、この濱で吹き戻されし事なれば、今一度父上の御顏を拜み、それを冥途へ思ひ出に

トあたりへ思ひ入れして

父上には何處にぞ。父上樣々々〳〵々々。

國俊　オヽ、その景淸めは虜になし、獄屋船にて鎌倉へ送り、由井ケ濱にて逆磔刑。この世で親に逢はすとも、三途の川に待ち合せ、手に手を取つて墮地獄へ、眞逆樣に連れ立ち失せう。

人丸　例へこの身は死するとも、今際の名殘りに只一目。

國俊　エヽ、めろ〳〵とその吠え面。ソレ、引据ゑろ。

郎黨　心得ました。人丸覺悟。

人丸　アレ。

ト身を踠く。國俊、太刀を拔き立ちかゝる。

〽云ふ間も待たず氷の刃、拔きかざして振り上げるを、父に一目と人丸は、身も揉みあせるを引据ゑて。

ト立廻りあつて

〽今ぞ最期と振り上ぐる、刀は忽ち折れ散つて。

ト浪の音をドロ〳〵のやうに打たせ、國俊、手元しびろゝこなし。太刀三つに折れて落ちる。郎黨は悶絶する。

國俊　ヤア、こりやどうだ。一度ならず二度三度、これも矢ツ張り觀音が、功力とやらで妨げするよな。何これしきに恐れんや。天下の罪人この上は、覺えの脇物。イデ搔き首にしてくれん。

ト右手差し拔いて取り直す、危ふき折から左次太夫。

ト國俊、鎧通しを拔き立ちかゝる。バタ〳〵にて左次太夫、拔刀。軍兵と立廻りながら出て追ひ込み、この中へ入り支へて

左次　ヤ、、人丸さまには、御無事であつたか。

人丸　左次太夫どのか。

國俊　さてこそ女郎の荷擔人よな。うぬ。

ト切つてかゝる。左次太夫支へ、人丸、岩蔭へ逃げて入る。兩人も立廻りながら入る。忠太、心附きし體にてよろぼひ出て

忠太　ヤア、その女郎を取逃がすな。人丸を逃がすな逃がすな。

トあたりへ思ひ入れ。バタ〳〵になり、船の中より船頭二人出て

船一　ヤア忠太さま、一大事でござります。

兩人　一大事でござります。

忠太　ナニ、一大事とは氣遣はしい。何事だ〳〵。

船一　獄屋の内にて景清めが

船二　慥かに牢を

兩人　破ると見えまする。

忠太　エ、、たわけ面め。念に念を入れたる普請、どうして破つて堪るものか。

ト此うち船の中にて物音する。

兩人　ヤア、さう云ふうちにも、アレ〳〵〳〵。

ト大バタ〳〵。忠太、こなしあつて

忠太　ヤア、萬歳らく〳〵。イデこの上は兼ねて用意の、濱手の人數を呼び集めい。

船一　心得ました。

ト竹法螺を吹く。向うより船頭七人、各々突棒刺叉なぞを持ち出て來り

船三　待ちかねました合圖の竹法螺。して

皆々　御用はな。

忠太　オ、、捕へ置いたる景清め、慥かに牢を破ると見え

る。八方へ手配り致せ。

皆々　心得ました。

ト一同、船を取卷く。ナガシ、バタ〱にて景清、脱ぎかけ、髪逆立ち、大童の形にて、件の船櫓を打ち破り、大門を構へ、船端にキツと見得。

忠太　ヤア、物な云はせて、討つて取れ。

皆々　心得ました。

トこれより大太鼓入りの鳴り物になり、景清、十二人を相手に花々しき立テあつて、皆々を追ひ込み、門を構へ、キツと見得。

〽窺ひ寄つて切り込む忠太、につこと笑つて景清が、大門にて受け支へ、打つともなしに手を下せば、五體は微塵と死んでけり。

トちよつと立廻つて忠太を打ち殺す。この時、揚幕にてドン〱の早太鼓、アリヤ〱の聲する。

景清　フム、さては國俊新手を入れ替へ、取圍むと覺えたり。ナニ小ざかしい。

〽あたりを睨んで突つ立つたり。

ト門を構へ、キツと見得。

〽折から後に聲高く。

トこの時上手へ朱塗りの金物打つたる御座船に、笹龍膽の幕を張りしを押出す事。内にて

重忠　ヤア〱、日向勾當はいづれにある。征夷大將軍源の頼朝。

ト橋がゝりにて

常義　土屋三郎常義。

義村　三浦之介義村。

重義　今改めて

三人　見參々々。

景清　何がなんと。

トかけりになり、御座船の幕を卷き上げ、重忠、金の風折烏帽子、狩衣、刺貫の形。郎黨一人、琵琶を抱へ出る。橋がゝりより常義、義村、痣丸を抱へ、人丸左次太夫を連れ、早足にて出る。双方よろしく住ふ。

景清　ヤヽ、頼朝と名乘り、武將の出立ちなしたるは。

重忠　秩父の庄司次郎重忠。

常義　里人となつて入込みしは、土屋三郎常義。

義村　三浦之介義村。それにつけても景清が、俄に兩眼明かなるは。

人丸　すりや父上には、御佛の御利益にて、兩眼開かせ給

ひしか。
左次　チエ、忝ない。
景清　汝が千辛萬苦にて、年月盲ゐたる兩眼も、昔に返るこの參會。
重忠　主君賴朝公、其許の武勇を深く惜しませ給ひ、和睦を結び歸參させんと、疾より御兩所姿をやつし、入込ませしゆゑに依り
義村　御邊に付き添ひ起伏し立居。
常義　日々の仔細を逐一に、鎌倉表へ知らせずと云ふ事なし。
重忠　然るところ、義を鐵石と鍛へし其許、一門の仇を報はん結構。とは云へ、君のお心を察し、某御裝束を申し受け、この地へ來りしその仔細は、盲人を幸ひ、我れ源の賴朝と名乘り、其許の刃にかゝり、一旦の恨みを晴らさせ、主君の望みも達せんと、夜を日に次いで參りしところ、はや梶原が郞黨、三保の谷と心を合せ、この重忠に不覺を取らせ、先へ廻つて騙し討にせん計略。斯くと悟つて息女を始め、左次太夫が急難を拂ひしは、改めて親子の對面させん爲。
景清　ハ、ツ、忝なし、さりながら、平家の緣を切り、乳母にくれたる人丸。親でない、子でござらぬ。
左次　その乳母とても、今はこの世にあらざれば、この左次太夫が拾ひ取り、源平和熟のその以前、云ひ號けあるさる方へ。
景清　フム、それを知つたる汝は慥かに。
重忠　ア、イヤ、氏も素性もなき土屋……イヤサ、土百姓とて神の御末。
人丸　そんなら乳母が噂に聞いた、其方は家臣の……サ、嫁づくとても今のこの身。
義村　媒はこの義村、その聟がねは。
郞一　それも源氏の譜代たる。
郞二　土屋の三郞。
兩人　常義どの。
重忠　よもや違背はあるまいがな。
常義　何がさて、かゝる優美の。
左次　ア、イヤ、云ふに云はれぬ敵味方。
人丸　すりや、云ひ號けのお方と云ふは。
景清　オ、、藁の上より云ひ號けの聟。イヤサ、その痣丸を聟引手に……エ、、勝手にしやれ。
ト この時後へ國俊、窺ひ出て

國俊　景清、覺悟。

〽只一討ちと切り込む刀を打ち落し、大手を廣げ、三保の谷が、首筋むづと引ッ摑み、これや兜の錏引、身を遁がれんと國俊が、武者振りつくを振り廻し、撻と打ちつけ乘りかゝり。

景清　ヘヽヽ、首の骨こそ強けれと、三つ子も知つた三保の谷が、錏をまッから景清が、腕の力、これを見よ。

〽一引き二引きぐう〳〵と、捻ぢ首にして捨てんけり。

トよろしく立廻つて、國俊の首を引き拔く。

重忠　ホヽウ、勇まし〳〵。この上は主君に代るこの重忠、いでや勝負を。

景清　イヽヤ、仁義に敵對ふ刃はなし。眼開けば又ぞろや、源家を恨みん事もあらん。

重忠　サア、例へ兩眼開くとも、浮世を暗く見破つて、勾當の官に上り、經政祕藏の青山の琵琶、賴朝公より下し賜はる……ソレ。

トこれにて郎黨、件の琵琶を渡す。

景清　アヽ、何から何まで。

重忠　アヽイヤ、それとても念彼觀音力。

左次　時節來らば紅の、旗を押し立て花々しく。

義村　また會稽の時津風。

常義　その時望むはおことの首級。

景清　首は餘人の手に渡さず、今の情に必らず手渡し。

重忠　流石義心の弓取り武士。

人丸　引かるゝ輪廻、親子のきづな。

重忠　また重ねての參會には。

景清　首を洗つて、お待ちやれ方々。

人左　先づそれまでは

景清　秩父重忠。

重忠　景清ならぬ

常義　日向勾當。

景清　方々。

皆々　さらば

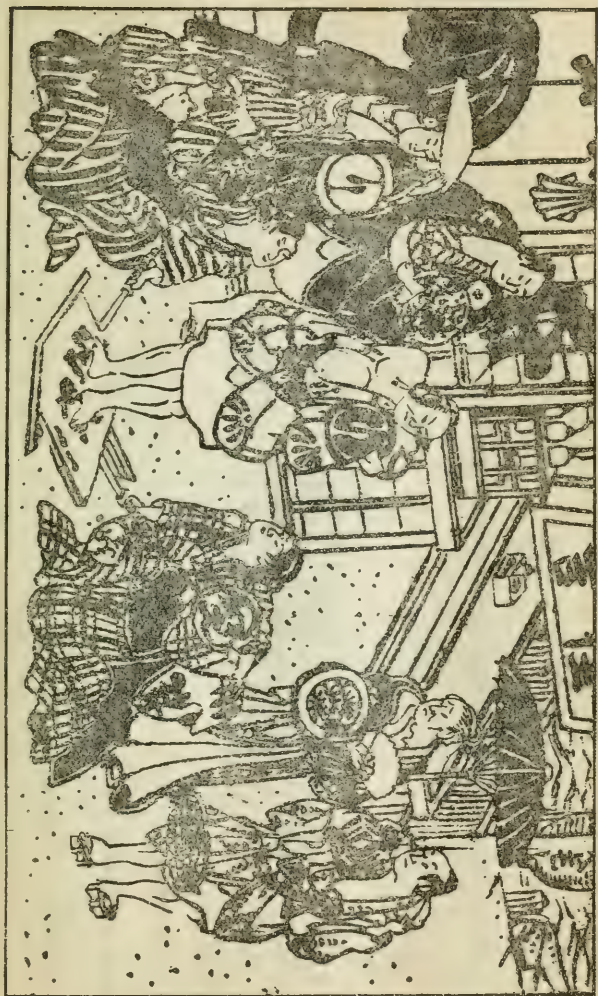
〽さらば〳〵と立ち別れ、二世をかためての言の葉は、敵と味方の親と子が、世の盛衰ぞ。

トこの時以前の濱七、浪七、ちよつとかゝるを立廻り、双方引ッ張りの見得よろしく、片シヤギリにて

月梅攝景清（終り）

吾妻に名たかき團七お梶
浪花に名たゝる一寸お辰

新造艫奇談

初演の櫓下番附

新造艛奇談

序幕

兩國並茶屋の場
柳橋川長の場

役名――藝者、團七縞のお梶。同、一寸縞のお辰。同妹、おてつ。仲買ひ、彌市。大島村の佐賀右衛門。但馬屋淸七。但馬屋番頭、傳八。飾磨大九郎。京橙の才六。遊び人、木片の權次。同、生の八五郎。女中、お松。茶屋女、おわさ。手代、喜八。男達、もつれ髮の德兵衛。上州館林の團七茂兵衛。

本舞臺、上へ寄せて、二間葭簀張りの出茶屋、軒に團子提灯を掛け、眞中に住吉と記せし行燈、長床几を並べ、側に千部開帳札を立て、下手、軒並びに鈥菊の障子、長の字の長暖簾を掛けたる髮結床、この隣、花菖蒲の障子を建て切り、並び床、すべて兩國橋詰めの模樣、爰に役者は、勘平、五十日かづら、どてらの拵らへ、これを浴衣形の權次、八五郎、引き附けて居る。水茶屋女と仲間、これを止めて居る。辻打ちにて幕明く。

仲間　マア〳〵料簡しなせえ。
權次　エヽ、こんた衆の知つた事ぢやねえ。
八五　この野郎め、筋骨を拔かにやアならねえ。
權次　やツつけろ〳〵。

トくらはす。

仲間　これサ、あやまつてゐるものを、もう堪忍しねえ。
役者　どうぞ御料簡なされて下さりませ。
權次　コレサ、こんた衆は、譯を知るめえが、この野郎め、おらが方へ寄席をうけてえと云ふから、口をきいて席亭へ引き合せ
八五　手金を貸してやつたら、來月行くの、月末にしてくれのと、馬鹿にしやアがる。
權次　おれも、木片の權次だ。
八五　存分にしにやアならねえ。
役者　ア、コレ〳〵、この身の云ひ譯を、マア、お聞きなされて下さりませ。

權次　エヽ、うしやアがれ〳〵。
茶女　この人が惡いとは云ひながら役者だから、堪忍しなせえ〳〵。
仲間　ト止める。向うより佐賀右衞門、近在鰻荷主の拵らへ傳八、小道具屋手代の拵らへにて出て、舞臺へ來り
佐賀　オヽ、お主はなまの八。
傳八　木片の權ぢやねえか。
權次　ヤア、お前は親方。
八五　番頭さん。
仲間　モシ、挨拶してやつて下さりませ。
佐賀　マヽ、手荒くするな。こりやアおでゝこの役者ぢやねえか。
傳八　見つともねえ、料簡してやらつせえ〳〵。
　ト茶屋の娘、茶を酌んで出す。
佐賀　錢金の事だらう。ちつとの事なら出してやらう。堪忍してやらつせえ。
八五　お前に御厄介を掛けちやア、お氣の毒でござりますなア。
權次　併し、千住の親方の聲がゝりだ。譯をてめえ云へ。
八五　お聞きなせえ。この勘平をして居る役者が頭取で、わしらが方へ寄席をかけましたから、手附けを一兩借りてやりました。それツきり面出しもしませんからのこの始末。
佐賀　そりやア權次が惡い。物の間違ひと云ふ事もあるから、
傳八　又、こんたもそれツきりにして置いたが惡い。
役者　イエ、夜前、八五郎さまにお目にかゝり、別れて歸る暗まぎれ。
仲間　これサ、そんな馬鹿を云はずに、あの旦那に禮を云つて、早く行かつせえ。
佐賀　サ、一兩ある。受取つて置きやれ。
　ト權次に渡す。
仲間　サア〳〵、お前も、お禮を申して行きねえ。
權次　待て〳〵。濟んだはこちとらだ、寄席へじやらくら云つて、一兩借り込み、融通をして居たと思はれるのが外聞が惡い。
八五　こつとらの面晴れにするには
權次　その鬘と、なんぞ持ち道具でも寄越せ。
役者　それぢやア、明日から商賣が。
權次　べら坊め、晩までに返したらいゝだらう。

仲間　成る程、野暮な事もしまい。預けてやるがいゝぢやねえか。

役者　そんなら、今夜、お前の所へ取りに行きますよ。

ト五十日鬘と、連判狀を權次に渡す。

佐賀　オヽ、四十七士の連判だな。一兩の抵當に、飛んだ物を預かるやつよ。

役者　これはお前さん、有り難うござりました。お前方も大きに。

仲間　ドレ、お茶でも上がらうか。

ト床几へかける。茶店女、茶を酌んで出す。役者は、上手へ入る。

權次　親方には、時々御厄介になります。

八五　先頃、千住へ行つたから、お禮ながらお尋ね申しましたが、お内が知れましなんだ。

佐賀　べら坊め、宿中を探したといつて分るものか。

傳八　親方の内は、花又村といふ所で

佐賀　大鳥の社の東に見える、大きな長家門のある内だ。表に鰻籠が積んであるから直に知れるわな。

傳八　西浦の鰻を一手に引受けて、江戸へ積み出す大鳥の佐賀右衞門さんを知らぬ者があるものか。

仲間　エヽ、お前さんが、大鳥の佐賀右衞門さんでござりましたか。よい所でお目にかゝりました。

佐賀　ハア、お前はどこの。

ト仲間、狀を出し。

仲間　私しは飾磨大九郎の家來でござりますが、あなたがこの柳橋の富本へ來てござらうから、この狀をお手渡し致せと云ひつかりましたが、まだお出でがないとの事ゆゑ。

佐賀　これは御苦勞。

ト封を切り

ナニ〳〵「先達て送り越され候ふ千壽院の短刀、我れらが刀に仕込み、帶し居り候ふ、まつた、その節預け置き候ふ浮牡丹の香爐、賣り口の儀を、但馬屋九右衞門に頼み候ふ由、承知いたし候へども、今以て御沙汰なく、急々に埒明け候ふやう賴み入り候ふ、佐賀右衞門どのへ、大九郎」

仲間　もしや、疾に賣り拂ひ、金子を其許さまが、横取りにでも致したかと、お旦那は疑ひ深い人ゆゑ、云ひ暮らして居られまする。

佐賀　そんな事をする佐賀右衞門ぢやござりませぬ。慥か

な證據は、この仁が中に立つて居られまする。

傳八　私しは、但馬屋と申す中通りの小道具店の手代、傳八と申す者。今度養子の淸七を自滅させ、跡目を相續せうといふ九平次に預けてござれば、お氣遣ひはござりませぬ。併し根が暗い代物、仲間で穩便に金にする事ゆゑ、ちと手間が取れると申し上げて下さい。

佐賀　これは、大事の手紙だから、落してはならぬ。大九郎さまへ戻して下せえ。

ト仲間に渡す。

仲間　畏まりました。左樣なら、お暇いたしませう。

ト足早に、橋がゝりへ入る。

佐賀　大べら坊に、よく云つて下せえ。

權次　モシ、番頭さん、飛んだ引合ひに出るものだねえ。

八五　流石は傳八さんだ。合せ鏡の程のよさ。

傳八　それはさうと、あの香爐はまだ捌けぬかな。

佐賀　有やうは、九平次を頼み、百兩の質に置いて、おれと二人で遣つたが、それも、お主の手引きで、仲買の彌市が娘のおてつを圍はうと、彌市に渡したところが、四の五の吐かして埒の明かぬ詮議ぢやわえ。

傳八　それといふも、あのおてつには、惡蟲があるに依つて。

佐賀　ナニ、そんなら、手入らずではねえのか。

傳八　さればサ、おらが内の息子は、もと管領の家の家老、助松主計が悴で、浮牡丹の香爐を紛失させた科で、家出したを、おらが主人が引取り、養子にして淸七と名を替へ、内のお仲と娶合はす積りだが、あのおてつに懇ろにして居るとの事ゆゑ、科を着せて内を追ひ出し、甥御の九平次どのは、石町の醫者、團七のお梶に惚れて居るゆゑ、これを科に追ひ出し、娘のお仲の聟になつて、但馬屋の跡式を引受け、おてつは金でころばし、お前の望みを叶へさせまする。

八五　さう巧くゆけばよいがな。

佐賀　さうべん〳〵と待つて居るべら坊があるものか。今日は是非とも彌市に逢つて、片を附けにやア措かねえ。それにしても九平次に逢つて、相談しにやならねえ事があるが。

傳八　丁度幸ひ、今度祭にお梶が出る衣裳につき、川長へ呼ぶ積りゆゑ、後に行けば逢はれます。

佐賀　そいつは奇妙。併し、只も待つては居られめえ。草加屋の二階へ行つて

權次　涼みながら一杯とは、氣が惡い。
傳八　こんた衆にも頼む事があるから。
八五　そんなら出かけませう。
權八　そんなら親方。
佐賀　サア、みんな來さつせえ。
ト皆々、上手へ入る。向うよりお辰、藝者の拵らへ、後より船頭、火繩箱を提げ、少し後より女郎屋の手代喜八出て來り
喜八　モシ〳〵、彌市さんの娘御、お辰さん。
たつ　ハイ、お前さんは。
船頭　慥か、吉原の近江屋の番頭さんでござりましたね。
喜八　左樣でござります。この度はひよんな事で、二三日以前から、お父さんと御一緒に、妹御のおてつさんを探して居りまするが、最前どこではぐれましたか。
たつ　父さんの居所が知れませぬかいなア。なんにせい、わたしも、今湯から上がつたばかりゆゑ。
船頭　マア、あそこの茶店へお出でなせえ。
喜八　そんなら御一緒に。
たつ　サア、ござんせいなア。
ト舞臺へ來る。

茶女　只今お歸りでござりましたか。
ト茶を出す。
たつ　大急ぎで入つて來ましたわいなア。
船頭　それはさうとお辰さん、おてつさんの在所が、早く知れゝばようござりますにねえ。
喜八　元々、私しが彌市さんに、御懇意で抱へました奉公人ゆゑ、主人へ申し譯がござりませぬ。
たつ　ほんにマア、お氣の毒な。わたしも先から先へ借り越しになり、身の儘にならず、義理ある妹に勤め奉公さすは、身を切らるゝより辛けれど、父さんの身に據ろない難儀が出來て、妹を苦界に沈めたと、後での話。間もなう、あの子の行くへが知れぬと聞いて、身も世もあらばこそ、座敷を勤めて居る空はござんせぬわいなア。
船頭　成る程、やる瀨があるめえ。併し、藝者も澤山にあれど、一寸でも隙のねえはお辰さんばかり。
喜八　それで異名も一寸のお辰と、吉原での評判でござります。
たつ　そりや人違ひでござりますわいなア。それはさうと父さんは、どこへ行かしやんした事やら。
ト髮結ひ床の內にて

彌市　お辰〳〵。

たつ　アイ……わたしを呼ばしやんしたは、どこでござんす。

彌市　オヽ、どこからでもない、床からぢや。
　　ト出る。

喜船　ヤア、お前は仲買ひの彌市どの。

たつ　最前からござんしたら、早う逢うて上げなさんすればよいに。

彌市　べら坊め、今し方も、おてつを世話にせうと、おれに五十兩貸した佐賀右衞門めが尋ねてけつかつた。なんでもおてつを尋ねて、この人に渡し、その上で金が五十兩なけりやア、大手を振つて歩く事はならねえ。

たつ　その佐賀右衞門とやらは、妹を吉原へ賣つた金で、濟んだではござんせぬかえ。

彌市　馬鹿を云へ。借金乞ひが取卷いたゆゑ、元のちやんころなしだ。妹が事で、親は駈けずり廻つて居るに、同朋町の親方の所へ行きやア、自分用で龜井戸とやらへ行つたとの事。てめえもいゝ氣な者だなア。

たつ　なんのマア、義理ある妹の行くへ、人に頼んでも思ふやうにもならぬゆゑ、龜井戸の巫女さんの所へ、口寄せに行つて、今戻つて來たのぢやが、まだ十日ばかりも、表向きへは出まいとの事。

彌市　ナニ、巫女なぞの云ふ事が當つてなるものか。それにしても德兵衞め、まだ面出しもせぬ。あんな奴を聟だと思ふと、癪にさはつてなるものぢやねえ。

たつ　なんのマア、主も尋ねてござんすが、年番町へ祭の請負ひに頼まれ、一時の隙もなし、殊に表向き、わたしと夫婦ぢやというては、わたしが座敷を勤め悪からうとの氣遣ひ。

彌市　われが好んで亭主にしたから、勝手にするがいゝが、末始終、氣の毒なもんだ。

たつ　お前、さう云はれた義理ぢやあるまいがな。

彌市　なぜ〳〵。

喜八　アヽコレ、親子喧嘩より、おてつのせいらくが肝心だ。百兩と値踏みをし、琴浦とまで名を附けて、店へ出さうといふ晩の駈落ち。今晩中に捜し當てにや、元金を持つて行かにやならねえ。

彌市　それでは、なんでも玉を突き當てにや。
　　ト上手へ權次、八五郎出かけ居て

權次　オイ父さん、娘の居所は、大概それと嗅ぎつけた。

八五　おいら達が行つて、蟲が所へいしかつて、筋道を立てゝ來ようか。

たつ　誰れかと思へば、八さんに權次さん、蟲が所とは、どこでござんすえ。

權次　知れた事、中通りの小道具屋。

八五　あの淸七に間違ひツこはねえ。

權次　木片や、來や。

ト行きにかゝるを

たつ　待たしやんせ。淸七さんを初め、但馬屋の御一家には、別して御贔屓になるわたし。モシ、わたしに預けて下さんせいなア。

八五　なんだ、預けろ。一寸縞のお辰の、團七縞のお梶のと云つても、無駄な詮議だ。

權九　もつれ髮の德兵衞を、亭主に持つても、藝者商賣、お主達の指圖は受けぬ。

たつ　イ、エ、お前方をやつては、わたしが立たぬわいなア。

喜八　お前方も、お辰さんが止めなさるから。

八權　エ、、うぬらの知つた事ぢやねえわえ。

ト行きにかゝる。お辰、喜八、船頭、止める。向うより、德兵衞、男達の拵らへにて出て、舞臺へ來り、權次、八五郎の手をチツと取る。

權八　アイタ、、、どうするのだ〱。

たつ　オ、、お前は德兵衞さん、よい所へ來て下さんしたなア。

德兵　ト德兵衞、手を放し
女の癖に、皆さんを捕へて、どうしたものだ。

權次　ヤア、お主は、このお辰の亭主の、もつれ髮の德兵衞だな。

八五　男を磨くやうにもねえ、出しぬけに、なぜ手を捻ぢ上げたのだえ。

德兵　これはしたり、人立ち多いこの兩國、女を捕へて大人氣ないと、こんた衆の外聞を思つて、取裁に入つたのよ。

權次　ムウ、サア、さう云ふと譯が解る。

八五　併し、ピリ〱すらア。

彌市　イヤ、德兵衞、剛氣なものだな。

德兵　ヤ、親仁さん、爰にお出でなされましたか。

彌市　根が侍ひだけ、人を痛める事は知つてゐるが、親が苦勞して居る妹の在所、知れたかと尋ねもしねえ。違つ

たものだなア。

德兵　その云ひ譯に後を追つて來ました。先頃話した通り年番町に賴まれ、一時の隙もなし。今日はせり揃ひになりましたゆゑ、世話燒衆に連れられて、爰の草加屋へ參りましたから、おてつの事をお前に聞かうと思つて。

彌市　今日まで手掛りもねえゆゑ、思案を定めにやアならねえ。

喜八　エヽ、お初にお目にかゝりました。私しは吉原の、近江屋の手代でござります。

德兵　左樣でござりましたか。この度は、ひよんな事で、思ひがけない御苦勞をかけました。

喜八　イヤ、惜しい奉公人でござりますが、もう元々へは納まりませぬから、是非、元金を立てさつしやらずばなりますまい。

たつ　その元金も、父さんの手に殘りもないとの事。

德兵　親仁樣、なんぞ工風がござりますか。

彌市　外に當はねえから、氣の毒だが姉を……イヤサ、あれの元金の所へは、あれの內の諸道具と、お主の內の家財屋財を、叩き賣るより仕方がねえ。

八五　二軒の內を賣つたつても、いくらになるものか。

喜八　モシ、そんな不手勝手な事を云はしつちやア。五十兩といふ金でも、段々の譯を云つて口說いたなら、また融通のならぬ事もござりますまい。此やうな事は、御昵懇になつて御相談いたさねば纏らぬもの。其うち、どこぞからおてつが在所が知れて參るまいでもござりませぬ。

德兵　マア〳〵、ようござります。

喜船　大きに左樣でござります。

たつ　父さんの心安うする人は、みんなあのやうな……粹なお方々ぢやわいなア。

德兵　其やうな事を……アハヽヽヽ、兎角、藝者稼業なぞをする者は、御近所の若い衆は元より、犬ころにまで憎まれてはならぬものだ。近江屋のお手代も、御時分でもあらうし、親仁樣も鬱散の爲、この衆と打ち交つて、川長で一つ上げようではないか。

たつ　それぢやというて、あの。

德兵　ハテ、おれに任せて置きやれな。

彌市　久し振りで川長のお料理でも、御馳走にならうか。

八五　こちとらは、居酒屋に立つ御人體だ。

德兵　ハテ、斟酌せずと。

喜船　お詞に從ひませう。

たつ　そんなら、どうでも。
德兵　サア、ござらつしやりませ。
　ト嫌がるお辰を目交ぜにてなだめ、皆々橋がゝりへ入る。向うより才六、大形の着附け、一本差し、柾の下駄にて、後より茂兵衞、着流し、一本差しにて出て來り
才六　田舍でこそあれ、お前も上州では團七の茂兵衞と、二つ名のある男だが、江戸ぢやアわしを知らん奴は、マア、恥のやうに云ふゆゑ、連れ立つて歩きやア、怖い事はごんせん。吉原は愚か、芝居町なぞへ足を踏ん込んだ日には、みな土下座ぢや。わしが上方から下つて來て、江戸の振合ひがさつぱりと直つたわいの。
茂兵　成る程、上州までも聞えた京檀の才六どの、久しう江戸へ出ぬうちに、いろ〳〵と振合ひが變りましたなう。
才六　何は兎もあれ、向うの茶店で、澁茶を飲んで行かうかい。
茂兵　それがようござりませう。
　ト兩人舞臺へ來り
才六　サア、爰へかけやんせ。爰は馴染の內でごんす。どうだ、變る事もないかの。
　トおわさ、氣味の惡きこなしにて
茶女　ハイ。
才六　エヽ、不器用な、おれを知らぬか。
茶女　ハイ、存じませぬ。
才六　イヤ、此奴物覺えの惡い。ソレ、この春、道具屋の淸七さんと、二丁目へ八犬傳の狂言を見に行つた戾りに。
茶女　ほんに、あの時、傘をお貸し申しましたが、今以てお返しなされませぬ。
　ト茶を酌んで、持つて來る。
才六　エヽ、思ひ出さずともいゝ事を　…それはさうと、今度出府さんしたは。
茂兵　今度、金看板の勘五郎どんが、剃髮して孫に酒屋店を出さすとあるゆゑ、關八州の道樂者が、金の小千兩も持ち寄つて、賴母子をする積り。それゆゑ、ちくとんべい、金を拵らへて、子分どもの曠れに持つて來た譯サ。
才六　成る程、小千兩の無盡とは、滅相な花ぢやなア。こちらも大阪にちつと辛抱して居たら、よい男になつたであらうに。

茂兵　なんでも、男は辛抱が肝心。併し、この暑いのばかりは辛抱がならぬ。
茶女　奥がお涼しうござります。
才六　サア、爰が男の辛抱ぢやわいの。
茂兵　負け惜しみも大概がよい。ハヽヽヽ。
茶女　サア、入らつしやりませ。
ト莨盆を持ち、茂兵衛、才六を案内して、奥へ入る。上手より駕籠屋、四つ手駕籠を舁いて出て來り
駕一　待て〳〵。住吉といふ茶屋は爰だ。
駕二　オヽ、さうだ……ヘイ、お約束まで參りました。
ト駒下駄を直す。奥よりおわさ出て
茶女　よう入らつしやりました。
ト垂れを上げ、おてつ出る。
駕一　棒組、川へ行つて手拭を洗ひ出して來よう。
駕二　有り難え。誂らへたやうだ。
ト駕籠舁き、上手へ入る。
てつ　モシ女中さん、爰のお店へ、磯之丞さんといふお方は、來てゞはござんせぬかいなア。
茶女　イヱ、左樣なお方は。
ト茶を酌んで出す。
てつ　住吉といふ茶屋は、この川岸通りに一軒ぢや程に、つい知れると云はしやんしたが、こりや、なんとしたらよからうぞいなア。
ト下手の髮結ひ床より、清七、町人の拵らへにて出て來り
清七　おてつ、爰に居るわいなう。
てつ　オヽ、お前は磯之丞さん、逢ひたかつた〳〵わいなア。
茶女　そんなら、清七さんの事でござりますかえ。
清七　わしも、わが身に逢ひたかつたわいなう。
てつ　以前のお名を云うて尋ねたは、わたしが惡うござんした。それにしても、なぜ爰の店に待つて居ては下さんせぬ。
清七　最前來て、爰で待ち合はせて居た所へ、彌市どのや、吉原の手代が、其方を尋ねて歩く樣子。また、生や木片が、おてつを引き廻したは、清七に違ひないなんのと云ふを聞いたゆゑ、そつと爰の床下を潜つて、禿床の衝立の蔭に、息を詰めて居たわいなう。
てつ　さうとは知らず、實のないお人ぢやと、恨んだわいなア。

清七　いま日盛りゆゑ、差合ひな人は來まい程に……おわさどの、ちよつと。

ト囁く。

茶女　畏まりました。

ト奥へ入る。

清七　今日は祭りの勢揃ひで、町内の衆が寄合ひがてら、爰の草加屋へ來てぢやゆゑ、さうして、わが身はようマア、吉原を駈落ちしやつたなう。

てつ　サア、大鳥村の佐賀右衛門づらが、わたしを世話にせうと、父さんに金を貸し、それを種にせがみ立て、明日は店へ出すとの事。肌身を穢しては、お前に濟まぬゆゑ、やう〳〵忍び出て、駕籠を頼んで三婦佐橋の、釣船さんの內へ行たれど、內儀に遠慮と脇へ匿まうてもらひ、お前に知らさうと、文を上げたのぢやわいなア。

清七　サア、吉原を駈落ちしたと聞き、夜の目も合はず案じて居た所へ、昨夜の文、あのやうな嬉しい事はなかつたわいなう。

てつ　シタガお前は、お仲さんと、祝言をなさんすでござんせうなア。

清七　氣遣ひしやんな、義理のある九郎右衛門どのは過ぎ行かれ、邪慳の母が仲を裂くのが勿怪の幸ひ。それといふも、店の九平次は母者人の甥、それを跡目に立て、わしを追ひ出し、お仲と娶合はせる下心ぢやわいなう。

てつ　可哀さうなはお仲さん、併し、わたしには、勿怪の幸ひぢやわいなア。

清七　それはさうと、ウカ〳〵して居て、人目にかゝつてはならぬ……ムウ。幸ひ草加屋へ行て、わしが後から行く程に、人の目づまにかゝらぬ座敷へ入れてくれといふて、待つてゐてたも。

てつ　そんなら、直ぐに來て下さんせ。

ト駕籠舁き、出て來り

駕舁　そんなら、草加屋へお送り申すのでござりますか。

てつ　御苦勞ながら。

ト駕籠に乘り

必らず早う。

清七　承知ぢやわいの。

ト垂れを下ろし、駕籠は橋がゝりへ入る。

ソレ〳〵、風で駕籠の垂れをあふる。押へてやつて下され。

ト傳八、佐賀右衛門、ほろ醉ひにて出て來り、傳八、

佐賀右衛門に囁く。佐賀右衛門、紙入れを傳八に渡す。傳八、小隱れする。佐賀右衛門、拔き足にて行きかける。淸七、上手を振り向く途端に行き當り

佐賀　アイタヽヽ。

淸七　アイタヽヽ、オヽ、これは麁相を致しました。御料簡なされませ。

佐賀　この明盲目め、この廣い往來に待ち合はして居て、突き當るのは、アヽ、こりや晝稼ぎだな。

淸七　アヽ、モシ、決して左樣な。ト懷中を探し

佐賀　サア、ねえ〳〵。サア、出しやアがれ〳〵。

淸七　出せとは、なんの事でござります。

佐賀　しらを切るな。いま突き當つた時、盜んだ紙入れを。

淸七　滅相な。どうして人樣の物を。

佐賀　さては、相摺りにこかしたな。サア、どこへこかした。云はにや、斯うして。ト打ち据ゑ、蹴返す。傳八、出て來り

傳八　ヤイ〳〵、こりや若旦那を、なんとするのだ。

佐賀　ナニ、若旦那。

傳八　この人の親は、おらが仲間。云はゞその手下を、なんとするのだ。

佐賀　頭だの、手下だのと、さては、うぬらは大泥坊だな。

淸七　コレ〳〵傳八、この人から行き當り。

傳八　サヽ、よろしうござります……サア、これからは、おれが相手だ。例へ晝鳶にしろ、何も取らにや、云ひ分はあるめえがな。

佐賀　知れた事だワ。おれが紙入れを取つたから、取つたと云ふのだワ。

傳八　ハヽヽヽ、云はせて置けば出放題な……若旦那、ちよつと爰へ。

淸七　おりや口惜しい〳〵、口惜しいわいなう。

傳八　よろしうござります。御無念は晴らして上げます……お前さん、本當に紙入れを、お取りなされましたか。

淸七　エヽ、モヽ、わが身までが其やうな事。何が不足で盜み騙りをせうぞいの。

傳八　イエ、全く不足ではなされねど、若いうちと申すものは、女子の買ひたい物があれば、買つてやりたく、ツイ、人の紙入れなぞへ、手をかける事もあるもの、マア、

あなたの御懐中物をお出しなさい。彼奴に見せて、外にあるか改めて見ろと、サア、それからわたしが只は置きませぬ。
清七　サ、よく見せてやりやいなう。
　ト懐中より紙入れを出す。
傳八　オヤ、こりや、いつ拵らへなされました。
清七　一昨日丸利から出來て來て、今日初めて持つたのぢやわいなう。
傳八　これはよく仕立てましたなア。
　ト佐賀右衛門に取れと、後へ出す。佐賀右衛門、懐中する。傳八、以前の紙入れを持つて
この裂れは珍らしい。
清七　コレ〳〵、その中には、人に見せてはならぬ大事な物が入つて居る。
傳八　ナニ、明けはせぬ……サ、これは、おらが若旦那のお紙入れだ。側へ寄らずにとつくりと見ろ。
佐賀　ハ、、、盗人たけ〴〵しいと、この相摺りめ、そんなけじめを喰ふものかえ。
　ト清七、フト傳八の持ちし紙入れを見て
清七　ヤ、、こりやわしの紙入れに似ても似附かぬ、いつの間に。
傳八　あなた、丸利でお拵らへなされたのでござりませう。
清七　なんのマア、其やうなむさい物を。
佐賀　寄越しやァがれ……さては、取りは取つたが、重味を引いて返しさへすりや、五分と五分だといふのだな。只の者なら料簡もしやうが、おりやならねえ。マア、相摺りから。
　ト傳八を打たうとする。
傳八　ア、、コレ〳〵、實にわたしは知らぬ事。
佐賀　いよ〳〵相摺りでなくば、あの野郎を叩きのめせ。
傳八　のめすとも〳〵。例へ主人にもしろ、この正直者まで同類にせうとした野良息子。この身の面晴れ、この泥坊若旦那め。
　ト縫くるみにて清七を打ち据ゑる。
清七　これはしたり、わが身までが其やうに……アレ、誰れぞ來て下されいなう。
　ト奥より才六、走り出て
才六　待て〳〵、一番待つてもらはうかい。
佐賀　なんだ、此奴、われも巾着切りの肩を持つのか。

傳八　すッ込んで居さつせえ。
才六　事がなあれと待つて居た、おりや京檀の才六とい
ふ、當時巾がきく男達ぢやい……いま仕返しはして進ぜ
ます。
清七　すりや、最前からの樣子を。
才六　ハテ、呑み込んで居るわいの……サア、二人のおさ
ん達、橋詰めまで出てもらはうかい。
傳八　爰は兩國の橋詰めだ。
佐賀　これより出ると、川へ落ちるわえ。
才六　オヽ、落ちぬ先に、斯うするのぢや。
ト　だしぬけに、傳八の足をすくひ倒す。佐賀右衞門、
才六の胸倉を締める。傳八、起き上がつて腕を捻ぢ
る。
オヽ、イタヽヽヽ、腕が折れる。咽喉がしまる。早まるな
早まるな。
ト　茂兵衞、出かゝり居て、傳八を投げ退け、佐賀右衞
門を捻ぢ上げる。
清七　ヤヽ、こなさんは。
才六　團七の茂兵衞さま。
茂兵　オヽ、誰れでもねえ、おれだ……とは云ふものゝ、

この江戸に知る人もねえ盲目蛇、今が時候とのたり出
て、命も意地に稻妻の、劍の舞ひもいとひはせぬ。いは
ば田舍の意氣すぎ者、所を一番意見して、いの字と納め
いさくさの、挨拶には出たものゝ、聞入れなくば忽ちに、
刀の意地を館林、その名は團七茂兵衞と云ふ、正札附き
の喧嘩買ひ。マア、さう思つてもらはうか。
才六　さうとも〳〵、强い奴には突ッかゝり、弱い奴は除
けて通すが男達の魂ひ。サア、これからは千人力だぞ。
清七　そんなら、お前樣が、國阪村の重次どのゝ親方、團
七茂兵衞さまでござりましたか。
才六　サア、おれは踏み倒された。料簡ならねえ〳〵。
茂兵　これはしたり、男が人に踏まれたというては立た
ぬ。生きては居られぬぞや。
才六　エヽ。
茂兵　江戸へ出て、こなさんの内の厄介になる茂兵衞、人
に踏まれてはわしが男が立たぬが、いよ〳〵踏まれたに
違ひはなかい。
才六　サア。
茂兵　こなさん達、この才六どのを踏んだ覺えがあるか。
佐傳　サア、それは。

茂兵　モシ、お若いの、こなさん見てござつたか。
清七　ハイ、才六どのとやらより、先に私しが。
茂兵　踏まれさつしやつたか。
清七　慥か左樣でござります。
茂兵　踏まれたれば、才六、生きては居られぬぞよ。
皆々　エ、。
茂兵　人の難儀を見兼ねて、仕返しに出て、踏み倒されて男が立つか。こりや死ぬより外の思案はねえ。骨はおれが拾つてやる。その代り、相手が何十人あらうとも、一人殘らず一分試しだ。覺悟しやがれ。
佐賀　ア、、萬歳樂々々々、誰れもお前は踏みはせぬわな。
傳八　コレ〳〵才六さま、お前は男達ではないか。誰れがお前を踏む者があらうぞ。
才六　ムウ〳〵、踏んだのではない。わいらの足の下へ、おれがむぐり込んだのぢや。
茂兵　オ、、踏んだのでさへなくば、死ぬにも及ばぬ。
佐賀　一體、根が正直ゆゑ、こんな間違ひが出來るといふもの。併し、これでも江戸ぢや、ちつとやそつと、人に知られた大兄いだ。云ひ分があるなら千住へ尋ねて來やれサ。
傳八　オ、、云ひ分がある。例へ內の息子どのが、少々晴い事があるとても、よく、あれまでを盗人にしやがつたな。取つたか取らぬか、この町の庄屋で糺してもらはう。
佐越　面白え。
傳八　サア、歩め〳〵。
　ト花道へ行きかける。
茂兵　ア、、コレ、大兄いとやら、待つてもらひたい。
傳八　でも、出る所へ連れて行つて。
茂兵　成る程、こんたも腹の立つのは尤もだ。併し、茂兵衛には、腑に落ちぬ所がある。歸らつせえな。
　ト兩人、ツカ〳〵と戻り
佐賀　サア、歸つたが
佐傳　なんの用だ。
茂兵　イヤ、おりや、惡い事をする奴が嫌ひ、いゝ事をする人が誠に賴もしく、その上、十重、二十重に仕切りがあるとも、十町先の蟻の這ふのまでが、見え透くといふ目の性だ。
佐賀　ア、、羨やましい。

茂兵　耳は又、一里先の蟲けらの內證話しも聞えるといふ地獄耳だ。
傳八　いゝ生れ附きだねえ。
茂兵　サア、それだに依つて、先刻番頭の手品も、樂屋から見て置いた。元々へ戻して行きやれ。
兩人　エヽ。
茂兵　サア〳〵、出したり〳〵。
佐賀　成る程、この紙入れは、仔細あつて卷き上げたのだが、返したら云ひ分はあるめえ。
茂兵　オヽ、返しても出させにや措かぬ。どの道二人は、この場を去らず、殺さにや料簡せぬ。
佐傳　エヽ、アノ返しても。
茂兵　シタガ、それ程にする事もねえ。才六、二人をぶちのめしてくれ。
兩人　エヽ。
茂兵　ハテ、おれが名代を勤める事は、ならぬと云ふのか。
才六　さうではないが、又後で……イエ〳〵、ぶちますぶちます。
　ト佐賀右衞門、キッと睨む。
　アレ〳〵、あんな目附きを。
茂兵　エヽ、愚圖々々せずと、ぶちのめさねえかえ。
才六　アヽ、ぶちます〳〵。
　トぶつ事あつて
　もうよろしうござりまするか。
淸七　モシ、お願ひがござります。わたしが仕返しに、ちつとばかり、叩いても大事ござりますまいか。
茂兵　オヽ、存分にぶちのめすがようござります。
　ト淸七、縫ぐるみを持つて
淸七　最前の代りに、今、わしが斯うして。
　ト淸七、佐賀右衞門を、才六は傳八をくらはす。
佐傳　アヽ、痛え〳〵。
茂兵　もうよい〳〵。
淸七　有り難うござります。これで胸がさつぱり致しました。
傳八　これで、背中がぎつくりいたしました。
茂兵　マア、斯うすれば、出入りは五分々々。
佐賀　男は、當つて碎けろとは、爰らの事であらう。
茂兵　見かけによらぬ、さつぱりとした氣性、改めて茂兵衞が仲人に入つて、これから知る人にならうかい。
傳八　そんなら、これから。

茂兵　心安うしませう。シタガ、この喧嘩は、何にから起つた事でござる。

清七　サア、この衆は、慥か大鳥村の佐賀右衞門といふお人で、仲買ひの彌市といふ者の娘、おてつを妾にしたいと云はれるさうで、そのおてつには、わたしが深い譯がござりますゆゑ。

佐賀　サア、おれも千住の在から鰻荷を積み出して、毎日江戸へ出るゆゑ、宿を取るより圍ひ者の方が勘定づく。それゆゑ、彌市に金を貸し、おてつを自由にせうといふのは、無理ぢやござりますまい。

茂兵　さうして、そのおてつは、從ふ氣かな。

傳八　サア、親はくれる氣、此方は貰ふ氣、娘は嫌氣でござります。

茂兵　さうして、この衆は。

才六　中通りの小道具屋、但馬屋の若旦那。

茂兵　そんなら、九右衞門さまの養子清七さまでござりましたか。さうとも存じませず、マア／＼、これへお出でなされませ。

傳八　よう知つてゐるな。

清七　ほんに、わしが身の上、どうして詳しう。

茂兵　サア、私しも、元は江戸屋敷に勤めて居りましたが、朋輩喧嘩で人を殺めしを、九右衞門さまが、金で扱つて下すつたゆゑ、追放になりての田舍住居。せめてもの御恩返しに、その妹を貰ひ切つて上げませう。

清七　でも、金に目のない非道な親ゆゑ。

茂兵　その慾の深い所で、話しが早く解りませう……時に佐賀右衞門とやら、先で得心もせぬ女に、未練を殘すも野暮らしい。思ひ切つてわしに下さるまいか。

佐賀　したり、誠の男、さつぱりと思ひ切つて、共に取持ちませう。

才六　それは鬼に鐵棒。若旦那、お嬉しうござりませう。

茶兵　さうして差當り、金の入り前は。

傳八　サア、この佐賀右衞門さまの方へ、返す金が五十兩。

佐賀　それを償ふとて、おてつを吉原へ賣つたところが、駈落ちをしたゆゑ、五十兩。

茂兵　百兩が百五十兩でも、世話を仕拔かにゃ置かれぬ。

佐賀　善は急げだ。傳八どの、この近邊の茶屋に、彌市が居やう。

傳八　川長へでもお連れ申して。

茂兵　成る程、どこぞへ入つて、落合ひ話にしませう。

清七　さういふ事なら、わしも又早う知らして……サア、外に安堵さす者がある程ゝ。

才六　若旦那のお供は、わしが。

佐賀　そんなら番頭。

茂兵　大儀ながら。

傳八　ナニ、ツイそこらに。

清七　モシ、わたしは草加屋へ行つて居りまするぞえ。

茂兵　氣を附けてござらつしやりませ。

ト清七、才六は橋がゝりへ、傳八は上手へ入る。

併し、知りもせぬ彌市とやらに、貰ひ引きも異なもの。

佐賀　成る程、飛んだ挨拶でもしては氣の毒。なんと、一筆書いては下さらぬか。わしは彌市に貸しのある體ゆゑ、味に氣を廻しては面倒。お前の手紙を見せた方が、早く掛合ひがおツ附から。

茂兵　成る程、それが早く判らう。

ト佐賀右衛門、出茶屋の硯箱を取つて來て

佐賀　そこへ、先づ「手紙を以て申し入れ候ふ、先達てお頼み申し候ふ彌市どのゝ娘てつ」……と假名で書いた方が判りが早からう……「てつを其許貰ひ分になされ、いよく〳〵埒明け候ふやう頼み入り候ふ、當分捨て金百兩遣はし申し候ふ以上」……宛名は佐賀右衛門どの、下名はお前の名前。

ト茂兵衛、書いて渡すを、卷き納める。

茂兵　そんなら、わしは川長へ。

佐賀　わしは、爰へ待ち合はして居て、ちつとも早く片を附けて。

茂兵　必らず返事を待つてゐます。

ト橋がゝりへ入る。茂兵衛、床几へ煙草入れを忘れて行く。

佐賀　へ、、假名でおてつと書かせたが、山だ。ての字へ扁を加へて。

ト筆を取り

ソレ、斯うすると、たの字のおたつ。

トあたりへこなしあつて、手紙を卷きしまひ、煙草入れを取上げ

こりや、慥かに茂兵衛が煙草入れ。これもなんぞの役に立ちさうな。

ト懷へ入れる。橋がゝりより彌市出て來り

彌市　そこにござるは、佐賀右衛門さん。

佐賀　オヽ、彌市、いま傳八を尋ねにやつたが。
彌市　イヤ、お前には、金を返さねばならぬゆゑ、身賣りをさした娘の駈落ち。尋ね出して吉原へ戻さねば、金を返さねばならず、晝夜それのみにかゝつて。
佐賀　イヤ、その金は出來た。後とも云はずこの狀で。
ト件の手紙を見せる。
彌市　オヤ／＼、娘をくれるなら、百兩捨て金を遣らうとの文言、さうして先は。
佐賀　上州の館林で、團七の茂兵衛といふ道樂者、德兵衛といふ亭主があるとも知らず、無理な話しだが、今のお前の事ゆゑに相談にもならうかと。
彌市　エヽ、ならなくつてサ。もと、娘が深川に、小さんと云つて出てゐる時分、德兵衛と轉び合ひ、仲人なしにずる／＼べつたり、わしはおてつを連れて別になつたが、男は立派だが、喰へねえと見えて、この柳橋へ又藝者に出て居る仕儀。緣を切るには、ナニ、雜作があるものか。
佐賀　埒が明かば、直ぐに證文を取り交し、右から左へ百兩の。
彌市　金にさへなる事なら、命でも賣る心。
佐賀　でも、生爪を剝がすやうな
彌市　所をしみに引き分けて
佐賀　こいつア一番、新狂言を書かにやならねえ。
ト向うより大九郎、着流し、大小の形。仲間附き添ひ出て、舞臺へ來り
大九　そこに居るは、佐賀右衛門、彌市ではないか。
佐賀　これは大九郎さま。
彌市　マア／＼、お掛けなされませ。
大九　コリヤ／＼、其方は、夕刻迎ひに參れ。
仲間　畏まりました。
ト引返し入る。
佐賀　時に、大九郎さま、先達てお國元にて、竊かに奪ひ取りし千壽院の刀、但馬屋の淸七めが、兄の歸參のその爲に尋ぬる樣子。
大九　例へ淸七が尋ねやうが、身共が手にあれば大盤石、
彌市　それに、御納戸金五千兩、こもうなしたる大罪人とあれば。
大九　如何にも。若殿の使ひ込みを、うぬが身に引き請け紛失の千壽院諸とも、お上へ差上げなば、本地へ歸參。さりながら、金は兎もあれ千壽院、こいつは容易に手に

は入るまい。
彌市　そりやさうと、今の工風を附けにやアならねえ。
佐賀　それも、爰ぢや智惠が出ねえ。
彌市　そんなら、これから川長へ。
大九　身共も一緒に。
佐賀　サア、お出でなされませ。
ト三人、上手へ入る。橋がゝりより、吉太郎、頭取の息子の拵らへにて、眉間尺の花火を持ち、後より地廻り出て來り
地廻　オイ〳〵吉坊、先刻から呼ぶのに、聞えねえか。いい花火だ、おれにくれねえか。
ト花火へ手をかけるを、吉太郎、捻ぢ上げる。
吉太　ヤイ、この野郎め、おれが買つて來たこの花火へ、手ぼたんかける水鼠、よく眉間尺大和屋の、こより花火のねんねえでも、うぬらがおもちやになるものか。誰れだと思ふ、江戸ッ子だ。
ト見事に投げる。この仕組みよろしく、道具ぶん廻す。
本舞臺、正面、檜皮葺四谷丸太造りの門口、左右建仁寺垣、この内に高足三段の上がり口、垣の内より見越しの松、即席御料理川長と記せし暖簾、行燈かけ、すべて、川より見込みし裏手の模樣。爰に床几を並べ、大九郎、佐賀右衞門、傳八、涼み居る。流行り唄にて道具納まる。
大九　コリヤ〳〵、貴公達は、兎角女の選り好みを致すが、手前なぞは、根が侍ひだけ、只今申した力强で、不死身の女とは好もしい。どうかその藝者を取持つてはくれまいか。
佐賀　成る程、飾磨大九郎さまは、お名前のやうな不意氣なお方。
大九　なぜ〳〵。
傳八　それぢやア、まだあの藝者を、御覽なすつた事はござりませんか。その鼻を見たら相談は出來ぬ筈。モシ、その藝者は、團七縞のお梶と云つて、器量なら、すつきりとした、しうか丸むきでござります。
大九　ナニ〳〵、只今家來に呼びにやつた藝者が、しうか丸むき……イヤ、占めた。爰へ參りなば、直ぐに金子を以て身が婦妻にいたす。
傳八　イエ、先は大の男嫌ひ。金箱を積み上げても、得心

しますまい。
大九　でも、氣を長う口説いたら。
佐賀　それも、今度お祭りへ賴まれて、女達とやらの練り物に出て、今日勢揃ひが濟んだ祝ひに、町内の衆が草加屋へ連れて來て居るとの事ゆゑ
傳八　佐賀大盡が、爰へ呼んで、御覽に入れやうといふ趣向。
　ト茶屋女、茶を酌んで出し
きく　お煮花を、お一つお上がりなされませ。
大九　コレ〳〵、最前の肴が出來たら、二階へ出してくれいと申せ。
きく　畏まりました。
佐賀　ヨウ〳〵、向うへ來るは、慥か團七のお梶に違えねえ。
大傳　オヽ、イ〳〵。
　ト誂らへの唄になり、向うよりお梶、女達の拵らへ、柾の下駄を穿き、腰に尺八を差し、幕明きの仲間の手を捻ぢ上げ、片手に以前の密書を持ち、讀みながら出る。後より子分三人、練子の拵らへ、松六、好みの形。若い者三人、揃ひの浴衣、紅摺の手拭を持ち、長柄の傘、大團扇を持ち、お松も附き添ひ出て來りかぢ
　形にそぐはぬ業くれの、力自慢のお轉婆者、ありや女子ではない、男ぢやと、いづれも樣のお叱りも、持つて生れた不器用未熟。
　ト仲間、振りほどいて密書にかゝるを、投げ返し
只御贔屓の執成しで、祭り練子の伊達姿、呼ばれて爰へ來る道も、手持ち不沙汰の酒機嫌。
　トまた捻ぢ上げ
手を捻ぢ上戸のしどもなく、管卷く文を繰り返し、相手になつて下さんすは、ほんに嬉しい、奴さんぢやわいなア。
　ト投げ返す。
大九　イヤ、話しに聞いたより美しい。なんの家來の一人や二人、投げ殺されても大事ない。
佐賀　さういふうちにも、今年の趣向、女達とは有り難え。
仲間　其方が仲よし、一寸縞のお辰も、爰に來て居る程に
玉藏　お梶さんも逢ひてえと云つた所へ。
松六　迎ひに出したお通れが、手紙を間違へ、お梶さん

へ。
勘吉　渡した中は、一文字も。
まつ　讀んでも判らぬちんぷんかん。
仲間　それだに依つて。
　ト か丶ろを、お梶、持ち替へ
かぢ　どこの何處の色さんへ、屆く文やら、怪しい文言。
　ト 佐賀右衛門、仲間、大九郎の三人
三人　ヤア。
かぢ　イ丶エイナ、どうやらゆかしいやうなれど、ほんの盲目の垣のぞき。
松六　餘所の戀路の邪魔せずと
玉藏　欲しがるものなら
勘吉　御家來さんへ
かぢ　ソレ、返して上げるわいなア。
　ト 仲間へ狀を返す。
仲間　エ丶、なんの事だ。
傳八　何は兎もあれ、客人のお待ち兼ね。
かぢ　そんなら、そこへ。
　ト よろ〳〵とする。
まつ　アレ、危ない。

かぢ　エ丶、モ、知つてゐるわいなア。
　ト 皆々、舞臺へ來り
傳八　サア、誂らへの肴の來るまで、一服やつて行きやれ。
佐賀　お辰も、奥へ來てゞあつたゞ爰へ呼びませう。
まつ　モシ、お辰さん、ちよつと來なさんせ。
四人　お辰さん〳〵。
　ト 奥にて。
たつ　アイ〳〵。
　ト 奥より出て來る。
かぢ　オ丶、お辰さん、この中、王子の一座きり、逢はなかつたわいなア。
たつ　わたしも、あのお客の事で、お前に焦れて居たわいなア。
傳八　當時、吾妻の二枚物。
佐賀　すゝ事こそと知られたり。
傳八　親玉ア。
かぢ　あんまり、煽てゝ下さんすた。
たつ　血の道が上がるわいなア。
　ト 松六、門口へ出て

松六　モシ、お若が出來ましたと云ひますぜ。
佐賀　そんなら旦那。
大九　皆も一緒に。
たつ　わたしは、ちよつと。
まつ　用を足したら
傳八　直ぐにお主も。
皆々　サア、お出でなされませ。
　ト殘らず奥へ入る。お辰殘る。橋がゝりにて
大勢　身投げだ〳〵。
たつ　エヽ、氣味の悪い。それにつけても、妹の行くへが知れぬとて、父さんの素振り。いつもの氣質に似合はぬ屈托。親も妹も義理ある仲、どうぞ仕様はない事かいなア。
　ト橋がゝりより、若い者、素肌になり、古き薄縁へ、彌市を乗せ、權次、八五郎附いて出て來り
權八　ヤイ〳〵、マア、こちらへ持つて來い〳〵。
若者　飛んでもねえ、晝日中、飛び込むといふがあるものか。
　ト舞臺へ置く
たつ　ヤア、お前は父さん。
權次　オヽ、お前は娘ッ子だな。
八五　いゝ所に、居合はせてくれた。
たつ　モシ八さん、權さん、どうぞ仕様はござんせぬかいなア。
八五　ナニ〳〵、案じなさんな、いま水を吐かせた。
皆々　彌市どのやアい〳〵。
たつ　父さんいなう。
　ト佐賀右衛門、わざと慌てるこなしにて、出て來り
佐賀　ヤア〳〵、身投げは、彌市であつたか。マア、爰に氣附けがある。
　ト氣附けを呑まし
皆々　彌市やアい。
　トこれにて心附き
彌市　ア、苦しい〳〵。
たつ　父さん、心が附いたかいなア。
彌市　オヽ、娘か。面目ない〳〵。
たつ　どうした譯か、短氣な事をして下さんしたなア。
佐賀　コレ〳〵彌市、身を投げるといふ不料簡な事があるものか。
彌市　イヤ〳〵、如何にわたしがやうな強情者でも、お前

に借りた金の返し方がないから、娘のおてつを賣れば、吉原を駈落ち、生きてゐたいが、百兩といふ金がなくつては、どう人樣に顏向けがならう。おれを思つてくれるなら、見遁がして殺してくれ。
たつ　そりや、わたし達への面當てか。なぜ其やうに情ない事云うて下さんす。義理ある父さんを殺してよいものでござんすか。
佐賀　アレ、孝行な娘の云ふ事を、聞かぬといふがあるものか。
ト權次、川長の貸浴衣を借りて出て
權次　サア、その着物を脱ぎ替へなせえ。川長の貸浴衣を借りて來た。
佐賀　何にしろ、人がたかつて見つともねえ……サアサアお前方、通らつせ〱。
たつ　マア、こつちへ來て下さんせいなア。
ト彌市、佐賀右衞門と顏見合せ、ちよつと氣を替へ
彌市　マヽ、靜かにしてくれ。
皆々　サア、ござれといふに。
トおたつ、彌市を介抱しながら、若い者附いて門の口へ入る。

佐賀　ヤレ〱、こなた衆が居合はせて、命冥加な事であつた……本當に、橋の上からやらかしたか。
權次　膝ツきりしかねえ所へ、橫に寐かして引摺り上げたのだ。
佐賀　うめえ〱。彼奴も息を詰めて、本式に死んだやうであつた。
二人　さうして、これから。
佐賀　コレ。
ト兩人へ囁く。
二人　そんなら、お辰を。
佐賀　コレ……サア、來さつせい。
ト三人、門口へ入る。傳八、門口より出て來り
傳八　アヽ、醉つた〱、いゝ心持ちだ……併し、あの淸七めを追ひ出し、お仲はおれが手に入れて、但馬屋の別家となる。佐賀右衞門さんの金の一件で、お辰の妹を吉原へ勤め奉公、彌市めが五十兩は丸取り。あの上前もあれが取るワ。また先刻佐賀右衞門さんが、茂兵衞に書かせた百兩の證文、おてつといふ字をたつと直し、手金と一巻き卷き上げたら、こいつも半口。こりや、福德の三年目と出來て居るわえ。

ト門口よりお梶、出かゝり居て、傳八の脊中をくらはす。

アイタヽヽ。

かぢ　後で聞いて居るとも知らず、淸七さまや、お辰さんの、身に振りかゝる難儀の一々、口走つたが運の盡。わたしと一緒に、サアござんせ。

傳八　これサ、お梶さん、どうぞ此まゝ、見遁がして。

かぢ　イエ、ならぬ。

傳八　さう云や、斯うして。

ト お梶に掴みつくを、捻ぢ上げ

かぢ　こりや、好い人質を

ト傳八、振りほどいてかゝるを、投げ返し

捕へたわいなア。

ト騒ぎ唄になり、よろしく道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の常足。向う上手、床の間、違ひ棚。これより下手、襖、上下も同じく葭戸の附け屋體、爰にお辰、彌市の脊中を撫り居る。流行り唄にて、道具納まる。

彌市　アヽ、ひよんな事して、わが身にまで恥をかゝせた。堪忍してくれ〳〵。

たつ　さうして、その金の心當りは、どのやうな事でござんすえ。

彌市　サア、わが身には氣の毒だが、これを見てくれ。

ト懷中より以前の狀を出す。お辰、取つて、濡れて居るを、ソッと開き見て

たつ　ヤヽ、こりやわたしを……そりやモウ、お前の命にかゝはる事ゆゑ、どうなりとして、とは云ふものゝ、德兵衞どのと云ふ夫のある身。どうも主と緣切る事は。

彌市　それぢやに依つて。

ト立ちかける。

たつ　アヽモシ、待つて下さんせ。成る程、僅かな金でもなし、この身一つで濟む事なら、德兵衞どのと緣を切りませうわいなア。

彌市　アヽ、よう云うてくれた〳〵。併し、表向きさへ別れてしまへば、内證で逢引きはしても構はぬ。それにしても、今が今の手詰めになつてゐる事ゆゑ、先の客を連れ申して來て、掛合ひを附けてしまはう。

ト奥へ入る。

たつ　如何に親の爲ぢやとて、夫と緣を切れとは、胴慾な。

ならぬと云へば親を見殺し。何は兎もあれ、まだ草加屋にござんせう。主へ文にてこの事を。

ト上手の葭戸を明け、硯箱を出し、文を認める。佐賀右衛門、出かゝり

佐賀　これサ、お辰さん、それは悪からう。

たつ　いつの間にやら佐賀右衛門さん。

佐賀　様子は殘らず次の間で聞いて居たが、男を磨く德兵衛に知らせては、どんな事にならうも知れねえ。それぢやア矢ツ張り親を見殺し。それよりは、美しう別れた方が、德兵衛どのの顔も立ち、親の體が無難に濟めば、また後々で緣さへあれば。

たつ　サア、心の誠の立つにもせよ、當座の云ひ譯……ソレ。

ト硯箱より小刀を取り出し、指を切る。

佐賀　エ、、滅法界な。サ、、紙を遣らう。

トお辰、件の指を紙に包む。奧にて

彌市　ハイ〳〵、娘はあれに居ります。

トお辰、慌てゝ文と指を、硯箱の中へ押し入れ、蓋をする。奧より彌市。茂兵衛出て來り

佐賀　オ、彌市どの、埒が明いて、こなさんも安心だ。

彌市　イヤ、モウ、お前にも御苦勞をかけました。

茂兵　お話しのは、あの子かえ。

トお辰、泣いてゐる。

佐賀　コレサ、客人に御挨拶申しなせえな。

トなだめるを、振り拂ふ。彌市は、文と指を懐へ入れ

コレサ、娘、何を初心らしい。

茂兵　イヤ、男でせえ、初めて逢ふのは、恥かしいやうなものサ。

ト煙草をのまうとして

エ、、煙草入れを、どつかへ置いて來たさうだ。

佐賀　時に彌市どの、一札を書いて置いたか。

彌市　イヤ、今日は印形を持たぬから。

茂兵　今日に限つた事もねえ。その上、佐賀右衛門どのが立會ひゆゑ、請け人の判ばかりで金を渡しませう。

佐賀　左様なら、假受取りを差上げませう。

ト半紙へ書き、印を捺す。

茂兵　ソレ、小判で百兩。

ト渡す。

佐賀　サア、これでお前も重荷を下ろしたやうだらう。

ト金を取次ぐ。
彌市　ア、忝ない。それはさうと、下に吉原の手代が待つてゐるから。
佐賀　そんなら、お客。
彌市　直に行つて參じませう。娘、御挨拶を……ハ、、、ハ、ドレ、渡して來ようか。
ト佐賀右衛門、彌市、奥へ入る。
茂兵　コレサ、今までは親仁どのも、四の五と云つたさうだが、金で濟ましたれば、もう天下晴れての夫婦だ。晩には面白い夢を見せてやるのだぜ。
たつ　お前は面白いか存じませぬが、わたしは今さら。
茂兵　悲しい別れ。ハテ、その悲しいのを嬉し涙に。
ト脊中を叩き、互ひに顏を見て
たつ　ヤ、、お前は茂兵衛さん。
茂兵　オ、、お主は、前方深川で呼んだ、小さんぢやねえか。
たつ　そんなら、上方のお客といふは。
茂兵　彌市が娘と云つたのは。
たつ　お前であつたか。
茂兵　アノ、こなたで。

たつ　わたしや、面目ないわいなア。
茂兵　フム、その頃はまだ侍ひで、金谷金五郎と云つて居たが、今ぢやアもつれ髮の德兵衛とて、人に知られた男と聞いたが、達者で居るか。
たつ　アイ。
茂兵　さうして、德兵衛と、いつ緣を切つた。
たつ　たつた今、切つたわいなア。
茂兵　コレ、例へどのやうな事があらうと、あの德兵衛と退去りする仲ぢやあるめえぞよ。この茂兵衛も、江戸に居た時、お主を呼んだが、あの德兵衛と深い仲と聞いたゆゑ、男らしく思ひ切り、其うち喧嘩で國へ引ッ込み、人傳に聞きや、夫婦睦まじく暮らして居るとの事。それを今さら金にひけ、別れる氣になつちや濟むめえがた。
たつ　合點のゆかぬお前の腹立ち。どうもわたしは。
茂兵　フム……コレ小さん、今の名はなんと云ふ。
たつ　辰と云ひまする。
茂兵　ナニ、そんな名ぢやアなかつたが、妹でもあるのか。
たつ　アイ、義理ある妹は、てつと云ひます。
茂兵　ナニ、てつ……てつのての字へ扁を書き、たつ……

さては、この茂兵衛を、深い所をやり居つたな。

ト奥よりお松、走り出て

まつ　モシ〳〵、わたしが立聞きして居ましたら、佐賀右衛門とか云ふ人と、お前の親御と、巧く行つた、茂兵衛どの來ぬうちにと、玄關から跣足で逃げてお出でなされましたわいなア。何にしろ、爰の若い衆を。

ト引返して入る。

茂兵　南無三、跡追ひかけて。

たつ　待たしやんせ。父さんを追ひ駈けて、なんとさしやんす。

茂兵　オヽ、騙られた金を取り戻し、おれが一分立てるのだ。

たつ　サア、金を取り戻したら、お前は濟まうが、わたしや、一分がすたつたわいなア。

ト泣き落す。上手の襖を明け、徳兵衛、窺ひ居る。

茂兵　ナニ、一分がすたつたとは。

たつ　サア、これゆゑ、どうも。

ト切つたる指を見せる。

茂兵　ヤア、お主は、指を。ハテナア。

徳兵　不義の男へ、深切なものだなア。

たつ　こちの人、これには譯が。

徳兵　エヽ、吐かしやアがるなえ。

茂兵　小さんが、こちの人と云ふからは、徳兵衛どのか。

徳兵　その以前、見知り越しに知つた團七の茂兵衛どん。

茂兵　疾に、近づきになるのでごんした。

徳兵　イヤモウ、不思議な所で

茂兵　逢ふもんで

兩人　ごんすなう。

たつ　これは、茂兵衛さんの知つた事ではござんせぬ。

徳兵　飽くまで、茂兵衛の肩を持つ。いつそこの場で。

茂兵　イヤ、譯も聞かずに、なんとする。

徳兵　ハテ、なんとせうとも、おれが女房。

茂兵　イヽヤ、深川に居る時分は、張り合つた事もあつたゆゑ、目の前で手籠めにされちやア。

徳兵　ハテ、變つた事を聞くものだ。この徳兵衛は、侍ひ氣質、思ひ立つた事は、後へ引いた例しはないわい。

茂兵　オヽ、こんたが侍ひ氣質なら、おれも片意地、片田舍で腕前磨く團七茂兵衛、云ふ事があらば、云つてしまやれな。

徳兵　オヽ、この煙草入れは、見知つて居やるか。

ト佐賀右衞門の手に入りしを出す。
茂兵　オ、、それは、おれが落した煙草入れ。それがどうした。
徳兵　サア、この煙草入れの中に、小指の先が入つて居るは。
たつ　ア、モシ、その指は。
　ト取らうとする手先を押へ
徳兵　コレ、おのれが指は、切つて居るぞよ。その指が茂兵衞の煙草入れにあるとは。
茂兵　おれが落した煙草入れに……聞えた。こりやア三人云ひ合はせて、百兩の金をしてやらうと、美人局の古仕組みか。
徳兵　愚圖々々云はずと、それへ直れ。
茂兵　それより先へ、彼奴等を。
徳兵　コリヤ、一寸もやる事はならぬ。
兩人　なにを。
　ト後の襖を明け、お梶、傳八を押へ居て
かぢ　お二人さん、心と心が違ふわいなア。
茂兵　ナニ、二人の心が
徳兵　違つたとは。
たつ　オ、、お前はお梶さん。
かぢ　イ、ヤ、お梶ぢやござんせぬ。團七の茂兵衞さんと徳兵衞さんの爭ひを支へたは、過ぎ行かれた父さんの、團七の九郎兵衞が止めたのでござんす……併し、不思議な事で手に入つた、この手紙と紙挾み。
　ト手紙と、古き紙挾みを出す。
たつ　こりや、見覺えのある佐賀右衞門の懷中物。
かぢ　サア、この中に書いた物がござんす。
徳兵　お梶が挨拶、この手紙。
茂兵　何は兎もあれ、讀んで見やれ。
　ト徳兵衞の前へ抛るを開き見て
徳兵　ナニ〳〵「書き殘し參らせ候ふ、我が身の事、おてつの立て金の爲に、上州の客に身を賣り不申候はねば、父樣の身を投げ死ぬると、既に覺悟いたされ候ふゆゑ、義理ある親の爲、是非なく身を賣り候へども、外々へ緣づきながら、變る心ござなく候ふ、この世の形見に、指を切り、思ひの念を晴らし參らせ候ふ、徳兵衞さまへ、たつより」……フム、そんなら、心中に指を切つたは、
たつ　サア、行くまいと云へば、身を投げる。さうなる時は、お前の顏も立たず、行けばわたしの操が立たず。

かぢ　お辰さんに、不義がなければ、茂兵衛さんの一分のすたる事もなし。
茂兵　それぢやア矢ッ張り、田舍者と侮りやがつて、騙りやがつたのだな。
德兵　ナニ、騙つたとは。
茂兵　さればサ、但馬屋の淸七どのが、おてつといふ娘に添はれぬとの事、無分別でも出さうかと、引請けて世話せうと、思つた所へ附け込んで、佐賀右衛門めが軍略に乘せられた。うぬ、どうするか。
かぢ　フム、それで樣子が、さらりと知れた。この傳八づらが獨り言、殘らず聞いた惡事の一々、お辰さんがいとしいゆゑ、わたしが脊越して聞くうちに、佐賀右衛門さんに、何やら囁き、二階へ上がらしやんした後で、合點ゆかずと、佐賀右衛門の紙挾みを、持つて來たのぢやわいなア。
茂兵　そんなら、傳八どのも相槌と。
傳八　ア、、面目ない。
かぢ　サア傳八さん、最前白狀した通り、爰で云つて下さんせ。
傳八　イヤ、わたしは存じませぬ。

茂兵　うぬ、云はねえと、ひどい目に遭はすぞよ……イヤ、聞くにや及ばぬ。ナウ德兵衛。
德兵　ナニサマ、惡事も解つて居れば、血を見ずば男が立たぬ。丁度幸ひ、此奴が體、一刀づゝ血をあやして。
傳八　ハア、、待つた〳〵。切られるより、云つてしまふ……先づわしは、息子と云ひ號けのお仲さんに惚れて居る。息子の淸七どのは、おてつと味い仲。それを手に入れようと、佐賀右衛門が、彌市に貸した金を返さねばならぬと、往生づくめでおてつ坊を、吉原へ五十兩に拔めたれど、佐賀の方へは返さず、所を又佐賀どのは、おてつといふ字をたつと直し、百兩騙つて卷き上げた上、後は德兵衛どのと、茂兵衛親方と喧嘩にして、高見で見物しようといふ註文。
茂兵　重ね〳〵の彼奴等が企み。男を磨くこの茂兵衛、騙られちやア顏出しがたつならぬとあるも、尤もでござんす。それにつけても、父さんの惡事、面目ないわいなア。
德兵　オ、さうだ。こりやア、筋道を分けにやならねえ……ナニ、茂兵衛どん、男が騙つた百兩の金、すべよく此方へ取返す、手段はわしが胸にある。この一埒は、任せ

ちやア下さるめえか。
茂兵　面白い、預けてやるは……サ、この證文は、お辰どん、預けて置くぞ。
　ト彌市より取つたる受取を渡す。
かぢ　サア、斯う解けた上からは、以前のよしみ、兄弟分に。
　ト杯を前に置く。
德兵　成る程、男は當つて碎けろと、角目立つたる遺恨も晴れ
茂兵　互ひに仲よう兄弟分の、誓ひの固めは
　ト茂兵衛、德兵衛、互ひにその腕を引き、血を絞る。お梶、お辰、杯にて受け留め、酒に浸し、呑む事あつて
德兵　サ、これで互ひの
茂兵　誓ひの杯。
たつ　わたしも、これで落ちついたわいなア。
かぢ　當つて碎けろの慂ろ合ひ。
德兵　兄弟分の杯も
茂兵　めでたう濟んだこの上は
傳八　めでたい次手に、私しは。
茂兵　滅多にうぬは……德兵衛。
德兵　茂兵衛。
かた　お二人さん。
茂兵　必らず詞を
傳八　この間に、おれは。
　ト逃げ出さうとするを、茂兵衛、見事に投げるを木の頭。
茂兵　番うたぞよ。
　ト四人、見得よく、この仕組みよろしく、誂らへの唄にて。

拍子幕

二幕目

藥研堀草加屋の場
兩國橋夜店の場

役名——藝者、團七縞のお梶。同、一寸縞のお辰。但馬屋清七。同、番頭傳八。飾磨大九郎。近江屋手代、喜八。若黨、甚内實ハ地廻りの三吉。妹、おてつ。仲居、おまつ。若い者、松六。同、勘吉。同、玉藏。京檀の才六。三河町の義平次婆アおか

ん。釣船の三婦。
本舞臺、二間半の常足、大和葺き、廻り本緣附きの亭屋體、向う、彩色畫の襖、上下、白木の板塀、草加屋と記せし軒行燈を掛け、手水鉢、石燈籠、夏木、日覆より楓の吊り枝、爰に淸七をおてつ、さすり居る。側に若い者、勘吉、松六、玉藏、おまつ、おわさ、およし、居並び、酒盛りの見得、流行り唄にて幕明く。
松六　今日も、一日お祭り場所にうろついてゐる所を、この兩國へ外れて、氣がせい〳〵しました。
勘吉　わつちも又、親方の三婦さんを尋ねて來て、飛んだ御馳走になりました。
玉藏　わたしなぞも、面白い目をしました。
よし　面白いと云へば、先刻お梶さんが、傳八の手をちゞめた力には、恟りしやした。
わさ　それよりは、最前、德兵衞さんと茂兵衞さんとが、腹立つたを。
まつ　ソレイナア、お梶さんがござんして、話しが折り合つた樣子。

淸七　それにつけても、あの茂兵衞どのが、過ぎ行かれた親仁に恩があるとて、佐賀右衞門や、傳八を捕へて仕返しをさしてくれた時の嬉しさ。あの傳八め、惡い奴ぢやなう。
てつ　お前、體が痛みなさんすなら、橫になりなさんせ。擦つて上げようわいなア。
まつ　ほんに、爰へお床を敷いて上げませう。
よし　內方でも、お見舞ひに行くとでござんしたゆゑ。
淸七　方々の人へ苦勞をかけ、氣の毒千萬な。いづれ祭り過ぎには、禮に行きますわいの。
まつ　ドレ、お蒲團を取つて參りませう。
淸七　アヽ、コレ〳〵、わしや寐やせぬわいなう。
てつ　さうでござんす。お仲さんの側でなうては濟まぬといなう。
淸七　それでも、打ち身に大毒ぢやと。
皆々　エヽ。
淸七　イヤ、橫になるのは禁物ぢやといなう。
皆々　ホヽヽヽ。
ト若い者、平助、吉六、和助、下手より出掛けて
平助　てつきり斯うと跡を附けて來たら

吉六　この中、吉原を駈落ちした
和助　おてつに違えねえ。しよびいて、内へ連れて行け。
二人　合點だ。
　トおてつを引き立てにかゝる。
清七　ア、コレ、この女は渡されぬ。これにはいろ〳〵。
平助　やかましい、この野郎め。
皆々　アレ、若旦那を。
三人　やかましいわえ。
　ト清七を突き退け、おてつを引き立てにかゝる。橋がかりより甚内、さんすいなる麻上下、つかみ股立ち、大小にて、若黨、絹羽織、大小、後より、陸尺二人、鋲打ち、乘り物を舁き、侍ひ附き添ひ出て、甚内は、三人と立廻りあつて、三人は、上手へ逃げて入る。
甚内　憎くい素町人め。
　ト行きかける。乘り物の内にて
かん　ヤレ甚内どの、お待ちなされ。長追ひするには及びませぬわいなう。
甚内　ハ、ア。
　ト控える。侍ひ、乘り物の戸を開く。内より義平次婆おかん、老女の拵らへにて出る。皆々平舞臺へ下りる。
かん　ア、イヤ、姫君には、そこは端近。先づ〳〵。
　トおてつ、合點のゆかぬこなしにて、餘儀なく上手へ行きながら、清七に來てくれいとする。
清七　このおてつを姫君との仰せ。一圓合點が參りませぬゆゑ、あの者……イヤサ、ひよつと間違ひではござりませぬか。
甚内　アイヤ、播州の城主、高砂家の御老女が、麁忽申してよいものでござらうか。
てつ　でも、賤しいわたしが。
かん　アイヤ、播州高砂家の御息女、龜鶴さまと申すは、おてつさま、あなたの事でござりまするわいなア。
清七　エ、。
かん　御不審はお道理さま、十五年振りにて、主從の御對面。でもマア、お美しう御成人なされましたわいなう。
甚内　あなたには、お三つの年、奥家老林三太夫どの娘と僞り、彌市方へ里に遣はせしに、その後、他國いたされ、在所知れず、この程手分けをなして尋ね當りしゆゑ、局が附き添ひ、お迎ひに罷り越しましてござりまする。

てつ　成る程、わたしの實の父さんは、林の何某とやら、幼ない時に聞きましたれど、高砂家とやらのお胤とは、

かん　それをお知らせ申してよいものでござりませうか。後の證據と、殿様の御直筆にて

ト懐中より、袱紗包みの短册を出し

伊勢の海の千尋の底に沈むとも

てつ　ほんに、それ〳〵……今はなにてふ甲斐はあるまじといふその下の句。

ト守り袋を出す。

かん　即ち、それが慥かな證據。姫君様には、御妾腹に誕生ましませしが、御臺所の嫉み深く、既に毒害の沙汰ありしゆゑ、與家老林三太夫、抱き參らせ、我が子と僞り、里に遣はせしところ、彌市とやらんの行くへを失ひ、表立つて詮議も叶はず、月日を送る其うちに、去年の冬、奥方にはお隱れ遊ばし、今は誰れ憚からねば、草を分けて尋ね參れと、主君の仰せ。やう〳〵と御在所を求め、お目見得いたせし私しは、あなた様のお乳の人、眞砂と申す不束者。

甚内　拙者は、森下甚内と申す、家譜代のお側役、お見知り置かれ下さりませう。

まつ　そんなら、おてつさんの實の親御はわさ　アノ、お大名様でござりますかえ。

清七　ほんにマア、思ひも依らぬ事で

皆々　ござりましたわいなア。

てつ　そりやマア、眞實の事でござりまするかいなア。知らず暮らせし不孝の罪、お免しなされて下さりませいなア。

かん　御合點が參りなば、町家のお住居は、御一家への憚り。

甚内　直さま、これよりお館へ。

ト喜八、下手より走り出て

喜八　ア、モシ、この女中には、金子の掛合ひのある事ゆゑ。

甚内　その儀ならば、高砂家の納戸へ願つて出い。

喜八　イ、エサ、これは、わたしの内へ抱へました。

甚内　默らう。此奴、姫に指でもさすと、討ち放すぞ。

かん　ア、イヤ、甚内どの、利慾に耽るは町人の道。お供廻りの後へ附いて、館へ同道いたしたがよいわいなう。

てつ　何を隱さう、わたしには、云ひ交したお方が。

甚内　斯くお迎ひに參るまでに、その儀もしかと承知して

お乳の人へも事の仔細を。

清七　すりや、私しと譯ある事も。

かん　存じませいで、なんと致しませう。お身の素性も老臣方へ申し上げしところ、姫君のお心任せに計らふやうにと、御議決着いたしましてござりまする。

たま　そんなら、若旦那も大名に

喜八　あて事もねえ、可哀さうに。イヤサ

皆々　ヘエ、おめでたうござりますわいなア。

清七　嬉しいは嬉しいが、この身には、千壽院の刀の詮議を。

甚内　ハテ、館へお入り遊ばし、それ〴〵の役儀へ申し附けなば、早速に尋ね求めて差上げませう。

かん　さはさりながら、御由緒正しいと承はりましたのみ。なんぞ慥かな。

清七　家の系圖はこの通り、所持いたして居りまする。

　ト一卷を見せる。

かん　それさへござりますれば、歸服いたさぬ者は、ござりますまい。

甚内　追ツつけ、お忍びの同勢を以て、拙者が案内。

てつ　そんなら、わたしばかり。

かん　ハテ、若殿にも、直さま後より。

まつ　そんなら、もうお立ちでござりまするか。

喜八　併し、お姫様の附き馬は初めてだ。

甚内　アイヤ、姫君のお立ち。

供皆　ハア、。

　トおてつ、清七に心を殘し、行き兼ねるを、老女諫めて、甚内、附いて後より絹侍ひ・乗り物を舁いて行きかける。正面の襖を明け、お梶、出かゝり居て

かぢ　高砂家のお乳の人、ちよつと待つて下さんせ……イエサ、今日雇はれの女達、出入りが叶つたお乳母さん、一番待つてもらはうわいなア。

　ト甚内は、老女の袖を引き、供廻りウロ〳〵こなし。

かん　これはしたり、町人どもの狼藉には、取合はぬが奥勤めの心得。

　ト行きにかゝる。

かぢ　ソレ、皆さん。

　ト才六先に、皆々バラ〳〵と出て

皆々　合點だ。騙りめを逃がすな〳〵。

　ト供廻りは、乗り物を置いて、橋がゝりへ逃げて入る。

甚内　うぬ、狼藉者、眞ッ二つ。
ト　お梶、甚内を上手へ突き廻し、おかん、懐劍を抜きかける。
かぢ　ヤア、お前は。
かん　ほんに其方は。
かぢ　母さん。
かん　コレ。
ト云ふなと仕方して拜む。甚内、又かゝるを捻ぢ据ゑて
かぢ　サア、かゝ……イヤサ、騙りのやうなお乳の人、エエ、云へは云ふ程耻の上塗り。こりや、悪者がお前を頼み、サア、お祭り三日は、俄の趣向。受けもせぬ事仕組まうより、地道に練つて踊らしやんせいなア。
かん　アヽ、踊りませう〱。
玉蔵　イヤ、ならぬ〱。この婆アは
勘吉　騙りの骨頂。
皆々　ぶちのめせ〱。
かぢ　例へ、騙りにもせい、呼び止めた相手はわたし。なんのマア、親と知つたら……サ、親にしてもよい年な婆さんに、爰で耻をかゝせたなら、矢ッ張りこの身の……サア、掛り合ひはいとはねど、今は大事のお祭り前。戻してやつたがよいわいなア。
皆々　ぶち撲つてしまへ〱。
かん　やかましいわえ。成る程、おらア天下御免の騙りだよ。ちよつと歩くにも、先へ鐵棒を引かせるのだ。ハイ、御免の騙りだ。間抜け野郎め。
ト　兩人は、衣裳を脱ぎ捨て
やり損なつた衣裳を、擔いでも行かれねえ。てめえ一緒にして持つて行つて下せえ。
甚内　おれが借りて來たのだ。ちちうがあつちや濟まねえ。
てつ　すでにマア、騙りに
清七　わが身を連れて行かうとした。
皆々　でもマア、太い人もあるものぢやなア。
かん　斯うばれてしまつたら、これからしらッ子で、あの娘を連れて行つて見せるのだ……と云つたら、又ひどい目に遭ふだらう。踊つてやらう。
皆々　エヽ、ぶちのめせ〱。
かん　ナニ、此奴ら、洒落やアがるぞ。
甚内　指でも附けて見やアがれ。

ト おかん、甚内は、花道へ駕籠を舁ぎ行き

かん　あの女ッ子を騙らうと、衣裳道具を借り集め、こぢつけの屋敷詞で、十が九つ仕負ふせたを、飛んだ横山同朋町、ひよんな所へしやく／＼り出て、騙りの脇も薬研堀の縁日、繋がる義理も思はずに、ぽんといふ目に大花火親の口は星下りでも、引けを虎の尾が勝だらうよ。

甚内　オヤ、厄拂ひじみて居るなう。

かん　早く歸りませう。覺えて居ろよ。

ト おかんを甚内、押して向うへ入る。立役皆々、上手へ入る。

清七　ほんに、お梶が來合せて、おてつの身も無難に濟んだといふもの。

てつ　わたしの守の中の歌など、知つて居るといふは、不思議ぢやわいなア。

かぢ　もうおてつさんは、爰に置き申されぬ。

まつ　ほんに、昨夜までござんした知るべの方へ

玉藏　駕籠屋まで、わたしが送つて行かう。

清七　そんなら、必ず先刻の事を。

てつ　ハテ、その前方に、又來るわいなア。

かぢ　それにしても、急に三婦さんに文を屆けたいが、向う兩國へ來て居やしやんすかえ。

勘吉　アイ、親方は、青柳に

かぢ　急に屆けて下さんせ。

ト 手紙を出す。勘吉取つて

勘吉　合點でござります。

かぢ　氣を附けて行かしやんせえ。

ト この人數、橋がゝりへ入る。

清七　とは云ひながら、また今の者が。

かぢ　ハテ、大事ござんせぬ。マア、お下にお出でなされませいなア。

清七　思ひがけない其方の深切、どうも合點がゆかぬわいなう。

かぢ　わたしの父樣、團七どのは、あなたの親御、助松主計さまに御奉公なし、同御家中の小者を殺めしに、主計さまのお情で、無難に歸りました、大恩のある旦那樣の御子息といひ、最前、名乘り合うたる茂兵衞どのも、この地にも居られぬ事ゆゑ、わたしを見込み、くれ／＼頼み。一日も早う歸參をさせ申さねば、女子ながら、一分が立ちませぬわいなア。

清七　サ、その志しは忝ないが、何を云うても、千壽院

の刀の行くへ。
かぢ　サア、それも、心當りがござりますれば、尋ね出して、お手渡し。
清七　その時、おてつが身の上も
かぢ　世間晴れてあなたと女夫。
清七　必ず、其方を頼んだぞや。
ト橋がゝりより、若い者出て
若衆　若旦那、お迎ひに參りました。
清七　ナニ、祭りの知らせかや。そんなら一緒に。
かぢ　若旦那樣。
清七　お梶どの。
かぢ　サア、お供いたしませうわいなア。
トこの仕組みよろしく、道具ぶん廻す。
本舞臺、前幕の茶見世の道具に戻り、所々に明りを照らし、向う、本所灯入りの遠見、すべて兩國夜店の體、爰に玉藏、甚内を捕へ、平助、吉六、和助、立ちかゝり居る。佃の合ひ方にて、道具納まる。
玉藏　吉原町から、おてつどんの追手と云つて、連れに來たも、皆相摺りめだな。
甚内　オ、、知れた事だワ。
平助　返報とは思へども
吉六　とても此方の手に合はぬ。
和助　その穴埋めに、うぬをせごして
玉藏　ハ、、、その團七のお梶さんの臑を噛りやア、いつか實の入る刀、贔屓の煽てに前髮を、落した規摸に腕だめし。サア、支度をしてそこへ固まれ。
平助　此奴、形に似合はぬ。皆來い〳〵。
ト上手へ固まり
皆々　サア、早くしやアがれ。
玉藏　そりやいゝが、オ、、あんな雲が出て來た。
皆々　ほんになア。
玉藏　間抜けめ、逃げるのだえ。
ト甚内を突き飛ばす。これにて將棋倒しになる。玉藏逃げて入るを、皆々追ひかけて入る。上手より傳八、おてつを引き立て、大九郎、才六を打ちながら出て、突き据ゑる。
てつ　傳八どの、そりや無體ぢやわいなう。
傳八　エヽ、是でも非でも、佐賀右衛門どのゝ所へ連れて行くのだ。

才六　イヽヤ、この才六がお梶さんに頼まれたれば、さうはさゝぬ。
大九　エヽ、おのれは身共が。
ト双方より、立廻る。お梶、橋がゝりより出て來り、大九郎をこかし、傳八を投げる。
傳八　イヤおてつ、いつの間にそんな力が。
才六　オヽ、お梶さんか。
大九　エヽ、惡い所へ。
てつ　よう來て下さんしたなア。
大九　もうこの上は。
ト刀へ手を掛け
逃げるのだわえ。
ト上手へ走り入る。お梶、傳八を捕へ
かぢ　心元なく來て見れば、案に違はぬ毛蟲ども、この間に早う。
才六　でも、駕籠屋の内が。
かぢ　お前、知らぬかいなア。
才六　オヽ。
かぢ　そんなら、向うに……斯ういふ柳の木があつて。
ト傳八を突ッ立て、柳の振りあつて
あそこの手前を斯う曲つて……此やうな。
ト傳八を肩車に乘せ
松の木がござんす。それを横に見て行くと、
ト下に居させて
此やうな大きな石橋の、その側に……此やうな、鼻の低いぴんづる樣を、斯う横に曲がると、駕籠屋ぢやわいなア。
てつ　そんなら、お梶さん。
かぢ　早うござんせ。
トおてつ、向うへ走り入る。
傳八　うぬ、駕籠屋まで。
才六　われを遣つては。
傳八　うぬ、かご
才六　オイ。
傳八　かご。
ト跡を追ひ駈け、兩人、走り入る。
かぢ　ドレ、見屆けて。
ト才六の脇差を差し、行きかける。上手へお辰、出かけ居て
たつ　モシ、お梶さん。

かぢ　オヽ、お辰さん、わたしは急に行かねばならぬ。
たつ　サア、心急きな事もござんせうが、マア、待つて下さんせいなア。
かぢ　用があるなら、キリ／＼云うて下さんせ。
たつ　マア、靜かにして下さんせ。成る程、女團七と噂する通り、けうとい者ぢや。シタガ、最前の田舍客を、筋道の立たぬ事をしなさんしたが、わたしは、あのやうな事を見ると心が濟まぬわいなア。
かぢ　なんの用かと思うたら、その爭ひでござんすかえ。氣味の惡い物の云ひやう。ア、聞えた。誰れぞに賴まれなさんしたのぢやな。
　ト大九郎、上手へ出かけ居て
大九　オヽ、此方は、お辰の氣性を賴みに
たつ　女子同士の達引きに、お前方が出ては惡いわいなア。
大九　オヽ、見物いたさうか。
たつ　最前、茂兵衞どのと、德兵衞どのの出入りの最中、傳八さんの身の難儀、餘所に見られぬ男の意氣地。お前が男であつたらはと、德兵衞どのも殘り多う思うて居やしやんした。主の代りにこのお辰が、この場の喧嘩は買ひました。
かぢ　男同士の達引に、お前が喧嘩買うたとは、わたしや江戸ッ子、直が高い。お氣の毒だが滅多には。
たつ　サア、高いも承知、お江戸生れのお梶さんに、都育ちのこの辰が、こんな事を云うたなら、罰が當ると皆さんの、お叱り受けうがどうせうが、わたしも女子のこれでも端。三味線の細竿に、引き出すからは、これ程でも、後へ根〆の狂はぬが、そこが異名の一寸お辰。
かぢ　ひかしやんすなら、どなたでも、相手嫌はぬお轉婆者、そこがお江戸の花がつみ、淸い水道の水調子、古いせりふを新らしく、洗濯浴衣の團七縞、手織の糸巻てんじんへ、引き上げられて紙駒の、ふつつり切れぬ其うちに、海老尾がよからうぞえ。
たつ　そこを素直に歸らぬが、ちつとはお江戸の糸道に、京紅さしたこの指に。
かぢ　ついたとあらば面白い。女子同士のこの場の出入り。
たつ　頃も皐月の
かぢ　花菖蒲。
たつ　胸の二上り

かぢ　三下り

たつ　命の調子

かぢ　合はぬか。

たつ　合ふが。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト立廻ろ。向うより、三婦、むきみ笠を冠り、勘吉が屆けし文を握り、出て、緣臺を見込み、一散に來り

三婦　ヤア、待て〳〵〳〵。

たつ　止め立てして

かぢ　怪我さしやんすな。

ト三婦、上手の開張札を引き抜き支へる。兩人、札の柄を切り落す。三婦は、お辰の白刃を打ち落す。お辰は大九郎の刀を抜き取り、切り結ぶを、三婦、眞中にてよろしく押へ、笠を捨て、キッと見得。

かぢ　ヤ、、お前は釣船の三婦さん。

たつ　そこ退いて下さんせいなア。

三婦　イ、ヤ退かねえ。切ッつはッつは愚かな事、鎗、鳶口のその中へも、素肌で飛び込み始末を附けるが、おれが老舗だ。それは格別、今年はこの土地へ、當時名うてのお主達、二人が丁度落合つたゆゑ、粹なやうでも女の事、いぢり合ひでもしなけりやいゝがと、案じて居たが魚と水との噂を聞き、おれが氣を許してゐる間にこの始末。コレ、わいらに喧嘩をさせては、いづれも樣へおれが濟まねえ。喧嘩の起りを小短かく、話して……聞かしやれな。

たつ　先刻代地の一部始終、相手の非道を並べるは、叶はぬゆゑぢや、卑怯ぢやと、下げしまるゝが口惜しい。

かぢ　止めるを機に、三婦さんへ、濟まぬ立入れ、預けたと、戸の閉てられぬが人の口、死ぬる生きるの方を附けねば、白刃を引かぬ。そこを退いて下さんせいなア。

三婦　フム。さては、わいらは色事出入り。男一人をばッちら合ふのだな。イヤ、野暮な事を云ふ奴だ。コレ、色事出入りに三法あるワ。先づ上々の分別は、さつぱりと思ひ切り、兄弟分の杯して、向うの相手に添はせてやる。中位の所が人を入れ、手切れを取つて別れるのだ。下々は二人並んで居る所へ飛び込み、女の耳と男の鼻を切つ削いで、干し固めて簪の差込みにして、腹を癒るのだ。コレ、世間に男は撰り取りだ。おれに任せてこの出入りは、預けてくれろえ。

ト橋がゝりより、勘吉、釣船と記せし弓提灯を持

ち、雀松、附いて一散に出て

勘吉　親方、爰にごんしたか。ソレ、灯だ。

三婦　エヽ、何をしてゐやアがる。

ト提灯を取る。

たつ　そんなら、この場は釣船の

かぢ　お父さんの詞を立て

三婦　すつぱり預けて

かぢ　サア、お前から。

たつ　サア、お前から。

三婦　ソレ、灯で見ろ。

かぢ　焼刃金色差し裏表。

たつ　そんならこれが、千壽院丸とやらでござんすかえ。

大九　ドレ、その刀をおれが。

三婦　どつこい……そんなら、それが。

たつ　お梶さんと云ひ合はせ、騙して寶を取るやうに

かぢ　仕組んだこの場のこの出入り

三婦　巧く行つて、めでたい〳〵。

大九　ヤア〳〵、そんなら仕返しすると云つたは僞り、千壽院を取らうばつかりか。

たつ　アイナア。最前、手に入る密書にて、委しく知つた刀の中身。

三婦　おれが所へ文を寄越し、駈けつけ見れば二人が喧嘩。首尾よく行つた狂言の、筋は櫻田治助なり、仕組みはおれが誂らへだ。さうとも知らぬ二本棒。ほんに間抜けな、あの面はえ。アハヽヽヽ。

大九　さう云や、いつそ。

ト落ちたる脇差にて打つてかゝる。橋がゝりより才六、走り出て

才六　お梶さん〳〵、悪者めらが、源七さんを駕籠へ打込み、芝の新錢座とやらへ連れて行かんした。

かぢ　エヽ、あなたを人手に渡しては

たつ　盡せし辛苦も皆無駄事。

才六　わしらも共々

三婦　男まさりのこのお梶、却つてわいらは足手まとひ

かぢ　連れ行く先は新錢座。

たつ　怪我せぬやうに。

三婦　ちつとも早く

かぢ　合點ぢやわいなア。

ト傳八、後より支へるを投げ返し、一散に向うへ入る。

三婦　これから此方は、此奴らを
たつ　爰は人込み、もう好い加減に。
三婦　イヤ、これからわいらを連れて行て、刀の出所、まだ外に聞き出さにやならぬ事がある。
ト橋がゝりより、茶屋男出て來て
茶屋　モシ、お辰さん、柳屋のお客がお立ちでござります。
たつ　そんなら、わたしはお客を送つて
三婦　オイ、明日逢はう。
トお辰、上手へ入る。
大傳　そんなら、二人を。
才六　わしらが、しよびいてナ。
三婦　ナニ、こんな本棒めらは、天水桶に湧いたぼうふらだ。所でおれが參議篁氣取りで歌を詠んだ。
四人　ナニ、參議篁とは。
三婦　だぼうふら彌次馬つれてごてつかん、人手に掛けず馬鹿を釣船。
大傳　そんなら、どうでも。
三婦　おれと一緒に。
大傳　ところを。

ト又かゝるを、立廻つて、兩人の小手を取つて、其まゝ花道へ來り、兩の腕を一緒にかつぎ、見得、この仕組み　よろしく幕

三幕目　築地ヶ岡殺しの場

役名——藝者、團七縞のお梶。同、一寸縞のお辰。飾磨大九郎。三河町の義平次婆アおかん。

本舞臺、向う一面、土手の練塀、所々に植込み、よき所に刎れ釣瓶の井戸、この奥の方に柳の立木、同じく吊り枝、すべて、築地ヶ岡の體。爰に仲間、八助、駕籠屋、よき所に繩にて搦げし四つ手駕籠を下ろし、汗を拭いてゐる。屋體囃子にて、幕明く。

八助　ヤレ〳〵、素敵に駈けました。
仲間　がつかりとしましたよ。
ト上手より、大九郎出て
大九　御苦勞々々。併し、これまで來りやア氣遣ひはないと云ふものだ。

仲間　なにサ、商賣づくでござりますよ。
ト早めの合ひ方にて向うよりお梶、走り出て來り
かぢ　アヽ申し、その駕籠待つて下さんせ。
大九　ヤア、お梶めが。ソレ、駕籠をやれ。
兩人　合點だ。
ト駕籠を舁き上げようとする。お梶、本舞臺へ來り、駕籠の棒端を取つて
かぢ　マア〳〵待つて、下さんせいなア。
大九　オヽ、誰れかと思へば藝者のお梶、一寸のお辰と云ひ合はして、よくもひどい目に遭はしたな。
駕中　まだその上にうせたのは
大九　なんぞ用でも
皆々　あつての事か。
かぢ　アイ、この駕籠の內のお人が欲しさ、どうぞ返して下さんせいなア。
八助　それ程欲しけりや
皆々　ねえ旦那。
大九　オヽ、欲しけりやア駕籠から
皆々　出して行け。
かぢ　申し淸七さん、さぞ悧りなさんしたでござんせう。

ト駕籠を解き、垂れを上げる。中におかん居て
かん　オヽ、駕籠の內の代物はおれぢや
ト前へ出る。
かぢ　ヤヽ、お前は母さん。
ト悧りこなし。
かん　娘、よう貰ひに來てたもつたなう。
かぢ　ムウ、そんなら淸七さんと思ひの外。
かん　オヽ、この義平次お婆ぢやわいなう。
かぢ　ムウ、そんなら、これも云ひ合はせて、深い所へこの梶を。
かん　深いも淺いも入る事ぢやない。わしを助けようとて、それで貰うてくれたぢやないか……でも、孝行者ぢや。サア、連れて行つてくれ。手を引いてくれるか。おんぶしておくれるか。
かぢ　エヽ、人の心も知らず、面白さうに戲むれ事……こりや、外を尋ねるまでもない。コレ母さん、今日の晝の體裁と云ひ、定めてどこぞの衆から賴まれて、淸七さまを盜み出し、わたしを一杯やる仕事。モシ、淸七さんを早う返して下さんせいなア。
かん　そりやマア、なんの事ぢやぞいなう。

かぢ　なんの事とは、しら〴〵しい。あの淸七さまは、父さまが大恩ある、玉島兵太夫さまの御子息、もしもの事があつたなら、心盡しも水の泡。爰の道理を聞き分けて、どうぞ行くへを。

かん　否ぢや、知つても云はぬ……ヤイ、おのれが親は、團七の九郎兵衛といふならず者、後添ひに入つたも、どうで長うは生きぬと見込み、死跡取つて目腐れ金、まだも見込みは繼子のおのれ、大名へでも奉公に出し、もし殿樣のお手でも附けば、左團扇の樂隱居樣と、管領家のお館へ、奉公にやつたら、ヤツトウを見習つて、女の癖に力自慢。ア、儘よ、男の味覺えたりや、さうでもあるまいと、柳橋へ出して藝者商賣。それ程理屈吐かすやうにまで、誰れがその面倒を見たのぢやえ。思つた事は、皆ぐれはま。せめて、その入れ合せと思ふゆゑ、損料衣裳でお乳の人、うま〴〵やらうとした所へ、よう邪魔をし居つたな。コリヤ、淸七はな、持つてゐた助松の系圖を卷き上げ、疾に脇へこかしてしまつた。それから先は知らぬわいやい。

ト懷より、一卷を出して見せびらかす。

かぢ　サア、その系圖の一卷と、淸七さんまで殺されては、わたしの顏が。

かん　その立つの立たぬのと、理屈を云ふは誰れが所ぢや。

ト引摺り倒し、突き放す

かぢ　最前から云はしやんす事、無理はござんせぬ。モウモウこの後は、どんな事があつても、お前の邪魔は致しますまい程に、淸七さまの在所を、どうぞ云うて下さんせいなア。

かん　それ程欲しくば、淸七の行く先も敎へてやらうが、その代り、われが持つてゐる千壽院の、刀を此方へ。

かぢ　サア、そりや、爰に持つては居れど、これを上げては、お行くへが知れたとて詮なき事。こればかりはどうも。

かん　われが否なら、此方も否だ。

かぢ　そりや又お前、無理といふもの

かん　無理を云ふのは、親の高下ぢや。

大九　流石はお婆、あの申し分。今日の駕籠の趣向といひ、イヤ、なか〴〵狂言が面白い。ハ、、、、。

かん　もう、この上は手間隙入らずに、あの所へ行かうぢやないか。

大九　オヽ、さうとも〳〵。酒でも呑まうか。
かん　サア、駕籠も早う〳〵。
駕屋　ヘイ〳〵畏まりました。
　ト行かうとする
かぢ　コレ母さん、どうぞわたしの頼みをば。
かん　否ぢやわい。
大九　それほど欲しけりや、この世の暇を取らして聞かさう……ソレ。
　ト兩方より打つてかゝるを、キッと止めて
かぢ　もう料簡が。
大九　ナニ、猪口才な。
かぢ　二人とも、覚悟しや。
大九　駕籠の者、ぬかるな。
駕屋　合點だ。
　ト駕籠を楯に面白き立廻り。此うち、おかんは上手の刎れ釣瓶の上へ系圖を隠す。トヾ、大九郎は手を負ひ、駕籠屋と共に、橋がゝりへ逃げて入る。おかんはウロ〳〵して居る。
かぢ　コレ母さん、わたしが命は投げ出してござります。どうぞ淸七さまの行くへ、系圖の一巻、仰しやつて下さりませ。
かん　イヤ、わが身はお侍ひに手を負はせ、まだその上に、淸七さまの行くへを云はずば、阿母も殺す氣か。
かぢ　エヽ……なんのお前を。
かん　イヤ、殺すのであらう。サア殺せ〳〵……マア、うぬがやうな不孝者が世の中に、ようも〳〵あつた事ぢや。
コリヤヤイ。
　ト又お梶を引きつけ
どうしたら腹が癒えうぞ。斯うして〳〵。
　ト引き廻し、足にて踏み返し
なんぢや〳〵。その顔つきは、なんぢやぞいやい。コレ、親といふ名は重いぞよ。その親に向つて、その面はなんぢや。無念なか。オヽ、可哀や〳〵、マヽ、泣く顔へこれ喰へ。
　ト草履にてくらはす。
かぢ　チエヽ。ハア、。
　ト泣き落す。
かん　オヽ、悲しいか。道理〳〵。その涙を、この泥草履で斯うして拭いてやらう。
　ト草履を摺りつける。

かぢ　エヽ、母さんでなくば。
かん　殺す氣か。サア殺しや。コリヤ、親殺しだぞよ。一寸切つたら一尺の、竹鋸で引き返す。サア、切つて見や見や。
かぢ　アヽ、なんのマァ申し、勿體ない、危ぶならござりまする。申し母さん、もうこれ程になされたら、お腹も癒やう。どうぞ系圖の一卷を。
かん　如何にも遣らう。斯うして〳〵。
ト懷より出し、引裂き投げつける。
かぢ　ヤヽ、こりや大切な一卷を。
かん　破つたら、なんとする。
かぢ　もう是非に及ばぬわいなア。
ト渡り拍子になり、土手の向うを祭の花車の通る仕掛け。お梶に、これで切れと刀を差しつけるはずみに、思はず手を負ひ
かん　ヤア、切り居つた。親殺しぢや〳〵。
ト云ふ口を押へて、體を探り見て
かぢ　アヽ、コレ、ほんに怪我とは云ひながら、この深手では助かるまい。惡い人でも義理ある母さん、あの世でお詫び致します。免して下さんせ。
ト思ひ切つて、一栫切る。立廻りあつて、おかん倒れる。途端に本雨降る。止めを刺し、懷より冇中を改め一卷ないゆゑ、ウロ〳〵して刀を刎れ釣瓶にて洗ふ。釣瓶の上より一卷落ちる。お梶、探り見て、押戴く。向うより四つ手駕籠舁き、駕籠屋出て來る。お梶、悃りして、駕籠の提灯を切り落す。駕籠屋、駕籠を置いて橋がゝりへ逃げて入る。お梶、おかんの死骸を拜み氣を替へ、行きかける。駕籠の垂れを上げ、お辰出て、お梶を支へる。お梶、お辰を突き退け、花道へ行く。
たつ　何やら怪しい。
トお梶、礫を打つ。お辰、下に居て、お梶の落とせし簪を拾ひ取り、合點のゆかぬこなしにて、立ち上がるを木の頭。お辰、簪を透し見る。お梶は、一散に向うへ入る。これをよろしく、
拍子　幕

四幕目

中通り但馬屋の場
今川橋玉島屋の場

役名――もつれ髮の德兵衞。但馬屋九平次。後

家、妙願。娘、お仲。但馬屋清七。京檀の才六。對談人新兵衞。家主、太郎兵衞。三婦女房、おつぎ。助松主計。大島村の佐賀右兵門。仲買ひ彌市。番頭、傳八。木片の權次。生の八五郎。團七の茂兵衞。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、見附け茶壁、納戸口、上手、戸棚、帳場格子、状差し。下の方、水さし、貸盆、硯箱、その外小道具を取散らし、向う茶器道具の書割り。例の所、門口、この側に格子造り崩れろやうに、この道具誂らへ、すべて中通り但馬屋見世先の體。幕の内より妙願、老けたる婆アにて朱呂箒を持ち、娘お仲、振り袖娘、これを打たうとしてゐる。才六、前幕の形。下女、これを留めて居る。見得。てんつゝ、神輿太鼓にて、幕明く。

才六　マア〳〵、お待ちなされませ。

妙願　イヤ〳〵、わしが存分にせにやアならぬわいの。

なか　才六、母親にお詫びしてたもいの。

才六　サア〳〵、ようござります。何もかもわしが呑み込んで居ります。コレ、阿母さん、今日は若旦那清七さまも、讓り状開きで、町内のお組合へござりました。その上、お仲さまも、お眼は惡うごんすし、マア、御料簡なされませ。

下女　甥御の九平次さまと御一緒に、お出でなされましたお留守。マア〳〵、お堪忍なされませ。

妙願　何をわいらが知つて居やうぞ。あの野良息子の清七が事と云ふと、お仲めが口出して、贔屓するに依つてぢや。

なか　イエ、清七さんはこの間から、名前弘めの事で町内のお方々へ、毎日々々何やかやの問ひ談合。それで内にお出でざれぬを、あのやうに云うてぢやわいの。

妙願　それ〳〵、矢ッ張り清七が事。いらざる父なし兒に、親の心子知らず、どうしてこまさう。

才六　ハテサテ、清七さまが跡目に直つてなら、差詰め旦那樣、お仲さまの大切の聟樣。

下女　執成しなされますも、お道理ぢやござりませぬか。

妙願　同じやうに、つべこべと。エ、腹の立つ。

トまた箒を振り上げる。才六、留める。てんつゝになり、向うより、家主太郎兵衞、證文箱を持ち、九平次、清七、羽織好みの形。丁稚、風呂敷包みを持ち出

て來り
九平　今日は御苦勞でござります。
太郎　イヤモ、これも町內の役。苦勞にもござりませぬ。清七どのも阿母にも逢うて話し合ひませう。
清七　何かは宿元で承りませう。
ト門口へ入ろ。妙願、箒にて皆々を追ひ廻し、ずつと入る太郎兵衞をくらはす。
太郎　アイタヽヽヽ。
才六　ヤア、お家主。
なか　清七さん、お前の歸りを待ち兼ねて居りましたわいの。
清七　お仲、母者人は、なんで腹立てゝぢや。
妙願　なんでとは清七、わが身の事。
九平　コレサ伯母さん、何も云ひなさんな。伯父樣の讓り狀は、但馬屋の跡式地面家財、有り金をこの九平次に讓るとある、遺言でござります。
妙願　オヽ、さうであろ〳〵。そんならお家主樣、會所で讓り狀お開きなされたら、その通り書いてござりましたか。
太郎　文言に違ひはござらぬ。

なか　モシ清七さん、そんならアノ九平次さんが、跡目を繼がしやんすかいなア。
清七　讓り狀の文言、親仁どのゝ自筆ではなけれど、慥かに印形。
妙願　死人に文言と云へど、書いた物が物を云ふ。甥と云へば子も同然の九平次。
才六　そんなら爰の旦那樣が。
九平　今日からこの九平次、跡式は勿論、家財地面もおれが自由。氣にくはぬ奴らは、片ッ端から、叩き出す分の事。
妙願　それ〳〵、今も今とて淸七が身持ちの事云や、贔屓するあのお仲。九平次、云つてやりやいの。
九平　ハテ、大事ござりませぬ。跡式讓り狀受けるからはこの九平次が詞を背く奴はない筈。お仲は手代の傳八と娶合せ、地面一ケ所、相應な所へ別家の暖簾。私しが片腕に致す料簡でござります。
妙願　成る程。あの傳八も、何かの內幕に取込んで置かねば、また香爐の……イヤ、孝行盡して老の氣に入るであらう。ナウ九平次。
九平　左樣でござります。

なか　イエ〳〵、跡目は九平次さんがお取りなされても、わたしや矢ッ張り清七さんと女夫に。

妙願　ヤイ〳〵、また云ひ居るか。跡目相續した九平次が云ふ事を、我儘云うたらわしが聞かぬぞ。

なか　それでも清七さんは、幼ない時分から、此方の內へ養子にお出でなさんしたも、父樣がわたしと女夫にすると云ふ約束。

九平　コレお仲、母者人に口答へは、親の云ひつけ背くのか。清七、てまへも承知であらうか。

清七　成る程、私しは幼少の時から養子の身分。併し、里方の兄者人。助松主計どのへも、一應この事を。

妙願　清七、そりや何を云ふのぢや。わが身の實の兄貴助松主計どの、見事屋敷をしくじつて、此方の內へかゝり人。話しもへちまもいるまい。但し、わしより云ふ事を承知……九平次、兎やかうと面倒な。ちやつとぼひ出してしまふがよいわいの。ごろ〳〵と邪魔になる。ドレ、箒で掃き出してやりませう。

ト朱呂箒にて、清七を掃き出しにかゝる。才六、お仲、下女、妙願を留める。皆々門口へ突き出す。唄になり、向うより、助松主計、着流し大小、竹笠を持ち出て、花道にて思ひ入れ、舞臺へ來り

才六　ヤア、主計さま。

清七　兄者人、只今お歸りなされましたか。

主計　清七、門口へ出て何事ぢや。

ト妙願を見て

阿母樣、只今歸りました。

ト妙願上手へ、九平次、思ひ入れあつて、お仲、主計の側へ行き

なか　主計さま、好い所へお歸りなされました。お前がお出でなされぬゆゑ母樣が。

主計　イヤ又、才六がお年寄に逆らうてか。何かは存じませぬが、私しが挨拶に及びまする。オヽ、九平次さん、今日はまだお目にかゝりませぬて。今日は用事ござつて、早朝より本所へ參りましてござります。

九平　主計どの、本所へ今朝から行つたとは、大方米相場の勝負事。とたんをして救ふと思ふは素人料簡。併し、それも好いてする事、構ひはせぬが、一枚着物を脫いで元を摺るより、高砂の能の曲でも浚つて置くが近道。ナア伯母御。

妙願　サイノ、浪人者の居候ふが、米相場のと云ふと、負

けりやアとたんの拍子に、御無用も虚無僧どころか、孤かぶりにならうも知れぬ。ハ、、、、。
主計　清七、また何を御隠居の機嫌損うたのだ。
妙願　イヤ〳〵主計どの、養子親の云ふ事聞かぬあの清七。家の主が追ひ出してしまふのぢや。
主計　但馬屋の跡を繼ぎまする清七は、この家の主、それに又、主が追ひ出すとは。
九平　合點がゆくまい。死んだ伯父御の讓り狀、今日町内の寄合ひで、お家主が開いたら、この跡式は殘らず九平次に讓るとある遺言狀。今日から但馬屋の跡式承りはこの九平次。
なか　死なしやんした父さん、ひよんな讓り狀で、わたしや清七さんの身の上。
主計　ハテ、但馬屋九右衞門どのは、屋敷へのお出入り、格別の仔細ゆゑ、其方を町家へ養子。それに又跡式を他人…イヤ、伯父御の讓らう筈がないが、その讓り狀、ちよつとこれへ。
九平　見たくば讀んで聞かさう。お家主、ちよつとその箱。
　ト箱の中より證文を出し

一つ、讓り狀の事、居宅町屋敷三ケ所、有り金諸道具殘らず讓り申し候ふ所實正なり、一家の者どもへ配分いたすまじく候ふ事、跡式相續賴み入り候ふ、讓り狀仍つて件の如し。年號月日、九平次どのへ、但馬屋九右衞門判
……この通り伯父御の遺言狀、とつくりと見たがよい。
主計　成る程、九右衞門どの、自筆ではなけれども、慥かな印形。
太郎　町内の年寄衆と立會ひで見られたが、遺言とあれば九平次どのが。
主計　但馬屋の跡式相續は、九平次どのとなれば、淸七事は九右衞門どのゝ養子、今となつて如何樣な事があらうとも、追ひ出す事はなりますまい。
九平　清七は幼い時からの養子は、云はずと知れてある事。重荷に小付けの居候ふ。貴樣、どう云ふ事で追ひ出す事はならぬとは。
主計　上州箕田の若殿、左門之助さま、惰弱のお身持ち。大殿の御用金五千兩使ひ遊ばされし事、上聞に達し、既にお家の瑕瑾ともなるべきところ、お納戸役兼帶の某、五千兩の金子は拙者がこもう致せしと、覺悟極めて申し出でしゆゑ、左門之助さまは御安泰。重き罪科になるべ

き某なれども、御憐愍の上五百日のお暇賜はり、右の金子償ひ上納いたさば、先知に返し下されんとあつて、即ち但馬屋九右衞門、お國元の御用のお庇と云ひ、弟が緣あるを以て、この家へお預け。さすれば一通りのかゝり人でもなく、弟とても御國元の大殿のお指圖にてこの家へ養子。假初めに追ひ出す事はなりますまいが。

妙願　謂れを聞けば有り難い。殿樣の料簡で、貧乏神の筋が知れた。

九平　それで米相場やとたんをするのは、その金を入れ合はうと、當途なしの金の工面。併し、そんな事ならあの淸七お仲と婚禮させて、外へ家を出さうと、儘にしたがよい。

なか　そんなら淸七さんと、矢ッ張り女夫になられるかいなア。

妙願　コレ〳〵、お仲と淸七が婚禮しては。

九平　ハテマア、ようござります。わし次第にして置くがようござります。

ト太郎兵衞、風呂敷包みより曼陀羅の一軸を出し

太郎　時に各々、得心の上ならば、改めて申さねばならぬ事がある。この曼陀羅は高祖の自筆。先の九右衞門どのが、町内の年寄中へ預けられたは、お仲と夫婦になる者へ、渡してくれと我れらへ賴みの遺言なれば、婚禮の上で、淸七どのへ讓ります。

妙願　ハテ、死んだ佛も、馬鹿念の入つた人ではあるぞ。

太郎　先づ後まで大切にして、しまつて置かつしやれ。

淸七　畏まりました

ト簞笥の抽出しへ入れて錠を下ろす。九平次、思ひ入れあつて

九平　跡式讓り受けた祝儀。一つ上げたい。ナウ伯母御。

妙願　それ〳〵。町内の弘め何やかや、お聞き合さにやならぬ事だらけ。

九平　お家主を連れ申して、御馳走申しや。

妙願　お仲、御挨拶したがよい。

太郎　そんなら御馳走になりませうか。

妙願　南無妙法蓮華經。お題目も砂を嚙むやうだ。

ト唄になり、家主先に妙願、淸七、お仲、才六、下女、主計、奧へ入る。

九平　伯母御と云ひ合せ、讓り狀の吹替へをくはせて、この跡式を丸吞み。兎角邪魔になるあの主計め。併し、彼奴も金が出來ねば、屋敷へ引かれてころりばつたり。最

前家主が持つて居た眞筆の曼陀羅。お仲と淸七に婚禮さすと云ふばかりで、出して見せた大べら坊。こいつも吹替へをくはせて、その上で彼奴等を追ひまくる算段。今のうちに。

ト始終合ひ方。あたり見廻し、簞笥の錠をこぢり明ける。この時、向うより、但馬屋傳八、木片の權次、生の八五郎、外一人、惡者の拵らへにて出て、傳八、側へ寄り

傳八　九平次さん、コレサ、九平次さん。

ト九平次、愕りして

九平　エ、傳八か。愕りするわい。

傳八　お前の云付けの通り、あの手合ひを賴んで來ました。

ト九平次、手を出し敎へる。外へ出て

權次　九平次さん、委細は傳八どのに聞きましたが、後に惡樽を持ち込んで、喧嘩を仕掛け淸七めを。

九平　ヤ、コレ。

ト押へて囁く。權次、八五郎に囁いて

八五　今日は中通りの但馬屋に婚禮があつて、爰へ云ひ合せて行く積り。

惡者　纏れ髮の德兵衞が出入り場。わしらがごたつく日には、物を云ふ奴もごんせぬ。

權次　わしが親方の指し金、如才はござりませぬ。

傳八　なんでも日の暮れぬうちに來て、世間へ外聞惡くやつてくれ。

權次　そんなら、おれと一緖に今の物を早く。

八五　合點だ。

九平　コレ、靜かに〳〵。

ト三人囁く。向うへ入る。九平次、傳八、殘り

傳八　九平次さん、何かの相談はよいが、今お前持つてござりましたは。

九平　こりやこの家の株札同然、高祖の眞筆。お仲と聟に讓れと、九右衞門どのが別れの遺言と、家主めが持ちうせたを、あの簞笥から盜み出し置いたも、あの淸七めを追ひまくる算段。

ト懷中より以前の一軸を出して見せる。

傳八　そりや好い事なされました。それにつけても、兼ねてお前が大九郎どのから預かつた浮牡丹の香爐、質に入れた百兩の催促。お前の所へ來た手紙。お行の松で思はず

九平　ハテ、大事ない。但九とばかりあつた手紙。大九郎と名がなければ、詮議は滅多にない筈。
傳八　イカサマ、それで落ちついたと云ふもの。
丁稚　九平次さん〳〵、お呼びなされます〳〵、
九平　オイ〳〵今行く……傳八、この曼陀羅はちつとのうち貴公へ。
傳八　合點でござります。
丁稚　九平次さん〳〵。
九平　エ、やかましい。今行くわい。
ト慌てゝ奥へ入る。傳八、思ひ入れあつて
傳八　古いやつだが、こんな物は、隱し所が肝心だ……有りふれた手水鉢はなし、この間せしめて置いたこの百兩、後日の詮議の時に邪魔になる。これも一緒に……オヽ、あるワ〳〵。あの水さしへ。
ト二重の水さしを明けて曼陀羅と件の金を隱して
エヽ、斯うして置けば、氣の付く氣遣ひなし。巧い〳〵。
ト立つたり居たり水さしを見て居る。奥より、丁稚、出て來り
丁稚　番頭さん〳〵、コレ番頭さん。
ト脊中を叩く。悔りして

傳八　エヽ、なんの用だ。
丁稚　隱居さんが、ちよつと來いと。
傳八　オヽ、今に行くよ。
トこれにて丁稚、奥へ入る。矢張り水さしを見て居る。奥にて
金八　傳八どん〳〵。
傳八　オイ。
金八　傳八々々、傳八どん。
傳八　オヽオイノオイ……ヤレ、忙しない。
ト唄になり、傳八、奥へ入る。向うより、新兵衛、羽織町人の形。女房おつぎ、世話女房にて、日傘を手に持ち、花道にて
つぎ　そんなら御案内なされて下さりませ。
新兵　サア〳〵、わしと一緒にござりませ。とつくりと聞き合せて進ぜませう。
つぎ　是非お目にかゝつて、せいらく致さにやなりませぬ。
ト舞臺へ來て
新兵　お宿にござりますか。
九平　オイ〳〵。

ト云ひながら出て來り

つぎ　ハイ、お免しなされて下さりませ。

九平　オヽ新兵衞どの、見馴れぬ女を連れて、なんぞ用があるか。

新兵　イヤ、この女中さんが、內方に金の貸しがあつて、返さないゆゑ、わしが所へ屆けに見えました。是非でんどに及ぶとあるゆゑ、先づ同道いたしてござります。

九平　ついに見た事のない女中だが、此方に金借りた覺えござらぬ。

つぎ　其やうに仰しやるゆゑ、詮方盡きて願ふと云ふのでござります。女の貸した金ぢやに、大方その月から利子もおこさず、さう酷うはせぬものぢや。

九平　コレ女中、こなたは何所の人だ。いくら金貸したか知らぬが、地面屋敷もあるこの但馬屋。女子の金借りやう筈がない。

つぎ　筈があつてもなうても、貸したに違ひなけりやこそ、御催促もします。

九平　コレ〳〵、伯母御々々。

トこの時、奧より、妙願出て

妙願　騷がしい。こりや何事ぢやぞ。

九平　伯母御、この女中が但馬屋の內に、金の貸しがあると、新兵衞どのを連れ、願ひにも及ぼうと云つて來ました。お前、覺えござりますか。

妙願　イヤ、先に貸した事ぞあれ、一文も借りと云ふはないが、ア、聞えた。大方野良息子の淸七めが、阿房遣ひに他愛もない金借りたのであらう。女中さん、さうかいなア。

つぎ　イエ、お貸し申したは、但馬屋九右衞門さま、爰の旦那に御用立てましたのサ。

妙願　コレ、その九右衞門どのは死なれた。この世には居られぬわいなア。

つぎ　サア、それも知つて居ります。跡目をお預かりなさるゝお方が、せいらくなされて下さらねばならぬ譯。女の物借りて、それなりにするとは、胴慾でござります。

九平　コレ、跡目を讓り受けたはおれぢやが、先づ九右衞門どのに貸したと云ふ、證文でもあるか。

つぎ　金貸して、證文取らいでよいものかいなア。

九平　その證文見よう。

つぎ　ソレ、九右衞門さんの證文、とつくりと御覽じませ。

トおつぎ、證文を出す。九平次、見て

九平　成る程、金貳百兩、家屋敷を書入れの證文。併し、こりや此方の判ぢやない。

つぎ　エヽ。

九平　但馬屋九右衞門の判でない程に、願ふなりとどうなりとしたがよい。

つぎ　ムウ。さう仰しやりますと、お前さん、謀判でござりますぞえ。

九平　イヤ、この女は口から出次第。謀判とは。

つぎ　總別、筐分けぢやの遺言のと云ふ物を書くと、その判は打ち碎くか、燒き捨てるが法ぢやげにござります。

九平　よくべらべらと口をきく女ぢや。千も萬もない。コリヤ。

ト首に掛けて居る袋より判を出し、鼻紙に捺して見せて

但馬屋九右衞門の實印はこれぢや。ソレ、とつくりと見たがよい。その證文の印形とは、似ても似付かぬ。まだ疑ふなら家主へ行て、人別の帳と引合せて見ろ。

つぎ　ほんに、このお判は違うて居るか、口入れした人が實印ぢやと云うたこの印形。違うて居るは、どう云ふ事ぢや。

ト證文と印形の紙と一つにして懷中へ入れる。

妙願　コレかみさん、こりや誰れぞに賴まれて來たの。此方の名前を騙つた奴があるであらう。

九平　願ふともどうとも、勝手にしたがよい。

つぎ　なんでもキツとせいらくせにやアならぬ。太い人さんぢや。モシ、天道樣が見てござります。

新兵　それでは一緒に歸りませう。

ト唄になり、おつぎ、新兵衞、付き添ひ向うへ入る。

妙願、九平次、思ひ入れ。

妙願　成る程、世の中には太い奴もあるものぢやなう。

九平　大方あんな事を、商賣にして居る奴がありませう。

トおつぎが落したる守り袋を取つて開き見て

ナニ、武藏の國の鄕士幸左衞門娘なる……こりや今の女が落して行つた守り袋。こいつもなんぞ役に立ちさうな物だ。

ト妙願と顏見合せ

ト思ひ入れ。太郎兵衞、淸七、お仲、傳八、才六、丁稚、出て來り

太郎　ヤレヤレ、いかい御馳走になりました。

清七　段々お世話にござります。お禮はゆるりと申しませう。

なか　お家主樣の御深切樣で、清七さんのお身も定まり、こんな嬉しい事はござりませぬ。

傳八　モシ／＼九平次さん、只今奥で聞きましたが、清七さまとお仲さまと、今夜祝言をなさるゝと、それでは。

太郎　ハテサテ、清七とお仲が婚禮したら、眞筆の曼陀羅付けてやつてくれと、こりや町内へ九右衞門どのが頼みの遺言で、讓り狀の外に、わしらへ預け置かれた事でござる。

九平　最前云ひ開かせた眞筆の……ナ、ソレ、曼陀羅なけりや、お仲を女房にしたところが……合點か。

傳八　エヽ、、成る程。左樣なものでござります。

才六　サア／＼、直ぐに今宵が吉日の婚禮。めでたく傳八さん、お前も謠でもやんな。

傳八　そんなどころぢやねえ。

　ト聖天の鳴り物になり、向うより、權次、八五郎、二人とも菰被りの樽を擔ぎ、後より、あぶれ者七人、出て來り

權次　お頼み申します。但馬屋さんはこちらでござりますか。御近所の若者どもでござります。今日は御祝儀があつて、おめでたうござります。後程御祝儀に參ります。わざとお祝ひ申します。

　ト進上と書いたびらを樽の上へ載せ

サア／＼、そつくり持ち込んでくれ／＼。

皆々　合點だ／＼。

八五　マア／＼、おめでたうござります。

權次　御祝儀に一つ〆めて行かう。

皆々　よからう／＼。

傳八　アヽ、コレ／＼、まだ祝言も濟まぬうち、祝儀の樽は受けますまい。

權次　イヤ、此方の內ばかりぢやアない。今川橋の玉島屋へも祝言があつて樽を入れました。それに今日はお祭の當日。その次手ながら祝儀に來ました。

八五　それ／＼、めでたく祝つて進ぜるに、いさくさはない筈。また後に祝ひに來ませう。

權次　めでたく一つ〆めて行かう。

皆々　ヨイ／＼／＼。

　ト皆々手を打ち、向うへ入る。

妙願　サア／＼、こりや困つた事が出來た。傳八、どうし

たらよからう。

傳八　どうと申して、ありや、このあたりの勇とみやら云ふ、若い衆が寄越した樽。迂濶に口をきくと、飛んだ目に遭ひます。

九平　なんでも淸七に意趣のあつて、惡樽を持ち込んだ樣子に見える。才六、こなた、好いやうに口をきいたがよい。

才六　飛んだ事を。どうして目論んで來る事に、滅多に口はきき憎い。併し、今川橋の玉島屋へも行くと云つたが、マア、樣子を見て、行く事ならやつて見ませう。

なか　才六、ちやつと行ておぢやいの。

才六　ドレ、行つて見て來ませう。

ト一散に向うへ入る。

九平　お仲と淸七が所へ、祝ひに來たのぢやに依つて、當人の淸七が出て斷わり云ふがよい。今川橋の玉島屋でも、當人が出て斷わり云ふであらう。イヤ又、めでたい事ぢやに依つて大事ない。

淸七　それで濟む事なら、挨拶も致しますけれども。

妙願　どうで爭となりや、それだけの事は受けにやなるまい。

太郎　淸七どの、誰れか顏の賣れた人を賴んで、口をきいてもらふがようござりませう。

なか　淸七さん、誰れぞ強い人を賴んで、挨拶してもらうて下さんせいなア。

ト向うバタ〳〵にて、才六、走り出て、直ぐに内へ駈け込んで

才六　豪勢々々。

皆々　どうした〳〵。

才六　なんでも裏町からかけて、あそこら中の勇みの手合ひが、われは玉島屋へ行け、おれは但馬屋へ行くと、談合して居ります る。

皆々　もう來るのか〳〵。

才六　恐ろしい權幕でござります。

淸七　こりや、なんでも意趣があつて、樣子のある事と見えるわいの。

才六　そこで玉島屋では、釣船の三婦を賴むと云ふ噂でござります。

太郎　釣船の三婦なら濟むであらうが、此方も顏の賣れた人を賴むがよい。

なか　お前の心安い、德兵衞さんはどうでござんすえ。

才六　サア、そりや如才はない、寄つて見たら、德兵衞さんは山へ行つて留守とやら。
なか　外に誰れぞないかいなア。
才六　外にと云つたところが……オヽ、あるく、思ひ出した。
清七　誰れぢやく。
才六　わしが所に逗留して居る、上州の客人、茂兵衞はどうであらうな。
清七　ほんに、それく、茂兵衞がよいく。
太郎　早く呼んで來たがようござらう。
清八　ア、コレ、茂兵衞は上州者、他國の人で埒が明くものかいの。
妙願　顏の知れぬ田舍者が出ると、なまじい邪魔になるであらうぞや。
才六　イヤ、それでも人の知つたる館林の茂兵衞、ドレ、おれが呼んで來ませう。
なか　どうぞお賴み申しまする。
太郎　ドレ、そんなら一緒に行きませう。
ト兩人、一散に向うへ入る。
傳八　イヤ、茂兵衞を爰へ呼んでは、外にちつと。
ト駈け出さうとする。九平次、留めて
九平　傳八、捨てゝ置け。茂兵衞が來ても誰れが來ても、云はゞ他國の者。この九平次が何事もな。氣遣ひせずと、マアく、呼びにやつたがよい。
妙願　要らざる他國者の口利き、毛を吹いて疵とやら。ひよんな事が起らにやよいが。
ト誂らへの鳴り物になり、向うより、茂兵衞、着流し羽織を手に持ち、才六、付いて來り、
才六　丁度好い所で逢ひました。早く行つて下さりませ。
茂兵　譯も云はずに早くくと。マア、靜かにしたがよい。
ト云ひくヽ舞臺へ來り
其方、先へござらつしやい。
才六　サアく、團七茂兵衞を連れて來ました。
清七　茂兵衞どの、よう來て下さりました。爰へおぢや。
茂兵　どなたも御免なされて下さりませ。
ト内へ入る。九平次、妙願、思ひ入れあつて
才六　内へ呼びに行く道で、丁度好い所で逢ひましたに依つて、連れて參りました。
茂兵　コレく清七さん、何か才六がせわしなく、大事が

ある、來てくれと、呼びに參りましたゆゑ、悯りして參りました。何事でござりますか。
清七　イヤ、別の事でもござらぬが、今宵お仲と祝言を致しますについて、近所の若者が祝儀の樽を持つてござつて、晩に呑みにござるとの事でござります。
茂兵　左樣なら、いよ〳〵お娘御と祝言が極まりましたか。私しは何かお內の跡式が、どうやら斯うやらと聞きましたに依つて、もしやその事について。
ト九平次、妙願を見て
かと存じましたが、マア、お跡式は清七さんになりましてござりまするか。
清七　イヤ、家の名前はあの九平次、この清七には親仁樣が遺言で、お仲と祝言の上、別家さすとある事でござります。
茂兵　親旦那の御遺言とある事なら、御祝言なされ、別家なさるは、マア〳〵、おめでたいと申すもの。それで私しを呼ばつしやりましたのでござりますか。
清七　最前樽を持つてござつた若い衆へ、挨拶がしてもらひたうござります。
茂兵　そりや、めでたく祝つて下すつたを、忝ないと禮を云ふのでござりまするか。
才六　イエ〳〵、團七どの、それで濟む位なら、この才六が眞中で挨拶するが、なか〳〵さう云ふ事ではない。
茂兵　ムウ。さうして、どう云ふ挨拶をするのだ。
清七　樽を先へ持ち込んで、後に祝儀に來ると云ふは、暴れに來るのでござります。
茂兵　エヽ、そりや、なんで暴れに來るのでござります。
才六　なんでもレツを持つた人と見りやア、意趣を憎んで暴れに來て、喧嘩を仕掛けに來るのでござりまする。
清七　少々の詞尻を取つて暴れるやら、內を壞すやらでござります。
茂兵　ムウ。お內の人は九平次さん、別家なさるゝ清七さんの祝言、惡樽を持ち込んで……こりや何か、樣子のありさうな事でござります。
九平　祝言の酒樽を入れしは、婚禮する聟を目當、上下にて挨拶に行けば、濟みさうな事なれど、意趣受ける覺えがあらば、挨拶人頼み。なんの誰れも人の知つたきほひなら、得心する事もあるに、ナウ伯母御。
妙願　サイナウ、なんでも祝言する聟が目當の、云ひ合せと見える。

才六　今川橋の玉島屋にも、祝言の惡樽を持ち込んだを、挨拶人が入つたと云ふ事。
茂兵　そんならその若い衆が、暴れに來る時、手もなくわしが出て、開いて濟む事なら、よいと云ふ事か。
清七　それ〳〵、どうぞお賴み申す。
茂兵　そりやハヤ、お前のお賴みなさるゝ事、易い事ではござりますが、モシ、その挨拶聞かぬ時は、どう致しまする。
清七　エ。
茂兵　さればサ、先の者が、茂兵衞が挨拶なら料簡せうと預ければよけれど、誰れが挨拶でも嫌と云はれた時に、そんならよいわで、それなりにしては、足骨が立たぬやうな茂兵衞なら、賴まつしやりました所が甲斐もない事。また向うの口の利きやうで、此方もそれだけの事を云はにやア、なんぼ上州館林の田舍者でも、土地所の外聞、事に依つては命づく。そんならと云つて親もあり、女房もある者が、譯道も解らぬ無法な奴を、相手にするは何とも。
傳八　エ、コレ、斯う云ふ時に德兵衞が居たら賴むのに、何を云うても居ないゆゑ。

清七　茂兵衞どの、面目次第もござりませぬ。あの才六が由緣で、馴染もない私しが、段々とこの間よりのお世話は、兩國で證文の譯みんな才六に聞きました。恩のあるこなた樣に、此やうな事をお賴み申し、茂兵衞に任せて置けば、死なばそれなりそれ次第と、我が腹の痛まぬ事ゆゑ、さりとは無理な賴みを云ふものぢやと思ふでござりませう。御料簡なされて下さりませ。
ト清七、簞笥の抽出しより脇差を出し、ツカツカと門口へ出かける。お仲、留めて
なか　モシ清七さん、お前、血相變へて、何所へ行かしやんす。
清七　ハテ、祝儀を持ち込んでくれた若い者の所へ。
なか　コレイナ、お前に意趣を含んで居る、大勢の中へ行かしやんして、もしもの事があつては、わたしやどうせうと思はしやんす。マア〳〵、待つて下さんせいなア。
ト留める。清七、チッと思ひ入れ。
妙願　清七、うぢ〳〵と、なぜ挨拶に行かぬぞ。
傳八　モシ、早くござりませや。サ、、、。
ト手を取つて門口へ出さうとするを、茂兵衞立つて、清七、お仲、兩人を圍ひ、門口を締め、傳八を突き廻

し、ズッと前へ出て

茂兵　頼まれて進ぜませう。

清七　頼まれて下さりまするか。

茂兵　挨拶をキッと頼まれて進ぜませう。

九平　アノこなたが。

茂兵　さればサ、いま傳八が云ふは、もつれ髪の徳兵衛が居たら、この出入りは直ぐに濟むであらうと、云はぬばかりの今の詞。徳兵衛は清七さまに世話になるとの事。あの女房の事について、この團七はちつと義理のある仲。微塵でも徳兵衛に意趣のあるやうに思はれては、どうも顔が立たぬ譯もある。殊に徳兵衛の留主を幸ひに、斯う云ふ事のあるも構はず、男を捨てさせる、厄病の神で取つたと云はれては、どうもわしも男が立たぬ。如何にもわしが頼まれました。

清七　いよ／＼頼まれて下さりますか。

なか　茂兵衛さんとやら、お嬉しう存じます。

傳八　清七さまが自身に行かうと云はれるものを、ハテ、醉興な頼まれもの。

茂兵　別家なされる清七さん、獨り駈け出してござるを、無性にやりたがるお手代どの。

ト九平次、思ひ入れ。妙願こなし

茂兵衛が頼まれたからは、親船ぢやアねえが、天滿にでも乘つたと思つてござりませ。

トこの時、向うにて

大勢　女房呼び出し、川へぶッ込め。

才六　ヤア／＼、彼奴等、なんだか早足で爰へ來るぞえ。

九平　此方は家持ち商人、迂濶に顔出しては外聞づく。ナウ伯母御。

妙願　それ／＼、年寄は猶の事。挨拶人が慥かにある。アノ此方は奥で酒など呑まうか。

九平　傳八、てまへは何かの氣を付けて、ナ、あの客人に挨拶を……ナ、好いやうに頼んだがよい。

傳八　エ、、呑み込みました。

妙願　そんなら九平次。

九平　ドレ、何かの話しを奥で聞かう。

ト渡り拍子になり、九平次、妙願、思ひ入れあつて奥へ入る。向うより、權次、八五郎、その外惡者大勢、白木の臺へ犬の死骸を載せ、若い者大勢、六尺棒、鳶口などを持ち、鉢卷にて酒樽を擔ぎ出て來る。

權次　ちつとお頼み申します。先程御祝儀を申し上げま

したが、わざとお肴をお祝ひ申します。
八五　みんな若い手合ひが、お近付きの爲、持つて參りました。
惡者　淸七どのが內なら、めでたく一つ〆めて下さりませ。
皆々　サア、肴を持ち込め〱。
ト始終渡り拍子。傳八、外へ出て
傳八　これは〱、お若い衆の思し召しにて、お祝ひ下され、有り難うございます。
權次　ヤイ〱、うぬは爰の內のなんだ〱。聟を出しやアがれ〱。
ト權次先へ入り、茂兵衛を見て門口へ出て
なんだ〱。何奴も爰に居るか。
八五　誰れだ〱。
ト此うち茂兵衛、下の方に羽織を着て見て居る。
誰れでも頓着はない。內へ舞ひ込め〱。
ト門口の格子を叩き壞し、臺の犬を持込み、暴れて內へ入る。
權次　コレ、爰の內に人間は居ないか。挨拶人は居ねえのか。

皆々　聟に逢はう〱。
八五　コレ、祝つて寄越した酒肴の
皆々　禮を受けたい〱。
トわや〱云ひながら奥へ行かうとするを、茂兵衛、眞中へ入り。
茂兵　これは〱、どなた樣も、ようこそお心にかけられまして、お祝ひ下されました。私しは遠國の者でござりまするが、御深切の酒肴、受けましたも同然。お禮には明日にも上がりまして。先づ今晚は御機嫌よう、お歸りなされて下さりませ。
權次　なんだ、この野郎め。先刻から默つて聞いて居れば、遠國者だ。そんな田舍者の出る所ぢやアねえ。そして、わりやア
皆々　國は何所だ。
茂兵　ハイ、ズッと遠方でござります。
八五　なんだ、ズッと遠方だ。
惡者　そんなら此奴はおしなだな。
權次　但し、越後の椋鳥か。われがやうな奴が豪勢な口を出す所ぢやアねえ。われに似合つたやうな、茶でも酌んでうしやアがれ。

皆々　酌んで來い〳〵。
　トロ々に云ふ。茂兵衞、茶碗を盆に載せ持つて來る。此うち、傳八、もつと云へと仕方する。才六、氣の毒なる思ひ入れ。
茂兵　サア〳〵皆さん、この暑いので、定めて口も咽喉も乾し上がらしやつてござらう。この茶を呑んで、もちつとお饒舌りなされませや。
權次　エヽ、唐變木め。なんだ。人をちよつくらかへした事を吐かしやアがる。
八五　コレ〳〵、田舍者に爭ふ事はねえ。此方は花聟に逢ひに來た。
惡者　なぜ出て逢はねえ。持つて來た酒が不承知か。なぜ食はねえ。
皆々　聟を出せ〳〵。
　ト皆々わめくを茂兵衞留めて
茂兵　これはしたり、お前方、聞分けのないお方。その挨拶の爲に、わしが出たのでごんす。
八五　カウ、みんな聞いたか。挨拶人だとよ。
權次　こいつは面白い。コレ、先から挨拶人だと云ふが、この酒とこの肴を、此奴に毒味させて食はせて見ようぢやアねえか。
惡者　こりやよからう。サア、これを喰へ〳〵。
　ト犬を茂兵衞へ突きつける。
茂兵　ヘイ、そんならこの犬の土左衞門を、私しに喰へとな。
權次　オヽサ、毒味をさせて花聟へ喰はせるのだ。
皆々　キリ〳〵うぬも喰やアがれ。
茂兵　嫌だ。
皆々　どうした。
茂兵　やかましいわえ。
　トずつと立ち、羽織を脱ぎ、大出刃を持ち、片肌脱ぎ、犬の胴中を眞二つに切る。皆々驚き互ひに顏見合せる。
喰つてよくば、うぬら喰つて見やアがれ。上州の田舍者でも、これまでツイぞ犬の死んだを喰つた事がない。事を穩便に濟まさうと思ふから、下から出りやア登る程に、造酒講中の盆山が、腕に卷きつき倶利伽羅を、力に力む野郎とは、畑の違つた上州者。所で顏を館林、二つ名のある團七茂兵衞。コレ、うぬら、おれが名を聞いて置け。第一魔除けになるワ。びくしやくすると撥き殺す

ぞ。

ト皆々慄へる。後しざりして

權次　どうしても花筆は出さねえさうだ。サア、みんな歸つて後に來よう。

八五　上州者でも構ふ事はねえ。

惡者　馬鹿を云へ。おれが云ふ事を聞いてマアあゆべ。

權次　上州者でも怖くねえ。なんだ。館林だの國分だのと、莨おやアあるめえし、ワア〳〵洒落やアがると、雁首をはり飛ばすぞ。

ト皆々立ちかゝる。

茂兵　なんだ。此奴等は、惡く洒落やアがるか。

ト出刃を振り上げる。

權次　サア、いゝわえ。おれが呑み込んで居る〳〵。

ト門口へ出て

八五　さうだ〳〵。いつそ祝ひに念佛で歸らう。

皆々　よからう。なアまアだアぶつ〳〵。

ト皆々かけ念佛にて向うへ入る。茂兵衛、後を見送り、

茂兵　ヤイ〳〵、酒を呑ませるに呑むまいか。併し、引ツこしのない奴だ。

才六　サア、來て見やアがれ。

トこなし。奥より、清七、お仲、妙願、九平次、傳八、出て

清七　ヤレ〳〵、いかい御苦勞かけました。

なか　なんとお禮を申しませうやら、有り難う存じまする。

才六　モノ、わしが内にこのお人、留めて置きましたが、なんと豪氣な者であらうな。

ト奥より丁稚、銚子杯を持ち出す。

妙願　サア〳〵、何事も納まつたら祝言いたしませう。

九平　茂兵衛どの、段々のお世話、事なう濟んで忝なうござります。お仲と清七が祝言、こなさんも祝うて下さりませ。

傳八　そんなら、いよ〳〵祝言でござりますか。

ト傳八、入る。

九平　オヽ、サ、めでたう祝言の上で、讓り受けたる眞筆の曼陀羅持つ事、極める事は極めねばならぬ。ナウ伯母御。

妙願　九平次は家の跡取り。清七お仲は此方の別家。一家が殖えれば甥の入り米。わしが安堵。サア〳〵、杯は

わしが始めてやりませう。

ト妙願、杯を持ち出る。丁稚、才六、奥より熨斗昆布を持ち出て

才六　サア〳〵、めでたう物事丸う納まる。茂兵衛どの、挨拶に千秋萬歳千箱の玉を奉る。

ト時の鐘になり、お仲、呑んで清七にさす。この時向うより權次、八五郎、頬冠りして、コソ〳〵して門口を窺ひ

權次　なんだ。爰の内を見や。酷く打ち壞したぢやアねえか。

八五　さうよ。こりやア先刻、惡樽を持ち込んだ噂があつたが、そのちんてんしんであらう。

權次　爰ばかりぢやアねえ、今川橋の玉島屋へも、惡樽を入れたところが、釣船の三婦だけあつて、顏が賣れて居るから、手も付けなんだ。

八五　爰の内は纏れ髮の德兵衛が出入り場だが、居ねえからであらう。

權次　さうよ。團七とやら云ふ田舍者が、挨拶人に入つた筈だが、顏が賣れねえから、こんなに壞されたのであらう。

八五　氣の利かねえ。田舍者を賴む事があるものか。

權次　これがほんの、佛賴んで地元へ落ちると云ふものだ。薄恰好の惡い。

兩人　大笑ひだ。ハヽヽヽ。

ト内へ聞えるやうに云うて、向うへ入る。

清七　役にも立たぬ口をきく者があるものだ。

ト皆々思ひ入れ。清七、お仲、氣の毒なる思ひ入れ。茂兵衛、口惜しき思ひ入れ。

茂兵　才六、玉島屋と云ふは何所だ。

才六　今川橋の橫町でござります。

茂兵　ムウ……、内の男衆を一人貸してもらひたい。

才六　オイ〳〵、若い衆。ちよつと賴まれて下さい。

若者　ハイ〳〵、なんでござります。

ト奥より二人出る。茂兵衛、其所にある惡樽を取つて

茂兵　只今祝つて參つた酒樽、御無心申します。

若者　どうなりと。

茂兵　お前御苦勞ながら、この樽を持つて、今川橋の玉島屋へ行つて云ふには、館林の團七と申します、お内方に御婚禮があつて、おめでたうござります。それへ參り御祝儀申し入れまする。これをお祝ひ申しますと、この樽

を置いて來て下さい。
才六　アヽ、コレ〲、そんな物持つて行つては。
茂兵　エヽ、無駄を云ふ事はない。コレ、御苦勞ながら早く行つて下さい。
若者　ハイ〲、畏まりました。
ト若い者、樽を持ち向うへ入る。茂兵衞、茶碗を取つて
茂兵　一つ注いで下さいませう。
ト出す。才六、酒樽より注ぐ。二つ三つ續けて呑み
私しはお先へ開きます。
ト門口へ出ようとする。奧より、主計、出て來る
主計　茂兵衞お待ちやれ。
トこれにて、茂兵衞、後へ戻り
茂兵　待てとは。
主計　助松主計ぢやわい。
茂兵　あなたは助松主計さま、御浪人なされて、江戸の町家へお預けと聞きましたが、さては爰の內に。
主計　いつぞやよりかゝり人の身分。それは格別、最前よりの一部始終は、殘らず聞いたが、おてまへ、血相變へて何れへ參る。
茂兵　男を立てに參ります。
主計　なんと。
茂兵　大人氣ないやうなれど、今の通りの者が云ふ事を聞けば、德兵衞が留守でなくば、此やうに打ち壞しはせまい。玉島屋には釣船の三婦が居て無事に濟んだ。田舍者を頼んだは、佛頼んで地元だと云はれては、それなりに聞捨てになりませぬ。
主計　シタガ、こりや短慮功をなさずと云ふ事があるぞよ。
茂兵　そりやハヤ、お侍ひと町人と、一口には申されませぬ。
主計　すりや、どうあつても。
茂兵　お暇申しませう。
ト門口を出るを、才六が留めるを振り切り、門口を締め尻を絡げ、一散に向うへ入る。
主計　ハテ、短慮な男であるわい。
ト向うバタ〲。侍ひ、狀箱を持ち走り出て
侍ひ　助松主計さまはこれにござりまするか。御用屋敷よりの御奉書到來。
ト出す。

主計　ナニ、お國元より御奉書とは。
　ト拔き見て
助松主計引負ひの金子五千兩、調達いたされ候ふ、改めて加增下され候ふ條、某を以て達し申し候ふ以上。助松主計どのへ。淺田宗治……すりや、この程五千兩の金子を上納せしゆゑに。
淸七　主計さまには御歸參とな。
主計　エヽ、有り難い。再び歸參なす上は、サア九平次、讓り狀の事云つてしまやれ。
九平　讓り狀の事云つてしまへとは。
主計　謀書謀判の事、この家は繼がされぬ。
九平　さま〴〵の事を云ふわえ。讓り狀が謀判とは。
主計　但馬屋九右衞門が自筆でない。
九平　なんと。
主計　似せ筆を以て記したれば、證跡にはならぬワ。
九平　イヤ、そりや親仁どのがよい〳〵になられたから。ハテ、實印さへ捺してあれば慥かな證據。
主計　その印形あらば見たい。
妙願　ハヽヽ、惣じて讓り狀に捺した印形は、それなりに打ち碎いてしまふのが世間の大法ゆゑ、遺言狀書いて直ぐに打ち割つて、今はない。
主計　イヤ、打ち割つた印形、どうしてお身が持つて居る。
九平　ヤ。
　ト此うち、門口におつぎ窺ひ居て
主計　三婦が女房、早く參れ。
つぎ　ハイ〳〵。
　ト內へ入る。九平次、妙願、見て
兩人　ヤヽヽ、わりや先刻の。
　トおつぎ、最前の證文を出し
つぎ　金貸した者ぢやと云うて、證文を見せたは、此方の判とは違うてある。首に掛けた袋から、印形出して、コレこの紙に捺してくれた九平次さん。
　ト九平次、ぎつくり思ひ入れ。
主計　淸七を亡き者にせんと、あぶれ者を語らひ、祝言の樽を入れさせ、喧嘩に事寄せ、淸七を亡き者にせんと、三河町の義平次お婆を以て、委細の事を計らふとあるこの文體。宛名は傳八どのへ仲買ひ彌市。最前奥で拾うた手紙。
妙願　その手紙を。

主計　トかゝらうとするを、ちよつと當て
九平　サア、九平次、謀書の企み、白狀しやれ。
主計　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
主計　慥かに懷中。
　ト九平次の懷中より引出す。
九平　それを。
　ト寄るを、ちよつと當てる。妙願、愕りして
妙願　わしやちよつと手水に。
　ト奥へ入る。
才六　これサ、お前もちつと辛抱。
　ト才六、追ひかけ入る。
主計　コリヤ、この手紙は三婦が女房、其方に遣はす間、宛名を證據に、茂兵衞が身に恙なきやう、達引の取裁き致し遣はせ。其方も早う。
つぎ　畏まりました。左樣ならば。
　トおつぎ、手紙を受取り、向うへ走り入る。傳八、起き上がり、縫ぐるみにて後より
傳八　うぬ、主計め。

　ト打つてかゝるをかい潜り、引摺る、その縫ぐるみを最前の水さしへ誤まつて當てる。水さし碎けて中より件の曼陀羅と金財布出る。
清七　ヤ、こりや先刻の
なか　眞筆の曼陀羅。
　ト取つて清七に曼陀羅を渡す。金の財布を主計に渡す。
傳八　その百兩を。
　ト取りにかゝる傳八を當てる。
九平　その金よりは、この曼陀羅。
　ト九平次、清七へ取りに行かうとするを主計、九平次が腕首を取つて
主計　イヤ、こりや今までの雜用代。
清七　段々のお情。
　ト金の百兩包みを九平次へ渡す。九平次、清七へ行くを扇にてちやつと留める。その手を突き退け
主計　これまでは、いかいお世話になりました。
　ト九平次、傳八を返し膝を叩くを木の頭。清七、お仲、主計を拜む。双方よろしく、
　　拍子幕。引返し。

本舞臺、三間の間、平舞臺、向う赤壁、書記帳面、諸國の狀差し帳箪笥、硯、暖簾口、上下打ち壞す仕掛け。佐賀右衛門、權次、八五郎、若い者ソ勢、店に飾りある米俵に腰をかけ立ちかゝり居る。屋體囃子にて、幕明く。

佐賀　コレ〳〵、皆の衆、必らずぬからつしやるな。

權次　ハテ、そりや案じる事はない。おいらが付いて居るわえ。

八五　在郷者の分際で、江戸の眞中へうしやアがつて、惡くふざけやアがるが最後

權次　臑骨を打ち折つて、較いぶしにしてくれべい。

皆々　早く爰へ來やアがれ〳〵。

ト奧より、玉島屋兵右衛門、出て來り

兵右　コレ〳〵、其やうな事してもらふまい。

八五　申し〳〵旦那、暴れ者でござります。

權次　ぶち殺してもようござります。

兵右　イヤ〳〵、暴れ者ぢやと云うて、打ち殺しては後が面倒だ。靜かに譯を聞くがよい。昨夜も築地ヶ岡で人殺しがあつたとの事ぢや。

佐賀　イヤ、お氣遣ひなされますな。そこはこの佐賀右衛門が呑み込んで居ります。又ひよつとお怪我がでもあつては。マア〳〵、先づ〳〵奧へござりませ。

ト屋體囃子にて兵右衛門、奧へ入る。向うより、茂兵衛、鉞を持ち出て、門口にて

茂兵　ちつと物が尋ねたうござります。玉島屋兵右衛門どのとは、こちらかな。

皆々　アイ、こちらでござります。

茂兵　玉島屋なら。

トがらり〳〵と門口を打ち壞し、內へ入る。

皆々　ソリヤ來た〳〵。

ト皆々打つてかゝるを打ち散らし、眞中にて

茂兵　祝ひに來た。玉島屋兵右衛門どのに近付きながら、女房持たれた樽を持込んだと云ふ事。その祝儀に來ました。それと云ふは、この玉島屋は、挨拶人があると云ふ事。外の挨拶は聞きたくない。釣船の三婦を出してもらひたい。斯うなつては三婦でも虻でも、挨拶人を出せ〳〵。

權次　それぢやアおいらが挨拶は

八五　聞かないのか。

茂兵　オヽ、うぬらがやうな才子は相手にするものか。樽を入れて祝ひに來たのぢや。挨拶人を出せ〳〵。

佐賀　四も五もねえ。ぶちのめせ〳〵。

ト屋體囃子にて、皆々打つてかゝる。若い者大勢、俵にて引きつけるを跳ね退け

茂兵　此奴等二人、先刻から口を叩くので知つた。但馬屋の門口へ來て、惡口吐かしたはわいらだな。

權次　アヽ、コレ〳〵、おいらが何を云ふものか。おいら達は出入の者ゆゑ、爰へ來て口をきくのだ。

茂兵　イヤ、うぬらは相手にしねえ……サア、兵右衛門どのに逢はう〳〵。

皆々　モシ〳〵、旦那〳〵、早うござりませ。

兵右　オイ〳〵、どうしたのぢや〳〵。

ト怖々出て

コレ、茂兵衛どのとやら、わしはこの家の主、玉島屋兵右衛門でござる。見れば酒にでも醉つたか、なんで斯う云ふ事をさつしやります。

茂兵　イヤ、こなさんへ對して理不盡はしませぬ。

權次　コレ〳〵、おいらが何を知るものだ。

茂兵　やかましいわえ。うぬらが覺えて居るだらう。最前中通りの但馬屋へ、此奴等が惡樽を持ち込んで、ごたつきに來ました時、この茂兵衛が頼まれて、口をきゝ、所へ此奴が門口へ來て吐かしますは、今川橋の玉島屋にも婚禮があつて、惡樽を持ち込んだれば、釣鐘の三婦が口をきいて、何事もなく濟んだ。但馬屋の挨拶人が、田舎者の茂兵衛が挨拶だに依つて、店の格子をぶち壞されたと云はれては、居合した衆の手前、但馬屋へ對し、この茂兵衛、どうも顔が立たない。イヤサ、三婦にこの茂兵衛が出入りさせにやアならぬやうに、此奴等が仕出した事。これには外に樣子があらう。サア、それ吐かせ。

兵右　アヽ、コレ〳〵、わしが内の婚禮に、樽を貰うたの、三婦が挨拶したとは。

茂兵　でも、此奴等が云うたに違ひござりませぬ。但馬屋の息子どのに意趣があつて、次手にこの茂兵衛が顔を潰させ、三婦と嚙み合せるやうにしたは、誰れが云ひつけた。サア〳〵、吐かしてしまへ。

ト權次を引きつける。

權次　アヽ、コレ〳〵、云ひます〳〵。

佐賀　コリヤ〳〵、それを云つて堪るものか。二人ながら無體を云はずと引放してしまやアがれ。

ト茂兵衞を突き退けにかゝる。佐賀右衞門の額を見て

茂兵　ヤア、わりやアこの中川長で、金を騙つた佐賀右衞門。又ぞろ爰へ。

佐賀　その金の經緯は、德兵衞が舅の彌市が目算。その經緯は後の事。この玉島屋はおれが爲には主人、茂兵衞、お主の祝儀はたつぷり請けたに依つて、禮を云ふのに、どうでもしつから暴れるのか。

茂兵　オヽサ、乘りかゝつた船、一生非道な事はしない男だが、氣の毒なは兵右衞門どの。此方の內の手代なら、拍子があつて面白い。團七茂兵衞が暴れに來た。サア、釣船の三婦が來ないか。三婦に逢ひたい〳〵。

皆々　イケ面倒な。ぶツちめろ〳〵。

トまた屋體囃子になり、立廻りあつて、權次の頭を打ち割る。うんと反る。また打つてかゝる立廻りあつて仕掛けつ所殘らず壞す。大勢を追つて奧へ入る。兵右衞門、呆れる。

兵右　コレ〳〵、どうするのぢや。これを默つて居るか。お代官所へ申し上げたいが。

佐賀　イエ〳〵、滅多に願ひ屆けもなりますまい、又いろいろ縺れた事もござります。

兵右　こりやどうしたものであらう。

ト佐賀右衞門、權次の疵を見て

佐賀　こりやア、權次が頭を打ち割られた。

皆々　木片やアい。權次やア。

八五　木片が餘ツぽどの疵だ。

兵右　死んではおれが迷惑。佐賀右衞門、早く町內へ屆けてくれ〳〵。

佐賀　それよりやア、仲買ひの彌市に知らせてくれ。

八五　おれが行て來やせう。

ト八五郞一散に向うへ入る。

兵右　サア〳〵、どうでもお代官所へお捕り方を願はずばなるまい。

佐賀　イエサ、滅多に願うても惡うござります。私しが好いやうにしますから、お前は奧へ。

兵右　後の難儀にならぬやうにしたがよいぞや。

ト奧へ入る。皆々權次が側へ行き

皆々　權次やい〳〵。氣をしつかりと持て。權次やアい權次やアい。

ト屋體囃子にて、橋がゝりより、彌市、出て來り

彌市　何所に居る。

佐賀　彌市か、よく來た。

彌市　權次、どうしたぞい〳〵。

八五　親仁どの、權次がこんな目に遭つた。

　ト彌市、側へ行き

彌市　ヤイ〳〵權次、おれが來た、氣を慥かに持て……エヽコレ、惡い時に聟の德兵衛が居らぬので……コリヤ權よ。氣を丈夫にせい〳〵。

皆々　權次やアい〳〵。

　ト呼び生ける。屋臺囃子にて、向うより、德兵衛、走り出て

德兵　喧嘩があるとは、誰れだ〳〵。

彌市　コレ德兵衛、おれが爲にも聟だ。好い所へ來てくれた。木片の頭を割られたワ。

德兵　玉島屋に喧嘩があると聞いたゆゑ、驅けつけて來た。暴れた奴は何所に居る。

皆々　今奧へ行きました。

　トこの時、奧にて叩き壞す音。大勢聲する。

德兵　して、そりや一本差しか丸腰か。

皆々　斧を持つて居ますわいの。

德兵　爰へ追ひ出すやうに、裏口から氣を付けさつしやい。

皆々　合點でごんす。

　ト皆々暖簾口へ入る。若い者大勢、逃げ出る。茂兵衛、斧を持ち追ひかけて出る。德兵衛、後より抱き留めて

德兵　暴れ者待て。

茂兵　なにを。

德兵　ヤ、お主は茂兵衛。

茂兵　わりや德兵衛、爰へはどうして。

德兵　三婦が留守ゆゑ、女房の頼みで。

茂兵　フム、さては玉島屋の挨拶人は、釣船の三婦だと云ひ觸らし、おれを爰へ釣り出したは、お辰が事を根に持つて、この團七に泡を吹かせる目算か。コレ德兵衛、なぜ男らしく達引はしねえのだ。

德兵　コレ茂兵衛、われが云ふ事は一ツ葉もおれにやア解らねえ。云つて聞かせてくれ。

茂兵　今日但馬屋に婚禮があつて、兩方へ惡樽を入れたが、玉島屋は挨拶人が釣船の三婦、但馬屋の挨拶人は、田舍者ゆゑ壞されたと、惡口云はれた。それゆゑに起つ

た出入りなれど、三婦を目當におれ一人で、惡黨を持つて來て見りやア、釣船ならぬもつれ髮。

徳兵　サア、この德兵衞も爰の內は、近付きでも懇意でもねえが、暴れ者が來たと、釣船の內へ知らせがあつたれど、三婦は山へ行て留守だから、行つてくれろと頼まれて、來て見りやアこの始末。其所らあたりにまじ〳〵と居並ぶ顏觸れぢやア、根強く仕組んだ……滅多に油斷はならねえわえ。

ト向うバタ〳〵になり、おつぎ、先の手紙を持つて走り出て

つぎ　もシ德兵衞さん、爰にかいなア。この手紙を、ちよつと見やしやんせ。

徳兵　ドレ。

ト取らうとする。茂兵衞、おこつく。それなりに押へて披き見て

ナニ〳〵……先日お頼み申し候ふ通り、我れら主人方にて吟味有之候ふ間、その節祝儀に事寄せ、惡者を頼み、髭淸七に恥辱を與へ、それを越度に追ひ出し候ふ積り、この事くれ〴〵もお頼み申し入り候以上。彌市どの、傳八。

つぎ　この場を無事に納めよと、主計さまの仰せぢやわいなア。

徳兵　茂兵衞、この手紙を見やれ。

ト茂兵衞に差しつける。茂兵衞、見て

茂兵　ムウ、この手紙は。

徳兵　サア、これぢやに依つて釣船の三婦には、覺えのあらう筈がない。

茂兵　ムウ。

ト思ひ入れある。

徳兵　なんと譯が立つであらうがな……さうして內はどうして來た。

つぎ　サア、ちよつと頼んで來たわいなア。

徳兵　不用心だ、早く行きやれ。

つぎ　そんなら行きます。

トそれなりおつぎ向うへ入る。權次、ウンと反る。

彌市　コレ權よ。氣を慥かにしろ。アヽ、こりや餘ツぽどの癪だ。

ト皆々捨せりふにて介抱する。德兵衞、思ひ入れあつて

徳兵　誰れぞ其所に居るか。硯を借りたい。

若者　アイ〳〵。

徳兵　茂兵衛、證文書いてくれ。

茂兵　そりや何を。

徳兵　ハテ、あやまり證文を。

茂兵　すりやこの茂兵衛が無法無體に暴れたに依つて、あやまり證文を書けとか。嫌だ。國には女房子供親もある重い體だ。他國へ來て斯う云ふ事を仕出し、後で證文書くやうな根性ならば、なんで顏づくがいるものか。國へ歸つて人に顏出しがなるものか。

徳兵　コリヤ茂兵衛、親女房があつて重い體ぢやに依つて、猶の事この證文書かにやアならぬ。ハテ、千も萬もない所を、この徳兵衛が顏立て、書いてくりやれ。この徳兵衛とは無二の懇意になつて居る三婦も、山から戻つたら、とつくりと男づくの固めは、ハテ、もつれ髮の徳兵衛が頼んで、茂兵衛が證文書いたと云つても、まんざら人の笑ふ事もあるまいではないか。

茂兵　ムウ、もつれ髮の徳兵衛が顏立つて書けと云ふのか。

徳兵　オ、サ。

茂兵　イ、ヤ、おらア嫌だ。證文は男の魂ひ、相手を殺せば此方も死ぬるは當り前。男は種貫だ。徳兵衛どん、もう云つて下さるな。

徳兵　人も殺さず、相手もないに死なれるか。

茂兵　なんと。

徳兵　コレ茂兵衛。

ト權次の方へこなしあつて

人間は老少不定。例へ疵は淺くとも、萬一餘病でも發つて、今にも息を引取つたら……イヤサ、この怪我人が死ぬ氣遣ひはなけれども、團七の茂兵衛と云はれる者が、他國へ來て筋道の違つた事で、人の爲めもせぬ者を相手にして、死ぬるが手柄でもあるまい。

ト茂兵衛に呑み込ませる。

茂兵　徳兵衛どの丶望みの通り、書いてやらう。

徳兵　そりや、この徳兵衛が顏を立て。

ト茂兵衛、證文を書く。

茂兵　書き判でよいか。

ト徳兵衛、見て

徳兵　よし〳〵……コレ、親仁どん、今聞いた通り、書き憎い茂兵衛が、あやまり證文書いたに依つて、其方からも書いてもらひたい。

彌市　コレ、徳兵衛、人の命があやまり證文で、ツイおいそれと濟まうと思ふか。權次はおれが子分。死ねば敵を取らりやにやア置かぬぞよ。

佐、それ〳〵、生死にかゝつてあるわえ。

ト徳兵衛、佐賀右衛門を見て

徳兵　ヤイ、やかましいわえ。兩國の證文の時から思つて居るが、ひよんな人がこの徳兵衛の舅ゆゑ。

彌市　イヤ、死にかゝつて居る者を、證文ばかりで濟まされるものか。下手人取らにや措かぬぞ。

徳兵　イヤコレ親仁さん、書き憎い茂兵衛が證文取つて、事を無難に納める爲、達て意地むじ云はつしやれば、この手紙と一々吟味したなら、首にかゝはる。それともお代官へ願ひ出ようか。

皆々　ヤア。

徳兵　これから洗ひざらひ、詮議を仕抜いて見せようか。

佐賀　アヽ、コレ〳〵彌市、よく思案して見れば、町内に事なかれだ。これが廣がると、ソレ又、所の迷惑。マア、何がなしに證文書いたがよい。

八五　親仁どの、後は兎も角も、マア、證文書いてやらしやれ。

彌市　サア、書くは書くが、お定まりの養生代取らうかえ。

徳兵　して、此方が養生代は。

彌市　グツと負けて百兩だ。

茂兵　何がどうした。

徳兵　イヤ、今をも知れぬ……イヤサ、値ぎりにぎりも未練らしい。ソレ百兩。

ト前幕の證文を投げ出す。

佐賀　ヤア、こりや川長で。

徳兵　サ、餘人ならば根ッ首押へ、骨を拉いでも取返す事知つて居れど、何を云ふにも親と云ふ、その名に免じて今日までも、宥免したこの證文。但し、でんどへ持ち出さうか。

兩人　サア、それは

徳兵　百兩替りに受取るか。

兩人　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

徳兵　キリ〳〵證文書いて下せえ。

佐賀　彌市、親子の間だ。負けて書かつせえな。

彌市　まんざら他人でもねえから、書くが、サ、文言は。

德兵　我れら子分權次、酒興の上にて口論に及び、怪我いたし候ふに付き、貴殿お取扱ひ相濟み候ふ上は、この者儀につき如何樣の儀出來候ふとも、後日申し分無之候ふ一札依つて件の如し、月日。
ト書いて證文渡す。
彌市　ソレ一札。
德兵　よし〳〵……。サ、茂兵衞、これ持つて行くがよい。
ト證文を茂兵衞に渡す。
茂兵　コレ德兵衞、兩國での事は濟んだ。これで互ひに晴れた。いかい苦勞をかけました。
ト懷中へ證文を入れる。權次、ウンと反る。
彌市　ヤア〳〵、權次が死んだ。
皆々　相手が死んだワ。
茂兵　德兵衞。
德兵　茂兵衞、今の證文大切にしやれ。
八五　それ〳〵。
トかゝる。見事に返る。木の頭。彌市、行きにかゝるを德兵衞引戻し　　よろしく拍子幕

五幕目

靈岸島河岸の場
鐵砲洲船中の場

役名——神樂坂の大八。但馬屋娘、お仲。仲買ひ彌市。同娘、おてつ。番頭、傳八。船頭、權次。三婦佐橋の三吉。

本舞臺、向う材木のりん杭、丸太、拔割りを立てかけ、この前角物を小高く積み上げ、側に柳の立ち木、同じく吊り枝、すべて靈岸島川端の體よろしく、爰に若い者大勢、但馬屋の弓張を持ち、迷子を尋ね出す體。鉦太鼓を持ち、立ちかゝり居る見得。時の鐘にて、幕明く。

若一　成る程、氣紛れ番頭だ。何所へ引ツかゝつて居るだらう。
若二　子飼ひから居るとは云ひながら、ぞろつぺえ家さなア。
若三　惡い事を仕拔いて居る、あの傳八を暇もやらず、使つて居るも不思議だ。
若四　それと云ふも、あの鬼婆アが何か思ひつさのある事

だらう。

若一　何にしろお仲さんより、尋ねに出た番頭が迷子になつた。

若二　大きな聲で呼んで見よう。

四人　迷子の〳〵傳八どんやアい。

ト鉦太鼓を叩き立てる。この時、橋がゝりにて

傳八　エ、騷々しい。靜かにしやアがれ。

ト禪のツトメになり、傳八先に彌市、一本差しにて、提灯を點け、二人の惡者を連れ出て來る。

皆々　それでも、迷子を靜かにして尋ねられるものかね。

傳八　ニ、、口巧者な事を吐かしやアがる。尋ねに出たのはお仲さんだ。それにわいらは、迷子の〳〵傳八どんと云つたではないか。

彌市　イヤ〳〵、こんたも隨分迷子になり兼ねぬ氣紛れだから、尤もな譯ケ。

惡一　さう云へば番頭さんも、なんだか狐を馬に乘せたやうな。

惡二　オイ、氣をしつかり持つて居なせえ。娘御が見えぬので、餘ッぽど逆上せた樣子だ。

傳八　へ、、、、燕雀なんぞ傳八の心を知らんや。それよりは貴樣達は、この近邊を驅け巡つて、おらが主人のお仲さんでも、また彌市どのゝ娘のおてつでも、見當り次第あさり川岸の彼の所へ連て行つてくれ。

彌市　おらが所のあまつちよも、慥かに淸七が又釣り出したに違ひはあるまいと思ふが、但馬屋のお仲も居ねえと云ふからにやア、淸七の仕業でもねえか。何にしろ斯う云ふ時は、固まつて尋ねやうより、幾手にも手分けして探す方がいゝ。なんでも落ち合ふ所はあさり川岸。

皆々　合點でござります。

若一　そんならこちとらは、大川端の方を廻つて。

若一　もし淸七の野郎が、おてつにしろ、お仲にしろ、連れ立つて居たら。

傳八　ぶち殺しても大事ねえ。併し、女に怪我をさせてはならぬぞ。

惡者　知れた事だわな。

彌市　併し、淸七も元は侍ひだから、もし手に餘らば、殺らしてしまはうと、一本きめて來た。

傳八　なんの、あんな奴に刃物が要るものか。

彌市　ハテ、轉ばぬ先の杖だワ。

皆々　ドレ、尋ねて來ませう。迷子やアい。

ト悪者二人は上手へ、若い者は橋がゝりへ入る。

彌市　コレサ、お前ゝなんだかそゝくさして、相談相手にならぬ。そんな事ぢやアこちとらの仲間にやアなられねえ。

傳八　なにサ、斯う見えても心は大海の如しだ。

彌市　マア、そりやアいゝが、内のお仲は金でも持つて出たか。

傳八　イヤサ、金より大切な、高祖の御眞筆を持つて駈落ちした。その曼陀羅は死なれた旦那が、清七への譲り物。清七めはそれにもなんにも構はず、一旦おれがちよろまかして、主計めに見出され、取上げられた百兩の、金を持つて家出したからには、彼奴はてつきりこなたの娘の、おてつを連れて高飛びでもしたに違ひはあるまい。

彌市　フム。そんならお仲を引ッ捕へれば、大金になる曼陀羅を持つて居るな。よし／＼。

傳八　ナニ、肝心の玉を逃がして、あんまりよくもねえ。

彌市　ナニ、お前、唐天竺へでも行ぎやアしめえし、今の間に尋ね出して、どの道金になる詮議だ。

傳八　さうして、いつぞやおらが所の九平次に、佐賀右衛門が請を引いて、お主に質に置いてもらつた浮牡丹の香爐は、この節厳しい詮議だが、ありや何所へどめ込んで置いた。

彌市　ハテ、いくら詮議をしても、あの香爐の事は案じはねえ。先頃もこなたに話した通り、ありや土州の國屋敷で、若殿左門之助どのが放埒へ付け込み、大九郎の心安い、神樂坂の大八と云つて、あの界隈の悪黨だ。その大八に盗ませて、佐賀右衛門を頼んで、例の九平次に連れ合ひで、この江戸でさばいたところが、この中その大八が、おれが所へ尋ねて來て、こんたの所の九平次にも逢つて、駒込のそんぢよそこへ質に遣つたと云つたら、直ぐにその晩矢塀を切つて、あの香爐を盗み出し、人も二三人殺めたとの事。イヤ又、剛敵な悪黨もあるものだ。

傳八　おれもいろ／＼と稽古して見るが、七分通りやりかけると、見つかつて事を壊す。何にしろさう云ふ人を喰方にしたら、てきぱき片付いてよからう。

彌市　そんなら闇を見て、神樂坂に近付きにせう。

傳八　まだそれについて、いろ／＼話し合つて置かねばならぬ事が。

彌市　ハテ、歩きながら相談しても解る事だ。

傳八　其所でぞつこんから惚れて居るあのお仲が。

ト云ひながら彌市傳八、上手へ話しながら入る。ト橋がゝりバタ〳〵になり、おてつ、一散に走り出て、あたりを見廻し、こなしあつて

てつ　あのマア淸七さんは、何所へ行かしやんしたやら。どうぞして早う逢ひたいものぢやわいなア。

トこの時、傳八、後に窺ひ居て、おてつに抱きつく。

アレ、誰れぢや。惡い事をなされまするな。

傳八　イヤ、惡い事ぢやない。好い事をするのぢや。おてつ坊、何も氣遣ひた者ぢやない。傳ばぢや〳〵。

てつ　エヽ、惡い串談なさんすな。

ト振り放す袂を扶へて

傳八　イヤ、成る程賢いやうでも流石は處女。あの淸七は惡い奴ぢやぞえ。

てつ　エヽ、なんと云はしやんす。

傳八　こちの內のお仲さんが、こなたの手を切らうと、每日のやうに板橋の榎を取りにやつたり、いろ〳〵と呪ひもしたが、根強く淸七さんに絡んで居るゆゑ、一旦內を駈落ちさせ、途中で淸七を擔いで川へ打込み、殺したと見せたら、如何な執念の深いこなさんでも、思ひ切るであらう。所でぬく〳〵と淸七は內へ戻り、お仲と枕を高く夫婦になる料簡。なんと不實の男もあればあるものだなう。

てつ　イエ〳〵、そりや噓でござんす。眞實わたしを連れて退く證據には、爰にお金を百兩とやら財布に入れて。

傳八　ナニ、百兩。ハヽア、さてはこの中取上げ婆アをくつた……イヤサ、成る程、內の婆アも抜け目はない。後でいぢむぢ云はせまいと、それと云はずにその百兩は、お前の手切れだ。

てつ　そんならこの金を、わたしへ預けると云はしやんしたは。

傳八　ハテ、よく考へても見なさい。よる夜中その重い物を、女のお前に持たせたのが、手切れの證據。行く所もあらうに、これから先は行きどまり。爰に待ち合せて斯う斯うしろと、皆淸七野郎の云ひつけぢやわいの。

てつ　さう云ふ心と露知らず、騙しの間違いに依つて、持つて居てくれと渡しなさんした金は、わたしへの緣切りでござんしたか。チエ、口惜しい。なんのマア淸七さんに別れ、錢金を何にせうぞ。もうこの上は死んでなりと、この恨みを。さうぢや。

傳八　ヤア、どこい〳〵。滅相かいな。死んで堪るものか。コレ〳〵おてつ坊、傳八が悪い事は云はぬ。なんと彼奴等に面當てに、おれと夫婦になる心はないか。

てつ　誰れがお前のやうな好かぬ人に。

傳八　イヤ、こりや御挨拶。併し、それ程に思ひ詰めた事なれば、死ぬもよいが、どうして死なうと思ふ。

てつ　淵川へ身を投げて。

傳八　どうして〳〵、泳ぎも知らなくつて川へ飛び込んで堪るものか。それもこれも肝心の、其所に持つて居る物。

ト小判の手付きをして

イヤサ、身を投げるもいゝが、それではお仲や清七へ面當にならぬ。なぜと云はつせえ。この近所は海が側だから、直ぐに明日は上總房州の方へ流れて行つて、死んだか外の男と駈落ちしたか解らぬ。先づおれだと首を縊るな。ソレ、直ぐに明日はおてつが、何所ぞにぶら下がつて居たと云ふと、お仲も清七も悔りして、それから煩ひついて、取殺すまでもない、骨折らずに自然と自滅すると云ふ謀り事だ。

てつ　それぢやと云うて、どうしてよいやら、お前、教へて下さんせ。

傳八　イヤ、おれもツイに首を縊つた事はないが、人の縊つたのは、前方見た事がある。

てつ　そりやどうするのでござんすえ。

傳八　なんの雑作もない事。併し、平常から萬事心がけて置くものだ。何時役に立たうも知れぬ。ドレ〳〵指南をしてやりませう。コレ、お前の締めて居る腰帶を貸したり。

ト捨ぜりふにて、おてつの腰帶を取つて、正面の角物の上へ昇り、柳の枝に投げかけ、おてつ、泣いて居る。

それ〳〵、爰を斯う結んで、前へ飛ぶと、直ぐに往生するのだ。コレサ、泣いて居ては埒が明かぬ。夜が短い。

てつ　どうして、それでは死なれぬわいな。

傳八　エヽ、不器用な。ナニ死なれぬ事があるものか。ソレ、爰をキッと……アイタ……サア、斯う痛い位に結んで、一イ二ゥ三イと前へ飛んで見せたいが、それではおれが命がない。あら〳〵傳授斯くの通り。

ト踏み段倒れる。思はず咽喉締り、傳八落入る。この仕組みよろしくぶん廻す。

本舞臺、向う浪手摺、後ろ黒幕、下へ寄せて出茶屋の床几を積み重ね、この上に葭簀を卷きかけ乘せ、眞中に石を小高く積重ね、鐵砲州石置場の模樣。日覆より松の吊り枝、爰に彌市、白刃を拔き持ち、お仲を貫き、片手に曼陀羅を押へ居る見得。凄き合ひ方、時の鐘にて、道具納まる。

なか　なに恨みあつて此やうに、むごたらしう切つたのぢや。エヽ口惜しい。誰れぞ來てくれぬかいなう。

彌市　オヽ、もがけ〳〵。いくらもがいても叫んでも、もう叶はぬ。おれもこんなむごい事をしたくはねえが、大事の娘のおてつが、惚れて居る清七と、云ひ號けのお主ゆゑ、殺してくれろと頼まれた。

なか　エヽ、おてつさんに。

彌市　おてつばかりぢやアねえ。清七がおれへの頼み。殊に大金になる曼陀羅を持つて家出をしたゆゑに、殺して取つてくれたなら、骨折り代を遣らうとの事。曼陀羅を取つて金になるとは、曼陀羅でもねえ仕事と、ほまちにわれを殺したのだ。恨みがあらば清七に云へ。おれには罪も報いもねえ。ヤレ〳〵、不便な。可哀さうなア。

なか　すりや、云ひ號けのわたしと云ふ者あるゆゑに、殺して添はうと此やうに。

彌市　オヽ、口惜しからう。無念だらうが、追ッつけ夜明かに間がねえ。生殺しでは後腹が病める。苦痛を助けて。

なか　そんならどうでも。

彌市　どの道死ぬのだ。ソリヤ〳〵、斯うして。

ト乘りかゝり止めを刺し、こなしあつて血刀を後へ置き、手を拭いて、件の曼陀羅を披き

星明りぢやア解らねえが、表具の按配、軸の樣子、正物に違ひねえ。有り難い。

ト卷きしまひ、懷中して

その上、浮牡丹の香爐の事も、ぞつこん知つて居るのはこの彌市だ。もし目が擲れた日にやア、彼奴の笠の臺が飛ぶ詮議だ。其所で流石強惡の大八も、おれにやア餘ッぽど手を置く樣子だ。又おれを粗末にして見やアがれ。洗ひ浚ひ訴人をして、おれの身拔けをしにやアならねえ。なんでも理と云ふ奴にや勝たれねえ……併し、濡れ手で粟よくこの曼陀羅。イヤ、まんだら惡くもねえ。

トこの時、後の葭簀の影より、大八、そぼろなる拵ら

へにて飛び出て、後より彌市の首へ手拭をかけ、グッと締め殺す。これにて彌市、虚空を掴み苦しみ落入る。其まゝ蹴返し、あたりを見廻し、件の一軸を取上げ

大八　へゝゝ、ようごねやアがつたか。エゝ、廃い奴だ……成る程、われが今吐かす通り、うぬを生かして置いちやア、枕を高く寝られねえワ……併し、これからおれが身の落ち付き所だ。あの道具屋のとん平次が、おれに渡した三婦が女房の落した手紙……餓鬼の時分別れた弟があるが、年が寄つて便り少いから、尋ねて来いとの文面だが、おれが舊惡を嗅ぎつけて、内へ釣寄せ、寶の在所を聞かうと云ふ目論見か。シタガ、そんな事を喰ふ大八でもねえ。イヤ、この手紙を玉にして、これから直ぐに釣船の内へ仕掛けて惡方を……ムウ、これが何より上分別だ。

トこの時、橋がゝりより、以前の若い者二人、弓張を持ち出て来り、これを見て

若一　ヤア、人殺しだ〳〵。

トこれにて若い者大勢、棒を持ち、バラ〳〵と出て

皆々　ぶツちめろ〳〵。

ト走り出る。大八、件の曼陀羅を持ち、逃げ道なきゆゑ、うろたへ、石の上へ駈け上がる。

若一　彼奴だ〳〵。

皆々　ぶち殺せ〳〵。

トこれにて、大八、ドブンと水音して後の川へ飛び込む。

若者　ヤア、飛び込んだ。石を叩き付けろ〳〵。

ト皆々いて上手へ走り入る。この仕組みよろしく道具ぶん廻す。

本舞臺、向う小高き石垣、この上、朱の玉垣、上手大日柱の藪へかけて片蓋の橋下の通り、下へかけて浪幕。すべて、鐵砲洲稲荷橋の前の體よろしく、舞臺前に漁船を流し、爰に鉄次、三吉、柿の傍ばう、櫓を押剝身笠をかむり、片手に手釣りの糸を持ち、櫓を押して居る。三吉、頰かむり、手釣りをして居る見得。浪の音にて、道具納まる。

ト三吉、手應へしたるこなしにて手繰る。針先に黒鯛付いて上がる。

三吉　鉄次、見や、やう〳〵の事で一枚上がつた。

鉄次　もう今に夜が明けやせうから、汐に向つて歸りながら、もう五六枚も引ッかけにやアならぬ。
三吉　明日は佃の住吉樣の祭へ行かにやアならねえから、そろ〳〵沖へ出しや。
鉄次　糸を上げなせえ。
ト兩人、糸を繰り上げる。この時、水音して切り穴より、浪の花立ち、大八、浮かみ出て、船の小縁へ後より取りつく。これにて船かしぎしこなし。
兩人　ア、、なんだ〳〵。おッこつたか〳〵。
大八　靜かにしてくれ〳〵。
トやう〳〵に上がり、水を絞る。
いま追剝めに取卷かれ、多勢に無勢で叶はなくなつたから、向うの川岸から飛び込んだのだ。悧りしたらうが、不承して下せえ。
鉄次　そいつは途方もねえ。お前一人を、大勢がゝりでかえ。
大八　すんでの事に、ぶち殺されやうとした。どうか沖の方へ出して、おれを助けて下せえ。こんた衆を見かけて頼む。
三吉　見かけて頼むとありやア、どんな事でも引受けて來いと、父さんの云ひつけだ。
鉄次　オ、、案じなさんな、三婦佐橋の釣船の息子さんだ。大船に乘つたと思ひねえ。
大八　ナニ、すりや釣船の三婦どのゝ息子だと。
三吉　三吉と云ふ、まんまくはうよ。
大八　丁度幸ひ、この禮がてら。
兩人　エ。
大八　イヤサ。おれが代つて押してやりませう。
トこの時、上手にて
大勢　泥棒だ。人殺しだ。逃がすな〳〵。
大八　コレ。
ト艪柄へ手をかけるを木の頭。
彼奴等が事よ。イヤ、太え奴等だなア。
ト漕ぎ出す。これにて、逆に廻りかける。これをキザミにて。

よろしく拍子幕

大詰

三婦佐橋釣舟宿の場

役名――藝者、團七縞のお梶。同、一寸縞のお

辰。釣舟女房、おつぎ。同一子、三吉。船頭、鈨次。飾磨大九郎。惡者、どんがめの市。同、松。淺田宗治。但馬屋清七。妹、おてつ。神樂坂の大八。釣舟の三婦。

本舞臺、三間の間、三婦佐橋釣船宿のかゝり、二重舞臺、向う上手、まひら戸の押入れ、納戸口、下手、三枚戸の道具戸棚、上の方、障子屋體、例の所門口、この外路地口を取り、これより下の方一間の納屋、軒に釣船網船と記せし掛け行燈。平舞臺に柿の筒ぽうの船頭、誂らへの網なすいて居る。上手に三吉、浴衣の形にて西瓜を切つて居る。鈨次、せうさい河豚を拵らへて居る見得。テンツヽ通り神樂にて、幕明く。

船頭　今時分の太神樂は珍らしい。おらア春ばかりかと思つた。大方太神樂の土用干か知らん。

三吉　此奴も海で商賣するやうにもねえ、情ねえ手合ひだ、

鈨次　今日をいつだと思ふ、六月の晦日だよ。佃の住吉樣の祭を日當てに出かけたのだ。イヤハヤ、潮時より外になんにも知らねえ手合ひだなア。

船頭　一番頭を押へられた。イヤ潮時と云へば、今朝約束をした客人が、もう來る時分だ。何にしろ船を拵らへて置いて、晩にやア三吉さんと一緒に、住吉樣へ行くべえ。

三吉　さつさと用を片付けて、早く上がつてきさつし。

船頭　サア、直に上がつて來ます。

ト門口より路地へ入る。此うち、三吉、西瓜を皿へ入れる。

三吉　鈨次、息つぎに一切れ口へ頰張つてやらうか。

鈨次　それぢやア實になりやせん。いま直に拵らへてしまひます。

ト合ひ方になり、奧より、おつぎ、前垂れがけにて、角樽を重さうに提げて出で來り

つぎ　臺所が狹いゆゑ、酒を明けて持て來た程に、うろこが來たら、柄樽を返してやんな。

鈨次　アイ、今に來ませう。其所へ置いておくんなさいまし。

つぎ　コレ三吉、せいでもよい事をして、指でも切りやんな。そしてマア、鈨次が拵らへて居るのは、せうさいではないか。

鈨次　アイ、夜食の菜にしようと思つて。

つぎ　時候が惡いのに、それを食べいでも、小肴の端下がいくらもあるものを。その上、わが身達も常々聞いて居るだらうが、せうさいの膽を西瓜の水で練つて、酒へ入れて呑ませると、立ち所に死ぬ大毒ぢやと知つて居ながら、モウ〳〵河豚は捨てゝしまや。
銕次　それでも折角……併し、もし膽の血がかゝつたのを知らずに喰つて、惡い事もしなくて死にでもしたら女が泣くだらう。おやめだんご。
　ト下手へ持つて行き片寄せる。
三吉　イヤ、惡い事と云へば、昨夜連れて來て父さんが匿まつて。
銕次　ア、、コレ〳〵東西々々……イヤサ、昨夜親方が駈け廻つて、餌を取つて來てくんなすつたから、お前、辨天下から段々下つて來るうちに、黒鯛が二十枚に、これを見なせえ。
　ト下手より肴の入りし大笊を明けて見せ
鱸に、この鯔を見なせえ。構ひもしねえに船へ飛び込んだものを。
つぎ　ほんに、その鯔は端下ぢや程に、燒いてわが身達のおかづにしたがよい。

銕次　左樣サ。後は揃つて居るから河岸へやつて、鯔は魚田にもしやせう。
三吉　ドレ、燒火鉢を出して、おれが火を起してやらう。
つぎ　暑いのに、其やうな世話やかずと、わが身は中二階へ、その西瓜を持つて行て、お二人さんに上げ、其方もお相伴したがよいわいの。
三吉　ナニ、おいらは喰ひたくもねえが、そんなら清七……ナニサ、お客に上げて來よう。
つぎ　コレ、必らず今のやうな……イ、ヤイノ、氣を付けて上げ申しやいの。
三吉　オツと合點だ。
　ト合ひ方になり、皿へ西瓜を入れ、暖簾口へ入る。此うち、おつぎ、燒火鉢へ炭をつぐ。銕次、鯔を組板にて拵らへて居る。此うち、淺田宗治、ぶツ裂き袴、夏着の拵らへ、大小にて中間を連れ、竹の子笠、魚籃を提げさせて出て來り
宗治　今朝申し付けた釣舟が宿は、あれか。
中間　ヘイ、仰せ付けられました紀伊國屋三郎兵衛は、あれでござりまする。
宗治　どうか好い獲物を致したいものぢや。

舞臺へ來り

中間　今朝頼んだ漁舟は、支度いたしてござるかな。

銕次　ハイ、先程から川岸にお待ち申して居りまする。

つぎ　これはマア、よう入らつしやりました。今日は好い凪で澤山に御漁がございますといなア。マア、何にせいお茶を一つ。

宗治　イヤ〳〵、この上げ潮を漕いでもらひ、早くに歸らねば、主人の手前不首尾に相成る。

ト此の時、船頭、路地口を出て來り、宗治を見て

船頭　これは旦那様、お早うございました。今日は好い凪でございます。

銕次　左様なら私しが御案内申しませう。

つぎ　桟橋をお氣を付け申して上げやれ。

宗治　然らば斯う參るのか。

つぎ　御機嫌よろしう。

銕次　サア、入らつしやりませ。

ト銕次、案内して下手の路地へ入る。おつぎ、奥へ入る。ト向うより、大九郎、どんかめの市、悪者松、葛籠を脊負ひ門口へ來り

大九　小動木の會所から、急用あると呼びに寄越した、その留守へ犬を入れ、何かの事を嗅ぎ出さば、身動きさせぬ身が計略。

松　女房も一筋縄では行かぬ奴。併し、この葛籠の中へ入つて居やうとは氣が付くまい。

市　寒い時の水行より、餘ッぽど堪えませう。

大九　ハテ、その代り骨折り代は望み次第。

松　おてつ清七か、又は親を殺したお尋ねか、上州へ歸つたと云ふ茂兵衛か、どの道匿まつてあるには違ひねえ。

大九　其うち身共は會所へ行き、三婦を吟味して、表向にて云はす魂膽。大儀ながら。

松　心得ました。

ト市、葛籠を開けて、松を入れる。

大九　必らずぬかるな。

市　心得ました。

ト大九郎こなしあつて、橋がゝりへ入る。市、やうやう葛籠を脊負ひ、

オイ〳〵、ちつと頼み申します。

トこれにて、奥よりおつぎ出て來り

つぎ　ハイ〳〵、どなたでござります。

市　わたしや木挽町の宮越から來ましたが、明日の朝潮

にこの葛籠を、品川の雁木までやつてもらひたいから、持つて來ました。

つぎ　お氣の毒でござりまするが、釣舟の外は。

市　イヤ、そりや知つて居ますが、わしらが旦那は明日、親船廻りで釣にござるから、その次手に雁木へ上がる荷だから、いま此方へ次手があつたから、邪魔でも明日の朝まで、其所らへ置いて下さいまし。ソレ、いつもござる宮越の旦那だわな。

ト云ひながら下手へ置く。

つぎ　若い者が歸りましたら、承つて見ませうが、何にせい此やうな。

市　ナニ、邪魔なら、臺所でも何所へでもやつて置きなさい。ハイ左樣なら。

トそこ〳〵に云つて橋がゝりへ入る。

つぎ　宮越さまとは、ツイに聞いた事のない。マア、何にせい心にかゝるは、最前人殺しのなんのと、お二人さんの覺えのある事かない事か、この間にちよつと。

ト此の時、暖簾口にて、おてつ

てつ　モシ、おつぎさん、其所へ行ても大事ござりませぬか。、

ト出て來り

いま奧で話しを聞けば、義理ある父さんが、非業の死にやうさしやんした、その殺人は淸七さんに疑ひかゝればどの道生きては居られぬこの身。

つぎ　滅相もない。如何にお若いとて、其やうな無分別な事なされると云ふ事がござりませうか。傳八がのは、面々の粗相で死んだ事、お前樣の科ではなし、彌市どのやお仲さんは、外に殺し手がなうては叶はぬ。ハテ、天知る地知る、今の間に殺し手が判らずには居りませぬ。斯う申すと夫の自慢いたすやうなれど、三婦が引請けた日には、決してあなたのお身を科人にするやうな、思慮のない事は致しますまい。ハテ、一寸延びれば尋とやら。何人も私しども夫婦にお任せなされ、其やうな無分別をお出しなされて下さりますな。

てつ　サア、それにしても、どうぞ早う殺し手が知れたなら。

つぎ　ハテ、今にも三婦が歸り次第、その入り譯もとつくりと……何は兎もあれ、さう云ふ事なら、猶人目にかゝつてはなりませぬ、夜に入るまで淸七さんは納屋の內へ。

てつ　そんなら、この事を淸七さんに。

ト外へ思ひ入れ。

つぎ　アモシ、靜かになされませえ。

ト唄になり、おてつ、奥へ入る。おつぎ、見送つて

必らず短氣の事をして下さりまするな。それに付けても、合點のゆかぬはこちの人、羽織も着まい、浴衣も着替へまいと押入れを明けさせぬは、何か樣子の……又、この間から、あの鉄次牛八に口留めして、内へ匿まうてあると聞いた幼ない時に別れたわたしの弟、何やら惡い事をして、尋ねられて居る身の上ぢやとやら。それを隱して匿まうて下さんすは、わたしへ義理とは云ひながら、主もあんまり解らぬ人ぢや。わたしも釣船の女房、それ程の事聞いたとて、弟の身の上、なんの口外しませうぞ……何は兎もあれ、主の歸らぬ其うち、戸棚の中を。

ト明けようとして、思ひ入れあつて

イヤ〳〵、深い仔細あつて匿まはしやんした事であらう。もし、わたしが明けた事が知れた時は、日頃の氣質、どのやうな事云はれうも知れぬ……イヤ〳〵、こりや止しにしませう。女は女の似合うたやうに、奥へ行て、夕御膳の支度でもしませうわいなア。

ト唄になり、おつぎ、奥へ入る。この時、ソッと葛籠の蓋を明け、松、眞赤になつて出て、ぶら〳〵して切なき思ひ入れ。下手の桶の水を呑み、

松　オ、恐ろしや〳〵、おれもいろ〳〵の辛抱して見たが、本直しを呑んだ擧句に、この葛籠の蒸籠に蒸されたら、體が腑拔け玉になつた。併し、今、中で聞いて居たが、爰の女房の弟だと云つて、匿まはれて居るのは、神樂坂の大八。その前に奥から呼出したのはおてつ。二人の人殺しは知らぬが、傳八を首を〆めさせたとの事。この鹽梅では義平次婆アを殺したお梶めも、爰の内に匿まつてあるに違ひねえ。

ト此うち、橋がゝりより、市、出て内を窺ひ

市　松、首尾はどうだ。

松　シッ〳〵。

ト門口へ顏を出し囁く。

市　人殺しの淸七が、爰の内に留めてあるか。

松　コレ、まだこの上にも、隱れて居る、お梶が事も嗅ぎ出す魂膽。われは先づ今の事を早く〳〵。

トこれにて、市、引返して入る。

なんでも大九郎さんの來ぬうちに、先づ淸七めを縛つて、來るなり渡すと云ふ手番ひにしてえものだが。

ト矢張りブラ〱として居る。此うち、下手の納屋をソッと明け、清七、内へ入り、松の後へ廻り、葛籠の紐にて縛らうとして、氣味惡きこなしあつて、思ひ切り松に繩かける。松、悔りして逃げようとしても體の利かぬこなし。トゞぐる〱巻きにして手拭にて目鼻ぐるみ猿轡をかけ、門口へ連れて出で、下手の物置へ打込み、向うを見て驚ろき

清七　ヤ、向うより大勢にて取巻かれて來るは慥かに三婦どの。この事おつぎどのへ。イヤ〱、様子も聞きたし。オヽ、幸ひのこの葛籠の内。さうぢや〱。

ト葛籠の蓋を打ち、ソッと中へ入る。時の太鼓やうの神樂になり、向うより、三婦を取巻き、大九郎、捕手、を連れ出てきたり

捕手　キリ〱歩め。

三婦　世の中に横倒しな事をした事のねえ釣鍔だ。科人かなんぞのやうに、見つともねえ、靜かにさつしやりませ。モシ、大九郎さん、わたしやアこの中兩國で、お梶に取戻させた千壽院の出所、キッと詮議をしにやアなりませんぜ。

大九　たわけ面め。側へ胡亂にも致せ、刀はお梶に渡してしまへば、その詮議は後でもなる事。此方は管領へ屆け、清七お梶を召捕りに向つたれば、鎌倉よりの上意も同然。

三婦　イヤ、お前の方に詮議がある。おれが方の詮議は兎も角も、内へござりませ。大道中で見つともねえ。

大九　きり〱歩め。

ト舞臺へ來り、内へ入る。

大九　汝は如何やうに陳ずるとも、叶はぬ證據は、間者を入れて糺せしに、夜前仲買ひ彌市道具屋お仲を手にかけ、まつた手代傳八の首を締め、自殺のやうに致し置きたれど、見覺えのあるおてつが腰帶。遁がれぬ證跡、人殺しの清七を隱し置く事見屆けさせし上は、最早云ひ開きの筋はあるまい。サ、この手筋から吟味なさば、義理ある親を殺せし團七のお梶も、この家に隱まひあるに疑ひなし。主人へ出入りの但馬屋の急變ゆゑ、所の代官へ屆け召捕りに向つた。陳じ立てせずこれへ出せ。

三婦　なんだか皆さんの云ふ事は、おれにはひとつぱも判らねえ。先頃兩國で、こなさんの惡事を見出し、千壽院の刀を取返した意趣返し、厄病の神で敵を取らうと、清七が人を殺したの、ヤレお梶が親を殺したのと、それをこなさん、どうして知つてござる。

大九　知らいでならうか。お梶が義平次婆アを殺した時、身共……イヤサ、その場には居り合さねど、人の風說。
三婦　ハヽヽ、それが證據になるものか。
大九　此奴、下さげに申すな。これまでとは違ふ。管領へ屆け、召捕りに向つたれば、上の上意も同然。家探しして、その鼻を挫いてくれん。
三婦　隱まはぬと云ひ出したら、何へ其所らに居ても、この三婦は知りませぬ。探したくば勝手にさつせえ。
大九　云ふにや及ぶ。ソレ物置を。
捕手　心得ました。
　ト下手へ行きにかゝる。おつぎ、暖簾口に窺ひ居て、ツカ〱と出て
つぎ　アヽモシ、例へどなたの仰せでも、納屋の內には女子の下着。見苦しい褌袍の洗濯物で、踏み込む場席も。
大九　イヽヤ、隱し立ては猶怪しい。ソレ者ども。
　トこれにて捕り手行かうとする。此うち、宗治、路地口へ出かゝり居て
宗治　イヤ、その詮議より盜賊の詮議。
　トずつと內へ入る。
三婦　ヤア、あなた樣は。
宗治　箕田の藩中、淺田宗治と申す者。
三婦　すりや、貴殿には盜賊の。
宗治　神樂坂の大八と申す者、召捕らん爲、
三婦　緣も由緣もねえ大八とやら、匿まつた覺えなけりやア、此方の構つた事ぢやアなけれど、心得の爲、その者の舊惡を。
宗治　先つ頃、若殿御遊興の隙を窺ひ、浮牡丹の香爐を盜み、事顯はれ、逃げ去つて當地に參り、次第に惡行つのり、先へ夜前、仲買ひ彌市を締め殺せしが、所の者に追はれ逃げ去りしゆゑ、大八が業なりと、彌市が臨終の物語り。
三婦　すりや彌市は弟……イヤサ、大人氣ねえ、むざ〱、
大九　それにしても、傳八を殺したは淸七と云ふ事、自身の口からこの內で、最前吐かしたとの事。また十四日の夜に、親を殺したお梶めも、この家に居るとの事。
三婦　フム。すりや、いよ〱義理ある親をアノお梶が。
大九　オヽ、證據はその場に落ち散る簪の模樣、菊に勝見の比翼紋。淸七お梶の二人に一人、隱しあるはあれなる物置。ソレ者ども。

捕手　心得ました。

　　ト物置へ行かうとする。この前に駕籠の垂れを上げ、
　　お辰、出て四人を支へ

たつ　ア、イヤ、お待ちなされて下さりませ。

三婦　ヤア、わりや一寸のお辰。

つぎ　なんと思うて。

大九　また邪魔をしに出居つたな。

たつ　なんのマア、とても遁がれぬこの身の罪。名乘つて出やうと思ひ定めたゆゑ、これまで三婦さんのお世話になつたわたしの體、暇乞ひに來かゝつて、表で様子を聞く折柄、わたしの落した簪を證據に、人違ひしてお梶さんが、親御を殺したとの御詮議。誠親御を手にかけたは、ハイ、この一寸のお辰でござんすわいなア。

三婦　ナ、、なんと云ふ。

たつ　證據は菊に勝見の比翼、兄弟分になつた時、互ひに打たせた簪の模様。取落したばつかりに、お梶さんの無實の災難。夜店の晩の人殺しは。

大九　イヤ〳〵、見す〳〵身共が。

たつ　ハテ、誰れかなんと云はしやんせうと、淸七さんを取返さうと、後を慕うて、聞入れのない無得心、果は母御の刃物三昧。ツイ手が廻つて。直ぐに名乘つて出ようと思ひ定めた上からは、思ひ殘す事はござんせぬ。その簪はわたしへ戻して……ハテ、名乘つて出たに、なんの證據が要らうかいなア。

　　ト取つて

サア、繩かけて、お連れなされて下さりませいな。

大九　エ、コレ、團七のお梶を召捕りに參つたに、横合ひから名乘つて出ては、目串に迷ふわい。

宗治　身共は迷はぬ、盜賊のアノ大八。

たつ　サア、大九郎さま、このお辰に繩かけて。

大九　無性になりたがる、お辰の氣が知れぬわえ。こりや義平次婆アを殺したより、此方は昨夜傳八を締め殺した淸七を召捕るが順道。

たつ　サア、その傳八どのを殺したも、矢ッ張りわたし。斯うなるからは。なんの包み隱しませうぞいなア。

大九　エ、、どう云へば斯う云ふと、そんなら心ゆかしに、繩をかけてやらうわい。

　　ト立ちかゝる。この時、葛籠の内にてバタ〳〵と音する。

コリヤ〳〵、出まい〳〵。

三婦　大九郎どの、出ては惡いとは。
大九　サア、惡いと云つたは、ムウさうだ。見す〳〵それでもないに、お辰が名乘つて出ては、惡い〳〵と申したのだ。それよりはアノ物置を。
　ト行かうとするを、
三婦　イヽヤ待たつせえ。おれは匿まつた覺えはねえが、慥かに淸七は留守に來て、この葛籠の中に隱れて、痛くもねえ腹を探らせやアがつたな。ドレ、面晴れに出刃庖丁で突ッ殺して。
大九　ア、コレ〳〵、早まるまい〳〵。
三婦　でも、こなさんが匿まつたと、疑はつしやるから念晴らしに。
大九　ヤア、コレ〳〵、其方が匿まやせぬ。
三婦　そんなら、この三婦が内には
大九　淸七もお梶も居ぬ。疑ひ晴れた。ソレ。
　ト捕り手に目配せする。これにて捕り手、ツカ〳〵と下手の物置を明け、松を引立て内へ投げ込む。おつぎ、驚く。松、よろ〳〵として、眞中へ座る。
さてこそ淸七。
　ト此うち、捕り手、手拭を取る。

三婦　ヤア、わりやア松ぢやアねえか。さては物置に隱れて居て、空巣を狙ふ小盜人め。懲りるやうにおれが存分。
松　ア、親方々々、盜人ぢやアねえ。大九郎さまに頼まれ、葛籠に入つて、どうも氣色が。
三婦　フム、そんならわれが犬になつて。
松　入つた所を淸
　ト云ひかけるを、三婦、手拭を嚙ませ
三婦　アイヤ、性急に聞かうより、後でゆつくり。
　トひよろつく松を當てる。これにて懷中より密書落ちる。お辰拾ひ、讀み下し
たつ　ナニ〳〵、浮牡丹の香爐は、駒込の持ち主の所へ忍び盜み取り、暫らく預かり置き申し候ふ間、如何やうに手を廻し吟味いたし候ふとも、存ぜぬとばかり御申しなさるべく候ふ、鹿印へ、坂より。
宗治　さてこそいよ〳〵
たつ　親の敵の
三婦　大八を詮議するのか。
たつ　サア、お梶さんと云ひ淸七さん、無實の惡名付けられしも、わたしが人を殺したも、元の起りは紛失の、浮牡丹を詮議せう爲。殊にわたしは義理ある親の。

三婦　女の小腕で敵を取らうと、お主が云へばおれも又、清二めを爰へ引出し、鼻明かせるは大八が爲。先刻から樣子を見るに、なんだか怪しい葛籠の內。

たつ　釣舟さん、お前が葛籠の詮議をすれば

三婦　オヽ、われも大八を敵と狙ふか。

つぎ　互ひの意地を云ひつのれば、望みも叶はず表沙汰。

大九　とは云へ大切の人殺し。

ト三婦、思ひ入れあつて

三婦　フム、よろしうござります。この一埒は釣舟が、一荷に擔つてすつぱりと、筋道を分けてお目にかけませう。

大九　面白い。見事お主が人殺しの。

宗治　イカサマ、それも密書の手筈から。

たつ　吟味したたらまだ外に。

大九　イヤサ、爰らが寬仁大度の所。

三婦　萬事は三婦に任せて一先づ。

宗治　落着までは奧の一間で。

大九　身共は會所で。

つぎ　お客樣には暫らく奧にて。

三婦　嚊ア、御案內しや。

つぎ　斯うお出でなされませ。

ト唄になり、宗治は、松を引立て、おつぎ付いて奧へ入る。大九郎、葛籠を恨めしさうに見込み、四天を連れ外へ出て、ちよつと囁き、路地口へ入る。

三婦　コレ銑次、ちよつと來い〳〵。

ト奧より、銑次出る。

銑次　アイ〳〵、親方、用でござりまするか。

三婦　コレ、用と云ふは。

ト囁く。

銑次　コレ、早く行け。

三婦　そんなら今の仕ひに。

ト銑次奧へ入る。あと合ひ方。此うち、お辰思ひ入れあつて、ツカ〳〵と上下の押入れへ行かうとする。三婦、葛籠へ目を付け、お辰は上手の押入れへ目を付け、顔見合せ

三婦　ハヽヽヽ。

たつ　ホヽヽヽ。

兩人　ハヽヽヽ。

三婦　ナニお辰、これまでお主が亭主の德兵衛とは、兄弟同樣出入りもしたが、其方は藝者商賣して居りやア、身儘にもならず、內へ來たのは今日が初めて。なんぞ馳走

でもせう。マア、ゆつくりとしたがよい。

たつ　わたしもこの中兩國で、お梶さんやお前と云ひ合せ、あの大九郎が隱し持つた千壽院を、苦もなう取返したお禮がてら、ちよつと來たいと思へども、お梶さんもわたしも、あの晩の事がパツと知れ、それから後には茶屋船宿でも疑ひ立て、氣味惡う思う樣子ゆゑ、なんの親方持ちではなし、自前稼ぎの氣散じは、誰れにも上手もいらばこそ。御祭禮を滯りなく勤めた祝ひと、大山かけて富士詣り。それゆゑ無沙汰になりました。それにしても合點の行かぬは、日頃の氣質にも似合はぬ邪ま非道。人も知つたるアノ惡黨の大八を。

三婦　世話やくのが不思議だと云ふか。

たつ　サア、これまで惡人とは、物さへ云はぬアノお前が。

三婦　イヽヤ、おれが大八を匿まふ因縁を聞かうより、われはまたあのお梶と、兄弟分になつたよしみで、人殺しを身に引受け、代りに命まで捨てやうとは。

たつ　いかい阿房な女子ぢやと思ひなさんせうが、助松のお家には、大恩受けし德兵衞どの、それと云はずに人知れず、寶の詮議をするうちに、淸七さまのお身の上から事起り、お梶さんは心にもない親殺し。昨夜鐵砲州で傳八を殺したは、このお辰と名乘つて出て、淸七さまを助けなば、德兵衞どのへ恩返しと、覺悟極めて死ぬ命。二つには遺恨にて、人を殺めた刑罪うけ、一人の命でお二人を助け、肩身を廣う紛失の、寶を手に入れ、淸七さまの御歸參あるを、あの世から見るが樂しみ。親仁さん、推量して下さんせいなア。

三婦　オヽ、出かした。イヤ、どうして〳〵、男を磨くの立てるのと、思つたこちとらは跣足だ。われが料簡聞いて、おりや恥かしい。併し恥を云はねば理が知れぬ。お主が親の團市を殺したと云ふ大八は、段々と名乘り合つたら、今の女房の實の弟。義理が重なつて、どう困つたやら匿まつてくれと、命を投げ出してのおれへの頼み。連れ添ふ女房の縁に引かされ、オヽ、呑み込んだと請合つた、薄穢ねえおれが心に引替へて、亭主が恩のあるお人の爲に、科を引受け、とても死ぬ命なら、兄弟分のおかぢが、親殺しの重罪も、一荷に脊負つて御處刑を、受けやうと云ふお主が魂ひ、それ聞いて發明した。この上はともどもに、淸七さんの力となつて。

たつ　浮牡丹の香爐を手に入れ、德兵衞とのとも相談して、御歸參させて下さんせ。これさへ頼めば、心殘りは外に

ない。三婦さん、隨分おまめで。
　ト門口へ出ようとする。
三婦　そりやあんまり本意ねえと云ふもの。命一つを投げ出したら、世界に怖い物はねえぢやアねえか。一生の別れだ。マア、奥へ行つて、一杯呑んで行つちやアくれめえか。
たつ　成る程、折角の思し召し、背くもどうやら他人向き。
三婦　神佛の抑へ綱で、不思議に助かる事もある。口を祝うて。
たつ　サア、死急ぎする事もなければ。
三婦　コレ、今直に行く。先へ始めてくりやれ。ヤイ、さんきは居ねえか。
　トこれにて三吉、奥より丸行燈を灯し出て來り
三吉　モシ、お辰さんへ御馳走なら、ちやんと肴も拵らへて、奥二階へ出して置きました。
三婦　そいつは氣が利いて居た。その鯔を魚田にでもして。併し、酒は先刻てめえに、云ひつけて置いた方を燗をして。
三吉　アノ膽を……イヤサ、昨日取りにやつた方かね。よしよし。
たつ　そんなら三婦さん。
三婦　暑ッ苦しい帶でも解いて。
たつ　ドレ、御厄介になりませうわいなア。
　ト唄になり、三吉、下手の盤臺より以前の河豚をちよつと隠し、小皿へ入れて、燒火鉢を持ち、お辰に付いて奥へ入る。この時、下手の路地口より、大九郎、市、欽次付き添ひ出て來り、内を覗いてソツと明け
大九　釣舟どの、これなる欽次より委細の樣子承り、大九郎、斯くの通り、兩手を突いてお禮を申す。
三婦　ナニお前、お身達が懷刀にして居る大八は、おれが噂アの弟。内の身寄りを科人にしちやア、これまで人に面を賣つた、わしが男が立たぬゆゑ、これまで懇意にした奴等でも、大八に刃向やアみんな向う面、必らず案じさつしやらぬがようごんす。
市　それゆゑ大九郎さまも、所の代官へ屆け、あの淸七を人殺しにして片付けてしまやア、自づと香爐の詮議も止み、大九郎さまも、枕を高く寢られると云ふもの。
欽次　淸七の科を引請けて、名乘つて出やうと云ふ、あの一寸のお辰めも今に寂滅。
大九　そりや又何ゆゑ。

三婦　サア、こなさん達の知らぬ事。せうさいの膽を西瓜の水で練つて、一ツ垂らし酒の中へ入れて呑ませりやア、立ち所に苦しんで死ぬ大毒藥。
大九　すりや、その酒が。
三婦　先刻に來た侍ひや、お辰に喰はせる早急の思ひ付きハテ、呑に腹は替へられぬ。殺生するは釣舟が商賣。魚子だと思やア、ナニ可哀想な譯もねえのサ。
大九　イヤ、流石は男氣、驚き入つてござる。
ト此の時奥バタ／＼になり、三吉、捕り繩を持ち走り出て
三吉　父さん／＼、淺田とか云ふ侍ひが、あの酒を呑せたら、たつての苦しみをして、こんな繩も何も打ツちやつて、川岸から船に乘つて、屋敷へ歸つてしまつたぜ。
三婦　ナニ、屋敷へ歸つた。そいつはちつと……マアいゝ。内へ歸るまでもねえ。途中でごねるに違ひねえ。さうしてお辰は。
三吉　今おいらが無理に注いだら。
三婦　首尾よく呑んだか。締めた。コレ。
ト囁く。
三吉　合點だ。

ト走つて奥へ入る。
三婦　サア、もう氣遣ひな事はござりません。淺田宗治もお辰もおッ片付けりやア、邪魔は拂つた。コレ、この葛籠の。
大九　そんなら中は、こなたに預けた。
三婦　コレ、……もう歸らつしやりますか。
市　でも、肝心の。
大九　アヽ、コレ／＼、ナ、三婦が挨拶ゆゑ、今日の所は見遁がして歸る。ハテサ、何事も身共が胸に。然らば釣舟、さらば。
三婦　お早々でござりました。
ト唄になり、大九郎、三婦に目交ぜして、市を制し、門口へ出て、ちよつと囁き、又路地の内へ小隠れする。
鉄次　親方、さうして奥のゐて吉が、いよ／＼ごねたら後の始末は。
三婦　エヽ、後の川へどんぶり水葬。なんの雜作もねえ事だ。併し、今に苦しんで醫者と云つたら、二三遍呼びに行く眞似をして居や。其うちには息は絶えるから、三吉にも好く打合せて置け。
鉄次　そんならわつちは。

三婦　コレ、氣を利かせろよ。
鉄次　合點だ。
ト合ひ方にて奥へ走り入る。この時、葛籠の蓋を明け、清七、出かけ
清七　三婦どの、最前からこの中で樣子を聞けば、頼もしいこれまでの詞と違ひ、どうやら味な。
三婦　うぬは清七。樣子を聞いたら是非がねえ。われを斯うして。
ト云ひながら、あたへりこなしあつて、明りを吹き消す。トごん。
清七　ヤ、こりや何ゆゑ明りを。
三婦　やかましいわえ。
ト合ひ方、こなし。三婦、ちよつと囁き、足音をさせる。清七、心得
清七　ア、コレ三婦、この清七をなんとするのぢや。
三婦　なんとするものか。明りがあつちやア女房や、あのお辰が見付けたら、邪魔な皮。幸ひ爰に宗治めが、置いて行つた捕り繩。
清七　ア、コレ、人に得心もさせず、無體に繩をかけて、さては騙して、この清七を人殺しにして、大九郎へ渡すのぢやな。
三婦　知れた事だワ。大九郎は兎も角も、浮牡丹を盗んだ大八は、女房おつぎが實の弟。おれが緣者を科人にしちやア、この釣舟の男が立たねえ。われから先へおッ片付けて、お辰めには毒を盛り、殺してしまやア實詮議の根も葉も絶え、大八の身を明るくして、おれが片腕。なんと年寄の料簡は、又別であらうがな。
清七　チエ、、さうした心と露知らず、おてつ諸とも便りに思ひ、大事を明かしたが口惜しい。この間にさうぢや。
三婦　ドッコイショ。うぬを逃がしていゝものか。
ト始終足音をさせ、押入れと路地へ聞へるやうに仕方する。この時、奥よりおつぎ、以前の松を引立て、おてつ、付いて出て來り
つぎ　コレ、こちの人、如何にわたしへの義理立てぢやとて、清七さんを大九郎へ渡しては、友達衆へお前の顔が立つまいがな。
三婦　エ、喧ましいわえ。この年まで實子もなく、われが連れッ子の三吉にかゝるには遅し、弟の大八が尋ねて來たこそ幸ひだ。舊惡を人に浴せて、これから體を洗ひ替へ、おれが力にする工面。女の知つた事ぢやねえ。

てつ　開けば開く程、恐ろしい三婦さんの企み。どうぞこの場を見遁がして。
清七　さう云ふ聲は、おてつぢやないか。
てつ　清七さん、こりやマアなんとしたら。
つぎ　コレこちの人、どうぞ本心になつて。
三婦　エヽうつとしい、どきやアがれ。ソレ、猿轡だ。
　ト袖へ口を當て、聲をかすめる。
清七　エ、コレ無體な。
てつ　行かで叶はぬ事ならば、わたしも一緒に。
三婦　エヽ、此奴も口を叩くか。ソレ、斯うしてしまへば物が云へめえ。
　ト自身の膝を叩き
動きやアがるな。コレおてつ、わりや遠い所へ賣つてやつて、おれが呑み代にする。ヤイ／＼、嘸ア、惡い料簡だ。われが身内の爲を思つてやるのだ。エヽ、吠えずとこの女を、揚げ板の下へでもぶち込んで置け、
つぎ　そりや又あんまり。
　ト松を捉つて三婦の前へ出す。
三婦　喧ましいわえ。サ、清七は元の葛籠へ先づ斯うして。待て／＼。幸ひ爰に野良どものすきかけた網があつた。取りも直さず網乘り物だ。
　ト松を打込み蓋をして、幕明きの網をかけ、捕り繩にて絡める。
つぎ　そんならどうでも。
三婦　エヽ、その女連れてうしやアがれ。
　ト合ひ方になり、清七、おつぎ、おてつ、囁き、足音さして奥へ入る。この時、路地より大九郎、先に市、出て來り、三婦、ソツと門口を明け
大九　釣舟、首尾は。
三婦　年寄りのする事にぬかりがあるものか。併し、この清七を吟味する相役は。
大九　ハテ、そこはぬからぬ。身が腹心の者が立會ひ、人殺しを囮りに、屋敷へ連れ行きぶッ放すワ。
市　そんならこれから、新錢座の屋敷へ引取り、
三婦　ナニ、こなさん達の世話のねえやう、先刻の葛籠へ捻ぢ込んで。
　ト前へ押し出す。
市　また脊負のかね。
大九　エヽ、骨は盜まぬ、ちつとも早く。併し、ちよつくりアノ大八に。

三婦　イヤ、毒に中つて川岸から船で、歸つたとは云ふものゝ、もし運強く宗治めが、立歸るめえものでもなし。

大九　イヤ／＼、おてまへが匿まへば鐵の楯も同然。

三婦　隨分ともに道を氣を付け。

大九　オッと合點。

三婦　急いでござらつしやりませ。

大九　ソレ。

　ト早めたる合ひ方、時の鐘になり、向うへ入る。

三婦　これであらまし片付いた……サア大八、もう氣遣ひのきの字もねえ。

　ト戸棚を明ける。これにて、大八、以前の二品を手拭に包み、前へ出して

大八　樣子は殘らず彼處で聞いた。昨夜爰の船とも知らず、助けてもらつて内へ來て、樣子を聞きやア、幼ない時に別れた姉御の內。洗ひ浚ひおれが體の棚卸しをしたら、氣性を見込み、この身の垢を拔いて、眞人間にしてやらうとの事。あんまり巧過ぎた云ひ分と疑つたが、淸七めを大九郎に渡したので、疑ひはさらりと晴れた。併し、まだ迂濶に表向きへは出られぬ體。

三婦　ハテ、それもテキパキ片付ける。お辰めをおッ殺し、あのお梶めが隱れ家を嗅ぎ出して訴人すりやア、物云はず親殺し。お主が向うを張る奴等は、たんてきの間に片付けて、肩身を廣くするまでの、屈み所は……オ、さうだ。おれが子分の茶船の仁藏、佃島でこそあれ、滅多にけじめを喰ふ奴でもねえ。蚊の居ねえのを儲けにして、二月三月辛抱しやれ。其うちには蛇の目を灰汁で洗ひ上げ、押しも押されもしねえ舟持ちにしてやる程に、マアそれまでは氣を付けて……それにしても、われが大切に持つて居る寶とやらは。

大八　ムウこれか。こりやア浮牡丹の香爐に、祖師の曼陀羅。あの團七のお梶めが、世話をする淸七兄弟が身に、なくつて叶はぬ大切の寶だ。例へ親子兄弟の仲でも、肌身を離す事はならねえ代物だ。姉御の緣でと匿はれちやア居るものゝ、もしこれを渡さにやアならねえやうな仕儀になりやア、兄弟のよしみも切つて、爰を飛び出し一本立ち。この二品を種にして、まだ／＼一花上げにやならねえ。

三婦　それ程大切なその香爐。もし人手へ渡つたその時にやア、大勢の命に拘はる……大勢の入込む祭の場所、必らずともに心を付けて。

大八　そんなら佃島の、仁藏とやらの內へ行つて。
三婦　幸ひ今夜は住吉祭。併し、なんば人目を忍べばとて、その形ぢやアやられねえ。おつぎや、おれが浴衣を着せてやれ。
ト合ひ方になり、おつぎ、出て來り
つぎ　ほんにマア、來ずともよい所へ尋ねて來て、こちの人の心まで。
三婦　まだ愚痴を云つて居やアがるか。云ひ草云ふにやア及ばねえ。おれが浴衣を出して着せろえ。
つぎ　なんのマア、捨てゝ置かしやんせ。
大八　ナニ、別におれが着てえと云ふのぢやアねえが、兄貴が着て行けと云ふから。
ト此うち、おつぎ、戸棚より浴衣出す。
つぎ　行くとは、そりや何所へ。
三婦　ソレ見やアがれ、矢ッ張り案じる癖に。
大八　これからは、すつかり心を入れ替へて、兄貴の手助けになるから、今までの事は水に流して。
三婦　ハテ、締まる時には、ちやんと堅氣にならにやアならねえ。ナニおつぎ、三吉に送らせて、佃の仁藏が所へ、當分のうち匿まはせて、其うちにいつせえがつせえ、方を付けるおれが料簡だ。他人ぢやアもし洩れでもしちやアならねえ。
つぎ　三吉、ちやつとお出で。
三吉　アイ〳〵。
ト出て來る。
なんの用だえ、
三婦　コレ、譯は後で云つて聞かせるが、こりやアてめえが、血を分けた伯父さんだ。
三吉　そんならこの人は、父さんの弟かえ。
つぎ　なんのマア、常々も云ふ通り、わしは其方を連れて、この三婦どのゝ所へ再緣して。
三婦　エヽ、そんな事を云つて聞かせるにやア及ばねえ。爰に居る人は、阿母の實の弟よ。
大八　他人の猿似と、緣あつて親子になる所爲か、三吉は三婦どのに生寫しだ。
ト浴衣を着替へ、帶を締め替へる。この時、前幕のおつぎの守を落す。奥バタ〳〵になり、鈄次、駈け出ながら。
鈄次　アイ〳〵、しつかりして居なさい。いま醫者を呼んで來るから。

ト前へ出て
親方々々、又お辰さんが苦しみ始めたから、醫者を呼んで來ると云つて打ッちやつて來やした。
三婦　大分遲い刺きやうだなア。
三吉　猪口に一杯吞んだきり、いくら進めても後を吞まねえその所爲か。
つぎ　ほんにマア、此やうな非道さすもわが身ゆゑ。
三婦　ごたくを吐くにやア及ばねえ。介抱する眞似をして、水でもしこたま喰はせ、早く片付ける算段でもしろえ。
鈍次　お前が行かずば、ドレわたしが。
三婦　ア、コレ、昨夜からの掛合ひだ。三吉と一緒に、この客人を、佃島の仁藏が所へ送つて行つて、今夜遲くもおれが行くまで、人の目褄にかゝらぬやうに、隱居所へでも忍ばせて置いてくれと、よく二人とも賴んで來い。
三吉　アイ、合點でごんす。
鈍次　アレ〳〵、のた打つて苦しんで居る。
つぎ　可哀想に……コレ、必らず輕はづみな事して、人の目褄にかゝらしやんな。
大八　おれに構はずと、お前は奥へ。
鈍次　そんならちよつと突ッ切つて。

三婦　川岸から川岸へ直ぐに横付け。
大八　後からキッと。
三婦　暗えから氣を付けや。
ト唄になり、大八、鈍次、三吉付いて下の路地へ入るおつぎ、暖簾口へ行く眞似をして立戻り
つぎ　こちの人、この中主計さまと云ひ合せ、淸さまや主計さまの、御難儀になつた香爐の詮議、斯う〳〵せいと主計さまのお指圖ゆゑ、但馬屋へ行つた時、落した手紙の文言に、あの大八は幼ない時別れたわたしが弟。今は年寄つて便り少ないと、誠らしう書いたる手紙、慥かに九平次とやらが拾ひ取り、惡者仲間の大八に渡したゆゑに。
三婦　われが身元を聞きかぢり、弟だと云つて隱まはれに來たのは、飛んで火に入る夏の虫。斯うもまんよく行くものかなア。
トこの時、障子屋體より、宗治、出て來り
宗治　其許の働らきにて、重罪の大八めは、網にかゝつた魚も同然。
三婦　子分の内へ連れさせてやつたも、當座の島流し。
つぎ　さは云へ、もしも風を喰うて。

宗治　氣遣ひ召さるな。身共はこれより屋敷へ馳せ行き、
多勢をかけて船場を固め。
三婦　この釣舟は仲間をすぐつて觸れを廻し、祭に事寄せ
酒盛らせ、熟睡の折へ付け込み、無事に寶を取得る手段。
つぎ　左樣ならば、あなた樣は。
トこの時、橋がゝりより、以前の中間、提灯を持ち出
て
中間　ハツ、お迎ひ。
宗治　これより直さま立歸らん。然らば釣舟。
つぎ　二品無難に取返すそれまでは
三婦　必ずともに。
宗治　オヽ……ソレ提灯。
中間　ハツ。
ト先に立ち、宗治、血相して向うへ入る。三婦、こな
しあつて
三婦　着物を出せ。
つぎ　佃へ行くには、まだ早いぢやござんせぬか。
三婦　イヽヤ、仲間を集めて何かの手番ひ。
つぎ　さうとは知らず氣をゆるし
三婦　酒を喰はせおだて上げ
つぎ　二品無難に取返す。
三婦　罠にかゝつた大べら坊、嘸ア、天道樣は
トちよんと膝を叩く。
明らかだなア。
トこの仕組〻よろしく道具ぶん廻す。
本舞臺、三間、大和葺きの常足、上手、九尺の中二
階、二重へ寄せて青簾をかけ、後に手摺り付きの本
緣。この向う一面の浪幕、平舞臺、酒肴を取散らし
下に以前の燒火鉢、鐵弓を載せ、爰に、お梶、好み
の形、硯を引寄せ、文を案じて居る見得、しんみり
した合ひ方にて、道具納まる。竹本になり
〽義理と意氣地を立て過ぎて、今は人目を忍ぶなる、お
梶は思案とつおいつ。
かぢ　最前店の爭ひと云ひ、お辰さんの余所ながら、物に
准へて云はしやんしたは、身に覺えのない濡衣を、誠と
思うてわたしを案じ、ひよんな事でもする事かと、親身
も及ばぬ氣扱ひ。さりながら、本人の出るまでは、戸の
立てられぬ人の口。大九郎の樣子では、この家に隱れて
居ると感付いて、先刻の口振り。無實の難に捕へられ、

憂き目を見るが辛いゆゑ、未練と後で笑はれうと儘、人の來ぬ間にこの家を立退くより外はない。委細の事は文に書き置き爰へ殘して。さうぢや〳〵。

ト態と二階へ聞えるやうに云つて卷きしまひ、帶を締め、下手へ行きかけると、奥にて

たつ　お梶さん〳〵。お前は何所へござんすえ。

ト出て來て突き廻し留める。

かぢ　ちよつとわたしは、おつぎさんに。

たつ　イ、エ、そりや嘘でござんせう。外の女子なら尤もと思はうが、男まさりのお梶さん、惡人ながら義理ある親、殺しましたと速かに、名乘つて出やしやんす心でござんせうがな。

かぢ　サア、今以て相手は知れず、何をせうにも女の手一つ。其うちに思ひがけない疑ひかけ、本人の出るまでは、無實の罪に日蔭のこの身。捕へらるゝが悲しさに、わたしや此家を立退く心。どうぞ見遁がして下さんせいなア。

ト お梶、二重へ上がる。

たつ　團七、捕つた。

〽と聲かくれば。

ト これにて恟りして、こなしあつて、お辰の側へ來り

かぢ　捕つたとは、何を捕つたえ。

たつ　サア、嫁を取つたと云ふ事いなア。

かぢ　エ、。

たつ　サア、この中上州へ戻らしやんした、團七の茂兵衞さんが、團七縞のお梶さんを、嫁つたと云ふ事いなア。

かぢ　なんの事やら、わたしに恟りさする事ばかり。

たつ　サア、こりや恟りでござんせう。

ト お梶を下へ置き、合ひ方替つて、お辰、彼の以前の簪を拔き取り

お梶さん、この簪、お前覺えがござんすかえ。

かぢ　菊に勝見の比翼紋、こりやお前と兄弟分になつた印と、打たせた簪。それがどうぞしたと云はしやんすか。

たつ　サア、この簪が、味な所に落ちてあつたと、最前大九郎が證據に持つて來たゆゑ、お梶さんの母御を殺したはこの辰と、明かに名乘つて此方へ引上げたれど、誰れ云ふとなく噂取りどり。

かぢ　ハテ、なんと云はうとも、覺えはないけれど、誰れか拾うたものでがなござんせう。

〽劍もほろゝの挨拶に、お辰は涙汗に紛らし。

たつ　隱さんすなお梶さん、しかも宵宮の練込み前、力強

でも多勢の中、心元なく後追うて、雪の下の御門外、月はあつても俄雨、姿も朧に行き違ふ、主は慥かに見屆けた、死骸の止めの氣遣ひないと、心で納め人知れず、お前の行くへを尋ねた上、築地ヶ岡の人殺しは、お梶さんぢやないわたしぢやと、名乘つて心底打明かさうと、思うたわたしへ、なぜ其やうに隱しては下さんす。寶も無難に手に入れて、淸七さんの汚名も晴れて、近々に本地へ歸參なされるを見て、なぜ名乘つては出やしやんせぬ。殊にお前の親御九郎兵衞さんが、幼ない時の云ひ號け、死ぬる時の遺言も、纏しい母御の沒義道ゆゑ、男嫌ひと云ひ觸らし、肌汚さぬは、あの茂兵衞さんへ立てる操。例へ一日半日でも、戀しと思ふ茂兵衞さんに添ひ臥して、望みを叶へその上で、兎も角もしなさんせ。モシ、急く所ぢやござんせぬ。淸七さんのお身の上は、互ひに世話しよう合點ぢやと、女でこそあれ男にも、負けぬ起請を取交し、コレこの通り肌身に添へ、わたしや大切に持つて居るぞえ。大方お前は反古にでもしてしまはしやんしたでござんせう。これ程深い二人の仲、なぜ斯う〳〵と打明けて下さんせぬ。そりやお前、水臭い〳〵。エ、モ、胴慾なお方ぢやわいなア。

へ恨みの涙はら〳〵〳〵、保ち兼ねたる強意見、お梶も淚押拭ひ。

かぢ　お辰さん、免して下さんせ。段々の御深切嬉しうござんす。隱したは成る程、わたしが悪うござんした。お前に別れてから、淸七さんを取戻さうと、追ひかけて止めた駕籠の中は母さん。いろ〳〵とお行くへを、聞いても云はぬ無得心。白刃を拔いて身を摺りつけ、殺せ〳〵と振り廻すを、止める暇も情なや、爭ふはずみに手が廻つて、取つて歸らぬ急所の深手。心を定め止めを刺し、直ぐに名乘つて出んものと、夜の明け方爰へ忍んで、樣子を云へば三婦さんが、指圖をするまでは、迂濶に名乘つて出まいぞと、晝夜心を付けての深切。その心根にほだされて、未練に今まで長らへしが、紛失の香爐も程なく手に入り、淸七さんも御歸參あると、聞いたを思ひ出に、とても生ては居られぬこの身、やがて千住か鈴ヶ森、三尺高く木の空へ、上がつた上で皆さんに、只一遍の御回向受け、嬉しう成佛いたします……今お前の話しでは、茂兵衞さんへ父さんが、話しやんした事露知らず、男嫌ひと今日までも、云はれたこの身に恥かしい、母さんの無得心ゆゑ、一生やもめで暮らさうと、思ひ切つて居た

ものを、この中不思議に兩國で、茂兵衞さんに逢つてから、ツイ煩惱に心の迷ひ。わたしやお前の女房ちやと、口先までは出たれども、逢はぬ昔と諦らめて、ツイ一通りの他人あしらひ。お辰さん、推量して下さんせいなア。
〽初めて明かす實の心、聞いてお辰は嬉し氣に。
たつ　サア、その後、今川橋の間違ひから、國へ立たしやんす時、德兵衞どのへ云ひ置いて、お梶さへ得心なら、いつ何時でも高崎の、伯母の所へ送らせてと。
かぢ　云ひ置いて行かしやんしたか……とは云へ今にも捕へられ、非業の最期をする身を以て、逢うたら結句思ひの種。
たつ　サア、茂兵衞さんも名高い男、又よい思案も。
かぢ　そんならお前の意見に付いて。
たつ　上州へ身を隱して下さんすか。
がぢ　必らず未練と笑うて下さんすな。
たつ　なんの笑はう。わたしや眞實の兄弟ぢやと、思うて居りますわいなア。
かぢ　お辰さん、嬉しうござんす。親身も及ばぬお前の深切、死んでも忘れは致しませぬ。
〽碎け合ひたる女氣も、男まさりの粹と粹、二人手に手を取り交し、嬉し淚ぞ道理なる、立ち聞く三婦も走り出て。
三婦　お辰、得心させてくれたか。
たつ　オヽ、お前は三婦さん。
かぢ　恥かしいわいなア。
三婦　ナニ恥かしいものか。大きな態をして男を持たぬは小町だのなんのと、その方が餘ツぽど恥かしいわい。何は兎もあれ、得心してくれたら、善は急げだ。人目にかゝらぬうちに、嚊ア、ちよいと來い〳〵。
ト呼び立てる。これにておつぎ、おてつ、出て來りて
てつ　三婦さん、樣子は殘らず聞きました。
つぎ　これでお前も、安堵さしやんしたでござんせう。
三婦　エヽ、安堵どころぢやアねえ。燭臺へ明りを付けててめえの着物でも出して、小綺麗に支度をしてやつてくれ。
つぎ　アイ〳〵、合點でござんす。サ、おてつさん、お前、御苦勞ながら。
トこれにて、おてつを見て
たつ　オヽ、其方はおてつ。最前三婦さんから、段々の譯は聞きました。其方を世話して下さんすは、淸七さんに

繋がる縁。さりながら、いかい苦勞をしやつたなう。
てつ　お前に逢ふも面目なうござんす。わたしが吉原を駈落ちしたばつかりに、いろ〳〵と御苦勞をさせました。殊に義理ある父さんが、人手にかゝつて死なしやんしたとの噂。
たつ　サア、その疑ひが淸七さんに、かゝりやつながる縁者の端。
三婦　エヽ、愚鬧々々と小面倒な。そんな話しやア何時でも出來らア。ちつとも早くお梶が支度を。コレ、おてつさん、こなたも共々。
てつ　アイ、そんならわたしは奥へ行て。
たつ　ア、早う行きや……サ、そんならお梶さん。
かぢ　何から何まで皆さんのお世話。忝なうござんすわいなア。
三婦　エヽ、そんな事を云ふ手間に、サッサと支度を。
てつ　サ、ござんせいなア。
〽互ひに盡す眞實心、伴ひ奥へ入りにける。
ト唄になり、おてつ、お梶を連れ、二重より縁傳ひに奥へ入る。
つぎ　サア、これで一方は落ちついたが、最前の樣子と云ひ、心にかゝるは淸七さんのお身の上。もう爰にござる事を見付けられたれば、今夜のうちにも脇へ預けたいものぢや。
たつ　今が今と云うて思案もござんすまい。淸七さんはわたしが預かり、今霄は内へ連れ申し、後々の事は德兵衞どのに頼んで、お匿まひ申しませうわいな。
つぎ　預かつて下さんすか。
たつ　サア、德兵衞どのも、まんざら人手に渡すやうな事もしますまいわいなア。
つぎ　そんなら、ちつとも早く、おてつさんにも譯云うて、淸七さんを爰へお連れ申して。
〽と立ち上がるを。
三婦　コリヤ待て。
つぎ　でも、うか〳〵して居る間に。
三婦　ハテ、女賢しうして牛賣れぬと、要らざるおのれが差配立て。頼んでよけりやアおれが頼む。淸七どんをお辰に預けては、この三婦が面が立たぬ。
つぎ　サア、餘所外へ預けやうよりは。
三婦　まだ〳〵吐かすか。おれが男がすたつても、わりや構はねえか。行き過ぎた事を吐かしやアがるなえ。

〽叱り飛ばされもぢ／＼うじ／＼、お辰はきつと聞き咎め。

たつ　ア、イヤ申し、三婦さん、無理に預かりたうて云ふではないが、わたしが淸七さんを預かれば、なぜお前の男がすたります。但し賤しい藝者ゆゑ、口先ばかりのお前へ追從、まさかの時は役に立たぬと、見けなして云はしやしたか。一旦頼まれうと云うたからは、三日でも預からねば、アイ、德兵衞どのに顏が立ちません。申し三婦さん、そんなものではござんせぬか。

〽からい女の詞の山椒、茶瓶頭を動かせず。

三婦　イヤ、どう云つても預けては。

たつ　男の立たぬ、その譯云うて下さんせ。

三婦　そんなら譯を云つて聞かさうか。

たつ　アイ、聞かせて下さんせ。

三婦　それぢやア云つて聞かせるワ。

〽と摺り寄つて。

サア、その譯はお辰、われが只の素人なら兎も角も、亭主持ちでも藝者盛り、色を賣る商賣ゆゑ、德兵衞が思ふにも、あの親仁も聞えねえもんだ、如何にてんでの身に火が付くのが切ねえと云つて、若い女房に若い男を、預けてくれる事もねえぢやアねえか。とサ、思やアしめえしめえが、人間にやア魔と云ふ物がさすと、ツイ思案の外と云ふ事が出來る。おいらなんぞは若い時、いくらも覺えのある事だ。いつそお主の顏が、こんなに曲つて居るか、半分位缺けでもありやア、德兵衞も引けもんだと思つて構ふめえが、何事も思案の外。ナ、外と云ふ字が業もんだから、それで困ると云ふ事よ。

ト此うち、お辰、よろしくこなしあつて、下手の燒火鉢の鐵弓を取つて顏へ當て、ウンと反る。おつぎ、三婦、悚りする。

〽事を分けたる一言に、連れ添ふ女房も理に服し、お辰は元より詞も出ず、差俯向いて居たりしが、何思ひけん立ち直り、火鉢の鐵弓我が顏へ、うんとばかりに反り返る。

つぎ　アレ、滅相な。

三婦　ア、燒け切つて居る鐵弓を、顏へ當て、堪るものか、藥を持つて來い／＼。

つぎ　顏の火傷は、滅多な物付けてはならぬわいなア。

〽夫婦は慌て抱きかゝへ、藥よ水よと勞はれば、正氣付きしかむつくと起き。

たつ　なんと三婦さん、不器量なこの顔へ、斯う燒金を當てゝも、思案の外と云ふ字の氣色がござんすかえ。コレ、立ちませぬぞえ。三婦さん、立てゝ下さんせ、親方さん。

〽と突きつけられて。

三婦　エ、……オ、、出かしたお辰、淸七どんでも業平でも預けるわえ。

たつ　そんなら預けて下さんすか。

三婦　唐へでも天竺へでも、連れ立つて行け〳〵。

たつ　エ、、忝なうござんす。これで德兵衞どのゝ男も立つたと云ふもの。さりながら、親の生みつけた體へ燒金當て、不孝者になつて預かる心、推量して下さんせいなア。

〽聞いておつぎもふさがる胸、三婦も涙の横手を打ち。

三婦　ア、、德兵衞は賴もしい女房を持つたなア。なぜ男に生れて來なんだ。エ、、あつたら物を落して來たなア。

〽嬉し涙の折柄に。

　トこの時、奧より淸七先にお梶、髮を結ひ替へ、おてつ、手を拭きながら出て來り。

淸七　お梶どのゝ身の納まりと云ひ、お辰どのが誓ひを立て、この淸七を預からうと云はるゝ心根。本地へ歸參なすならば、知行に替へてもこの返禮は。

かぢ　何事もあなたさへ、御代にお出ましなさるゝならば。數ならぬ私しどもはどうなりと。

てつ　そんなら、お梶さんはこれより直ぐに。

つぎ　オ、、夜更けぬうちに、ア、コレ、誰れぞに。

たつ　ア、イエ、此方の內に上州の、勝手を知つた人もあれば。

三婦　雇つて先まで送り屆けて。

かぢ　そんなら三婦さん、おつぎさん、もうこれが一生の。

三婦　そんならこれが、一生の別れか。

かぢ　アイ。

三婦　別れとあればこの年まで、誓ひを立てゝ云ふまいと、我慢に我慢した事も、こりやモウ切つてしまはにやならぬ。

淸七　ナニ切るとは。

皆々　誰れを。

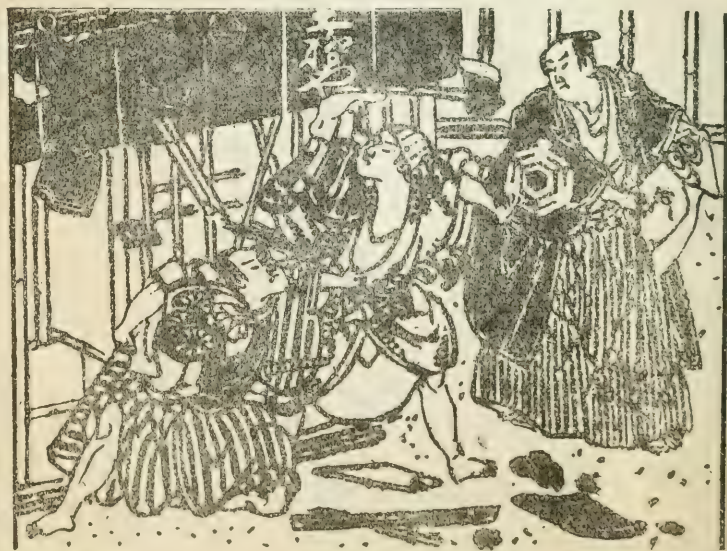
三婦　サア、思ひ切つてお梶お辰が眞實の、親をこの場で

かぢ　すりやわたし達の

たつ　親と云ふは。

三婦　その親は。

兩人 誰れでござんす。
三婦 外でもねえ。血を分けた親と云ふは、この三婦ぢやわやい。
皆々 エヽ。
トト合ひ方。
三婦 驚きやア尤も。二人ながら聞いてくれ。慥かな證據は、二人が腕に痣の合紋。おらが先祖男親は、山形三郎兵衞が末子、母方は星名の娘、互ひに知らず夫婦になり、生れし子供の腕にあり〳〵、山形に星の形の痣あるは、山形星名の苗字を顯はし、敵同士を孫子まで知らする爲の祟りなれば、實子が出來たら藁の上から、親知らずに人にくれると云ひ傳へ、お梶は九郎兵衞、お辰はあの惡黨とも知らず、仲買ひ彌市にくれたれど、親身の親子の淺ましさ。心にかゝりしこの年月。
トこれにて、兩人、腕をまくり見る。
われ達二人が息災で、成人するを神佛へ、願はぬ日とてはないわいやい。ひよんな事から親殺しの、日蔭の身とまでなつたるも、古主へ御恩を送る爲。寶を取り得て名乘つて出るまで、匿まつてくれろと頼まれたその時にやア、この胸がつん裂けるやうであつたわやい。今日大九郎が詮議の爲、その人殺しはわたしぢやと、お梶が罪を身に引請け、名乘つて出たは姉のお辰、矢ツ張りおれが親身の娘。あつちも此方も我が子と我が子、どちらに隔てがあらうかいやい。
〽血筋の糸に絡まれて、胸にあまりし溜め涙。
コレ、必らず卑怯未練と笑はれうと、どうぞ一日半時でも命を長う延してくれ。コレお梶、われが宵宮の騷動から、おりや一晩でもゆる〳〵と、寐た事とてはないわいやい。
〽鬼を酢で喰ふ硬骨も、流石親子の恩愛に、骨も碎くる憂き思ひ、露待つ野邊の鬼薊、夏の日萎る如くなり。
かぢ 初めて知つた痣の入り譯。
たつ お梶さんも
てつ ほんにお辰さんも
清七 そんなら實の
つぎ 兄弟でござんしたか。
〽語るも涙兄弟も、袖引絞り見比べて、驚き合ふぞ道理なり。
たつ ほんにマア、互ひに知らぬ事ながら
かぢ お年寄りへ嘆きをかける不孝者。

初演の櫓下番附

たつ　お免しなされて
兩人　下さりませ。
〽親子手に手を取り交し、生みの恩義の須彌蒼海、心を汲んで人々も、恩愛涙堪え兼ね、袖が浦邊の水やまず。
　トこの時、九ツの鐘鳴る。
清七　ありやモウ九ツ。
つぎ　夜更けぬうちに。
たつ　人を賴んで。
てつ　淸七さんも心を付けて。
かぢ　お辰さんの內まで一緒に。
三婦　オヽお辰、好いやうにしてやつてくれろ。
　ト額を反向け、喰ひしばつて泣く。この時、下手より、市、窺ひ出て
市　さてこそ淸七。
　ト淸七にかゝるをお梶捉へて內へ投げ込む。三婦、引き付け
たつ　そんなら父さん。
三婦　慥かに人に送らせて。
かぢ　落ちつく所は
三婦　上州高崎。
てつ　隨分御無事で。
皆々　おさらば。
　トこの時、市、振り解いてかゝるを投げる。網をかぶせる。木の頭。
三婦　さらば。
　ト三重になり、お梶、淸七、お辰、向うへ、三婦は網をたぐるをキザミにて、
ひやうし　幕

新造艦奇談（終り）

青砥左衛門藤綱名月即詠

宵の間は最中の名のみ
浮雲の晴れて隈なき
月もこゝろも

是を趣向の種にして
御見物の衆評を願ふ
文月の榮

名譽仁政錄

實說を擧て二十五章

初演の絵番附表紙

名譽仁政錄

序　幕

朝比奈切通しの場
鶴ヶ岡八幡の場

役名＝染川藏人、中老、松島。腰元、葉末。同、若竹。同、皐月。同、楓。島野伴藏。奴、磯平。新左衞門妹、おろく。掛屋手代、義助。大坂屋十助。萬字屋喜助。須磨清三郎。

本舞臺、向う一面の山幕。所々に松の立ち木、日覆より同じく吊り枝。上手、誂らへの辻堂、軒に團通客と記せし額を掛け、すべて鎌倉朝比奈切通し、夜の體。爰に雲助二人、山駕籠を擔ぎ、旅人の仕出し二人、煙草をのみ、立ちかゝり居る見得。山颪し、時の鐘にて、幕明く。

雲一　棒組、一服貸して下つし。

雲二　オイ。サア、やらつし〳〵。

ト莨入れをやる。

旅一　イヤ、時に駕籠屋さん、爰は物騷な話しでござるが、本當にこの界隈へも、その泥坊が出ますかな。

旅二　何にしろ、氣味の惡い話しでござりますな。わたしなどは臆病者ゆゑ、話しばかりで、體が慄へます。

雲一　イヤ、慄へる筈サ。この間も、おらつちが藤澤へ、客人を乘せて行つて、歸りがけに、戸塚の棒鼻へ出ると、ヤア人殺し〳〵と云ふ聲が、聞えたと思ひなせえ。

雲二　サア、さうすると向うの方から、大きな野郎が、ピカ〳〵光る拔身を振り廻して、旅人體の男を追ひかけて出たから、切られちや大變だから、息を潛めて、小蔭へ隱れて居たが、ナア棒組。

雲一　さうよ。その時にやア、生きた心持ちはなかつた。すると、その男を切り殺して、路銀を取つて、どつちへか行つたのを見ると、二人ながら、腰が拔けてしまつた。

旅一　なぜ〳〵。泥坊が逃げたら、いゝぢやァねえか。

旅二　逃げた跡で、腰が拔けるとは、解らねえの。

雲一　サア、そこだ。

旅人　オヽ、どこだ〳〵。
雲一　エヽ、交ぜッけえしちやアいけねえ……泥坊が逃げて、ヤレ嬉しやと思つたら、氣がゆるんで、がつかり腰が抜けたのよ。
旅一　成る程、こりやア尤もな事だ。
雲二　サア、それから夜が明けて、宿の衆が來て、やうやう駕籠へ乘せて、親分の內まで送られて來たのよ。
雲一　併し、とんだ災難から、生れて初めて、駕籠へ乘つたやつよ。
兩人　さうさねえ。ハヽヽヽヽ
　　トこの時、鷄笛。
旅一　イヤ、何にしろ、物騷な話しだ……もう夜が明けるだらう。
旅二　ちつと涼しいうちに、急ぎませう。
旅一　そんなら、駕籠屋さん。
雲助　お別れ申しやす。
　　ト山颪しになり、駕籠屋は駕籠を舁き上手へ、旅人兩人は橋がゝりへ入る。あと時の鐘、合ひ方になり、向うより中間、箱提灯を持ち、後より定紋附きの駕籠を舁き、絹羽織の侍ひ二人、中間二人、付き添ひ出て、直に本舞臺へ來り、駕籠を置く。この時、乘り物の戸を明け、內より染川藏人、燕手、上下衣裳、刀を提げ出で、あたりを見廻し
藏人　最早鷄鳴、夜明けまでには程もあるまじ。して、この所は。
侍ひ　ハア、今津の驛を左へ取り、鎌倉海道、朝比奈の切通しにござりまする。
藏人　ムウ……コリヤ、其方どもへ出立の砌り、申し聞かせし通り、この度の身が役目、御緣者たる入間家の重寶、呉道子が筆の墨繪の雲龍、須磨清三郎が預かり居るを、須藤氏の計らひにて、その一軸を奪ひ取り、清三郎を罪に取つて落しなば、一家たる春藤めも、その儘でもよも居られず、お家の混雜、折を窺ひ、入間家を覆へさん兼ねての企み。それゆゑ。殿を唆かし、紛失なしたる一軸を、わざとこの度懇望なし、受取る役目を乞ひ受けたは當地の手筈を首尾よく致さん、身共が計らひ。事成就のその上は、其方どもにも恩賞は望み次第。隨分ともに、事穩便に、合點か。
皆々　心得ました。
藏人　然らば、此まゝ。サヽ、急げ〳〵。

皆々　ハツ。

ト藏人、駕籠へ入らうとする。この以前より上手に盗賊の手下四人、山刀を差したる拵らへにて、これを聞き居て、頷き合ひ、出しぬけに、提灯を打ち落す。皆、皆うろたへて

ヤア、狼藉もの〳〵。

トがや〳〵云ふを、盗賊二人は、侍ひ、中間を捕へて、丸裸にする。藏人、キッとなつて

藏人　ヤア、何奴なれば、かゝる狼藉……ムウ、さては、この頃噂に聞く、街道のあぶれ者、盗賊夜盗に極まつた。

盗四　知れた事だ……くたばつてしまへ。

ト禪のツトメになり、四人、山刀を拔き、藏人に切つてかゝる。藏人、拔き合せ、四人を相手に立廻り、侍ひ、中間はこの間に橋がゝりへ逃げて入る。四人は切り立てられ、危ふき立廻り。この時、上手、辻堂の内にて本鐵砲の音して、藏人の胸先へ中りし思ひ入れにてアッと苦しみながら

藏人　ムウ……飛び道具とは卑怯な奴。ナ、何奴なるぞ。

盗四　エ、くたばつてしまへ。

トちよつと立廻り、藏人、眞中に刀を杖に、キッとなつて苦しむ。双方、見得よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、朱塗り金鍍金の回廊、上手の方、石の井筒、この側に星の井と記せし建て札、下手よき所に紅葉の大樹、日覆より同じく吊り枝、すべて鎌倉鶴ケ岡八幡境内の體。爰に紺看板の中間四人、番手桶、竹箒を持ち立ちかゝり居る見得、白囃子にて道具納まる。

四人　ヤ、ヨンヤショ。

ト水を打つ事よろしく、大拍子になり、皆々、こなしあつて

中一　コレ〳〵、宅内、今日、この八幡宮で例年の通り、七夕祭を執行するは、おらが屋敷の吉例だとやら。

中二　ところが、奥方有磯の前さまが、御不例につき、當社へ御參詣がないとの事。

中三　それゆゑ、中老松島どのが、今日當社へ、御代參にござる筈だ。

中四　併し、中老役とは云ふものゝ、今日一日は奥方の御名代、中々大さうな見識ぢやねえか。

中一　そりや、その筈サ。中老役は平生でも、お表の用人

格だ。ところを今日は、奥方の御代參と云ふものだから、威張りやアがるに違ひねえ。

中二　さうよ。肩で風ぢやアねえ、股で風を切るであらう。

中三　イヤ、女に生れても、働きがありやア、立派な奉公も出來たものだなう。

中四　エヽ、また愚痴をこぼしやアがらア。それよりは、別當の供部屋で、また一升ひつくり返す、算段をしよう。

中一　オヽ、ほんにさうだ。これから行つて、一杯やらう。

中二　そんなら、みんな

皆々　サア〱、行け〱。

ト三味線入り大拍子になり、皆々、上手へ入ると、鳴り物になり、向うより松島、裲襠衣裳、好みの形。若竹、皐月、楓、葉末、いづれも腰元の形にて出て來り花道にて

松島　空に澄む、しらべも秋に合ふ星の、それにはあらぬ神の庭、禰宜が鼓の音冴えて

若竹　峯の松風吹きさそふ、蘆の葉風にあらずして、神を諫めの庭神樂。

皐月　賞にも尊き、この社

楓　ゆるがぬ御代の有り難さ。

葉末　數ならぬ身も一やうに、揃うて爰へ出立ばえ、繪で見た小町か楊貴妃の、立つ形ふりは、今日、奥樣の御代參。

松島　少しも早う神前へ。

葉末　先づ

皆々　お出であられませう。

ト矢張り、右の鳴り物にて、皆々、本舞臺へ來る。松島こなしあつて

松島　毎年の御嘉例とて、當社に於て七夕の祭祀、取行ひたまふべきを、奥方有磯の前さま、折惡しく御不例ゆゑ、不束ながら中老松島、名代として今日の代參。

若竹　例へ奥樣、御參詣は遊ばさずとも、御代參をお立て遊ばせば

皐月　古例は缺けぬと申すもの。此まゝ直ぐに別當所へ

楓　お越しあるが、よからうやうに存じまする。

葉末　エヽ、この子はいなう。なんぞと云ふと、内へばかり入りたがる。この間まで殿樣のお物忌みとやらで、大きな聲で笑ふ事もないゆゑに、これでは勞咳でも出やうかと、案じるよりは產むが安く、今日御代參のお供ぢやと、聞いて鬼門の角屋敷、瓦町とや油屋で、べつたり固

めた髮かたち、今業平の殿達に、見せて迷ひの種油と、思うてゐるに、そんなその、人の心もしら絞り、それ程お前行きたくば、一人で先へ行かしやんせいなア。

松島　ホヽヽヽ、又しても葉末どのゝ仇口、もうよい加減にしたがよいわいなア。

葉末　ハイ〳〵、もうよい加減に、したうて〳〵てならぬけれど、相手のない喧嘩。これにはとんと困るわいなア。ホヽヽヽ。

ト大拍子になり、上手より阿闍梨、袷立て衣、もうすをかむり、水晶の珠數を爪繰りながら出て來て、松島を見て

阿闍　これは〳〵、御代參として松島さま、今日の御參籠御苦勞千萬に存じまする。

松島　阿闍梨さまには久々の御對面。今日奥様、御不例ゆゑ、不束ながら名代の役目、萬事よしなにお取計らひ下さりませう。

阿闍　イヤモ、痛み入つたその御挨拶。例年の嘉儀、恙なく相勤めますやう、神職共と申し談じ、萬事の手番ひ、麁略なきやう、申しつけ置きますでござりまする。

ト三味線入り大拍子になり、向うより伴藏、上下衣裳、大小、好みの形にて出て來り

伴藏　誰れかと思へば松島どの、今日は奥方の御代參、お役目、御苦勞に存じまする。拙者ことも、非常を守る警護の役目。

松島　それはマア、御苦勞さまに存じまする。

阿闍　最早、神事の刻限に間もございますまい。別當方へお越しあつて、暫時の間、御休息あつて、然るべう存じまする。

松島　仰せに隨ひ、此まゝに……左やうなれば伴藏どの

伴藏　後刻

兩人　御意得ませう。

ト唄になり、阿闍梨先に、松島、腰元、皆々、附き添ひ、上手へ入る。伴藏あと見送り

伴藏　先づ中老めは追ひ拂つた。

トあたりを見廻し、懷中より惚れ藥を出して

待てよ。追つても追つても、追ひ切れぬは煩惱の犬だなア。あの腰元のおろくめに、ぞつこん惚れたこの伴藏、それと云はずに六郎右衛門どのが、惚れ切つてござるから、色よい返事をしろと云つて、この間から度々口說くと云へども、いつかな聞かぬ强情者。ところで身が思ひ

付き、四つ目屋で買つて來た、この宮守の黒燒きだ。こいつぞや矢切りに掛りかけて、しツかりと云はせて手に入れるが、さうする時は然うが當世流、身共が旦那、秋の夜長も長からず、話しあつて寢覺のにも、打ちあかしたる錦繪か、國かばはんに嬉しかろ。併し、斯う口で云ふやうに、さううまく行けばよいが。

ト唄入り、三味線入り大拍子になり、向うより、おろく、文金島田、腰元の形にて、文箱を持ち出て來り、直ぐに舞臺へ來る。作藏、見て、急に衣紋を作り、いろ／＼あつて、おろくの側へ行く。おろく見て

ろく　あなたは作藏さま……あの松島さまは、どこにお出でゞござりまするゝ。

作藏　ナニ、松島どのか。松島どのは、今爰へござるに依つて、用なら、爰に待つてゐなせえ。

ろく　そんなら、今、これへお出でになられますとな。

作藏　オヽ、さうぢや／＼……おやに依つて、爰に居て、身共が云ふ事を聞いてたもれ……コレ、この間も云ふ通り、あの須藤氏が、其方に惚れ拔いてござつて、拙者を頼んで戀の取持ち。此やうな迷惑な事はないぢや。身共もこれまで自身の色は、もう數限りもなく致したが、まだ頭持ちは猶く初心ぢや。誠に口不調法な手前、お氣には入るまいが、どうか色よい返事を致してくりやれ。コレ、どうぢや／＼。

ろく　エヽ、モウ、又しても其やうな事。私しはそんな事はきつい嫌ひでございまするわいなア。

作藏　ナニ、嫌ひぢや。その嫌ひなところが、猶付て謗らへぢや。是非とも今日は色よい返事を。

ト　おろくに取りつきに行くを、逃げ廻る。其うち、おろく、懐中より起證を落す。作藏、おろくを捕へるを、突き飛ばし、上手へ逃げて入る。作藏、起き上がり

アイタ……。

ト腰を擦りながら

イヤ、娘に似合はぬ、手ひどい目に遭はせたな。うぬ、いづくまでも

ト行きかけ、腰の痛む思ひ入れにて、落せし起證を見附け、取上げ見て

こりやアなんだ。おろくさまへ、濟三郎。エヽ、嬢ならしい、血が付いてゐらア。ハヽア、さては、奴と二人が起證だ。これもなんぞの

ト懐中へ入れ

アイタヽヽ。待つて居れよ。
トこの時、伴藏の懐中より以前の惚れ薬落ちる。伴藏、心附かず、一散に、早大拍子にて、上手へ入る。また三味線入り大拍子になり、向うより清三郎、上下衣裳、大小好みの拵らへ。後より磯平、世話奴、好みの拵らへにて、替へ草履を持ち、付き添ひ出て、花道にて

清三　今日は當社に於て、七夕の祭祀、取行はるゝ吉例。昨年中よりお國詰め仰せつけられ、久々にて出府いたして、當社の繁榮、社内の美しさ。また、片田舎とは、格別なものぢやてな。

磯平　成る程、旦那の御意の通り、武將家の御府内は、また格別でござりまする……マア、何は兎もあれ、御參詣になりましたが、よろしうござりませう。

清三　左やう致さう。サ、、來やれ／＼
ト矢張り右の鳴り物にて、兩人、本舞臺へ來り床几へかける。この時、上手よくりおろく出て來たり、清三郎を見て、嬉しきこなしあつて、いろ／＼思ひ入れ。
トヾ紙を引裂き、丸めて投げる。これにて、清三郎、合點のゆかぬこなし。
ハテナア、合點のゆかぬ。どこやらから紙の降るが。

磯平　さればサ。今日での日和では、紙の降る天氣ぢやアござりませぬが
トあたりを見廻し、おろくを見て
イヤ、降る譯がござりまする。こりや、山の神が慈悲なのでござりまする。
トおろくの側へ行き、手を引き連れて來り、清三郎の側へ突きやる。清三郎、おろくと顔見合はせ、恥かしき思ひ入れ。
エ、小ぢれッてえ。お二人とも初心らしい。早くなされませ……
ト顔見合せ
ハ、、、、お話しを……ドレ、お參り申して來ようわえ。
ト大拍子になり、磯平は橋がゝりへ入る。おろく、清三郎の側へ寄らうとして、ちよつと顔見合はせ、恥かしきこなしにて、身を外ける。なまめいたる合ひ方になり、思ひ切つて側へ行き

ろく　清三郎さま。

清三　エ、モ、恂りするわいの。
ト合ひ方。

おろくどの、さうして今日は、何しにござつたのぢや。
ろく　サア、今日は御殿へ殘る筈のところ、奧樣が急に松島どのに、用があると仰しやつて、お文を遣はされたゆゑ、そのお使ひにと、わざ〳〵爰まで。
清三　ア、それは御苦勞な事ぢやの。
ろく　アレマア、そんな事ばつかり。エ、モ、憎らしい。どうせあなたはどこやらに、云ひ號けのあるお方。それゆゑわたしを茶にしてばつかり。
　トちよつと思ひ入れあつて、清三郎の股を抓る。
清三　アイタ、、、、これは又、御挨拶、痛み入るわいの。こりやモウ、こんな所には長居は出來ぬ。ドレ、早う歸りませう。
　ト清三郎、立ちかゝるを
ろく　アレ、また人に氣を揉ます事ばつかり。モシ、清三郎さま、わたしやお前に逢つて、いろ〳〵と話す事が、たんとあるわいな。
清三　して、その話しと云ふは、何の事ぢやぞいの。
ろく　モシ、サア外の事でもござんせぬが、あの伴藏づらが、最前も、わたしを捕へて、六郎右衛門が惚れて居るから、なんでも色よい返事をせいのなんのと、わたしや、うるさうて〳〵ならぬ程に、どうぞ一日も早う、父樣に賴んで、早う祝言して下さんせいなア。
清三　サア、わしも疾からさう思うて居るけれど、何を云うても其方の兄御、新左衛門どのは物堅い生れつき、迂濶な事は云はれぬゆゑ、誰れぞ賴んで仲立ちしてもらうと、いろ〳〵わしも心配して居るわいの。
ろく　わたしも苦勞でならぬ程に、どうぞせめて、結納なりと取交はしたならば、云ひ譯はあるけれど、表立つて約束がなければ。
清三　あの六郎右衛門が、其方を取持つてくれいと、伴藏を賴んだとは、どうも合點がゆかぬわいの。
ろく　サア、わたしもさう思うては居るわいな。それにしても、アダしつこく、わたしを付つけ廻しつするゆゑ、ちつとも早うお前、好い思案をして下さんせいなア。
清三　そりやモウ、わしに如才はないわいの。
ろく　そんなら眞實、わたしの事は
清三　なんの見捨てう。ぢん未來まで。
ろく　エヽ、嬉うござんす。
　トよろしくこなし。この時、奧より若竹、出で來り
若竹　おろくさん〳〵。

ろく　ハイ／＼。
若竹　松島どのが、尋ねてお出でになられます。ちやつと
お出でなされませ、
ト兩人、恟りして飛び退き
ろく　ハイ／＼、只今。參りまする。
若竹　サ、御一緒に參じませう。
ろく　そんなら必らず
ト云ひかけるを、清三郎、行けと目くばせする。
イヤサ、御同道いたしませうわいなア。
ト唄になり、清三郎に心を殘して、おろく、若竹に付
いて上手へ入る。清三郎、あと見送り、こなしあつて
清三　今おろくの話しでは、あの須藤六郎右衞門が取持つ
てくれと、伴藏を賴んだと云ふが、どうも合點のゆかぬ
事ぢや。あの六郎右衞門は常々、新左衞門どのゝ內寶、
おときどのに、どうやら味な素振り。折々目つまにかゝ
る事もあつたが、それを今では、おろくどのを取持つて
くれとは、こりや、どうも合點がゆかぬわいの。
トこの時、上手より伴藏、出て來り
伴藏　イヤ、その譯、身共が話して聞かさう。
ト前へ出る。清三郎、これを見て、大拍子になり

清三　オヽ、あなたは伴藏どの。
伴藏　一兩日はかけ違つて、御面會仕らぬ。外の儀でも
ござらぬが、いま後にてちよつと承はつた、須藤氏がお
ろくどのを懇望になるのも、思案の外の戀の闇。誰れあ
ら須藤氏は、殿樣へ劍道御指南番、一流を極め、百萬
の大敵も、物の數とも思はぬ英雄、力づくにも腕づくに
も、參らぬものは戀の道、新左どのの內寶に懸想せられ
たが、つく／＼思へば主ある花、叶つたところが密夫の
惡名。それゆゑフッツリ思ひ切り、まだ緣邊の定まらぬ
おろくどの、達て拙者に取持ちくれよと、再三の賴みゆ
ゑ、最前ちよつとやりかけて見たれども、どうも不慣れ
の手前ゆゑ、おろくどのゝ返事がない。所で拙者が思ひ
つき、斯う云ふ事にかけては拔け目のない其許、どうぞ
この戀、取持つては下さるまいか。
トこれにて清三郎、迷惑のこなしあつて
清三　これは／＼、伴藏どのゝお見立て、面目次第もござ
りませぬ。併しながら、こりや貴殿のお目鏡違ひ、拙者
は元より左やうな事は。
伴藏　これはしたり。如何いたしたものでござる。貴殿の
風流は、家中一般の評判、辭退召されず、この儀は平

に。
清三　成る程、それ程にお頼みなさる事、隨分、及ばずなが
らお取持ち致しませうが、おろくどのは奥方のお側勤め、
拙者はお表、奥表と隔てがござりますれば、おろくどの
に逢うて話しも
伴藏　出來まする。そこはぬからぬ須藤氏、夜中に限らず
奥御殿へ、出入り通路のこの切手。
ト懐中より切手を出して
これさへあれば、奥へ忍ぶは、なんの雜作もない事だ。
トこれにて清三郎、嬉しきこなしあつて
清三　ムウ、すりや、その切手が、奥へ通路の切手でござ
りまするか。
伴藏　如何にも、須藤氏が計らひにて、身共に一枚、渡さ
れたは、我が念願を叶へん爲。
清三　誠にこれが、結ぶの神の引合せ。
伴藏　エ。
清三　イヤ、結ぶの神を祈りまして、首尾ようこの戀、取
持ちませう。
伴藏　先づは早速の承知、忝ない……然らば切手は其許
へ。

ト渡す。
清三　慥かに拙者が預かりました。
伴藏　コレ、清三郎どの、必らず首尾よう、合點か。
清三　ハテ、氣遣ひ召されな。この切手で
伴藏　奥へ忍んで、あのおろくを
清三　口說き落して、手活けの花
伴藏　色よい返事を
清三　御念に及ばぬ。
伴藏　待つて居るぞよ。
ト唄になり、伴藏、ニツタリとこなしあつて、清三郎
と顔見合せ、氣を替へ、橋がゝりへ入る。清三郎、あ
と見送り、合ひ方、彈き流し。
清三　ナニサマ、世には、たわけ者もあるものぢや。おろ
くどのを取持つてくれいと、奥へ通路の切手を、わしに
預けるとは、わしが爲には、結ぶの神のこの切手、奥勤
めのおろくどの、思ふやうに逢はれぬ身の上、これさへ
あれば折を見合はせ……こりや、好い物を貰うたわい。
ト切手を懐中して、合ひ方止む。
それはよけれど、いつぞや、大磯の揚げ代に差詰つたゆ
ゑ、掛屋與右衞門の所を頼み、用達てゝもらうた三十兩、

大坂屋の時借り、まだその上に大磯の萬字屋に揚げ代の殘り、双方合して五十兩もなければ、云ひ譯のない事だらけ。と云つて外に無心を云ふ所はなし、一昨日屋敷へ見えた時、明後日はキッと埒を明けると、固く約束してやつたれば、大方今日は來るであらうが、金の都合は出來ず、こりやマア、なんとしたらよからうな。

ト思案の思ひ入れ、この時、てんつゝの合ひ方になり、向うより掛屋の手代義助、着附け羽織、前垂れ駒下駄にて出て來る。向う揚げ幕にて

十助　オヽイ〳〵

ト義助を呼びながら、十助、喜助矢張り縞の着附け羽織、駒下駄穿きにて、出て來り、花道にとまり

十助　モシ、お前さんは、掛屋の義助さんぢやアございませんか。

義助　オヽ、さう仰しやるは、大坂屋の十助さんに、萬字屋の喜助さん、どちらへお出でなされまするな。

喜助　イヤ、わたしどもの出て參りましたは、お前さんも御存じの、須磨清三郎さんへ貸し込んだ揚げ代を、今以て拂ひませぬそれゆゑに

十助　斯うして揃つて出て參りましたは、今日、この八幡宮へ御代參のお供にて出て來たと聞きましたゆゑ、見附け次第に貸し金の催促をして、返濟してもらふ積りでござりまする。

義助　アヽ、左やうでござりますか。わたしもその事で、これまで參つたのでござりまする。

十助　それは丁度、お連れがあつてよろしうござりまする。

喜助　わたしも、お前を尋ねましたが、お出でがないゆゑ、二人して、爰まで來たのでござりまする。

義助　さうでござつたか。斯う云ふ時には、一人も味方の多い方が强身だ。

十助　そんなら、御一緒に參りませう。

義助　サア、お出でなさいまし。

ト矢張、右の鳴り物にて、皆々、舞臺へ來る。この間清三郎、いろ〳〵思案のこなし。三人、清三郎を見て

三人　ソリヤ、見附けた。

ト清三郎、恟りして

清三　エヽ、恟り致すわい。

ト皆々を見て、惡い所へ來たと云ふ思ひ入れ。

イヤ、これは揃うて、ハヽア、八幡宮へ御參詣かな。

義助　コレ〳〵、清三郎さん、八幡宮へ參詣もないものぢ

や。お前様に先達つて、御用達てた金三十兩、後の月の二十日までには、元利揃へてキッと返濟するからと、涙をこぼして段々と、お頼みなさるゝゆゑ、アヽ、御親父とは御懇意に致したこの義助、若いお方の色狂ひ、表立たれぬ金の要り道と、心をば汲んでお貸し申したは、旦那へ內證で、この義助が腹一つで、取捌いて置いたのでございます。さう云ふ恩金を、これまで延び〳〵になさるとは、そりやあんまり御不實と申すものでございます る。

ト叩き立てゝ云ふ。喜助、義助を押しのけて

喜助 ヘヽヽヽ、モシ義助さん、わたしにもちつと云はせておくんなさいまし。

ト喜助、前へ出て

モシ、若旦那、イヤ、お前様は〳〵、見かけに依らねえ、虫のいゝお方でございますな。これまであのお千さんの所へ、馴染みでお出でなされて、二年の間もおもらひ申すから、あなたの事は、隨分麁末には致しませぬが、今度の始末と云ふものは、あんまりでございます〳〵。

十助 オイ〳〵、喜助どん、ちつとわたしにも云はせて下さいまし。

喜助 ハテ、氣の短い。まだ半分やつたところだ。やりかけてやらねえと、心持ちが悪い……マヽ、ちつと待つておくんなせえ。

ト前へ出て

モシ、淸さん。これまでの御勘定は兎も角も、この間の節句の仕舞ひは、あんまりひどいぢやアございませんか。川開きの花火のやうに、素敵にポン〳〵云つて、よし節句の仕舞ひ、合點だ。先の勘定も遣るが、今夜は都合が悪いから、貴様、いゝやうにやりくつて置けと仰しやり、晩の勘定が一兩三分、わたしが立替へても、梨の礫もなしだ。それぢやア、あんまり人を白痴にすると云ふものでございます。

十助 オイ〳〵、その位云つたらもうよからう。これからおれの番だ。

ト前へ出て

モシ、淸さん、イヤ、お前は〳〵、ても〳〵〳〵イケづるい人だぞ。この間、わしが店へござつて、いま急になければならぬ事があるが、屋敷へ歸つてゐる暇がないから、品物はないが、間違ひなく、夕方までに返すから、ちよつと五兩、時借りに貸せと仰しやるから、間違

ひはござりますまいが、代物がなくてはと云つたら、ナ
ニ野暮を云ふな、屋敷へ歸れば五兩十兩の事、早速返濟
すると仰しやるゆゑ、品もなしに五兩の時貸し。モシ、
わたしの商賣は品を取つて、これ〳〵の踏みがあると、
それを當に金を貸して、利子を取るが渡世でござります
ぜえ。金は拜借、利息を一文も入れず、それぢやア飯が
食へませぬ。今日は邪が非でも、元利ともお貰ひ申して
參りませう。

義助　さうだ〳〵。わしも旦那へ知れては大變ぢや。片を
付けてもらひませう。

喜助　殘らず勘定して下さいまし。

三人　どうして下さる〳〵。

　トこれにて、清三郎、當惑のこなし。

清三　サア、お三人の御立腹は、重々御尤もでござります。
私しも、斯う延び〳〵に致す所存ではござりませぬが、
いろ〳〵と手筈の狂うた事があつたゆゑ、ツイ〳〵御無
沙汰になりまして、申し譯もござりませぬ。長うとは申
しませぬ。どうぞ兩三日のところを。

義助　イヤ〳〵、さうはならぬ。これまでその手を幾度く
つたか知れぬ。佛の顏も三度とやら

喜十　もう待つ事は

三人　なりませぬわい。

　トきつと云ふ。清三郎はハッと當惑のこなし。上手よ
り磯平、出て來り、この樣子を見て、まご〳〵して、
出ようとして、もぢ〳〵こなしあつて、フト伴藏が最
前落せし惚れ藥を見て、取上げて、ムウと思ひ入れあ
つて、包みを明け、ヤ〳〵云つてゐる三人の頭から
肩へ振りかけ、また清三郎に振りかける。これにて、
おかしみの合ひ方になり、義助、グタリと碎け、鉢卷
を取り、肌を入れ、清三郎の側へ寄り添ひ、嫌らしき
こなし。

清三　段々のわしが誤まり、なり憎いところであらうが、
どうぞ爰を聞き分けて

義助　待つてくれと云はつしやるか……何がさて、思ひ思
うた二人が仲、待てとお前が云はいでも、わたしや十年
も百年も待つ。貸した物を取らうと云ふは、みんな此方
が無理ぢや。ナア、お二人さん。

喜助　さうとも〳〵。こんな無理な事が世の中にあるもの
か。勘定も、寄越さずともようござります。

十助　さうぢや〳〵。打解けたからは兄弟のよしみ、ねん

ごろになりたい心。モシ、勘定を取らぬ代り、どうぞわしと兄弟分になつて、今からお前の弟に

喜助　兄と頼んで不足のない清三さん、わたしや疾から、アノ、お前に

清三　エ。

義助　惚れたわいなア。

ト顔を隠す。

清三　イヤ、これは稀有な事ぢやわいの。

磯平　イヤ、試に稀有な薬もあるもの。

ト包みを出す。義助、喜助、十助、清三郎を捕へ

三人　サア、是非とも、わしがお願ひを。

清三　イヤ、こりや氣狂ひの沙汰ぢや。

ト突き廻して逃げるを、三人、追ひ廻す。この中へ、磯平交りて、マゴ〳〵邪魔になり、トヾ清三郎、皆々を突きのけ、上手へ逃げて入る。皆々、磯平を捕へ

義助　ア、モウ、斯うなつたら、誰れ彼れの見境はない。

三人　わしが願ひを。

ト磯平に取りつくを突き廻し、ちよつと立廻りて、トド三人を打ち据ゑ、一散に上手へ逃げて入る。

義助　取逃がせしか、あと追ひかけて。

ト三人、一散に後を追つて上手へ入る。三味線入り大拍子に成り、上手より葉末、おろくの手を取り出て來り

葉末　サア〳〵、おろくどの。ちやつとござんせ〳〵。

ろく　モシ〳〵、葉末どの。わたしを何所へお連れになられますえ。

葉末　イヤ、どこへも連れて行かぬ。爰まで來たら、いゝのぢやわいな。

ろく　さうして、なんの用でござりまする。

葉末　用と云うたら外でもない。其方に取持ちがしてもらひたい。

ろく　エ……取持つてとは、そりや誰れを。

葉末　誰れでもない、あの清三郎さんを。

ろく　エ、。

ト悸り、こなし

葉末　何を悸りしなさんす。女子が男に惚れるのはある習ひ。器量と云ひ、發明さ。ほんに、どこに一つ云ひ分のないよい殿御。モウ、わたしや、根から惚れ抜いた。シタガ、こんな事は不器用なわたし、それゆゑ、お前を見かけて頼む。わたしも亦、惚れたがせうが、金輪際、望

みを叶へにゃ置かぬ積り。云ひ憎い事ながら、戀路の闇に目もくらみ、お先眞暗、無我夢中、白痴の一心、突き詰め者が、斯う打明けて頼むからは、抱かれて寐たいに違ひはない。わたしが切ない心を汲んで、どうぞ取持つて下さんせいなア。

ろく　ほんにマア、葉末さんの餘儀ないお頼み。モウ、ない習ひではなけれども、物堅いお館の内、お表にお出でなさんす清三さんに

葉末　オッと、それは氣遣ひない。女中方を預かるこの葉末、忍んで出すは心のまゝ、今宵延ばして、明日をも待たれぬ、わたしが力づく。どうぞ首尾して今宵のうち。

トこれにて、おろく、丁度幸ひと云ふ思ひ入れあつて、氣を替へ

ろく　成る程、云ひ憎い事、これ／＼と事を分けてのお前のお頼み、よく／＼な事なればこそ。よろしうござりまする。出來るか出來ぬかは御縁づく。お前の心があんまりいとしさに、心の屆くだけは、お取持ち致しませう。

葉末　そんならアノ、取持つてたもるとな。

ろく　及ばずながら、云うて見ませうわいなァ。

葉末　エヽ、忝ない／＼。わたしが爲には結ぶの神のおろく大明神さま／＼。

ト柏手を打つて拜む。

ろく　エ、モ、何をなされますぞいなア。

葉末　そんならおろくどの。必らず首尾よう

ろく　合點でござんすわいなア。

葉末　コレ、頼んだぞえ。

ト早大拍子になり、葉末、脇を向き、舌を出して、うまいと云ふ思ひ入れあつて、上手へ入る。この以前より、清三郎、後に出かゝり居て、この時、前へ出て

清三　コレ、おろくどの、様子は殘らず聞いて居た。コレ、お前にも云ふ事がある。最前、別れたその後へ、あの伴藏が來て、其方を取持つてくれ、イヤ／＼、奥向きへ通る事は出來ませぬと云うたら、奥へ通路の切手ぢやと云うて渡したゆゑ、受取つて置いたのは、其方の爲。所詮屋敷に置かれぬ身分、どうがなと思ふに幸ひ、いま葉末が詞と云ひ、晩に忍んで逢うた上、何かの話しもゆるゆるとしたがよい。必らず手筈を違はぬやう。

ろく　そりや、氣遣ひしざやんすな。伴藏と云ひ、葉末と云ひ、總つて頼むはこの身の幸ひ、こんな嬉しい事はござんせぬわいなア。

清三　サア、嬉しいは互ひの事、さりながら、人目多い館の内、随分ともに心をつけて。
ろく　アイ、お前も、人目にかゝらぬやう
清三　忍ぶ合圖は、今宵のお引け。
ろく　そんなら清三さま。
清三　早う行きや。
ろく　アイ……ほんにマア、日の暮るゝのが
清三　エ、。
ろく　待たるゝわいなア。
ト唄になり、おろく、いろ／＼して、橋がゝりへ入る。清三郎、見送り
清三　アヽ、嬉しさうに行く事わいの……それはさうと、最早七ツに間あるまい。さぞ母上のお待ちかね。少しも早う歸りませう。歸るはよいが、あの磯平めは、どこぞへ行つたやら。イヤ／＼、待ち合さうより、先へ歸りませう／＼。アヽ、下ざまの者といふは、氣散じなものぢやなア。
ト唄になり、清三郎、橋がゝりへ入る。早大拍子、バタ／＼になり、上手より中間四人、磯平を引立て出て來り

磯平　コリヤ、大部屋の奴達、おれをなんとするのだ。
中一　なんとするとは、古風に出かけたな。いま神前で、われが拾つたあの手紙
中二　日頃お世話になつてゐる、須藤の旦那がさる所へ
中三　屆けにやならねえ大事の書き物。
中四　われが持つても益ねえ程に
中一　此方へ返せと
四人　云ふ事だワ。
磯平　ムウ、なんの事かと思つたら、いま拾つた手紙の事か。そりやア何より易い事だ。そんならこりやア、お前達に返してやらうと云ひてえが……マアならねえ。日頃から心の惡いあの須藤。どうやら味なこの手紙、取つて置いたら、なんぞの役に立つであらう。所望と云ふ事なら、おれを殺して持つて行け。息の通ひのあるうちにやア、金輪際渡さぬこの手紙。マアさう思つてもらはうかえ。
中一　うぬ、さう吐かしやア。
磯平　どうしたと。
中一　エヽ、疊んでしまへ。
ト有り合ふ縫ひぐるみて打つてかゝる。ちよつと立廻

り、双方、キッと見得。誂らへの鳴り物になり、面白き立廻はり存分あつて、よき見得にて、

ひやうし　幕

二幕目

入間館の場
須磨屋敷の場
小由留木橋の場

役名――須藤六郎右衛門。島野伴藏。中老、松島。腰元、若竹。同、皐月。同、楓。同、待宵。奴、磯平。須磨清三郎。同母、深雪。下男、五助。下女、おさは。春藤新左衛門。同女房、おとき。同妹、おろく。浮塵國師實ハ雲霧仁左衛門。

本舞臺、三間の間常足の二重、花の丸の蹴込み、襖、欄間、向う花鳥の彩色襖。上の方、塗り骨障子屋體。下手、杉戸の出入り。所々に銀燭を照らし。上手の屋體に床の間、爰に畫像を掛け、玉椿の活け花を置く。幕の内より若竹、楓、皐月、待宵の腰元、見得よく居並び、琴唄にて、幕明く。

若竹　なんと皆さん。お前方は、どう思し召すか知らねども、あの須磨清三郎どのは、御家中一番の優男と噂のあるお方ぢやが、若いに似合はぬ物堅いお人ぢやと、皆さんが云はしやんすが、わたしや、どうも合點がゆかぬわいなア。

皐月　ほんにさうでござります。なんでも、あのおろくさんと、どうやら味な素振りぢやと、思うて居りましたわいなア。

待宵　成る程、さう云はしやんすりや、オヽ、いつやらであつた。奥樣のお供で、御佛參に行つたその時に

楓　清三さんとおろくさんと、離れ座敷で話しをして居やしやんしたは、どうやら味に思はるゝわいなア。

若竹　それを、奥樣には御存じないやら、おろく〳〵と御意に入つて、御前のお首尾のよさ、ほんに解らぬものぢやわいなア。

トこの時、奥より松島、出て來る。

松島　これはしたり、また寄りたかつて噂話し。下として上の取沙汰、今日のところは、聞かぬ分にして置きませうが、以後キッとお嗜なみなされませ。

皆々　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。

松島　それよりは、早うお奥へ行つて、御用なとお足しなされたが、ようござんすぞえ。
皆々　ハイ、畏まりました。
ト腰元皆々、奥へ入ると、バタ／＼になり、茶道一人、走り出て
茶道　ハツ、申し上げます。
松島　何事ぢや。
茶道　ハツ……今日江州佐々木家より、後刻御使者お入りの先觸れ、只今參上仕つてござります。
ト云ひ捨て引返して入る。
松島　佐々木家よりのお使者とあるは、當家の重寶、吳道子の一軸、兼ねてより御懇望なれば、右の品を受取る爲めのお使者ならん。幸ひ、御家老新左衞門さまの御內寶、おときどのもお出でなれば、この事、早うお知らせ申さん。
ト奧へ行きかける。この時、奧にて
とき　アイヤ、お出でに及ばぬ。只今それへ。
ト合ひ方になり、奧よりおとき、武家女房の拵らへにて、出て來り
委細の樣子は、あれにて承りました。松島どのにはこの事を、須磨の後室へ。
松島　畏まりました……左やうなれば私しは。
とき　御苦勞ながら。
松島　おときどの
とき　後程お目に
兩人　かゝりませう。
ト唄になり、松島、奧へ入る。おとき、上手の床の間を見て
とき　ても、珍らしい。あの椿、八千代を籠めし花の香り。どなたがお活け遊ばしたか。ハテ、奧床しい。
ト眺め入る。この時、仕掛けにて、花活けの椿の花、バツタリ落ちる。おときキツと見て
ヤ、、、物も觸らぬに、あの椿、ひとりと落ちしはムウ。
ト思案のこなしあつて
誠にゆかりの玉椿、椿の文字は木扁に春。花、木を放れて落ち散りしは、莟みの花の太陽にて、春の氣ざしを則るもの。椿の木扁を取る時は、春……夫の苗字は春藤氏。もしや夫の身の上に、惡しき事でもある知らせか。ハテ、心がゝりな事ぢやなア。
トぢつと思案のこなし。女形皆々、出て來り

若竹　申しおときさま。惣別、物は心の取りやう。怪しみを見て、怪しまざれば、遂に消ゆるとやら申す事は、常々お奥で承つて居りまする。

皐月　あまり、きな〳〵お氣に遊ばしたら、却つて不吉を招くの道理。

待宵　咲くからは、散る花の習ひ。

楓　誠に、手折つて活けたる花。

若竹　捨てゝお置き遊ばしたが、よからうやうに

皆々　存じまする。

とき　成る程、さう仰しやれば、そんなものもあるまいに、女子と云ふものは別してもない事を、取越し苦勞を致すもの。ほんにお前方の御意見で、わたしも胸が、さつぱりと致しましたわいなア。

トこの時、五つの時計、鳴る。奥より須藤六郎右衛門、上下衣裳、大小にて出て來り、おときを見てニツタリこなしあつて、平舞臺へ下り

六郎　これは春藤氏の內儀、先刻は失禮。

とき　あなたは須藤六郎右衛門さま、先程は未熟な爪琴をお耳に觸れまして、お恥かしう存じまする。

六郎　なんの〳〵、イヤモ、誠に感心仕つてござる……ア、コレ〳〵お腰元衆、如何いたしたものぢや。最前よりお奥で召してござるに、この所に寄りつどひ居つて、サ、早う行かれい〳〵。

若竹　左やうならば、お召しでござりましたか。

六郎　オ、サ、お召しだ。早う行け〳〵。

皆々　畏まりました。

ト腰元皆々、奥へ入る。おとき、立つて

とき　お褒めのお詞、有り難う存じます。ドレ、私しは御前へ行つて。

ト行きかける。六郎右衛門、おときの袂を捕へて

六郎　アイヤ〳〵、ちよと御意得申さう。奥向きの役目は腰元どもが參ればよい。今日七夕の祝儀日で、家中の男女、一緒に館へ召されて御酒頂戴、身もその酒に醉ひ倒れて、やう〳〵只いま人心地に相成つた……コレサ、おときどの、コレ、こなたは氣强い女ぢやなア。

トしんみりした合ひ方になり、六郎右衛門、おときを下に置いて

コレ、こなたに惚れたは去年の今年、昨日や今日の事ぢやアござらぬ。まだ總角のその頃に、そもじの父御十藏どのに、劍術御指南、受くる時分、子供心に美しい、あ

あ云ふ女を女房に持つてこそ、男に生れた甲斐もあると、思ひ込んだが心の煩惱。其うち親に死に別れ、せう事なしの武者修行、弓矢神の妙助にて、フトした事から當家へお抱へ。劍道御師範いたすのも、十藏どのゝ高恩と、心に忘れぬところから、また思ひ出す其方の事。御家老方へ引合はせと、迎ひに出た春藤の、御新造どのを見て恟り、幼な馴染のおときどの、それからいやます戀慕の闇。命にかけてもこの戀はと、思ふ勇士の一念は、駟馬も及ばずと、古人の金言。どこまでも叶へてもらはにや武士が立たぬ。とサ、斯う一途には云ふものゝ、心に染まねば返事もなるめえ。心を定めておときどの、色よい返事を……どうぞ聞かして下されい。

トいろ〳〵こなしあつて云ふ。

とき　ア、申し、六郎右衛門さま、又しても〳〵道ならぬ無體なお詞。以前は兎もあれ、今は新左衛門と云ふ夫のある身。重ねて左やうな猥らな事、仰しやつて下さりまするな。

六郎　サア、その新左衛門と云ふ夫を持つたが、猶以て一倍身共がむやくしい。一生やもめで暮らす身なら、思ひ切る氣が出やうも知れねど、夫婦仲よく暮らすと思へば、寐ても覺めても其方の事、胸に忘るゝ暇はない。サ、これ程思ふ身共が心、露ほどなりと汲み分けて、應と返事をして下されい。

ト寄り添ふを、酷く突き放して

とき　エヽモ、アタ無作法な事をなされますな。

ト六郎右衛門、追ひ廻す。この時、奧より春藤新左衛門、上下衣裳、大小、好みの形にて出て來り、眞中へツト出る。六郎右衛門、恟り、面目なきこなし。おとさ、新左衛門を見て、嬉しきこなし。合ひ方になり

新左　これは〳〵、六郎右衛門どの、今日のお式日、定ゆて貴殿にも、御心勞な儀でござりませう。

ト何氣なく挨拶する。六郎右衛門、薄氣味惡きこなしにて

六郎　イヤモウ、心勞は互ひの事。貴殿にも御苦勞に存じまする。

とき　モシ、こちの人、よい所へ、よう來て下さんした。あら事か、あるまい事か、侍ひで候ふの、イヤ劍術の御師範ぢやのと、仔細らしい顏をして、主のある身を手籠めにして。

ト云ひかけるを

新左　ヤイ〱女房、そりやなんのたわ言。
とき　イ、エイナア、今も今とてわたしを捕へて
新左　ハアテ、役にも立たぬざれ詞。須藤氏もこれにござる。エヽ、馬鹿いたすな。
六郎　成る程〱。新左衛門どのゝお詞、御尤も至極。仕る。譬へにも申す如く、婦女と小人は養ひ難しとやら、悧發のやうでも、女と申すものは、とんと頼りのないものでござる、ハヽヽヽヽ。
トこの時、奥にて
伴藏　不義者見付けた。うせう〱。
ト奥より、伴藏は、葉末、清三郎、おろくを引立て出る。上手より、以前の腰元四人、朝顔雪洞を持ち出で來る。
六郎　ナニ、不義者とは、何者なるぞ。
ト清三郎、おろくを見て
ヤ、誰れかと思へば清三郎、いま一人は新左どのゝ妹御、おろくどの。こりやどうぢや。
ト伴藏・葉末と顔見合せ、わざと悧りのこなし。
清三　ア、イヤ、聊爾なされな、身に取つて不義の覺えはござりませぬぞ。

伴藏　コレ〱清三郎、云ふな吐かすな、宣ふな。不義の覺えのない者が、出入りを禁ぜし切り戸口、男女構内で、ありや何を致して居つたのだ。
清三　サア、それは、最前鶴ヶ岡で貴殿のお頼み、六郎右衛門どのが、おろくどのに戀ひ焦れてござるゆゑ、取持つてくれい、その代り奥へ忍ぶ切手をやると、コレ、この通り、わしに渡して頼んだではござりませぬか。
伴藏　ナニ、身共が頼んだ。稀有けれつた事を申すな。身共、いつ貴殿へ頼んだぞ。
清三　でも、最前、あれ程、事を分けて。
伴藏　エヽ、知らぬわえ。
葉末　コレおろくどの、奥向きの事は、何事も預かつてゐるこの葉末。ようマア、人を盲目にして、大膽な事したさんしたな。
ろく　ア、モシ葉末さま、今日八幡の境内で、あの清三郎さまに惚れた程に、取持つてくれいと、達てわたしへ頼ましやんしたぢやござんせぬか。
葉末　アレ〱〱、マア、口から出放題に、あんな嘘ばつかり。いつわたしが、其やうな嫌らしい事を頼みました。ほんに夢にも知らぬ事ぢやわいなア。

ろく　それでも、みす／＼わたしを頼んで置いて。

葉末　アレ、まだいな。そんな馬鹿らしい事、誰れが人に頼まうぞいな。

清三　現在わしが嫌がるを、須藤氏がお頼みぢや、是非ともこの戀を取持つてくれいと、くれ／＼頼んで置きながら、今となつて知らぬとは、そりや卑怯であらうぞえ。

トロ惜しきこなし、伴藏も知らぬ顔してゐる。六郎右衛門、キッとなつて

六郎　アイヤ、清三どの、最前より、押默つて承り居れば、須藤氏に頼まれしなどは、耳ざはりで聞き苦しい。爰に須藤もお出でだワ。身の云ひ譯のなきまゝに、口から出任せ、この場の云ひ譯。たわけた事も、よい加減に召さるがいゝワ。ナニ、馬鹿々々しい。

伴藏　サア二人とも、云ひ譯なくば不義の科人、お家の御法に行はねば、

とき　ア、イヤ、伴藏さま、二人を不義と仰しやるには、なんぞ、慥かな證據でもござりまするか。

伴藏　サア、その證據と云ふは、出入り嚴しい切り戸口、暗い所に兩人が、何かひそ／＼べちや／＼と、話してゐたのが、慥かな證據だ。

とき　イエ、そりや證據にはなりますまい。ハテ、例へ二人が一緒に居たにもせよ、奥向きの勤めの身、どう云ふ事のお向ひ合せで、どのやうな御用向きがあらうとも知れませぬ。

伴藏　ムウ。サそれは。

とき　それが證據になりませうか。

伴藏　サア。

とき　サア。

兩人　サア／＼。

伴藏　ムウ……と、詰まつたらよからうが、さうは行かぬ、オ、、證據がある。

とき　ナニ證據があるとは。

伴藏　今見せる。悔りせまいぞ。

ト懷中より、最前拾ひし起證を出して

證據と云ふはこの起證だ。おろくどの、清三郎。いづれも、とく／＼御覽下さりませう。

トおとき、當惑のこなし。これにて新左衛門、堪へ兼ねたるこなしあつて、おろくを引据ゑて

新左　ヤイおろく、おのれは／＼、横道な事いたしたな。不義はお家の堅い御法度、それ辨まへて居りながら、現

在のこの兄に、面皮をかゝせるいたづら者。云はうやう
なき人外めが。
　ト扇にて打ち据ゑる。
コリヤ女房、其方、側にありながら、斯くの如き不行跡、
知らぬ事はよもあるまじ。なぜに意見はしやらぬのぢや。
コリヤ、其方も越度と云ふもの。
とき　ぢやと申して私しは。
新左　ハテ、それが悪い。其方は奥へ行つて、ナ
　トおときに呑み込ます。おとき、それでもと云ふこな
し。
サ、早う〳〵。
とき　ハツ。
　トこれにておとき、しぶ〳〵ながら心残して、奥へ入
る。入れ違つて深雪、老けたる新の後家の拵らへにて
走り出て、ツカ〳〵と清三郎の側へ來て、清三郎を引
据ゑ
深雪　様子は残らず奥で聞いた。エヽマア、情ない不義の
汚名、家名の恥を思はぬか。さう云ふ其方が心と知らず、
よい年をしたこの母は、過ぎ行かれた親仁どのゝ遺言を
守り、みんごと其方を人並に、立派な武士にせんものと、
神や佛をせがむのもナ、其方を人に誉めさせたいばつか
り。その誠心を無足にして、年寄りの顔に泥を塗るやう
な事、ようマア、おのれはしおつたなア。エヽ云はうや
うない、アノ茲な人畜生めが。
　ト髻を掴んで打擲する。清三郎、術なきこなしにて、
　涙を押へて
清三　段々のお腹立ち、御尤もでござりまする。年寄りに
御苦勞かける不孝者、お免しなされて下さりませ。
ろく　元の起りはわたしから。さぞ憎い奴と思し召すでご
ざりませうが、これも前世の約束と諦らめて、お免され
て下さりませ。
六郎　アヽよい態〳〵。なまくら武士の嗜なむ所は、伴
藏、お見やれ、皆あれだ。上より御知行を頂戴いたして、
御馬前の高名は心がけず、夜軍の稽古に念が入ると、あ
の通りだ。ハヽヽヽ。
伴藏　不義はお家の堅い法度。御法を破りし彼れら兩人、
引立てゝ縛り首だ。念佛唱へて覺期しろ。
清三　すりや、我れ〳〵を縛り首に。
伴藏　サア、いゝ事した後は、いつでも悪いものだ。サア、
キリ〳〵とうしやアがれ。

磯平　ト引ツ立てにかゝる。この時、橋がゝりにて
先づ〱暫く、お待ちなされて下さりませう。
ト早舞ひ、コイヤイになり、磯平、橋がゝりより走り出る。

伴蔵　慮外な下郎め。下がり居らう、

磯平　ハヽア、無禮慮外も合點で、止めましたは下郎めが、胸に一物、いづれも様、お待ちなされて下さりませ。

伴蔵　ヤイ〱、下素下郎の身を付て、お歴々の御前と云ひ、高上がりする場知らずめ。キリ〱そこを立つてうせう。

磯平　イヽヤ、滅多にやア立ちますまい。今お庭先で様子を聞けば、若旦那様が不義の科で、縛り首に切られるとやら。そりや、實正の事でござりますか。

伴蔵　オウ、實正も〱、近年の實正だ。御法を破つて、不義、働らいた清三郎、縛り首は當り前だ。

磯平　成る程、御法を破つて、不義をなされたは若旦那の科。それにやア、なんぞ證據でもござりまするか。

伴蔵　オヽ、證據と云ふは、この起證だ。
ト ひろげて見せる。

磯平　成る程、それを證據に不義の科。併し、書いた物を證據にして、不義の科だと、縛り首に行ふなら、まだこのお席に、首の細つたお方様が、あるめえものでもござりませぬ。

新左　アヽコレ、お歴々の中、迂濶なる事を申したら、後でその身の難儀にならん。必らず慮外を。

伴蔵　イヤ、こりや面白い事を吐かす奴だ。サヽその首の細つたお方とは誰れだ。それを吐かせ。

磯平　イヤ、あまり強いてお聞きになられぬが、マヽお殿様の御指南番で候ふの、劍術を鼻にかけ、立派な顔で、肩で風、鞘柄頭、鐺まで、拵らへは見事でも、正眞の中心の錆びた汚ねえ根生。あの魂ひぢやア、まさかの時の御用にやア……へ、覺束ねえものだなア。
ト六郎右衛門へ當てつけて云ふ。これにて六郎右衛門、ムツとせしこなしにて

六郎　ヤイ〱、下素奴め。口の横に切れたまゝ、案外なるその雜言。なんとやら耳に觸つて聞き憎い。わりや、今なんと云つた。清三郎めを縛り首にせうなら、この席にも首の細つた者があるとは、こりや、聞き所だ。サア、それ吐かせ。

磯平　ヘイ……達てお望みなら申しませう。

初演の繪番附

六郎　サ、吐かせ。それ聞から。
磯平　外でもない、これでござります。
　ト以前の文を出す。六郎右衛門、見て、恟りして
六郎　ヤ、その文は。
　ト取らうとするを、磯平、持ち替へて
磯平　ドッコイショ……おときさま參る、六郎右衛門。斯う云ふ慥かな證據がありやア、お二人樣が縛り首なら、その相伴に、須藤さまも、おなりにならざア、お家の御法が缺けやうかと
　ト六郎右衛門、ムウと急き込む。
憚りながら存じまする。
新左　いづれをいづれと分け難き、この場の落着。
清三　心からとて不孝の罰。
ろく　めぐる汚名も、この身から
深雪　降つて湧いたるこの場の難儀。
新左　ハテ、なんとしたものであらうな。
　ト思案のこなし。この時、奥より松島出て來り、五ツの時計、あと、合ひ方。
松島　ハツ、春藤さまへ申し上げまする。最前からの一部始終、逐一、奥樣のお聞きに達し、お家の御法を犯せし兩人、不屆きとは云ふものゝ、罪の紛らはしきは、輕う計らふ公けの政道、今日の式日、御祝儀のおめでたゆゑ何事も穩便に取計らひ、清三郎は春藤さまへお預け。又おろくは須磨の後室、深雪どのへ引分けて、預けよと、お情深いお上のお詞。有り難う、お受けなされませいなア。
新左　すりや、兩人を引き分けて
深雪　お預けなされて下さりまするとな。
松島　如何にも。科の次第は、追つての御沙汰。
清三　エヽ、忝なう存じまする。
　ト松島は云ひ捨てゝ奥へ入る。
六郎　エヽ、折角巧くやりかけたを、エヽ、いま〳〵しい……イヤ、結構なお捌きだ。御治世は有り難いものだ。弓馬劍刀の道にうとくとも、世辭で固めた追從輕薄、お髭の塵が肝心だ。いゝ人に引合ひがあつた、清三郎は仕合はせ者だ。武藝一通りは、誰れに劣りは致すまいと存ずるが、生れ付いたる無口者、兎角、人づきが惡いゆゑ、斯やうな捌きには困りまするて。ハヽヽヽ。
　ト新左衛門を詰つて云ふ。新左衛門、ムツとこなしあつて、六郎右衛門の側へ寄り

新左　アイヤ六郎右衛門、聞き苦しい今の一言。よい人に引合ひがあつて仕合せとは、この新左衛門へ當てつけた一言。仕儀に依つては、その座は立たさぬ。いま一言承はらう。

六郎　ア、申したな。御治世になれば、武藝にうとい侍ひも、人の上に居て、輕口頓作、戯むれ話し、おつな所から取入つて、知行をむさぼる碌盗人、一家中には大分見ゆるな……また、斯く云ふ須藤六郎右衛門さまは、お伽話しのお相手にはむづかしいが、イザ御大事と云ふ時は、一番に鎗引ッ提げ、御馬前の高名いたす誠の武士だワ。

新左　ハ、、、、イヤ、その誠の武士が油斷がならぬ。おのれを知つて人を知らぬ、俗に云ふ井の内の蛙。かのセウシンと云ふ虫は、蚊の眉毛の内に住ひをする虫ぢやが、その内を廣しとして、九萬里を伸す大鵬の、飛行をするを知らぬと云ふが、丁度おてまへ如きの小人を指したる譬へ。表は忠義に見せかけて、佞辯を以ておもねりへつらひ、おのれを輕んじ、人を見下げ、我れに勝れるを憎むは小人の常。御前の首尾よき某を嫉み、何がなあらば罪に落し、上見ぬ鷲の威を振はん汝が企み。何もかも見抜いた眼力。よもや相違はあるまいがな。

ト此うち、六郎右衛門、口惜しきこなしにて、伴蔵に、それと目交ぜする。

伴蔵　うぬ、春藤、觀念。

ト出しぬけに切つてかゝるを、扇にて白刃を打ち落す。六郎右衛門、堪り兼ねて、抜きかけるを、新左衛門ちよつと留めて

新左　なまくら武士のなまくら刃金。誠の武士の體にやア立たぬワ。

ト伴蔵を留める。

六郎　ところを切つて見せるワ。

ト振りほどいて、切つてかゝる。新左衛門、扇にて、六郎右衛門の利き腕をしつかと押へ

新左　コレサ、おてまへ、何をじたばた、立ちはだかつて見苦しい。マア、お下にござれ。イヤサ、お下にござれと云ふに。

ト押へたまゝ、ヂリ〳〵と下に置く。六郎右衛門、ムウとして、其まゝ下に居る。これを、キッパリとした合ひ方になり

イヤサ、おてまへは噂に命した、天晴れお手利きの事でござる。高が弓手の扇に押へられ、五體竦みて、身動き

もならぬ事と相見ゆる。ナニサマ劍道御師範なさる程あつて、イヤモ、天晴れでござる。なんと、藝とは裏かへにて、イヤハヤ、笑止千萬な。イヤ、おてまへ如きものを何やらと申した。オヽ、それ〳〵、三國のその昔、魏の操曹が部下に、尙書令の官に、侍中郎董允と云へる者、おのれに慢じ、人を見ること芥の如し。然るに或る日、書生を集め、學を以て戰はしむる。とその中に司馬亮と云ふ壯士あつて、彼れと舌戰に及ぶ。董允、利を失つて閉口す。日頃より彼れを憎むの人多ければ、これを心よしとして、飽くまで彼れを罵る。董允、赤面して引下がり、これを遺恨にして、司馬亮を討ち果さんと企む。その事ならずして、却つて、おのれ死に伏す。然るに、彼れが死骸、腐りたゞれて、多くの虫に變じ、彼れに仇せんとすれども、おのれが邪まの心より、いつかな〳〵、恨みを報ずる事あたはず、後人、この虫を名付けて、斑妙と云ふ。斑は卽ち、まだらなり。彼れが一念凝つてまだらとなる。妙は卽ち、その妙なり。人誤まつて、これを服せば、その毒、忽ち身內にめぐり、惣身、すべてまだらとなり、死に至ると。恐るべし〳〵。てまへも矢張り、その如くだ。ドレ、面體を上げさつせえ。

ト押へたる扇を、ちよいと頤へ當て、グイと顏を上げさせる。此うち六郎右衞門、ムツとして、反り身に顏を上げて、無念の思ひ入れ。

身共は、とんと人相は習はねども、斯う見たところは、なんとやら、並み〳〵ならぬ面體恰好。人交はりはするものゝ、さては彼の蟲同樣に、人をそこなふ大毒蟲。どうで終りは刀の錆、由比ケ濱邊に晒さるゝ、彼の獄門に得てある顏色。見れば見る程、氣の毒千萬。ハヽヽヽ。

ト笑ふ。六郎右衞門、無念のこなし。

六伴　うぬ、なにを。

ト六郎右衞門、振りほどいて、切つてかゝる。新左衞門、扇にてあしらひ、ちよつと立廻り。この時、六郎右衞門の懷中より密書落ちる。新左衞門、伴藏を當てろ。立ち身に苦しみ、よき所へへたる。密書の上書を見て

新左　須藤六郎右衞門どのへ、日置谷次より。

ト讀む。六郎右衞門、恟りして

六郎　南無三、それを。

ト振りほどいて、切り付けるを、身を交して、當てる。

新左　ソレ、讀んで見やれ。

ト密書を投げる。清三郎、取上げ

清三　ナニ〳〵、手紙を以て、申し入れ候ふ、先達て、盗み取り候ふ一軸、差上げ候ふところ、今に以て、なんの御沙汰もなく、依つてこの段、念の爲め申し上げたく、斯くの如くに御座候ふ以上。六郎右衛門さまへ……谷次より……ムウ、この一軸とは。

深雪　サ、疾に紛失したわいの。

清三　エヽ……それを御存じありながら、これまで深くお包みありしは。

深雪　サア、心で納めて人知れず、詮議せんと思ふうち、今日計らずも佐々木家より、受取りのお使者到來。その後に望む寶は似せ物、鍵預かりはこの母と、科をこの身に引請くる、兼ねての覺悟。

清三　それ程までに、私しを。

深雪　たつた一人の悴ぢやもの。可愛うなうて、なんとせうぞいなウ。

ト泣き落す。新左衛門、こなしあつて

新左　ハア、燒野の雉子、夜の鶴、子ゆゑに迷ふ親心。ハテ、頼もしい親子の愛情。

磯平　物數ならぬ下郎めまで、身を投げ出した今日の失禮。

清三　日頃の恩義が報じたさ。

清三　最前其方が來合さずば、彼奴等二人が企みの罠に、かゝりやつながる、おろ〳〵どのもろ〳〵ともに死ぬるはいとはねど、御恩になつた兄さんに孝行らしい事もなく

新左　若木の花を散らすかと、不意なう思うて案じるより

深雪　有無を云はせぬ、艶書の手詰め

清三　危ふいところは遁がれても、とても遁がれぬこの身の科。不義の越度に、寶の紛失。

新左　サヽ、それも拙者が計らひにて、上の御前を執成して、寶の詮議百日の、日延べを願うて、兎も角も。

磯平　何から何まで、お情深いお計らひ。この上ともに且那樣のお身の上。

新左　ハテ、切つても切れぬ五本の指。

深雪　アヽ、頼もしいその詞。

新左　マア、何事も宿所へ參つて。

深雪　清三郎さまも御一緒に。

磯平　若旦那は下郎めと。

新左　サヽ、皆もお行きやれ。

ト合ひ方。これにて皆々、花道へかゝる。新左衛門、

六郎右衛門の側へ行く。合ひ方とまる。
これ見られよ、不忠不義の侍ひの好い手本、世にはたわけた奴もあるもの。ウフ、ハ、、、。サア、參らう。
ト唄になり、皆々先に、新左衛門、六郎右衛門を尻目に見ながら、塵を拂ひ、鷹揚に向うへ入る。此うち、伴藏、やう／＼心づき、あたりを見て、誰れも居らぬゆゑ、悧りして、フト六郎右衛門を見付けて驚き、側に寄り、活を入れる。六郎右衛門、心付き、伴藏を見て、落ちたる白刃を取り、切り付けようとするを

伴藏　ア、コレ先生、拙者でござる／＼。
ト これにて、六郎右衛門、心付き、伴藏を見て
六郎　ムウ、伴藏どのか……イヤ、面目次第もござらぬ。
伴藏　して、この上は如何召さるゝ。
六郎　重なる恨みのその上に、深い企みの底までも、見拔いた春藤、とても生けては。
伴藏　すりや、春藤めを。
六郎　彼れが歸るは小由留木橋、先へ廻つて、恨みの刃……
……コレ。
ト伴藏に囁く。
伴藏　すりや、橋中へ落し穴。
六郎　孫呉が秘書より騙すに手なし。
伴藏　然らばこれより。
六郎　早く行きやれ。
伴藏　心得ました……ソレ。
ト一散に伴藏、ゴンの送りにて、向うへ入る。六郎右衛門、あと見送るこなしあつて
六郎　劍道師範を云ひ立てて、當家にありつくその日より心憎いはあの春藤、大事の密書を持ち歸れば、今宵は過ごさぬ彼れが命……おのれ春藤、今にぞ思ひ。アイタタタ。知らせてくれん。
ト刀を杖に、キッと向うを見込み、思ひ入れ。この仕組みよろしく、道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、常足の二重。正面、石摺りの襖。上手、障子屋體。下の方、後に建仁寺垣、枝折り門。すべて清三郎屋敷の體。爰に、おさは、下女の拵へにて、行燈をともし、針仕事をしてゐる。平舞臺に、五助、ぼつとせ石持ちの形にて、單物をひろげ、蚤を取つてゐる見得。時の鐘、合ひ方にて、道具納まる。

さは　コレ〳〵、五助どん、其やうにふるつては、行燈の灯が消えるわいなア。
五助　ナニ、灯が消える。灯が消えりやア、直ぐにお前の所へ這ひかゝるばかりだ。
さは　エヽモウ冗談ぢやござんせぬ。靜かにしたがよいわいなア。
五助　ムウ、やかましい女だなア。此奴も始終は去り狀ものだわえ。
さは　ニヽ、嫌らしい。誰れがお前のやうな、意氣地なしの女房になるものがござんせうぞいなア。
五助　コレ〳〵、さう安くするな。これでも、大磯の江戸町二丁目、金久の内の花魁が、おれゆゑなれば命でもと、大層熱くなつてゐるワ。そこが凡夫の悲しさに、さう云ふ所までは目が屆くまい……ナ、なか〳〵さうは見えまいが。
さは　ホヽヽヽ、五助どん、お前は、大分取逆上せた樣子ぢや。ちつと三里か爪先に、灸でもすゑたがようござんすぞえ。
五助　ナニ、逆下せてゐるから、三里をすゑろ。措きやアがれ。おれより、てめえは逆上せの所爲か、頰べたが赤いワ。定めて、臭からう。案じてやるのだ。
さは　エヽモ、人の顏の店卸ろしより、お前の寐言を云はぬやうに、願がけでもしなさんせ。
五助　いつ、おれが寐言を云つた。
さは　この間の晩も、やかましうて、寐られなんだわいなア。
五助　ムウ、この女は、とんだ噓ばかり吐きやアがる。
さは　なんぢやえ。女もないものだ。この飯炊き野郎め。
五助　エヽ、この女は、うぬ、どうする。
　トおさはに摑みかゝる。この時、奥より深雪出て
深雪　これはしたり、また朋輩喧嘩か。御近所へ外聞も惡し、殊に内には大切なお客人もあるに、ちと嗜なんだがよいわいの。
五助　ヘイ〳〵、眞平御免なされませ。
さは　お前が惡いからぢや。
五助　ナニ、こなたが。
深雪　ハテ、又かいの。サヽ、もう用はない。早う行て、寐てしまや〳〵。
さは　ハイ〳〵、左やうならば、御機嫌よろしう。
深雪　サヽ、行きや〳〵。

五助　ドレ、どふさらりか。
　ト唄になり、兩人、奥へ入る。深雪、あと見送り、こなしあつて
深雪　ハテ、下ざまと云ふものは、氣の輕いもの。それに引きかへ先達て、紛失なしたるお家の系圖、元の起りは若殿守之助さま、如何にお年若なればとて、御遊興にふけらせられ、おのづと亂るゝお側廻り。併し、健氣なは稻野牛之丞、若殿樣のお供して國遠なし、今以て行くへ知れず。それのみならず、夫淸左衞門、お預かり申せし吳道子の一軸、先達て紛失なし、とつおいつ思案最中、搗てゝ加へて今日の體裁。忰が不義の越度と云ひ、今宵につゞまるお家の難儀。なんとしたものであらうな。
　トこの時、向うにて
呼び　お使者のお入り。
深雪　最早、お使者のお入りとな。是非に及ばぬ。心を定めて、ムウ、さうぢや。
　ト思案のこなし。また向うにて
呼び　お入り。
　トこれにて、三味線入り音樂になり、向うより淨慶國師、紫衣、七條の袈裟、もうす頭巾をかむり、後より絹羽織の侍ひ二人、紺看板の中間、付き添ひ出て來たり、花道、よき所にて
淨慶　この度、佐々木左馬之介義綱どのゝ命に依つて、使者に向ひし拙僧は、淨慶國師と申す者。お迎ひの女中、御苦勞に存ずる。
深雪　これは〳〵、お使者の役目、遠路の所、御苦勞千萬に存じまする。其所は端近。先づ〳〵これへ、お通りあられませう。
淨慶　然らば、御免下されい。
　ト矢張り右の鳴り物にて、淨慶、供侍ひ、付き添ひ、本花臺へ來り、よき所にて
我れは暫時……隙入るべし。其方どもは、供待ちにて相待ち居れ。
　トこれにて、侍ひ三人は橋がゝりへ入る。淨慶、鷹揚に會釋して、二重へ上がり、眞中へ住ふ。深雪、下手にて、手をつかへ
深雪　淨慶國師さまへ申し上げまする。佐々木家よりのお使者として、あなた樣のお入りと云ひ、憚りながら、お使者の趣き、仰せ聞かされ下さりませう。
淨慶　ホヽ、不審な尤も。拙者は江州石山寺の住僧にて、

この度、佐々木義綱どの、入間家の重寶たる吳道子の一軸、達て懇望の召されしところ、早速の承引。さるに依つて表向きの使者差越さるべきのところ、さあらん時には、北條どのゝ聞えも如何。まつた、一軸は須磨清左衛門に預けある由、これ幸ひ受取りの爲、彼の方へ隱密の使者、差向けくれよとの內意。これに依つて、拙僧、仰せを承り、はる〴〵參向いたしてござる。この儀、承引の上からは、この家に預かる雲龍の一軸、イザ、受取り申さう。

ト深雪、ちよつと思ひ入れあつて

深雪　ハヽツ、御使者の趣き、委細承知いたしましてござりまする。如何にもお預かり申し置きし一軸、只今お渡し申し上ぐるでござりませう。暫らく御免下さりませう。

ト深雪、よろしくこなしあつて、上手の障子屋體を明ける。爰に、蒔繪の三方に載せたる蒔繪の箱、打紐にて中結へをし、立派に仕立てたるを、恭々しく持ち出で、淨慶の前へ置き、後へ下がつて

これこそ、入間家の重寶、吳道子が雲龍の一軸。イザ、お受取り下さりませう。

トこれにて、淨慶、恭々しく紐を解き、中を改める拵あつて、

淨慶　ムウ、疑ひもなき吳道子の筆、誠に聞きしに增る無類の筆勢、世にも稀れなる珍器ならん。義綱どのもさぞ滿足。役目終る上からは、一刻も早く立歸へり、一覽に喜悅の顏が、拜したう存じまする。

深雪　成る程、それも御尤も。左やうならば御使僧には。

淨慶　お別れ申すでござりませう。

ト頭になり、淨慶、一軸の箱を持ち、悠々と花道へかかる。深雪、二重の眞中に座り

深雪　佐々木家の使者、詮議がある。マア〳〵待つた。

トこれにて、淨慶、聞かぬ振りにて、行くを

ハテ、待てと云はゞ、マア〳〵待ちやれ。

淨慶　使者に立つたる拙僧に、詮議とは、なんの詮議。

深雪　ハテ、知れた事、騙りの詮議。

淨慶　ヤ。

深雪　サア、使者に立つたる淨慶國師、最前からの詞の顚倒。如何に隱密の使者なればとて、石山の役僧が、輕々しくお入りと云ひ、御身にまとふ紫衣の形相。

淨慶　なんと。

深雪　殊に、印書も御所持なく、サア、これが騙りである まいか。イヤサ、なんと騙りであらうがや。
淨慶　サア、それは。
深雪　サア。
兩人　サア〳〵
深雪　なんと騙りであらうがや。
　　ト　これにて、淨慶、悄りして、ツカ〳〵と本舞臺、屋體へ戻り、深雪の側へ詰め寄り
淨慶　女ながらも天晴れお目利き。成る程、拙者、騙りでござる。騙りの正體、お目にかけう。
　　ト合ひ方。
　折角、仕込んだこの仕事、しくじつたと云はれては、仲間の奴等へ面が立たぬ。不肖ながらもこの代物、どうぞ騙らせては下さるまいか。
深雪　ヤア、大切なその一軸、なんで其方に渡されやうか。これは深い仔細があらう。サア、速かに白狀しや。
淨慶　サア、それは。
深雪　拷問せうか。
淨慶　サア。
深雪　但し、騙りと白狀するか。

兩人　サア〳〵。
深雪　どゝどうぢや。
淨慶　ムウ。
　　トこなしあつて、淨慶、衣袈裟、もうすを脫ぎ捨てる。これにて、下には大形の着付け、長脇差の拵らへにな り
　如何にも騙りの正體、お目にかけう。斯くの通り騙りに參つた私しが、一軸を受取り歸るその時は、淸三郎どの の御身の安體。そこを存じて似せ物を、望んで參つたは、ちつと仔細のあつての事。
深雪　すりや、紛失の一軸を、知つて騙りの盜賊か。
淨慶　左やうでござります。
深雪　それにしても、合點のゆかぬは其方が一言。似せ物の一軸を騙り取つて歸らねば、淸三郎が身の大事と云やつたが、ついに見もせぬ其方が、こちら親子が難儀をば
淨慶　サ、救はにやならぬ御恩のある身。一通り、お聞きなされて下さりませ。
　　ト本調子の合ひ方になり
　もと私しの親どもは、あなた樣のお連合ひ、淸左衞門さまに若黨奉公、若氣の至り、お側の文中と忍び合ひ、既

にお手討にもなるべきところ、あなた様のお情にて命助かり、その上に、多くの金子を下されて、お家を追放。程なく生れし私しは、その者の一人の伜、成人するにつけまして、親仁が常々あなた様のお噂。もしこのお家に不時な事でもある時は、命に替へても、親々の、御恩を報じてくれよとて、くれ〴〵の遺言も、上の空耳聞き流し、悪い附合ひが根となつて、ちよつと騙りや晝稼き。それから段々功を経て、今ぢやア立派な盗人の親方様の仁左衛門。形を隠すは雲霧と、異名に取つた仁左衛門。この似せ物を騙り負ふせ、科をこの身に引受けたら、萬分が一の御恩送りと、思ひましたる猿智慧も、あなた様の眼力で、見出されたに勿怪の幸ひ。どうぞ下郎がこの願ひ、お聞き入れになつて下さりませ。

深雪　健かな恩を忘れずに、その身を捨てゝ、清三郎を、庇うて下さる志しは嬉しいけれど、今にもあれ、佐々木家より、誠のお使者がある時は

浄慶　ハテ、そりやお氣遣ひになりますな。それゆゑ仕組んだこの騙り。よしやお使者があればとて、出して見せれば一物なし。日延べの願ひを立てる手段。

深雪　そんなら其方を、その時の

浄慶　騙りの次第は、斯う〳〵と。

ト囁く。

深雪　おやと云うても。

浄慶　ハテサ、お氣遣ひには及びませぬ。

深雪　エヽ、忝ない。

トこの以前より、上手屋體におろく、下手の柴垣の内より磯平、窺ひ居て、この時、皆々、前へ出て

磯平　様子は殘らず、あれに忍んで聞きました。仁左衛門どのゝ眞實誠心。

ろく　清三郎さまの御難儀を、身に引受けて、今の詞

磯平　武士も及ばぬ心底に、驚ろき入つてござりまする。

浄慶　兎かう云ふうち、暫時の隙入り。この一件は佐々木家より、使者が参つて、お渡しありしと、御披露になられたその上で、日延べを願つて、實の詮議、御油斷なく。

深雪　云ふにや及ぶ。仁左衛門が段々の深切、忘れは措かぬ、忝ない。

浄慶　後室様、皆の衆、隨分、御無事で

トちよつとこなしある。

三人　ヤ。

浄慶　其うち、お目にかゝりませう

ト唄になり、悄々橋がゝりへ入る。

深雪　ア、下ざまには惜しき若者。悪に強きは善にもと、仁左衛門が詞の金鐵。

磯平　ア、ナニサマ、性は善なりでござるなア。

ト ばた／＼になり、向うより絹羽織の侍ひ一人、走り出て

侍ひ　ハツ、申し上げます……只今、御重役方より一軸の事に付き、至急のお召し。後室には、早々御出仕召されよとの、御口上でござりまする。

ト云ひ捨て、引返して入る。

深雪　ムウ、一軸の儀とあるからは、問はずと知れし遅刻のお使ひ。これより直ぐに……それにつけても、二人の汚名。

磯平　いつしか晴るゝ時節もござらう。

ろく　行く末長う

深雪　それも後の世。

ろく　エ。

深雪　ドレ、お館へ。

磯平　左やうなれば、下郎めは。

深雪　おろくどの。

ろく　伯母君様。

深雪　サ、行きませうか。

ト唄になり、下手へ歩みかける。この仕組みよろしく道具逆にぶん廻す。

本舞臺、向う一面の黒幕。上の方、土橋を見せ、これに誂らへあり。眞中、庚申塚、松の立ち樹、日覆より同じく吊り枝。すべて相州小由留木橋、夜の體。

薄く雷の音、雨車にて、道具納まる。

ト向うより稲作、百姓の拵らへにて、鋤鍬をかつぎ、片手に竹の皮包みを持ち、酒に酔ひたる思ひ入れにて、出る。この後より縫ひぐるみの犬一疋、付き添ひ出る。

稲作　なんだ、カウ、滅法界に遅くなつたやうだ。それにしても、先刻の雷様は、恐ろしい鳴りやうだつたから、權太兄イの内へ寄つて、雨止みをしたら、とんだ御馳走になつて、大きに酔つた。ゲエイ。

トこんな事を云ひながら出て、花道よき所にて、犬の足を踏んで、惘り、飛びのき

ヨウ、わんのこつた。ワン／＼啼けば同やうか。して見

りやア、お主も犬だ。來い〳〵。イヨウ、ぶちめだな。サア、おれと一緒にあゆべ〳〵

トこれにて舞臺へ來て

ムウ、よく來た〳〵。御褒美に、この中の物を一つ遣らう。だが、こりやア、おれが内へ歸つて、嬶と一杯やる積りだ。併し、一つ遣るべい。遣るはいゝが、てめえ、手をくれ。エヽ、手をくれろと云ふに。

ト犬、手をくれる。

ヨウ、手をくれたな。こいつは器用な犬だわえ。コレ、てめえ、いま流行の、藤八拳を知つてゐるだらう。サア、來い。

トちよつと拳のおかしみあつて

なんだ、てめえは名主で、おれが狐だから、おれが勝つたのだ。ムウ、わりや、いつでも、さうつくばつてゐる筈だわえ。ハヽヽヽ。

トこの時、犬は竹の皮を銜へにかゝる。稲作、よけにかゝる。顔をなめる。これにて、惆りして、後へ下がつて、ムウとキッと見得。これを好みのおかしみの鳴り物になり、稲作、犬とおかしみの立廻り、ちよつとあつて、トヾ犬に砂をかけられ、目の見えぬこなし。

此うち、犬は竹の皮包みを銜へ、橋がゝりへ入る。稲作、あたりを探つて見る。竹杖、手に觸る。これを取つて、こなしあつて

コリヤ、あんまりだ。ムウ、あんまり、あんまハリイ。

トよろしく按摩の身振りあつて、以前の鋤鍬をよき所へ置いたまゝ、橋がゝりへ入る。向う、バタ〳〵になり、六郎右衛門、頬冠り、着流し、大小にて、一散に走り出て來り、舞臺へ來る。後より、伴藏、同じく、着流し、大小にて、一散に走り出て來り、舞臺にて、行き當り

伴藏　オヽ、先生か〳〵。

六郎　伴藏どのか。

伴藏　まだ新左衛門めは參らぬ樣子。

六郎　オヽサヽ、まだ來ぬ樣子。ムウ、幸ひのあの橋板を打ち壞して

伴藏　オヽ、合點だ。

ト伴藏、捨て置きある鍬にて、橋板をくり拔いて、下へ來り

して、この上は。

六郎　この川中へ、しやッ屈んで

伴蔵　心得ました。

六郎　忍ばつせえ。

伴蔵　ハッ。

ト伴蔵、橋の下へ、六郎右衛門は下手へ、忍ぶ。時の鐘、合ひ方になり。向うより新左衛門、中間一人、箱提灯を持ち出て來り

新左　最早、餘程更けたる様子ぢや。定めて、清三郎が案じ居るであらう。早う歸らうと存じ、立寄つたが、ツイツイ遲うなつた。サヽ、行け〳〵。

中間　ハッ、お危うございます。石高道でござりますれば、お氣を付け遊ばしませ。

ト兩人、舞臺へ來る。この時、六郎右衛門、窺ひ出て、提灯を切り落す。これにて、中間、橋がゝりへ逃げて入る。

新左　ヤア、何奴なれば、この狼籍。

ト六郎右衛門、この聲を知るべに、切りつけるを、新左衛門、抜き合せて、立廻り。トゞあしらひ兼ね、上手の橋へ逃げて上がる、新左衛門、追ひかけて上がる。六郎右衛門、あしらひながら、後へ下がる。この時、新左衛門、落し穴へ踏み込む。六郎右衛門、〆めたとこなしあつて、直ぐに、肩先を一かせ切り下げる。新左衛門、立ち上がらうとする。この時、橋の下にて伴蔵、新左衛門の足へ縋り付き、引摺る。此うち、六郎右衛門、疊かけて切り付ける。新左衛門、身をかはし、鍔元を押へて、キッとなり

ヤア、卑怯なり。落し穴を以て、人を騙かり、だまし討つとは、卑怯な奴の。名を名乘れ。何奴なるぞ。

六郎　オヽ、誰れでもねえ、須藤六郎右衛門さまだ。身共が企みのいろ〳〵を、感附いたわれが運の盡き。もう叶はぬと諦らめて、潔く成佛するがいゝわサ。

新左　ナニ、六郎右衛門とな。おのれ、憎くき不忠、不義の人非人めが。企みの程は密書で知る。おのれ等如き人畜に、斯くやみ〳〵討たるゝとは、チエヽ、口惜しや、殘念やなア。

ト苦しむ。

六郎　へ、ハヽヽヽ。なんだ、殘念だ、口惜いと。オヽ、もがけ〳〵。もう斯うなつたら、おれがものだ。コリヤヤイ、よく聞けよ。おれが懐中にある大事の密書、なんで手籠めに引き出した。われも、手癖の惡い奴。武士だ武士だとほざいたが、武士に似合はぬ不作法千萬。惡い

心は出すめえぞよ。それにつけても、先刻、われが蟲の講釋、イヤモ、なか〳〵感心だ。われが口から、斑妙の毒と知つて、毒に中る。これがほんの、はんみやうさがし。ヤレ〳〵、氣の毒……どく〳〵千萬な、のた打つ態わえ。どうせ生けては置かれぬ奴。利き目は覿面、まッその通り。ドレ、往生得脱遂げさせようか。

ト蹴返して、止めを刺す。新左衞門、苦しみ落入る。懷中の書き物を出して、取上げ、懷中へ入れ、刀を鞘へ納め、下へ下りると、時の鐘、合ひ方になり、淸三郎、着付け、大小、中間、箱提灯を持ち出て來る。此うち、伴藏、橋の下より出る。六郎右衞門、ツカ〳〵と來て、淸三郎の提灯を切り落し、直ぐに、切つてかかる。淸三郎、拔き合せ、立廻る。此うち、中間、逃げて入る。この中へ、伴藏、分けて入る。淸三郎、伴藏を一かせ切る。これにて、伴藏、うろたへ、橋がゝりへ逃げて入る。引違へて、橋がゝりより、淨慶、出て來り、恂りして、身拵らへして、この中へ入り、ちよつと立廻り、三人、キッと見得。これにて、後の黑幕、切つて落す。

本舞臺、向う、鎌倉の海邊、遠見の道具になり、誂らへの鳴り物、浪の音を冠せたる鳴り物にて、道具納まる。

トこれより、三人、だんまりの立廻り、小短くあつて、トゞ六郎右衞門、摺り拔けて、花道へかゝる。

淸三　曲者。

トこれにて、六郎右衞門、礫を打つ。淨慶、下に居て、立ち上がるを、木の頭。淸三郎、淨慶、向うを見送り、六郎右衞門、向うへ入る、よろしく、拍子、幕。

三幕目　木曾海道妻籠宿の場

役名――俠客、鄕戶の龜四郎。同子分、狼の谷次。同下女、おまつ。金貸し、金八。雇ひ女、おかう。奴、義助。駕籠屋福平。同、岡六。谷次女房、お梅。質屋喜八。

本舞臺、三間の平屋體。長床几を並べ、よき所に土竈、煮物の出し臺、軒に辨慶を吊し、向う、反古貼りの障子屋體。この前、御嶽講中月參りの札を掛け

並べ、上の方、筋違ひに建仁寺垣。大臣柱の際に丸石を積み上げ、上に埒を結び、下手、藪疊、松の立ち木。この前、馬繋ぎの杭。掛け行燈に妻籠驛、立て場、幾久屋と筆太に記し、爰に雇ひ嫗おかう。さんすいなる形にて椽端に繼ぎ物をして居る。金八、日歩貸しの拵らへ、脚絆がけにて立ちかゝり居る。木曾の掛け橋の馬士唄にて幕明く。

金八　コレサ、そんな得手勝手な事を云つて濟むものか。今日で幾日、こんたの內へ行くと思ふ。おれも僅かな金を日なしに貸して、こんたのやうに橫ッ倒しを云ふのを聞いちやア居られねえ。サア、今返しなせえ。出來ずば、出る所へ出て、しらちを付けるのだ。

かう　付けるとも、預けるとも、勝手にしねえな。この節は、三文の慰みも出來ねえから、おいらのやうな博奕場の步きをして居る者は、あがッたり大明神だ。これから堅氣な商買を見付けて、工面の直るまで野暮を云はずと、おいらに預けたと思つて居な。

金八　オヽ、預けるは預けるが、爰の內へ預けて、お代官に願はにやアならねえ。サ、爰の御亭主に逢はう。

かう　いくら逢ひたくつても、一昨日の晩に出たつきり、今に歸らねえよ。

金八　爰の亭主の名は、なんと云ふ。

かう　狼の谷次と云ふ、實體な男よ。

金八　エヽ、惡黨の谷次か。イヤ、あの男がいつ爰へ。

かう　先月、この建て物を買つて出たが、未だその金を濟し切らなくつて、每日の催促だ。おれを預けるには、金の十兩も貸してやつてからでなくつちやア、話しにならねえ。もう今に歸つて來るだらうから、一服のんで居てやんねえ。

金八　イヤ、眞平だ。狼の谷次なら、いとゞ貸しのある上へ、借りられて堪るものか。爰を放して下せえ。

かう　イヤ、放さねえ。

ト爭ふ。此うち上手より莨屋喜八、町人の形にて、駕籠へ乘り、居眠つて居る。上に割掛けの荷を附け、福平、岡六、人足にて舁いで出て

福平　姉御、なんだ。大槪の事なら、料簡してやんねえ。

かう　あんまり太え事を吐かしやアがるから。

金八　どつちが太えか。

岡六　コレサ、あやまつて、早く行かつせえ。

金八　どうしてくれう、待つて居おれ。

ト橋がゝりへ入る。此うちおかう、茶を酌み、持ち出て

かう　おへねえ唐變木だなう……モシ、お茶一つお上がりなされませ。

ト福平、岡六、取つて呑み

岡六　棒組、客人は、ひだるくつて、目が廻ると云はしつたつけ。

福平　さうよ。起して、晝飯にありつかう……モシ、お客さん、立場へ參りました。

兩人　御膳をお上がんなさいませ。

喜八　オイ〳〵、煮〆めの代りを、早く持つて來てくれ。

かう　エ、煮〆めとはえ。

ト喜八、目を覺まし

喜八　ハ、、、わしとした事が、御飯を喰つて居る夢見て居た所を、起されたゆゑ。

福平　ハ、、、、その筈だ。お前さん、ひだるい〳〵と云つて居なすつたから。

岡六　オイ、客人に、早くお茶漬を持つて來て上げてくんねえ。

ト橋がゝりより、歩き一人、走り出て

歩き　オイ〳〵、おかうどの、庄屋樣が、急に用事があるから、呼んで來いとよ。早くござれ〳〵。

かう　エ、、今の唐變木だらう。

まき　サア、ござれと云ふに。

トおかうを連れて、橋がゝりへ入る。

喜八　これでも立場か。

岡六　ヘイ、新見世でござります。

喜八　こんな薄穢ねえ新見世があるものか。

福平　イエ、內は穢ないが、この頃買つて出た素人でござります。

喜八　イヤ、とんだ目に遭ふもんだ。お負けに素人で、どんな物を喰はせるか知れねえ。マア、なんでもいゝから、早く出して下せえ。

福平　畏まりました。棒組、奧へ行つて、底を入れよう。

岡六　さうせう……旦那、直に出させます。

ト兩人奧へ入る。

喜八　直にもよく出來た。內も綺麗で、喰ひ物も旨い物を喰はせる見世へお進れ申すなんのと、忌々しい奴等だ……イヤ勿體ない。今日は嬶の百ケ日の逮夜だ。大精進をしてやらねばならぬが、道中の事ゆゑ、自由にならぬ。

それにつけても、なぜ嬶は死んでくれたなア。あのやうな氣立てのよい女房は、又とあるまい。モウ〳〵、妹のお靈めに聟を貰つて、おれは一生やもめ暮らし。それにしても、夢になりとも、女房に逢ひたいもんだなア。

トお梅、ゆきたけの合はぬ、そぼろなる男の着附けに卷き帶の拵らへ、髮を亂し、安下駄を穿き、奧より膳拵らへして古土瓶を提げ、出掛け居て

うめ　御膳をお上がりなさいませ。

喜八　ア、愕り……ヤアお主は……イヤ、おらが女房は死んで、今日百ヶ日の逮夜。

うめ　なんぢややら、氣味の惡い。

喜八　ア、コレ、姐さん、わしが愕りした譯を聞いて下さい。わしは、鎌倉淺草の田原と云ふ所で、煙草屋喜八と云ふ者だが、大事の女房に死別れ、遺言ゆゑにあれが在所の、醒ヶ井まで白骨を持つて行つて戻つて來たが、百ヶ日の逮夜……モシ、氣にかけさつしやるな。その女房に生寫しのこなさんに出合うたゆゑ、愕りした。これでひだるかつたも、宿替へしました。一體、お前は、この近所の生れかえ。

うめ　サア、爰から遙か隔つた所の者でござりまするが、仕合せが惡さに、いろ〳〵の憂き艱難、お察しなされて下さりませいなア。

喜八　不愍な事だが、今の若さに、その身形。併し、人間は、辛抱が肝心、不實にさへせねば、今の艱難は、昔語りになりますわいの。

うめ　なんのマア、便りにする人はなし、一生浮む瀬はござりませぬわいなア。

喜八　それでもお前、亭主が。

うめ　サア、あるやうで、ないやうで……ホ、、、、それはさうと、鎌倉から百里餘りの道を、お内儀さんの遺言を守つて、お骨を醒ヶ井まで、持つてお出でなさんす眞實。でもマア、優しい……さぞ、草葉の蔭から、嬉しう思うてゞござんせう。

喜八　外聞の惡い事だが、もうあのやうな、氣立ての女房を持つ事はならぬと、懇ろに弔らつて、一家親類へも筐を分け、あれが伯父にも隱居料に、田地でも買つてやらうと、三十兩ばかり持つて行つたら、その伯父貴も亡くなられ、その金を持つて歸る程の、不仕合はせでござるわいの。

うめ　ほんにマア、さうしたお方と、一日でも夫婦になつ

たら、死んだ跡まで、さぞマア嬉しう……オヽ、御膳を盛り替へて上げませう。
喜八　イヤ、勿體ない。茶漬にしてやりかけませう。
　ト茶をかけ、飯を喰ひ
もう少し。
うめ　ほんに、お構ひ申しませんで。
　ト盆を出す。喜八、お梅に見惚れ、氣を替へて
喜八　輕くおくんなせえ。
　ト替へる。傳がゝりよりおかう、出て來り
かう　あて事もねえ。借りた物を返す、べら坊があるものか……オヤ、お梅さん、まだ髮を結はねえのかえ。
うめ　一昨日の晩、醉つて歸つて、鏡臺も櫛道具も、打ち毀して、捨てられたわいなア。
かう　あの宿六の谷次野郎がゝえ。マア、斯う云ふ立派な女房を持つて、古着でも着せる方角もなく、おんぼろを着せて置く上に、櫛道具を叩ッ毀すのなんのと、罰の中つた奴だねえ。ほんに、亭主に甘い詞をかけると、のさばつていけるものぢやアねえ。ハヽヽヽ。
喜八　イヤ、夫婦合ひの事は、餘所目からなんとも云はれぬものでござる。

うめ　なんのマア、元々勤め先の主人は元より、わたしにも得心させず、無理往生に連れて來て、無慈悲な事ばつかり。
喜八　ハア、そんなら、お前はこの近所に。
うめ　サア、それとてもやう／＼去年の冬から。
かう　ほんにねえ。母さんの病氣ゆゑ、思ひもつかねえ宿場へ賣られ、爰の宿六が年季を踏み、女房にしたところはよかつたが、箸にも棒にもかゝらぬ惡黨。親分に油を取られたら、少しは嗜なむだらう。
うめ　イエ、矢ッ張りわたしが告げ口をしたと思うて、どのやうな目に遭はすも知れぬわいなア。
　ト奥より駕籠舁き二人、出て來り
福平　旦那、大きにお待遠でござります。
岡六　そろ／＼。出かけませうか。
喜八　エ、わしはまだ爰に……イヤサ、日中は駕籠でも行かれぬ。それだけの賃は上げる程に、晝寐でもして行かつしやれ。
福平　それは有り難うござります。
岡六　ほんに、斯う云ふ情深い客人ばかり乘せて、年中商賣がしてえなア。

ト上手より狼の谷次、田舎道樂者の拵らへ、後より義助、旅形、中間の拵らへ、首に、狀箱を掛け、出て來り

義助　ちよつと摺れ違つた位では、お姿が變つて居るゆゑ。

谷次　ハヽヽヽ、お姿もねえものだ……ヤイお梅、この客人に飯を進ぜろ。

うめ　アイ、いま生憎。

谷次　ナニ、飯がねえ。それでも、爰に居る客が喰つたぢやアねえか。

うめ　直ぐに、後を仕掛ける程に。

谷次　エヽ、早くしやアがれ。

義助　下郎めなら、いま晝飯を致して參りました。

谷次　今夜は此方へ泊つて行くがいゝ。それぢやア、阿母もまだ死なねえのだな。

義助　サア、當年は丁度七十にて、賀のお祝ひもなされたれど、勘當した弟の谷次が、居つたらばとの仰せ。併し若黨の佐平が、須藤さまより承つて、お在所が知れましたと申すもの。若旦那、これが日置谷之進さまの弟御か。情ないお姿におなりなされましたなア。

谷次　そんな事は打ッちやつて置いて、須藤や彥坂から、內狀でもことづかつて來たか。

義助　サア、殘らずこの狀箱に入れてござりますが、佞人の六郎右衞門さまからの御狀、ろくな事ではござりますまい。

谷次　エヽ、なんであらうと……オヽ、若い衆、いゝ加減に客を乘せて行かねえのかえ。

うめ　サア、少し風を入れてお出でなさるとて。

谷次　べら坊め、四十や五十の茶漬を喰はれて、見世をふさげられて、ましよくに合ふものか。行け。行きやアがらねえと、此奴等は

ト割り木を取つて、振り上げる。

うめ　お前もマア、若い衆さんに、

谷次　どけと云ふに。

トお梅、ちよいと止める。喜八、後向きに駕籠に乘る。

福岡　ア、モシ、それでは勝手が。

喜八　イヤ、斯う乘るのが、わしが勝手。

谷次　錢を取つたか。

うめ　エ。

喜八　オヽ、恟りして、つい忘れた。ソレ、茶代とも、當百二枚。

ト出す。
うめ　これはマア、お氣の毒な。
ト取る手を、ちよつと押へる。
谷次　まだ行きやアがらねえか。
福岡　いま行くところだわな。
ト舁き上げ、向うへ入る。お梅、伸び上がり、見送る
こなし。此うち谷次、狀箱を明け、狀を二三通出し
谷次　こりやア阿母の愚痴の手紙。先づ、須藤からの狀が
肝心だ。
義助　エ、勿體ない。
ト谷次、封を切つて讀む。おかう、谷次の氣をかね、
お梅の袖を引き、谷次へ指さし、ちよつと囁く。お梅、
茶を酌み、不承々々に、義助の前へ出し
うめ　お茶を一つ。
義助　ア、お構ひなさるな。
ト取らうとして、狀の上へ取落し
うめ　ほんに麁相を。
谷次　この女め。
ト立ちかゝる。おかう、お梅を引き廻し、義助、谷次
を止める。

うめ　アレ、堪忍して下さんせいなア。
ト泣き落す。この仕組みよろしく、馬士唄にて、道具
ぶん廻す。
本舞臺、正面、筋違ひに茅家の横手、中窓、庭口の
開き戸、所々に立ち木、榎の吊り枝。上の方、門口。
下手、藪疊。臼挽き唄にて、道具、納まる。
ト右の唄にて、向うより以前の駕籠に喜八乘り、福平、
岡六、舁いて出て、舞臺へ來る。後よりおかう、追ひ
駈け出て來り
かう　オヽイ〳〵、客人の忘れ物があるよう〳〵。
喜八　何も忘れた物は、なかつた筈だが。
ト　おかう、舞臺へ來り
かう　この手紙は、お前さんの懷中から、落したのでござ
りませうと、お梅さんが氣を揉んで、早く持つて行つて
上げてくれと云ふゆゑ、直ぐに追ッ駈けたけれど、色氣
のねえ早い足だなう。
福平　それだつて、商賣だもの。
喜八　アヽ、今うろたへたゆゑ、懷中から落したのであら
う。よく深切に、持つて來て下すつた。

ト喜八、受取り、何心なく開き見て

二便に申し上げ候ふ、須磨清三郎が越度となり候ふ與道子が墨讃の雲龍の一軸は、京橋稻野屋と申す家へ、五十兩の質物に入れ置き候ふ、念の爲め、御斷わり申し上げ候ふ以上……これはわしが落したのではない。併し、須磨清三郎さまは、大恩ある古主の若旦那。

かう　ハテ、それぢやア、あの奴どのかしらん。

喜八　イヤ、ほんにこりやア、わしが落したのだ。

ト卷いて、懷中し

つかん事を聞くやうだが、今あそこの立場へ歸つて來た人が、あの女中の亭主かえ。

かう　お聞きなせえな。あの子はね、去年の暮に、落合の宿へ女郎に賣られたを、あの狼の谷次と云ふ野郎が、元にもならぬ金をぶッつけて引き上げ、あんな賣り店を買つて、見世は出したが、今のやうな事を吐かすから、人足手合ひも寄らねえ勝ち。あんな面の憎い奴があるものかね。

福平　イヤ、それでも、親分の云ふ事を背かねえのは、奇妙だな。

岡六　その筈だ。彼奴が、鎌倉からぶらの三で來たのを、龜四郎親分が引き上げて、今ぢやア鄕戸の子分風を吹かせて居るからだ。

喜八　成る程、鎌倉までも、名は聞き及んで居る鄕戸の龜四郎。さう云ふ男なら、なんの事でも賴んだ日には、後へ引く事はござりますまいな。

福平　受け込んだ日にやア、仕負ふせねえ事のねえ親方せ。

喜八　さうして、その龜四郎親方の內へは、爰から餘ッぽど遠方でござりますか。

福平　ナニ、爰が、その親方の內の前だわね。

喜八　ヘエ、アノ、この內が……わしは、その親方にお目にかゝつて、賴みたい事がありますが、爰で別れて下さらぬか……ツレ、爰に、當百三枚、これで一杯呑んで下さい。

岡六　こりやアお氣の毒な。行く所まで行きもしなくつて。

福平　左やうなら、お貰ひ申して。

喜八　コレ、お前には、まだ賴みたい事がある。

岡福　左やうなら、わたしどもは、お暇いたします。

ト空駕籠を舁いて、橋がゝりへ入る。喜八、懷中より櫻銀を一つ出して、紙に捻り

喜八　これは、あんまり失禮だが、お禮でござります、

かう　オヤ〳〵、こんなお心遣ひ、受けやうとて來ません
　わね。
喜八　ナニ、僅かばかりだ。
かう　有り難うございます。それはさうと、お前さん、龜
　四郎親方は、お心安いのでございますかえ。
喜八　イエ、逢つた事はないが、お前方の話しに、谷次ど
　のは、親方の云ふ事なら聞くとの事ゆゑ、お目にかゝつ
　て、頼まうと思ひ。
かう　そりや、何をえ。
喜八　小ッ恥かしいが、あの内儀に惚れました。
かう　エ。
喜八　頼まれた事、後へ引かぬお人と聞いたゆゑ、わしが
　存念打明けて、お前さん、親方へ頼んでは下さるまいか。
かう　そりやア、近付きにするは雜作はないが、道の眞直
　な事でなければ、受け込まぬ親分ゆゑ、今の事は請合ひ
　憎いね。
喜八　ハテ、聞入れさつしやれずば、それまでの事。何分
　お頼み申します。
　　トおかう、門口へ行き
かう　おまつどん、親方さんは内かえ……さうかえ。モシ。
　親方さんは内でございますとサ。
喜八　そんなら、直ぐに。
かう　サ、斯うお出でなさい。
　　ト歩む。これにて道具、逆に廻る。
　本舞臺、三間の間、常足。向う赤壁。上手、押入れ、
　納戸口。上の方、落ち間、手水鉢、石燈籠、軒に吊
　り忍を掛け、下手、以前の中窓の羽目。庭口の開きは
　正面に向き、門口、いつもの所へ直り、爰に下女お
　まつ、焜爐を煽ぎ居る。右の唄にて道具、納まる。
　　ト此うち、廻しに付いて、兩人、内へ入り
かう　おまつどん、親方さんに、鎌倉のお方がお願ひがあ
　つて、わざ〳〵上がりましたが、どうぞお逢ひなすつて
　おくんなさいませと、云つてくんな。
まつ　さう云へばいゝのだね。
　　ト奥へ入る。喜八、當百二枚、紙に包み
喜八　お前さん、大きに御厄介でございます。莨でも買つ
　て下さいませ。
かう　エ、また二百、オホヽヽヽ、およしなさればいゝ
　に、お氣の毒な。有り難うございます。ドレ、わたしが

ちよいと親方を。

　ト立ちかける。奥にて

龜四　イヤ〱、來るには及ばぬ。今、そこへ行くところだ。

　ト奥より龜四郎、老けたる拵らへ、大形の浴衣、扱帶形にて、莨盆を提げ、團扇を持ち、出て來り

おかうか、この頃は隨の道だな。

かう　大きに御無沙汰いたしました。ちよつと云ひ譯に來ようと思つても、敷居が高くなつて。

龜四　べら坊め、僅かばかりの事で、來ねえで居られちやア、此方が不自由だ……それはさうと、このお方は。

喜八　親方には、お初に、お目にかゝりました。私しは淺草の田原町に居りまする、煙草屋の喜八と申す者でございますが、折入つて、お願ひ申したい事がございまして、上がりましてございます。

龜四　これは〱、以後はお心安うお願ひ申します。

喜八　サテ、お前さんをお見かけ申して、お願ひに上がりましたは……どうも、ちと申し上げ憎い事で……今日は、お暑い事でございますなア。

龜四　アイ〱。云ひ憎い事……ア、、なにかえ、路銀でも貸してくれろと云ひなさるのか。

喜八　イエ、金子は、路用の外に餘分も持つて居りまするが、どうもハヤ……ネエ、お前さん……お暑い事でございますなア。

かう　ナニ、此お方がお願ひ申したいと云ふは、アノ……どうもわたしには。お暑い事でございますなア。

龜四　エ、、てめえまでがおんなじやうに、そんなに云ひ憎い事なら、てめえ達、茶が出來たら、土瓶ごと爰へ置いて、奥へ行つて居や。

　ト茶の土瓶と茶碗を出し

かう　ほんに、さうしませう……ハ、、、、おまつどん、來なさんせ。

　トおまつを連れて、奥へ入る。

龜四　サ、、邪魔は拂つた。わしに頼みたいと云ふ仔細は。

喜八　ヘイ、女子の事でございます。

龜四　ア、解つた。いま奥へやつたおかうを、貰ひてえとでも云ひなさるか。そりやア丁度いゝ。口はしやべるが心に惡氣の

喜八　イエ、あのお人ではございませぬ。思ひ切つて申しませう……この後の立場の、谷次どのとか申す方のお內

儀を、フッと見ますと、ぞつこんから……へ、、惚れましてござります。

龜四　エ、。

喜八　サア、人樣のお內儀へ、惚れたとは勿體ないが、私しが女房は醍ケ井の者でござりましたが、私しが須磨と申しまする鎌倉の屋敷へ、若黨奉公いたして居りまする頃より、云ひ約束いたしまして、丁度五年添つてこの夏、病死いたしましたところで、とひ弔ひも念ごろに致し、只遺言で白骨を遙々持ちまして、里方の菩提所へ納め、只今戻りでござりますが、今日が丁度百ケ日の逮夜でござります。どうぞ、彼奴に夢にでも逢ひたい〳〵と、思ひ詰めて居る所へ、あの立場のかみさんが、によいと出しました。

龜四　そりや、なにをえ。

喜八　イエサ、御飯を……そこで、顏を見ると、死んだ女房に生寫し。恟り致して胸がどき〳〵、お察しなすつて下さりませ。併し、今の女中に樣子を承りますれば、亭主持ちだとの事。そこで、お前樣へお賴み申したいは、私しも一生の思ひ出でござります。どうかあなたの子分衆の內儀の事ゆゑ。

龜四　エ、。

喜八　例へ、枕は交さずとも、一夜を側に居てくれさへすれば、女房の爲に持つて參つた、金子が三十兩ござります。これを差出しまするから、どうか私しの念を、晴らさせて下さりますまいか。

龜四　成る程、段々の入り譯、正直なこなさんの心底を聞き切つて、さうはなるめえと、沒義道に斷わられもしめえ。骨を折つて、こなさんの望みは叶へて進ぜませう。

喜八　エ、、忝ない〳〵、結ぶの神の親方樣、有り難うござりまする。

龜四　マア〳〵、そんなに喜ばつしやるな。子分と云へど、おれも一生にねえ横車を押して見るのだから、マア、今夜はおらが內に泊るとして、奥の小座敷は木曾川が見えて涼しいから、寐轉んで、ゆつくりして居なせえ。野郎を呼びにやつて、すびいて見た上の事だ。もしこなさんの體へ、凶事でもあるやうな事が出來たら、お互ひに詰らねえから。

喜八　イエ、あの女中に一晚でも、添ひ寐してもらひまする事なら、少々疵をつけられましても。

龜四　イヤサ、賴まれたおれが、面が立たねえ。

喜八　御尤もでございます。

龜四　おまつやい、ちよつと來や。

　ト奥よりおまつ、出て來り

まつ　ハイ。

龜四　この客人を、奥の四疊半へ連れ申して、みんなに逢はせねえやうにしろ。湯が沸いたら、おれより先へ入れ申せよ。

まつ　お湯は、もう沸きました。

喜八　それは有り難うございます。

まつ　ドレ、お荷物をわたしが。

喜八　これは憚り。

まつ　サ、斯うお出でなされまし。

　ト喜八、いそ〳〵こなし、割掛けをおまつ抱へ、案内して奥へ入る。

龜四　イヤ、とんだ事を脊負ひ込むものだ。

　ト橋がゝりより、捨ぜりふにて谷次先に、金八出て來り

谷次　それだから、十兩貸してくれたら、その中で先の元も利も勘定すると云ふに。

金八　イヤ、先の勘定を立てゝしまはにやア、誰れが貸すものか。

谷次　そんなら、勝手にしやアがれ。

金八　勝手にしなくつて。今に見ろ、どうするか。

　ト引ッ返して入る。

谷次　間抜け野郎やい。

　ト門口を明ける。

龜四　谷次ぢやアねえか。何をごてつくのだ。

谷次　ヤニ、ちつとばかりの事を催足しやアがるからサ。

　そりやアさうと、今日、鎌倉から客が來ましたが、どうか蚊帳を一張り、貸しておくんなさいませ。

龜四　オヽ、客人なら、蚊帳も蒲團も、後から持たせてやらう。そりやアさうと、どうだ、この頃は見世は忙がしいか。

谷次　ナニ、水も呑める事ぢやアございません。春から四五十兩も喰ひ込んだし、何所へ出ても拍子が悪くつて、所詮、立ち切れやせんから、又あの女を二三年も、飯盛りに叩き賣らうと思つて、掛合つたところが、三年十五兩だと云ふから、どうせうと思つて居やすのサ。

龜四　さうサ。押出しはいゝが、商賣にれねえ玉だから。

谷次　太田へ掛合つたら、七明け一ぺえなら、三十兩出さ

うと云ふから、騙かして叩き賣らうと思つて居やすよ。
龜四　可哀さうに、そんな酷い事もなるめえ。
谷次　ナニ、當り前でございまさア。
龜四　賣るも賣られるも、時の運り合せだから仕方がねえが、惡い病氣を受けた日にやア、われも一生の擔ぎものだ。
谷次　ナニ、どうせ賣るからにやア、捨て物だ。又どんな閉ぢ蓋でも見付けて來ますワ。
龜四　フム、その料簡なら、たつた今、三十兩耳を揃へて、お主の手へ入る相談があるが、夫婦の事を、親分風を吹かせて、云はれやアしねえが、一晩、あのお梅を人に抱かせて寢かしちやアくれめえか。
谷次　そりやア、ほんの話しかえ。
龜四　包み隱しもしねえ。先刻、お主が見世で晝食をした實體の旅人だが、死別れをした女房に似て居るゆゑ、一晩添ひ寢をしたら、即金三十兩出しますと、段々譯を聞けば可哀さうな話し。今あの女を賣つて、三十兩拵らへようと云ふ程なら、一晩目を瞑つておれに預けりやア、三十兩受取つてやる。さうすりやア、外に知る人もなし、夫婦とお外聞がいゝと云ふものぢやアねえか。併し、無理にとは云はねえから、嬶アともよく相談して、返事をしやれな。
谷次　ハ、、、、。ナニ相談どころか、直ぐに行つて、しよびいて來やす。

ト立ちかける

龜四　ア、、コレ〳〵、てめえのやうな無闇な事を云つちやアいけねえ。あれも女だ。世間體もあるもの。その上、氣も知れぬ者に抱かれて寢る事だから、なんと返事をするかも知れねえ。
谷次　ナニ、苦界をして來た奴だから、野暮も云ひやすめえ……併し、金は間違ひはしますめえね。
龜四　ハテ　受取らねえうちは、指でもさゝせはしねえ……オイ、おかうやい、ちよつと來てくれ。
かう　ハイ〳〵。

ト出て來り

オヤ、谷さん……ハ、、、、、いゝお天氣だね。
谷次　べら坊め、今にも降つて來さうな天氣だ。
龜四　マア〳〵、天氣はどうでもいゝや。今日、內の奴が里へ泊りがけに行つたから、着替へを持たせて遣らうと包んであるが、今、お梅を呼びにやるのだから、あの風

呂敷包みを抱へて行つて、お主、髮でも結んでやつて、あれを着せて、一緒に連れて來てくれえ。

かう　それだから、今朝ッから髮を結ひなせえと云つて置いたに。

トおかう、包みを抱へ

サア、早くお出でな。オヽ、降つて來た〳〵。

谷次　ソレ見やアがれ。この傘を借りて

かう　道行かえ。

谷次　つらア見やアがれ。

ト相合傘にて、足早に向うへ入る。

龜四　金づくとは云ふものゝ、うぬが女房を人に抱かして寐かすか、さもねえ日にやア、年一ぺえに叩き賣る料簡、不人情な奴もあるものだ。それに引替へ奧の客人、死んだ連合ひに似て居ると云つて、一晩側に置いてくれたら三十兩と云ふ金を出さうと云ふ。それも何ゆゑ、夫婦の愛情。斯うも氣風の違ふものかなア。

ト暖簾口より喜八、覗いて、奧へ入り、また出かけて

喜八　親方さん〳〵。

龜四　オヽ、お前は客人。いま返事をしようと思つて居たところだ。喜びなせえ。

喜八　エヽ、解りましたか。

龜四　それとなしに谷次に巧く相談したゆゑ、心措きなく、今夜女は勝手次第。

喜八　エヽ、有り難い〳〵。

龜四　時に、立入つたお話しだが。

喜八　サア、その金子をお渡し申さうと、茲へ出しかけて置きました。

龜四　併し、斯う云ふ事は、後々の間違ひになるものだ。わしが方からも書付けを上げるから、お前の方からも、一晩きりで後々へ心が殘らぬと云ふ、書付けを書いて下さい。

喜八　エヽ、書きますとも〳〵。

龜四　サヽ、わしもお前に。

トあたりの硯を引寄せ、兩人、向ひ合ひにて書きにかかる。向うよりおかう、傘をさし、お梅、髮を結ひ直し、着附けを着替へ、悄れて出て來り

かう　お前も、あんな奴を守つて居ると、どんな目に遭ふか知れない。人は見切りが肝心だわね。

うめ　サア、さうではござんすが、もう一遍、内へ戻つて、あの人に相談して。

かう　アレ、それぢやア、深切な親分の心を無にすると云ふもの。なんでもいゝから、お出でよ。

トお梅を無理に引ッ張つて、舞臺へ來り

親方さん。

龜四　おかうぢやアねえか。

かう　どうも、愚圖々々していけないわね。

喜八　參りましたか〳〵。

ト硯と書き物を持ち、うろ〳〵する。龜四郎、喜八に囁き、喜八は三十兩を渡し、硯を持ち、奥へ走り入る。

龜四　コレ、内へ入らねえか。

かう　サア、親方が氣を揉んで居さつしやるわね。

ト無理にお梅を内へ入れる。

龜四　ヨウ、綺麗〳〵。サテ、おかうにも一通りは聞いたらうが、何を云つても、谷次が行き詰つたと云ふからのこの相談。得心してくれると、三方四方いゝと云ふもの。無理な頼みだが、初めてお主へおれが願ひだ。どうぞ得心しちやアくれめえか。

うめ　元を糺せば、わたしら夫婦の爲を思つて仰しやる事、なんの否は申しませぬが、内の人があの氣質、後で又、いろ〳〵な事を。

龜四　イ、ヤ、云はせねえ。金を渡す時は、書付けを取つて、嫌味辛味はおれが請合ひ。

うめ　それ程に仰しやる事、なんの否を申しませうぞいなア。

龜四　ヤレ〳〵、それで大荷を下ろしたと云ふものだ。時におかう、これから先は野郎ぢやア極りが悪い。てめえ、そこをいゝやうに。

かう　アイ、呑み込んで居るわいなア。

龜四　そんならお梅、氣の毒ながら。

うめ　ハイ。思はぬ緣に繋がれて

かう　あんな邪慳な亭主を持ち

龜四　ひよんな苦勞も、これも約束。

うめ　どうせ穢れた

かう　エ。

うめ　諦めて居りますわいなア。

トこの仕組みよろしく、道具ぶん廻す。

本舞臺、中足、本緣付き、大和葺きの亭屋體。向う、茶壁。眞中、出入り口、障子の明け建て、上下も建仁寺垣。この前、朝顔の四つ目垣。二重、上手に喜

八、割掛けの荷を結び直して居る。眞中に酒肴を取散らし、短檠を照らしあり。合ひ方にて道具納まる。

ト奥よりおかう、お梅の手を引き、お梅は悄々として出て來り

かう　なんだね、お梅さん。お客人の所へ來るまで、そんなに濟まない顏をして……モシ旦那、連れて參りましたよ。

ト喜八は始終、ソワ〳〵して居て

喜八　オヽ、これはおかみさん、大きに厄介になりましたなア……お前さん、よう來て下された。

うめ　ハイ。

かう　なんだね、まんざら知らねえお方ぢやアなし、もつと其方へ寄つて、お猪口でもお持ちな。

うめ　ナニ、わたしが知つたお方とは。

ト喜八の顏を見て

オヤ、お前さんは。

喜八　先刻には、いろ〳〵お世話になりましたに、また今晩も、ようこそ爰へ。

うめ　そんなら、親方さんのお話しのお方と云ふは。

かう　この旦那だよ。

喜八　お前さん、迷惑であらうが、思ひ込まれたが因果と思ひ、話しの相手になつて下さい。

うめ　なんの迷惑な事がござりませう。わたしの思ひが屆いたやら。

喜八　エ。

うめ　イエ、ナニ、よう御深切にお呼び下さりましたわいなア。

かう　サア、旦那、お燗がよいから、一つお上がんなさいませ。

ト猪口を出す。

喜八　イエ、酒は大分下手でござります。

かう　アレマア、あんな嘘ばかり。

ト注ぐ。

喜八　なんの嘘を吐きませう。ア、こぼれる、勿體ない、一粒萬倍々々々々。

トこぼれた酒を頭につける。

かう　サア、お近付きの爲に、あの子へ。

喜八　これは憚りを申します。

トうぢ〳〵して出す。

かう　お前はなる口だ。マア二三杯あふつて、都々一でも

やらうぢやアないか。
ト注ぐ。お梅、呑んで
うめ　左やうなら、御返杯いたしまする。
喜八　ハイ〱、有り難うござります……明日はどうか、
茶漬でもよいから、早く立たせて下さい。
かう　お辨當も詰めて置きませう。
喜八　草鞋を一足取つて下さい。何より旅籠の勘定を。
かう　モシ旦那、爰は宿屋ではありませんわね。
喜八　オヽ、ほんにさうだつけ。ハヽヽヽヽ。
かう　ほんにわたしとした事が、夜の短いに、御酒はまた
後の事にして、爰へお床を廻すとしませう。
喜八　アヽコレ、勿體ない。
うめ　おかうさん、わたしが取りますわいなア。
かう　お前は今夜は花嫁同然。
ト上手へ蒲團を敷き、喜八を蒲團の上へ坐らせ、お梅を側へ突きやる。
たんと、お樂しみなされませ。
うめ　おかうさん、お前には話しがある。爰に居て下さんせ。
かう　アイヨ、わたしはお腹が北山だから、このお肴をちつと貰つて、茶づッて來るから、ちつと横におなりよ。
ト小皿へ肴を取る。
喜八　アヽコレ、お前が行つては。
かう　ナニ、直ぐに來ますわね。
トついと奥へ入る。
喜八　アヽ、まだ頼みたい事が。
トお梅と顔を見合はせ、身慄ひして思ひ入れ。
うめ　さぞ御迷惑でござりませうなア。
喜八　アレ、また勿體ない事を……大層むし〱して來ましたねえ。
うめ　そりやアその筈、最前お話しのお内儀さんの側にお出でなされたなら、お氣もせい〱となさんせうが、わたしのやうな田舍者、暑くろしいは知れてあれど、これもなんぞの因縁でがなござんせう。銀の代りに鉛のわたし、どうしてお氣に入らうぞいなア。
喜八　アヽ、勿體ない〱。銀の代りに金無垢のこなさん、一目見るより心も空。有やうは、わしとてもその日稼ぎ、これまで夫婦かけ向ひで、葉取りも切りも夜鍋かけ、女房は外へ出商ひ、嬶ア莨と人樣が、贔負に買つて下さつて、僅かな金も嗜なんで、氣樂に暮らした夫婦仲。その

大切な女房と、瓜を二つのお前ゆゑ、こりや惚れずには居られまいがな。

うめ　サア、それも最前お前の話し、座興と聞いては居たれども、それがもし、誠の事なら女子冥利、さうした實のあるお方と、一生連れ添ひ暮らしたら、さぞ樂しみであらうものと、羨やましう思うて居たわいなア。

喜八　アヽ、これが自由になる事ならなア。

うめ　二世とは愚か、盡未來

喜八　と云ふ事ならぬ、お庭の櫻。

うめ　今宵一夜の

喜八　花と詠めて

うめ　ほんに果敢ない。

トこの時、指し金の鼠、天井より行燈の上へ落ちて、明り消え、鼠は駈け廻りて入る。お梅、恟りして、喜八に寄り添ふ。

喜八　エヽ、恟りした。明りを消して……ア、鼠か。

うめ　アレ……寐るのぢやわいなア。

トこの仕組みよろしく、道具ぶん廻す。

本舞臺、元の道具に戻る。爰に龜四郎、浴衣を着替へ、湯上がりの體。おかう、煽ぎ立てゝ居る。合ひ方にて道具納まる。

かう　親方、素敵と骨が折れましたが、マアどうか、いゝ鹽梅らしうござります。

龜四　それは大きに御苦勞であつた。てめえも湯へ入つてしまやれ。

かう　そんならちよつと、汗を流して來ませうよ。

ト下手の横手へ入る。

龜四　あんな奴もなくつちやア、困るものだ。ハヽヽヽ。

ト暖簾口より、お梅、しどけなき拵らへにて出て來り

うめ　親方さん。

龜四　オヽ、お梅か。一晩の事だ、我慢して側に居てやつてくれゝばいゝに。

うめ　イヽエヽ、ナア、よう譯を云うて來たのぢやわいなア。改めて、お前さんにお願ひ申したい事、また聞きたい事がござんして。

龜四　フム、頼みてえ事、聞きてえ事とは。

うめ　サア、外でもござんせぬ、わたしが身の上。母さんの爲に身を沈め、程なく谷次どのが、得心をせぬものを、無理に女房と押しつけ業。定まる縁と諦めては居るも

初演の繪番附

の、打ち打擲の上に手慰み、仕合せなければその度に勤めに行けと云はるゝ辛さ。さうした邪慳な谷次どのと、打つて替りし喜八さん、わたしをどうぞ、添はして下さりませ。

龜四　フム。そんならお主は、あの客に。

うめ　アイ、惚れました。

龜四　エヽ。

うめ　惚れたと云ふも、浮氣ぢやござんせぬ。たゞ眞實が身に浸みて、一生連れ添ふ心になつたのも、邪慳な夫に遠國へ賣り飛ばされ、親の菩提も弔らはれぬやうになるのが悲しく、それゆゑ道ならぬ事とは知れた親方さんに無理なお願ひ、どうぞ添はして下さりませいなア。

龜四　お梅、よく云ひ憎い事を、思ひ切つて云つた。出かした、尤もだ。龜四郎が命にかけて、添はしてやらう。

うめ　エヽ、そんならあのお人に、添はれるやうにして下さりまするか。

龜四　併し、如何におれが子分だと云つて、われが女房は旅の人に遣つたと云はゞ、よもや料簡する奴でねえ。と云つて、われが云ふのは皆尤も。案じるな、やる所までやつて見せる。何しろ、喜八どのにわれが身の上を、頼まにやアならねえ。

ト奥より喜八、出かけ居て

喜八　様子は殘らず承りました。そんならいよ〳〵お梅どのを、私しに下さりまするか。

龜四　サア、最前はこなさんに、思ひがけねえ事を頼まれ、今度はお梅が無理を合點で頼むを、後へ引かれぬは、先刻此方も見ず知らずの人に、枕を交してくれと、お梅へ頼んだおれが返禮……ナニ喜八どの、便るべき者のねえこれが體、どのやうな事があらうとも、見捨てゝは下さるまいの。

喜八　なにがさて、わしが命のあらん限りは。

龜四　オヽ、それ聞く上は金輪際、何所の何國で谷次に逢ふとも、苦狀を云はせぬ工風もとつくりして置いた。ソレ、この金は……先刻の三十兩、これは谷次へ約束通り渡し……また、爰に十兩。

ト莨盆の抽出しより金包みを出し

これを五兩づゝ分けて、片々は谷次へ手切れ。このまた五兩はお梅が當座の支度金、これを引手に幾久しく、面倒を見てやつて下せえ。

うめ　何から何まで、親方さんの深いお情。

喜八　仇に思ふと、二人へ罰が中ります。二世も三世も、離れる事ぢやござりませぬ。
龜四　オヽ、それ聞いて、此やうな嬉しい事はない。併し、眞晝間、大手を振つて連れさしてもやられぬ。なんと、これから連れ退いては下さるまいか。
喜八　成る程、お禮はいづれ鎌倉より。
うめ　そんなら、これがお別れでござりまするか。
龜四　ちよつと改めて杯事をしよう。おかうやい、德利と猪口を持つて來てくれ。
　ト奥より
かう　アイ〳〵。
　ト燗德利とすゝぎ鉢へ猪口を入れ、持つて來る。此うち龜四郎、狀を書く。
ドレ、お肴を。
龜四　コレ、肴には及ばねえ。てめえ、これを持つて行つて、谷次に渡してくれ。
うめ　ア、モシ、主が爰へござんしては。
龜四　イヤ、さうねえと、段取りのまづい事がある。
かう　そんなら、行つて來ますよ。
　ト狀を持ち、橋がゝりへ走り入る。

龜四　彼奴を此方へ引きつけて、その間に落すおれが魂膽。サ、お梅、始めて喜八へさしやれ。
うめ　お慮外ながら。
　ト受けて口を附け
どうやらこれは、水のやうな。
龜四　ドレ。
　ト手酌に注ぎ、呑んで
オヽ、こりやア水だ。あのべら坊め。
うめ　ドレ、取替へて。
龜四　イヤ、水でいゝ。この杯は、おれから喜八へ。
　トさす。
喜八　でも、どうやら氣がゝりな。
龜四　ハテ、思ひ立つたら男の一途、外の事は水杯、呑んだらお梅へ。
うめ　そんならこれが。
龜四　この世の別れ。
喜八　エ。
龜四　イヤサ、この夜の更けぬ其うちに、支度が出來たら、ソツと忍んで。
うめ　あの庭口から。

喜八　そんなら親方。

龜四　サヽヽ早く〳〵。

ト三人、愁ひのこなしあつて、お梅附いて、喜八、奥へ入る。龜四郎、押入れより脇差を持ち出て、書置を手早く書き下ろす。向うより谷次、件の手紙を掴み、足早に出て來る。後よりおかう、息を切つて、止めながら出て

かう　コレサ谷兄イ、親分の手紙を見ると、駈け出したのは、お前、どうしたと云ふのだな。

谷次　べら坊め、うぬまでが一緒になりやアがつて。エヽ、放しやアがれ。

ト舞臺へ走り來り、内へ入る。此うち龜四郎、書置を卷きしまひ、谷次を見る。谷次、脇差のあるを見て、後じさりする。

龜四　谷次か。よく來てくれた。急に話す事がある。

谷次　親分、見ず知らずの者や、あの女が頼みを聞いて、子分のおれが顏を潰して、それでこなさん、男と云はれるか。

龜四　イヽヤ、われが顏はおれが立てる。

谷次　腕づくで持つた女房を、譯もねえ奴に引上げられ、なんで男が。

かう　コレ〳〵兄イ、親方に向つて。

谷次　エヽ、なんだえ……サ、その立てやうを、見ようかい。

龜四　オヽ、われへ寸志は、斯うして。

ト脇差を抜き、腹へ突き立てる。

かう　ワアヽ、親分が。

龜四　喧ましいわえ。

谷次　コレ、お前、氣が狂ひはしねえか。

龜四　口をきくな。

谷次　それだと云つて。ヤアイ、皆來てくれ。

ト龜四郎、谷次を引きつけ、行燈吹き消し、谷次の口を押へる。

かう　親方々々、お前、こりや。

ト慄へて云ふ。

龜四　コレおかう、その書置を、女房が戻らば、手渡ししてくれろよ。

かう　アヽイヽヨ。

龜四　靜かにしろ。

ト苦痛のこなしにて谷次の口をゆるめる。

谷次　親分が腹を。

ト云ふを、闇雲に止める。下手の庭口を明け、喜八、頰冠り、脚絆がけ、割掛けを持つて、お梅の手を引き、門口へ來て

喜八　親方様、直さまお暇。

うめ　隨分御無事で。

ト門口を明けかける。

龜四　オヽ、まめで、アイタヽヽ……恐ろしい藪蚊だ。

喜八　ヤヽ、どうやら五晉が。

谷次　さては、二人は。

ト門口へ行かうとするを、龜四郎、手早く當てる。

喜八　お暇いたします。

ト割掛けを肩へかける。龜四郎は門口を閉める。これと一時に谷次、撥とギバをする。これを木の頭

來やれ。

ト愁ひ三重になり、谷次、脇腹を押へ苦しむ。龜四郎、おかうを、引き廻す。兩人は向うへ入る。これをよろしく、

ひやうし幕

四幕目

中の郷枳殻寺の場
在原橋地藏堂の場

役名——筋川源十郎。植村三太郎。鶯坂孫六。金川又八。須磨清三郎。同奴、磯平。大工棟梁、金兵衛。越後屋荷かつぎ、十藏。同、五助。萬屋喜八。

本舞臺、平舞臺。下手、寺の門。これより上手へ筋違ひに枳殻垣。すべて鎌倉中之郷、曲り角の體。爰に素見戻りの仕出し三人、立ちかゝり居る。靜かなる禪のツトメにて幕明く。

仕一　斯う毎晩々々素見に行つちやア、實間寢で、親仁の臑を咬つてゐるのも一德だなア。

仕二　その代り、嬶アの女が年が明くと、目の覺めたやうに稼ぐ積りだ。

仕三　積りはいゝが、稼ぐ所は請合はれねえ。

兩人　嘘はねえ。ハヽヽヽ。

ト向うより十藏、五助、越後屋の荷春負ひの拵らへにて大荷を兩人脊負ひ、三井の小田原提灯を提げ出て來

り

十藏　貴樣が寢ぼけたゆゑ、此やうに一時早く出かけたのだ。

五助　併し、夜明けまでに、梅ケ谷の紺屋へ行けば、暑い目をせぬところが儲けだ。

十藏　近在の紺屋の使ひばかりは、恐れるわい。サヽ、來さつしやい。

ト舞臺へ來り

ヨウ、蠟燭がもう段切れだ。買うて來てくれんか。

五助　何所で賣らうなア。

仕一　オイ〳〵、駿河町の衆、この節は物騷だから、四ツから先は、何所でも商ひはしない。

仕二　まして夜夜中、蠟燭を一本で起きる內はねえ。併し、高荷を脊負つて

仕三　無提灯ぢやア歩けめえ。

仕一　いゝ事があらア。瓦町の番所ぢやア、夜つぴて起て居るから

仕二　在原橋の地藏堂へ荷を下ろして

仕三　一人行つて、買つて來なさるといゝ。

十藏　成る程、よい事を敎へて下さつた。

五助　ほんに、さうしませう。

十藏　イヤ、それにしても、雲霧仁左衞門とか云ふ大泥坊は、まだ捕へられませぬかな。

仕一　どうして〳〵、石川五右衞門この方の泥坊だと云ふ事だ。

仕二　何しろ、わしらは押上の方へ歸るから、一緖に行つて上げよう。

十藏　それは忝ない。氣が丈夫ぢや。

ト上手より磯平、小提灯を提げ出て、この數を一々見る。皆々、氣味惡き思ひ入れにて、足早に上手へ入る。

磯平　若旦那淸三郞さまは、吉原の松葉屋にござらうと、行つて聞いたらおろくさまが……イヤ、今では名が替つて龜菊どの。あのお子が、今お歸し申したとあるゆゑ、龜ケ谷の淺原さまの御門へ行つて內々聞けば、まだお歸りがないとの事。紛れのない一筋道、お目にかゝらねばならぬ急用。爰らで待ち合せて見よう。

ト小提灯を垣根へかけ、どぶ岸の石へ腰をかける。向うより駕籠舁き、四つ手駕籠を舁き出て、舞臺へ來り

駕屋　へイ旦那、からたち寺の前まで參りました。

ト草履を直し、垂れを上げる。內より淸三郞、脇差を

清三　差し、刀を持ち出て
大儀であつた。少しだが酒手に持つて行きやれ。
兩人　これは〳〵、毎度有り難うござります。
ト空駕籠をかたげ、橋がゝりへ入る。清三郎、上手へ
行きかける。
磯平　若旦那々々。
清三　オヽ、磯平か。
磯平　火急の用事ゆゑ、あなたの後を追つて、吉原の松葉
屋へ參りましたら、お歸りなされたとの事。直ぐに淺原
さまの御内で承りましたら、まだお歸りはないとの事。
是非なく爰にお待ち合せ申しました。
清三　駕籠を下りたで丁度出合うた。して、用事とは。
磯平　今日夕刻、重役方より吳道子の一幅、詮議の日延べも
最早五日。然るところ、京橋邊の有徳なる町人の方に、質
物に入れある由。名前は知れねども、金高五十兩との事。
清三郎は家出なし、後家深雪は蟄居同然なれば、金子の
差支へもあらん程に、内々お納戸金六十兩、拜借仰せつ
けらるゝ間、清三郎へ通達なし、早々質請けなし、それ
を功に歸參いたすやうにと、有り難いお慈悲の御内意。
京橋邊とばかりにては、雲を當途の尋ねもの。その上、
元が盜賊の爲に失ひし一幅ゆゑ、持ち手も迂濶に明かし
もせまい。とは云へ、斯程に心付けらるゝ程なれば、も
し日限までに差上げぬその時は、預かり主の御母公樣は
御生害の上、須磨のお家は御改易。
清三　ムウ。
磯平　かゝる大事を身に抱へ、淺原さまの食客でありな
がら、夜毎日毎に廓へ入込み、寳詮議も等閑になさるゝ
とは、情ないお心になりなされましたなア。
清三　サア、さう思ふは尤もながら、この清三郎ゆゑ、春
藤新左衞門が、妹おろくは勤め奉公、義理に引かるゝば
かりでなく、多くの人の出入場所、もしや寳の手がゝり
の知るゝ事もあらんかと、心を付くれど今以て。
磯平　サア、斯う知れた上からは、手を廻して請け戻す工
風が肝心……オヽ、好い事がござります。私しが請け人
は、中橋の上槇町、大工の金兵衞と申す棟梁で、雪の下
界隈は皆出入り場ゆゑ、内々この者を頼み、持ち手を尋
ねてもらひませう。
清三　然らば、直ぐにその宅へ。
磯平　イヤ、淺原さまは物堅いお方、夜明けぬうちにお歸
りなされ、殿のお目覺めを待つて、半日のお暇を頂戴あ

りて

清三　其方と同道いたして、その金兵衞に何かの話しを。

磯平　左やうなされませ……何は然れ、重役方より借用いたした六十兩。

ト胴巻のまゝ出し

サ、お受取りなされませ。

ト清三郎へ渡す。橋がゝりより三太郎、一本差し、手拭を鼻の先に結び、出かけ、この話しを聞き居る。

清三　慥かに受取つた。然らば鎌ケ谷へ歸り、織部どのに暫時の暇を貰うて參らう。

磯平　それがよろしうござりまする。

ト三太郎、上手へ駈けて入る。

清三　そんなら、磯平。

磯平　旦那樣。

清三　氣を付けて來やれ。

磯平　サ、お出でなされまし。

ト先に立ち、清三郎、附いて橋がゝりへ入る。この仕組みよろしく、道具ぶん廻す。

本舞臺、正面、建仁寺垣。此うち、見越しに藪疊、柳の立ち木、同じく吊り枝。上手、大臣柱の蔭へ掛けて橋の欄干。下手に石燈籠、藁葺きの地藏堂。この軒下に十藏、以前の荷を下ろし、眠居り居る。夜明けの鐘、合ひ方にて道具、納まる。

ト向うより又八、すいのう張り鬘、單物形、油引きの塗り革の小田原提灯を提げ、後より源十郎、黑の羽織大小、雪駄穿き。孫六、そぼろなる一本差しにて、出て來たり

又八　殿樣は六七十兩勝つたと思つたら、たうとう馬鹿を見てしまひなすつた。

孫六　筋川氏は、餘所へ出るとつけが惡い。

源十　べら坊め、こぼす事もねえ。併し急に三十兩ばかり、金が要る事があるが。

孫六　ナニ、明日は貴公樣の屋敷へ呼んで、ちやらくらを用ひたら、それだけの金にならねえ事はありやすめえ。

トこの時、向うより

三太　オ、イ、驚やアい。金やアい。

又八　なんだ、騷々しい。

ト三太郎、走り出て、追ひつき

三太　オ、切ねえ。いくら呼んでも、おへねえ耳だなア、

源十　植村、なんで後へ殘つたのだ。
三太　履物が見えなんだから。それはさうと、儲け口だ、儲け口だ。マア、向うの森蔭へ行つて。
源十　また下らねえ事ぢやねえかえ。
三太　早く〳〵。
ト皆々舞臺へ來る。
源十　儲け口とは、なんだ。
三太　今、からたち寺の所で、なまッ白い侍ひに、家來が六十兩ばかり金を渡して、龜ケ谷の屋敷へ歸るとの事を聞きかぢつたから、知らせに來た。
源十　そいつは妙だ。おれが工風がある……在原橋を越して、云ひつける事がある。マア、來やれ。
ト足早に橋を渡つて、上手へ入る。向うより磯平、先に、清三郎、附いて出て來り
清三　それにつけても、新左衛門との　內儀おときどの、幼少の子息新七を連れられ、敵打ちに出られたが、どうぞ首尾よく本望を遂げらるればよいが。
磯平　イヤモウ、春藤さまは闇討ちにおなりなされ、妹御は勤め奉公、不覺者とあつて家屋敷は空地となるは、如何なる因縁でござりまするやら。人間の盛衰は、知れぬものでござりますなア。
ト舞臺へ來る。上手より又八、目明かしのこなしにて、提灯を持ち、源十郎先に、孫六は草履取り、三太郎は横目のこなしにて出て
又八　待て。
磯平　ヘイ……なに御用でござります。
孫三　下に居らぬか。
清三　アイヤ、手前も侍ひ。主命に依つて急ぎの使ひ、用事あらば屋敷へお來やれ。
源十　例へ、侍ひにも致せ、此方は青砥藤綱どの御下知に依つて、非常を糺す役目なるぞ。
ト兩人、下に居る。
源十　其方の屋敷は何國。主人の姓名、速かに申せ。
清三　手前主人は、龜ケ谷の。
磯平　ア、モシ、御主人のお名を仰しやつては。
清三　サア、龜ケ谷邊の、御直參でござりまする。
源十　旁々以て胡亂な者ども。フレ、懷中物、詮議いたせ。
清磯　ア、モシ、その儀は。
又三　上よりの御意だ。
ト清三郎の懷中より件の胴卷を引き出し

三太　斯やうな物を所持いたします。

ト源十郎へ渡す。

源十　こりやコレ、大枚の金。さては雲霧仁左衞門が餘類の者に疑ひなし。引ツ縛れ。

ト懐中する。兩人、振りほどいて

清三　身に覺えたき盗賊呼ばはり、金子を取上げ、手籠めにするは

磯平　似せ役人に極まつた。

源十　何を小癪な。おツ片附けろ。

三人　合點だ。

ト源十郎、行きかゝるを、磯平かゝる。又八、出しぬけに、清三郎の大小を引ツたくる。此うち磯平は、孫六、三太郎と立廻り。源十郎、清三郎と立廻り。襟髪を捕へ、橋を渡つて、上手へ入る。磯平、三人を相手に立廻り、此うち十藏、目を覺まし、逃げ廻りトヾ橋がゝりへ入る。磯平、立廻りながら。

磯平　若旦那さま／＼。

ト立廻りながら、向うへ入る。又八、殘り

又八　恐ろしい手剛い奴め。何しろこの雜物。

ト清三郎の大小を、腰に差し。

まだ落した物はねえか知らぬ。

ト木綿荷を見附け

なんだ、白木綿の包みがある。有り難え。この間に、さうだ。

ト脊負ひ上げ、片々の荷を引摺つて、橋がゝりへ入る。上手より清三郎、髪を亂し、着附け所々破れたる儘、走り出て

清三　磯平やアい／＼……五人や六人に、後れを取るべき者ならねど、何を申すもこの闇夜、怪我をしてくれねばよいが。それに付いても、重役方の情の金子は奪ひ取られ、名前は元より面體さへも、見屆ける間もなき狼藉。例へ寳の在所が知れても、請け戻す手段もなし、こりや何としたら。フム……寳紛失の科をこの身に引請けて、生害なさば母人のお命助かり、重役方へ金子の云ひ譯も立つ道理。たゞ可哀さうなは龜菊が身の上……イヤ／＼、親に替る大切はない。一筆爰へ書き殘し、さうぢや／＼オ、大小を奪ひ取られ、切腹なすにも刃物はなし。イヤ／＼、切腹は誠の侍ひのなす業。お家の浮沈も等閑に、おろくと不義の罪顯はれ、家出なしたその跡は、現在母の生害と、科定まるを餘所に見る業晒し。親の助命を願

はんには、一筆爰へ書き殘さん。とは云へ矢立の持ち合せも……あの定燈の油煙を以て。

ト地藏の前の佛器を取り、花瓶の水を流し入れ、菊の花をしごき、軸を嚙んで燈明の油煙をかき入れ、定燈の行燈を持つて來て、書置を書き、行燈を直し、石を袂へ拾ひ入れ、橋の上から身を投げようと思ひ入れ。向うより喜八、煙草喜と記せし、ぶら提灯を持ち出で

喜八　昨日は二十八日ゆゑ、柳島へお參りせうと思つた所へ、筋川さまからお梅を貸せとて、阿母が連れて行つて、たうとうお參りも出來なんだゆゑ、今日朝參りをせうと出て來たが、ちと早過ぎた。

ト舞臺へ來る。清三郎、飛び込まうとするを、喜八、提灯を垣根へ掛け、後より抱き止める。

清三　ア、コレ、誰れか知らぬが、放して下され。南無阿彌陀佛。

喜八　イヤ／＼殺しやせぬ。死なねばならぬ一通り、聞かぬうちは殺す事ではござりませぬぞ。

清三　イヽヤとうぞ。

喜八　イヤ、ならぬ。

ト引き戻し、舞臺へ來る。

清三　いづれのお人が存ぜぬが、主人より預かりの寶を紛失させ、母を屋敷に殘し、詮議に家出いたせしに、詮議の日延べも僅かになりしところ、重役より金子を惠まれ、京橋邊に質入れしてあるとのみ、持ち主とても定かならず。さりながら、惡者に右の金子を奪ひ取られ、重役の手前と云ひ、使ひに參りし家來にも面目なく、この身さへ相果てなば、母の命も恙なしと、あれなる燈明へ書置きなし、只今身を投げ果つる所存。此まゝ殺して下されいなう。

喜八　フム、解りました。さう云ふ事なら、あの書置は、わたしが母御の所へ持つて參り、一部始終を申しませう。そして、お前のお内と申すは。

清三　何をか包まん、入間の藩中、須磨清三郎と申す者。

喜八　そりやこそ、飛んでもねえ話しだ。モシ、お前樣は御幼少の時、清之助さまと仰しやつたでござらうがな。

清三　どうしてそれを。

喜八　知らいでならうか。御幼少の時分、お屋敷に勤めて居りました、若黨の喜八でござります。

清三　オヽ、ほんに見覺えのある喜八。ようマア無事で。

喜八　あなたもおまめで、御成人なされましたなア。

清三　サア、まめ息災も、今となつては母へ云ひ譯。さうぢや。

ト また行かうとするを

喜八　イヽヤ、若旦那と知らぬ先でさへ、殺すまいと思つたもの、古主を殺してよいものでござりますか。わしがお内へお供いたし、また金錢は湧きもの、わたしが拵らへて上げます。少しもお案じなされぬが、よろしうございますぞや。

清三　賴もしい其方の詞、さりながら、金子の調達出來るとも、紛失の一軸なくば、持ち手が迂濶に。

喜八　その一軸とは、呉道子とやらが書いた、雲龍の墨の畫でござりまするか。

清三　どうして、それを。

喜八　サア、知らう筈もなし、殊には久しうお出入りをせぬわたし、それを存じて居りますも、死んだ女房が白骨を、國へ持ち行き戻り道、妻籠の宿で人違ひに、忘れ物をして持つて參つた、コレ、この密書。

ト 前幕の密書を出す。

清三　ドレ。

ト 受取り讀む。

喜八　サア、狀の名宛はなけれども、あなたのお名があつたゆゑ、わたしが落したに違ひないと懷中したが、この手紙を證據にして、元利揃へて持つて行つたら、隱す事もあるまいではござりませぬか。

清三　チエヽ、忝ない。思ひも依らぬ其方の庇で寶の在所の知るゝと云ふも、忠義を忘れぬ無二の働き。

喜八　これも矢ッ張り草葉の蔭より、御親父樣の引合はせ。

清三　死なうと覺悟きはめしこの身。

喜八　モシ、危ない事でござりましたなア。

ト 向うより、磯平、脇差を拔き持ち、金兵衞、大金と記せし弓張りを持ち、大工棟梁の拵らへにて、長房の珠數を首にかけ、止めながら出て

金兵　モウ、いゝ〳〵、向うは死身で逃ぐる者、追ッつかれるものか。それよりは、御主人を尋ねにやアならねえ。いゝ所で出ッくわした。マア、脇差しを納めさつせえ。

ト 脇差を納めさす。

磯平　初めから胡亂なとは思つたれど、上意ごかしに懷中を吟味して、若旦那にお渡し申した金子を。

金兵　マヽ、お目にかゝらにやア、それも解らねえ。サヽ、行きやれ〳〵。

ト舞臺へ來る。
清三 磯平ではないか。
磯平 オヽ、若旦那樣。お怪我はござりませなんだか。
喜八 フム、そんならこの人が、御家來でござりましたか。
清三 家來の磯平でござるわいなう。
磯平 一人なりとも捕まへて、同類の詮議をせうと、大川橋まで追ッかけ參りましたところ、これへ參りましたは、最前お話し申しました、私しが宿の主。
金兵 私しは上槇町に居りまする、大工の金兵衞と申しまする者。心願がござりまして、柳島へ日參いたしまする。道で出ッくわしましたはこの男。段々の譯を聞きまして、何よりあなたが氣遣ひだと、連れて參じました。マア、お怪我はない樣子。
磯平 して、その金子は。
清三 サア、その金子は。
喜八 たうとう取られてしまひ、磯平どのへも云ひ譯なく、母御樣のお命にもかゝはるゆゑ、科を身に引きうけ、腰の物まで取られたれば、身を投げようとさつしやつた所へ、通りかゝつてお止め申した私しも、元は須磨のお家に勤めた者。只今では淺草の、裏家住み、煙草屋の喜八と申しまする者でござりまする。
磯平 すりや、後室樣からお話しありし、喜八どのが通り合せて。
清三 危ふい命は助かりしが、大切な金子を奪はれ、なんと云ひ譯。
金兵 イヤ／＼、金子の事はこの通り、お上へお屆け申せば、盜んだ奴の解らぬと云ふ事はござりませぬ。
喜八 また、質請けの金子は、この喜八がどのやうにもして、火急に調へまする。
磯平 併し、入間家のお納戶金ゆゑ、一兩々々山形に、二の極印。
清三 問注所へ訴へるにも、云はゞ當時は日蔭の某。
喜八 ハテ、お慈悲深い重役方、內々仔細を申し上げ。
金兵 私しが、お作事よりお拂ひを取つて戾る道、盜賊に逢ひしと願ひ出て、その科人が捕へられたら、明からさまに申して、お前樣をお連れ申す分の事。
磯平 成る程、さうなる時は、あなたの潔白立つ道理。
清三 此やうな、込み入つた事のある身を以つて、淺原の屋敷に居るも氣の毒。
喜八 左やうなら、これよりお供いたし、暫らくの間、私

し方へお預かり申すと願つたら、元より御親類同然のお方ゆゑ、御承知なされぬ事もあるまい。

金兵　さうなれば、自由に賽も振れると云ふもの。

磯平　左やうでござりまする。

喜八　金兵衞さん、お前も妙見樣へ、朝參りでござりますな。

金兵　左やうサ。今朝は時を違へて、半時早く參りました。道々話しながら相談いたしませう。併し、斯う落ち合ふも信心のお庇、南無妙法蓮華經。

喜八　若旦那も、御一緒にお參りなされませ。

清三　それにつけても、この形では。

喜八　成る程、見つともない……しがを隱すは、わしが半纏。

ト喜八、半纏を脫ぎ、清三郎に着せる。

磯平　それではどうやら、そぐはぬお形。

喜八　サ、そこには思ひ付きがあります。モシ、お前さんの手拭を。

金兵　よごれて居ますが、お遣ひなされませ。

ト手拭を喜八に渡す。喜八、清三郎に冠せて

喜八　先づこれで朝參りの講中、裾の方が淋しい。

喜八　モシ、その脇差を貸しなせえ。

磯平　これでも大事なくば。

喜八　サア、これを差せば、まさかの時の犬おどし。

清三　何から何まで、其方のお庇。

喜八　そんなら若旦那……と云ふもおかしなもんだ。講中だから、淸兵衞さんがよからう。

磯平　そんなら淸兵衞さん。

清三　然らば、皆の衆。

兩人　朝詣りの講中の衆。

喜八　委細は道々。

皆々　喜八どの。

喜八　サア、わしに付いて、お出でなされませ。

ト題目太鼓にて行きかける。この仕組みよろしく、

ひやうし幕

五幕目

長谷觀音境内の場
御輿ケ嶽遊行の松の場
池の端半兵衞内の場

淨瑠璃「濡袖浮名綻」淸元連中

役名——筋川源十郎。植村三太郎。鷺坂孫六。植村三太郎。金川又八。醫者、道順。巾着切り、早房喜三郎。仕事師、音吉。婆、おしの。番頭、伊太六。鍛冶屋孫兵衞。同一子、喜太。喜八母、おきぬ。丁稚、源吉。同、由松。喜八女房、お梅。勝見姐えお千代。鍾馗の半兵衞。稻野屋半兵衞。

本舞臺、二間、日覆ひしたる葭簀張りの出茶屋、軒に團子提灯を掛け並べ、側に三社權現の長提灯、梅の井と記せし掛け行燈。長床几の方、唐銅の鳥居。下手、榎の立ち木、同じく吊り枝。すべて長谷觀音境内の體。爰に鍛冶屋職人の仕出し四人、床几にかけ、おきぬ、母親の拵らへ、前垂れかけにて、茶を酌んでゐる。大拍子にて幕明く。

きぬ　あなた方は、どちら邊でございまするえ。
仕一　西の久保から本芝の方の、鍛冶屋の年季野郎でございます。
仕二　エヽ、外聞の惡い。これでも、一人前のお職人樣だワ。
仕三　今日、わつちらが親方の、そのまた大親方の法事があるから、門跡樣へ參りに來た譯サ。
きぬ　西の久保と仰しやれば、鍛冶屋の孫兵衞どのを、御存じでございまするか。
仕一　知らなくつて。孫兵衞さんの爲にも、親方の法事ゆゑ、今お寺に親子して、世話をやいて居やした。
きぬ　是非逢はねばならぬ事があるゆゑ、憚りながら、お逢ひなされましたら、姉が待つて居つたと、お云ひつけなされて下さりませ。
仕二　そんなら、孫兵衞親方の姉さんかえ。知らねえ事ゆゑ、大きに失禮申しました。
ト向うより、お梅、水茶屋の拵らへ、莨の葉を書き、國府と記せし提げ箱を、重さうに提げ、出て來る。少し後より源十郎、又八、孫六、三太郎、ほろ醉ひにて出て來たり

源十　オイ〳〵、御新造々々、煙草屋喜八どの、奥方。
うめ　どなたかと存じましたら、筋川の殿樣、今日は、お早いお參詣でござりましたなア。
又八　御前は觀音を出しに、お梅の君を大の御信心。
孫六　この子は茶見世ばかり稼ぐと思つたら、煙草も賣りに歩くのか。
三太　喜八が前の女房は、このお梅坊より器量は次であつたなア。
うめ　又おなぶり遊ばします。わたしのやうな不器量者が商ひがなりませうか。こりや內の人が、持つて行けと云ひつけましたるゆゑ。
三太　何にしろ、素敵に乾いて來た。
源十　誰れしも昨夜寐ねえ所爲だ……イヤサ、ドレお茶の御馳走にならうかい。
　ト舞臺へ來り、皆々、腰を掛ける。
うめ　母さん、殿樣がお出でなされたに、お前、何をうかりして居やしやんすぞいなア。
　ト此うち職人四人は、橋がゝりへ入る。
きぬ　オヽ、ほんに御前樣、年が寄ると、實は目がかすみまして、どうもはつきり。

源十　目はつきりしなくつても、昨日申し付けた一儀、是でも非でも、首尾してくりやれサ。
きぬ　ハイ……畏まりましてござります。
孫六　筋川氏は七百石も頂戴さつしやるだけあつて、鷹揚だ。
　トおきぬ、茶をつぎ、お梅に持つて行けとこなし。お梅、おきぬに行つてくれとこなし。おきぬ、持ち來り
きぬ　ホヽヽ、お一つお上がりなされませ。
源十　阿母々々、同じ値なら、嫁御に出させてくれ。
きぬ　ハイ……ソレ見やいの……イヤモウ、兎角に恥かしがりまするに、困りまする。ドレ、わしはちよつと、水を汲んで來ませうわいなア。
　ト入る。お梅、不承々々に茶を出すを、源十郎、茶碗を取つて、直ぐにその手を捕へ
源十　爰へ掛けやれ。
　ト合ひ方、きつぱり
其方は、解らぬ者だぞよ。あのおきぬは、喜八が實の母、其方が爲には、姑ではないか。その姑が、實の子の手を切つても、この源十郎の召使ひに差出したいと申すは、手前が慈悲深い事を存じて居るゆゑの事。承はれば、喜

八も不如意になり、問屋向きにも借財が出來たとの事。其方さへ得心いたさば、喜八へ手切れ金を遣はし、其方は召使ひとは申しながら、奧も同然。榮耀榮華は勝手次第。おきぬも、手前が姑同やうに養育いたす。さすれば三方四方、浮かみ上がると申すものではないか。

うめ　サア、母さんと一緒に、お屋敷へお手傳ひに上がりました節、御意遊ばしたは、御酒興と存じ居りましたら、母さんへ度々のお言傳、有り難いとは存じますれど、何を申すも、主のある事ゆゑ。

源十　ムウ、その亭主の手さへ切れゝば、得心いたすか。

うめ　サア、金に引かされ、緣を切る程の水臭い男に、連れ添うて居る女子もござりますまいかいなア。

又八　この上は、喜八が料簡一つとなりましたな。

源十　おきぬに逢つて、方を付けにやアならねえ。

ト上手よりおきぬ、手桶を提げ出て來る。

孫六　ソリヤ、後室樣が、水を汲んでお出でなされた。

きぬ　コレ、お梅、若旦那がお癪が差込んで、妹のお露ばかりでは手が廻らぬゆゑ、わが身に戻つて來てくれと、隣の子供を使ひに寄越した。

うめ　そんなら、昨夜のお氣使ひで。

源十　ナニ、若旦那とは。

きぬ　喜八が、元勤めて居りました所の息子どの、遣ひ過ぎてか家出して、暫らくわたしの內に。

うめ　左やうなら御前樣、皆さん、御ゆるりと。

きぬ　サア、早う行てたも。

うめ　母さん……氣を附けて下さんせ。

ト橋がゝりへ走り入る。

源十　サ、おきぬ、今お梅とは對談いたした。喜八が手さへ切れたら、身が屋敷へ參りたいやうに申すが、其方、親甲斐に忰の手を切つて差出せ。ソレ、先達て、申した通り三十兩、これは喜八への手切れ。外に、其方が小遣ひ一兩。

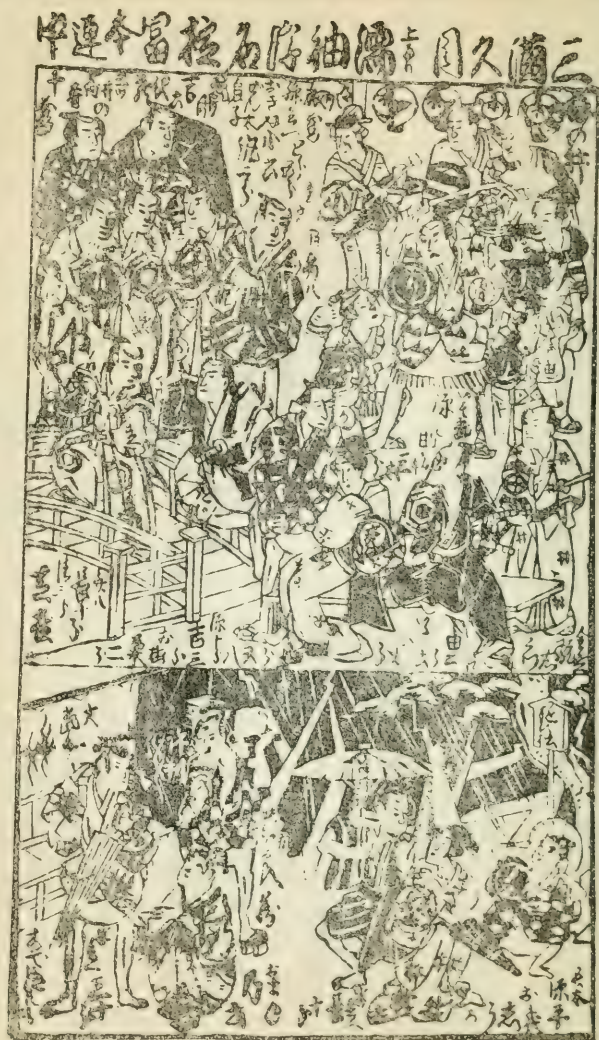
ト金を出す。

きぬ　マ、忰の方を承はつた上にて、このお金をお貰ひ申しませう。

孫六　お前は昔者だから、惡堅くてならねえ。

又八　出來ずば、出來ねえ時の事。

源十　いよ〳〵喜八が不承知なら、金子を持參いたせ。その時は、此方も侍ひの意地、喜八に禮の致しやうもあるわえ。

きぬ　そりやモウ、御恩になつて居るわたしなれば、どのやうにも致しまして。
源十　それなれば、金子を受取れ。
きぬ　イヤ、この金は。
源十　受取らぬは、おのれが不承知ぢやな。
きぬ　全くもちまして。
源十　受取るか。
皆々　サア〳〵〳〵。
源十　野暮を云はずと、受取つて置きやれと申すに。
きぬ　左やうなれば、お預かり申し上げませう。
又八　併し、それればかりでも金錢づく。御前、ちよつと受取を書かせるがようござります。
きぬ　どうして左やうなむづかしい事が。
源十　イヤ、たんだ一筆だ。
三太　硯箱も爰にあつた。ソレ半紙。
　ト懐中より紙を出す。
きぬ　これはマア、迷惑な。
源十　文言は身が申さう。先づ、一を打つて……この度、私し娘梅事、お召し使ひ奉公人に、一生差上げ候ところ實正なり、御取替へとして、只今金子三十兩、慥かにお受取り申し上げ候ふ。喜八方は右金子を以て取扱ひ、私し引請け、毛頭違論無く御座候ふ。仍て件の如し、筋川源十郎さま御用人、下は梅母きぬ……その下へ、爪印を捺しやれ。
　トおきぬ、是非なく仰せ書に書き下ろし、爪印を捺す。
源十　オヽ、大儀々々。この上は喜八へ掛合ひ、早速お梅を同道いたせ。
きぬ　ハイ。
源十　ハヽヽヽ、もう證文を差出す上は、動きは取れぬ。
三太　そんなら祝ひは、八百榮へ。
源十　うるせえ奴等だ……阿母。
きぬ　御前様。
源十　頼んだぞよ。
　ト源十郎、先に皆々付いて、橋がゝりへ入る。上手より孫兵衛、鍛冶屋親方の拵らへ、法事の引き物を手拭に包みて提げ、出て來り
孫兵　姉御、無沙汰をしました。
きぬ　オヽ、孫兵衛どのか。最前、若い衆達が、こなさんの噂をしたゆゑ、是非寄らつしやるであらうと、待つて居ましたわいなう。

初演の繪番附

孫兵　喜八を始め、暑さにも負けず、稼いで居ますかの。
きぬ　イヤモウ、稼いでは居れど、先の嫁女が長の煩ひから、手もつれになつて、思ふやうには行かぬわいなう。
孫兵　ハテ、人間は七轉び八起きぢやわいの。それはさうと、今し方、忰を田原町へ寄せたら、若い人が癪を發して居たと云ふが、お露が聟とでも云ふ事かな。
きぬ　あれば喜八がお主様の若旦那、不慮の事があつて、今朝喜八がお連れ申し、お匿まひ申したのぢやわいの。
孫兵　其やうに口が殖へては、猶廻るまい。併し、恩のある人ならせう事がないが、金でも遣ひ過ごしたと云ふやうな事かな。
きぬ　イヤ〱、大切な寶を紛失させ、その事について、五十兩あまりの金が要るとて、喜八が駈け歩いて居ますわいなう。
孫兵　なんぼ御恩のある人だと云つて、五十兩の工面がなるもので……エヽ、莨入れはあつても一服もない。
きぬ　サヽ、これを入れたがよい。
ト莨の箱を出す。孫兵衞、抽出しをあけ、以前の金包みを出し
孫兵　こりやアなんだ。

きぬ　そりや金で、三十兩ござるわいなう。
孫兵　三十兩あれば、後二十兩ばかりの工面ぢやな。
きぬ　イヤ、この金は喜八の知らぬ事。
孫兵　姉貴、喜八が苦勞して居るものを、なぜ隱して貸してはやらぬのぢや。ア、年を取ると、慾が深くなるものぢやなう。
きぬ　イヤ、さう云ふ譯ではない。
ト合ひ方になり
きぬ　こりや、わしが世話になる旦那が、喜八の女房を妾に抱へたい程に、三十兩遣るに依つて、手を切つてくれと、斷わり云へども聞き入れず、もし成就せずば、喜八は只は置かぬと無理邪しま。それもお武家様ゆゑ、預かつては置いたものゝ、どうして戻したらよからうぞいなう。
孫兵　フム、そんなら喜八の女房を……この時節に、なかなか五十兩と云ふ金は大枚。併し、御恩のある若旦那を、世話せずにも居られまい。なんと相談づくで、喜八に手を切らせては、どんなものであらう。互ひの心さへ變らねば、また元の夫婦になられぬ事もあるまいわい。
きぬ　ぢやと云うて、親の口から、どうも喜八へ。
孫兵　オヽ、こりやおれが喜八に意見がてら、その金を見

せて、得心させう。
きぬ　相手は鎌倉の御直參、喜八の體に、もしもの事があつたらと案じられる程に、こなた鹽梅よう話して下され。シタガ、今日は堀留の問屋へ行くと云うたが、まだ居るか。ちよつと見て來るから、この金は慥かにお前に渡しました。落さぬやうにさつしやれや。
孫兵　オヽ、慥かに預かりました。
きぬ　そんなら店を頼みましたぞ。
　ト橋がゝりへ入る。
孫兵　なんのお梅だとて、元は勤めした體だ。これを取りそこなふと云ふ事があるものか。
　ト上手より善太、職人の拵らへにて出て來り
善太　父さん、お前、行つてしまつたらうと思つたに、何をしてゐるのだ。
孫兵　べら坊め、てめえこそ、うか〳〵して、鳶にでも浚はれるな。
善太　浚はれでもしなくつちやア、伊勢へ參られる事ぢやアねえ。
孫兵　又そんなへらず口をききやアがる。來年、木瓜屋の番頭が立つ時、われをやらうと、無盡も掛けてあるぢやアねえか。
善太　ハヽ、來年の事を云ふと、鬼が笑はア。木瓜屋と云へば、店の急ぎの仕事があつたつけ。野郎どもを連れて、先へ歸るぜ。
孫兵　オヽ、この金をおつことしでもすると大變だ。われが歸るなら、これを、簞笥の中の抽出しへ入れて置けよ。預かり物だ。
　ト金包みを渡す。
善太　案じなさんな。そんな、まんぢりしたのぢやアねえ。
　ト橋がゝりよりおきぬ、出て來り
きぬ　オヽ、善太、よう出て來やつた。
善太　伯母さん、先刻ちよつと寄つたよ。
きぬ　さうぢやといの。相變らず精を出すさうな。
孫兵　姉貴、喜八は居ましたか。
きぬ　イヤ、芝の方へ出かけたと云ふが、ひよつと、こなたの内へでも行きやしまいか……まだこなたに、話して置かねばならぬ事が……併し、若い者に聞かせる話しでもない。後の店まで來て下され。
孫兵　てめえ、ちつとの間、店番をして居ろ。
善太　合點だ。

きぬ　サ、來て下され。

ト上手へ入る。善太、以前の金包みを明け

善太　ヨウ、三十兩。あの親仁め、どうしてこんなに持つて居るだらう……ア、、こりやア、無盡が當つたのだな。

それならば、思案ものだわい。

ト橋がゝりより以前の職人、四人、出て來り

四人　小旦那々々々。

職一　時に、このお御籤は、三十一番の大吉だ。

ト觀音の御籤を見せる。

善太　それがどうしたのだ。

職二　おりやア、伊勢へ拔け參りをしてもいゝかと、取つて見たのよ。

善太　いよ〱、てめえ達は行く氣か。

皆々　行くどころか。今日の法事に、落ち合つたこそ幸ひだ。

善太　待て〱。おれは爰に、金が三十兩あるが、一緒に行くにしたところが、みんな持つて行つたら、親仁が目の玉を引ッくりかへすであらうし。

職三　これサ、株で、氣の弱い事を云つて居るぜ。

職四　お伊勢さまへ參るに、なに構ふものか。

善太　いつその事、やッ付けようか。

皆々　極まつた〱、大極まりに、一つ〆めてくれ。

ト五人、手を打ち、善太、內懷中へ、金子を入れる。
上手より孫兵衞、おきぬ、出て來り

きぬ　オ、、最前のお衆達、戾つてござりましたか。

孫兵　コレ、わいらも、善太と先へ一緒に歸るか。

職一　アイ、直ぐに、これから立ちます。

善太　アコレ、そんなら父さん、達者でゐねえ。

孫兵　エ、、旅へでも行きやアしめし。

きぬ　年のゆかぬ衆達、必らず道寄りをせずに、行つたがよいぞや。

職一　お案じなさるな。

職二　わたしら四人も

四人　同行でござりますわいな。

ト巾着切り、頰冠りして出かけ、善太が金に目を附けて居て、懷中へ手を突ッ込むを、善太、立廻つて

善太　何をしやアがる。

孫兵　なんだ、巾着切りか。

四人　叩ッ挫け。

ト打ちにかゝるを

きぬ　ア、コレ、取られさへせねば。
善太　出がけの祝ひに。
孫兵　助けてやれ〳〵。
善太　伯母さん、あばよ。
ト巾着切りを見事に投げ返し
善太　サア、來や。
ト手拭を肩にかける。これをキッカケに道具幕を振り落し、上手へ片蓋の辻堂を引き出し、禪のツトメになり、直ぐに向うより伊太六、丁稚由松、風呂敷包みを脊負ひ、出て來る。上手より醫者道順、薄羽織、一本差しにて、出て來たり
道順　ヨウ、稻野屋の番頭伊太六どの、よい所でお目にかかつた。
伊太　あなたは道順さま、何か御用があると仰しやりしましたゆゑ、この根岸へ廻つて參じました。
道順　それは御苦勞。外の事でもないが、さる所から頼まれた質物ぢやが、どうぞ二十兩、借りてくれと云はれますが、お前が呑み込んで貸しては下さるまいか。
伊太　品物さへ踏めます品なら。
道順　マア、見て下され。
ト懐中より袱紗に包み、系圖を出し
道順　これは入間家へ家來分になつてゐた、春藤新左衞門どの、育て君、守之助どのが失はれた系圖の一卷。若殿は出奔、新左衞門どのは闇打ちになつて、內儀は敵打ちに出られたが、さる人が買つて持つて居たところ、急に金子の入用ゆゑ、質物に入れたいとの事。
伊太　併し、そのお內儀が、敵を打ちそこなつた日には、この品は流れるのでござりませう。
道順　イヤ、入間家は潰してはならぬ家筋ゆゑ、跡を立てるその時には、是非なくては叶はぬ品。
伊太　さう云ふ事なら、主人に譯を話して見ませう。主半兵衞どのも、以前は入間家の家來だとかなんとかゆゑ、まんざら知らぬ事もござりますまい。
道順　サ、半兵衞どのも元は、この系圖の預かり主、春藤新左衞門どのの劍術の弟子ゆゑ、そこへ持ち込むこの質物。
伊太　なんにしろ、これはわたしがお預かり申して、早速に御挨拶いたしませう。
道順　イヤ、また春藤の內證おときどのの里方は、山脇十兵衞と云ふ者、又こんたがこの中強請られた、勝見姉え

の伯父と云ふも、その十兵衞どのの家來筋だよ。

伊太　さう云ふ大事の物なら、わしが脊負つて參りませう……左やうなら、明日吉左右申します。

道順　何分よろしくお賴み申す。

ト橋がゝりへ入る。伊太六、系圖を風呂敷へ包み、脊負ふ。向うより大師參りの仕出し四人、後より仕事師音吉、辨當の包みを提げ、出て來る。上手より岩見銀山の幟を立て、鼠取り藥賣り、出て來る。後より引き札配り、出て、入り違ひ

鼠取　いたづら者はゐないか。ゐたか／＼。

音吉　ほんに隣の姉御の所で、鼠が恐ろしいから、いたづら者を買つて來てくれろと賴まれたつけ。オイ、一服くんねえ。

仕一　爰へ一枚。

仕二　わしにも下せえ。

札配　御披露をお願ひ申します。

ト銘々へ引き札を配り、橋がゝりへ入る。

音吉　貰つたが、ひとツぱも讀めねえ。

仕四　わしらも、判らねえ。

伊太　ドレ／＼、大方藥の功能であらう。

ト開き見て

なんだ。淨瑠璃名題……夕立は繪に畫く雨の姿かな、濡れた袖、浮名の綻び。

ト太夫連名、役人觸れあつて

こりや妙藥と見えるわえ。

トこの以前、上手辻堂を明け、早房喜三郎、巾着切りの拵らへにて出かけ、觸れを讀み居る伊太六の包みをソツと取り、系圖を出し開き、風呂敷を伊太六の肩へ掛け、橋がゝりへ入る。

鼠取　いたづら者はゐないかな。

音吉　今あつちの方へ逃げて行つたが、聞いて呆れらア。氣の毒なア。

仕四　ドレ、お參りを申して來よう。

ト音吉、皆々、上手へ入る。鼠取り藥賣りは、橋がゝりへ入る。

由松　番頭さん、風呂敷が肩から落ちますわいなう。

伊太　ヤア、ないぞ／＼。さては掏摸にやられたか。

由松　いま、頰冠りした人が持つて、あつちへ行きました。

伊太　エヽ、今時分云つて、何になるものか。てめえ、顏や形かたちを知つて居るか。

由松　アイ、よく覺えて居ります。
伊太　サ、、早く來い／＼。
由松　オイ番頭さん、歩けねえ／＼。
伊太　サ、おぶされ。
　ト由松を負ひ
泥坊々々。
　ト早き禪のツトメになり、橋がゝりへ追ひかけて入る
知らせにつき、正面の道具幕を切つて落す。
本舞臺、眞中、莫大なる松の樹、所々に枝うけの柱
杭。よき所に白木造りの小宮。向う三河島。下手、
上野の遠見。上手、植込みの張り物。すべて御輿ケ
嶽、遊行の松の模樣。稻妻、雨車、雷の音はげし
く、かすめたる本釣り鐘にて道具納まる。
ト本鐵砲、落雷の心にて、雨車、雷の音を打ち上げ、
知らせにつき、上手の植込みの張り物を打ち返す。爰
に清元連中居並び、直ぐに前彈きになり
〽見渡せば、四方の梢も若葉して、色增す春も夏近く、
初雷と夕立や、歸る雁金來る乙鳥、行きかふ人の急ぎ
足。

　ト向うより稻野屋半兵衞、帷子、尻端折り、京橋稻野
屋、山形に半の字の番傘を半開きにして、後より源吉、
丁稚にて小風呂敷を脊負ひ、殿中の笠を阿彌陀に冠り
半兵衞と自分の雪踏を一緒に掴み出て、逸散に兩人、
舞臺へ駈けて來る。上手よりお千代、帷子、腕まくり、
草履を持ち、高からげにて、靑日傘をずぶ濡れにして
かざし、走り出て、行き當り
千代　アイタ、、、。
半兵　御免なさい／＼。薄暗いのに、此どろ／＼。あはを
くつて、麁相しました。
千代　なんの、お互ひ樣でござります。
源吉　ソリヤ又、光りました。
　ト大雷になり、本鐵砲、この音にてお千代、驚ろき、
思はず半兵衞に取りつく。
半兵　うんらいぐうせいでんくわうはくちうだいう。
　ト唱へ、夢中になつてゐる。
源吉　恐ろしい雷さまだ。なんでも、おツこちたに違ひね
え……やア、旦那さんに雷さまが取ツついてゐます。
半兵　ナニ、雷さまが……イヤ、おかみさん、もう遠くへ
お出でなすつたから、怖くはござりません。

源吉　おかみさん〳〵、もうようござりますよ。
〽濡るゝをいとふ雨舍り、袖の雫も縁の端。
千代　ほんにわたしとした事が、眞平御免なさいませよ。
半兵　ナニ、男でさへ、どうせうかと思ひました。お前さ
ん、御遠方かえ。
千代　ハイ、イエ、ツイ近所でござります。
ト袂を尋ねて
オヽ、手拭を落したさうな。モシ、どうぞ御無心なが
ら。
半兵　お易い御用だ。
ト手拭をお千代に渡す。
千代　これはマア、有り難う存じます。
半兵　ほんにこれが、袖振り合ふも他生の縁とやら。
〽初手は淺黄の十露盤絞り、水にや流さぬ水道の水に、
育ち合うたら氣も合うて、好いたらしさは餘所目にも。
千代　オヽ、爰へ紅を付けました。こりやマアひよんな。
半兵　ナニ、大事ござりません。お前の紅なら。
千代　イエ、これでお持ちなされたら、誰れぞにお叱られ
なされませう。
源吉　オヤ〳〵、蟲のいゝ事を云ふ。知りもしねえ癖に。

半兵　ヱヽ、何を吐かしやアがる……お前のやうなお方な
ら、手拭は愚か命でも。
千代　おなぶんなさんな。
〽なぶらしやんすな、わたしぢやとても、十九や二十の
身ではなし、派手や浮氣の口きいて、仇つき者と譏らる
る、まんざら取りはせぬわいなア。
ト此うち源吉、半兵衞を引ッ張り來て、狐の眞似をし
て、化かされるなとこなし。半兵衞、又そろ〳〵側へ
寄り
半兵　イヤ、又お前のやうな狐に化かされたら、堪えられ
たものではあるめえ。
千代　憎らしい。
〽願ひ叶つて雨舍り、野暮に光つた鳴神よりは、氣も魂
ひも有頂天、うつかりひよんな馬鹿らしさ。
ト兩人、よろしくある。源吉、割つて入り
源吉　ヤア、ならぬ〳〵、ならぬわえ。
〽さては旦那も一つ穴、穴の稻荷が近ければ、つまれ
ながら妻乞稻荷、化もの稻荷に長右衞門稻荷、御家内繁
昌、敬つて申すとこそは興じける。
ト源吉、取り持ちの心にて振りあつて

半兵　エヽ、おきやアがれ。てめえも口不調法な癖に。オ
オ思ひ出した。おけいから云ひつかつた護摩を上げるの
を忘れた。源吉、大儀ながら、大師様へ上げて來てくれ。
ト護摩料を出し
てめえは、まだ宿入りに行かなんだな。その時の小遣ひ。
ソレ。
ト金を捻つて遣る。
源吉　ヤア、これでは芝居が見られる……イヤ、わたしも
忘れてゐた。ソレ、いつもの人が、屆けてくれと持つて
來ました。
ト狀を出す。
半兵　オヽ、よし／＼。
源吉　そんなら、わしは一走り。
〽笠も足駄もお內儀さん、靜かにお出でも足早に、機轉
きかせて。
ト源吉、入る。
半兵　イヤ、滅多に餓鬼には、油斷がならねえ。
千代　二人跡に殘つて居るから、厚かましい奴だと、下げ
すんで、行かしやんしたわいなア。
半兵　とんだ事を云つたものだ。

ト兩人、顏見合せ
千代　それに違ひはござりませんよ。
〽それが手のある捨て詞、嬉しい夢は覺め易い、鳥は啼
かねど別れとなるが、わたしやしみ／＼つらの皮、厚い
女子と下げすましやんす、つらい心と知りながら、なん
の因果に今日爰で、愚痴や未練になるやうな、憎い仕打
ちぢやないかいな〽モシ拜むぞえ〽こんなのろい野郞に
むごたらしい、嘘でもうける正直を、見込まれたのも緣
のはし〽アイサわたしも主ゆゑ、內へ戻る心も氣まぐれ
て、遲うなるのに氣も付かず〽お邪魔さんでも付き合う
て、くどいは酒のなまめかし。
ホヽ、酒と云ふものは、知らぬお方へ馴れ／＼しう。モ
シ、堪忍しておくんなさいまし。
半兵　ナニサ、呑む者は、これだけが德サ。
トまた雨車になる。
半兵　オヤ、又ぼろ付いて來た。
千代　ほんにどうやら、又お鳴りなされにやよいが。
ト薄雷。
モシ、わたしが內はつい池の端、お寄りなされてその召
し物を、干してからお出でなさいまし。

半兵　有り難えが、誰れぞ呵る人でもあつた日にやア。

千代　イエ〱、そんな者がある位なら、寄せ申しは致しませぬ。

半兵　それでもなんだか、間が悪い……オヽ、また降り出して來た。

ト雨の音になる。

千代　サヽ、行きませう。

半兵　とんだ道行だ。

〽縁は長き傘の、手もしめやかに降る雨は、まだ春ながら名所の、時雨が岡を跡になし、心初音の里つゞき、妹が伏屋に絲竹の〽あれ羨やまし雁金も、女夫〱のあるものを、獨り離に立ち明かす〽互ひに心不忍の、池の端へと連れ立つて。

千代　サア、ござんせいなア。

〽我が家の軒へぞ、たどりける。

ト雨車、三重になり、お千代、濡れたる日傘を持ち、半兵衞と相合傘にて、兩人、よろしく向うへ入る。時の鐘にて道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の二重。下手、惣銅壺、竈、欅の鼠入らず、その外、臺所道具。屋臺正面、まひら戸の戸棚、暖簾口。上の方、障子屋體。下の方、水瓶、手桶。いつもの所に門口、錠下りてあり。門の外、一間の出入り口。腰障子。隣の内の道具。流行り唄にて道具納まる。

ト向うより、お千代、半兵衞、出て來り

千代　モシ、あすこが、わたしの内でござります。一人でござりますゆゑ、ゆつくり支度を仕直して、お出でなされませ。

半兵　成る程、あの錠の下りてゐる樣子では、ほんに一人者だね。それにしちやア、よく今まで人が、打ツちやつて置いたの。

千代　ナニ、わたし等のやうな者を……サ、ござんせいなア。

ト舞臺へ來り、隣の内をあけ

小母さん、大きにお世話でござんした。

トおしの、婆アの拵らへにて、鍵を持ち、出て來り

しの　オヤ〱、道で雨にお逢ひなすつて、さぞお困りだらうねえ。さうして、大きな雷さまには、どこで逢ひなすつたえ。

千代　丁度、根岸の進行の松でござんした。それでも、このお方が居て下さんしたゆゑ、傘へも入れてもらうし、大きに助りましたわいなア。

しの　そりやア、丁度よかつたねえ。わたしや又、あの雷さまゆゑ、道でいつもの癪が發りやアしないかと、案じたよ。さうして、引窓を立てようと思つたが、この錠が急には明かず、誠に困つたよ。

千代　大きにお世話でござんした……サアモシ、足を洗つて、お上がりなさいまし。

半兵　わたしやア、直ぐに歸りませう。

千代　ハテ、よいぢやござりませぬか。女の一人居る所へ、必らず入るなと、云ひつけた人でもござりますかえ。

半兵　なにサ、さうぢやアねえが、お世話になつちやア氣の毒だからサ。

千代　なんのマア。なんにせい、ちつと干してお出でなさいまし。

　トお千代、雪駄と番傘を水瓶の側へ置き、足を洗つて、内へ上がり、上手屋體の障子を明け、向う中窓の戸を明けると、不忍の池を見晴らす心。半兵衛、此うち足を洗ひて、上へ上がる。

爰から、少しは風が入りませう。サア、これを着て、帷子をお脱ぎなさいませ。

　ト無理に半兵衛の帶を解き、浴衣を着せる。半兵衛、以前の手紙を出して、開き讀む。お千代も浴衣を着て、二つの帷子を衣紋竹へ掛けて、鏡臺へ向ひ、髪形を直し

モシ、そりやアなんだえ。

半兵　なにサ、脇からの用事の手紙サ。

　ト懐中へ入れる。

しの　オヤ／＼、お前さんの帷子も、ぐつすりだ。火を持つて來て上げよう。

千代　そりやア、有り難う。さうして、モシ。

　トおしのを、門口へ連れ出て、囁く。

しの　いくらばかり、云はうねえ。

千代　いゝ加減に、見計らつて來ておくれな。

しの　アイ／＼。

千代　さうして、爰の事は、だんまりだよ。

しの　オヤ、さうかえ。

千代　音さんは内かえ。

しの　あの野郎は、出ると歸りやしないよ。

ト向うへ入る。半兵衞は内の樣子を見廻してゐるうち、袂より以前の手紙落ちる。お千代、上書きを見て、懷中へ入れる。

千代　あんまり暑いゆゑ、暑さ拂ひに、一口上げようと思つて。

半兵　お前、婆さんに、何か云ひつけてやつたのか。

千代　それでも、もう云ひつけてやりましたものを。それとも、わたしの内では、否でござりますかえ。

半兵　そんな事をされちやア迷惑だ。

千代　なぜにえ。わたしがお前に惚れて、口說くとでも思ひなさんすのかえ。

半兵　ハテ、此方こそ、いつまでも居たい心はあるが、なんだか氣味が惡い。

半兵　いつそ、さうなら面白いけれど、大師參りの雨舍りから、爰までの手續きが、味過ぎるに依つて、もしやゑて吉ではないかと思つて。

ト狐の眞似をする。

千代　オヽ、怖らしい。

半兵　イヤ、此方が怖いなア。

千代　そりやモウ、さう云ひなさんすも、尤もでござんすが、一人身で居るからは、ちつとはわたしだと云つて……推量して下さんせいなア。

半兵　サア、その一人が、怖いと云ふ事だ。先刻雨舍りに腕まくりをした時、見附けて置いた二の腕のしみ。今また浴衣を着替へる時、よく〳〵見れば誰れか命。それが怖いと云ふ事よ。

千代　こりや入れ黑子で、ちよつと譯が。

半兵　譯と云ふは。

千代　サア、見初めた男のその名をば、聞いて心の樂しみに、一人承知で命をかけ、あつたらわたしがこれだけの、心を知らせて一度でも……ほんにわたしも、餘ツぽどのろいぢやないかいなア。

半兵　して、その男は。

千代　京橋銀座の、ソレ。

ト腕を見せ

半兵衞、命。

半兵　ハテ、聞いたやうな名だなア。

千代　アレサ、憎らしい。

トつめる。

半兵　アイタヽヽ。

ト向うより、おしの先に、酒屋の男、岡持ちを提げ、後より音吉、白丁の徳利を持ち、出て來り

しの　お千代さん、來ました〳〵。

音吉　姐御、わつちが氣取つて來やしたぜ。

千代　オヤ音さん、お歸りかえ。

音吉　この趣向を見付けたから、直ぐに仕掛けて來やした。

しの　喰ひ物と云ふと、直に附け込む奴サ。

音吉　直ぐに燗もしてありやすぜ。

千代　爰へ出しておくれ。

ト音吉、おしの、酒肴を出す。音吉、以前の鼠取り藥を出し

音吉　オイ姐御、いたづら者を買つて來たぜ。

千代　そりやお忝け。そこらへ置いておくれな。

音吉　爰へ置くぜ……カウ、後に取りに來さつしな。

酒屋　ハイ〳〵。

ト酒屋男は引返して入る。

半兵　カウ、小母さん、不躾ながら。

ト壹分を包んでやる。

しの　オヤ〳〵、有り難うございます。

音吉　阿母、巧い仕事だな。おれに半分くんねえな。

しの　また、西河岸へ行かうと思つて。

千代　音さん、吉原は、わたしが承知だよ。

音吉　そいつア有り難てえ……姐御、出直して呑みに來るよ。

千代　これだよ。

ト口を押へる。

しの　アイサ、羽織の紐だ。

音吉　胸にあると云ふのか。野暮を云ひなさんな。

しの　大きに有り難うございます。

ト兩人、隣の内へ入る。

半兵　時に、自惚れた事を云ふやうだが、今の

ト腕を指さし

ありやア本當か。

千代　嘘でお前の名を知らう筈が。

半兵　さう云やア、さうだけれども。

千代　モシ、厚かましい者だと、笑つて下さんすな。

半兵　おれこそ、押しの強い者だと笑ふだらう。

千代　お前、キッと騙すと、聞きませんよ。

ト猪口を取り、酒を呑み、半兵衛へさす。音吉、何心なく出て、向うを見て、門口を明け

晉吉　オイ／＼姫御、これが歸つて來た／＼。
ト親指を出す。
千代　それは大變々々。
半兵　どうした／＼。
千代　ア、、わたしの兄さんが來たが、野暮な人だから。
ト囁き
裏から早く逃げておくれよ。
半兵　なんだか、さつぱり解らねえ。
千代　なんでも後で解る事。見付かると、お前の爲にならない。帽子は後から屆けるから、さうして、キッと明日の晩。
晉吉　オイ／＼、早くしねえ／＼。
ト矢張り隣の内へ入る。お千代は無理に半兵衞を奥へ突きやる。向うより鍾馗半兵衞、思案しながら出て來り、門口を明け
鍾馗　今日は、てめえは大師樣へ行つたぢやアねえか。
千代　先刻歸つて來たのサ。お前、道で雨に逢やアしないか。
鍾馗　づぶ濡れに、濡れてしまつた。
千代　さうして、どこへ行つたのだえ。

鍾馗　三浦の部屋へ行つたのよ。この頃の間の惡さ。
千代　ざまア見たがいゝ。
鍾馗　矢ッ張り眞面目に、煎茶を賣つてゐる時分は、こんなに惡苦しくはなかつた。天秤棒は肩へ當るが、どこへ出ても、八百屋の半兵衞さんだ。
ト鼠取り藥を見付け
こりやア、なんの藥だ。
千代　あんまり鼠が出るから、音に賴んでやつた、いたづら者よ。
鍾馗　喰ひ物へ入れると、人間でも死ぬぞ。
千代　おッかねえの。爰へ入れて置かう。
ト針箱へ入れる。
鍾馗　大分、密るの。
千代　さうよ。お前は外へ出ちやア、取られた／＼と、聞きたくもねえが、おらア、内にゐても、四十や五十の金になる事はして置くよ。
鍾馗　そりやア耳寄りだ。どうしたんだ。
千代　あの帽子を見な。
鍾馗　ありやア、男の帽子だ。
千代　その瓶の側にある、番傘と雪駄、それを見な。

鍾馗　卜鍾馗、番傘を廣げ　京橋稻野屋、山形に半の字。この雪駄と云ひ、帷子まで。

卜合ひ方になり

千代　遊行の松の俄雨、他生の緣の道連れに、お膳を据ゑた狂言も、丁度幸ひその男の、袖から落ちた手紙の上書き。

卜以前の手紙を出し

名宛も同じ名、半兵衞からの思ひつき、入れ黑子を出たらめに、騙したばかりのその所へ、お前が歸つて來たゆゑに、裏から逃がして歸したも、證據に殘つた金の蔓。

鍾馗　成る程、こいつア、いゝ鹽梅だ。

千代　それもお前の古主の娘御が、吉原町に勤め奉公、その身請けとか、忠義の爲とか云ふから、わたしもどうぞ引眉毛、稼いでなりと思つても、それぢやアお前が男が立たぬと、片意地張るからせう事なし、こんな惡法かく氣になるのサ。

鍾馗　てめえの親仁は、おれが以前の旦那樣、女房と云へど、云はゞてめえも。

千代　よしねえな、そんな事を云ふ手間で。

鍾馗　今日、直々にそこへ仕掛けて。

千代　巧くやんなよ。

卜酒を呑む。

鍾馗　そんならこれから。

千代　待ちなよ。

卜思案して、剃刀を出し、髮の先を切る。此うち喜三郎、のそ〳〵出て、門口に窺ひ居る。

千代　サ、これを持つて行きな。

鍾馗　成る程、如才ねえ、鬼の女房にや。

千代　エヽ、早く行きな。

卜帷子を風呂敷に包んでやる。鍾馗、番傘と雪駄を持ち

鍾馗　併し、此方も都合は二百兩。

千代　足りねえ所は、又どうかなるわな。

鍾馗　そんなら、嬶ア。

千代　早く歸つて來なよ。

卜喜三郎、小隱れする。向うより歩き一人、走り出て、門口を明け

歩き　ヤ、半兵衞さん、今急に會所に御用があるとの事。お出でなすつて下さいませ。

鍾馗　ハテナ。

ト思ひ入れ。

千代　そんなら・もしや。

歩き　エヽ、

鍾馗　イヤ、直ぐに參ります。

歩き　お早くお出でなすつて下さいませ。

ト引返し入る。

千代　折角金儲けの最中へ、不氣味な所から呼びに來て。

鍾馗　イヽヤ、案じることたアねえ。行つて見ての上の事よ。

千代　そんなら行くにして、用が濟んだら、早く歸んなよ。

鍾馗　ムウ…ドレ、行つて來るぜ。

ト向うへ入る。喜三郎、窺ひ出て、立ち聞きをして居る。お千代、思案のこなしあつて、氣を替へ、以前の手紙を出し

千代　なんだ。御心にかけられ、度々お尋ね下され、有り難く存じ參らせ候ふ、未だ淸三郎さま、紛失の一軸、行くへ知れず、難儀いたされ、とも〴〵心を痛めまゐらせ候ふ。猶又この身事は、若殿守之助さま、入間家の系圖をお失ひ遊ばれ候ふゆゑ、國遠なされ、その跡にて兄春藤新左衞門さま、六郎右衞門が爲めに、闇討ちにおなりなされ候へども、乳人役たる身を以つて、若殿の國遠を餘所に見なせし科とあつて、家は改易、それゆゑ、何卒系圖の一卷の在所も尋ね、若殿の御歸參、まつた淸三郎さまの御詫び、兩やうとも、神かけ願ひ居りまゐらせ候ふ。稻野屋半兵衞さま參る。おろく事、龜菊より……そんなら、この龜菊と云ふは。

ト兩人、顏を見合せ

喜三　春藤の妹おろく、その同家中、須磨淸三郎、國鎌倉と隔たれば、顏は知らねど山脇十藏の娘、おきくと云ひ號けでありながら、おろくを連れて家出なし、松葉屋の家へ勤め奉公。又その半兵衞と云ふは、守之助の近習役ゆゑ、若殿の供をして出奔なし、いま稻野屋の養子となれど、內がしつくり行かぬゆゑ、若隱居するとの事。

千代　お前は喜三さん、どうして詳しくその譯を。

喜三　知つてゐるのはその前方、若殿の草履摑み、こんた衆夫婦も入間家に、大恩のある家來と云ふ事、知り拔いてゐる喜三郎。

千代　さうとも知らず、たつた今。

喜三　美人局の、强請り騙り。

千代　エ。
喜三　何もかも聞いてゐたが、首の細つた甍鳶の、喜三郎が目から見てさへ、餘ッぽど太い夫婦の奴等。おれが告げ口すれば、二人ながら首がねえ……と斯う怖面を云つちやア色氣が薄い。どうで取られるこの首なら、いつそ間男合點で、お千代坊、平常からおれが云ふ事を。
千代　おかたじけだが眞平だ。首が細いの太いのと、怖面だけに癇氣障だ。
喜三　成る程、さう云はれると、腹があつて面白い。怖面は止めて、義理で口説かう。
千代　どうしたとえ。
喜三　この一卷こそ、お主達が古主、入間守之助が越度となつた系圖の卷き物。道順と云ふ醫者を頼んで、質に入れようと云ふを、今日の仕事に卷き上げた。この代物がなくなりやア、守之助は一生埋れ木。かゝりや繋がる淸三郎、おろくも歸參のならぬ道理。お千代どん、とつくり思案をしざアなるめえ。それとも、古主の難儀は見捨てる心か。
千代　サア、それは。
喜三　但し、美人局の訴人をせうか。

兩人　サア／＼／＼。
喜三　否とも得心せざアなるめえ。
千代　喜三さん、その口前で、今まで女を、幾人殺したえ。
喜三　どうしたと。
千代　どんな事をしても、お前の口には乘るめえと思つたが、エ、、憎いなう。
　トつめる。
喜三　アイタ、、、。
千代　一つ呑みな。
喜三　姐御、先刻のお客は歸つたかえ。
千代　いつまで居るものか。今度のはお馴染だ。
喜三　成る程、廻しがあると、大儀だなう。
千代　うさアねえサ。とてもの事に、大きな物で始めよう。
　ト茶碗へ鼠取り藥を入れ、これへ一杯注ぎ、口を付ける眞似をして
　サア、助けてくんなよ。
喜三　エ、、畜生め。
　トぐつと呑み。
　カウ、お千代坊、じやらけぢやあるめえの。
千代　知れた事だな。お前もしつかり、腹をこさへてくん

なよ。

喜三　どうせ、首を元手にして居るから……アイタヽヽ

　ト腹の痛むこなし。

罷り間違やア。アイタヽヽ。

千代　どうしたえ〳〵。

喜三　なんだか、急に腹が痛くなつて、物中りのしたやうだ……ア、、苦しい。アイタヽヽ。

　ト仰向きに倒れて苦しむ。

千代　よもや、利きやアしめえと思つたが。

喜三　エヽ。

千代　イヤ、まじなひをして上げよう。

　ト手拭を取つて

喜三さん、ぢつとしておいで。

　ト喜三郎を抱き起し

そのまじなひは、南無阿彌陀佛。

　ト喜三郎の咽喉を締める。音吉、出かけ、様子を見てゐて、吃りして、ウッと仰向きに倒れる。お千代、件の卷き物を取つて、につたり笑ふ。音吉、慄へてゐるを

音吉や、爰へ來な。

音吉　アヽイヽ。

　トお千代、疊を上げろと仕方する。音吉、慄へながら疊を上げ、お千代、喜三郎の死骸を縁の下へ入れ、疊を元のやうにして、門口より外を見ながら

千代　音吉や。

音吉　アイ。

千代　默つてゐなよ。

音吉　アイヽ。

　ト慄へながらべつたりとなる。

千代　エヽ。

　ト門口を締めるを、木の頭。

けちな男だぞ。

　トよろしく幕。

六幕目　　田原町莨屋の場

役名――須磨清三郎。女郎屋女房、おとく。判人、勘七。山脇十藏。同娘、お菊。植村三太郎、喜八妹、お露。同女房、お稲。莨屋喜八。

本舞臺、平舞臺。上手、反古貼り障子屋體。向う、鼠壁。眞中のれん口。いつもの所、門口。この外、一間、常足二重、前面二枚障子をたて、刻み煙草御のみ料と記し、煙草の葉を散らし、よき所に長手の行燈に、痰咳名灸する所、と記せしを掛け、すべて田原町裏手の模樣。爰に甚六、老けたる町人にて、着物を後ろ前にして、側に行燈を置き、お露、やつし振り袖娘、左の片頰に痣の醜き拵らへ、右の方を見物へ向け、甚六の灸をすゑてゐる。下手に山助、着物を捕ひ、帶を締め直してゐる。角兵衛獅子の鳴り物、てんつゝにて幕明く。

山助　ヤレ〳〵、此やうな、いゝ心持ちはござらぬ。

甚六　イヤ、爰のお娘は名人と云ふが、なか〳〵手練を得たものさね。

つゆ　また皆さんの嬉しがらせばつかり……今日は三百、すゑましたわいなア。

甚六　ヤレ〳〵、早かつた。

山助　また明日も賴みますぞや。

甚六　ソレ、爰へ、二人前のお勤めを置きました。

ト甚六、帶を締め直し、兩人、橋がゝりへ入る。お露、道具を片附け、箒にて掃いてゐる。向うより淸三郎、一本差し、着流し、護摩の札を持ち、後より喜八、煙草の箱を提げ、出て來り

淸三　喜八どの、こなたは月代をさつしやつたの。

喜八　サア、一件につき、駈け廻るに、長髮では濟まず、一かばちか、髮月代を致して見ました。

淸三　滅相な。もし日旱にでもなつたら、體が疲れてなるものではない。

喜八　とんだ病に取りつかれ、口惜しうてなりませぬ。

淸三　それはさうとお梅どのは、もう歸つたか知らん。

喜八　何にしろ、內でお相談を致しませう。サ、お先へ。

淸三　ハテマア、ござれ。

ト舞臺へ來り

喜八　お露、今戻つたよ。

つゆ　兄さん、オヽ、淸三郎さまも御一緒でござりましたか。どこへお遊びにお出でなされました。

淸三　なか〳〵、遊びどころではない。若殿のお行くへも知れず、殊には、お失ひなされたお家の系圖、まつた吳道子の一軸は、稻野屋とやらにあれど、質請けするには五十兩餘の金子、急々に調達せねば、母人は御生害。そ

れゆゑ、女房どもにも駈け歩かせても、出來かねるもの
は金錢。
清三　神佛も、見限つた事と思はれるわいなう。
つゆ　搗て加へてお前の病氣、その上、最前も本所の筋
川さまから、姉さんを連れて行くか、母さんに逢はすか
と、惡口たら／＼。やう／＼の事で、出直して來るとて、
戻つたわいなア。
喜八　サア、それも氣がゝり。阿母も、おれが金が要る事
を案じ、筋川の殿樣に、なんぞ借りたとでも云ふ事か。
それにしても、昨日酉の久保へ行くと云はれて、まだ戻
らぬのも不思議。
清三　親子もろとも、足手かいさま、質請けの金調達も
つゆ　明日につゞまる手詰めの切端。
喜八　こりやモウ、どうもならぬ事か。
清三　ア、イヤ、斯う云ふ時の神頼み。奧でお神酒を。
つゆ　ドレ、手傳うて。
清三　アイヤ、それには及ばぬ。
喜八　ハテ、いゝ思案を。
清三　ドレ、祈り出しませうか。
ト　お露、見上げるを、清三郎、見ぬ顏して奧へ入る。

喜八　コレお露、先度も話す通り、大恩のあるお主の落ち
目、命に替へても御歸參をと、思ふに甲斐なきこの節の
不都合。いつその事、あの稻野屋の家へ泥坊にでも入つ
て盜んでなりと。
つゆ　エヽ。
喜八　イヤサ、首尾よう仕負ふせた所が、捕へられて重い
お仕置。さうした時は、母者人は元より、今の女房、又
わが身まで、おれが跛馬に乘つたを見たら、生きた心は
あるまいと、思へど外にあだてもなし、おれが心を推量
してくれいやい。
つゆ　もしいなア、なんぼ忠義が立てたいとて、其やうな
惡い心を出して下さんすな。たゞ口惜しいはわたしの體、
君傾城に身を沈め、今の難儀を救はうにも、二目と見ら
れぬ顏形。わたしや、云ひ譯がないわいなア。
ト　泣き落す。
喜八　エヽ、何を云ふのぢや。兄の慾目でもあらうが、わ
が身は十人並に遙か勝つて……とサ、おれに見ゆるから、
餘所外から見たら、十人並より下がりやせぬ。おれが云
ふが噓と思ふなら、わが身の孝行を立てさせて、勤め奉
公にやるわいなう。

つゆ　そんならアノ、こんなわたしを。
喜八　ハテ廓と云ふ所は手廣い商賣、五十兩は調はずと、せめて十兩になと抱へてくれる人あらば、勤め奉公してくれるか。つい仲の町の横町に、世話する人があるゆゑに、其やうに思ふのなら、行くか行かぬは心任せ。
つゆ　そんなら、どうぞこの身を賣つて、わたしの孝行を、少しなりと立てさせて下さんせ。
喜八　それ程に思うてくれる志し、もどくも却つて本意であるまい。そんならちよつとその人を頼み。併し、肝心の母者人へも。
つゆ　アヽモシ、母さんに云うたら、あのゝものゝと、手詰めの金の間に合はねば、心盡しも水の泡。
喜八　そんなら次手に、嬶が行つた先へ廻つて、この樣子を聞かす程に、もしその世話する人が來たら、わが身、話しを仕出して置きや。
つゆ　よう譯を云つて、來てもらうて下さんせいなア。
喜八　オヽ。
ト門口へ出て戶を締め、齒をくひしばり、こなし。向うより山脇十藏、羽織、大小、着流し、駒下駄を穿き、鼈甲眼鏡、竹の杖を突き出て來り
十藏　オヽ、灸點屋の兄御、聞けば瘧を煩らつてぢやさうな。大分顏色も惡いに、外步るきしては、爲になるまいぞや。
喜八　これは阿部川町の御隱居樣、度々お尋ねなされて下さりまして、今日は起り日ではござりまするが、どうか落したと見え、なんともござりませぬ。
十藏　隨分大事にしたがよい。わしも昨夜から例の疝癪で腰が伸せぬ程に、お娘に一火すゑてもらはうと思つて來た。
喜八　それは早、生憎な……イヤサ、丁度、誰れも落ち合つては。
ト內を明け
お露、御隱居樣がお出でなされた。
つゆ　それはマア、折角のお出でござりまするが、ちつとこちらに。
喜八　アヽコリヤ、地主の御親類、ナ……ハテ、すゑ申して上げやれ。
十藏　ツイ肩癖と、いつもの脇ぜうもんばかりぢや。
喜八　左やうなら、御ゆるりとなされませ。
十藏　早う戻つてござれ。

ト お露、涙を隱し、灸すゑ道具を出す。喜八、足早に、向うへ入る。十藏、内へ入り、

十藏　體の惡いに、あくせく駈け歩き、又ぶり返さねばよいが。

つゆ　あのやうな氣質ゆゑ、ちつとよいと、臥つては居りませぬわいなア。

ト 十藏、肌を脫ぎかけ

十藏　イヤモ、一昨日あたり、すゑて置いたら、持病も發らなんだに、兎角に、後悔先に立たずぢや。

ト お露、灸をほごさうとして、塗り盆に額の寫りしを見付け、痣を撫で、口惜しきこなし。涙にて線香の火、消える。

十藏　病が增長してゐると見え、少しも熱うない。

つゆ　エ、。イエ、まだすゑませぬ、只今麁相で線香の火を消しましてござりまする。

ト 及び腰に、煙草盆にて、また付ける。

十藏　そりや、濡れてゐるぢやないか。

つゆ　ハイ、取替へませう。

ト 外の線香へ火を付け、のれん口の方を見込み、また表を振返り、涙を拂ひ、艾を載せ、火を付け、誤まつて艾を轉げ落す。

十藏　アッ、、、どう致したのぢや。

つゆ　御免なされませ。ツイ、麁相を致しました。堪忍して下さりませ。

十藏　どつこい／＼。そりや／＼。

ト 清三郎、奥より拔き足して出て、門口へ駈け出すを、お露、門口へ出て縋つて

つゆ　コレ、清三郎さま、血相替へて、あなたはどこへ、

清三　なんであらうと、爰放しや。

ト 振り切つて、橋がゝりへ入る。お露、跡追つて入る。

十藏　これは奇妙だ。右は少しも熱くない。

ト 振返り見て

オ、、あの娘は消えてしまつた……こりやア、稀有だ。

ト お菊、屋敷風、振り袖娘にて中間を連れ、向うより出て來り

きく　なんでもお灸に違ひない。

ト 舞臺へ來り

オ、、父さん、氣合ひが惡いと云はしやんして、外へござんしたゆゑ、心にかゝり參りました……其方、歸つてたも。

中間　畏まりました。
ト橋がゝりへ入る。
十藏　オヽ、お菊、よい所へ來てくれた。あの娘め、一火するゑて、逐電してしまつた。これぎりにすると痰が片荷づる。わが身、ちよつとするゑてくれぬか。
きく　大事なくば、するゑて上げうわいなア。
ト云ひながら、障子屋體の内を覗き、又のれん口を見込む。
十藏　お菊〱、コレ娘。
きく　恟りするわいなア。
十藏　わりや、なぜ其やうに覗くのぢや。
きく　わたしや先刻の……イヽ、エイナア、爰らに艾があらうかと。
十藏　エヽ、艾に爰にほごしてあるわい。
きく　ほんにさうでござんしたなア。
トすゑにかゝる。向うより、おとく、女郎屋女房の拵らへ。後より勘七、判人の形。供の男、附き添ひ、出て來り
とく　お前はこの頃まで、大工さんでござんしたが、あの時分から判人を、商賣にしてござんしたかえ。
勘七　イエモウ、いろ〱な眞似をしましたが、この稼業が性に合つたと見え、どうやら斯うやら。
とく　それはさうと、いま、相談をしたいと云ふ子供は、相應な玉でござんすかえ。
勘七　イエ、面は惡い觸込みでござりますが、見るは法樂だ。お次手でござりますから。
ト舞臺へ來り、門口を覗いて
アイ、御免なさい。喜八どのは内かね。
十藏　いま近所まで行かれました。直に歸るから、入つて待つてござれ。
勘七　成る程、ちよつと廻つて行く所があるが、もし先へ行つたなら、娘が灸をするゑて居るから見てくれろと云つたつけ。サ、おかみさん。爰へお出でなさいませ。
とく　そんなら、その兄御の戻るを待ちながら、一服のんで行きませうわいなう。
十藏　モウ〱、堪えられぬ。今日はそれで止めにせう。
きく　卑怯な事を云はしやんす。もつとするゑて上げうわいなア。
十藏　イヤ、内に客を待たせて置いた。
きく　シタガ、やいとするゑた跡では、山を見るが藥ぢやと

云ふ事。爰の二階は、奥山から、上野へかけて一目に見ゆる程になア。
十藏　オヽ、ほんにさうだ。
きく　その次手にわたしも奥に。
十藏　オヽ、お客、お待遠でござるの。
きく　皆さんこれに。
十藏　サア、ちつと見て來ませうかい。
ト十藏、先に、お菊、奥へ入る。
とく　コレ勘七さん、あの器量で、面が惡いとは、お前、かけられたのでござんせうなア。
勘七　わたしやア、玉を見て悔りしました。あの喜八め、器量は甚だ醜いが、急に金の要る事があるから、不便だと思つて、妹を買つてくれ。いま人の灸をすゑてゐるから見てくれと云つたゆゑ、道でお目にかゝつたを幸ひに、お連れ申したら、飛切り玉だ。
とく　なんにせい、早うその兄御が戻つて來てくれゝばよいなア。
ト向うより、お梅、後より喜八出て來り
喜八　ヤイ／＼お梅、おれは病人だ。さうは步けねえわえ。
うめ　それぢやと云うて、段々時が延びるわいな。お前、靜かにござんせ。
喜八　コレ、まだ云ふ事が
トこれに構はず、お梅、舞臺へ來て
うめ　これは勘七さん、ようお出でなされました。
勘七　オヽ、お内儀、喜八どのには逢はなんだかえ。
うめ　主はツイ、そこへ。
ト喜八、來り
喜八　これは／＼早速に、ようこそ來て下さつた。
勘七　丁度、出入り場のおかみさんに、お目にかゝつたゆゑ、お連れ申した。
喜八　さうして妹をお目にかけて下さつたか。
勘七　イヤモウ、すつかりと拜見しましたが、おれを擔いだの。
喜八　イエサ、それだに依つて、器量は甚だ惡いがと。
とく　アレ、まだ眞顏で。マア、平常から勘七どのが、人を騙す報いだと、思へば濟むわいの。
勘七　ハヽヽヽ。イヤこんな騙しは惡くございません。
うめ　そんなら御相談は出來ませぬかいなア。
喜八　出來ずば出來ないまでの事。此方も恥を打明けて、賴むのは、よく／＼な事があるからだ。如何にあんな奴

だと云つて、いゝ加減に馬鹿にしてもらひませう。

勘七　コレ〳〵喜八どん、さう譯も聞かねえで、のぼる事はねえぢやねえか。

とく　私しどもも、慰みに商賣は致しませぬ。子柄も見て、氣に入つたゆゑ、相談をせうと思ふが、それがお前の心に濟まぬのでござんすかえ。

喜八　エヽ、そんなら本統に、あんな奴でも。

勘七　どこにあんな奴。コレ、おらア、氣障な事はねえ。相談をしようと云ふからにやア、否味なしに、買つて行くぜ。

うめ　アノ、ほんまにあの子を、抱へて下さんすか。

とく　なに嘘を申しますものかいなア、

喜八　エヽ、忝ない〳〵。併しながら、この相談が出來ぬと、彼奴めが自分の身を悔んで、どのやうな事を仕出かさうかと、それゆゑ、彼奴が望みを叶へてやりたさが一杯で、ツイ心にもない事を云ひました。勘七どの、料簡さつしやい。モシ、おかみさん、どうぞ御勘辨なされて下さりまして、畢竟、我れ〳〵へ御合力なさるゝ思し召しで、どうぞお遣ひなされて下さりませ。

とく　これはしたり、其やうに卑下なさるゝと、御挨拶に困ります。

勘七　先づ年は七明けとして、お前の方の望みは、どの位だね。

うめ　なんの、こちらからなア、こちの人。

喜八　あんな者を、いくらかくらと、どう申されませう。

とく　それでは勘七さん、ちよつと。

ト脇へ手を入れ、指を捕へて

この位なものでござんせうか。

勘七　初心だから、そこらが兩爲めでございませう。ハヽハ。何しろわたしの方から切り出しませうが、あの子柄だから五年、二十五兩ではどうだらうね。

喜八　エヽ、そりやなんの事。大概、餘所の十人並の娘の、相場も聞いて知つて居ります。それだに依つて、人をなぶり者に。

勘七　アヽ、コレ〳〵。また腹を立てる。よし〳〵。それならおれも肌を脱いで三十兩。

うめ　アレ、こちの人、あのやうな事を云ふわいなア。

喜八　いゝわい。勘七は、氣が狂つたに違ひねえ。

勘七　どうしたと。

とく　これはしたり、わたしが外聞が惡い。あのやうな子

供を、下から付け上げると云ふがあるものかいな。こりや、わしにしろ、腹を立てるわいなア……この人達の商賣がらで、低う相談をするのが働きゆゑ、申さば人を見くびつた仕方ぢやと、お腹を立てさつしやるのも、御尤もでござりまするが、斯う致しませう。わたしが何がなしに、五十兩で相談を致しませう。

うめ　アノ、そりやほんまの事でござんすかえ。

とく　サア、それで得心なら、五十兩、今お渡し申しませうわいなア。

うめ　こちの人、ほんまに五十兩で、買はうと仰しやるわいなア。

喜八　ムウ、そこらなら相談を極めようかい。

ト合點のゆかぬこなし。

勘七　ナニ、相談をしようと云ふか。流石はおかみさん、見とめた所があると見えますね。まだ／＼わたしらは至らねえ。

とく　今宵は假受取りにして置いて、明日、ほんまの證文をしませうわいな。

喜八　そんなら硯を、

うめ　アイ／＼。

ト硯箱を持つて來る。

喜八　文言はなんと。

勘七　一つ金五十兩なり、右は我れら妹、露と申す者、其許へ勤め奉公に差出し、五ケ年の給金として、慥かに預かり申し候ふ、假受取り斯くの如くに御座候ふ。それでお前の實印を。

うめ　サ、爰へ持つて來たわいなア。

喜八　オツとよし。

ト書きしまひ、印を捺して

とく　サ、金を受取りなさんせ。

ト金を渡し、證文を懐中へ入れる。

喜八　これはマア、最前から氣が揉めて居りましたゆゑ、失禮ばつかり申しまして。

とく　それはさうと、奉公人は直ぐに、連れて行かうかいの。

喜八　さうなされて下さりませ。

うめ　さうではござんすけれどな。ならう事なら何やかや、云ひ聞かせてやりたいものでござんすゆゑ。

とく　ほんにそれも尤もでござんす。そんなら其うち勘七さん、奴へ行つて、お茶漬を食べて來ようわいなア。

勘七　有り難え。うなじやれかね。

ト供の男、居眠り居て、目を覺まし

供男　ナニ、私しは眠つては居りません。

とく　きつい邪推者だなう。

ト おとく、勘七、供の男、付いて橋がゝりへ入る。

喜八　女房ども、夢ではねえかな。

うめ　サア、わたしは狐の……金は木の葉ではござんせぬかえ。

喜八　ドレ〳〵……矢ツ張り本當の小判だ。チエヽ、忝ない。成る程、正直の頭に神舍るとは、よう云つたものだな。

うめ　何はともあれ、稻野屋で寶の一軸、請け戻して、若旦那樣へ御安心をさせ申さうではございませぬか。

喜八　大儀ながら京橋まで、行つてくれるか。併し利足を。

うめ　ハテ、それは、わたしが口先で。

喜八　そんなら氣を附けて行きやれ。

うめ　こちの人、行てくるぞえ。

ト金を袱紗へ包み、内懷へ入れ、向うへ走り入る。

喜八　おれが病氣ゆゑ、女の身空で駈け廻り。併し、旦那樣さへ御歸參なされば、妹めも、金出して取返し、今の艱難も昔語り。それはさうと妹めにも、云ひ聞かせ、髮でも撫でつけさせて置かう……お露や〳〵。

ト橋がゝりより清三郎、先にお露、袖に縋つて出て來り

清三　これはしたり、放してくれと申すに。

喜八　ヤア、妹は外であつたか。オヽ、清三郎さまも。

つゆ　わたしを勤め奉公にやつては、義理が立たぬゆゑ、御菩提所で御切腹なさるといなア。

喜八　エヽ、滅相界な。それでは喜八めが、忠義を無足にさつしやるお心か……コレ、清三郎さま、今あなたにさうした事があつたら、若殿守之助さまは、誰れが御先途を見屆けまするぞ。

清三　サヽ、そこに心の付かざるにはなけれども、某ゆゑに、お露を勤め奉公にやつては。

喜八　例へ、妹を奉公にやつても、長く勤めさせは致しませぬ。これが身の代、五十兩受取り、たつた今、寶の一軸、質請けに女房を遣はしましたぞ。

清三　エヽ、すりや眞實か。

喜八　サヽ、この上は若殿樣の在所を尋ね、御歸國あつて

寶を功に、元の御身になつたなら、妹の金を償ひ、めでたう主從歸參して、今の憂き目は昔語り。

清三　ホヽオ、武士も及ばぬ其方が忠節。生々世々、忘れは措かぬ。然らばお露、暫しのうち。

つゆ　なんのマア、わたしの事はお氣遣ひなされて下さりますな。兄さん、早う廓へ、行きたうござんすわいなア。

喜八　オヽ、立派な云ひやう。コレ、わりや廓へ行くについて、なんぞあなたに、お願ひ申す事があらうな。

つゆ　イヽエ。

喜八　イヤ隱すまい。わりや清三郎さまに、思ひを掛けてゐやうがな。

つゆ　エヽ。

喜八　ハテ、兄が知らいでよいものかい……若旦那樣、あなたがお出でなされてより、心ある妹が素振り。ア、可愛や、あの不器量ゆゑ、心に餘る戀路をも、色目に出さぬいぢらしさ。いま奉公の餞別に、情らしいお詞を、かけてやつて下さりませ。

つゆ　ア、コレ兄さん、よう諦らめてゐるものを……サ、お暇申して、もう參ります。

ト立ち上がるを、

清三　お露、待ちや……なんにも云はぬ、忝ない。今まで知らぬ其方の心底、これまで素氣ないわが挨拶、堪忍しや。その心根を聞くからは、二世かけて清三郎が妻なるぞ。

ト下手より、杯と銚子を持ち來り

サ、杯いたせ。

喜八　エヽ忝ない。妹よりはこの兄が、末代御恩に着ますわいなう。

清三　ア、イヤ、恩義は此方より。

喜八　サヽ、このお杯は、其方より上げやれ。

つゆ　ア、勿體ない。わたしやお杯さへ下されば、これより外のお願ひはござりませぬわいなア。

喜八　ドレ。

ト酌をして清三郎呑み干し、喜八、取次いで、お露へさす。

つゆ　冥加もないお杯、有り難う頂戴いたしまする。

ト鼻紙へ包み、懐へ入れる。

喜八　ア、コレ、一世一度の大事の杯。

つゆ　あんまり大事のお杯ゆゑ、お顏の見たい折々には、

初演の繪番附

このお杯を取出し、お側に付き添ひゐる心。わたしやそれを樂しみに、お別れ申しまするわいなア。

ト泣き落す。橋がゝりより勘七先に、おとく、供の男付いて出て來り

勘七　喜八どん、もういゝかな。

ト少し醉ひたるこなし。

喜八　オ、、勘七どの、お内儀も、お出でなされたか。

とく　どうせ明日は又、兄御も證文にござるゆゑ、忘れた用事は後からでも解りませう。

勘七　おかみさん、お前の乘つてお出でなすつた駕籠へ。

とく　ほんにそれがよい。喜助や、駕籠を呼んでおぢや。

供男　ハイ〳〵。

ト供の男は橋がゝりへ入る。

喜八　サ、、得心して居ながら、どうしたものだ。

勘七　只の奉公に出るのでさへ、泣くものだもの。尤もの譯サ。

つゆ　イヱ、未練に泣きは致しませぬ。左やうならば……お連れなされて下さりませ。

ト下手の方を向く。

勘七　ワア、、お前は誰れだえ。

とく　モシ、最前の妹御を呼んで下さりませ。

喜八　サア、わしが妹はこれ一人。

勘七　ナニ、これが貰らうと云つた妹か。

とく　勘七、お前もマア、よい加減に阿房を盡しなさんせ。

勘七　サ、、御尤もだ〳〵……オイ喜八、人間の手妻は、初めて見た。コレ、この女を、五十兩に買ふ者があらうか。サア、キリ〳〵先刻灸をすゑてゐた娘を、出しやアがれ。

とく　これはしたり、こちらには受取はあるし、どうともならうわいの。

勘七　それだといつてお前さん、あんまり人を白痴にしやアがるから。

喜八　それとも先刻、どこぞの娘でも來て、灸をすゑてゐやせぬか。

つゆ　サア、わたしが淸三郎さまを追うて行た跡には、阿部川町の御隱居さまばかり。

喜八　それとも後へ、餘所の娘御が。

勘七　エ、、默れ。先刻灸をすゑて居た娘を出せ。それが

ならずば、五十兩を返せ。エ、、キリ〳〵返事をしやアがれ。
喜八　サア、その金を返したいにも、女房が持つて、京橋の銀座まで、
勘七　ナニ、金はねえ。よし〳〵。代官所へ行つて、今に思ひ知らしてくれる。
ト立ち上がる。
清三　町人待て。
勘七　なんと。
清三　全く騙り事を致す喜八ならねど、これは慥かに物の間違ひ。
勘七　なんだ。物の間違えだと。面白え。今に首と胴との間違えをさせてくれるワ。
ト駈け出さうとする。奥にて
十藏　ア、イヤ。その間違ひの譯を立てゝやりませう。
ト十藏先に、お菊、出て來る。
喜八　ヤア、あなたは御隱居樣。
十藏　灸をすゑてゐた娘を見て、金を渡したとあるは、これが事か。
とく　オ、、ほんに最前見たは。

勘七　それ〳〵喜八、こんな美しい娘を見せ、替へ玉を喰はせて騙りやアがつたな。
十藏　ア、コレ、この娘を渡しさへすりや、よもや云ひ分はあるまいがな。
とく　そりや、モウ、その娘御さへ受取りますれば、この方に申し分は。
十藏　サ、、娘を渡す。連れてござれ。
喜八　ア、イヤ、御隱居樣、御昨今のあなた樣が、斯う云ふ難儀の中へ出て、娘御樣を勤め奉公にやらうとは。
十藏　オ、、最前からの樣子は、殘らず奥で聞きました。これがお上沙汰になつたら、間違ひの事譯は解りませうが、こなさん達の素性を詮議されたら、大切な望みも叶はぬやうな事が出來まいものでもない。サ、、それぢやに依つて此方の娘を、勤め奉公にやれば濟む事。サア、お内儀、連れてござらつしやりませ。
とく　事を分けての仰しやりやう。併し最初の應對は。
十藏　ハテ、なんであらうと、この親が合點で、勤め奉公にやる。證文はたつた今でも、
勘七　イヤ、お前は解つた人だ。こツちやア、その娘さへ受取れば云ひ分はない。

十藏　それならば、娘にも云ひ聞かす間、後方、こなたが
駕籠を持つて。
勘七　参るとしませうか。
とく　そんなら勘七どの。
勘七　サア、お出でなされませ。
ト橋がゝりへ入る。
喜八　アイヤ、御隱居樣、お志しは身に餘り、忝ないとは
申しながら、どうも合點が。
清三　ナニサマ、由縁もなき我れ〳〵が、難儀に替へて娘
御を、勤め奉公させましては、喜八が忠義、二つには、手
前が一分も立たず、あの者どもが歸らぬうち、お歸りな
されて下さりませ。
十藏　さう云はつしやるも御尤も。然らば娘が身の代、受
取りませう。
喜八　サア、その身の代の金が、爰にござれば。
十藏　ア、コレ〳〵、その金取らうとて、大切な母もな
い娘を、勤め奉公にやられうか。此奴めが身の代には、
ちつと外に望みがある。
清三　フム。して、身の代の望みとは。
十藏　外でもない。最前、爰の妹御が、其許樣から貰うた
る固めの杯。
喜清　ヤア。
つゆ　そんならこの杯を。
十藏　近頃無理な無心ながら、お菊に遣つて下さりませ。
清三　フム。仔細あつて、これなるお露へ遣はした、その
杯を。
喜八　どう云ふ仔細で、身の代とは。
十藏　さればサ。味な因縁で。
トお菊、袖を引くを
ハテ、申さぬ事は譯が解らぬ。去年の春、二人の子供を
連れて大師參り、渡し待つ間の莨の火、お菊に貸したお侍
ひは、そなた樣、其方に覺えはなからうが、思ひに餘る
我が子の心根、今日灸をする爲に來たも、喜八に逢うてあ
なたへ頼み、われが望みは叶へさすと、娘の手前を請合
うて、萬一叶はぬその時は、杯ばかりでももらはう
と、出かけて來たれば今の仕儀。それを聞くより、コリ
ヤお菊、お露が代りに奉公に行き、それを功に杯さして
もらふ氣はないかと問うたれば、杯さへする事なら、ど
んな辛い奉公もと、戀を一途に思ひ詰めた、その心根が
不便でござる。

清三　ハヽツ、思ひも依らぬお物語り、一方ならぬお志し如何にも某。
　　トお露に、氣の毒なるこなし。
きく　申し清三郎さま……今年の彌生の初めつ方、お見上げ申せしその日より、焦れ〳〵し折も折、この程、地內でお目もじ致し、猶いやまさる片思ひ。殊にお露さんの心の誠、とてもこの世は儘ならぬと、諦らめました。どうぞあの世で女夫になつて下さりませ。あなたのお爲になる事なら、どのやうな勤めでも、いとひませぬわいなア。
清三　お露が心底、お菊どのゝ貞節。いづれをいづれと、不便に思はぬ事はなけれど、何を云うても手詰めの切端。こりやどうしたものであらうぞいなう。
　　トお露、淚を拭ひ、杯を出し
つゆ　サア、なに不足なきお菊さまが、賤しい勤めをいとはぬとの、お心に耻ぢ入つて、あなたへお讓り申します。
清三　ムウ。天晴れ女に稀れなる心底。
十藏　てもさても、氣の毒な。心根を推量して、もう貰ふまい。
つゆ　イエ、美目も形も劣つたわたし。功も操もない上は、所詮あなたに。
きく　なんのマア、一旦、苦界に沈まうと、思うた心が男へ操。
つゆ　サア、その操を立てたいにも、買うてくれねば、願ひも叶はず、お菊さまには謎まじう、お添ひなされて下さりませ。
きく　お露さん、そのお杯、矢ッ張りお前に。
つゆ　イエ〳〵お前に。
喜八　ア、コレ、爭ふ事はない。妹めが代りになつて行かつしやるお菊さまなりや、上げねばならぬ浮世の義理。
十藏　とや斯う云ふうち、廓の者も迎ひに來やう。
きく　そんなら、お志しのお杯、お貰ひ申し上げまする。
喜八　サ、仲人はこちら兄弟。銚子を持つておぢや。
つゆ　アイ。
　　ト銚子を持つて來る。喜八、お菊へ酌をして、淸三郎へ取次ぐ。
十藏　お露どのへはこの親が、禮は詞に盡されぬ。
喜八　サ、、淸三郎さまへせめてお酌を。
つゆ　アイ。

ト淸三郎へ酌をする。

十藏　オヽ、喜八どの、忝ない。さぞ正直な心から、不便でござらう。子を持つ親の心の內、思ひくらべて、五臓六腑を裂くやうで……ござるわいなう。

ト橋がゝりよりおとく先に、勘七、付いて四つ手駕籠を駕籠舁きに舁かせ、出て來り

勘七　ハイ、また參りました。

きく　そんならわたしは參じまする。隨分ともに、御機嫌よろしう。

ト立ち上がる。

淸三　アヽコレ、待つた……因果な緣に繫がれて、思ひも依らぬ勤め奉公。

きく　なんのいなア。廓があつたればこそ、なり憎いお杯、結ぶの神の勤め奉公、早う行きたうござんすわいなア。

喜八　なんにも申しませぬ。どうぞお身を大切に。

十藏　アヽコレ、隙取る程互ひの未練……こりやお前方、大きに待たせ申した。

きく　おさらばでござりまする。

ト お菊、駕籠に乘る。お露、駕籠の脇へ行き

つゆ　まだ云ひたい事もござんせう。

勘七　オイ〱、お前の爲に、云はずともよい憎まれ口を利いた。おどき〱。

ト突き飛ばす。

とく　アヽ、コレ……そんなら皆さん。

喜八　よろしうお賴み申します。

勘七　やつてくんねえ。

ト垂れを下ろし、駕籠を舁き上げ、花道へ入る。

十藏　オヽ、未練殘さず行きました。皆の衆、褒めてやつて下さい。

淸三　我れ〱主從、詞にも云ひ盡されぬ金子の御恩、御懇意結ばん爲、誠の御姓名、仰せ聞けられて下さります。

十藏　成る程、申して聞かせませう。

ト結納の目錄を出し

卽ち、これが身が本名。

喜八　ドレ……ナニ〱目錄、一つ、馬代金、折紙縮緬五卷、眞綿五抱へ、その外は樽、肴以上五荷五種。

淸三　ヤア、それこそ正しく我が手跡、母深雪の指圖にて、お國元へ結納の目錄。

つゆ　そんならそれを御所持のお方は。
喜八　さては常々、お噂ありし
清三　慥かに山脇十藏どの。
喜八　そんなら今のが
清三　某へ、幼少より云ひ號けの、お菊どのでござつたか。
十藏　アヽイヤ、必らず麁相を申すまい。云ひ號けの女房と知つて、よも勤めには遣られまい……イヤサ、たゞ何所までも初めて逢うた若いお人。
喜八　御隱居樣。
十藏　時節をお待ちやれ。
ト足早に向うへ迫つて入る。お露、胸を押へて
つゆ　アイタヽヽ。
清三　ヤ、こりやお露には
つゆ　また持病の癪が
喜八　オヽ、癪の發るのも尤もだ。奥へ行つて休みやれ。
ト喜八、お露を介抱して奥へ入る。
清三　お菊の貞操、お露が眞實。兎にも角にも、この身一つの罪が恐ろしい。
ト橋がゝりより、お梅出て

うめ　こちの人。
ト奥より喜八出て
喜八　ヤ、もう京橋まで。
清三　して一軸の
喜八　安否はなんと。
うめ　サア、稻野屋の御子息に道で行き合ひ、樣子を聞けば、利足が重なり、八十兩の金持たねば、渡さぬとの愛想ない詞。譯を云へど無得心。それゆゑ、戻つて參りましたわいなア。
喜八　エヽ、如何に利分を取るが商賣ぢやとて、五十兩の質物と云ひ、根を糺せば不正の代物。おれが行て、納得させよう。
清三　それ〳〵、聞入れぬ事もあるまいわい。
ト喜八、帶を締めかへ、羽織を着る。橋がゝりより町飛脚、狀な持ち出て
飛脚　煙草屋の喜八さんとは、爰でござりまするか。
うめ　ハイ。
飛脚　西の久保からお手紙が參りました。
ト手紙を投げ込み、引返へして入る。
喜八　西の久保とは……さては阿母から……ナニ〳〵、云

ふに云はれぬ仔細あつて、今暫らく内へ歸る事出來ず、まつた、本所のお屋敷より、嫁お梅を呼びに參るべく候へども、私し宿へ戻り候ふまでは、決して、お遣はしなされまじく、その上、お梅を内へお置きになりては、心遣ひの事候ふ儘、少しの間、いづ方へなりとも、お屋敷内へお預け置きなされ度く候ふ。母より……コレ、娘、なんぞ覺えがあるか。

うめ　サア、筋川の殿様が、見世へござんす度に、いろいろと主あるこの身へ、無體の有り條。それゆゑ母さんの、戻らしやんせぬもこの入り譯。

清八　でも、お屋敷に智音近付きは。

清三　ア、イヤ、手前が弓術の師匠は、小石川に日置矜之進とて、賴もしき人なれば、これへ便つて。

うめ　直ぐにこれより

喜八　委細は後より、若旦那がお出でなされて。

清三　事の仔細を申す程に、お匿まひ下されと、目印には。

ト懷中より、袱紗を出し

この袱紗は淺原の定紋付き、これを證據に。

喜八　怪我過ちのないうちに。

うめ　とは云へ一人は。

喜八　オヽ、京橋へは廻りなれど、湯島を廻つて、道まで見送り。

ト門口へ出る。三太郎、頰かむり、一本差しにて窺ひ出て

三太　お梅、見付けた。

喜八　ソリヤ、來た。

ト三太郎を内へ投げ込むを、清三郎、捕へて

清三　爰構はずと、少しも早う。

三太　お梅をやつては。

ト門口へ首を出すを、喜八、引き戸にて挾み

喜八　娘、この間に。

うめ　アイ。

喜八　緩りと、ごんせ。

ト三太郎の頭を叩くを木の頭。

さうだ。

トお梅と共に、向うへ入る。清三郎、三太郎を引きつける。これをよろしく。

拍子　幕

初演の繪番附

七幕目

お茶の水の場
京橋稻野屋の場

役名——盜賊、雲霧仁左衞門。手代、和三郎實ハ入間守之助。稻野屋後家、おかん。同甥、甚助。同番頭、伊太六。髮結ひ、三吉。醫者、道順。下女、お玉。同、おます。下郎、伊平。中間、義助。狼の谷次。質屋喜八。同女房、お梅。娘、おけい。鍾馗の半兵衞。稻野屋半兵衞。

本舞臺、奧へ入れて、通しの石垣、向う、屋敷塀を見せ、堀を隔てゝ上手へ寄せ、葭簀張りの出茶屋を疊み、床几を積み上げ、半月を引き出し、松の吊り枝、すべきお茶の水、櫻の馬場、夜の模樣、よろしく合ひ方、時の鐘にて幕明く。

ト向うより中間義助、留守居提灯を灯し、狀箱をかたげ、少し後より、谷次出て來り

谷次　ヤイ〳〵義助、もつと靜かに行け。

義助　それでも旦那が、明日三浦さまへ、弓のお稽古にお上がりなさる、お問ひ合せの狀ゆゑ、早く歸らねばなりませぬ。

谷次　おれもてめえに逢はうと思つて、柳原に立つて居たのだ。併し、いよ〳〵、兄の谷之進が、勘當を赦さねえと吐かすなら、阿母にその譯を云つて、二三十兩、てめえ持つて來てくれ。

義助　そりやア兎も角も致しませうが、お前さん、三河島にキツと、お出でなされますな。

谷次　知れた事よ。晝日中、こんな形で、どこを歩かれるものか。あの元結拔きの市助は、おれが乳母の子だから、その緣で居候ふ。なんでも明日、吉左右を聞かせてくれ。

義助　サア、さういゝ都合に、參ればようございますが。

谷次　所をやれ。

義助　どうも度々の事ゆゑ。

谷次　どうしたと。

義助　イエ、ナニ、力一杯骨を折りますわね。

谷次　そんなら、義助。

義助　お暇いたします。

ト上手へ入る。

谷次　いゝ所で、あの野郎に出ツくわして、下駄を預けて

やつた。何にしろ、これから三河島まで、歸るも面倒……オヽ、爰に茶店がある。ドレ、御休息と出かけようかい。

ト葭簀の蔭へ入る。向うよりお梅、小提灯を灯し、出て來り

うめ　筋違ひとやらまで來たゆゑ、これから聞きながら行けとて、喜八どのは京橋へ行かしやんしたが、道を問ふ人にも逢はず、こりやマア、どうしたらよからうぞいなア。

ト舞臺へ來り

爰に待ち合して、往來の人が來たなら、その小石川とやらを問うて……さうぢや〳〵。

トこの時、葭簀の蔭にて、

谷次　オイ〳〵姐さん、お前、道が聞きてえと云ふのか。

うめ　どなたやら存じませぬが、どこにおいでなされまするえ。

トうろ〳〵見廻し、氣味の惡きこなし。

谷次　ナニ、爰に寐てゐて、道の知れねえ人があつたら、知らせる、おらア、お役人樣だわな。

うめ　それはマア、御深切な事でござりまする。

谷次　さうして、小石川は、どこへ行くのだえ。

うめ　弓の先生さまで、日置谷之進さまとやらへ。

谷次　そりや、おれが兄のべら坊だが、お前は、どこの。

ト顔をよく〳〵見込み、

ヤア、わりやア、お梅ぢやねえか。

うめ　オヽ、お前は谷次どの。こりや爰には、

ト逃げうとするを、引きつけ

谷次　太え女だ。よくもおれを騙して、旅人と逃げたな。この鎌倉へ出たのも、うぬを尋ねて首をぶち切り、男の面を立てる爲だ。

うめ　サア、それは尤もなやうにはあれど、郷戸の龜四郎親方さんが手を切つて、喜八どのに添へと云うて、杯までさしての御深切。立退いたその跡で、お前の顔を立てようと、腹切つて死なしやんしたとの噂。殊には、喜八どのから三十兩出した金を、手切れと思うたら、わたしに恨みはござんすまい。

谷次　親分のべら坊は腹を切つて、おのれが男は立つにもしろ、狼の谷次が面のよごれたは洗へねえ。てめえ、そこに金があれば、それを路銀に連れて退く。懷中を見せろ。

ト手をかける。

うめ　アヽ、これはしたり。今ではわたしも夫のある身。殊には親方さんから、いづ方へ片付いても、一言云ふ者はないと、キツとした書付けを、貰うてござんすわいなア。

谷次　イヽヤ、亭主のおれが不承知なら、何奴がなんと書かうとも。

うめ　でも、それゆゑに命まで。

谷次　そんな事に頓着はねえ。久しぶりだ。極りをつけよう。

ト手を捕へる。

うめ　アレ、爰を放して。

谷次　なぜ。亭主が女房の手を握るに、なんで法度。

ト懐中より、前幕の袱紗に包みし、喜八の紙入れを出す。

うめ　アヽ、それは大事の。

谷次　何が大事だ。

うめ　サア、わたしは、本所の筋川さまと云ふお屋敷へ、是非連れて行かうと云はれるが辛さに、日置さまへ預けられるこの身の上。小遣ひに困らうからと、こちの人と今別れる時、少しの金を貰ひし紙入れ。お前もそれほど困つてなら、中の金を上げる程に、どうぞ見遁がして下さんせいなア。

谷次　イヤ、所を見遁がせねえ。否だと吐かしやア、ぶち切るぞ。

うめ　例へ殺されるとて、お前のやうな邪慳な人に、連れ添うてよいものかいなア。

谷次　さう吐かしやア、もうこれまでだ。

ト白刃を抜く。

うめ　そりやお前、無理と云ふもの……アレエ、人殺し。

谷次　やかましいわえ。

ト切り下げる。

うめ　こりやどうあつても、殺すのぢやな。

谷次　知れた事だワ。くたばつてしまへ。

トまた切りつけ、蹴返して、止めを刺す。橋がゝりより、鍾馗の半兵衛、頬冠り、尻端折りにて出かけ、窺ひゐる。谷次、お梅の懐中より、紙入れを出し、袱紗をほどき捨て、紙入れの金入れを見て

額が二つか。廉い命だ。こいつア見掛け倒しだ。ドレ、着物を。

ト探り寄り、血の滴りしこなしにて

エ、、血だらけだ。こんな物から足を付けられちやア詰まらねえ。人の來ぬ間に、さうだ〳〵。

ト行きかける。半兵衞、窺ひ寄り

鍾馗　オイ〳〵、そこへ行く人……コレサ、ちつと、こんたに無心がある。

谷次　ナニ、おれにか。

鍾馗　外でもねえが、首切り庖丁を、ちよつと借りてえ。

谷次　腰の物を、何にするのだ。

鍾馗　おらが嬶が、癆症を病んでゐるから、この女の首を切つて、黒燒きにして、服ませるのよ。

谷次　フム。それに違えなくば、貸してやらう。ソレ。

ト遠くから投げる。

鍾馗　ア、、危ねえ。

ト取上げ見て

隨分、なまくららしいね。ハ、、、。

トお梅の首を切り落し、血を拭ひ、側へ置き、手拭にて首を包む。

谷次　この事は沙汰なしだよ。

鍾馗　云はずと知れたお互えに……アイ、お大事の物を。

谷次　お安い御用だ。又いつでも。

ト拔身を取つて、鞘へ納め

まさかの時にやア彼奴へかむせ。

鍾馗　皮をひんむき、嬶アと僞はり。

谷次　高見で見物。

鍾馗　どうしたと。

谷次　あばよ。

ト手拭をさばく。半兵衞は首の包みを肩へかけるを、木の頭。

鍾馗　太え奴だなア。

トこれをよろしく、幕。

本舞臺、四間通し、常足の二重。正面、上手、まひら戸の押入れ、暖簾口、帳場、狀差しの書割り、質店の掟札。軒口に、稻野屋と記したる暖簾。舞臺、上手へ寄せ、帳場、格子帳箱。上にたばね錢、側に天秤臺。下手、路地口。いつもの所、門口、すべて質中の體。息子甚助、帳合ひしてゐる。伊太六、十露盤を置いて居る。質置きの仕出し二人、着附けを持ち、立ちかゝり居る。下手に手代和三郎、髮結ひ三

吉に髪を結ばせ、稽古唄、通り神樂にて幕明く。

甚助　六兩一歩二朱と、錢七百六十四文……十三兩二歩、錢十七貫八百六十四文。

伊太　〆めて、十九兩三歩二朱と、錢十八貫六百二十八文。

ト三吉、髪を結ひしまふ。

仕一　サ、若い衆さん、この布子を入れ替へに、單羽織を出してくんな。

仕二　オイ〳〵、明日請けるから、この褞袍で一歩貸してくんねえ。

和三　わたしが呑み込んでお貸し申しますから、明日お請けなすつて下さいませ。

ト金一歩と、羽織を持ち來り

サ、お持ちなさいませ。

ト渡す。質札を書き、二品へ付ける。

有り難え。

仕二　大きに忝なうござりました。

ト兩人、橋がゝりへ入る。

甚助　和三郎、例へ、少々の物でも、おれと云ふものが爰にゐるに、自分呑み込みで貸すは、主人をあるがなしにすると申すものだ。

伊太　これはしたり若旦那、今日はおめでたい日ではござりませぬか。

三吉　番頭さん、めでたい〳〵と云つて、内中のお方が、髪をお結ひなさるが、今日はなんでござりまする。

和三　わたしなぞは、譯も知らないで髪を結ひましたが、どう云ふ譯でござりまする。

伊太　さればいなう、内の娘御おけいさまを、養子に貰つてあつた所へ、後家御樣の甥御のこの甚助さまを娶合せ、跡式讓つて、旦那樣の半兵衛さまは、若隱居したいとの事。さすれば今宵からは、大旦那樣ぢや。

三吉　おけいさまが、御得心なされましたか。それはマア、めでたい事でござります。

和三　半兵衛さまが若隱居がしたいとは心得ぬ……イヤサよい事が重なつて參りましたなア。

ト奥にて

かん　甚助や〳〵。

トおかん、二つ齒、嫌らしき後家の拵らへにて、出て來り

かん　オヽ、爰に何をしてゐやつたぞいなう。

甚助　ハイ、いま番頭と私しが、店おろしをして居りまし

た。
伊太　滅相な。さうではござりませぬ。
和三　ハヽヽヽ。イヤ、私しなぞも、この頃、この帳場へ參りましたがお店のやうな、揃つてお氣立てのよい内はござりませぬ。
かん　さいなう。わしは猫のやうに優しく、息子どのは、蛸の性で吸ひつきたがるが癖ばかり。それぢやに依つて、和三郎も氣兼ねしやんなや。
和三　有り難う存じまする。
かん　イヤ、伊太六、わが身に頼んだ事は、まだ返事を聞いてたもらぬか。
伊太　ハテ、白鼠性の番頭、ズッとぢやでござりまする。
　ト橋がゝりより、伊平、やつし若黨の拵らへにて、袱紗を持ち、お玉、下女の形にて付いて出て來り
伊平　御免下さりませ。阿部川町より參じました。
かん　オヽ、十藏どのゝ御家來、伊平どのでござつたか。
甚助　サヽ、こちらへ〳〵。子供よ、お茶を上げろ。
伊太　お玉どのも御一緒か。さては、今宵のお取持ちに。
たま　お邪魔ながら、上がりましてござりまする。
三吉　ドレ、私しも、お手傳ひを。

　ト三吉、奧へ入る。
伊平　早速ながら、主人申し上げるには、老人も立合ひまする筈のところ、持病が發りましたるゆゑ、委細を娘へ云ひ聞かせろと、申しつかりまして、上がりましてござりまする。
かん　定めて、さうでござんせう。爰にわたしらが居ては又云ひ憎い話しもあらう。
伊太　成る程、そんなら若旦那
甚助　其方も一緒に
伊太　サヽ、ござりませ。
　トおかん甚助、伊太六、和三郎、奧へ入る。
伊平　お玉どの、あの筆どのを嫌ひなさるは御尤も。須磨の家を立てたいばつかりに、旦那樣のお氣拔ひ。首尾よう寶さへ此方へ取れば、後は又、好い思案も出やう程に、共々に口を添へて。
たま　御祝言をさせ申したいもので、ござりまするわいなア。
　ト奧にて
けい　アイ……行きますわいなア。
　トおけい、振り袖、娘の拵らへ、錦畫の卷きたるを持

ち出て來り、

オ、わしに逢ひたいとは、伊平であつたか。お玉も共に、なんの用ぢやぞいなう。

伊平　昨日、旦那樣より、玉に持たせてお文が參りましたでござりませう。

けい　サア、否であらうと、甚助さんと婚禮せいと、實の父さん、十藏さまより度々のお文。わたしや、この錦畫によう似た男を、殿御に持たうと思うたに、情ない身になつたわいなア。

たま　どのやうな錦畫でござりまするか。

伊平　ア、コレ、厄體もない事を。それゆゑにこそ、旦那樣が私しに、仰せつけは、疾よりこの家へ質物に入れある吳道子の雲龍の一軸。あなたと、甚助どのの婚禮の致しなば、引手物にくれると、內々にて後家御の詞。尤も右の品、この家にある事は、半兵衞どのは御存じなく、その品が旦那のお手に入れば、一つの望みの叶ふ事ゆゑ、一旦は祝言の取結び下されるやうにと、事を分けての、お言傳でござりまする。

たま　一旦のお取交せが濟めば、また好い思案もござりませう。

けい　父さんの仰せ、是非がない、得心ぢやわいなう。

伊平　さうして、あなたの御荷物も、五荷調へ、此方から今宵、持ち込む程の事……恩に着る事もござりませぬ。

けい　そんなら必らず、後でこの身を、

伊平　ハテ、惡いやうには仕りませぬ。

たま　それにしても、その錦畫を私しに。

けい　わしや恥かしい。

伊平　ハ、、、高が畫ではござりませぬか。

ト取つて開き見る、向うより喜八出て來り。

喜八　昨日、いろ〳〵に譯を云へども、八十兩持つて來ねば、元利は濟まぬと、非道な事ばつかり云ひ居るゆゑ、戾つたれども、外に工面に仕樣もなし。もう一遍、泣きついて見よう。

ト舞臺へ來り

喜八　ハイ、御免なさいませ。

たま　ハイ〳〵、番頭さん、お人が、ござりますぞえ。

喜八　ア、モシ、憚りながら旦那さんか、後家御さんを、お呼びなされて下さりませ。

たま　旦那はお留守でござりますゆゑ、お家をお呼び申しませう。

ト おけい先に、伊平、お玉、付いて奥へ入る。

喜八　ア、、大所と云ふものは、また格別なものぢやなア。

ト奥よりおかん、一軸の箱を持ち出て來り

かん　わしに逢ひたいとは……オ、、喜八どのとやら、なんの用で。

喜八　ハイ、昨晩も上がりましてお願ひ申しました、呉道子の一軸、五十兩の元金で、どうぞ、請けさせて下さるやうに、あなた、仰しやりつけて下さりませ。

かん　オヤ〳〵、この掛け地の事でござんすか。これは、期月が切れてゐるゆゑ、どの位と云うたか知らぬが、百兩が二百兩でも、請け出させませんよ。

喜八　ア、、モシ〳〵、後家御樣、五十兩の質物に、こなたの内へ入つてゐると云ふ、書き物が手に入つたのは、木曾路の山中で、知つて參りました。根を糺せば不正の品。それゆゑ穩便に、五十兩で請けさせて下さりましたら。

かん　ホ、、、、例へ不正であらうとも、キツとした請け人もあり、ようござんす。此方からお上へ屆けて出るからら。

喜八　ア、モシ、さうなされては、私しどもが心勞は水の泡。

かん　ナニ、粟でも稗でも、頓着はねえ……皆、早う來ても。

ト奥にて

甚伊　ハイ〳〵。

ト兩人、先に、若い者二人、出て來る。

かん　この衆が、呉道子の掛け地を、元金で請けさせろとて、凄味を用ひなさるから、追ひ返しておくれ。

甚助　オヤ〳〵、一昨日かみさんに譯を云へば、又昨夜こなたが出て來る。もう、おかしらしい事を云ふなら、萬兩積んでも、渡す事はならねえから。

伊太　コレ〳〵、いくらお前が、精腹揉んでも無駄ぢや。疾に期月が切れてゐるゆゑ、請けさせるのではなけれども、達て欲しくば、八十兩のお金をお出し。

かん　それは出來まい。阿房も大概がよいぞや。

喜八　そんなら、どのやうに賴んでも。

甚助　殊の外、取込みぢや。

若二　歸らつしやい〳〵。

ト突き出して、門口を締め、若い者は奥へ入る。

喜八　あの一軸については、淵川へ沈まうとした淸三郎さ

ま、君傾城にまでおなりなされたお菊さま、今日明日のうちに手に入らねば、後室様は御生害。こりやなんとしたらよからうなア。

かん　コレ甚助や、あのやうな不法者ゆゑ、また盗みに入るとも知れぬ。奧藏の戸棚へ、キツとしまうて置くがよいぞや。

甚助　なんのお前さん、多人數のこちらの内、どうするものでござりませう。この抽出しへ、斯う入れて置いたら、大丈夫でござります。

かん　ほんに、それもさうぢやなう。

ト喜八、戸の透間より内を覗く。甚助、一軸を帳場の抽出しへ打込む。

喜八　すりや、一軸はあの抽出しへ……死なうと覺悟きめたら、浮世に怖いものとては。

ト伊太六、拔き足して門口を明け

伊太　まだ、うせぬか。

喜八　いま行きますわいなう。

ト心を殘し、向うへ入る。

甚助　たうとう行き居つた。時に番頭、母者が云ひつけさつしやつた、似せ物は出來上がつたかや。

伊太　今日、婚禮の引出物に遣らうとの約束ゆゑ、付いて居て仕上げました。ソレ、御覽なされませ。

ト戸棚より、同じ表具を出し、帳箱の抽出しより、本物の箱を抱へ來て、見比べさす。

かん　オヽ、ほんに、見分けられぬやうに出來たわいなう。

甚助　所でこの箱の方へ、似せ物を入れて。

伊太　本物は、阿母樣の用簞笥へ。

かん　何から何まで、拔け目のない白鼠どの。

ト甚助、箱へ似せ物を入れて、抽出しへしまひ、本物を卷いて

甚助　そんなら母者、お前の簞笥へ。

かん　オヽ、しつかりと、しまうて置いてたも。

伊太　ドレ、わしもこの間に、ちよつと茶づツて。

かん　ア、コレ、わが身、行くなら。

ト囁き

爰へ寄越して、

伊太　承知の濟ぢや。

ト兩人、奧へ入る。おかん、懷中鏡を出し、ちよつと額を直し、嫌らしき思ひ入れ。奧より和三郎、出て來り

和三　大旦那樣がお歸りなされまして、私しに御用があるとは。

　ト おかん、恥かしきこなし。

ア、、旦那は直に、隱居町へお出でなされたと見える。ドレ、お目にかゝつて。

かん　ア、コレ、和三郎、待ちや。

和三　ヘイ。

かん　エ、モ、慇懃に云やる程、わしや慨めしいわいなう。

和三　そりや、なんの事でござりまする。

かん　エ、お前はなう……この頃半兵衞が、新參の奉公人ぢやとて、其方をわしに引合せたその時に、フツと見交す顏と顏、斯うした男と末長く、枕交して死にたいと、思ひ立つてはなんの忘れう。年は三四十違うて居れど、氣味に變りはないわいなう。其方が得心してたもれば、地面の沽券も、有り金も、わしが命も遣るわいの。サア、色よい返事を、聞かせて下さんせいなア。

和三　なんの事やら私しには、合點が參りませぬわいの。

かん　そんならアノ、伊太六が、わが身に、なんとも云やらぬか。

和三　サア、よう御奉公をせいとばつかり。

かん　わしがあれ程頼んだに、さてはおのれが、この後家に氣があるのぢやな。誰れがあんな奴に。コレ、和三郎、もう人頼みはせぬ。わしが心のたけを、書いてやる程に、讀んでたもや。エ、可愛い。

　ト 奧にて

ます　阿母さん〳〵。

　ト おます、下女の拵らへにて、出て來り

若旦那が、ちよつとお出でなされませといなア。

かん　エ、モ、なんぢやいの。コレ和三郎や、爰に待つてゐてたもや。

　ト 奧へ入る。

ます　和三郎どの、お前、今朝から氣合ひが惡いかして、顏色も惡いし、飯もさつぱり。

　ト 奧にて

伊太　おます〳〵。

　ト 出て來る。

和三　オ、、番頭さん。

ます　なんぢやいなア。

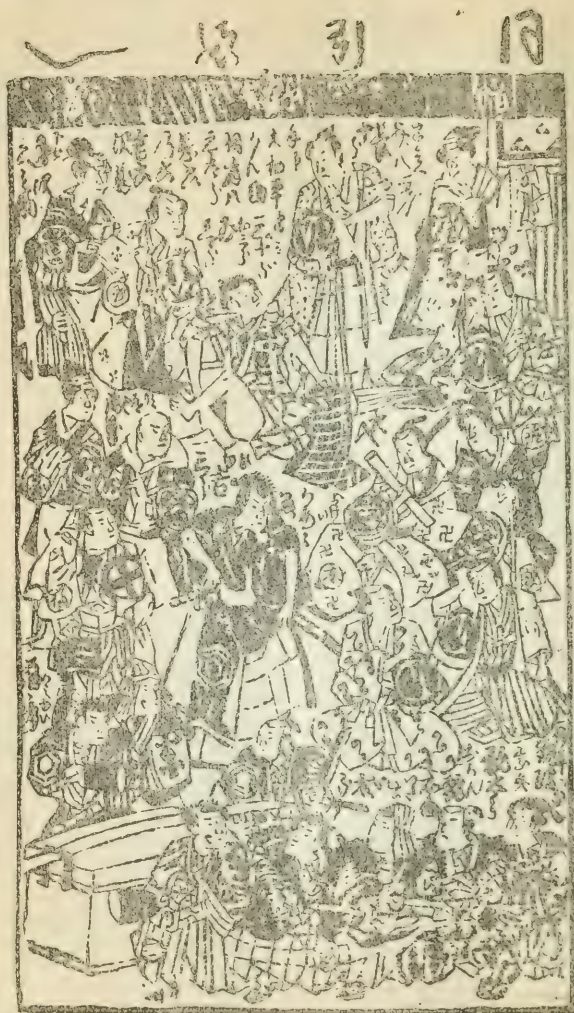
伊太　この中、わが身、なんと云うた。おけいさまが祝言なされたら、お前の云ふ通りにならうと云うたぞや。

ます　サア、アノ、それは。
伊太　今宵は是非とも、否應はならぬぞよ。
和三　さては番頭さんも、今宵は祝言。
ます　エ、モ、憎らしい。
和三　成る程、睦まじうなされませいなア。
　　　トおますを突き飛ばし、奥へ入る。
伊太　今となつて變替へするは、卑怯だ〳〵。
ます　あの、おけいさんは、錦畫にあるやうな男でなくては、女夫にならぬと仰しやつて置いて。
伊太　ハテ、氣強う云うても、そこが女子ぢや。あの錦畫は岡島屋の似顏、それに引替へ、あんな不細工な息子どのと、祝言をするではないか。おやに依つて、わが身も今宵は。
ます　サア、兎も角もするわいなア。
伊太　忍ぶ所は。
ます　奥の茶の間で。
伊太　わが身、合圖に、佛檀にある木魚を打つてたも。
ます　さうしてお前は。
伊太　わしは……オヽある。軒の風鈴を取つて、ちりんちりん。わが身は、ぼく〳〵。
ます　そんなら、伊太六さん。
伊太　キツと詞を番うたぞや。
　　　トおます奥へ入る。橋がゝりより道順、出て來り
道順　伊太六は居たか〳〵……オヽ、昨日お主に頼んだ入間家の系圖、滅相にむづかしい事になつて來たから、どうぞ返して下され。
伊太　あの卷き物は鳶に……イヤサ、鳶に浚はれました。
道順　エヽヽ、油揚げではあるまいし、そんなちやらくらは聞かぬ。あの一卷は、段々と元を糺したら、盜み物で掛り合ふ者は皆、召捕ると聞いたゆゑ、一刻も早く、元へ返さねば、愚老が身分に拘はる。サヽ、返してくれ〳〵。
伊太　それでも、實は巾着切りに浚はれたので。
道順　このべら坊め。金になる代物ゆゑ、取られたとさへ云へば、事が濟むと思つてゐるな。亭主は居ねえか〳〵。
　　　ト奥より、甚助、おかん、出て來り
甚助　こりや、何事でござります。
かん　オヽ、お前は道順さま。
道順　コレ、昨日質物に、この番頭に持たせて寄越した卷物を、今返せと云へば、巾着切りに取られたと、勝手な

事を申すが、これで濟まうと思ふか。
甚助　濟みますな。蟲ばみ鼠喰ひは、置き主の損。火災盜難は、兩損と、あの通り掟書に書いてござります。
道順　葛西か冬瓜か、知らねえが、番頭が盜ましたからは、濟まぬぞ〳〵。
かん　なんであらうと此方の內は、今日は取込みがある。水掛け論は、正月の二つもある時に、掛合つたがよい。サア、歸つた〳〵。
道順　イヤ、大事の代物を返しもせず、其やうな無法な事が。
かん　出て行かずば、おれが帚で。
ト棕櫚帚を持ち、打つてかゝり、四人、ごつちやの、立廻りになる。向うより、四つ手駕籠を舁ぎ、出て、門口へ下ろし
駕籠　ハイ、旦那のお歸りでござります。
ト駕籠の垂れを上げ、半兵衞、着流し、羽織を持ち出て
半兵　大きに、御苦勞。
駕籠　ヘイ、左やうなら。
ト駕籠舁き、橋がゝりへ入る。半兵衞、內へ入り

半兵　ア、危ねえ。どうさつしやります。
甚助　お前は兄貴。
かん　ひよんな所へ。
道順　よう歸つて下さつた。
ト半兵衞、眞中へ住ふ。
コレ、半兵衞どの、昨日、去る所から、結構な卷き物を、質に入れてくれと頼まれ、道でこの伊太六に逢つたから、こなさんに見せてくれと渡したら、道で、掏摸に取られたとて、勝手な事を云ふゆゑ、それでは濟まぬと云へば、阿母も甚助どのも、おれ一人を打つたり叩いたり。おりや口惜しいわいなう。
ト泣く。
半兵　マア、さう急き込んでは譯が解らぬ……コレ、子供や。お茶を持つて來て進ぜろ。
ト奧にて
ます　ハイ〳〵。
トおます、丸盆に、茶碗を三つ四つ載せ、茶臺に、半兵衞の湯吞を載せ、出て、皆々へ出す。後より、おけい、伊平、和三郎、出て來り
けい　兄さん、只今お歸りなさんしたか。

半兵　ヨウ、伊平どの、ようござりました……時に道順さん、その卷き物とは、なんでござります。
道順　サア、高くは云はれぬが、入間家の系圖の一卷でござるわいなう。
和三　ナニ、すりや紛失の。
半兵　ア、コレ……サ、その系圖とやらは、猫が盗み物ではござりませぬか。
道順　サア、後で開けば不正の品。それゆゑ先方へ、早々返さうと云へば、右の體裁ぢやわいなう。
半兵　フム。すりや、その一卷を、伊太六が。
伊太　昨日大師參りの人込みで、ツイ、晝稼ぎに、取られましてござりまする。
和三　皆くれ行くへの知れぬ一卷。
半兵　巡り巡つてこの内へ、質物に來る縁はあれど、それを途中で取られし不運。よく／＼神や佛にも……イヤ、ナニ伊太六、取られたとばかりでは、云ひ譯になるまい。
伊太　イヤ、取られてさへ氣の付きませなんだを、小僧に致へられた程の仕合せ。
かん　それも主が出歩くゆゑ、手代までが有頂天。
甚助　それゆゑ兄貴は今日から隱居。

伊太　知らねど隱居なさる思し召しは。
けい　どうやら便り少ないやうで、この行く末が、ナウおます。
ます　ナニ、旦那樣に、御如才はござりませぬわいなア。
ト女形、皆々、奥へ入る。
半兵　こりや、一思案しにやアならぬわえ。
ト思案のこなし。敵役、顔見合せこなし。向うより鍾馗の半兵衛、風呂敷包みを脊負ひ、番傘疊み、持ち出て、門口へ來て
鍾馗　御免なさいませ。稻野屋半兵衛さんとは、こちらでござりますかね。
和三　ハイ、こちらでござります。
鍾馗　わしは池の端邊から、お屆け物を頼まれて參りました。
かん　そりや、間違ひでござらぬか。
甚助　池の端には近付きは
半兵　イヤ、此方だ。お前、使ひか。御苦勞々々々。
伊太　マア、此方へ入らつしやれ。
鍾馗　左やうなら、御免なさいませ。
ト内へ入り

初演の繪番附

モシ、お前さんが旦那さんでござりますかえ。
半兵　オイ、さうだ。
鍾馗　左やうなら、この帷子と傘は、お前さんのでござりますかえ。
ト包みの横から帷子を出す。
甚助　京橋の稲野屋と云つちやア、紛れつこはねえ。
鍾馗　成る程、そんならいよ〳〵半兵衛さんと云ふ帷子の主は。
伊太　アレ、まだ云つてゐるワ。
半兵　ハテ、これしきの物でも、間違つては済まぬから、念を押すのは當り前だ。慥かに、その半兵衛は、わしが事サ。
鍾馗　面上え。半兵衛がわれなら、間男だ。
ト鍾馗、肌を脱ぎかけ、半兵衛の胸倉を捕へる。皆々、立ち騒ぐ。
なんだ、騒ぎやアがるな……サア野郎め、一昨日おれが留守で、嬶アを慰みものにしやアがつたな。これから、うぬが首を取つて、この屋體を、叩ッ毀すのだ。片ッ端から、覺悟しやアがれ。
半兵　オイ〳〵、なんだか様子は知らねえが、静かに云はつせえ。
鍾馗　イヽヤ、静かに云はねえ。コレ、下谷近邊で、人にも知られた鍾馗の半兵衛。嬶アを慰み者にしられちやア、男が立たねえ。
半兵　そんならお主が、名も半兵衛。
鍾馗　アイ。
半兵　道理で腕の彫物から、思ひ付いたる美人局、大概こんなからくりだと思つた。
伊太　そんなら旦那は、こんなものゝ女房を。
鍾馗　サア、半兵衛とやら。
ト風呂敷包みより、お梅の首を出し
美人局と云はれちやア、これまで立て抜く男の面、よごれ腐つた雨舍り、濡れた袖まで干し上げて、その間男の詮索は證據に殘る番傘に、京橋銀座稲野屋は、外にはねえと此奴が詞。相手の女を殺したからは、此方の亭主の首も取る。うぬらも相伴しやアがれ。
皆々　ヨウ。
道順　コレ〳〵御亭主、こなたの首のあるうちに、おれが方の巻き物の、しらを先へ付けて下せえ。
半兵　ハテ、弟に世を譲らねえうちに出來た珍事、こなさ

んの立たねえやうにはしませぬ程に、落ちついてござりませ……ナニ、半兵衞どん、首まで切つてござつたからは、一通りは聞えたが、二つ枕で寐てゐたを、見付けられたと云ふでもなく、いはゞ當推量、此方も邪推。水道橋から戻りがけ、お茶の水へ來て見れば、首の無え女の死骸。

鍾馗　ヤア。

半兵　サ、この切り首の恰好も、皮を剝いたら、あらはに知れねど、どうやら符合の合ひ紋、胴へ付いたら丸ものに、なるならざるは捨て置いて、おれが首を遣りもせうが、今夜弟に家屋敷を讓るまでは一軒の主。首がなくちやアちつと不自由だ。なんとおれが首に、この女の首をつツくるんで、この稻野屋へ、質に置いちやア下さるめえか。

鍾馗　面白え。置かう。

半兵　さうして望みの金高は。

鍾馗　二百兩。

半兵　アノ、龜菊を身請けの金も。

鍾馗　ヤ。

半兵　イヤサ、ちつと踏めねえ代物だが、未練を云はずに。

鍾馗　貸してくれるか。

半兵　和三郎、出し金の箱から二百兩、持つて來やれ。

和三　畏まりました。慥かに鍵は甚助さま。

甚助　コレ兄貴、このマア血だらけな女の首に。

鍾馗　金を出すが否ならば、兄の首を渡す積りか。

甚助　イヤサ、さうではないが、讓り受くれば有り金諸共。

半兵　イ、ヤ、今夜祝言濟むまでは、讓り渡さぬ、おれが身の上。

伊太　若旦那々々、金錢づくではござりませぬ。早く早く。

甚助　とんだ所で、めりが立つものぢやなア。

ト帳場より二百兩の包み金を持ち來る。

半兵　サア、改めて持つて行きやれ。

鍾馗　改めるにも及ぶめえ。

道順　詰まらぬものはおればかり。

半兵　それも明日までおれが預かり。

鍾馗　併し女房の親兄弟が、金より敵を取りてえと、云つた時にやア、氣の毒ながら。

半兵　いつでも尋ねて來さつせえ。預かつてゐるおれが首。

鍾馗　斯う速かに行くと知つたら、もつと口說いて借りや

うもの。今さら云つても死んだ子の。

半兵　なんと。

鍾馗　イヤサ、嬶アのとひ吊らひ、これこそほんの入れ佛事。

半兵　併し二人の古疵は

鍾馗　破れたならば名醫でも

半兵　滅多に首は繼がれめえ。

鍾馗　ハテ、それも要らざる

半兵　人の疝癪。

鍾馗　半兵衛どん。

半兵　半兵衛どん。

兩人　其うち、逢ひませう。

ト鍾馗、向うへ入る。奥よりお玉出て

たま　甚助さまも和尚さんも、もう日が暮れまするゆゑ、支度をなされませと、阿母様が申してゞござりまするわいなア。

甚助　ほんにそれが何より肝心。

伊太　左やうなら旦那様。

半兵　オヽ、道順さまも居合せたが不肖、手傳つて後で一つ。

道順　御雑作になりませうか。

たま　サア、お出でなされませ。

ト甚助、伊太六、道順、お玉、奥へ入る。

和三　ソレ。

ト奥へ行きにかゝるを

半兵　コレ和三郎、血相變へて、どこへ行く。

和三　サア、あの道順を引ッ捕へ、系圖の出所の詮議をなして。

半兵　イヽヤ、事荒立てゝは、あなたの素性が。

和三　ヤ。

ト半兵衛、内外へこなしあつて

半兵　若殿様、先づ／＼。

ト和三郎を、上座へ直し

お家の系圖を尋ね出し、清三郎どのの隠れ家も聞き出し、めでたう御歸國遊ばさせんと、晝夜心を碎く半兵衛。最早あの道順が手がゝり。彼れが常から好む酒、今宵は醉はして爰へ留め置き、その間に根岸の知るべへ便り、目明かしに申し付け、彼れが女房を騙し聞けば、出所は詳しう知るゝ道理。あなたは女子どもに云ひ含め、道順めに酒を侑め、あなたは内を脱け出して、吉原の松葉屋が

和三　元へお出であつて、手前が參るをお待ち遊ばせ。
半兵　然らば系圖の有無の安否を
和三　キッと吉左右、お知らせ申さん。
半兵　まだその上に、今の惡者。
和三　確りと知つて衒られたも、追ッつけ仔細の解る事。
半兵　そんなら必らず
和三　氣を付けさつしやりませう。
　　ト向うへ走り入る。奥よりおかん、出て來り
かん　和三郎、我が身何してゐやる。
和三　オヽ、あなたは阿母様。
かん　アレ、又かいなう。わたしやおかんと云ふ程に、わが身ばかりは、名を呼んでたもや。
和三　左やうなればおかんさま。これにゆるりと。
かん　そんなら、最前おますが云うたは、ありや嘘かや。
和三　ナニ、おますどのが。
かん　サア、今宵、茶の間で忍ぶ合圖、其方は風鈴、わたしは木魚。
和三　そりや、なんの事……オヽ、さうぢや。成る程おますどのに、云ひ傳へを致しました。
かん　必らず間違へてたもんなや。こりや夢ではないかなう。
　　ト和三郎、ツッと拔けて、上手の横へ入る。奥より、甚助、伊平、出て來り
甚助　母者人、伊平どのが、戻らるゝと申されます。
かん　お前ゆゑなら、いつそ命も。
甚助　これはしたり、どうさつしやりました。
かん　ヤア、甚助か。アノ和三郎……イヤサ、噂をすれば影とやら、伊平どのには、もうお開きか。
伊平　左やうでござりまする。おけいさまも御納得あつて、これに上越すおめでたはござりませぬ。主人へも安堵いたさせ、僅かな荷物も、今宵持參いたさうと存じ、お暇を頂戴いたします。何卒、お約束通り、與道子の一軸を。
かん　ほんに取込んで忘れました。コレ甚助、お渡し申さぬのかいなう。
甚助　そんなら荷物は今夜のうちに、持つてござるのぢやな。
伊平　相違があつてよいものでござりませうか。
　　トおかん、帳箱の抽出しより、似せ物の箱入りを持ち來り
かん　サア、改めて、受取らつしやい。

伊平　私しが見ましたとて無益の事。此まゝ受取り、直ぐに荷物を。

　ト一軸を受取り、門口へ出て

左やうなら甚助さま。

かん　急いでござらつしやい。

　ト伊平、逸散に、向うへ入る。

甚助　さうして、アノ本物は。

かん　わしが用箪笥の中抽出しへ。

甚助　それもよし。ドレ、わしは着物を着替へて。

かん　ほんにわたしも、日暮れ紛れに。

甚助　お前は平常のその形にて。

かん　でも、あの人が、なんとか思ひは。

甚助　なんの、お前の娘も同様。

かん　なんにも知らいで

甚助　初めて男と新枕。

かん　アヽ、コレ、世界が自由になるならば、

甚助　夜の明けぬ國へ

兩人　行きたいものだなア。

　ト後へ三吉、出掛けゐで、足音をさせ

三吉　阿母さん、甚助さん、奥でおますどのが、尋ねて居られまする。

かん　オヽ、その筈〳〵。

甚助　ドレ、斯うしては

兩人　ゐられぬわえ。

　ト兩人、奥へ駈け込む。

三吉　髪結ひとなつて入り込み、殘らず勝手は見屆けた。この通りを。さうだ。

　ト時の鐘の送りにて、逸散に、向うへ入る。この仕組みよろしく、道具ぶん廻す。

本舞臺、平舞臺、向う佛壇、唐襖、上手障子屋體。すこて稲野屋茶の間の模様。爰に、伊太六、白晒の襦袢の形にて風鈴を持ち、腕組みをしてゐる。時の鐘にて道具納まる。

ト伊太六、佛壇の燈明に心付き、吹き消し、風鈴を鳴らしゐる。上手の障子の内にて、木魚の音する。伊太六、嬉しきこなし。上手の障子を、ソッと明け、おかん、長襦袢形にて、小さな木魚を持ち出て、木魚と風鈴を、合はせ打ち、おかしみあつて段々側へ寄り、よろしくこなし。道具ぶん廻す。

本舞臺。三間の間、常足の亭屋體、向う床の間、違ひ棚、眞中に茶立て口。上の方、文庫藏の横を見せ、下手、石燈籠、手水鉢、植込み秋草の盛り、すべて奥座敷の體。爰におけい、甚助、袴、羽織。道順、お玉、おます、居並び、銚子、三つ組杯を並べ、吸ひ物膳、祝儀を置き、祝言の模樣。合ひ方にて道具納まる。

道順　相に相生の松こそめでたけれ。

ます　おめでたう存じます。

甚助　阿母や番頭は何處へ行つたやら。改めて杯をせねば、極りが悪い。

けい　どうせお氣に入らぬわたしゆゑ、この祝言もお氣に入らぬでござんせうわいなア。

甚助　なんの〳〵、大氣に入りぢやが。

道順　内々の婚禮ゆゑ、そんなむづかしい事を云ふより、コレ女中達、お床の一段にかゝらうではないか。

けい　イエ、わたしや、寐る事は嫌ひでござんす。

道順　常は嫌ひでも、今夜は仕方がない。

ます　おけいさま、あれ程得心なされたゆゑ、その錦畫を御覽なされて、今宵はどうぞ。

甚助　さうだ〳〵。わしが又、その男の積りでの……イヤサ、祝言をすれば、よいではないか。

ます　それにしても、お床はどれを敷くのぢやしら。

たま　わたしが阿母樣にお聞き申して。

ト立ちかける。下手より三吉出て

三吉　アヽモシ、只今おけいさんのお荷物、夜具蒲團のお長持が先へ參りました。これへ持ち込みませうか。

甚助　そいつはよく氣が付いた。

三吉　御家來さん、そのお長持を、持つて來て下さりませ。

中間　ヘイ〳〵。

ト橋がゝりより、紺看板の中間四人、誂らへの長持を、擔ぎ出る。

甚助　これは御苦勞。臺所へ行つて、しつかり呑んでござれ。

中間　有り難うございます。

道順　サア〳〵女中衆、直ぐお床を延べようではないか。

お玉　畏まりました。

ト兩人にて長持の蓋を取る。内より雲霧仁左衛門、大百日、好みの形、抜き身を提げ、鷹揚に出る。道順、

甚助、ワアと倒れる。三吉、中間、上着を脱ぎ、夜盗の形になり、隱し持つたる脇差を拔く。庭口と藏の上手より、手下大勢、龕燈、得物を引提げ出る。

仁左　向う水やい。この野郎が。

三吉　アイ、今夜の花聟サ。

仁左　ヤイ、有り金類を有りツたけ取りに來た。案内しろ。

甚助　ワア、私しは存じませぬ。今夜婚禮をすると、身上を受取る積り。まだ受取らない所でござります。

ト此うち道順、下手へ、投げて

道順　泥坊々々。

仁左　ふん縛れ。

皆々　合點だ。

ト道順を引据ゑ、早繩を掛け、猿轡を嵌ませる。

仁左　さうして、今日まで、身上を預かつて居た奴は。

ます　阿母様は、慥か茶の間に。

皆々　ナニ、茶の間とは。

ト奥にて

手下　うしやアがれ。

トおかん、伊太六を一つに縛り、手下二人にて引き立て、出て來る。

仁左　ハヽヽ、いろ〳〵の化物の棲んでゐる內だなア。

手一　佛間の隅に婆アと野郎が、乳くつてゐたゆゑ、其まま引ッ縛つて連れて

べ二　來やんした。

皆々　イヤ、業晒しな奴だなア。

仁左　エヽ、無駄を云はずと、金のどめ所をほざかせてしまへ。

ト刀を二重へ突き立てる。

かん伊　此やうに見えても、金と云つては。

三吉　オイ、隱しても役に立たねえ。おれが何もかも、頭へ知らせて、趣向した今夜の仕事。

伊太　ヤア、こなたは、この中から來た髮結ひ。

仁左　サア、鍵を出せ。

かん　どうして爰に。

手一　イヤ、この婆アが腰に提げてゐやアがる……エヽ、寄越しやアがれ。

ト引ッたくり

そんなら、そろ〳〵。

仁左　文庫藏の前へこの長持を持つて行つて、あらひざらひ、ぶち込んで運び出せ。

皆々　合點でごんす。
仁左　コレ、三吉、われが見込んだ、掛け軸とやらは。
三吉　この婆アが、用簞笥の抽出しに。
仁左　怪我せぬやうに、靜かに働らけ。おれは其うち女どもに酌をさせて、一杯氣を付けてからかゝるべえ、行け行け。
皆々　アアイ。
ト手下皆々、奥へ入る。此うちおけい、錦畫を出し、おます、お玉に囁き、仁左衛門に見惚れし思ひ入れ。
仁左　女ども、酌をしろ。
増玉　ハアイ。
ト恐々酌をする。
仁左　姐え、酌でもしねえ。素人は、泥坊と云やア、おッかねえ者だと思つてゐるが、まんざら野暮な者ぢやアねえ。サ、助けてくれ……なんだ。亭主が見てゐるゆゑ、遠慮するのだな……コレ女子ども、あの婆アの用簞笥の抽出しから、呉道子とやらの掛け軸を、探して持つて來い。
増玉　畏まりました。
かん　不忠者めが。

トこれに構はず、兩人、奥へ入る。仁左衛門、錦畫を拾ひ見て
仁左　こりやア、似顔だな。誰れだ、岡島屋……エヽ、おれが嫌えな役者だ。
けい　お前さんがお嫌ひでも、わたしは大好き。
ト恥かしきこなし。
仁左　お主には、あゝ云ふいゝ聟が。
けい　なんのマア、死ぬ程嫌でござんすが。
仁左　それでも貰つてあつたと云ふからは、來たであらうな
甚助　イエ、まだ一向の初心で、その方のお役には立ちませぬ。
けい　なんで又、甚助づらに。
仁左　ハア、甚助らしい面だなア。ヤイ、甚助、酌をしろ。
甚助　ハ、アイ。
伊太　ちとお相でも致しませうか。
仁左　それには及ばぬ……サア、つげ。
ト杯を出しながら、片手にておけいを引寄せる。甚助、酌をする。

仁左　コレ、おれが怖らしいか。

けい　イヽエ……可愛らしい。

かん　こりやモウ、どうも。

伊太　立ちきれなくなつて來た。

かん　エ、、。

トおかん、齒ぎしりして、伊太六に取りつく。この途端、仁左衞門は、屏風を引き廻す。甚助、ウンと倒れる。この仕組みよろしく、道具、ぶん廻す。

本舞臺、少し上手へ寄せて、土藏の横を見せ、これより下手、こけらの家の棟。上の方、九尺の中二階を押し出し、前面に、障子を建て切り、土藏と二階の間、折り廻し、奥二階見ゆる事。この上廻り、通りの黒板塀、右土藏塗りかへの足代を組み、すべて、稻野屋裏手の模樣。時の鐘の合ひ方にて、道具納まる。

ト向うより喜八、不器用に、頰冠りして、腰に茛庖刀を、紙にくるみしを挾み、出て來り

喜八　ありや、石町の八ツの鐘。先刻戻りに、この裏町を通つたら、土藏の普請の足場が、結つてあつたは、爰から入れと云はぬばかり。併し、人の物を塵一本も取つた事のないに、お主の爲、大勢の爲、泥坊の仕始め、仕納め。モシ、天道樣、大目に見て下さりませ。稻野屋にある一軸は、元私しの主人が預かりの品、盜まれたゆゑに大勢の難儀。私しの命一つを元手に、泥坊に入ります。堪忍して下さりませ。アヽ、あの稻野屋の後家、大息子の無慈悲、慾をかはくにも程のあつたもの。あのやうな惡い人が……イヤ／＼、それよりは人の物を盜まうと云ふおれは大惡人。愚痴な事を云ふ間に忍び入り、帳箱の抽出しにある最前の一軸を。さうだ／＼。

ト舞臺へ來り、いろ／＼こなしあつて

爰の足場から傳はつて、奥の二階へ出て、それから。よし／＼。

ト足場を上がりかけ、さゝくれにて、手を突きしこなしにて、飛び下り

アイタヽヽ、この丸太には、恐ろしいとげがある。足場を組む時、氣を付ければよいに。

トいろ／＼あつて

イヤ／＼、愚痴を云つてゐる所ぢやない。それから事が起つて、女房も阿母も、行くへが知れず、後室樣には、

明後日は御生害。と云うて、仕樣もなし、こりやモウいつそ、死ぬより外に思案はない。さりながら、この稻野屋、おれが恨みでも、ナニ繁昌させて置くものか。それがい〻〳〵。

ト繩を拾ひ、足場へ投げかけ、また心變りながら花道へ行く。始終、犬の聲する。いろ〳〵心迷ひし思ひ入れあつて、トヾ心を定め、一段上がつて、件の繩を、足場へ掛ける。此うち二階を明け、仁左衞門、足場を傳ひ來たり、この體を見て、件の繩の元を、切り落す。喜八、下へ落ちて

ア、御免なされませ。私しは、ほんの出來心でござります。

ト仁左衞門、制しながら、下へ下りて

仁左　シツ〳〵……靜かにしろ。わりやア、首を縊らうとしたから、助けてやらうと、切つて落したのだ。それに出來心とは。

喜八　ハイ、首を縊らぬ前は、爰の內へ泥坊に入らうと存じましたゆゑ……ヤア、お前さんは泥坊だ。

仁左　成る程、おらア泥坊だが、てめえは素人だな。

喜八　イエ、莨屋でござります。

仁左　なんでもいゝが、なんぞ爰の內に、見止めた物でもあるのか。

喜八　ハイ、私しが大恩のある主人の息子どのが、大切な寶を盜まれ、その詮議に日延べをして、浪人をさつしやりました。その品が爰に……五十兩の質に入つて居りますから、やう〳〵の思ひで金を拵らへ、それで請けさしてくれと申しましたら、百兩でも請けさせぬと、邪慳な事を申します。今日明日のうちに手に入りませぬと、後室樣は自害をさつしやります。帳場の抽出しへ、入れたを見て置きましたゆゑ、入らうと致しましたら、犬が吠えるやら、頭をぶつやら、所詮叶はぬ事と諦らめまして、面當に首を縊りませうと存じまして。

仁左　ア、コレ、そりやア惡い料簡。こんたの尋ぬるのは、吳道子の墨畫の龍か。

喜八　エ、よう御存じでござりますな。

仁左　ハヽヽヽ、その抽出しへ入れたは似せ物、思へばあの婆アは惡い奴。併し、なか〳〵こんたの根性では、盜人が出來るものか。この後、そんな惡氣を出すめえぞ。さう云ふ事なら、その掛け地を。

ト腰の廻りを探り、なきゆゑ

ホウ、二階へ置いて來たと見える。ドレ、取つて來て。
ト この時、ソッと二階の障子を明け、おけい、件の一軸を持ち、雪洞を照らし
けい　モシ、お忘れ物が。
仁左　オ、、投つてくれ。
けい　アイ。
ト 下へ投げる。
仁左　コレ、この一軸は、おれら疾から心を掛けて……併し、明日の日知れねえ盗人の境界。い、ワ。田を行くも畔を行くも同じ事だ。われが望みを叶へて、ソレ。
喜八　エ、、忝ない。さうして、あなたのお名前は。
仁左　當時、爰らに隱れのねえ、雲霧の仁左衛門。
けい　フム。そんならお前が
喜八　噂に高き
ト 仁左衛門、喜八の持つてゐる莨庖丁を、引ッたくり、おけいへ打ちつける。これにて倒れる。
喜八　オ、、なんで女中を。
仁左　可哀さうだが盗人の極意。
喜八　ヘエ、。
ト 慄へる。奥にて
大勢　泥坊々々。裏町だ／＼。
喜八　アレ／＼爰へ。
仁左　早く逃げろ／＼。
ト 喜八、大慄へになり、一足も先へ出ぬこなし。仁左衛門、喜八の脊中をくらはす。
喜八　ア、、愕りした。
仁左　行け。
喜八　ハイ。
ト 氣丈になりたるこなしを木の頭。
おさらばでござります。
ト 向うへ走り入る。仁左衛門、見送る。これを、ドンドン、アリヤ／＼にて、よろしく、
ひやうし　幕

大詰

扇ヶ谷問註所の場

役名──盗賊、雲霧仁左衛門。筋川源十郎。吉川九太郎。須磨清三郎。同若黨、磯平。大佛七郎。淺羽十郎。笠松藤馬。金川又八 實ハ 鷲の金次。大工棟梁、金兵衛。鍛冶屋孫兵衛。同一子、善太。

稻野屋息子、甚助。同後家、おかん。同番頭、伊太六。醫者、道順（實ハ茶道順節）。判人、勘七。紙屑買ひ、與六。役人、八之丞。同、坂平。越後屋荷擔ぎ、十藏。狼の谷次。勝見抱えお千代。鐘撞半兵衛。喜八妹、お露。直屋喜八。青砥左衛門藤綱。

本舞臺、向う一面の石垣、高き塀外の道具幕、爰に四幕目の石地藏を木綿繩にて縛り、地車に乘せ、これを又八、先に、町人大勢、曳いてゐる。下手に、八之丞、坂平、股引、大小の形、鉢卷にて、十手を持ち、立ちかゝりゐる。時の鐘、太鼓にて幕明く。

皆々　ゑんやらや〳〵。

又八　待て〳〵。車が轍ツ溜りへ喰ひ込んだ。鐵棒でこぢれ〳〵。

八之丞　マア、一息ついでから引き出すがよい。

ト兩人、床几へかゝる。

坂平　大切な科人、疵でも付けては我れ〳〵が不念に相成る。

又八　違えねえ。中の郷から爰まで引いて來て、地藏の鼻でも缺けちやア、骨折り甲斐がねえ。

町一　鷺の金さん、お前も粹興者だぜ。おいら達は町内で、この地藏さまとは、遁がれられねえ仲だから、引いて來たのサ。

町二　さう云へば、お主は地藏さまに、顏が似てゐるやうだ。

町三　それはさうと、筋川さまから、願ひ出した一件は、まだ落着しねえかなア。

町四　あの一件は、喜八が慥か今日、お仕置になると云ふ事だ。

町五　あの阿母は、何所へ行つてしまつたらう。

町六　何しろ、店請を相手取つて、金を返せと云つたとて、三十兩と云ふ金は出來もしめえ。

町七　イヤ、又その直屋の喜八と云ふ奴は、恐ろしい惡黨だと云ふ事だ。

町八　人を殺したり、家尻を切つたり、人は見掛けに依らぬものだなア。

又八　イヤ、おれもいろ〳〵科人も見たが、石地藏が捕り方に縛られると云ふは初めてだ。モシ、お役人樣、御門の内へ引いて行つても、叱られはしませぬか。

八亟　オヽサヽ其方達が、多力で引いて參つたゆゑ、見物は許す。
坂平　地藏の御詮議を、承はつたがよい。
又八　イヤ、それは有り難え。
八亟　最早、青砥公、お下がりに間もあるまい。
坂平　ソレ、皆の者。
皆々　サア、やれ〳〵。ゑんやらや〳〵ゑんや〳〵。
ト車を引き、役人付き添ひ、上手へ入る。知らせにて、正面の道具幕を切つて落す。
本舞臺、四間通し、高二重本緣付き、向う紗綾形の大襖、上下板羽目、軒づらに、三つ鱗の幕を張り、白洲階子の上、置き舞臺、折り廻し、奥へかけ渡し、すべて、扇ヶ谷問注所の體、二重に、笠松藤馬、侍ひ烏帽子、半素袍にて、願書を讀み、下手に、淺羽十郎、衣裳、上下にて居並び、平舞臺、下手に上下、股立ち、大小の侍ひ二人、扣へゐる。時の太鼓にて道具納まる。
十郎　して、この者は、訴訟所に留め置いたか。
侍二　扣へさせ置きましてござりまする。

藤馬　淺羽氏、御覽なされい。先達て入牢いたせし、須磨清三郎の罪を引請け、裁許を受けたいと、名乘つて出たるは、此奴も大方、櫻の馬場にて、女を殺せし清三郎が同類の者と見ゆる。其奴に、繩ぶつて、禁獄の申付けさつしやい。
十郎　イヤ、その清三郎が家來、磯平と申す者、主人の科を身に引請け、裁許を受けたいと申す程の者、逃げ走りも致すまい。青砥公御下城まで、扣へさせて置いたがよろしからうと存じまする。
藤馬　貴殿は當番の儀なれば、御勝手次第……何はともあれ莨屋喜八、白狀に及びし上は、今日、由井ヶ濱に於て、重罪の刑に行へと、御教書下りたれば、御苦勞ながら其許にも。
十郎　委細承知は仕れども、喜八に掛り合ひの囚人等、未だ御詮議の眞最中にござれば。
藤馬　アイヤ、科極まりし人殺しの科人、側からてきぱき片付けるがよくござる。
ト橋がゝりより、八之亟、走り出て
八亟　ハツ、小由留木、中の鄕の地藏を召捕り、引立て參りましてござりまする。

藤馬　オヽ、白洲へ引据ゑい。
八丞　ハツ。
　ト橋がゝりへ向ひ
　それに扣へし囚人、急いで御前へ。
　ト橋がゝりの内にて
侍ひ　キリ〳〵立たう。
　ト以前の皆々、地藏を引いて出る。
　下に居らう。
　ト皆々、下手へ扣へる。奥にて
呼び　御用仕。
　ト正面の襖を開き、藤綱、烏帽子、半素袍、好みの拵らへ。小姓、太刀を持ち、附き添ひ出て、住ふ
藤馬　ハツ、仰せに任せ、小由留木の石地藏を、召捕らせ、引据ゑてござりまする。
藤綱　凡人ならぬ菩薩の曲者、早速に搦め捕りしも、上の御威光。何は然れ願ひ人、駿河町の太物屋、勝右衛門が荷持ち十藏を、これへと申せ。
十郎　ソレ。
侍ひ　願ひ人十藏、出ませい。
　ト橋がゝりにて

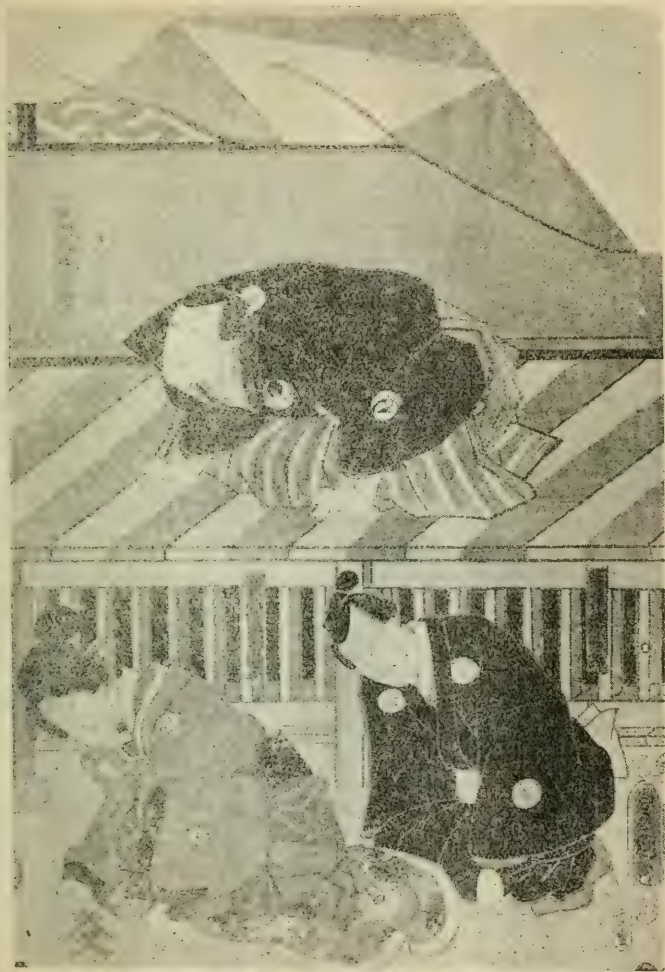
十藏　ハア、。
　ト庄屋、五人組二人、先に十藏出る。
藤綱　勝右衛門下人十藏、其方、主人の荷物を預かり、地藏堂にて寐入り、盗み取られしとは心得ぬ。察するところ、我まゝに賣り拂ひ、主人へは盗まれしと、偽はりしに相違ない。石地藏も、迷惑ながら、其方が引合ひゆゑ、召捕つて參つたり。神妙に申し上げい。
十藏　この年まで奉公いたしますれど、主人の物に箸片し、掠めた事はござりませぬが、實は眠りは致しませぬ。連れを待ち合はせて居りますうち、三四人の侍ひ衆らしいお方が參り、青山さまのお下知なりとて、金を持つた二人の衆を捕へ、多勢に無勢の摑み合ひ。私しは卷添へになつてはと、荷を其まゝにして逃げ出し、程經て戻つて見ましたら、もう荷物は二つとも、ござりませぬのでござります。
藤綱　して、それは、幾日であつたな。
十藏　ヘイ、先々月の二十八日の、明け方でござりまする。
藤綱　その者の面體は見知り居るか。
十藏　餘の人は存じませねが、大小差したお方の顏は、よく存じて居りまする。

藤綱　地藏菩薩は、國土を守る佛、その佛に預けて逃げ出せしは、尤もなり……如何に地藏、其方、衆生を濟度なす身を以て、勝右衛門が下人の荷物を盜まるゝを、知らず顏せしは不埒千萬。但し得心にて盜ませしや。サ、眞直に白狀いたせ……フム。一言の答へなきは、恐れ入りたるや。サ、速やかに、その盜賊を申せ。申し上げぬうちは、供物を斷つて、拷問いたす。左やう心得い……それに控へし者どもは、皆地藏の身寄りなりや。
八丞　ア、イヤ、彼れらは、小由留木近邊の者ども、地車を引きながら、地藏の御吟味を、拜見に參りし者どもにござりまする。
藤綱　ヤイ、爰は天下の問注所なるぞ。それになんぞや、裁斷を見物せんとは大膽者。一人も歸す事、罷りならぬぞ。
又八　ア、モシ、決して御裁斷を拜見に、出ましたのではござりませぬ。皆近邊の者ゆゑ、朝夕この地藏と、心安い者ども。
町一　殊に、今日お召捕りになり、珍らしい事ぢやと、怖い物見たさに
町二　曳いて參りました。何も惡い事は致しませぬ。
又八　どうぞお慈悲に、お赦しなされて下さりませ。
皆々　偏へにお願ひ申し上げまする。
藤綱　ムウ、元は木綿の吟味より起りし事。此まゝには免し難し。過料として、白木綿を一反づゝ、早速持參仕れ。
皆々　ヘイ、有り難う存じまする。
藤綱　ソレ、者ども、門前にて名前を留めい。
八丞　畏まつてござりまする。
藤馬　願ひ人諸とも、皆立ちませい。
皆々　ハア、。
ト又八先に、八之丞、皆々を、追ひ立て、橋がゝりへ、十藏、五人組も足早に入る。
藤綱　淺羽笠松には、死刑と定まりし莨屋の喜八、鎌倉中を引き廻し、由井ケ濱にて、御法の通り取計らひ、立歸つてよからう。
藤馬　すりや、いよ〳〵喜八めを。
十郎　ア、イヤ、喜八に掛り合ひの者ども、未だ落着相成らぬに、彼れ一人何ゆゑに、御成敗遊ばしまするや。
藤綱　オヽ、これには思慮あつての事。さなくとも稻野屋へ忍び入り、吳道子の一軸を奪ひ、娘けいを、莨庖丁に

て切害なし、逃げんとして、土蔵の足代へ片袖を残し置
きしが天の冥罰。裁許は疾より定まり居る。まつた、彼
れが死罪になりしと聞かば、同類の者どもゝ、心をゆる
し、悪事露顕なすは必定。急ぎ用意を致してよからう。
両人　ハッ、畏まりましてござりまする。
藤綱　併しながら浅羽十郎、夜前申し付けし内意、失念な
きやう。
十郎　委細、畏まりましてござりまする。
藤馬　西の久保、孫兵衛、双方呼び出し召されい。
侍ひ　ハッ。
藤綱　両人には、早疾く〳〵。
両人　ハッ。
ト奥へ入る。侍ひ上下へ向ひ
侍一　筋川源十郎の用人、吉川九太郎。
侍二　相手方、西の久保孫兵衛。
侍両　入りませい。
ト上下にて
九孫　ハア、。
ト上手より、九太郎、麻上下、無腰にて、置き舞臺を
渡り、白洲階子の上手へ出る。橋がゝりより庄屋五人

組、孫兵衛を連れて、平舞臺、下手に平伏する。
庄五　ハッ、召連れましてござりまする。
藤綱　筋川源十郎用人九太郎、再應願ひ出でしは、喜八が
母きぬへ、源十郎より金三十両、貸し遣はせしを、店請
け人孫兵衛に、返金いたすやうにと申すのぢやな。
九太　御意にござりまする。
藤綱　相手方孫兵衛、如何ぢや。
孫兵　ヘイ、先達ても申し上げまする通り、喜八が女房お
梅を、妾にお抱へになりまする事なら、その節おこたへ
が有りさうなものを、一向に御沙汰もなく、只今となつ
てお相手取りなされまするは、道が違ふかと存じまする
藤綱　して、喜八が母きぬの行くへは、相知れぬか。
孫兵　サア、先達て途中にて、筋川さまに頼まれて、尋ね
歩いて居つたとて、侍ひ體のお方々が、年寄りのおきぬ
をむごく引立て、本所のお屋敷へ、お連れなされ、直ぐ
に明くる日、私しを相手取つてのお願ひ。姉のおきぬに
逢ふまで、返金の猶豫を致してくれまするやう、ヘイヘ
イ、仰せつけられて下さりませ。
藤綱　ナニサマ、きぬが爪印のみにて、孫兵衛は存ぜぬゆ
ゑ、當人の行くへ知れるまで、宥免いたしくれいとの願

初演當時

の錦繪

ひよ尤も……して、源十郎より、きぬへ金子渡す節、其方立合うたであらうな。

九太　ヘイ、その節は主用で、他出仕りました。

藤綱　して、きぬを見當り、連れ參つた節、其方居り合したであらうな。

九太　ヘイ、その節も、主用がございまして。

藤綱　然らば、きぬが源十郎の屋敷を出でし時、喜八の宅へ戻ると申したか。

九太　ハイ。

藤綱　但しは、孫兵衞方へ參ると申したゆゑ、相手取りしか。

九太　ハイ、他出仕りまして。

藤綱　默らう。此奴、用役を勤めながら、家内の儀、知らぬと申して濟まうと思ふか。きぬが悴喜八は、今日死刑を申し付けたわい。

孫兵　エヽ、そんなら甥の喜八は。可哀や、盜みも私慾にしたでもあるまい、大恩のあるお主ゆゑ、あれがほんの出來心。

藤綱　現在我が子が死刑になると聞きながら、母の身として、隱れ居らう筈はない。孫兵衞、きぬを引立て、筋川へ連れ行きし者どもが風體は。

孫兵　ハイ、いづれも、一本づゝ差さつしやりまして、なんでも筋川さまのお友達のやうな物の云ひやう。

藤綱　ヤイ、九太郎、その者どもが、名はなんと。

九太　私しは一向存じませぬ。

藤綱　旁々以て胡亂な奴。さては紛れ者よな。

九太　實は私しは、四ッ目に居りまする餝細工屋の九太兵衞と申す者でございまするが、四百文づゝ賃を貰ひまして、間に合せの用人になつて、出ましたのでございます。

藤綱　ハヽヽ。道理こそ詞の顚倒。さりながら、この方は、筋川の用人に致して吟味なす。

九太　でも、餝細工の事より外は、なんにも私しは。

藤綱　イヤ、知らぬと申さば筋川の家に拘はる。われも、一旦頼まれたれば、覺悟を致して居らうぞ。

九太　それは、ハヤ、迷惑な。どうしたらよからうなア。

ト慄へる。

藤綱　急ぎ當人罷り出るやう、申し付けい。

坂平　ハッ。

ト橋がゝりへ入る。

藤綱　ソレ、囚人淸三郎、並びに、上槇町金兵衞、これへ。
侍一　ハツ。それに扣へし、上槇町金兵衞、囚人淸三郎、これへ出ませい。
ト橋がゝりの内にて
侍二　キリ〳〵歩め。
ト淸三郎、繩付きにて、侍ひ二人附いて出て來り、上手へ通り、引据ゑる。後より金兵衞、五人組、附き添ひ出でゝ、下手に扣へる。
藤綱　其方、先達て在原橋にて、夜中侍ひ體の者に、金子六十兩、奪ひ取られしと申したが、その盜賊の面體、見屆け置いたか。
金兵　ハツ、恐れながら……實はその金を奪はれましたは、それに居さつしやります、須磨淸三郎さまでござりまする。
藤綱　ヤイ、其方は、容易ならぬ僞はり者ちやぞ……して、その金子の出所はいづく。淸三郎、有り體に申し上げい。
淸三　ハツ、恐れながら、實は、家に預かりの吳道子の一軸、盜み取られしに、巡り巡つて銀座邊に、質物に入れある由。重役より心付けられ、卽ち、金子六十兩、內借として家來に持たせ遣はされしを、青砥公の下知と僞はり、三四人の者どもに、奪ひ取られましたところ、その家來の請け人金兵衞どのに行き逢ひ、この事を、願ひ出すにも、私しは浪人、殊には喜八方に食客の身分ゆゑ、金兵衞の金子にして願ひ出んと、私しの不覺を買ひ取つて願ひくれましたに相違ございませぬ。
藤綱　して、金兵衞より、先達て申し上げし通り、右金子には、極印があるに相違ないな。
金兵　ハツ、山形に二つ引きの、目印がございまする。
藤綱　この度、其方を召捕りしは、先達てお茶の水、櫻の馬場にて喜八が女房お梅を切り殺し、その首を討ち落し、何地へか捨てしに疑ひない。證據は、落ち散つたる淺原家の定紋を、染め出せし袱紗。其方、淺原織部どのに食客の砌り、貸せし事明白なり。何ゆゑ恩ある喜八が女房を殺せしぞ。
淸三　なに恨みあつてお梅どのを殺しませう。やう〳〵右の金子調達仕り、喜八は京橋へ質請けに參らうと申す折柄、西の久保に、逗留いたし居りまする喜八が母より、梅が筋川さまより連れ行かれんも計られず、暫しの間、いづれの屋敷方へなりと、預けるやうにと、急狀が參りましたるゆゑ、私しの朋友、小石川の日置謙之進と申す

方へ、この袱紗を證據に持つて賴まれよ、後より手前參つて賴まんと談合なし、喜八同道いたし、筋違ひにて別れる節、當用にと、金子二歩入りし紙入れを、女房に渡したと、戻つての物語り。後より私し、日置へ參つて、斯やうな女が參らば賴むと、云ひ置く程の事。慥かな證據は喜八を、お呼び出し下されて、お問ひ合せを願ひ上げまする。

藤綱　コリヤヤイ、喜八は最早、今日死刑に相成つたわい。

淸金　ヤ、、、。

藤綱　兩人ともに、立て〱。

ト橋がゝりより、五人組、庄屋、止めるを構はず、判人勘七、お露の、手を引き、出て來る。

侍一　ヤイ、何者なれば狼藉千萬。

侍兩　うぬ、引立てゝ。

ト立ちかゝる。

藤綱　イヤ、何か火急の願ひと見ゆる……ナニ、村役人、いづれの者ぢや。

庄屋　ヘイ、田原町の喜八の妹を連れまして、身寄りの者が、お慈悲願ひに出ましてござります。

勘七　眞平御免なさいやし。家主五人組を、召連れ出ましてござります。

藤綱　ア、、左やうか。

孫兵　オ、、お露、もう叶はぬわいやい。

つゆ　ヤア、お前は淸三郎さま、そのお姿は。

金兵　ア、コレ、爰は問注所。滅多な事を。

勘七　イヤ、わつちやア云ひやす。今あそこで聞いてゐたら、喜八さんは、今日お仕置になされますかね。

藤綱　オ、、當人白狀なせしゆゑ、今日由井ケ濱にて刑罪。

勘七　モシ、爰に居なさる淸さんなぞも、係り合ひの人だらうし、まだ一件が片付きもしねえうちに、なぜ喜八ばかり、お仕置になるのでござります。實に喜八どんは縛られて、阿母は行き方知れず。サア、かみさんも、なんだか氣の毒な事になつて、この娘が可愛想で堪えつけられねえから、今日連れて來やした。なんぼお上だつて、さうぞんぜえに首を、ちよん切りなすつちやア、世間が濟むめえ。お前さんにも、お似合ひなさらぬ事かと思ひやすぜ。

藤綱　成る程、其方が申すのも尤もぢや。併しながら、こりや、譬へぢやが聞きやれ。手前が領知大高は、瓢、夕顏の種を、門並みに作り、殊さら瓢簞は、肥後よりも一

段善いも、みな作り方に依るとの事。最初、種を下ろし、花を持つ頃、手入れの怠つたる一本あれば、その家の垣根は元より、雨露の瓢までが、歪んで一つも役に立たず。花を持ちし頃、とくと見定め、只一本の軸を切つて捨つれば、餘の蔓に障りなく、見事に實りて、徳分を取るとの教へ。サア、大事の寶を紛失させし罪、餘所の瓢にあやかつて、喜八は盗賊、人殺しの大罪。女房は變死、清三郎にかゝる袱紗の證跡、喜八が母のきぬが安否知れざるうちは、疑ひは八方にかゝる。その謂れを以て、自身白狀の喜八を今日成敗なして、罪なき瓢を助ける工風。よも非道ではあるまいがな。

勘七　さう瓢簞を引合ひに出して云ひなさると、一言もございませんが、この娘の云ふのも、可哀さうで堪えられやせん。

藤綱　ナニサマ、兄嫁の横死、母の存亡、兄の珍事。さぞ當惑にあらう。

つゆ　ハイ、如何なるお咎めか存じませぬが、どうぞ私しを、お殺し遊ばして、喜八の一命、清三郎さまのお身の明り。また母さんの行くへも、お上樣の御威光にて、知れますやう、お願ひ申し上げまする。

藤綱　オヽ、神妙の願ひなるぞ。

ト橋がゝりより、坂平、走り出て

坂平　ハツ、仰せつけられました、極印金所持の者、召捕り、引立て參りましてござりまする。

藤綱　これへ引据ゑい。

坂平　ソレ、方々。

ト橋がゝりにて、

侍ひ　立たう。

ト善太に繩をかけ、侍ひ付き添ひ出る。

孫兵　ヤア、わりや悴。お伊勢樣へ拔け參りに行つたと思つたら、この繩目。正直なわれが、友達の卷きぞへか。

善太　父さん、おらアなんにも、しねえものを。

藤綱　犯せる罪のないとは云はさぬ……コリヤ金兵衛、清三郎、金子を奪ひしは、この若者ではないか。

金兵　イエ、承りましたにも、大兵なお侍ひ樣。

清三　その者にはござりませぬ。

孫兵　そりやお情ない。此奴は、生れ立ちからの正直者。

藤綱　その正直者が、なんと致して、觸れの廻りし極印の小判を、所持いたし居つた。

孫兵　それは、姉のおきぬが筋川さまに頼まれ、喜八の手

を切つてくれと渡しましたを、忰に預けましたるところ。
善太　友達に誘はれ、伊勢參宮の路銀には、慥か親仁が無盡の掛け金の鬮に當りましたと存じ、持つて出立いたしてござります。
藤綱　すりや、その出所は、筋川源十郎より受取りしに相違ないか。
九太　それが即ち、源十郎より遣はした金子に、相違ござりますまい。
藤綱　ナニサマ、予も左やう思ふ。清三郎とても、梅を殺せし一埒、明日に分るまで、禁獄を赦す事、罷りならぬさりながら、死罪に相成る喜八へ、申す事あらば、金兵衞へ申し傳へい。
清三　有り難う存じ奉りまする。
孫兵　イヤ、その使ひには、實の伯父の、この孫兵衞を。
藤綱　イヽヤ、汝は善太と親子馴れ合ひの業かも知れず。門外へ出す事罷り成らぬ。
金兵　そんなら、清三郎さま。
清三　サア、主從とも、過去の因緣、死後に汚名の晴るゝを思ひて、心殘さず、成佛するやう云うて下され。
金兵　承知いたしました。

藤綱　最期の際の暇乞ひ。早く〳〵。
金兵　ハツ。
　卜橋がゝりへ入る。
藤綱　筋川參るまで、一件の者どの、皆立て。
皆々　ハアヽ。
　卜この一件、殘らず、橋がゝりへ入る。
藤綱　次は、池の端、勝見のお千代を出せ。
侍一　ハツ。ソレ、お千代を御前へ。
侍二　ハアヽ。
　卜橋がゝりより、お千代、繩にかゝり、拷問に、勞れし體にて出て、下手へ引据ゑられる。
藤綱　ヤイ千代、この程より、拷問にかくれども、白狀いたさぬ死太い女。汝等夫婦、速かに白狀して、多くの人の疑ひを晴らし、お慈悲を願ひ、再び娑婆へ戻り、善道に入つて一生を送る存念はなきか。どうだ。
千代　有り難い殿樣のお詞ではありますが、もう喰ひ詰めた惡事の年明き。いつその思ひ出、白狀せずに、責め殺さるゝのを待つて居ります。
藤綱　その存心ならずば、女の身にて人を殺し、見ず知らずの者に戀慕を仕掛け、大金を強請り、多くの人に難儀

をかけ、餘所に見なす重罪は、よも犯す事相成るまい。
千代　モシお殿様、これまで慰みを商賣にしては居りましたが、人を殺したの、金を强請つたのと、そんな事が、出來ますものか。とんだ無實の災難を着るものだ。モシ、外を御詮議なすつて下さりませ。
藤綱　すりや、いよ〳〵覺えは。
千代　ナニありますものか。それともなんぞ。
藤綱　證據を見せう……ヤア〳〵、大佛七郎、早う參れ。
七郎　ハア、。
ト上手より七郎、鞭先、野袴の拵らへにて出て、藤綱の上手へ扣へる。
藤綱　千代、この者、覺えがあるか。
千代　ヤア、お前は。
七郎　早房の喜三郎、よも見忘れは致すまいな。
千代　すりや、毒に中つて、死んだと思つたは。
七郎　藤綱公の下知に隨ひ、汝等夫婦の惡事をば、見出さん爲、荷擔人を、鼠取りの藥賣りに仕立て、某は晝稼ぎの盜賊となつて入込み、似せ物の系圖を餌にひけらかし、毒に中つて死せしと見せしも、手段なるワ。
千代　エ、。

藤綱　惡事の根元、夫婦の素性、包まず申すか。
千代　サ、それは。
七郎　まだこの上にも、あらがふか。
三人　サア〳〵〳〵。
藤綱　キリ〳〵白狀いたすまいか。
千代　金輪奈落、白狀せぬと、夫を勵まし、拷問を堪えしが、あなたが出れば、最早包み隱すに詮なし。如何にも稻野屋の半兵衞を騙し、夫に金を强請らせました。また惡事を外へ洩らすまいと、あなたと知らず殺害したは、元より夫の存せぬ企み。私しを如何やうのお仕置にも遊ばして、夫が罪を、お赦し下さりまするやう、偏へにお願ひ申し上げまする。
藤綱　ナニサマ、惡に强きは善にもと、夫を庇ふ志し、感ずるに猶餘りあり。
七郎　事落着のそれまでに、其方が望みを
千代　願うて、どうぞ夫の命を
藤綱　助ける工風も
七郎　御前の御賢慮
千代　チエ、、忝ない。
藤綱　それ程までに……ハテ、性は善なりぢやなア。

トよろしく感心の思ひ入れ。時の太鼓にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、常足の土手、この上、松の並木、上下植込み、爰に挾み箱に、藤馬、十郎腰をかけ、絆天の侍ひ二人隨ひ、下手に、金兵衛お露、勘七、付き添ひ居る。禪のツトメにて道具納まる。

藤馬　ヤア、只今死刑に行ふ喜八、逢はす事は罷りならぬ。

金兵　サヽ、それも只今、藤綱さまのお慈悲のお許し。これに居りまするは喜八が妹、あれなるは差添へ人、何卒御憐愍を持ちまして。

つゆ　どうぞ、お逢はせなされて下さりませ。

十郎　藤綱公のお許しとあらば、死罪人參りし上、心殘りないやうに。

金兵　有り難う存じまする。

ト向うより、非人、板幟を擔ぎ、先に、拔身、鑓、誂らへの牢輿を差荷ひ、後より侍ひ、絆天、股引、四天、警固にて出て、直ぐに舞臺へ來り

皆々　サア、出ろ〳〵。

ト牢輿を明ける。内に喜八、淺黄の着付け、荒繩にかかり居るを、莚の上へ引き出す。お露、堪りかね、駈けて寄るを

侍皆　ヤイ〳〵、おのれは、なんと致すぞ。

十郎　アイヤ、藤綱公よりのお許し受け、喜八に逢ひに參つた者ども。許して遣はせ。

侍ひ　ハツ。

金兵　ソレ、お許しだ〳〵。

つゆ　兄さん、逢ひたかつた〳〵わいなア。

喜八　オヽ、妹、よう逢ひに來てくれた。おれも、逢ひたかつたわいやい。

金兵　喜八どの、ひよんな事になりましたなう。

喜八　お前は、どなたか。

金兵　オヽ、わしや請け人の大工の金兵衛。

喜八　もう人樣の顏も、見分らぬやうになりました。

つゆ　姉さんは櫻の馬場で殺され、側に落ちてあつた袱紗が證據と、濤三郎さまも、お前の後から、直くに御牢舍なされましたわいなア。

喜八　すりや、アノ若旦那にも、

金兵　何を云ふにも袱紗が證據、否應なしに召捕られたが、氣の毒な事よなう。

喜八　手紙代りにわしと相談で、袱紗を持たせてやつたのが、若旦那の御災難。エヽ、コレ、この事を……と云つたところが、この身は今に殺される體。

金兵　サア、それゆゑ、藤綱さまが、清三郎どのに、なんぞ喜八に云ふ事あらば、妹のお露に、云ひ傳へして、名殘を惜しませいと、有り難い仰せ。

勘七　サア、云ひ傳へを、云ひねえ〱。

喜八　して、若旦那の、仰しやつたは。

つゆ　主従ともに、無實に沈むも、皆過去の因縁ながら、死後は汚名の晴るゝに疑ひない。それを冥途の思ひ出に、迷はず臨終してたもと、後は涙にお聲もしどろ。なんで此やうな、淺ましい事になつたぞいなア。

喜八　オヽ、堪忍せい〱。稲野屋へ行く前方、泥坊でもしにやならぬと、仇口に云ひしが斯うなる前表。可哀さうなは女房お梅、盗人にがな殺された事であらう。さうとは知らず日置さまの、お屋敷へ落ちついたと思うてゐるうち、袖を證據に入牢なし、身に覺えなき……イヤサ、この體裁。コレお露、兄嫁は非業の最期、兄は斯うした憂き目に逢ひ、阿母の行くへは知れず、剰さへ、われが大事にかける清三郎さままで、牢舎とあれば、生きてゐる心はあるまいが、われでも殘つて居てくれぬと、回向してくれる者がない程に、煩らはぬやうにして、若旦那が赦免にならしやつたら、大切にしてくれよ。

つゆ　サア、今日もお前に成り代り、私しを御成敗なされて下さりませと、願ふに甲斐なく、最早死罪に極まつたとの事。わたしやお前の側で自害せうと、剃刀を持つて來ましたわいなア。

ト剃刀を出す。

喜八　ア、コレ、早まつた事しやんないなう。

金兵　どつこい〱、殺しやせぬ。

勘七　兄貴の遺言を聞かねえと云ふ事があるものか。

ト兩人して、もぎ取る。

金兵　コレ、其やうな事をしては、結句兄貴を、迷はせるやうなもの。

ト紙入れを出し

爰に、身延山のお血脈がある。これを口に含んで往生すれば、浮かむと云ふ教へ。

ト紙入れより御符を出す。喜八、紙入れに目を附け

喜八　ア、モシ、金兵衞どの、その紙入れは、先頃筋違ひで女房に別れる時、渡したわしが懐中の物。どうしてお

前、持つてござる。
つゆ　ほんにこりや、兄さんの紙入れに違ひござんせぬ。
金兵　そんなら今の屑買ひを。待たつしやれ。今そこに。
　ト橋がゝりを見込み
オヽイ、與六さん、ちよつと來て下さい〳〵。
　ト橋がゝりより、與六、屑籠を抱へ、出て來り
與六　ヘイ〳〵、御免なされませ。
金兵　コレ〳〵、急いで爰へ來る道で、紙狹みを落したと
云つたら、買へと勸めたゆゑ、買つたこの紙入れは、人
殺しの證據になる、おつかない代物だよ。
與六　エヽ。
金兵　さうして、どこから持つて來た。
與六　イヤ、さう云ふ事なら……ヘイ、お役人樣へ申し上
げます。この品の賣り主は、三河島の屋敷守り、元結の
職人方へ居候ふ、谷次と申す旅の者。
十郎　オヽ、委細は跡にて吟味なさん。
藤馬　必らずともに、捕り逃がすな。
侍ひ　心得ました。
　ト四人は、與六を連れて橋がゝりへ走り入る。
金兵　コレ喜八どの、忽ちお上の御威光で、いんまの間に、
お梅との、敵は取つて下さるぞや。
つゆ　そんなら姉さんを殺した人が知れたら、清三郎さま
の無實の難も。
喜八　エヽ、忝ない。それでこの世に、思ひ殘す事はない。
藤馬　ソレ者ども、喜八めを、引ツ立てろ。
皆々　ハヽア。
　ト喜八を、非人大勢、むごく引立て、牢輿へ入れよう
とする、向うより、仁左衞門、好みの拵らへにて、走
り出て來り
仁左　オヽイ〳〵、御刑罪を暫らく待つて下せえ。オヽイ、
　ト舞臺へ來る。皆々、ちよつと支へる。
藤馬　ヤア、何奴なれば、この狼藉。何も云はせず、搦め
捕れ。
皆々　心得ました。
仁左　イヽヤ、狼藉は仕らねど、お願ひの筋あつて、罷
り越したる私しを、支へるゆゑに、斯くの仕合せ。
　ト立廻り、キツとなる。
藤馬　して、其方は、
皆々　何者なるぞ。
仁左　ヘイ、この界隈に隱れのない、雲霧仁左衞門と云ふ、

盜賊めでござります。

皆々　なんと。

仁左　承はれば質屋喜八、京橋稻野屋へ盜賊に入り、娘を殺せし科とあつて、今日御刑罪になるとの事。その稻野屋へ押し込み、金子三千兩、その外、着類手道具を奪ひ取り、娘を殺せし重罪人は、即ち雲霧仁左衞門、私しめでござりまする。

喜八　オヽ、ほんに、その夜にお目にかゝつたお泥坊さま。

仁左　如何に御詮議が嚴しいとて、無實の罪に落ちると云ふは、意地のねえ男だなア。

喜八　イヤ、あの夜の盜賊は私し。しかも呉道子の一軸を、盜んだが慥かな證據。

仁左　その外、大金と云ひ人殺しを、素人のこなさん達に、どうして思ひも依らぬ事。

喜八　イヤ、人殺しも、盜賊も。

仁左　イヤ、雲霧仁左衞門だ。

喜八　イヤ、この喜八。

ト上手にて

七郎　兩人ともに、爭ひ無用。

ト出て來る。

藤馬　ヤヽ、貴殿は大佛七郎どの。

十郎　先づ〳〵これへ。

ト床几を直し、七郎、これにかゝり

七郎　かゝる珍事のあらん事を、青砥公、賢察ましまし、一件落着ならざるうち、喜八を死罪に裁許なし、今日暮れ六ツに刑罪なせよと、時刻を延ばせしは主人の明智。

藤馬　イヤ、喜八めも、覺えあればこそ、自身の白狀。例へ仁左衞門、名乘り出たりとも、死刑を免がるゝ例しもござるまい。

喜八　如何にも、稻野屋の盜賊は、私しに相違ござりませぬ。

仁左　コレ喜八、寸志の情を報はんとて、我れを助けんと云ふ心底は嬉しいが、これこそ誠に無益の沙汰。この仁左衞門は今までに、數限りもねえ盜賊夜盜人殺し。只一口を遁がれても、どうせ骸は野へ出して、痩犬の腹を肥す兼ねての覺悟。せめてこなたのやうな、善人を救つたならば、墮地獄の苦患も、ちつとは助からう……ヘイ、お役人樣、どうぞ喜八は、お助けなされて下さりませ。

藤馬　イヽヤ、喜八を拷問せし、斯く云ふ笠松藤馬が、助けては役目の越度となるわい。

七郎　アヽイヤ、貴殿を始め、我れ〳〵まで、列座の場所へ、名乘つて出しは　申さばおてまへの譽れ、越度とは申されず……ナニ喜八、仁左衞門は、昔に聞えし強盜、上を重んじ、明白に申し上げたり。最早その僞はり申して詮なし。

喜八　ハヽツ、お上のお慈悲、雲霧どのゝ情、隱すは却つて、心を無にする道理ゆゑ、申し上げます。私し主人の身替へる、吳道子の一軸が、稻野屋へ質物に、入つてあると承り、やう〳〵金を調へて、請けさせてくれと申せば、百兩出してもならぬとの無得心。さうなる時は、古主の母御は御生害、いつそ盜んで金を置き、主人の命を助けようと、稻野屋の裏手へ廻り、いろ〳〵にあせれど身がすくみ、所詮盜みはならぬと諦らめ、首を縊めようと致せし折柄、このお人が私しを助け、譯を尋ねてこなたに忠義を立てさせうと、彼の一軸を下された、嬉し紛れに、足代へ、殘した片袖へ氣も付かず、戾つて間もなく露顯して、望みも叶はず斯くの仕合せ。雲霧どのの情の返禮に、この身を捨てゝこなたの罪を輕くせうと思つたゆゑ、私しでござりまするを、申し上げましてござりまする。

つゆ　そんなら兄さんは、このお方へ義理を立てゝ、御成敗を。

七郎　それにて明白に相分つた。青砥公へこの由、つぶさに。

仁左　すりや、お聞濟み下されて。

つゆ　アノ兄さんの

喜八　今日の死罪は。

七郎　再び吟味の、その上にて。

四人　エヽ、忝ない。

侍ひ　ソレ、大法なれば、仁左衞門へ繩打て。

侍皆　心得ました。

ト木綿の太繩を、仁左衞門へ掛ける。時の鐘になる。

金兵　ありやもう、入相

つゆ　見送りながら共々に

喜八　これは皆樣の御厄介

侍皆　サヽ、早く〳〵。

ト以前の牢輿へ喜八を入れて、戸を締める。

仁左　サ、お引き下されませう。

皆々　立たう。

ト牢輿を非人舁き、絆天侍ひ、仁左衞門を引立て、十

郎、藤馬、後皆々附いて、七郎は侍ひ三人に囁く。三人、下手へ小隠れする。七郎、後を押へ、向うへ付いて入る、上手より谷次、頰冠りにて、出て來り

谷次　命冥加な奴もあるもの。あの喜八めに女房を淩はれ、それゆゑ腹を切つた親分の間抜け、金は忽ち消えてしまひ、所に居られず、また鎌倉へ出て來たところ、久し振りでお梅に出ツくわし、金にせうと嚇しに拔いた脇差の、ツイ手が廻つておツ殺し、金でもあるかと懷を見たら、亭主の紙入れにたつた二歩。喜八は捕へられ、今日死罪になると聞いて、見物に來て見たら、仁左衛門めが名乘つて出たが、あの鹽梅では、丸抜けに、出牢するは知れた事。女房を取られた意趣晴らしに、やツつけてしまはにやアならねえ。併し、おれも日蔭者。ドレ、そろ〱と歸るべえか。

ト行きかける。上手より與六と、絆天侍ひ二人、十手を持ち窺ひ出て

與六　谷公々々。

谷次　紙屑買ひの與六か。なんの用だ。

ト舞臺へ戻る。

侍二　捕つた。

谷次　エヽ、何をしやアがる。

ト立廻り。

谷次　さては、おれを訴人したな。

與六　オヽ、御用がある。ちよつと斯うして。

谷次　ナニ、猪口才な。

ト與六を蹴返す。以前の侍ひ三人出て

三人　捕つた。

ト立廻りキッとなる。これより六人を相手に、面白き立廻り。好き見得にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、元の問注所へ戻り、所々に朝顔付きの燭臺を並べ、二重に、藤綱、上下に着かへ、住ひ、平舞臺、下手に又八、以前の町人、木綿を一反づゝ、名前書を付け持ち居る。白洲階子の上下に、以前の上下侍ひ、扣へ居る。時の太鼓にて、道具納まる。

侍ひ　ハヽ、小由留木の町人、銘々反物を持參仕つてござりまする。

ト緣端へ並べる。

藤綱　オヽ、早速の持參、過分に思ふぞ。ソレ、勝右衛門が下人を、これへ。

侍一　ハツ。
侍二　十藏、出ませい。
ト十藏、五人組、付いて出る。
又八　コレ、貴樣が麁相で取られた木綿の穴埋めを、こちとらが過料で埋めるやうなもの。
町皆　これがほんの、地藏そんでござるわいの。
十藏　お氣の毒な事でござりまする。
藤綱　ナニ、十藏、盜まれし木綿、この中になきや。改めい。……ソレ。
侍ひ　ハツ。
ト木綿を、十藏に改めさす。中より一反、選り出して
十藏　ハツ、恐れながら、この一反、店の印判の捺したのがござりました。
侍ひ　ハツ。
ト藤綱の前へ持ち行く。名札を讀み下し
藤綱　又八。
又八　ヘイ。
藤綱　その者に繩打て。
ト橋がゝりより絆天侍ひ出て、又八に繩かける。
その反物は、いづれで求めた。
又八　サアそれは、アノ……エヽ、拾ひました。
町一　イエ、この男の內には、まだたんと、戸棚の內に積んでござります。
十藏　そんなら、この人が盜んだか。
皆々　ヨウ〳〵〳〵。
藤綱　地藏を吟味いたしたればこそ、早速に盜人顯はれ、其方どもゝ滿足ならん。過料の反物、戾して遣はせ。
ト木綿を皆々へ返す。
皆々　ヘイ、有り難う存じます。
藤綱　立て〳〵。
皆々　ハア、。
ト町人、皆々立つて、橋がゝりへ入る。
藤綱　十藏が木綿盜賊に逢ひしも、極印金を奪ひしも、同所同日。兼ねて沙汰ありし鷺の金次とは、其方よな。
又八　ヘイ……イエ、私しのやうな色の黑い者が、鷺なぞ異名を取らう筈がござりませぬ
藤綱　此奴、一應では白狀すまい。ソレ、引ツ立つて拷問いたせ。
侍ひ　心得ました……キリ〳〵うせう。
ト引立て、橋がゝりへ入る。藤綱、侍ひへ囁く。これ

藤綱　にて十蔵を連れ、下手の地蔵の蔭へ扣へろ。
侍一　筋川源十郎、相手方孫兵衛を呼び出せ。
侍二　ハッ……筋川源十郎。
両人　相手方孫兵衛。
双方入りませい。
ト上手より、筋川源十郎先に、九太郎附き添ひ出て、置き舞臺に住ふ。下手より、孫兵衛、庄屋五人組出て、平舞臺へ平伏する。
藤綱　筋川源十郎、今日も用役を以て、再度の願ひなりしが、其方喜八が母きぬへ、推して證文を書かせ、金子三十兩渡したる筋を、有體に申し上げい。
源十　ハッ、恐れながら、推して書かせましたる儀にはござりませぬ。
藤綱　然らば、何ゆゑ請け人も立てず、母の爪印のみにて、手渡し致せしぞ。
源十　親子の間柄ゆゑ、母が承知いたせば、彼れらを證據に立てるにも、及ぶまいかと存じます。
藤綱　梅には喜八と申す夫のある身を、三十金母に渡し、緣を切れと申すは不法とや云はん。その後、途中にて其方が申し付けとて、母きぬを連れ行くを、これなる孫兵衛、止めるを打擲なし、門内へ入れぬとの事。その後孫兵衛が方へ戻らぬを、匿まひありとて、彼れを相手に取りしは如何。
源十　ハッ、すべて當人にかゝらんと致すには、店請け人を相手取ると承はりしゆゑ、彼れを願ひ出でましてござりまする。
藤綱　用役には、他より借用の金子と申せしが、何方より借り請けしぞ。
源十　ハッ、その儀は……根岸に小田道順と申す醫者、圓覺寺の普請金を、貸しつけまする者ござりまして、三十金、借り請けましてござりまする。
藤綱　幸ひ、今日道順、貸し方取立ての儀にて、罷り出であり。これへと申せ。
侍一　ハッ。……町醫者道順、急いで出ませい。
ト源十郎、ギヨッとしたるこなし。橋がゝりより道順出る。
藤綱　道順、其方、先月下旬、それに扣へゐる筋川源十郎へ、金三十兩、用立てたる覺えありや。
道順　イエ、筋川さまへは昨年中、五兩金お貸し申し、御返金なきゆゑ、なか〳〵一錢も、お貸し申しは致しませ

ぬ。

藤綱　源十郎、上へ僞はりを申し上げるか。

源十　アイヤ、實は小袋坂の親類どもより、借り請けましたれども、親類と申し上げるも如何と存じ。

藤綱　ヤア、前後不揃ひの申し口……ソレ、上槇町の金兵衞、立歸へりしとの事、呼び出だせ。

侍二　ハッ、上槇町の金兵衞、出ませい。

金兵　ハッ。

ト金兵衞、四人組付き添ひ出る。

藤綱　大工金兵衞、在原橋にて、其方が金子を奪ひ取りしは、これなる源十郎ならずや。

源十　人にこそ依れ、某も、系圖正しき筋川源十郎。町人の金子を奪ひしなぞとは、憚りながらお目鏡ちがひかと存ずる。

藤綱　金兵衞、如何ぢや。

金兵　ハッ、先程申し上げる通り、當人は清三郎さまゆゑ

藤綱　存ぜぬと申すか。……ハテサテ困つたもの。その盜賊を見知りし者は……オ、幸ひ、召捕り糺明を申し付けたる石地藏……ヤイ地藏、その夜の盜賊、有り體に申し上げい。地藏申せ。十藏なんと。

ト地藏の蔭より十藏、顏をさしのべ、源十郎を見て、我れを忘れ

十藏　ヘイ／＼、私しはとくと知つて居ります。あのお武家樣に、違ひはござりませぬ。

ト小隱れする。源十郎、心付かず

源十　ハヽヽ、藤綱どのゝ裁斷、定めて嚴しい事と思へば、子供たらしの地藏が聲色。あまり呆れて……イヤサ、驚ろき入つてござるわい。ハヽヽヽ。

藤綱　ヤア、さては汝的中なし、血迷ひしと覺えたり。その節、木綿荷を脊負ひ、連れを待ちし駿河町、越後屋勝右衞門が下人、地藏堂に居合はせ、とくと見屆けしとあるゆゑ、彼所へ忍ばせ、有り體に申せしを、地藏の聲色と心得しは、天罰佛罰目のあたり。まつた入間家の納戸金、山形に二つ引きの極印に心付かず、喜八が母に渡せしを、金子は店請け人孫兵衞が悴、善太に持參させ、先へ戻せし途中にて、朋友に誘はれ、伊勢參宮に行きし道中、善太を召捕り吟味いたせば、其方より出せし金子とあり。見知り人十藏が申し口、汝これにてもあらがふか。速かに白狀いたせ。

源十　イヤ、面體似寄りは幾らもあり、殊には、二十九日

藤綱　夜明前、星明りにて、あらはに顔を見知らうや。
藤綱　星明り、夜明け前とは、どうして存じた。
源十　イヤサ……それこそ近邊の人の噂。
藤綱　達て陳ずる上からは、ソレ、又八を引き出せ。
ト橋がゝりにて
侍二　心得ました。うせう。
ト又八を、引ッ立て出て
下に居らう。
源十　ヤア、あれは鷺の金公だ……イヤ、金公どのでござりまする。
又八　筋川の御前、こなたが落ちてしまはしやつたゆゑ、陳ずるも無駄と、何もかも、白狀してしまひました。
源十　ヤイ〱、某が落ちてしまひしとは、さては計略に乘り、何もかも……イヤサ、餘り拷問が強いゆゑ、覺えない事、申せしよな。
又八　そんならお前は、何も云はねえのであつたか。
藤綱　イヤ、白狀の次第により、其方の罪は免さん。どうぢや。
又八　もう取つて返しはならぬ。汝がお乳母で、半兵衞と金を持つた二人連れの侍ひに、藤綱のかまのお下知と僞はり、詮議と云つて懷中より、金の胴卷を引ッたくつて、逃げ散りました。まだその上に喜八が婆アが、お梅を逃がした業腹紛れ、行くへを云へとて蚊責めに責め殺し、屋敷の隅へ埋めるまで、手傳つたが、ろくな禮も寄越さねえ。その報いだと諦らめさつせえ。モシ、どうぞ私しばかりは、お赦しなされて下さりませ。
藤綱　オヽ、よくぞ申した。一旦助けんと申せし詞に二言はない。ソレ、その者を次へ連れ行き、手當を致せ。
侍二　畏まつてござります。
ト引き立て入る。
藤綱　サ、同類白狀に及ぶ上は、罪に伏すか。
源十　イ、ヤ、日頃よりたわけの又八、彼れが如何やうに申すとも、某、毛頭覺えはござらぬ。
藤綱　ヤア、大膽不敵の烏滸の者、青砥藤綱が裁斷に、批判あらば、ぶて聞かん。
源十　サアそれは。
藤綱　白狀するや。
兩人　サア〱〱。
藤綱　返答いたせ、ドヽどうだ。
源十　ホイ。

ト當惑のこなし。

藤綱 繩ぶて。[illegible]し上げるか。

侍ひ ハツ。[illegible]ともより、借り請けまし

ト兩人、置き舞臺より、源十郎を引き下ろし、早繩をかける。

藤綱 相手方孫兵衞、金子の盜賊相解り、滿悦にあらうな。

孫兵 有り難う存じます。

藤綱 孫兵衞、十藏、立ちませい。

源十 思ひがけねえ匹夫ゆゑ、身の一大事を。

侍二 キリ〱立たう。

源十 やかましいわえ。

ト源十郎、九太郎を、引ツ立てられ、上手へ、孫兵衞、道順、十藏、橋がゝりへ入る。

藤綱 金兵衞、喜八が生死を見屆け、安心の仕つたか。

金兵 ハツ、すりや兼ねてより、仁左衞門が名乘り出で、喜八が命をお助け下さりまする、お慈悲でござりまするか。

藤綱 稻野屋一件を、呼び出せえ。

侍ひ 京橋、稻野屋一件、入りませう。

トおかん、伊太六、出て、上手へ通り、甚助五人組、付いて出て、下手へ平伏する。

藤綱 稻野屋當時の主、甚助、先達て盜賊に遭ひ、女房げいを殺害されし訴へ、早速召捕り、今日御刑罪に相成る。左やう心得ませい。

甚助 ヘイ、今日御訴訟申し上げますは、別のお願ひでござりまする。

かん イエ、甚助より私しは、目上でござりまするから、先へお願ひ申し上げます……恐れながら申し上げまする。主半兵衞病身ゆゑ、隱居いたし、あれなる私しの甥を跡へ直しましたれど、どうも家風に合ひませぬゆゑ、これなる手代を跡目に致しませうと申すを、出る所へ出るとて、現在の叔母を相手取る罰中り。お察しなすつて下さりませ。

伊太 尤も、少々づゝの宛行ひは、甚助さまへ遣はすやうに、對談も致しましてござりまする。

藤綱 フム……訴訟いたすには、其方にも申し分があると申すか。

甚助 ヘイ、恐れながら、私しの實の伯母でござりまするが、元々、稻野屋へ二度添ひに入りまして、間もなく半左衞門が亡くなりましたは、伯母が大事にしすぎたと、

評判でござりまする。ところで、先日盗賊が入りまして私しが、まだ觸りも致しませぬおけいを、亂暴仕りまする。奥では人違ひで、伯母とあれなる番頭が、婚禮を仕りましてござまする。

伊太　イエ、なんぼわたしでも、こんな……イエ、斯うした御主人樣と、契りを籠める存じ寄りは、ござりませぬが、眞ッ暗がりの假枕。

かん　此やうな上方者は、嫌ひでござりましたが、フトした事が緣となり、只今では、實に可愛うござりますわいなア。

甚助　サア、それから急に、番頭を跡目に立てると、憎い仕方。例へ、半左衞門、死去いたしても、佛壇に位牌がござります、こりや位牌間男。

かん　イエ〳〵、位牌構はず甚助は、勘當々々。それに半左衞門どのが遺言にも、おれが死んだ跡までも、甚助は内へ寄せるなと云はしつたを、他人にかゝるが嫌さ、われを内へ入れて、たうとう半兵衞を、隱居させるやうにした恩も忘れ、おのれがやうな。

甚助　伯母は、元は養子娘のおけいがお乳母で、半兵衞どのゝ遺言狀には、奉公人ゆゑ、後家のかみさんのと云ふ事はならぬと、書いてあつたを、切り拔いたは、おれと差向ひの仕事。それに、半兵衞どのまで我が子あしらひ。おのれは元一文づゝ貰つた乞食婢であつた……お殿樣へ申し上げます。どんなに太い奴か知れませぬ。また番頭も、恐ろしい太い奴でござります。そこへ伯母めが惚れ込んだと見えます。

伊太　イヤ、人さんはあのやうに云うてゞござりまするが、ツイ一通りの番頭でござります。

藤綱　もうよい〳〵。甚助が位牌間男と申すも一理あり。定値段七兩二歩は、伊太六より遣はすやう、キッと申し付ける。その金子を持つて、何國へなりと參れ。また遺言狀の通り、後家おかんは、奉公人なれば暇を出し、番頭伊太六と添はして遣はす。

伊太　ヘイ、有り難う。

かん　でも、稻野屋を出されては。

甚助　すりや、私しは稻野屋の、

藤綱　三人とも、宅へ歸ること罷りならぬ。

三人　さうして跡目は。

藤綱　隱居半兵衞、再勤の申し付ける。

伊太　そんなら、これから。

甚助　元の杢阿彌。
かん　これも誰れゆゑ。
伊太　ハア、戀は諸道の。
甚助　態がいゝなア。
侍二　立ちませい。
三人　ハアイ。
　ト橋がゝりへ入る。
侍ひ　喜八が女房へ渡せし紙入れを、賣つたる者を召捕り、御門まで引かれましてござります。
藤綱　それ待ちかねた。これへと申せ。
侍一　三河島の囚人、急いで御前へ。
　ト橋がゝりにて
侍三　きり〳〵歩め。
　ト繩付きの谷次を引き立て出る。
　下に居らう。
藤綱　弓術の師範、日置谷之進どのゝ舍弟、同苗谷次郎、久々の對面、靑砥孫三郎を見忘れは致すまいな。
谷　ナニ孫三郎。
　ト振返り
　オヽ、そんなら名高き藤綱どのとは、こなたであつたか。

藤綱　先づは貴公も息災にて何より。者ども、予が竹馬の朋友へ、何ゆゑ繩を打つた。
三人　その儀は。
藤綱　急ぎほどいて、詫び致せ。
侍一　ハツ。
　ト繩をほどき
　ハ、ツ、段々の誤まり
三人　恐れ入りましてござりまする。
藤綱　何はともあれ貴公へは、無禮ながら、この程より、現責めに致せし鍾馗半兵衞を、これへと申せ。
侍一　ハツ。囚人半兵衞、引ツ立て召されい。
　ト橋がゝりの内にて、絆天侍ひ
侍ひ　性根を附けて、キリ〳〵歩め。
　ト鍾馗半兵衞、勞れし體にて、絆天侍ひ四人付いて出て
半侍　下に居らう。
鍾馗　アヽ、悧りした。少しも眠りはしねえものを。
　トまた居眠る。三人、割り竹を持ち
三人　性根を付けい。目を覺ませ。
　ト舞臺を打つ。

鍾馗　これよりは、この頃までのやうに、火水の拷問が増しであつた。エヽ、とんだ責めに遭ふもんだなア。
谷次　聞き傳へては居たれど、現責めを見るは初めて。さりながら、朝から晩まで吟味をして、さぞ飽きる事であらう。これからおれも爰へ來て、助けてやつちやア、どんなものだ。
藤綱　それは忝ない。朋友のよしみに、助けておくりやるか。
谷次　稽古の爲、詮議して見よう……して、彼れが名は。
藤綱　異名は鍾馗、名は半兵衞。
谷次　よし〳〵……ソレ者ども、性根を付けろ。
三人　ハツ……目を覺まし居らう。
鍾馗　アヽ、苦しい〳〵。
谷次　ヤイ半兵衞、惡事の白狀いたし居らう。
鍾馗　そりやア御無理と云ふものだ。
ト谷次、半兵衞をよく〳〵見て
谷次　オイ、鍾馗々々……こんぢう櫻の馬場で、嬶アが勞症だから、黒燒にして服ませると、おれが脇差を貸して死骸の首を切らせたが、よく嘘を吐く奴だ。あれからどうしたえ。

鍾馗　あれを皮剝きにして、京橋の稻野屋の內へ捻ぢ込み、嬶アの美人局ぐるみ、二百兩借りたやつよ。
谷次　その金を、なんに遣つたのだ。
鍾馗　おれが主人の爲によ。
藤綱　もうよい。ソレ、申し付けたる藥湯を。
ト橋がゝりより
道順　ハツ。
ト藥湯を銀張りへ入れ、道順持ち出て、半兵衞に呑ませる。これにて目の覺めしこなしあつて
鍾馗　アヽ、はつきりしたわえ。
藤綱　ヤイ半兵衞、櫻の馬場にて女房が、勞症の藥になすと、これなる谷次が脇差を借り、死骸の首を打ち落し、皮を剝いて京橋稻野屋へ持ち行き、二百兩借り請けしと、只今汝が現の白狀。それも主人の爲と申せし上は、最早遁がれはあるまいかな。
鍾馗　ヤヽ、それをどうして。
谷次　知つた者はおればかり。なんと動きは取れまいかな。
鍾馗　フム。さう云ふお主は後の月、お茶の水にて女を殺し、逃げ去る所を呼びとめて。
谷次　貸してやつたは、おれが脇差。

鍾馗　ハテ、變つた奴が。
藤綱　今日雇はれの
谷次　詮議の役人。
鍾馗　口拍子に白狀したか……　エ、現責めに性根を亂し、一大事を云つたる不忠。女房が手前も云ひ甲斐ねえ。エヽ、口惜しい事だ。
藤綱　イ、ヤ、女房千代も最前白狀。
鍾馗　ナニ、すりや拷問に堪えかねて。
藤綱　イ、ヤ、疾より藤綱、間者を入れて、殘らず惡事を見屆けし、早房の喜三郎は、誠は大佛七郎なるワ。
道順　道順と名乘り、市中へ入込み探りしは、當家譜代の茶道順節。
谷次　併し、おのれを白狀させしは、この日置谷次郎が計略一つ。孫三郎どん、褒美はしつかり。
藤綱　如何にも取らす。ソレ、者ども、縛しあげい。

ト突き落す。

三人　ハツ。

ト谷次に繩をかける。

谷次　さては、この谷次を僞はつたな。
藤綱　ホヽ、朋友なりとも、宥免せぬが依怙なき政道。汝この地に忍び居ると聞きしゆゑ、樣子窺ふ今日只今、其方が賣りし紙入れは、喜八がお梅へ渡せし一品。何ゆゑあつて殺害せしぞ。
谷次　オヽ、お梅は元、この谷次が女房、横合ひから三十兩の金を押しつけ、盜み去りし、云はゞ間男した女。
藤綱　イ、ヤ、鄕戸龜四郎が命を捨てゝ、汝が手切れ貰ひ請くれば、喜八が女房、それを殺せし、おのれは大罪。
谷次　チエヽ、いめいましい。
藤綱　願ひ人、稻野屋の主、手代もろとも、千代一件かゝり合ひの者ども。これへ。
侍一　ハツ。稻野屋一件、双方出ませい。

ト上手よりお千代を、侍ひ引立て出る。

藤綱　如何に半兵衞、掠め取つたる二百兩の行き道、明白に申し上げい。
鍾馗　最早なんと包みませう。私しはその以前、入間の家老、春藤帶刀さまへ若黨奉公、惣領の娘御は、即ちこれなる女房お千代、大恩ある主人の目を掠め、連れ退いたる不忠者。やうやく青物の荷を擔ぎ、商ひしてゐるうち、惡事へ導く手慰み、はした錢から取りついて、後には夫婦が衒りの相摺り。異名も勝見のヤレ鍾馗のと、仇名呼

ばれて心の増長。主家は不慮の災難にて、御子息新左衛門さまは横死、妹御のおろくさまが、君傾城とは露知らず、松葉屋にて名乗り合ひ、爰ぞ御恩の送り所と、身請けを聞けば二百兩。

千代　とても腐れた夫婦が體、強請り衒りをしてなりと、妹おろくを請け出し、まつた兄上のお育て君守之助さま、系圖の一卷紛失させ、國遠遊ばした御在所を尋ね求め、系圖も手に入れ御歸國と、夫婦の者が思ひつき、半分も成就せぬうちに、主人の名までも白狀を、せねばならぬ業晒し、元より覺悟と云ひながら

鍾馗　意氣地のねえ身に

兩人　なつたなア。

藤綱　盜賊雲霧仁左衛門、煙草屋喜八、かゝり合ひの者ども、一同これへ。

侍二　ハッ、莨屋喜八、雲霧仁左衛門、その外、かゝり合ひの者ども、急いで御前へ

皆々　ハア、。

半侍　歩め。

ト上手より仁左衛門先に、清三郎、喜八、絆天侍ひ附いて出て、喜八を後向きに座らす。下手より孫兵衞、お露を連れ、磯平、金兵衞出る。

侍ひ　下に居らう。

藤綱　如何に雲霧仁左衛門、盜賊とは申しながら、强慾非道の豪家へ入り、盜み取つたる金銀を以て、貧苦に迫る者を助け、剰さへ、喜八死罪と聞くと其まゝ、名乘つて出でし正直節義。藤綱、感激いたしたり。

仁左　ア、イヤ、運盡きてお捕へにならんより、忠義に凝つたる喜八に代り、御刑罪を請けるが、珍らしからぬ仲間の掟。

藤綱　それに引替へ逃げ隱れ、あはよくば、兄谷之進を、殺さんと計る谷次が惡逆、まつた筋川が積惡、諸人に渉り、清三郎喜八が無實の疑ひ請けたるも皆因縁。その難儀を償はんとせし喜八、今こそ汝が忠義を立て、上へお取上げとなりし吳道子の一軸、其方へ遣はす間、清三郎が歸參の手土産。まつた、半兵衞夫婦の者に罪あれども妻は夫の命に代り、夫は古主の恩義に命を捨てんとせし忠貞、兩人へは入間家の、紛失なせし系圖の一卷、故あつて身が手に入れたれば、半兵衞に遣はす間、稻野屋に手代和三郎と名乘り、世を忍びゐる守之助諸ども、めでたう歸國いたしてよからう。まつた御先祖時政公、

初演の

繪番附

百年忌の今宵、非常の大赦行へと御主君の嚴命なれば、仁左衞門谷次は鎌倉を追放。双方ともに、有り難くお請け致せ。

喜八　すりや、私しの一命も

淸三　この淸三郞の汚名も共に

仁左　晴れて隈なき雲霧が

千代　これまで盡す

鍾馗　夫婦が積惡。

谷次　非常の大赦にお免しあるか。

孫兵　そんなら此方の忰めも

道順　皆御赦免下さるといの。

つゆ　兄さん、お前は助かつたといなア。

磯平　若旦那、こりやマア、夢ではござりませぬか。

金兵　これも偏へに靑砥さまの

皆々　チエ、、忝ない。

藤綱　双方ともに、嬉しいか。

皆々　ハツ。

ト平伏するを、木の頭。

藤綱　身も喜ぶ。めでたいな。

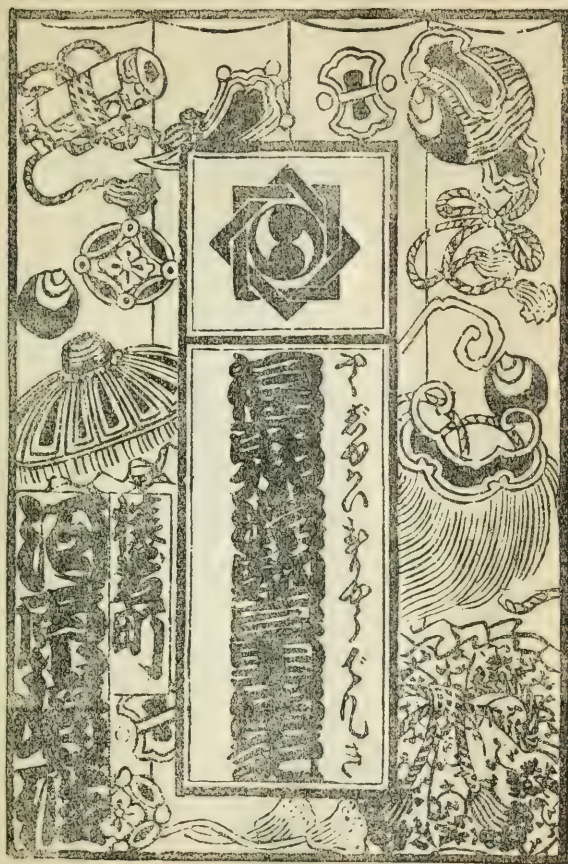
トよろしく、時の太鼓にて幕。

名譽仁政錄（終り）

世界文明年間
東山文字當
名に翁曲にいや高き
富士淺間語
利驗は眼前
宮戸川の榮

福聚海駒量傳記

普門品
第廿五段續

初演の繪番附表紙

福聚海駒量傳記

序幕

祇園社頭の場
藤屋座敷の場
鳥邊野の場

役名――細川息女、井筒姫。名古屋小山三。不破伴作。長谷部雲六。藝子、出雲屋お國。藤屋女房、お六。腰元、早織、同、あやめ。甚五郎女房、お艶。金魚屋、金八。東金の五郎吉。下部、土子泥介。富士娘、早枝。

本舞臺、三間の間、眞中、石の大鳥居、左右、堤の上に、玉垣、正面、白木の廻廊、上手、風雅なる枝折門、建仁寺垣、これに御料理藤屋と云ふ掛け行燈、下手、青紅葉の大樹、日覆より、同じく吊り枝、祇園鳥居前。爰に床几を並べ、旅人參詣の仕出し、大勢。仲居、茶を運び居る。大拍子にて幕明く。

仲居 皆さん、ようお參りなされました。お茶をお上がりなされませ。
旅一 なんと、今日は好い日和ではござらぬか。
旅二 その所爲か、祇園樣も參詣が澤山あります。
旅三 境内の二軒茶屋は、大層賑やかでござるの。
旅四 それはその筈、藤屋の姐さんが美しいから流行るのサ。
仲居 オヤ〳〵、そんなお世辭より、御酒でもお上がりなされませ。
旅一 イヤ、御馳走は有り難いが、これから又、智恩院の方へ廻つて見よう。
旅二 それ〳〵、今から爰で呑んで居ては、遲くなるから、また其うち來ませう。
旅三 そんならわたしどもゝ、御一緒に參りませう。
旅四 姐さん、茶代は爰に置きますぞや。
仲居 ハイ〳〵、有り難うござります。どなたもお靜かにお出でなされませ。
皆々 サア〳〵、行きませう〳〵。

ト皆々、橋がゝりへ入る。三味線入りの大拍子。向うより小山三、袴、着流し、大小、編笠を持ち、出る。虎八、五郎兵衛、褞袍、三尺の形にて附き、後より金八、やつし、金魚の荷を擔ぎ、出て、花道にて

虎八　ヤイ〳〵、二本棒め。この廣い大道で、なんでおいらに突き當つたのだ。

五郎　晝日中往來の者に、突ッかゝるどう盲目め。挨拶しろ挨拶しろ。

小山　これは又、迷惑千萬。この方は除けるのを、そちらから突き當り、喧嘩仕掛けも時の災難。最前から詫びて居れば、もう料簡いたしてくれい。

虎八　ナニ、料簡いたせ。カウ、見や。べら坊に大風なさんぴんだぜ。

五郎　二本差しが怖くつて、燒豆腐が喰はれるものか。料簡ならねえ〳〵。

金八　モシ〳〵、先刻から後で聞いて居りますが、ほんの通りがゝりの間違ひ。マア、爰は道中、向うの社内へ行つて、靜かに云うたら解りさうな事。

虎八　コレ、金八どん。お前方の知つた事ぢやアねえ。打ッちやつて置かつせえ〳〵。

金八　ハテ、何事も社内へ行つて。サア、お武家樣も、マア〳〵あれへ。

ト右の鳴り物にて、舞臺へ來て

五郎　ヤイ、侍ひ、金魚屋が口をきくを幸ひにして

虎八　爰を默つて隨德寺にしようとは、さうはならないぞならないぞ。

小山　なんの〳〵、此方は神詣での事、左樣な無法な事は致さぬ。なんと申してよい事やら、互ひに行き違ひの怪我なれば、何卒穩便に致してくりやれ。

五郎　イヽヤ、致すまい。穩便とやら天秤とやらは知らないワ。

兩人　料簡ならねえ〳〵。

小山　すりや、最前よりこの通り、譯を云うて詫びるのを聞かぬと云ふのか。

兩人　オヽ、知れた事だ。

小山　ハテ、是非に及ばぬ。相手にするも大人氣なしと、詫びれば猶さら附け上がる、無法の狼藉。重ねて申さば手は見せぬぞ。

虎八　ナニ、手は見せねえ。面白い。

兩人　サア、切りやアがれ〳〵。

ト兩人、小山三へ立ちかゝる。

小山　これは雜言を。

兩人　さう吐かしやア。

ト兩人、小山三にかゝるを、金八、留めるを、振り切り、小山三、ちよつと立廻つて、兩人を投げる。

アイタヽヽ。うぬ、投げやアがつたな〳〵。

ト兩人、立ちかゝるを、金八、留めて

金八　アヽ、コレ〳〵、どうしたものだ。料簡さつしやい、料簡さつしやい。

兩人　イヤ、否だ。投げられちやア否だ。サア、切りやアがれ〳〵。

金八　これはしたり、今二人の衆が、投げられたと思つたは、コレ、この石に躓いて、ツイ滑つたのだ。

兩人　イヤ、投げたのだ〳〵。

金八　イヤサ、わしが脇から見て居たに違ひはない。お前方も野暮を云はずに、仲人のわしに預けて、機嫌よく一杯呑んぢやアくれまいか。

虎八　そりやアこなさんの挨拶なら、元は根もない時の間違ひ。

五郎　彼れこれ云ふも野暮らしい。この場は此まゝ、こなたに預けて

金八　料簡して下さるか。それで仲人のわしの顔が立つと云ふもの。モシ、お侍ひ様、お聞きの通り二人の者も、何も根も葉もない行き違ひの口論、云ひ分はないと申しますからは、御料簡なされませ。

小山　これは〳〵、初めて逢うた商人どの、無法を見兼ねてこの場の挨拶。此方にも申し分はなけれども、餘りと云へば法外千萬。

兩人　何が法外だ〳〵。

金八　ハテ、何事もわしが挨拶。

ト金八、懐中より、一歩金を出し、紙に包み

これは餘り少ないけれど、口をきいた印、藤屋で一口呑んで下され。

ト兩人へ渡す。

虎八　それぢやア却つて、わしらが氣の毒。

金八　ハテ、野暮を云はずと、ちつとも早く。

五郎　そんならこりやア貰つて置きませう。

小山　でも、見ず知らずのこなたに金を

金八　ハテ、何事も私しが詞に任せて

兩人　金八どの。

金八　お二人の衆。
兩人　大きにお世話でござりました。
ト大拍子。虎八、五郎兵衛は、藤屋の内へ入る。後、合ひ方。
小山　ついにこれまで逢うた事のない、金八どのとやら。最前よりの御深切、なんと禮を申さうやら、忝なう存じまする。
金八　これはしたり、その御挨拶には及びませぬ。あなたは名古屋の若旦那、小山三さまでござりませう。
小山　どうしてわしが姓名を
金八　御不審は御尤も。私しはあなた様に、お乳を上げました乳母が悴、お小さい時、折々お屋敷へ上がりましたゆゑ、私しはよう存じて居ります。
小山　そんなら乳母が悴の金八であつたか。思ひがけないいかいお世話。
金八　これも矢ッ張り盡きせぬ御縁。丁度幸ひ、まだいろいろ申し上げたい事もござれば
小山　祇園の社へ參詣なし、何かの事は神職方にて。
金八　左樣なれば、若旦那。
小山　金八、おぢや。

金八　サア、おこしなされませ。
ト唄になり、小山三、金八は鳥居の内へ入る。三味線入りの大拍子。向うより井筒姫、姫の形。あやめ、腰元にて、手を引き、早織、片外し、奥女中にて附き、絹羽織の侍ひ二人、附き、後より、お艶、世話女房旅の形にて、風呂敷包みを持ち、出て、花道にて
つや　憚りながら、それへお越し遊ばしまするは、細川の姫君樣ではござりませぬか。
早織　如何にも細川の姫君樣ぢやが、さう云ふ其方は。
つや　成る程、お見忘れは御尤も。以前お館に勤め上げました糸萩でござります。
早織　ナニ、糸萩どの。オヽ、誠にお前は。申し、姫君樣、糸萩でござります。
井筒　ほんに其方は、以前の腰元、糸萩かいの。
早織　何は兎もあれ、爰は途中。
つや　向うの社内へ、お供いたすでござりませう。
早織　先づお出で遊ばされませう。
ト右の鳴り物にて、皆々、舞臺へ來る。
其方衆は、別當方へ。
侍ひ　ハツ。

ト侍ひは鳥居の内へ入る。井筒姫、床几に掛ける。

つや　先づ、姫君様には、御機嫌の好いお顔を拜しまして、お嬉しう存じまする。

井筒　館を出やつてその後は、どうして居やると懷かしう思うたに、無事な顔を見て、嬉しうござるわいの。

早織　ほんにお前は、慥か江戸へ、緣付きなさんしたと、噂を聞き、羨やましう思うてゐましたが、今に仲よう、その連合ひと、一緒にござんすのかえ。

つや　さればでござりまする。お館を出ましてより、兩親の指圖にて、遠き東の王子村、彫り物師の左甚五郎と申す者へ緣付きまして、三年餘り、久々にて親どもの見舞ひの爲、上京いたして逗留中、思ひがけないお目見得を致しまして、此やうな喜ばしい事はござりませぬ。

早織　そんなら噂の、左甚五郎さんへ緣付きなさんしたのかいな。彫り物の名人とあるからは、定めしどこやらの彫り物までが名人で、さぞ夫婦仲もよい事でござんせう羨やましい事でござんすなア。

あや　これはしたり、早織どのゝいつもの戲むれ事。姫君様のお側で、お嗜なみなされませ。

早織　ハイ〳〵、誠に恐れ入りました。シタガ、姫君様にも切なる戀路。いつぞや地主の花見の折柄、足利の御家來、名古屋三郎右衛門どのゝ御子息、小山三どのを見初め給ひ。

井筒　早織の云やる通り、恥かしい事ながら、明暮れ焦れ徒らな、千束に餘る玉章の、いなせのないは不束な、白らゆゑとは思へども、思ひ切れぬは心の煩惱。推量してたもいなう。

あや　幸ひ小山三さまには、このお社へ日毎に御參詣と聞きしゆゑ、父君様へお願ひあつて、お忍びの御參詣。

つや　さう云ふ事なら、今日爰へ、小山三さまがお出でなされた折を見て、姫君様が直々に、お心のたけを仰しやつたら、ツイ首尾の成るは知れた事。

早織　小山三さまは物堅いとは聞いたなれば、幸ひ東の物馴れた糸萩どの、お前がそこをよいやうに、お取持ちなされてお上げなされませ。

つや　これは又、迷惑な事なれども、御恩にあづかりし姫君様、私しが心一ぱい、お取持ちを致しませう。

早織　姫君様、お喜び遊ばしませ。

井筒　そんなら其方を頼むぞや。

つや　畏まりました。

井筒　ほんに戀路と云ふものは
早織　切ないものでござりますわいなア。
ト思ひ入れ。矢張り右の鳴り物。鳥居の内より、小山三、出て來り
小山　金八はどれへ行きやつた。ま一度逢ひたいものぢやの。
ト云ひながら出る。早織、見て
早織　ソリヤ、姫君樣。お見えなされます〳〵。
ト井筒姫、恥かしき思ひ入れ。
モシ、糸萩どの、彼のでござります〳〵。
トお艶に囁く。小山三、心付かず、奥へ行かうとする。お艶、留めて
つや　ア、モシ、暫くお待ちなされて下さりませ。
小山　某をお呼びなされたは、何事でござります。
つや　サア、あなたをお留め申しましたは、あれにお出で遊ばす姫君樣が、あなたに御用がござりますゆゑ、お留め申したのでござります。
小山　見請けますれば、高貴の姫君。私しへ御用と仰しやる、して、あなた樣は。
早織　御不審は御尤も。これにお出で遊ばしますは、細川の姫君。
三人　井筒姫さまでござりまする。
小山　ナニ、井筒姫とや。これは〳〵、存ぜぬ事とて、先程よりの無禮の段、眞平御免下さりませ。
つや　これはしたり、その御挨拶には及びませぬ。申し、姫君樣、ちやつと御挨拶を。
ト井筒姫を、小山三の側へやる。
井筒　申し、小山三さま、あなたは御存じあるまいが、過ぎし彌生の都の春、地主の淸水の花盛り、編笠越しの伊達姿、一目見るより戀風の、身に浸み渡りて自らは、明暮れ焦れてゐますわいの。
小山　これはマア、痛み入りましたるお詞。數なりませぬ某を、思し賜はるお志し、有り難うはござりますれど、高位のお方と不義いたづら、事顯はれなば互ひの身の上。千束の文のお受けさへ、わざとつれなう致さぬも、それゆゑの申し譯。御免なされて下さりませ。
早織　イエ〳〵、それはお胴慾、あなたをお見初めなされてより、明けても暮ても戀ひ焦れ、わたし等ならば手短かに、鼈甲細工で事は缺かねど、それも叶はぬ姫君樣。
つや　お心のたけは申さずとも、御存じでござりませう。

御不便な事とお察しあつて、どうぞ色よい御返事を、お聞かせなされて下さりませ。
小山　これは又いかな事、只今も申す通り、高位の姫と陪臣の某、何とて左樣な淫らな事が。
つや　そんなら高位の姫君樣は、他家の家來に惚れるなとお觸れでもござりましたか。
小山　全く左樣ではござらねど、
つや　左樣でなければ御返事を、早うなされて下さりませ。
小山　段々のお志し、この身に餘り、如何ばかりお嬉しうはござりますれど、どうぞ、この儀ばかりは。
つや　そんなら、どのやうに申しましても、お聞入れはなされませぬか。
小山　御免なされて下さりませ。
早織　誠に感心。
　ト思ひ入れ
つや　成る程、こりや、こちらが惡うござります。物堅い小山三さま、御返事なされぬは御尤も。さりながら、これ程までに思ひ詰め給ひし姫君樣、あなたが御得心ない上は、よもや此まゝでは、ナア、姫君樣。

井筒　糸萩の云やる通り、覺悟は疾から極めてゐる。さうぢや。
　ト小山三の刀へ手を掛ける。
小山　モシ、姫君、こりや何事でござります。
井筒　何事とはお情ない。姫御前が恥かしい、あられもない事云うた上
つや　あなたが御得心ないからは、こりや姫君樣が御尤も。
井筒　それぢやに依つて
　トまた手をかける。
小山　これはしたり、滅多な事を。
井筒　イエ〳〵、放して下さりませ。
小山　イヤ〳〵、早まり給ふな。
つや　お留めなさるは、お願ひを叶へなさるか。
小山　それぢやと申して
井筒　そんなら死なせて下さりますか。
小山　ア、コレ、滅多な事を。
つく　但し、色よい御返事を
小山　サア、それは。
兩人　サア〳〵〳〵。

つや　早う御返事なされませいなア。
　トきつと云ふ。
小山　是非に及ばぬ。成る程、得心いたしませう。
三人　モシ、御得心でござりますといなア。
非倚　エヽ、お嬉しう存じます。
つや　サア〳〵、又もや御意の變らぬうち
早緑　幸ひ懇意の別當所。離れ座敷で日頃の思ひを
小山　でも、神前近き恐れもあれば
つや　ハテ、何事も、私しどもがよいやうに。サア、姫君樣。
非倚　今更どうやら恥かしい。
つや　エヽ、お氣の弱い。サア〳〵、早う。
小非　それぢやと云うて
艶早　ハテ、マア、お出でなされませいなア。
　ト唄になり、お艶、兩人の手を取り、皆々、附いて、鳥居の内へ入る。流行り唄、大拍子になり。向うより不破伴作、袴、着流し大小、お國、舞子の拵らへ。お鶴、仲居にて、日傘をさしかけ、長谷部雲六、五十日鬘、古き大小、浪人の形にて、出て來り
雲六　モシ、そこへござるは不破伴作さま、妹を連れて祇園參りでござりまするか。
　トこれにて、皆々、振返り
伴作　オヽ、誰れかと思うたれば、お國が兄の長谷部雲六。よい所で逢うた。
くに　兄さん、お前、お客先まで無心にござんしたのかいな。
雲六　エヽ、又しても兄の非を上げるのか。默つて早く歩き居れ。
つる　これはしたり雲六さん、道中で、お國さんも默つてお出でなさんせいなア。
伴作　何は兎もあれ、向うの社内へ。サア〳〵、來やれ。
　ト右の鳴り物にて、皆々、舞臺へ來て、床几へ掛ける。藤屋の内より、お大、女房形、仲居、附き出て
だい　これは伴作さま、お珍らしい。お國さん、雲六さん、ようお出でなされました。
伴作　オヽ、藤屋のお大か。この間は逢はぬが、いつも繁昌で、めでたい〳〵。
仲居　モシ、お國さん、この間五郎吉さんと御一緒の時は、暗い晩でござりましたな。
　トお國、惡いと思ひ入れ。

伴作　なんと申す。お國と五郎吉とやらと同道で、暗い晩に參つたと申すか。こりや、ちつと氣持ちが、氣が揉めの、詳事ぢやわい。

くに　エ、モ、知らぬわいなア。

雲六　モシ、伴作さま、御用心なされませ、油斷はなりませぬよ。

くに　エ、モ、お前までが同じやうに、捨てゝ置いて下さんせ。

雲六　捨てゝ置けとは、イヤ、捨て置くまいかえ。

仲居　これはしたり、モシ、伴さん、藤屋へ行て御酒になされませ。

だい　ほんに、それがようござんす。サア、雲六さんも御一緒に。

伴作　さう致さう。併し、祇園の社へ、ちよつと參詣いたさう。雲六は先へ參つて、待つて居やれ。サア、お國、參詣なしよう。

くに　イエ〳〵、わたしや祇園さんへ、お參りはしたうござんせん。

伴作　イヤ、只今のやうな事を聞いては、手離しては置かれぬ。

くに　それでも、わたしや。

雲六　エ、御一緒に行きやれと云ふに。

伴作　サア、來やれ。

ト流行り唄、伴作、嫌がるお國の手を取り、仲居、付き、鳥居の內へ入り、雲六、お大、仲居は、藤屋の內へ入る。大拍子になり、藤屋より、以前の虎八、五郎兵衞、酒に醉うた體にて、出て

虎八　エ、イ、大層醉つたなア。

五郎　久し振りで鱈腹呑んだ。

虎八　あの二本棒に突ツかゝつて、酒にでもしようと思つた所へ、丁度よく金魚屋が來て、思ひがけない仕事をした。

五郎　そりやアさうと、この頃江戶から來て逗留して居る、東金の五郎吉と云ふ奴は、舞子のお國の色になつて江戶へ連れて行くとよ。

虎八　それぢやア兄貴の雲六も、しつかり金になるだらう。借りに行かうせ。

五郎　こいつは、いゝ金の蔓を見附けた。また呑めるな。

虎八　面白い〳〵。サア、來やれ。

ト右の鳴り物。兩人、橋がゝりへ入る。矢張り大拍

子。鳥居の内より、伴作、非筒姫、小山三を引ッ立て
お艶、早織、あやめ、附き、出て來り
早織　こりや伴作さまには、姫君をなんとなされます。
伴作　なんとするとは白々しい。誰れあらう細川政元公の
姫君と、不義働いた名古屋小山三。サア、眞直ぐに白狀
おしやれ。
小山　アイヤ、伴作どの、某が身に取り、不義の覺えはさ
らになし。滅多な事を
伴作　ヤア、覺えないとは云はれまい。別當の小座敷で、
乳くり合つたを慥かに見た。殊に叢雲の王子、お心を掛
けられ、入内せよと嚴命をもどき、陪臣者と不義密通。
この趣きを足利武將へ注進する。兩人ともに覺悟さつし
やい。
つや　アイヤ、憚りながら伴作さま、お二人樣は不義者で
はござりませぬ。
伴作　ヤア、賤しい女の身を以て、いらざる留め立て。男
と女が差向ひ、引ツつき合つて居た兩人、何ゆゑあつて
不義ではない。
つや　それゆゑにお二人樣は、不義者ではござりませぬ。
伴作　なんと。
つや　されはでござりまする。姫君樣は常々からきついお
癪、最前より御持病にお惱み遊ばし、私しどもの手に餘
り、小山三さまをお頼み申し、押へておもらひ申しまし
たを、あなた樣が御覽なされ、不義者ぢやと仰しやる
は、ちと御粗相かと存じまする。
伴作　でも、現在に離れ座敷で
つや　サア、お癪を押へた小山三さま。但し、不義と仰し
やるには、なんぞ慥かな證據でもござりまするか。
伴作　例へ證據はないにもせよ。不義働いたをしつかり
と、見屆けた上からは、その云ひ譯は武將の御前で。サ
ア、身共と一緒に、キリ〳〵お立ちやれ。
ト小山三を引ッ立てる。この時、後へ金八出て、窺ひ
居て
金八　アイヤ、伴作さまとやら。暫らくお待ち下さりま
せ。
ト下の方へ出る。伴作、見て
伴作　ヤア、ついに見馴れぬ素町人、身共を支へた其方は
何者だ。
金八　私しは、これなる小山三さまの、家來筋の者でござ

ります。只今これにて承りますれば、細川家の姫君様と、小山三さまを不義者と御意なされまして、武將の前へ引ッ立てると仰しやるが、あなた樣には、その御詮議のお役目でござりまするか。

伴作　ヤ。

金八　慥か左樣ではござりますまい。殊に最前見請けますれば、派手な女子を御同道にて、爰へ御遊山にお出でなされた伴作さま、その身に覺えも無いやうに、餘所の戀路の御詮議は、憚りながら御無用に、なされたがよろしからうと存じまする。

伴作　成る程、鋸屑も云へば云はるゝと、理屈を附けて云ひ抜けても、どうで遁がれぬ不義の兩人。追ッつけ祟りが……イヤ、日足の長けぬ其うちに、身共はこの家に用事もあれば

つや　この場の事はこの場ぎり。

金八　見ず知らずなる金魚賣り、商賣物の水に流して

伴作　今日は此まゝ。

艶金　伴作さま。

伴作　返報キッと。

金八　ヤ。

伴作　覺えて居らう。

ト唄になり、伴作、思ひ入れあつて、藤屋の内へ入る。皆々、後見送り

早織　ほんに好い所にお二人が、口出しなされ事なく濟んで、此やうなおめでたい事はござりませぬ。

非筒　自らがいたづらゆゑ、小山三さま始め、皆の衆へ苦勞をかけ、堪忍してたもいなう。

小山　二人の衆の情にて、この場は無事に濟んだれども、伴作に見咎められし上は、どうで遁がれぬ不義の科、覺悟は極めて居りますわいの。

金八　ハテ、氣の弱い。例へ露顯に及べばとて、慥かな證據ないからは、申し譯は立ちまする。

つや　殊に主ないお二人樣、只何事も折を見合せ、又の御見、人目にかゝらぬ其うちに、早織どの諸ともに、姫君樣のお供して

金八　小山三さまには金八が、お供いたして裏道から

早織　片時も早う、姫君樣。

非筒　小山三さまには、お身を大事に。

小山　あなた樣にも、御機嫌よろしう。

つや　左樣ならば小山三さま。

小山　おさらばでござりまする。

艶金　サア、お越しなされませう。

ト三重、時の鐘。井筒、お艶、早織、附いて向うへ、小山三、金八は上手へ入る。宮神樂、流行り唄になり、向うより五郎吉、腹掛け、股引、合羽の形、羽織を疊み、肩へ掛け、出て

五郎　この祇園は江戸勝りと聞いたが、成る程、賑やかな事だ。

ト云ひながら、舞臺へ來て、床几にかゝり

それはさうと、縁と云ふものは乙なものだ。伊勢參宮から上方へ來て、二十日餘りも逗留中、フッと祇園町で、藝子のお國と云ひ交し、どうぞして江戸へ連れて行つて、女房にしたいと思ふのも、巧く一杯はめられた、自惚れかと思ひながら、上方者に似合はない、さつぱりとした彼奴が氣前。今日はこの藤屋へ、客に連れられて來て居るから、後から來いと知らせの文。どうぞ早く逢ひたいものだ。

ト貫のみ居る。石の鳴り物。鳥居の內より、お國、出て、五郎吉を見て、思ひ入れ。後へソッと廻り、目を塞ぐ

誰れだ〳〵、冗談しないものだ。

トこれにてお國、其まゝ五郎吉に抱きつく。五郎吉、見て

誰れだと思つたらお國坊か。今日はお樂しみだね。

くに　措いて下さんせ。なんのわたしが、樂しみな事がござんせう。お前こそこの頃は、餘所外に面白い事が出來たと見えて、お遠々しうござんす。エヽ、憎らしい。

ト五郎吉を抓る。

五郎　アヽ、痛い。何も爰まで、えつちらおつちら來て、抓られる事はねえ。そんな嫌らしい事は、侍ひ客にして嬉しがらせるがいゝ。

くに　こりやおかしいわいな。何が氣に障つたか知らないけれど、わたしやお前に其やうな事、云はれる覺えござんせぬ。フトした事が縁になり、お江戶のお前に不束な、上方藝子が馴れ馴染み、嬉しい事と朝夕に、心で拜んでゐるわたし。モシ、機嫌直して下さんせいなア。

五郎　さう云はれると一言もなし。どう云ふ縁か祇園町で、初めて逢つたその時に、おつな女と惚れ込んで、心安くなるにつけ、互ひに身元を話し合ひ、女房約束したお主を、外の男と手放して、歩かせるが忌々しい。愚痴

も云ふのよ。

くに　そりやわたしとても同じ事、厚皮ながら女夫になり、早うお江戸へ行きたい願ひ。わたしが父さん母さんは、小さい時に死別れ、義理ある邪慳な兄さんに、育てられて養子の勤め、眞實の姉様は、富士左京之進さまと云ふお醫者へ、音信不通に養子とやら。便り少ないわたしが身の上。どうぞ見捨てゝ下さんすなえ。

五郎　なんの見捨てる位なら、こんなに惚くなりやアしねえ。兄貴の茂兵衞どのにも打明け、相談して勤めを引かせ、江戸へ一緒に連れて行く氣よ。

くに　そりやマア、ほんまでござんすかえ。

五郎　ナニ、氣休めを云ふものか。

くに　嬉しうござんす、五郎吉さん。

五郎　お國坊。

くに　必らず變つて下さんすなえ。

　ト兩人、チッと抱きつく。この時、藤屋より、お大、出て

だい　お國さん、五郎吉さん、お樂しみでござりますね。

　トこれにて、兩人、惘りして

五郎　誰れだと思つたら、お大さんか。惘りすらア。

だい　モシ、お國さん、お前の兄さんが、お國を呼べと、喧ましう云うておやぞえ。

五郎　そんなら兄貴も來て居るか。

くに　アイ、伴さまに用があると云うて、この内に來てゐる程に、お前はいつもの小座敷で、酒を呑んで、待つて居て下さんせ。

だい　その代りお前のお口に合ふ、江戸前のお肴を、拵へて上げますわいな。

五郎　いつもながら世辭のいゝ事だ。なぜこんなに上方の手合ひは程がよからう。その程のいゝのに、喰ひ込んだ奴よ。

　トお國へ思ひ入れ。

くに　エヽモ、嬲てゝ下さんすな。どこまでのぼせるか知れぬわいな。

五郎　のぼせるならば、三里でも据ゑるがいゝ。

くに　エヽ、モウ憎い。

　ト五郎吉を叩く眞似をする。

だい　また伴さんが見附けると惡い程に、早う來なさんせ。

くに　そんなら五郎吉さん、待つて居て下さんせえ。

ト流行り唄。お國、お大、藤屋へ入る。五郎吉、跡見
送り

五郎　考へて見りやア見つともない。江戸に女もねえやう
に、上方者にと思ひながら、どうした事かあのお國に、
惚れると云ふも縁づくか。とんだ時代なセリフだが、色
は思案の外から見たら、あんまり馬鹿氣た
ト灰吹きを、トンと叩き
話しのやうだなア。

ト考へる思ひ入れ。流行り唄にて、よろしく、道具廻
る。

本舞臺、三間の常足二重、向う、腰入りの葭障子、
上手、折り廻し一間障子屋體。下手、圓窓、すべて
藤屋下座敷の體、爰に伴作、お國、仲居二人、お大、
酒肴を並べ、酒盛りして居る。踊り地にて、よろし
く道具納まる。

仲居　サア〳〵、旦那、もうお一つお上がりなされませ。

雲六　なんだかお座敷が、さつぱり冴えない。コレ妹、三
味線でも彈かないか。

くに　イエ〳〵、わたしや最前から、氣合ひが惡いに依つ
て、堪忍して下さんせ。

伴作　なんぢや、氣合ひが惡い。それは困つたものぢや。
肝心のお主がふさいで居ては面白くない。燗を熱くして
呑んで見やれ。

くに　イエ〳〵、氣の濟まぬ事があるに依つて、酒は嫌で
ござんす。

だい　お國さん、氣合ひが惡くば、あつちの座敷で、横に
なりなさんせ。

くに　アイ〳〵、モシ、伴さん、ちつとの間、堪忍して下
さんせ。

ト奥へ行かうとする。

伴作　ア、コリヤ〳〵、お主が去ねば花が散る。氣合ひ
が惡くば、苦しうない。そこへ寐やれ〳〵。

仲居　それぢやと云うて、お客様のお座敷で、其やうな事
が。

雲六　コレ、妹、氣合ひが惡くば、藥を服むがいゝわサ。

くに　イエ〳〵、わたしが病氣は藥では癒らぬ。氣儘にし
て置いて下さんせ。

雲六　イヤ、氣儘にはさせぬ。餘り我まゝを云へば、こ
の兄が仕様があるぞ。

伴作　これはしたり、雲六、どうしたものだ。お國が氣儘にして置きやれ。

雲六　それでも、お前樣へ對しても、氣の毒でなりませぬ。

伴作　ナニ〳〵、靜かに云つても解る事だ。マア〳〵、それはそれにして、雲六、こなたに云はねばならぬ事がある。これへ來やれ〳〵。

ト雲六、伴作の傍へ來て

雲六　さうして御用とは、なんでござります。

伴作　外の事でもない。矢張りお國が事ぢや。先達てより度々申す通り、身共が女房になりさへすれば、直さま身請け致して、この間用立て遣はした五十兩の上、金子はいくらでも貸して遣はすが、お國は未だ得心いたさぬか。

雲六　左樣サ。日頃からお世話になつて居る上に、五十兩の恩借もあり、どうぞお前樣の方へ、妹を上げませば、身共も出世する事なれば、いろ〳〵勸めても、否とも應とも返事をせず、誠に困り切つて居ります。

伴作　イヤサ、いつまでも蛇の生殺しでは相成らぬ。いよいよお國が不得心なれば、是非がない。この間用立てた五十兩、今日中に返濟してもらはねばならぬ。どうぞお國が得心するやうな、思案はあるまいか。

雲六　よろしうござります。只今お聞きなさる所で、妹に挨拶を致させます。暫らくお待ちなされませ。コレ、お前方、お燗を直して、伴作さまへ上げやれ。

仲居　アイ〳〵、合點ぢやわいな。

雲六　時に妹や、なんぼ氣合ひが惡うても、云ふ事は云はねばならぬ。長く短かく云ふにや及ばぬ。この間から云ふ通り、伴作さまの方へ請け出さるれば、お主は元より兄の身共まで、出世する事だから、得心して伴作さまの、奧樣になりやれよ。

くに　イエ〳〵、兄さん、お前よりわたしが、長う短かう云はぬ。度々勸めなさんしても、この事ばかりは嫌でござんす。

雲六　ハテ、惡い料簡だ。お主が承知せぬ時は、この間借りた五十兩、今日中に返さねばならぬ。

くに　その金は、わたしが體を、年季を入れてなりと、伴作さんへ斷わり云うて下さんせ。

雲六　そんなら其方は、どりあつても、兄の身共が云ふ事は聞かぬか。

くに　外の事はともあれ、この事ばかりは、堪忍して下さんせ。
雲六　默り居らう、罰中りめ。云はせて置けばいゝ、事と心得て、コレ、われが體を、女郎に賣らうがどうしようが、われが指圖を受けるものか。そんな片意地を云ふのは、この頃江戸から上京して、木屋町邊に逗留する、東金の五郎吉とか云ふ奴と、乳繰り合つてゐる事まで知つて居る。サア、兄が勸める通り、得心すればわれが爲め、強情吐かすと又望みの通り、女郎は愚か夜鷹にでも、金になるたけ賣りこくるぞ。
くに　こりやおかしい、女郎になるが怖いとて、嫌なお方に添はれうぞいな。どうで情を知らぬ兄さん、お前の性にしなさんせ。
雲六　さう吐かせば、土性骨を叩き直して
仲居　アヽ、モシ、雲六さん、なんぼお前の妹御でも、勤めのうちは親方さんに任せた體。その上今日は伴作さまの約束で、わたしが預かつて居るお國さん。
だい　さうでござんす。藤屋の座敷で荒々しう、折檻なさんして、疵でも附いたらわたしが迷惑。お前の儘にはならぬわいなア。

雲六　エヽ、こなた衆まで妹めが贔屓。モシ、伴作さま、思案を變へずばなりますまい。
伴作　そんならお國は江戸者の、五郎吉とか云ふ二才めと喰ひつき合つて居るゆゑに、身共がこれほど口說いても、得心なければ是非がない。人我れに辛ければ、我れも又人に辛しの譬へ。兄の雲六に貸した五十兩、お主から今返しやれ。
くに　それぢやと云うて、その金が
伴作　出來ずば身共が女房になれば、五十兩をさて措き、金はいくらでも貸してやる。アヽ、好いた男は金がなし、嫌がる身共は金の奧山。とつくり思案をして見やれ。
くに　お志しは嬉しいけれど、どう云ふ事か生れつき、金持ちは大嫌ひ。好いたお方に身を任せ、女郎にならうがどうせうが、お前のお世話にやならぬわいな。
伴作　念の入つたるその挨拶。これが譬へに云ふ通り、色男、金と力はなかりけり。
ト思ひ入れ。この前より、後へ五郎吉出て、聞いてゐて
五郎　憚りながら、金と力のない色男が、ちよつとお近附

きになりませう。

ト前へ出る。三味線入りの宮神樂。皆々、見て

くに　ヤ、お前は五郎吉さん。

女皆　いつの間にござんしたえ。

五郎　アイ、たつた今來ました。どなたにも御免なされませ。

ト眞中へ座る。伴作、思ひ入れ。

伴作　そんなら貴樣が噂のある、この頃當地に逗留の

五郎　東金五郎吉と云ふ、小さな野郎でござります。

雲六　その五郎吉どんが、なんでこの場へ。

五郎　いま後で聞いて居れば、立派な男が二人で、女一人を兎やかくと、嬲ると云ふ字の書きやうも、曲つた金の催促を、聞かぬ振りの出來ないが、いらざる江戸で育つた氣性。友達仲間に誘はれて、京大坂を見物に、逗留中の貸し座敷、野郎同士が蒲團着て、寢ても居られず東山、花に遊んで祇園町、一夜二夜が緣となり、深切づくで末始終、女房約束したお國、小ッ恥かしい色事師。力はないが腹掛けの、隱しにあつた路用の金、遣ひ殘りの五十兩、この場のいさくさ加茂川へ、流してわつさり仲人に、粹狂らしう飛込んだ、わつちが顏を御不承ながら

どうぞ立てちやア下さるまいか。

ト懷より、五十兩包みを出して、思ひ入れ。

雲六　ハテ、江戸ッ子と云ふ者は、よく口をきくものだ。初めて逢つた五郎吉どの、成る程、すつぱりとしたい、氣性。然らばこの金は遠慮なく、當分身共が借用いたさう。妹、お禮を云やれ。

くに　ひよんな所へござんして、思ひがけないこの金を、お前に出させて見て居る切なさ。例へわたしが年期を入れても、お前に苦勞はかけぬぞえ。

五郎　ハテ、馬鹿な事。お主に氣兼ねをさせようとて、ナニ金を出すものか。打ッちやつて置くがいゝ。

雲六　モシ、伴作さま、味な所から出たこの金、直ぐに納めもなりますまい。後まで身共が、預かつて置きませう。

ト財布を懷へ入れる。

伴作　五十兩の金は、五郎吉が手より出ても、身の代金が濟まざるうちは、まだ女房とは云はれぬお國、例へ如何程不承知でも、身請けをすれば身共が女房。

五郎　そりや云はずとも知れた事。内證の約束は兎も角も、身請けの濟まねば藝子のお國。わつちはけちな小野

郎だが、兄貴は江戸の花川戸、筑波屋の茂兵衛とて、ちつとは小口もきく男、爲替の金で勤めを引かせ、東海道を通し駕籠。

くに　二挺並べてこちの人、女房どもと睦まじう、早う江戸へ行きたいわいなア。

伴作　小胸の悪い女房詮鑿。それも身請けの金次第。

五郎　この五郎吉が女房にするか。

伴作　伴作さまの奥様か。

雲六　マア、それまでは團扇を入れて、行司の身共が預かりませう。

ト寺鐘の七ツを打つ。

仲居　ありやモウ七ツ。伴作さまの約束も切れたれば

くに　これから一緒に五郎吉さん、祇園町へござんせいなア。

五郎　さうしよう。モシ、藤屋のお大さん、今日は何かと、いかいお世話に

だい　お構ひ申しも致しません。お近いうちに御ゆるりと。

五郎　そんなら兄貴、伴作さん、これにゆるりと

伴作　エヽ、勝手にするわい。

仲居　お國さん、わたしも道まで、お送り申しませう。

ト五郎吉、お國の手を引き、仲居二人附き、花道へ行く。

五郎　アヽ、永の日一日がつかりと、草臥れ直しぢや短夜に

くに　イエ、御不承ながら、滅多に寝かす事ではござんせぬぞえ。

ト五郎吉に寄り添ふ。

仲居　五郎吉さん、色男も辛うござんせうな。

五郎　察してくんねえ。

伴作　エヽ、これ見よがしに、二人があの態。

雲六　誠に生きた聖天の煮こゞり。

五郎　伴作さん、ちつと色の仕様を

くに　教へておもらひな。

伴作　ムウ。

五郎　オイ、稽古は四ツぎりだよ。

ト流行り唄になり、お國、五郎吉の手を取り、仲居二人附いて、向うへ入る。

雲六　エヽ、大風の吹いた跡のやうだ。コリヤ、藤屋の内儀、これから伴作さんと呑み直しだ。旨い物を出して下

さい。
だい　ハイ〳〵、畏まりました。
　ト踊り地になり、お大、奥へ入る。
伴作　時に雲六、只今のやうに申して、五郎吉めが金が出來れば、お園を身請けさせるか。
雲六　何も案じさつしやりますな。大層な事を云つても、さう急に金が出來る事ではない。それより早くお前樣の方へ、身請けさつしやりませ。
伴作　然らば先刻の五十兩を、直ぐにお園が身請けの手附けに相渡さう。預かつた金子を受取らうか。
雲六　ほんにイカサマ、さつぱりと忘れた。
　ト懐より以前の財布を出して
併し、お待ちなされ。この金も身共が喧ましく、いゝ鹽梅に云つたゆゑ、五郎吉めがひよつくり出した五十兩なれば、金が取れた代りに、身共に骨折り代を十兩ばかり下さい。
伴作　とんだ事を申す。身請けの手附けに渡すのだ。此方へ寄越しやれ。
雲六　イヤ、不承知ならば滅多には渡されぬ。
伴作　此奴、怪しからん事を申す。身共が金だ。此方へ渡せ。
雲六　身共が金もすさまじい。返さないうちは此方の金だワ。
伴作　イヤ、太い奴だ。此方へ寄越せ。
雲六　イヤ〳〵、ならぬ〳〵。
　ト兩人、財布を爭ふ。風の音。トヒヨにて、はやぶさの鳶、下りて、財布を摑んで、日覆へ引き揚げる。兩人、驚ろき
伴作　ヤア〳〵〳〵、金の財布を、鳶めが攫つて
雲六　油揚げぢやアあるまいし、間抜け鳶め。オヽイ〳〵。
伴作　エヽ、遠くは行くまい。跡追ッかけて、落す所を
雲六　イヤ、貴樣はやらぬ。おれが鳶めを
伴作　イヤ、われは滅多に
雲六　イヽヤ、身共が
　ト兩人、ちよつと立廻つて、雲六、伴作を突き倒して
エヽ、そこにゆるりと。羽根が欲しい、金が欲しい。鳶やアい。
　ト曲撥にて、雲六、一散に向うへ入る。伴作、起き上がつて
伴作　エヽ、どんだ目に遭はせ居る。どうか雲六めを出し

抜いて、あの鳶めを捕まへたいものだ。それにしてもあの鳶めは、どちらへ行つた知らぬ。

ト下の方にある草履を見て

爰に誰れのか草履がある。これで方角を見てやらう。

ト草履を取つて、投げて見て、思ひ入れ。

ハア、この様子では、鳶めは西の方だな。よしよし、西が鳶。にしやとふび。

ト早めたる踊り地にて、伴作、向うへ入る。この道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う黒幕、眞中、九尺中足、藁葺き、古びたる祖師堂、左右、卒塔婆を結ひ込みし藪疊。上手、栗丸太、夜燈、下手、柳の立ち木、日覆より吊り枝、すべて鳥邊野、夜の體。時の鐘にて、道具、納まる。

ト時の鐘、合ひ方にて、向うより雲六、出て來り

雲六　今日はとんだ目に遭つた。折角五十兩せしめようと思つたを、あの鳶めに攫はれて、なんでも樂はさせない。鳶めを追ひかけるので、たうとう日が暮れた。

ト云ひながら、舞臺へ來て

爰は鳥邊野だな。あの鳶めは、大方爰らの森の中へ、入つたに違ひないから、この祖師堂で一夜を明かして、明日鳶めが夜明けに飛び出す所を、捉まへるが上分別だ。それがいゝ／＼。

ト雲平、堂の上へ上がり、扉を開け

モシ、お祖師さん、今夜一晩泊めておくんなせえ。先刻藤屋で、酒も飯も食つて來たから、飯の支度には及びませぬ。その代り旅籠も、拂ひはないから同じ事だ。ハ、ハ、。大分草臥れた。ドレ、一寐入りやらかさうか。

ト雲平、堂の内へ入る。時の鐘、木魚入りの合ひ方にて、向うより泥介、奴の形、一本差し、提灯を持ち、早枝、振り袖衣裳、水晶の珠數を持ち、出て來り

泥介　早枝さま、御菩提所で思ひの外お手間がとれたゆゑ、夜に入りました。御兩親樣が、さぞ御案じでござりませう。

早枝　サイナウ、方丈様がいろ／＼のお話しで、思ひがけなう遲うなりました。どうやら空も曇つた様子ぢやなう。

泥介　左様でござります。ちとお急ぎなされませ。

ト右の鳴り物にて、舞臺へ來り

早枝　爰は鳥邊のお祖師樣、今日はわたしが實の兩親の命日なれば、ちよつと御回向して行きませう。
泥介　それがよろしうござります。
　ト早枝、堂の方へ、回向の思ひ入れ。
御回向が濟みましたら、降りませぬうち、早うお歸りなされませ。
早枝　サア、行く事は行くけれど、コレ泥介、今さら云ふには及ばねども、其方も兼ね〴〵知つての通り、幼ない時に富士の家へ、音信不通に養子となり、眞實の兩親には死別れ、たつた一人の妹も、他家へ養子と聞いたばかり。末は女夫と云ひ號けの富士太郎さまは、わたしを嫌ふて外を家。好色者とて父上の御勘當。便り少ないわたしが身の上。
泥介　左樣でござります。まだその上に、叢雲の王子樣より、お側仕へに差上げよとの度々の御所望。あなたは元より御兩親にも、道ならぬ事ゆゑ御承引なく、如何はせんと御思案の折から、奥樣の御内縁ある、江戸花川戸の筑波屋の茂兵衛さま、御兄弟上京を幸ひ、茂兵衛さまとあなた樣とを、御夫婦になされ、江戸へお下りなされますれば、王子樣よりお祟りもないと申すもの。

早枝　それゆゑに父上や母上の、お指圖もどき難く、茂兵衛どのと祝言の、杯事はしたれども、一口云ひ號けの富士太郎さま、枕こそ交さねども、貞女兩夫に見えぬ掟。とあつて東へ下らねば、王子樣への申し譯立たず。二つの道に是非なくも、心に思はぬ夫重ね。推量してたもいなう。
泥介　御尤もでござります。さりながら、男氣な茂兵衛さまの事なれば、あなた樣のお身の上、悪いやうにはなされまい。きな〴〵お案じなされますな。
　トこの時、雨車しく、泥介、思ひ入れ。
そりやこそ〳〵、降り出しました。こりや雨具がなくては參られませぬ。私しは一走り、八坂の町へ參りまして、雨具を用意いたして參ります。お前樣は、爰にお待ちなされて下さりませ。
早枝　隨分早う行つて來てたもや。
泥介　ヘイ、直ぐに行つて參ります。これは大層降つて來た。
　ト堂の縁にある糸立を見附けて
オヽ、丁度好い物があつた。これを引ッかけて參りませう。

早枝　そんなら泥介、早う行て來てたもや。
泥介　畏まりました。ドレ、行つて參りませう。
ト時の鐘、雨車にて、泥介、糸立を着て、橋がゝりへ入る。
早枝　コレ、必らず早う戻つてたもや。折惡い俄雨、どうぞ早うやまして欲しいなう。
ト早枝、堂の椽に腰をかける。時の鐘、流行り唄の合ひ方、雨車。向うより五郎吉、酒に醉つたる體、祇園町と云ふ傘番、ぶら提灯を持ち、安下駄にて出て
五郎　エヽ、いま〳〵しい雨だ。折角お園といつもの茶屋で寢ようと思ふと、相憎さしがあつて泊られねえ。これから貸座敷へ歸つて寢にやアならねえ。
ト云ひながら、舞臺へ來て、あたりを見て
爰はどこだ。鳥邊野だな。
トこの時、早枝を見て
オヤ、今時分女がたつた一人。モシ、お前は爰に何をして居なさるえ。
早枝　ハイ、私しは供の者が、雨具を取りに參りましたを、待ち合はせて居ります。
ト五郎吉、提灯にて、早枝をよく〳〵見て

五郎　さう仰しやるお前樣は、富士のお娘御、早枝さまぢやござりませぬか。
ト早枝もよく見て
早枝　ほんに、お前は茂兵衛さまの弟御、五郎吉さんでござりますか。
五郎　左樣でござります。思ひがけない所で、お目にかゝりました。
早枝　いま泥介が、雨具を取りに、八坂の町へ參りまして、私し一人心細い所へ、よう來て下さりました。
五郎　それは丁度よい所へ參りました。
ト此のうち、風の音にて、以前の鳶の摑みし財布、あたりの森より落せし心にて、よき所へドンと、件の財布落ちる。それにて常夜燈の灯、消える。時の鐘。
早枝　アレ。
ト驚ろき、五郎吉に縋る。五郎吉も恟りして、提灯落す。
五郎　エヽ、恟りして提灯を消しました。
早枝　どうやら氣味が惡うなつて參りました。
五郎　ナニサ、まだ宵でござります。何も怖い事はござりません。併し、慥か今爰へ、なんだかドンと落ちたやう

だが。

ト五郎吉、あたりを探り、足に觸る財布を拾ひ、透して見て

こりや金の入つた財布だ。高も丁度五十兩ばかり。ハテナ、先刻思はずひよんな事で、持ち合はせた五十兩を手離した上、お園が身請けの事について、欲しい所へ、天から降つたか

早枝　エ。

五郎　イエサ、天氣もどうか、上がりさうでござります。

ト五郎吉、財布を懐へ入れようとする。この時、堂の扉を開け、雲六、金と聞いて窺ひ出て、財布へ手をかける。五郎吉、恟り。

モシ、早枝さま、何をなされます。

早枝　わたしはなんともせぬわいな。

五郎　ハア、そんなら盜人だな。

早枝　エヽ。

ト驚ろく。五郎吉、雲六を探り見て、振り放さうとする。早枝も怖々五郎吉を尋ねる心にて、この中へ入る。時の鐘、忍び三重模樣。三人、財布を奪ひ合ふ。橋がゝりより泥介、雨具、消えたる提灯を持ち、出る。これと一時に、上手の卒塔婆垣を押し分け、伴作、以前の薦の財布を尋ねる心にて出て、兩方より、立廻りの中へ入り、皆々、恟り、左右へ別れ、透かし見る見得。鳴り物になり、五人、財布を柵に、だんまり模樣、立廻り小氣くあつて、トヾ、五郎吉、雲六、財布を引き合ひ、紐切れて、左右へドンと尻餅を突く。伴作、恟り、飛び退き、泥介は早枝を探り見て、さてはと思ひ入れ。早枝、アレ、と驚ろくを、泥介、モシ、と押へる。双方一時に、木の頭。伴作、探り寄るを、五郎吉、財布を口に銜へて、伴作を引きつける。雲六、財布の紐を、舞臺へ投げつける。泥介、早枝を圍ひながら、透かし見る見得。早めたる寺鐘の送りにてよろしく。

ひやうし幕

二幕目

神樂ヶ岡の場
加茂神殿の場
浮田森藤棚の場

役名――叢雲王子。富士左京之進常雪。腰元、皐

月。同、楓。淺間狹右衞門照政。

本舞臺、三間、向う黑幕、所々に丸物の松の立ち樹、日覆より吊り枝、すべて神樂ヶ岡麓の體。山颪、時の鐘にて、幕明く。

ト右の鳴り物にて、向うより中間五人、深雪御前の紋付きの箱提灯を持ち、後より同じ紋付き、油單掛けし長持、黑塗りの手桶に錠の下したるを舁き出て、舞臺へ來り

中一　なんと、まだ夜の明けるには間があらうから、爰で一息入れて行からうぢやあねえか。

三人　それがよからう／＼。

ト皆々、荷を下ろし

中二　なんと、上々方と云ふ者は、ちよつと出るにも、お上りの水だの、ヤレ、着替への長持だのと、億劫なものぢやアないか。

中三　さうよなア。こちとらならば酒の一升も提げて、西新井から王子へでも行つて、酒は拳酒色品でもやらかすにな。

中四　但しは三丁目へ行つて芝居を見るワ。上つ方と云ふものは、加茂の社で、舞樂とやらを見物さつしやるとよ。

中一　ナニ、ぶがく。そりや何も知らない事を云ふのぢやないか。

中二　エヽ、そりや無學文盲だワ。

中三　舞樂と云へば、此方の殿樣は、年中舞樂ばかりやらかして、その上女嫌ひで、若衆ばかり抱いて寢さつしやるさうだ。

中四　それゆゑ、關白樣から嫁にござつた深雪御前さまと、まだ一度も床入りをさつしやらぬとの事だ。

中一　それぢやア、さぞ奧樣もひもじからう。いくらもぴんぴんしてゐるおいら達を、一晩づゝ抱いて寢さつしやれば。

中二　べら坊め、そんな事が出來るものか。アレ／＼、後の森蔭へ、提灯が見える／＼。

中三　そんならモウ、奧樣のお出でと見えた。サア／＼、急げ／＼。

ト右の鳴り物にて、皆、上手へ入る。矢張り時の鐘。橋がゝりより、黑絹の忍び黑頭巾にて、顏を包みし男、鐵砲を持ち出て、向うをキッと見込み、松並木の

蔭へ入る。時の鐘、行列三重、向うより中間二人、深雪御前の、附き、箱提灯二張り、外に二人、同じ紋付き、緋の油單の挾み箱。また一人、同じく長刀、上下侍二人、定紋、對の陸尺にて、鋲打ちの乘り物。腰元皐月、補襠、同じく楓、女小姓、足輕二人、外に茶丸を擔ぎ、中間大勢、箱提灯を持ち、舞臺へ來り

皐月　最早夜明けに間もなし。加茂の社へ御臺樣、お忍びの御參詣。いづれも方、心を附けて、お乘り物を早う早う。

トこの人數、上手へ行かうとする。この時、後に、ドンと本鐵砲の音する。

ヤ、いづくともなく筒音は、お駕籠を目當に、狼藉なすと聞えたり。

ト思ひ入れ。

足輕　正しく曲者。イデ、我れ〳〵が

皐月　狼藉者を取逃がさぬやう。いづれも早う。

皆々　心得ました。

ト行列の人數、上と橋がゝりへ、別れて入る。

皐月　あの者どもばかりでは心元なし。二人とも、早う早う。

足輕　心得ました。

ト行きにかゝるを、乘り物の內にて

左京　ヤレ待て何れも。曲者を追ひかくるに及ばず。先づ先づお待ちやれ。

皆々　ヤ、あの聲は。

ト合ひ方になり、乘り物の戸を開ける。內に富士左京之進、老けたる拵らへ、上下衣裳、大小にて、住ひ居る。皆々、驚ろき

皐月　ヤ、御臺樣と思ひの外、あなたは御家老

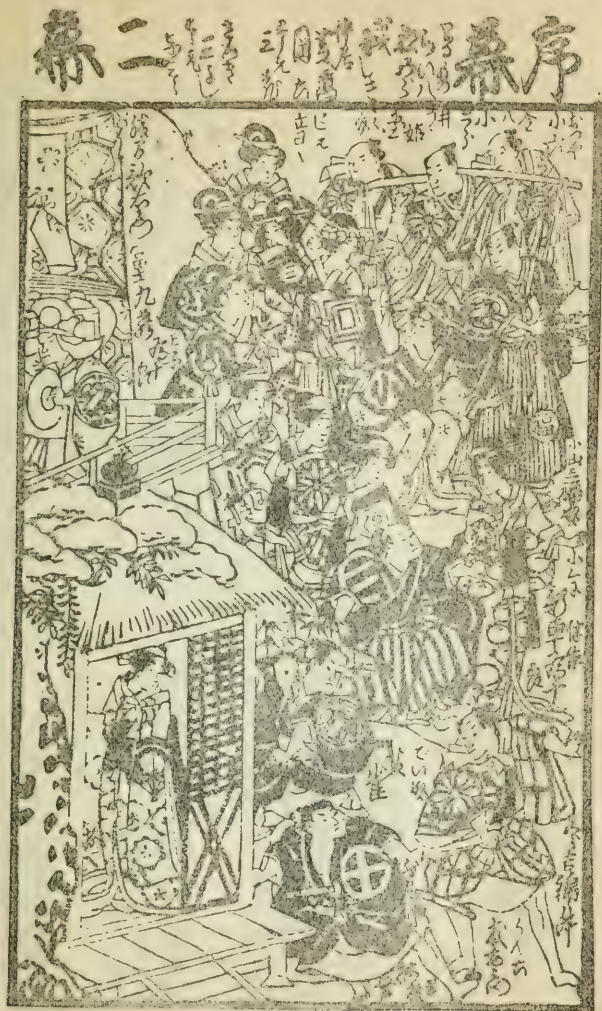
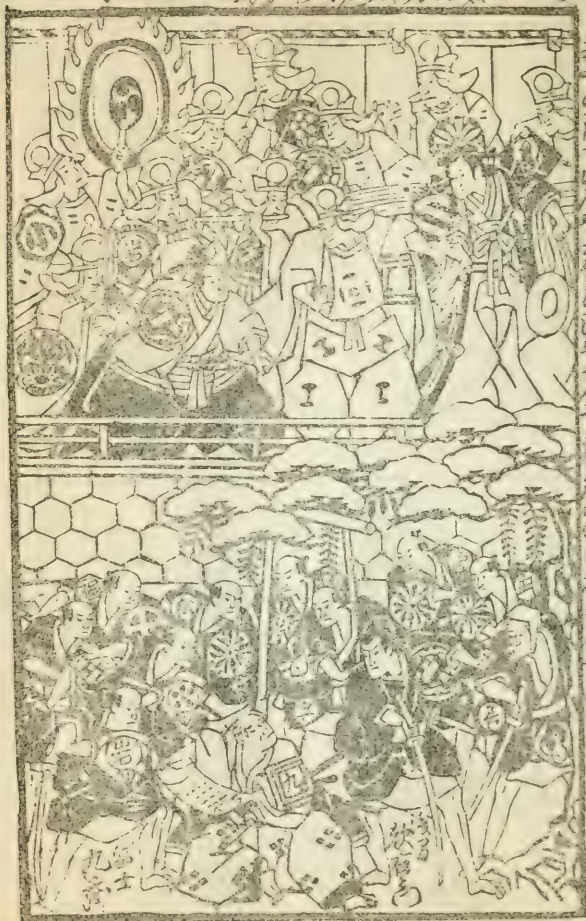
皆々　富士左京之進さま。

左京　ヤレ、音高し。方々、驚ろくは尤も至極。この程ほぼ聞けば、叢雲の王子、御謀叛の思し立ちの事。未だ夜陰に深雪御前、加茂明神へ御參籠、もし途中にてかゝる狼藉ある時は、附け人たる左京之進、申し開きなきゆゑ、密かに御臺所の乘り物に入れ變つて、斯くの仕合はせ。

皐月　すりや、いつの間にやら御臺樣の

楓　お駕籠の內に人知れず、お出でなされし左京之進さま。

皆々　して、御臺樣には。

左京　氣遣ひ無用。深雪御前には、暫時御窮屈ながら、召

初宿の

繪番附

替への小袖櫃へ入れ參らせ、先刻神職方まで、密かに送り參らせたワ。
侍ひ　何から何まで拔け目なき、左京之進さまのお計らひ、して、あなた樣には只今の狼藉
皆々　もしやお怪我は。
左京　ナニサ／＼、天運盡きざる左京之進が體に、奸佞邪智の飛び道具。いつかな立たぬ。ム、、ハ、、、。馬鹿な事を。
トこの時、上手橋がゝりより、以前の中間、侍ひ、大勢、出て來り
侍ひ　ハツ、仰せに從ひ狼藉者
中一　並木の茂味に心を附け
中二　社殿社内の隅々まで
中三　嚴しく尋ね候へども
侍ひ　逃げ失せしと相見え
皆々　かいくれ知れませぬやうにござります。
左京　ナニサ／＼、詮議に及ばぬ。其まゝ／＼。
トこの時、本釣り鐘、六ツ、所々にて鳥笛。
最早鷄鳴。矢張り御臺所お出での體にて、加茂の社へ片時も早う。
皐月　すりや、此まゝに。
皆々　左京之進さま。
左京　ア、コレ、御臺所のお立ちでござるぞ。
ト皆々へ思ひ入れ
ト云ひながら、乘り物の戸を立てる。
皆々　ハア。
ト時の鐘、行列三重にて、この人數、上手へ入る。ト時の太鼓にて、この道具廻る。
本舞臺、通し、中足二重、黑塗り欅、欄間、鍍金金物打ちし高欄、踏込み、石段、向う狐格子、半御簾、前側、三方へ緞子の幔幕、下ろしあり、すべて加茂の社、拜殿を石の舞臺と見たる體。この道具、誂らへの通り、結構に飾りつけ、右鳴り物にて、道具納まる。
ト三味線入りの樂になり、向うより、樂人一、裝束、指貫、附け太刀、鳥兜にて、誂らへの劍を持ち、樂人二、三、四、五、六、七、八、九、十、皆々同じ拵らへ、間々へ四神の鉾を持ち出て、花道に居並ぶ。

樂一　この度武將義廣公、武運長久祈りの爲、御臺深雪御前、當加茂の社に於て、舞樂奉幣行はせ給ふ。
樂二　今太平の御代に基き、樂を和らに一奏で。シテ、ワキは忝なくも、叢雲の王子さま。
樂三　まつた深雪御前の附け人たる、富士左京之進どの、これを承る。
樂四　舞樂に用ゆる四神の鉾、火性を表す前朱雀。
樂五　木性を象る左青龍。
樂六　金を表すはこれ右白虎。
樂七　漲る水は後玄武なり。
樂八　即ち東西南北に象り
樂九　四隅を守りの神事の鉾。
樂十　樂式萬端調ふ上は、舞樂の殿へ、
皆々　相詰め申さう。
ト右の鳴り物にて、舞臺へ來り、鉾を好き所へ置き棒へ立て、皆々、上下へ住ふ。この時、御簾の内にて
叢雲　菖草、照る日は神の心かは、影さす方に靡きけるかな。
皆々　あの聲は。
呼び　王子の出御。

皆々　ハア、。
ト管絃になり、御簾、上がる。眞中に叢雲の王子、床几にかゝり、左右侍ひ二人、烏帽子、素袍にて控へ、樂太鼓、その他、樂器並べある。
樂一　これは〳〵、叢雲の王子には、變らせ給はぬ麗しき拜顏。
皆々　恐悦至極に存じ奉りまする。
叢雲　誰れ〳〵にも今日の役目、大儀にこそあれ。
皆々　御懇の御意、有り難う存じまする。
叢雲　我れ苟も大望を企て、山名持豐を時の關白となし、四海を掌に握らん麿が大望。今日當社に於いて、深雪御前、舞樂奉幣を幸ひ、修驗者闇刑坊が教への呪法。打毬樂に殺伐の調子を合はせ奏づる時は、武將義廣、立ち所に一命を斷つ稀代の呪法。兼ねて一味の其方どもを語らひ、富士左京之進へ云ひ附けし調伏、舞樂の用意は如何なるぞ。
樂二　ハッ、我が君の仰せの通り、富士左京之進の指圖に從ひ
樂三　調伏の舞樂の儀式
皆々　相調ひましてござりまする。

叢雲　方々の心配、大儀々々。
樂二　して、舞樂の役人たる、富士左京之進どのには
皆々　いづれにござる。
ト　この時、奧にて
左京　氣遣ひあるな方々。富士左京之進常雪、疾よりこれに扣へてござる。
ト　管絃になり、正面の御簾の內より、左京之進、誂らへの裝束、指貫、烏兜にて、出る。皆々、見て
樂一　富士左京之進どのには今日の役目
皆々　さぞかし御心配に存じまする。
左京　いづれもには御苦勞千萬。我が君樣には、御機嫌の體、大慶至極に存じまする。
叢雲　左京之進には役目大儀。兼ねて麿が大望に、再三味方を勸むれども、未だ一味の連判へ、血判はなさゞれども、調伏の舞樂に用ゆる打毬樂、其方ならでは存ぜぬ密樂。いよ／＼今日、奏するや。
左京　これは畏まつたる仰せ。王子の嚴命、何しに違背仕らん。さりながら、存すべき旨の候へば、お味方の儀は追つての事。義廣公の調伏の舞樂、丹誠凝らし奏するならば、忽ち落命、疑ひなし。

皆々　御安堵あられよ、我が君樣。
叢雲　ホ、ウ、潔し頼もしゝ。必らず他聞へ、漏さぬ密計。
皆々　委細畏まり奉つてござります。
ト　向うバタ／＼にて、仕丁、走り出て
仕丁　申し上げまする。
左京　何事ぢや。
仕丁　ハッ、武將の御臺所、深雪御前さま、拜殿へ御入り。伶人方には、急ぎ舞樂の御用意あつて然るべく存じまする。
ト　引返して入る。
叢雲　すりや、御臺所には、最早拜殿へ來りしとな。いづれも樂を、合奏いたせ。
皆々　ハッ。
ト　管絃になり、左京之進、平舞臺よき所へ住ふ。樂人五、六、樂太鼓を、左京之進の前へ直し、皆々、二重へ、並よく並び、樂器を扣へる。左京之進、正面へ辭儀をして
左京　いでや、神樂を。
皆々　心得て候ふ。

ト　これより樂の鳴り物になり、左京之進、太鼓を一つ打つ。この時、向う揚げ幕にて

狹右　いづれも、待つた。

皆々　待てとは、如何に。

狹右　今日の舞樂、批判あり。左京之進どの始め、いづれも、先づ〳〵待たれよ。

皆々　なんと。

ト　鼓の合ひ方になり、向うより淺間狹右衛門、侍ひ烏帽子、素袍にて、出て、花道、好き所にとまる。皆々、見て

左京　誰れかと思へば、義廣公の御師範たる

樂二　淺間狹右衛門照政どの。

樂三　足利武將の嚴命にて

樂四　武運祈りの今日の舞樂。

樂五　殊に忝くもこの所は

樂六　叢雲の王子の御前

樂七　無禮慮外も憚らず

皆々　何ゆゑ妨げおしやるのだ。

狹右　成る程、不審は御尤も。いづれもには御存じあるまじ。今日の舞樂に批判あるゆゑ、王子の御前も憚らず、慮外合點、無禮承知。身不肖なれども、義廣公へ御師範たる、狹右衛門照政、推して止める上からは、事の實否を糺すまで、この場はいつかな動きやいたさぬ。

樂十　ヤア緩怠なる狹右衛門照政。武將へ師範を笠に着て、無禮の一言。

皆々　イデ、我れ〳〵が

叢雲　方々、控へい。

皆々　御意ではござれど

叢雲　麿が思ふ仔細あれば、扣へてよからう。

皆々　ハッ。

叢雲　淺間狹右衛門、許す、近う。

狹右　然らば御免下さりませう。

ト　三味線入り、中の舞ひになり、狹右衛門、思ひ入れあつて、舞臺へ來る。

左京　最前より樣子如何にと、差扣へ居つたが、合點ゆかざる狹右衛門が詞。今日の舞樂は、御臺深雪御前が御奏樂にて、忝なくも叢雲の王子のお相手たる富士左京之進、心耳を澄ます舞樂の調子、批判あるとは心得ず、推して止めし仔細は如何に。

狹右　お尋ねなくとも此方より、言上なさんその爲に、出

仕なしたる狹右衞門照政。尤も、某が父は天王寺の樂人、卽ち右方の流儀。其許樣は住吉にて、左方の流儀ゆゑ、銘々に一派あり。殊更奉納の舞樂には、神祕口傳の大事あり。それに符合の舞樂の調子、批判あると申したが、よもや誤まりではござるまい。

左京　ヤア、過言なり照政、神祕口傳の相違ありと、身共が一派を蔑みする一言。もと我れは關白家譜代の冷人、御身が親淺間將監とは無二の仲。昨たに、足利家へ、御藝の附け人にて來りし時は、御身は浪人　友のよしみを思ひ、義政公へ推擧なし、淺間の家を相續させ、御師範の席へ据ゑたは誰れが庇、みな身共が執成しならずや。その恩も辨まへず、身共へ對して要らざる批判。小身者の分として、詞が過ぎる、扣へて居らう。

狹右　イヤ、扣へますまい。そりやハヤ其許の推擧にて、再勤なしたる某。その舊恩を忘却は致さねども、忠義の道には替へ難し。只今貴殿が、奏し召されし怪しの舞樂、一方ならぬ調伏の

左京　ヤ。

トぎつくり。叢雲の王子と顏見合せ、思ひ入れ。

狹右　イヤサ、調子も狂ふ常雪どの、右方左方の派を亂し、神祕口傳の相違あるを、誠と云はるゝ常雪どの、お年の加減か但し又、舞樂の奧儀を御存じなきや。

左京　ヤア、重ね〴〵の雜言過言。身共が奏す今日の舞樂、批判があらば申して見よ。

狹右　お望みならば逐一に、申して聞かさう。

左京　聞くぞよ。

狹右　申すぞよ。

左京　サア。

狹右　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

トきつとなる。大小入りの誂らへの合ひ方。狹右衞門、思ひ入れ。

狹右　元來富士の家は住吉の樂人、神樂を奏するには、その一派の樂人を以て行ふべきに、王子を始め數多の樂人、皆天王寺の右方派。神祕口傳を我まゝに行ふ事、今日の不審のこれ第一。

左京　事新しき申し分。抑々舞樂の濫觴と云つは、唐土舜の後八子、始めてこれを製作ある。まつた我が朝にては、推古天皇二十年、秦の川勝、傳來してより、富士淺間東儀なんど、十七家に分かれたれども、傳ふる道は只一

筋。無益の論談、片腹痛き事。

狭右　天晴れ流石の常雪どの。春日八幡に事替り、加茂住吉の神樂に限り、太鼓を除き用ひざるは、これ即ち神祕の大事。今日舞樂にあの樂太鼓を用ふるは、神慮に違ふ不遜の一つ。

左京　太鼓は形圓にして、日の本の鏡に象る。撥を上げてこれを打たば、鏡の表を打つも同然。それゆゑに神樂には、太鼓を除き用ひざれども、管絃舞樂は異朝の技藝。さすれば太鼓を用ふるを、僻事とは申されまい。

狭右　然らば太鼓の表皮は。

左京　これ太陽の形なり。

狭右　して又呂律に配當すれば。

左京　九々の數にて神仙調。

狭右　表皮は陰に屬し

左京　六々と數ふれば、黄鐘調の調べに當る。

狭右　左を上げて打つ時は。

左京　東に當つて火徳を治む。

狭右　右を沈めて扣ふれば。

左京　西に當つて水氣を呼ぶ。

狭右　三つ巴を描く古實は。

左京　日月星の三光を、智仁勇の三つに象り、二六時中の時を知らしめ、或ひは軍の隊伍を定む。まだこの外に妙閑口傳、青海波の波頭、竹林樂の風の音、不審があらば尋ねてお見やれ。逐一に語り聞けん。これでも見事、批判があるや。狭右衞門照政、返答は、ナ、、なんと。

狭右　ハテ、淸らかなるその返答。さほど潔白なる常雪どの神樂に用ひざる打毬樂に、殺伐の調に合はず。樂の音色を包まん爲、神樂に非ずして、專ら世上に持て囃す、今樣催馬樂を交へ、怪しき調べは、これ正しく人命を斷つ呪法の調べに、なんと相違はござるまいが。

左京　サ、それは。

狭右　かゝる怪しき舞樂ゆゑ、批判いたせしが誤まりなるか。

左京　サア、それは

狭右　それでも呪法ぢやござらぬか。

左京　サ、これは。

兩人　サア〳〵〳〵。

ト無念の思ひ入れ。

狭右　斯程の事の辨まへなき、常雪どのにはあらざれども、引くに引かれぬ仕儀なるゆゑ、又は慾心に惑はさ

れ、及ばぬ望みに情なや、その身ばかりか剩さへ、叢雲の王子にまで、末世末代惡名を、受けさせ給ふ非道の逆心。昔が今に至るまで、謀叛の榮えし例しは少なし。君の御心和らぐる、及ばずながら常雲どの、御賢慮めぐらし下さるやう、照政偏へに、頼み上げます。

ト兩方へ掛け、思ひ入れにて云ふ。叢雲、思ひ入れ。

叢雲　流石の照政、天晴れの眼力。如何にも汝が推量の如く、いさゝか恨める者ありて、一命を斷ち終らんと、左京之進に云ひつけ、調伏の樂を奏せしを、露顯の上は力及ばず、今より思ひ止まるべし。

左京　すりや、我が君にはこれまでの、思ひ立ちを止まらせ給ふとや。

叢雲　如何にも。照政が詞、肉身に浸み、忽ち夢の覺めたる心地。今より大望、思ひ切る、ナ。サ、思ひ切る程に、左京之進、其方も、ナ。とくと覺悟いたしてよからう。

ト狹右衞門を切れと、思ひ入れにて云ふ。左京之進、呑み込み

左京　ハツ、委細承知仕る。只何事も拙者が胸に。イヤ、ナニ、照政どの、御身が只今の一言には、我が君始め某も、惡心忽ち止まる上は、我が爲の善知識。やがて報いを。

ト叢雲と顏見合せて

イヤ、忝なうござる。

狹右　これは〳〵、御挨拶。照政づれが猿智惠に、前後の辨まへも知らず、一途に御身を御大切と存じ、申し上げたる愚慮の詞。聞し召し分けられ、大望思し召し止まらせ給ふ事、身にとりまして如何ばかりか、有り難う存じまする。

叢雲　返す〴〵も頼もしき、天晴れの志し。さりながら、舞樂は元太平の弄び。もし亂世の時に至り、敵を防ぐに何を用ひん。

ト皆々へ、目配せする。

樂八　如何にも君の仰せの如く、人も無氣なる舞樂自慢、

樂四　神祕口傳の長詮釋。

樂五　鍛練召されし照政どの。

樂七　劍の舞ひをこの場にて

ト四人、附け太刀へ手を掛け、立ちかゝるを、狹右衞門、見て

狹右　こりや各々には、なんと召さるゝ。王子の御前、お扣へ召され。

叢雲　愚かや照政、最前左京之進の詞には、近き頃まで流浪の其方、例へ伶人樂人たりとも、武將の扶持を食むからは、武術の嗜なみあるや如何に。

狹右　これは又、御念の入りたるお尋ね。舞樂の道に軍樂とて、伶人鉾を持つて舞ふ。これを破陣と名け、敵を破るの形をなす。神樂にても御女の舞ひ、惡鬼惡魔を降伏して、頭に宿る正直の、神兜を猪首に着なし、心に慈悲の鎧を投げかけ、敵陣に向ふ時は、何萬騎にて寄すとも鏖一むらの拔らひにて、打ち破らん事疑ひなし。武術と云ふも舞樂と云ふも、天地自然の道は一筋。舞樂の極意はあらかじめ、斯樣なものかと存じまする。

ト思ひ入れにて云ふ。皆々、ムッと、無念の思ひ入れ。

叢雲　ホヽウ、舞樂と云ひ、武術まで、天晴れ才智の照政に、折角仕込みし大望を……イヤサ、大丈夫なる心底。鷹も滿足。狹右衞門、喜ぶぞよ。

狹右　御懇の御意、有り難う存じまする。

トこの時、七ツの時計鳴る。

左京　最早申の上刻、君には一先づ、神職方へ御入りあつて、御酒宴の催ふされて然るべし。拙者はこれより深雪御前の、歸館を見送り、老臺の儀なれば、これにてお暇賜はるべし。

叢雲　尤もなる願ひ。鷹はこれより社殿なる、浮田に近き別業にて、舞樂を奏し、一獻酌まん。

左京　樂人の方々、我が君の御供いたされよ。

皆々　畏まつてござる。

左京　淺間狹右衞門には、何かと心配。

狹右　イヤ／＼、其許樣こそ、お役目御苦勞。

叢雲　富士左京、大儀。

左京　ハッ、我が君には、いざ／＼。

ト王子先に、樂人皆々、花道へ行き。よろしき所へとまる。舞臺の兩人、よろしく住ふ。

叢雲　無念の返報……イヤ、ナニ、狹右衞門、祝着。

狹右　我が君樣には、御機嫌よろしう。

ト狹右衞門、左京之進、顏見合せ、首尾よく行つたと思ひ入れ。

叢雲　とは云へ、照政。

トちよつと、立ちかゝるを

左京　アイヤ、君には、先づ

ト押へる。木の頭。狹右衞門、平伏する。双方一時

に、木の頭。
入らせられませう。
ト目禮する。これをキザミにて、よろしく
しやうし幕
幕引きつけると、時の太鼓をかむせ、三味線入りの樂になり、王子先に、樂人十人、後より左京之進、附いて、向うへ入る。鳴り物、ツナギ、引返し。
本舞臺、一面、淺黄幕、松の立ち木、吊り枝、すべて加茂堤の模樣、爰に以前の樂人、大勢、いづれも着流し、大小、尻端折り、頰かむりにて、立ちかゝり、禪のツトメにて、幕明く。

樂三 なんと、いづれも、兼ねて叢雲の王子に一味の我れ我れ
樂四 足利義庶を調伏の樂、今日加茂の社にて、深雪御前の舞樂を幸ひ
樂五 折角首尾よくやりかかつたを、淺間狹右衞門に見出され
樂六 王子には、その無念如何ばかりか。
樂七 歸りを待ち受け、闇討ちにせよと王子の仰せ。
樂八 舞樂の殿より、直さまお暇。
樂九 この裏手へかゝるは必定。
樂十 併し手强き狹右衞門照政。
樂五 この宵闇を幸ひに
樂六 浮田の森の松蔭にて
樂四 箱提灯の紋を目當に
樂七 騙し寄つて、たつた一討ち。
樂三 いづれも必ず、ぬかり召さるな。
皆々 合點だ。
ト皆々、囁き合つて、橋がゝりへ入る。知らせにつき、淺黄幕を切つて落す。
本舞臺、向う鏡板まで打抜き、加茂の遠見、舞臺の眞中張りよき、大樹の松の吊り枝、これに沿ひ、大きなる藤、舞臺一面、莫大なる藤棚、所々に杭を立て、よき所に一間の中足藁葺き、四方屋根の宮、丸木の鳥居、この側に大きなる池、土橋を架け、すべて浮田の森、藤棚の體。誂らへの通りに、道具納まる。
ト時の鐘、行列三重模樣の合ひ方。向うより中間、狹

右衛門の紋付きたる箱提灯を持ち、後より切り棒の駕籠、定役にて舁き、足輕、草履取り、挾み箱の中間、附き出て、舞臺へ來る。駕籠の中にて

左京　コリヤ〳〵、暫らく待て。

皆々　ハツ。

ト駕籠を下ろす。左京之進、野袴、ぶツ裂き大小にて駕籠の戸を明け

左京　最前より見るところ、どうやら提灯の紋所、身共のとは違ふやうぢやが、如何いたしたのぢや。

中間　ヘイ〳〵、これは斯やうでござります。お迎ひに參りまする節、急ぎましてお提灯を、改めませず持參いたしまして、先刻見まするると、損じまして居りまするゆゑ。

足輕　これは粗相いたしたと、當惑いたして居りますところ、淺間さまの提灯が二張りござりまするゆゑ、手前が譯を申しまして、一張り借用いたしましたを、旦那樣へ申し上げませぬ所は、眞平御免下さりませ。

中間　誠に取急ぎましたゆゑの不調法。

兩人　ヘイ〳〵、御免なされて下さりませ。

左京　アヽ、左樣か、道理こそ、違うたと存じた。さればゞ、さぞ淺間方でも困るであらう。以來は心を附けい。

兩人　ヘイ〳〵、畏まりました。

左京　爰はもう浮田の森ぢやな。サア、急げ〳〵。

ト駕籠の戸を閉める。この時、橋がゝりより以前の五人、窺ひ出て、提灯の紋を見て、皆々、拔きつれ、駕籠へ切つてかゝる。

皆々　ヤア、狼藉者々々々。

ト皆々、逃げる。ト禪のツトメにて、中間、足輕、逃げて入る。これより、誂らへの鳴り物になり、立廻りあつて、トヾ、左京之進、皆々を追ひ込み、これにて鳴り物變り、向うより箱提灯を持たせ、中間、付き、狹右衛門出で來り、花道にて捨ぜりふにて、本舞臺へ來る。提灯持ち、以前の立廻りの手負ひ、倒れて居るに躓き、驚ろく。

樂人　うぬ。

ト切つてかゝる。狹右衛門、思ひがけなき思ひ入れにて、これより誂らへの鳴り物になり、立廻りあつて、よき程の見得にて、道具、廻る。

ト元の裏、見通し、藤棚の裏になる。左京之進、又々

立廻り。此うち狹右衞門、切り結び、後より出て來る。狹右衞門は五人と立廻り、左京之進も五人と立廻り兩人刀を振り上げし見得にて、道具、逆に戻る。

左京　ヤ、御身は淺間狹右衞門。
狹右　さう云ふ聲は、左京どの。
左京　思ひがけない、この狼藉。
狹右　拙者とても通りかゝり、無慘の狼藉、是非なくも、切つて捨てんと、この有樣。
左京　存ぜぬ事とて此方も
狹右　危ない事で
兩人　あつたよなア。
ト兩人、思ひ入れ。
狹右　さるにても合點のゆかぬこの者ども。何ゆゑあつて其許へ。
左京　樣子は何か知らねども、最前家來が話しにて、身共が提灯を借用せしと、家來の云ひ譯。この提灯の紋所を目當となしてこの狼藉。
狹右　それにて思ひ合すれば、今日の舞樂を遺恨に持ち、某を討ち果せよと、王子の指圖に疑ひなし。
左京　オ、サ、根强き企みの王子の計らひ、さりながら、最早露顯の上は、何程の事やあらん。これまで謀叛に一味せよと再三の上意、諫めを用ひぬ惡逆非道、勿體なくも義麿公を調伏の舞樂。
狹右　見出だされし體にて、最前の仕儀。これも貴殿のお賴みゆゑ、首尾よく參つて、重疊々々。
左京　誠に難なく事を治めしも、皆御身が働らき、忘れは置かぬ。忝ない。
狹右　ナニ、これしきに。併し、その代りと申すも如何なれども、其許樣にも重なる年、老は先立つ、これ順道なれば、折入つてお願ひ申す儀がござる。
左京　その賴みと云はゞ、不所存なる悴が勘當の
狹右　ヤ。
左京　サア、詫び召さるゝ心であらう。
狹右　ヤ。
ト兩人、思ひ入れ。
左京　以前とは事變り、善心に立歸りし御身の心底見極め

て、密かに頼む一儀がある。なんと頼まれては下さるまいか。

狹右　ナニ、この上にお頼みとはな。

左京　仔細と云ふは、これを見よ。

ト左京之進、肌を脱ぐ。白絹にて疵口を巻き、襦袢、血に染みて居る。狹右衛門、見て、驚ろき、合ひ方消す。

狹右　ヤ、、左京どのには、何ゆゑあつて、この體は。

左京　オ、、不審は理り。一通り、我が云ふ事を聞いてたべ。

ト謠らへの合ひ方、蟲の音、この時、空へ月を出す。左京之進、思ひ入れ。

最前も云ふ通り、叢雲の王子の謀叛にて、位に登らん望み。然るに今日、深雪御前の加茂詣で。もし途中にて狼藉あらんかと、密かに乗り物に入れ替り、今朝神樂ケ岡を通りかゝりしところ、何者の仕業にや、乗り物目かけて撃と放せし飛び道具。小筒なれども、急所をかけたるこの痛手。されども今まで氣は張り弓。何氣なき體にもてなし、首尾よく事は計りしが、とても存命覺束なし、頼みと云ふは爰の事。

ト懐中より、袱紗包みの一卷を出し

この一卷は富士代々、先祖より傳來の、味摩之と傳ふる舞樂の祕書。まつたこの刀は足利家より、拜領なしたる家の重寶遠多丸。この二品を預くる間、何卒竹が行くへを尋ね、本心に立返らば、舞樂の祕書を渡し、富士の名跡相續させて給はれかし。偏へに御身を、頼み申す。

ト思ひ入れにて云ふ。

狹右　驚ろき入つたる物語り。すりや、今朝、神樂ヶ岡にて、思ひがけないこの深手。お頼みの趣き、逐一承知仕る。日ならず富士太郎どのに巡り會ひ、この一卷を手渡しなし、知れざる敵も天の惠み、やがて糺して本望させ富士の家名、再び繼がせ申すべし。

左京　忝ない。その一言が冥土の土産。さりながら、その一卷を所持なすとも、祕事口傳を許さゞれば、なんの益なし。この場に於て、傳授なさん。

狹右　すりや、祕事口傳をお許し下されんとや。

左京　一子相傳の大事。御身に祕事を傳へ置けば

狹右　富士太郎どのに讓り返さば、樂の奧儀の絶えざる道理。

左京　不淨を清め、とく／＼傳授。

ト腹帶をキッと締める。誂らへの樂になり、左京之進、鼻紙にて手を淸め、羽織をそこへ敷けと敎へる。狹右衞門、その通りにする。左京之進、この上へ一卷を開き、樂の音を聞く思ひ入れ。

アレ〳〵、遙かに聞ゆる舞樂の調べ。

狹右　幸ひなる哉、あの樂に、この一卷を引合はせて

左京　イデ〳〵、傳授を。いま聞ゆるは夜半樂。卽ち音取のこれ大事。

ト一卷を指圖して、見せる。

狹右　ムウ。

ト卷を段々開く。

左京　天人樂に羯皷の口傳。

狹右　イカサマ。

トちつと思ひ入れ。

左京　舞樂の大事、音樂の祕密。

狹右　成る程。

ト段々一卷を開き、狹右衞門、樂に合せて、會得の思ひ入れ。

左京　陰陽の管絃の極意、とくと承知いたせしか。

狹右　ハッ、奇々妙々たる舞樂の奧儀、祕事口傳、會得仕つてござります。

ト一卷を卷き納め、懷中する。この時、ゴンと本釣鐘。

左京　あゝ嬉しや、忝なや。この世に思ひ置く事なし。最早近づく我が血死期。

ト左京之進、胸帶を解かうとする。

狹右　アイヤ、その腹帶、暫らく解く事無用、心措きなく成佛召され。

左京　イデ、達多丸、何卒忰へ。

狹右　これが達多丸とな。その刀を

トかゝる。

左京　ヤ。

ト狹右衞門、左京之進の樣子を、ヂロリと見て

狹右　ム、、ハ、、、、、。ハテ、心地よき富士が死樣。

左京　ナ、、なんと。

狹右　ヤイ、老耄のうつそりめ、冥土の土產に何もかも、云つて聞かせる。苦痛を堪へてよつく聞け。

左京　ヤ、、、、。

ト驚ろく左京之進を、狹右衞門、蹴返し、捨石に腰をかけ、キッと思ひ入れ。無箍入り、誂らへの合ひ方。

狹右　譬へにも云ふ通り、よく水を泳ぐ者は、必らず水に溺るゝと、おのれがおのれが業に慢心して、その業ゆゑにその死樣。おのれを全くなさんずと、某が心盡し。一朝一夕の事と思ふか。もと富士淺間は並びなき、關白家の樂人。河内和泉一ケ國づゝの知行取り。然るに父將監、聊かの誤まりにて浪人の後、關白へ媚び諂ひ、身共が知行の河内まで加增なし、深雪御前の附け人にて、いま將軍家の補佐となり、老耄れるに從ひ、子孫の冥利が怖くなり、口塞げに我れを取持ち、師範の席に据ゑたれど、遙かに小祿、あてがひ扶持がむやくしく、その上富士の家には今渡したる舞樂口傳の祕書あれば、これに上越す一派なければ、人知れず闇討ちになさんとは思へども、手強き老耄ゆゑ、時節を待つ其うちに、今日計らずも深雪御前、加茂の社へ參詣と聞く。道に待ち受け、只一打ちにするならば、附け人の富士左京、どん腹切るは知れた事と、乘り物目がけ放した鐵砲、正しく手應へありながら、深雪御前が堅固の體、心得ずと思ふ折から、うぬが口から身の上話し。身共を敵と知らずして、悴を賴む露涙。憂き目を味摩之の一卷の、祕事口傳まで斯う〳〵と詳しく傳へた業晒し。先刻殺した樂人めらと、同志討ちなしたる體にもてなし、王子をお先に煽てあげ、馬鹿大將の義廣を討ち殺し、時の武將と仰がれるを、草葉の蔭から見物しろ。見れば見る程、慘めな態だ。ムヽヽハヽヽハヽ。

ト思ひ入れにて云ふ。左京之進、無念の思ひ入れ。

左京　初めて聞きたる汝が惡心。三つ子の魂ひ一生と、幼立ちから心よからぬ、性なりと思ひしが、かほど惡逆無道と知らず、親將監がよしみを思ひ、推擧なしたる某を討ち果す道知らず。思へば〳〵、口惜しやなア。

狹右　オヽ、口惜しからう。口惜しいは道理〳〵。悴富士太郎めも尋ね出し、返り討にして後からやる。うぬはキリ〳〵くたばつてしまへ。

左京　エヽ、聞けば聞く程、大惡人。例へ深手は負うたれども、やはか汝に。

狹右　こま言吐かさず、くたばつてしまへ。

ト立廻りあつて、トヾ左京之進を切り倒し、止めを刺す。本釣り鐘。凄き合ひ方。狹右衞門、刀を拭ひ、鞘へ納め、左京之進の刀を拾ひ、透かし見て、血を拭ひ鞘を搜し、取つて納め、腰へ差さうとして、我が刀邪魔になるゆゑ、拔いて池の中へ打込む。ドンと水煙り

立つ。件の刀を腰へ差し、身拵らへする。この時、雨車、烈しく、狭右衛門、宮の軒中へ入る。向うより、中間、頬かむり、笠を着て、蛇の目の傘を擔ぎ、箱提灯の疊みたるを持ち、酒に醉つたる體にて、ひよろ〳〵しながら出て、舞臺へ來る。狭右衛門、これを透し見て、下手へそろ〳〵出て、中間の持ちたる傘をひツたくる。中間、驚き寄るを、狭右衛門、打討ちに切る。中間の體、仕掛けにて、二つに割れて倒れる。狭右衛門、透し見て、よく切れると思ひ入れ。刀の血を拭ひ、鞘へ納め、傘を開きて、肩へ擔ぐを、木の頭。狭右衛門、につこりと笑ふ。これをキザミにて、よろしく

拍子　幕

幕の外、本釣り鐘、變つた合ひ方、雨車にて、狭右衛門、思ひ入れあつて、謠をうたひながら、向うへ入る。トメの木にて、シヤギリ。

三　幕　目　　加茂社奥殿の場

役名──叢雲王子。富士妻、三室。同下部、土子泥介。淺間狭右衛門照政。

本舞臺、三間の間、高足、襷欄間、大瓦燈口、御簾御殿、左右、銀張り附き、出入りの襖、眞中に黒塗り三段の上がり框。すべて加茂の神職上段の間の模樣。爰に三室、老けたる屋敷女房、裲襠の拵らへにて奥へ行かうとして居るを、樂人一、二、八、九、十、裝束の拵らへにて、立ちかゝり、支へて居る見得。よろしく、前バタラキにて、幕明く。

樂一　女と思ひ容赦すれば、席辨まへぬ、存外なる振舞ひ。

樂二　王子の御前へ通る事、罷りならぬ。

樂十　キリ〳〵、この場を

五人　下がり召されい。

三室　ナニサマ、左京之進づれが妻の身を以て、君の御前へ、叶はぬとの仰せは無理ならねど、武將義貞公の御臺深雪御前さま、誠關白常房公の御息女ならず、忝なくも

王子樣の妹宮、その附け人の我れ〳〵なれば、表向きは伶人なれど、御幼少よりお側近う召され、宮仕へせし者なれば、各々方とは又格別、火急に君へお尋ね申したき事あるゆゑ、何卒御前へ。

樂二　ナニサマ、昨今の我れ〳〵ゆゑ、內證の込入つた事は存ぜねど

樂八　今日舞樂の役に召され、斯く裝束を帶すれば

樂九　左京之進も我れ〳〵も、格式に上下はござらぬ。申し上ぐる事あらば、一應の相談もあるべきに

樂一　無沙汰に君へ言上とは、人も無げなる尾籠の振舞ひ。

樂十　達てと申さば手籠めにしても、いつかな通さぬ。叶はぬ事と諦らめて。

樂二　キリ〳〵この場を

五人　下がり召され。

三室　如何程支へ召さるゝとも、心ならざる今日の舞樂。殊に俄の胸騷ぎ、君へお目見得なした上、夫の安否を。

五人　イヽヤ、ならぬ。

三室　是非とも御前へ。

五人　なにを、小癪な。

トこの時、御簾の內にて

叢雲　ヤア、かしましい、鎭まり居らう。

三室　ヤヽヽ、あの聲は。

ト御簾の內にて

近侍　王子の御前なるぞ。

同　扣へ召されい。

皆々　ハアヽ。

トよろしく平伏する。管絃になり、正面の御簾を卷き揚げる。爰に叢雲の王子、脇息にかゝり、左右に近侍一、二、三、四、烏帽子、大紋にて、居並び、長柄の銚子、齋の臺を取散らし、酒盛りの體。

叢雲　推して麿へ對面を乞ふは、左京之進が妻の三室。ハハアヽ、さては先達てより申し遣はせし、汝が娘早枝を、麿が側仕へに差出さん爲に、返答申しに參りしか。それ待ち兼ねた。一刻も早く連れ來れ。但しは今宵同道なせしか。どうぢや〳〵。

三室　アヽイヤ、私しこれへ參りしは、左樣な事にはござりませぬ。今日當社に於て、御臺樣御催ふしの舞樂の折を幸ひ、空恐ろしき調伏の……ヤ、サア、朝夕の御行跡、誰れ云ふとなく我れ〳〵が耳にかゝり、御幼時より宮

仕へせし、大切なる御主君の御身の上に、もしやはひよつと……とサ、案じ過して、ついウカ〳〵、お歴々の思し召しも顧ず、御諫言を申し上げんと推參いたせし不調法も、御身の上を思うての事と、お免しあつてこの後ともに。

叢雲　默らう此奴。政元が妹井筒を、麿が后に立て、まつた美人の聞えある、汝が娘早枝は、側仕へに致せよと、再三常雲に申し付けしに、あのゝものゝと延引の其うちに、井筒姫は名古屋小山三と密通なし、行くへ知れずとの訴へ。憎くい女郎。これとても遲かれ早かれ尋ね出し、麿を嫌ひし鬱憤な、晴らさいで置かうや。それは格別、妹深雪姫が附け人にて、武將足利の臣下となるとも、元は麿が譜代の臣。その娘たる早枝を、召連れよと申し附けしに、延引なすは、高祿の武家へ緣附け、三代相恩の麿を蔑ろにする所存よな。

三室　ア、イヤ、全く持ちまして。

近四　さなくば君の御諚に任せ。

近三　有り難き事と三拜して

近二　直さま御所へ上げる筈。

近一　一日遁がれの延引は心元ない。

樂十　それになんぞや、姫の事は脇へこかし、仁儀立てして我が君へ、御諫言の申し上ぐるは。

樂一　この程より、晝夜お側に召さるゝ我れ〳〵。お首尾のいゝをやつかんでの拵らへ事。

樂二　王子には何不足あつて、逆心の思し立てなされうや。

樂八　左京之進やおてまへの心に比べ、跡形もなき君の讒訴。

樂九　それは格別、一旦仰せ附けられし早枝が身の上、王子の御諚は背かれまい。

樂一　性根を据ゑて、返答ぶちやれ。

皆々　ド、どうだ。

三室　これは又、御無體なる御難題。娘早枝は、我が子にて、我が子に非ず、幼少より忰富士太郎へ、娶合はせん契約なして、貰ひ受け育てしところ、いとけなきより兄妹と、呼びなせしその名に恥ぢて、女夫にはなられじと、物堅い忰が詞。是非にと云はれぬ二世の緣。それゆゑ譜代の家來に娶合はせ、早先達て東路へ、遣はしましてござりまする。

樂十　すりや、君のお心懸けられし

樂九　左京之進が娘早枝は

皆々　ヤア〳〵。

叢雲　忠臣無二と思ひし左京、憎くい老耄。それも大方連れ添ふおのれが采配なし、鷹を出しぬく兼ねての手段。

三室　サヽ、その御立腹は無理ならねど、一旦臣下の忰たる、富士太郎へ云ひ號けせし早枝なれば、忰に枕交さねど、人々の思惑、彼れこれを思ひ廻して

叢雲　ヤア、詞巧みに云ひ廻すが、猶更奇怪。その舌の根を。

三室　すりや、事を分けて申し上げても。

叢雲　只一刀に

ト太刀へ手をかける。

近一　血を注げば御身の穢れ。

近二　その儀は只管

皆々　お止まり下さりませう。

叢雲　ヤア、重々の過言。鷹が手に掛け成敗せん。そこ退け退け。

皆々　これは御短慮。先づ〳〵。

ト中の舞ひになり、叢雲、刀を拔き、三室へ切つて掛かる。皆々、支へるを、千鳥になりて、三室を追ひかける。此うち、向うバタ〳〵になり、狭右衛門、好みの拵らへにて、ツカッカと出て、三室と入れ替つて、キッと留める。

樂一　ヤヽ、照政どのには

皆々　又ぞろこの場へ

叢雲　主意に背くを成敗なすに、何ゆゑ汝は

狭右　全く以てお留めは仕らねど、取るに足らざる婦女と申し、淸めに淸むる神の庭、殊には譜代の富士の內證、不忠を働らく謂れもなし。御成敗に遭ふとても、いかでか恨むる人々ならず。何はしかれ某が、存ずる旨も候へば、申し開きを仕らんと、失禮を顧ず、お止め申しに、推參せしは大事の前の小事が肝要。一人の味方を捨つれば、敵十人の力を增すの本文。御企ての大望に……ヤ、サ、大鵬はよくしんに付くを憐れむの譬へ。何卒お心鎭めさせられ、三室どのゝお手討ちは、暫らく手前にお預けあるやう、偏へに願ひ奉る。

叢雲　イカサマ、手討ちに致すは易けれど、心ありげな汝が詞。とくと實否を糺せし上、鷹が望みを叶へるやう、計らふ其方が一つの手段。この場は汝が心に任せん。

狭右　すりや、お開き濟み遊ばして、

皆々　設けの御座へ。
叢雲　ムウ。
狹右　先づ〳〵。
　ト管絃になり、この人數、よろしく、舞臺へ戻り、狹右衛門、眞中に、並よく住ふ。叢雲、思ひ入れあつて
叢雲　最前と云ひ、又ぞろ鷹へ、諫言なす淺間狹右衛門。汝富士が舊恩を思ひ、三室が不屈きまで買ひ取つて、助命を願ふその志しに免じ、宥免の致しくれんが、何に依らず麿が心に、背くまじと申す誓言が見たい。
狹右　ハ、ツ、事易き君の御諚。再び舞樂の席に出でず、撥を取らぬ法もあれ、毛頭違背は
叢雲　それ聞いて先づは大慶。申し附くる事外ならず。左京之進が娘早枝、東へ下せしとあるを、急ぎ呼び寄せ、麿が側仕へに連れ來るまで、富士左京之進夫婦の者は、蟄居申しつけ、汝富士に代つて、戀の取持ち致すぢやまで。
狹右　御諚にはござれども、斯やうなる儀を仲立ち致さん事、武骨の某、思ひも依らず。殊に又、左京之進が所存もござれば、この儀ばかりは
叢雲　すりや、其方は詞を背くか。
狹右　全く左樣な
叢雲　但し誓言破る所存か。
狹右　サア。
叢雲　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
叢雲　照政、返答はどうぢや。
　トきつと云ふ。狹右衛門、思ひ入れあつて
狹右　斯くまで思ひ込まれしお心、包み隱すに詮なき事。御契約申せし左京之進は、前非を悔いて相果てましてござりまする。
三室　ナニ、我が夫が御最期とな。
　ト悔り、立ち上がる。狹右衛門、制して
狹右　ア、コレ、立ち騷ぐ場所ぢやない。サア、何事も某が
　ト思ひ入れあつて、三室を押へる。叢雲、こなしあつて
叢雲　フム、さては云ひ譯なさの切腹は、麿への面當て。可愛さ餘つて憎さが百倍。左京之進が相果てなば、家國は取上げて、沒收いたす分の事だ。返す〳〵も憎くい者ども。

狹右　サヽ、その御立腹は尤もなれども、さほど嚴しきお咎めあらば、數代連綿たる富士の家は、一生埋れ木。慈悲は上、直なるを表とするは、神國の教へ。只この上の御仁惠には、悴富士太郎不所存ゆゑに、勘當はなしたれども、疾より誠心に立歸り罷りあり。彼れを以て跡目相續、仰せ付けられ下さらば、これに越したる願ひなし。某とてもこれまでに、舊恩のある富士の家筋。この身に替へても、偏へに願ひ奉りまする。

叢雲　フム、身に替へ家に替へても、執成す其方が心底、聞き屆け遣はす。然らばこの一品、性根を据ゑて披見いたせ。

ト懷中より、袱紗包みの連判を取出す。狹右衞門、取つて披き

狹右　ヤ、こりやコレ空恐ろしき叛逆の

叢雲　なんと、見たか。それこそ我れ兼ねての大望。將軍を呪咀なす調伏の連判。汝が姓名記しあれば、とくとくこの場で血判いたせ。

樂二　君の手づから下しなば

樂八　この期に及んで、違背はあるまい。

樂九　但し變心いたすが最期。

樂一　左京の家は沒收の上

樂九　淺間どのにも、この座は立たさぬ。

皆々　よもや違背はござるまい。

狹右　ハツ、御諚を否めば不忠の上に、左京が家國沒收と云ひ、思し立ちの御賢慮。善惡ともに御意に從ふ、臣下の習ひ。直さまこの場で。

ト連判へ血判する。叢雲、思ひ入れ。

叢雲　それにて麿も滿足々々。然らば富士に成り代り、調伏呪咀の樂、この場に於て勤めるぢやまで。

狹右　ハツ、御諚には候へども、この儀ばかりは

叢雲　誓言の血判据ゑながら、否むは麿に背く心か。

樂二　但しは奥儀の

皆々　辨まへなきか。

狹右　ア、イヤ、畏れながら廣言には候へども、入唐渡天は致さねども、天地にあらゆる舞樂の奥儀は

叢雲　辨まへ居るとな。

狹右　とくと承知いたしてござる。

叢雲　オヽ、過分。祕密の樂を勤むる報い、世に類なき高麗錦の、これなる裝束、ソレ、照政へ。

近二　ハツ。

狹右　ト蒔繪の文庫を開け、狹右衞門の前へ直す。
狹右　すりや、この裝束を某へ。ハヽア、有り難う頂戴仕つてござりまする。御諚に任せ、身體清め、直さま着して
叢雲　後とも云はず、奧儀の傳授。
狹右　畏まつてござります。三室どのには暫しの間、ナ、御承知か。
三室　これとても皆、佞人のさかしら事、忠義は却つて
狹右　アヽ、コレ、何事も手前に任せて
三室　御前よしなに。
叢雲　三室には未だ申し付くる仔細もあれば、その身を蟄して、待つて居やれ。
三室　ハツ。
樂二　我が君には奧殿へ
樂七　御入りあつて、神いさめ
樂九　舞樂の儀式、作法を糺して
近三　各々清淨に修行いたされ
樂十　イザ〳〵、裝束改めて
叢雲　呪咀調伏の祕密の樂。
狹右　然らばこれより

叢雲　とく〳〵用意。
狹右　ハツ。
叢雲　方々參れ。
皆々　ハアヽ。
ト管絃になり、狹右衞門、文庫を抱へて、三室へ思ひ入れあつて、上手へ入る。正面の御簾下ろす。樂人一、二、八、九、十、三室、殘り、思ひ入れあつて
三室　心ならぬ照政どのゝ今の詞。夫左京が何ゆゑあつて、切腹なせしか。行くにも行かれず、君の詞。跡形もなき當座遁がれに云ひなせしか、それにしても氣にかゝる胸騷ぎ。案じらるゝ事ぢやなア。
ト投げ首なして、案じる思ひ入れ。この時、前幕の泥介、一散に走り出て來て、三室を見て、直ぐに舞臺へ來り
泥介　ヤア、奧樣、これにお出で遊ばしましたか。
三室　アイヤ、君の御前とも云ひ、各々樣の前とも憚らず、尾籠千萬。早うお次へ下がり居らぬか。
泥介　エヽ、下がるも上がるもでござりませぬ。口惜しうござりますわい。
ト心の急く思ひ入れ。

樂十　誰れかと思へば左京之進が家來の泥介。

三室　ナニ、口惜しいとは。

泥介　あなた樣のお迎ひに來かゝる道、浮田の森蔭に、親旦那左京之進さま、人手にかゝつて、お果てなされてゞございますわいなう。

三室　ナニ、我が夫の御最期とな。エヽ、して、討つたる相手は何國の

泥介　何者の仕業やら、見やる此方に旦那の乘り物。あたりは血潮の唐紅。戶を引き開ければ情ない、多勢と見えて數ケ所の手疵。聲を限りに呼び活けたれど、はや絆は切れ果てゝ、手がゝりとても泣くばかり。一刻も早くあなた樣に、お知らせ申さうと心は逸れど、遺骸を捨てゝは置かれず、やう〳〵に彼處の稻叢に引取つて、御死骸を押し圍ひ、空を走つて參りました。奥樣、こりやマア、なんと致しませうぞいなう。

樂一　ナニ、すりや、いよ〳〵左京之進は、浮田の森でやなア。

樂九　おツくたばるも自業自得。イヤサ、人は老少不定ぢや。

三室　斯うした事もあらう端か、悴太郞が勘當を、淺間どのが度々の詫び言。聞入れ給はぬ日頃の氣質。疾にも歸參なしたなら、とも〴〵に敵の手がゝり尋ねうに、どこにどうして居やるやら、よく〳〵薄い親子の緣。情ない事になつたわいなう。

泥介　搗てゝ加へて早枝さまは、東路へお下りなされ、殘るは奥樣たゞお一人。さぞ心細うございませうと、思ひ廻せば腸が、でんぐり返つて、淚さへ出ませぬわいなう。

樂十　オヽ、尤も至極〳〵。さりながら、生きてゐたところが、王子へ早枝を上げぬお咎め。

樂二　左樣〳〵。主を主と思はぬから、斯やうな珍事が出來るのぢや。

樂八　それと云ふのも、日頃の片意地、こりやてつきり人に疎まれ、遺趣切りと云ふ樣な事であらう。

樂一　ナニサマ、そこらもござらうかえ。主が主なら家來まで、場所をも構はず彼れが愁傷、無禮を知らぬ奴ばらは、かゝる憂き日は當り前。なんと、左樣ぢやござらぬかえ。

ト泥介三室へ掛けて云ふ。

三室　これは〳〵、皆樣の前をも憚らず、粗相千萬。ちやつとお詫びをしやいなう。

泥介　何分ハヤ顚倒いたせしゆゑ、失禮の段、眞平御高免下さりませうならば、有り難う存じまする。

樂十　ハヽ……、流石は下郎の正體。人に非を打たれてから心附くとは、うつそりではござらぬか。

樂九　イヤハヤ、言語道斷な匹夫下郎。また左京どのも高祿を貪りながら、相手の一人も仕留めずして、やみ〳〵死ぬるとは腑甲斐ない。併し、存命でゐられたところが

樂二　押籠め蟄居とあるからは、切り殺されて死んだ方が増しであらう。

樂八　何は兎もあれ王子の御前へ、富士の最期を

樂一　披露いたさう。いづれもござれ。

樂十　左樣いたさう。併し、各々、御覽じたか。左京之進がくたばる上は、三室を始め下司下郎まで、扶持放されの宿なし同然。なんと、慘めな樣ではござらぬか。

皆々　左樣でござる。ハヽヽヽ。サア、御同道いたさう。

ト管絃になり、樂人、上手の襖の内へ入る。

泥介　フム、伶人方の詞の端々。親旦那を殺したも、慥かに彼れらが一味の者。奥へ踏ん込み、一々引ッ捕へて詮議なし、敵の手がゝり。

三室　ア、コレ、滅多な事を。

泥介　お留めなさるな。命は捨て物。これより直ぐに。

ト行かうとする。

三室　これはしたり、爰を何處ぢやと心得居る。神前と云ひ、王子の御入り、粗相があらば爲にならぬ。殊に最前、淺間どのゝ詞もあれば、暫らく樣子を待つた上。

泥介　御尤もではござりまするが、少しなりとも手がゝりを。

トまた行かうとするを

三室　ハテ、其方が過ちある時は、妾までが難儀になるぞや。

泥介　それぢやと云うて。

三室　女子の主ゆゑ、詞を背くか。

泥介　全く以て。

三室　扣へて居やるか。

泥介　サ、それは。

三室　詞を背くか。

兩人　サア。

三室　サア。

兩人　サア〳〵〳〵。

三室　コレ、急く場所ではない程に、詞に任せて扣へて居

よ。

ト引据ゑる。

泥介　エヽ、奥様、口惜しうござりまする。

ト振り拂つて行かうとする。この時、御簾、上がる。内に狹右衞門、裝束、好みの拵らへ

狹右　イヤ、待て、泥介、早まるまい。

三室　アヽ、さう仰しやるは照政どの。

泥介　何ゆゑお留めなされまする。

ト管絃になり、前へ下り、こなしあつて

狹右　三室どのには先つ頃、對面は致せども、愁傷を思ひやり、富士どのゝ最期、今際の際の遺言を、具さに受け繼ぐ淺間狹右衞門。口元までは出たれども、涙が胸にこみ上げて、云ふ事さへも後や先。殊には惡逆無道の王子、慥かに敵もそれぞとは、推察なせど無證據ゆゑ迂濶に、口外いたすまじと、漂ふ心取り直し、王子に取り入り舊恩の、常雪どのゝ仇敵、實證見屆け其許や、御子息太郎どのに云ひ合せ、助太刀なして、日ならず本望達しさせ、富士どのゝ修羅の妄執、晴らさせ申さん。先づそれまでは、必らず疎忽おしやるな。

三室　すりや、其許樣には我が夫の、最期の場所へお出で遊ばしましたるか。

狹右　如何にも。佞人どもの素振り、心元なしと存ぜしゆゑ、歸りまうでの跡追つて、浮田の森へさしかゝれば、折から月も雲隠れ、打ち合ふ太刀音、南無三方死なしたりと、無二無三に拔き合はせ、窺ひ見れども面體包む怪しの曲者。殊には多勢、追ひつ、まくりつ根限り、手練の富士どの、某も、一期の大事と切り立つれど、叶はじとや思ひけん、吹き消すやうに逃げ失せし、跡に漏る月、見合はす顏。チエヽ、今一足早くんば、斯く手疵は負はせまじきと、後悔なせば、イヤ、ヤ、悔んで詮なき事、その仔細は、昨夜御臺所の輿に乘り替り、神樂ケ岡にさしかゝる、折から響く鐵砲に、肋をかけて撃ち拔かれ、主人の命に代りしかど、口傳を授くるそれまでは、いつかな死ぬと氣を張り詰め、今其許へ讓る間、何卒忰が本心にならば口傳を讓り、二つには敵の實否を糺し、助太刀なして討たせくれよと、くれ／＼の遺言。案じ給ふな、流浪の某、再勤なせし御恩返し、命にかけて承知いたすと、云ふ間も待たず直ぐに臨終。遺骸もそこ／＼に、取片附けんと存ぜしかど、心當りは王子の所存、心底探り手がゝりもと、直ぐに道より取つて返し、逆意に

一味と見せかけて、直ちに探る我が存念。三室どのには泥介連れて、彼處へ行き、夫の遺骸取片附け、事穏便に何かの手つがひ。アヽ、思ひも依らぬ今宵の仕儀、御心勞お察し申す。

三室　何から何まで、御深切なるお心添へ。

泥介　この上ともに力となつて、

狭右　太郎どのゝ在所を尋ね

三室　日ならず本望。

泥介　その時思ひ

狭右　アヽ、ウム、穏密々々。

トこの時、奥にて

皆々　還御。

ト下がり葉になり、御簾を巻き揚げる。奥より、叢雲先に、近侍一、二、三、四、少し後より樂人一、二、八、九、十、半素袍の仕丁四人、褄折り傘、沓の臺を持ち出て、花道へさしかゝり

叢雲　淺間狭右衞門が再三の、願ひに詮なく、不覺者の左京之進、從類の絶やし、重き咎めもかづくべきところ、故無く照政へ預けくれる。さはさりながらこの年月、師範と頼みし富士が最期、検分なして念誦一遍、手向けてくれん。

狭右　その御心情は冥加なれど、還御の穢れ。

叢雲　イヤ、師弟のよしみ。主從三世の別れなれば。

泥介　すりや、死骸を見屆け、この上にも

三室　アヽ、コリヤ。御愍の御意、有り難う存じまする。

狭右　某も路次の警護仕りたく候へども、御大切なる樂器を納め、跡より参上仕つて、御機嫌伺ひ奉らん。

叢雲　アヽ、愛い奴、淺間……信濃なる淺間の嶽も燃ゆると云へば、富士の煙りの甲斐やなからん、と古歌に符合の汝が性根。天晴れ忠臣。

狭右　御機嫌よろしう。

叢雲　待つて居るぞよ。

狭右　ハヽツ、先づ

皆々　お越しあられませう。

ト下がり葉になり、叢雲、先に、半素袍、傘を差しかけ、この人數、殘らず向うへ、跡より三室、泣き居るを、泥介、介抱して、立ち上がり、狭右衞門と顔見合せ、狭右衞門、よろしく愁ひのこなし。三重になり、兩人、涙を拂ひ、足早に向うへ入る。狭右衞門、跡見送り、ウム、と思ひ入れ。合ひ方になり

狹右　誠や、世の盛衰は計れども、我が一生は計り難し。例へば月日に蝕の煩ひ。ましてや人は不足の身の上。左京之進は五十年に餘り、非業の最期も、これ正に天なり命なり。ア、、恐るべし〳〵。

ト思ひ入れあつて、二重へ上がる。本釣り鐘になり、後の襖、引拔く。向ふ金襖、漏斗の遠見。狹右衞門、向うを見て、キッと見得。誂らへの樂になり

あの鐘は、早亥の刻。諸行無常を告げ渡る、左京之進が寂滅爲樂。胸の煙りも晴れ渡る。元來富士と淺間の家は關白家の樂人、河内和泉を分けて賜はる。然るに父將監が聊かの誤やりあつて浪人の後、左京之進は佞辯にて、關白へ取入り、我が領地たる河内まで、加增なしての我まゝ增長。されども次第に老耄れて、子孫の冥利が怖くなり、口ふさげに我れを取持ち、師範の席に連なれど、昔に變る宛行ひ扶持、おのれ常雪、折あらばと、時節を窺ふその時に幸ひ佞人どもの狼藉を避けん爲、御臺の輿に乘り替り、夜明けを待たで社參と聞き、今日ぞ恨みを散ずる時節と、待ち設けたる神樂ケ岡。乘り物目掛けて打ち込む鐵砲。してやつたりと思ふに違ふ、左京が息災、合點ゆかずと思ひしかど、猶も實意に見せかけて、申し合せの神樂の批判。一埒濟んで歸宅の左京、跡をばつけて見屆くる、折から出合ふ狼藉者、追ひ退けて介抱なせば、我れを本心誠直と、見拔いて明かすその身の深手、始めて聞いてこの身の本懷。猶殊勝にもしてなせば、味摩之の一卷、口授口傳、又その上に達多丸と名くる劍まで、忰に讓りくれとの遺言。後の憂ひを避けん爲、妻の三室に最期の樣子、告げ知らせんと來たりしところ、折よく王子が叛逆に、組みせし體にもてなせしは一味の規模に貰ひし裝束。これを證據に武將たる義廣公へ調伏の、讒言なして逆意を斥ぞけ、それを功に立身なし、執權職の我が望み。さうとも知らず、眞顏で云へば、三室めも地獄で佛に、大粒な泪をこぼして、現在の敵の我れを頼みしうつそり。猶まだうつけは叢雲どのゝ男は立派でありながら、後先見ずの無駄謀叛。今に押館め、吠え面を、知らで威張るを最前から、堪えるおかしさ、今の世に、あんまり智惠がなさ過ぎる。思へば、フフ不便な、ヒヒ、、、、、、ヤハ、、、、、フ、ハ、、ハハ、、ハ、、、奴等ぢや。ハ、、、、、。

ト大きく笑ひ、口を押へ、思ひ入れありて、二重に撞と座るを、木の頭。

八、、、、、八、、、、。

トよろしく笑ふを、キザミにて　ひやうし幕

四幕目

花川戸船宿の場
向島土手の場

役名──船宿、筑波屋茂兵衛。同母、お角。同女房、お粲 實ハ富士娘、早枝。船頭、三吉。下郎、土子泥介。名和無理助。富士太郎知之。

本舞臺、三間の間、舞臺上の方、一間、障子屋體、向う暖簾口、押入れ、戸棚、茶壁に贈り物のびら、この屋體、二間、二階家、よき所、箱梯子、いつもの所、門口、これに船宿と書きし懸け行燈。下の方、露地口に、物置、舞臺よき所に、一間ほどの誂らへの臺、これに水神宮と云ふ掛け軸を掛け、榊、三方に神酒德利、供へ、赤飯なぞ飾りあり、すべて花川戸の船宿、筑波屋水神祭の體。爰に酒肴を取散らし、若い衆一、二、三、四、いづれも派手な形にて、仁和加の稽古をして居る見得。屋體囃子、とてつる拳の合ひ方にて、幕明く。

若一　カウ〳〵、今に晝だと云ふのに、拳の稽古もいゝ加減にしようぢやねえか。

若二　それだと云つて見つともねえ。なんぼ仁和加だと云つて、子供もするとてつる拳を、吉の野郎はちつとも覺えねえものを。

若三　ナニ、おれよりやア餘ツぽど、てめえの方が出來ねえ癖に。

若四　なんの造作もねえ事を、不細工な奴だ。

若一　そんなら親分の歸らねえうち、もうちつと立てつけてやらかしやせう。

若四　さうよ。一汗かいたら拔けるだらう。

若二　べら坊め、風を引きはしめえ。

若三　どうもおらア、婆樣に和藤内がと云ふ所が出來ねえ。

若一　カウ、婆樣と云やア、此方の内の婆樣も、むづかしい人だなア。

若二　さうよ。親分は船宿仲間ぢやア、筑波屋の茂兵衛と云つて、五分でも人にやア負けねえが、あの婆さんにば

かりは叶はねえなア。
若三　その癖、實の親ぢやアねえさうだが、商賣に似合はねえ孝行な事よ。
若四　それに又、姉御が優しいから婆さんは仕合はせだ。
若一　サア、此方も早く、婆さんをやらつしな。
若二　それ〳〵、もう一遍稽古をしてやらう。婆様に和藤内が叱られた。
若三　それぢやアいけねえ。ソレ、婆様に和藤内が
ト若い衆三、不器用に踊る。
若一　エヽ、間拔けな
三人　婆さんだな。
ト此の時、向うよりお角、剝げたる好みの鬘、婆アの形にて、浴衣を抱へ、湯歸りのこなしにて出て來り
かく　此奴等ア、間拔けとはおれが事か。
ト出しぬけに、大きな聲する。
四人　ヤア。
ト悄りして
若一　イエ、ナニ、こりやアとてつるヽヽ拳の
かく　イケ喧ましい奴等だ。店先で見つともねえ。外へでも行つてしやアがれ。

若一　そりやこそ、婆様に叱られた。
若二　おらはもう〳〵。
若三　とてつるてん。
若四　狐でサア來なせえ。
四人　ちよ〳〵んがちよん。
ト囃しながら、四人、橋がゝりへ入る。
かく　エヽ、いゝ加減にしやアがれ。ほんに〳〵、默つてゐりやアいゝかと思つて、茂兵衛めが心好しゆゑ、親分ごかしに喰ひ潰しばつかり。それに又女房は引摺りだし、かゝつた奴は一人もない。お繁や〳〵。
ト奥にて
しげ　アイ〳〵、今參りますわいな。
ト合ひ方かすめて、屋體囃子になり、奥よりお繁、世話女房、好みの拵らへにて、出て來り
母さん、今お歸りなさんしたかえ。
かく　エヽ、今がぢやアねえ。おれが湯へ行つて來るうち、何をして居るのだ。もう晝だのに、うか〳〵せずと早く飯の支度をして、そこらをば掃除をして、今日は日和がいゝから、洗濯物を片附けて、そしてわしが袷を縫つて、間があつたら祭ゆゑ、この頃流行の根上がりに、

わしが頭を結つてくれ。

ト懐より、黒油、白粉、絞りの裂れを出し

コレ〳〵、馬道の松新で、黒油に隠し化粧、絞りの切れも買つて來た。キリ〳〵と用を片附け、早く結つてくれ。待つてゐるぞ。ア、、意氣地のない嫁でホッとするわえ。ドレ、奥へ行つて、白髪でも抜かうか。

トお角、一人でしやべり、矢張り、右の鳴り物にて、奥へ入る。

しげ　ほんにマア、姑は喧ましい物とは云ひながら、あの我まゝにも困つたものぢやわいな。ドレ、叱られぬうち、片附けて置きませう。

ト矢張り右の鳴り物にて、向うより富士太郎、着流し、大小、好みの拵らへにて、出て來り

太郎　今日は當所の水神祭に、觀世音の開帳ゆゑ、殊の外賑はしい事ぢや。

ト右の鳴り物にて、本舞臺へ來り、門口より

茂兵衛、内にか。

しげ　ハイ〳〵、どなたでござんす。

ト門口の戸を開ける。

太郎　お繁、わしぢやわいの。

ト内へ入る。

しげ　これは兄さん、ようお出でなされましたな。

太郎　この間は、大きに無沙汰を致しましたわいの。

しげ　ほんに、さつぱりお見えなされませぬゆゑ、大方廓へ御精が出るであらうと、こちの人もお噂申して居りましたわいな。

太郎　イヤ〳〵、その廓は疾から迫かれ、とんと足踏みもしはせぬ。

しげ　すりや、キッとお出でなされませぬか。

太郎　ハテ、きつい念の入れやうぢやな。

しげ　サア、お出でなされずばよいけれど、昨夜もお歸りがないと云うて、泥介どのが先刻にから、奥に來てゐやしやんすぞえ。

太郎　エ、すりや、泥介が、アノ、ほんまに。

しげ　それが嘘なら、ちよつと御覧じませ。

太郎　イヤ〳〵、見るには及ばぬが、昨夜わしが戻らぬは、ちつと外に……と、サ、云うた所が彼奴の堅蔵、また意見をば云ひ居らう。ドレ、逢はぬうちに歸りませう。

ト立ち上がり

しげ　併し、茂兵衛に逢はうと思うて、折角來たに。
しげ　いま主は湯に行かれましたれば、少しの間あの二階へ。
太郎　オヽ、そんなら茂兵衛の戻るまで。
しげ　お横になつてお待ちなされませ。
太郎　さうしませうわいの。
　ト行きかけ
　コレ、必ず泥介には沙汰無しに。
しげ　そりや合點でござりますわいな。
　ト太郎、二階へ上がる。お繁、跡見送り
　ほんに、マア、思案の外とは云ひながら、大事のお身をソワ〳〵と、どうなさんした事ぢやぞいなア。
　ト思ひ入れ。矢張り右の合ひ方にて、奥より、泥介、着流し、一本差し、奴の形にて、出て來り
泥介　これはお繁さま、大きに御馳走になりました。
しげ　オヽ、泥介どのか。つい忙しいので、ろく〳〵に構ひもしませぬわいの。
泥介　イエ〳〵、却つて氣が詰まらいで、よろしうござりまする。左樣なら私しは、もうお暇いたしまする。
しげ　まだマア、やつと八ツかそこら、ゆるりとしてもよいぢやないか。
泥介　イエ〳〵、ひよつと若旦那が、お歸りなされましたも知れませぬ。さうして茂兵衛さまは、どちらへぞお出でなされましたか。
しげ　アイ、今湯へ行かれましたわいな。
泥介　左樣でござりまするか。それではもうお目にかゝりませず、お暇いたしまする。イヤ、最前お前樣より、お預かり申したこの守、お返し申しまする。
　ト守り袋を出す。お繁、受取り
しげ　アイ、お世話でござんした。
泥介　イヤ、それに就きまして、合點のゆかぬは、お内にお出でなされた時分より、片時お離しなされぬ守、なんでお預けなされました。
しげ　サア、それは、水神樣をお飾り申すに勿體ないゆゑ。
泥介　へイ、なんで守が勿體なうござります。結句清淨でよさゝうなものでござりますに。
しげ　イエ、その中にちつと。
泥介　ちつとゝは、なんでござりまする。
しげ　サア、起請が中にあるゆゑに。

泥介　エ、起請とは、お繁さま、そりやなんの起請でござりまする。

しげ　主とわたしと二世かけて、取交した起請ぢやわいの。

崎介　アノ、茂兵衞さまと。

しげ　アイナア。

泥介　成る程なア。町家のお住居なされても、おぼこ育ちのお孃樣。夫婦の仲に起請とは。

ト合ひ方消す。

しげ　サア、どうやらおかしいやうなれど、ひよつと主に去られたら、兩親のないわたしの身の上。兄富士太郎さまとても、今は日蔭の御流浪ゆゑ、お世話になる悲しさに。

し介　アノ、それで起請を。アノ、お前樣は、御孝行な事ぢやなア。

ト合ひ方になり

改め申すに及ばねど、もとお前樣は御養女にて、親旦那富士左京之進さまが、末は御子息富士太郎さまと、女夫にせうと思し召したも、若旦那には以ての外、妹の兄のと云うた者が、どうマア女夫にならるゝものと、御得心なく、お身持ち放埒、それゆゑ物堅き親旦那、富士の家は妹に嗣がすと、お心強くも御勘當。搗て加へてお前樣を、妾に上げよと、叢雲の王子樣の横戀慕。それを遁れんばつかりに、以前勤めた縁により、茂兵衞さまへ委細を話し、無理に勸めてお嫁入り。御縁があつて仲も好う、やれ嬉しやと喜びの、その甲斐もなく親旦那は、浮田の森で何者か、敵も知れず人手にかゝり、舞樂の一卷、達多丸、二品ともに奪ひ取られ、遂にお家は散り〳〵ばら〳〵。それを氣病みに同じ月、母御樣にも遂に御死去。斯くまでお家の左り前。これと云ふも敵ゆゑと、思へど知れぬ雲を當。空しく月日を送りまするが、下郎の身でさへ口惜しうて、夜の目もろくに合ひませぬに、情ないは若旦那、晝夜分たぬ廓通ひ、梅ヶ枝と云ふ傾城に、魂ひ奪はれ親旦那の、敵討ちは上の空。餘りと云へば

ト泥介、口惜しき思ひ入れ。お繁も、よろしくこなし。泥介、氣を替へて

ハヽヽヽヽヽ、私しとした事が、申さずともよい事を、ついウカ〳〵と要らぬ述懐、これと申すも若旦那を、大事に思ふ心より。必らず氣にさへて下さりますな。

しげ　なんのマア、其方の深切、誰れが惡う思ふぞいの。
泥介　もしも今にも若旦那が、お出でなされた事ならば、どうぞ御意見を仰しやつて下さりませ。
しげ　そりやモウ、こちの人が歸らしやんしたら、其方の事も話して、よう御意見をさせませうわいな。
泥介　どうぞお願ひ申しまする。
しげ　ほんにマア、兄さんも、それ程までに
ト二階へ思ひ入れ。
泥介　エ。
しげ　サア、大方これも、何かの手蔓に
泥介　下郎もさうは思ひますれど。
しげ　何を云うても、思案の外。
泥介　もしも病みつきになりませうかと
しげ　案じられるも
泥介　お主の爲。
しげ　ア、、浮世に苦勞は
泥介　絕えませぬなア。
ト兩人、よろしく思ひ入れあつて
イヤ、ちよつと出まして、思はぬ長居。ドレ、お暇いたしませう。

しげ　そんなら、もう歸らしやんすか。
泥介　また其うち上がりませう。
ト門口へ出て、思ひ入れあつて
合點のゆかぬは若旦那の、雪駄のあるは、もしやこの家に。
ト思はず、門口を明ける。
しげ　まだ行かしやんせぬか。
泥介　ヘイ、只今參りまする。
ト唄になり、泥介、思ひ入れあつて、向うへ入る。お繁、思ひ入れ。
しげ　もう歸りやつたさうな。富士太郎さまのこの程のお身持ち、主人大事と思へばこそ、度々の意見。なんの若旦那ぢやとて、お聞きなさんせうぞいなア。これと云ふも
トちよつと二階へ思ひ入れあつて、氣を替へ
ほんに、困つたものぢやなア。
ト祇園囃子になり、向うより酒屋の丁稚、德利を四五本、提げ、出て來る。後より仲居く鶴おさんおよし出て來り、花道にて
つる　モシ、筑波屋茂兵衞さんの內は、向うでござんすか

え。
丁稚　アイ、向うの内がそれだ。わつちも今、味淋を持つて行くのだ。
さん　どうぞあそこに、雪さんがお出でなさんすりやアよいが。
よし　なんにしろ、聞いて見ようぢやござんせぬか。
ト皆々、平舞臺へ來り
つる　モシ、御免なされませ。こちらに雪さんはお出でなされませんか。
しげ　アイ、若旦那は
ト思ひ入れあつて、門口を開け
こちらにお出でなさんすわいな。
三人　ちよつとお目にかゝりたうござりまする。
丁稚　おかみさん、味淋を持つて參りました。
しげ　奥へやつて下さんせ。
丁稚　アイ〳〵。
ト下へ徳利を置き、一升徳利を、奥へ持つて入る。お繁、思ひ入れあつて
しげ　モシ、若旦那、ちやつとござんせいな。
太郎　オイ〳〵、なんぢや。

ト二階から下りて來る。これにて、合ひ方を消す。
しげ　何やら皆さんが
ト太郎、三人を見て
太郎　オゝ、おつるに、おきん、おさん、なんと思うて
さん　なんとどころぢやござんせぬ。お前さんにお目にかからうとて
よし　今朝から三人でどのやうに、お尋ね申したか知れません。
トわや〳〵云うて、内へ入る。
太郎　アゝコレ、人の内だ。靜かにしてくりやれ。
トお繁へ惡いと云ふ思ひ入れ。お繁、こなしあつて
しげ　アゝモシ、なんの遠慮がござんせう。ドレ、わたしやお茶でも入れようわいな。
つる　イエ〳〵、必らずお構ひなされて下さりますな。
しげ　なんのお構ひ申しませう。其うちゆるりと、何かの話しを。
太郎　ヤ。
しげ　サ、聞かぬが出花。ドレ、拵らへようわいな。
ト唄になり、お繁、奥へ入る。跡、彈きながし。
つる　モシ、雪さん、今のはありやア茂兵衞さんの。

太郎　オヽ、女房ぢやわいの。

三人　ほんに、粋なおかみさんでござんすなア。

　ト太郎、奥を窺ひ

太郎　コレ、早速聞きたいは、梅ヶ枝が、店を引いたと云ふ事だが、どうぞしやつたか。

つる　サア、お前さんが二階を迫かれてから、持病の癪で店を引き

さん　この頃は根岸の寮に、八重咲さんと只二人。

よし　明けても暮れても、お前さんの事ばかり。

仲一　モシ、詳しい事はこのお文に。

　ト文を出す。

太郎　ドレ〳〵、早う見せてくりや。

　ト太郎、奥へ憚り、文を開き、見る。

つる　モシ、雪さん、お前さんは罪なお方でござんすぞえ。昨夜お出でなさんしたさうだのに、なんぼ二階を迫かれたとて、ちよつと格子位はお出でなさんしても、よいではござんせぬか。

さん　それに、あれツきりお見えなさんせぬゆゑ、花魁は云ふに及ばず、新造衆やわたしらまで、疊み算やら辻占やら。

よし　ほんに待ち人をかけ盡し、揚句の果てが花魁の病氣。お鍼護符や加持祈禱、お醫者さんでも鍼醫でも

つる　どうして〳〵、お前さんのお顏を見ぬうちは、なかなか癒らぬ梅ヶ枝さん。マア野暮に云へば戀煩ひ。

よし　ちつとも早うお出でなさんせにや、もしもの事でもあらうかと、それゆゑ今日は連れ立つて

さん　お前さんを引立てに

三人　參りましたわいなア。

　ト三人、口喧ましく云ふ。太郎は文を讀み、思はず見惚れて

太郎　コレ、梅ヶ枝、すりや、それ程までに思うてくれるか。

皆々　エ。

太郎　其方の深切、忘れはせぬ。

つる　オヤ〳〵、どうなさいました。

　ト太郎の背中を叩く。

太郎　エヽ、恟りしたわいの。

さん　モシ、雪さん、花魁の御返事は。

太郎　サア、返事は、恟りしたので

三人　どうなさんしたえ。

太郎　悄りしたわいの。
　トこの時、後へ丁稚、出て
丁稚　その悄りを。
　ト太郎へかゝるを、太郎、振り拂ふ。これにて丁稚、ポンと返る。
三人　エヽ、又悄りしたわいな。
　ト丁稚、起き上がり
丁稚　イヤ、あんまり悄りが流行るから、びつくり返つたのだ。
皆々　ホヽヽヽ。
三人　そんなら雪さん、お近いうちに。
　ト三人、丁稚、門口へ出る。
太郎　オヽ、承知ぢや。
丁稚　ドレ、わつちもびつくりを集めて來よう。
三人　ホヽヽヽ。サア、參りませう。
　ト祇園囃子になり、仲居、丁稚、向うへ入る。太郎は奥へ入る。と揚げ幕にて
無理　料簡ならぬぞ〱。
　ト屋體囃子になり、向うより三吉、船頭の拵らへ、火纒袖を提げ、跡より無理助、白髪鬘、附け髪、そぼろなる浪人の拵らへにて、迫り合ひなら、出て來り
三吉　モシ、わつちが惡けりやアあやまるから、もういゝ加減にしなせえな。
無理　うぬ、慮外をして置いて、サア、内を云へ〱。
三吉　そりやアわつちも宿無しぢやアなし、内を云ふめえもんでもねえが、これッぱかりの端下喧嘩で、親分の名が出されるものかえ。
無理　太え奴だ。云はぬとて云はさずに置くものか。サア、吐かせ〱。
　ト三吉の胸倉を取る。三吉、振り拂ふ。流行り唄、屋體囃子になり、向うより茂兵衛、派手な形、下駄がけ手拭を持ち、湯上りの拵らへにて、出て來り、これを留めて
茂兵　ヤア、こりやア内の三ぢやあねえか。見つともねえ、どうしたのだ。
三吉　親分、打ッちやつて置きなせえ。お前のかゝり合ひになると面倒だ。
茂兵　べら坊め、どんなかゝり合ひにならうとも、内の者が間違ひするを、見ねえ顔で居られるものか。
無理　ムウ、さては其方は、この野郎の親方か。

茂兵　ヘイ、私しどもの船頭でござりまするが、お前様へ對しまして。
無理　オヽ、慮外をした、その譯と云ふは。
茂兵　モシ、爰は往來、人が立ちます。私しは筑波屋茂兵衞と申しまして、卽ち向うが宅でござります。マア、あれへお出でなされませ。
無理　然らば野郞を引摺つて、歩ばつせえ。
三吉　イケ御大層な事を吐かしやアがる。
茂兵　エヽ、喧ましい。默つて來やれ。
ト右の鳴り物にて、本舞臺へ來り、內へ入る。
三吉　モシ、親分、今わつちが、河岸から上がつて來る道で。
茂兵　コレ〳〵、わりやアなんにも吐かすな。ハヽヽヽ、どう云ふ御慮外を申したか存じませぬが、高が取るに足らぬ小野郞の事。どうぞ私しが挨拶で
無理　イヽヤ、料簡罷りならぬ。コレ、武士に突き當つて、その分で濟まうと思ふか。うぬ、二腰は目に入らぬか。
三吉　べら坊め、二本差しが怖くつて、小串の鰻が食はれるものか。

茂兵　コレ、無駄な事を吐かさずと、てめえはな。
ト三吉に囁やく。三吉、呑み込み、奧へ入る。茂兵衞、思ひ入れあつて
ハヽア、御立腹の段は重々御尤もでござりまするが、そこをどうぞ私しに
ト三吉、廣蓋へ肴、德利、猪口を附け、持ち出て來り、茂兵衞の前へ置き、奧へ入る。
サア、何もござりませぬが、お一つお上がりなされませ。
無理　こりやアなんでござるな。
茂兵　今日は水神の祭で、ほんの出來合ひ。お一つ上がつて
無理　イヤ、下さるまい。こりや何かな。したみが呑みたくつて、ぶう〳〵を云ふと思ふのか。
茂兵　イエサ、左樣では
無理　イヽヤ、さうであらう。コレ、仲直りの酒を當に、喧嘩をするのではないぞ。武士は食はずと高揚枝。こんなものが食はれるものかえ。
ト廣蓋を足蹴にせうとするを、茂兵衞、その足を捕へ

茂兵　食はれざア、よしやアがれ。
ト突き放す。うぬと立ちかゝるを、足を掻く。これにて無理助、ボンと返り
無理　アイタ、、、。
ト起き上がり、慄へ出し、氣味惡きこなし。
茂兵　なんの事だ。下から出りやア附け上がり、濟むの濟まねえのと、水切れの井戸ぢやアあるめえし。内の野郎が粗相をしたらどうする。コレ、エ、、身を知つた侍ひは、祭禮遊所喧嘩場へ、面を出すは御法度ゆゑ、云ひたい事も云はずに歸るワ。お里の知れた二本棒、相手にするも大人氣ねえ。日當りのいゝ辻番へ、もういゝ加減に歸りやアがれ。
ト無理助の襟首を捕へ、門口へ抛り出す。無理助、起き上がり、慄へながら、刀に手を掛け、
無理　うぬ、さう吐かしやア
茂兵　どうしたと。
無理　逃げるわい。
ト屋體囃子にて、無理助、橋がゝりへ、逃げて入る。
茂兵　エ、、尻腰のねえ奴だなア。
ト門口を閉める。合ひ方になり、奥より、太郎、曾我物語の本を持ち、出て來り
太郎　茂兵衞、歸りやつたか。
茂兵　これは若旦那、お珍らしうござりますな。
太郎　サア、今日は金龍山の開帳へ參詣がてら、この程の無沙汰の詫びに來ましたわいの。
茂兵　それはようお出でなされました。イヤ、モウ、御無沙汰はお互ひでござります。マア、これへお出でなされませ。
太郎　イヤ〳〵、構うて下さるな。
ト兩人、住ひ、茂兵衞、思ひ入れあつて
茂兵　早速ながら、まだこれぞと云ふ、手がゝりもござりませぬか。
太郎　サア、千々に心を碎けども、今に於て手がゝりも
茂兵　知れませぬか。
太郎　オイナウ。
茂兵　ハテ、殘念な事でござりますなア。
太郎　何を云うてもこれと云ふ、證據なければ、雲を當。
茂兵　それでは旦那の御無念も
ト思ひ入れ。
イヤ、佛神もござりますれば、兎角時節の至るのを、氣

長うお待ちなされませ。

ト この時、以前の文の封筒、落ちてありしを、取上げ見て

太郎　エ。雪さま參る、梅より。

トこなし。茂兵衛、袂へ入れ、太郎の持ち居る本を見て

茂兵　モシ、その本はなんでござります。

太郎　こりや奥にあつた假名本の曾我物語。

茂兵　へ、エ、曾我物語でござりますか。

太郎　其方の歸るを待つうち、一二枚讀みました。

茂兵　左樣でござりましたか。

ト茂兵衛、本を取上げて見て、思ひ入れ。合ひ方になり

モシ、若旦那、こりや御意見ぢやござりませぬが、この曾我物語の祐成は、河津の三郎祐康が子にてありながら好色ゆゑに大磯の、虎が許に通ひしを、父の敵を餘外にして、身持ち惰弱と蔑せしも、遂に敵祐經を討つて、名を萬天に輝かせり。サア、なんでも人は爰でござります。若い時に道樂をしても、締まる時に締まりさへすりやア、親の跡は嗣げまいと、後指を差されたる、人の顔を見返しまする。あなたもどうか祐成と同じやうなお身の上、それゆゑ愚痴な女房なぞは、廓通ひなさるゝを、どうの斯うのと申しますれど、ナニ、倶に天を戴かぬ親御樣の仇敵、どうしてお忘れなされうぞい。おれでさへ忘れぬもの、眞實親身の若旦那、てつきりこれは敵の手がゝり、又は寶の行くへをば、詮議の爲は知れた事、要らぬ事をと女房を、叱りまするもこれまでに、いかい御苦勞なさるれば、樂しみなくてはならぬが浮世。それゆゑ今まで御意見は、申しませねど人の口、惡い噂のないやうに

ト封筒を太郎の前へ抛り

後指を差しました、人の顔を見返します、御思案なされて下さりませ。

ト思ひ入れ。太郎、こなしあつて

太郎　何から何までわしが身を、思うてくりやる其方の深切、詞で禮は云はれぬわいの。

ト ぢつと思ひ入れ。

茂兵　アヽ、勿體ない事仰しやりませ。以前は家來のこの茂兵衛、なんのお禮に及びませう。

初演の

繪　番　附

太郎　イヤ〳〵、わしが爲には親同然。
茂兵　これはしたり、其やうに仰しやつては、却つて迷惑いたします。
ト氣を替へ
イヤ、折角お出でなされたに、面白くもない事ばかり。マア、何はなくとも祭ゆゑ、奥で一杯やりませう。
ト茂兵衞、立ち上がり
若旦那、待つて居りますぜ。
ト唄になり、茂兵衞、思ひ入れあつて、奥へ入る。太郎、跡見送り
太郎　コレ、茂兵衞、酸いも甘いも噛み分けた、今の其方の意見を聞き、面目ないが梅ヶ枝に、深く馴染みを重ねしは、長の流浪も見捨てずに、貢いでくれる貞節な、心にほだされ二世の約束。定めて色に溺るゝと、思うてゐやうがこれも惡緣。どうぞ免してくりやいなう。
ト思ひ入れあつて、合ひ方になり
この後廓へ通はぬが、夫婦の者へこの身の云ひ譯。せめて一筆梅ヶ枝へ、逢はれぬ譯を、さうぢや〳〵。
ト獨吟模樣の稽古の唄になり、太郎、有り合ふ硯箱を卸し、文を書きかける。よき程に、二階の伊豫簾、卷き揚げる。爰にお角、鏡臺を直し、肌を脱ぎ、白粉を附けて居る。よろしくあつて、太郎を見て、嫌らしきこなし、紙を丸め、太郎に打ちつける。太郎、心附かぬゆゑ、お角、氣を揉み、また紙を抛りても、太郎、知らぬゆゑ、段々、梯子へ下りて來たり、よき所より舞臺へ落ちる。太郎、惘りして、文を隱す。
かく　アイタヽヽヽ。
太郎　コレ〳〵、お角どの、どうしたのぢや。
かく　サア、これは……死んだ〳〵。
トわざとグニヤ〳〵となる。
太郎　コレ、息はある。氣を慥かに持たつしやれ。
ト起き上がり
かく　息があつても、どうしても、死んだ〳〵。
トぐにや〳〵となる。
太郎　これはしたり、口をきゝながら。
ト太郎、お角を起す。
かく　なんでもかんでも、死んだ〳〵。
トぐにや〳〵となり
生きかへるやうに、水を下され〳〵。
太郎　オヽ、水が呑みたいか。

ト　あたりを見て、茶碗へ茶を注ぎ
サア、水はないから、茶を吞むがよい。
かく　水でも茶でもよいが、どうぞ口移しに吞まして下さ
れ。
ト縋る。
太郎　サア、それは。
かく　早う吞まして下されぬと、ムウ、死んだ〳〵。
ト又、ぐにや〳〵となる。
太郎　これは困つた事ぢやわい。
ト太郎、困る思ひ入れ。奥より、三吉、出て、お角を
見て
三吉　モシ〳〵、婆さんはどうしました。
太郎　いま二階から落ちて、目を廻したのぢや。
三吉　そいつは大變だ、が、併し、死んだ方が、喧ましく
なくつていゝ。
太郎　これはしたり、其やうな事を云はずと、口移しに水
でも吞ませるがいゝ。
三吉　イヤ、途方もない事を仰しやる。どうしてあの口
へ。
太郎　ハテ、女子の口ぢや。吞ましてやりやれ。

三吉　なんぼわつちが物喰ひがよくつても、この婆アの口
は吸へねえ。皺だらけの脣に、鼠色の總入れ齒、その臭
と云ふものは、溝泥の臭ひがする。併し、蜂に刺された
まじないには妙だ。
ト此うち、お角、起き上がり、後に聞いてゐて
かく　うぬ、よく店卸しをしやアがつたな。
ト三吉をくらはす。
三吉　ヤア、生きかへつたか。こいつは大變々々。
ト表へ逃げ出し、橋がゝりへ入る。
かく　覺えてゐやアがれ。
ト太郎、ツツと奥へ行かうとするを、捕へ
モシ、富士太郎さん、マア、下にござんせいなア。
ト引据ゑ、合ひ方になり
今さら云ふも恥かしながら、鼻の高いはどこやらが、大
きいものと好もしく、間がな隙がな口說くのは、お前も
獨り身、わたしも後家。丁度幸ひ似合ひの緣。ちつと年
は上なれど、まんざら釣合ひの惡い事はない。サア、据
ゑ膳食はぬは男の恥。人の見ぬ間にあの二階で、ツイち
よこ〳〵と二つ三つ、それがならずば一つでも、半分で
も早く〳〵。

ト お角、抱きつくを、振り放し
太郎　エ、、身の毛がよだつ。免してくれ〳〵。
かく　イエ〳〵、せめて口でも。
太郎　これは情ない。
ト 突き放す。
かく　こりやもう、いつを押ッかぶせて。
ト 屋體囃子になり、お角、太郎を追ひ廻す。この時、以前の無理助、コソ〳〵窺ひながら、出て來り、門口を開け、内へ入る。お角、太郎と心得、押しこかし、乘りかゝる。太郎は暖簾口へ入る。無理助、恂りして
無理　ア、、何をする〳〵。
かく　何をするものか。
ト 無理助の鼻を喰ひつく
無理　アイタ、、、、鼻を喰ひついて、どうする〳〵。
ト これにて恂りして
かく　ヤア、こりやア違つた〳〵。
ト 飛び退く。無理助、鼻の先へ糊紅を附け、鼻血の出たる心。
無理　ア、、痛い〳〵。こりやア鼻血だ〳〵。
ト 兩人、顏見合はせ、恂りして
かく　ヤ、こなたは。
無理　さう云ふお主は。
かく　淺間さまの若黨、無理助どのぢやアないか。
無理　オ、、お乳母のお角か。
かく　こりやマア、思ひがけない。
無理　どうして爰に。マア〳〵、樣子は後で、血止めをくれ〳〵。
かく　ほんに、大層な鼻血だ。ドレ〳〵ぼんの窪の毛を拔いてやらう。
無理　コレ〳〵、毛位ぢやア止まらねえ。なんぞ藥をくれ藥をくれ。
かく　アイ〳〵。
ト 帶の間より巾着を出し
この中に藥がある筈だ。
ト 藥の包みを出しながら
これはなんだ。和中散に反魂丹、娘がくれた握り飯。
無理　握り飯も鼻血にきくか。
かく　馬鹿な事を云ひねえな。
ト 藥包みを出し
オ、、あつた〳〵。どうかこれが鼻血の藥らしい。

ト粉藥を無理助の鼻の孔へ入れる。

無理　こりやアなんだか、おかしい匂ひだ。

かく　ナニ、おかしい匂ひだと。

ト藥を嗅ぎ

ハックショ、エ、、鼻の孔へ入つた。

無理　お角、こりやアなんと云ふ藥だ。ハックショ。

トお角、包み紙を見て

かく　ヤア、こりやア間違つた／＼。ハックショ、奥山傳司が、齒磨のおまけにくれた、ハックショ、嚏藥だ。

無理　道理で嚔が、ハックショ、飛んだ事をした。

かく　エ、、わたしまで相伴に、ハックショ。

無理　そりやアさうと、ハックショ、爰はお主の内か。

かく　サア、爰にゐる因縁を、マア、聞いて下さんせ。ハックショ。

ト合ひ方。

知つての通り、元わたしは、ハックショ、大坂天王寺の樂人、淺間狹右衞門さまのお乳母にて、十年あとにお前を始め、ハックショ、誰れにも彼れにも振舞つて、父無し子を孕んだばつかり、ハックショ、駈落ちをしてこの江戸まで、流れて來たが食ふに困り、ハックショ、せう事なしにこの内へ、ハックショ、一歩二百の月雇ひ、茂兵衞の親仁におつかぶせ、づる／＼べつたり女房代り、ハックショ、間もなく親仁を腎虚で殺し、それから此方へ後家暮らしは、ハックショ、お前の事も思つてゐたが

無理　ハックショ。

かく　さうして、見りやアそぼろな形だが、ハックショ、淺間さまをしくじつたのか。

無理　ハックショ。サア、おれも知つての酒好きゆゑ、お供先で喧嘩を仕出かし、ハックショ、それから屋敷を追ひ出され、寄合ひ辻番徒若黨、ハッツショ、雜業苦業も永々の、浪人とまでは成り下がつたが、ハックショ、また成り上がる時が來て、今度旦那へ歸參の詫びに、ハックショ、首尾よくやりや褒美になる、仕事があるゆゑこんな態。ハックショ、これも人目にかゝらぬ爲だ。

かく　ムウ、歸參が叶ふその上に、褒美になるとは、ハックショ。

無理　なんと、半口乘る氣はないか。ハックショ。

かく　ハックショ、そりやア金にさへなる事なら。

無理　なるのならねえのと、ハックショ、百兩だ。

かく　エ、どう云ふで譯で。
　ト無理助、あたりへ思ひ入れあつて
無理　コレ、ハックショ。
　ト囁く。お角、思ひ入れあつて
かく　オヽ、それなれば、ハックショ。ちよつとござれ。
　ト兩人、門口へ出て、思ひ入れあつて、花道へ行く。
すりや、富士太郎めを。
無理　殺すと云ふはお旦那が、左京之進を討つたゆゑ、ハックショ、もしも敵と知らるゝ時は、枕を高く寐られぬゆゑ、それで悴の富士太郎、ハックショ、ばらせば旦那の褒美は百兩。なんと、巧い話しだらうが。ハックショ。
かく　ムウ、その富士太郎には首ッたけ、惚れてはゐたが百兩と、ハックショ、聞いては、こりやア、色氣を慾氣にせずばなるまいかい。ハックショ。
無理　オヽ、ましてお主が育て上げた、旦那の爲に邪魔な奴、ハックショ、少しも早く、殺してくりやれ。
かく　併し、彼奴も侍ひだから、迂濶に女の手際ぢやア。
無理　コレ、それなれば氣遣ひすな、おれも彼奴と立合つては敵ひさうもない事ゆゑ。ハックショ、玄南老に調合させ、おッ殺すに手間隙いらぬ、ハックショ、南蠻秘法のこの毒藥。
　ト紙入れより、誂らへの藥包みを出す。
　これを密かに富士太郎めに
　ト、お角、思ひ入れあつて
かく　オヽ、服ませる仕樣は祭禮の、お神酒の中へ仕込んで置いて。ナ。
　ト囁く。
無理　天晴れ妙計。それぢやア茂兵衛を釣り出して
かく　首尾よくゆけば
無理　褒美は百兩。ハックショ。
かく　イヤ、話せるわえ。さうしてお前の居所は。
無理　內と云つても遠いゆゑ、小梅の土手に
かく　出張つて居なせえ。
無理　そんなら、お角。
かく　無理助どの。
無理　必らず首尾よう。
かく　ハックショ、合點だわな。
無理　ドレ、吉左右を、待たうかい。
　ト屋體囃子にて、無理助、向うへ入る。お角は內へ入

り、神酒德利へ毒藥を仕込み、思ひ入れあつて
かく　ハックショ、人我れに辛ければ、我れ又人に辛しと
やら。戀の叶はぬ意趣晴らし、彼奴を殺して褒美の百
兩。ハックショ。無理助野郎に二歩も遣り、後を一人
で、ハックショ。
　トこの時、奥にて
しげ　マア、ようござんすわいなア。
かく　彼奴も今に、ハックショ、風でも引かにやアいゝ
が。
　ト屋體囃子にて、お角、奥へ入る。ト引違へて、太郎
先に、お繁、酒に醉うたるこなしにて、行燈を提げ、
出て來り
太郎　お繁、大分よい色ぢやの。
しげ　サア、ちよつと心に濟まぬ事があつて、それで酒を
過ごしたわいな。
太郎　濟まぬ事とは、なんぢや。
しげ　イエ〱、何も案じる事ぢやござんせぬ。
太郎　そんならよいけれど、ついに呑まぬ酒を呑み、どう
やら樣子の
しげ　ハテ、これも浮世の樂しみぢやわいなア。

　ト酒に醉ひしこなし
太郎　ムウ。
　ト合點のゆかぬ思ひ入れ。
イヤ、この長の日を一日遊んだ。ドレ、わしも歸りませ
うか。
　ト思ひ入れあつて、行かうとするを、お繁、裾を捕ら
へ
しげ　アヽ、モシ、ちよつとお待ちなさんせいなア。
太郎　なんぞ用でもあるか。
しげ　ハイ、ちよつとあなたに。
太郎　ムウ。
　ト思ひ入れ。
しげ　マア、下にござんせいなア。
　トこれにて、よき所へ住ひ
太郎　お繁、下に居たが、用はなんぢや。
しげ　用と云ふのは
　ト思ひ入れあつて
叶へて下さんせ。
太郎　そりや何を。
しげ　わたしが願ひを。

太郎　願ひとは。
しげ　モシ、女夫になつて下さんせいなア。
太郎　ヤア。
　ト恟りして
コレ、お繁、こなたは氣でも狂ひはせぬか。
しげ　ハイ、氣が狂ひました。
太郎　なんと。
しげ　アイ、氣も狂はいで、なんとしませう。
　ト誂らへの合ひ方になり
今さら云ふも愚痴ながら、お前とわたしは云ひ號け、幼ない時から一つに居て、早う女夫になりたいと、花や紅葉と待ち明かし、月日數へて居たものを、ようもつれなう嫌はしやんして、梅ケ枝どのと睦まじう、二世と誓ひの女夫仲。そりやモウ、都の花と深山木は、所詮及ばぬ事ながら、わしやあやかりたい、羨やましい。なぜ傾城にならないんだ。只の女子に生れたが、口惜しい口惜しい、口惜しいわいなア。
　トきつと思ひ入れ。太郎もこなしあつて
太郎　コレ、お繁、そりや眞實か、てんがうか。如何にも以前は親達が、女夫にせうと云はれたなれど、假にも兄よ妹と、云はれた仲でどう祝言の、杯がならうぞい。それゆゑ我れは勘當請け、その後其方も茂兵衞と云ふ、亭主を持てば血を分けた、兄妹よりも猶堅う、生さぬ仲ゆゑせねばならぬ。サア、斯う云ふ事がもしひよつと、人の目つまにかゝる時は、男を磨く茂兵衞が立たぬ。そこへ心も附け居らず、兄を捕へて淫ら千萬、この後云はゞ手は見せぬぞ。
　トきつと思ひ入れ、お繁、こなしあつて
しげ　サア、切らしやんせ。とても願ひが叶はずば、いつそ殺して下さんせいなア。
　ト太郎へ體を擦りつける。
太郎　チエ、如何なる天魔の所爲なるか。云はうやうなき人畜めが。
　トぐつと引きつけ、疊へ摺りつけ、突き放す。
しげ　ハア、。
　ト泣き伏す。
太郎　ヤイ、爰な賣女め。最前二階で聞いて居れば、夫婦の仲で起請まで、取交し居る茂兵衞を捨て、兄と名のつく富士太郎へ、戀を仕掛ける浮氣者。エ、おのれがやうな畜生を、妹と云ふも穢らはしい。茂兵衞の手前、い

つその事に
ト刀を抜き、振り上げ、思ひ入れ。
しげ　マア／＼、待つて下さんせ。
太郎　エヽ、未練な事を。
ト切り込むを、掻い潜り、その手に縋り
しげ　サヽ、尤もでござんすが、わたしや不義ではござんせぬ
太郎　なにを。
ト振り解く。この時、お繁の鬘、仕掛けにて、髷落ちて、切り髪の尼になる。太郎、これを見て、ためらひ
しげ　富士太郎さま、わたしや疾から、尼になつてゐるわいなア。
太郎　なんと。
ト合ひ方、變つて
ムウ、その又尼で居るものが、なんで夫婦に起請とは。
しげ　サア、その起請をば御覽なされ、疑ひ晴らして下さんせいなア。
ト懐より、起請を出し、太郎に渡す。太郎、開き見て
太郎　ナニ、天罰起請文の事、一つ、其許と夫婦の契約、致し申さず候ふ。夫婦契約いたし申さず候ふ。もし色がしき詞も掛け申し候はゞ、六十餘州の諸神諸佛の御罰を蒙り申すべく候ふ、お繁どのへ、茂兵衛。こりやどうぢや。
ト合點のゆかぬ思ひ入れ。この以前より、後に茂兵衛、窺ひ居て
茂兵　世に珍らしき血起請の、今一通は即ち爰に。
ト出す。合ひ方、消す。
太郎　ヤ、こなたは茂兵衛。
ト起請を開き
茂兵　矢張り文言は同じ事。宛名は茂兵衛どのへ、お繁。なんと變つた起請でござりませうが。
太郎　ムウ、合點ゆかざるこの場の仕儀。これにはなんぞ。
茂兵　サア、深い様子の一通り、お聞きなされて下さりませ。
ト誂らへの合ひ方。
アヽ、おいとしいはお繁さま、現在家來の私しに、涙ながらにお頼みは、幼ない時よりお前様と、末は女夫にならるゝと、樂しみにした甲斐もなう、足らはぬゆゑにお

氣に叶はず、杯なされて下されねど、一旦夫と思ひしからは、外の男は持つまいと、心に錠を卸ろしたも、障りは月に叢雲の、悪逆非道の王子様、お側仕へに差上げよと、無體の仰せ遁れん爲、外へ嫁入りさせたいと、聞く悲しさに身も世もあられず、今日は死なうか明日は死なうと、思ひ定めて居たけれど、さうなる時には富士太郎さまへ、面當になり、二つには、御恩になつた御兩親様へ、お歎きかけるが勿體ない。一生尼で暮らさうと、思うたなれどお心安め、ひよんな妹を持つた氣で、どうぞ女房にしてくれと、世にも稀れなる孝行な、その心根を承り、妾ぞ御恩の送り所と、女房と云ふは表向き、内證は矢張りお主あしらひ。狹い内でも心の隔て、寢床も別にこれまでは、お前様の御新造の、夜番を致したこの茂兵衛。仔細と云ふはその通り。疑ひ晴らして若旦那、お繁さまの貞節な、心の内の切なさを、御推量なされて下さりませ。

ト よろしく思ひ入れ。太郎、チッとこなし。

しげ　ア丶、恥かしいはわたしが心。お氣に入らぬは足らはぬゆゑ、悋氣は女子の慎しみと、今日の今まで色目にも、出さねど果敢ない心の輪廻。胸に迫りし數々を、云うて晴らして死なうぞと、呑めぬ酒の力を籍り、思ひ切つての横戀慕。今になつては猶更に、一倍愛想が盡きやうかと、それが悲しうござりまする。只この上の願ひには、父上様の仇を討ち、富士のお家の跡立て丶、梅ヶ枝どのと睦まじう、百萬年の御壽命過ぎ、せめてあの世はお嫌でも、女房に持つて下さりませ。云ひ置く事はこればかり。南無阿彌陀佛。

ト 太郎の脇差へ、手を掛ける。

太郎　ヤレ、待て、お繁、早まるな。

しげ　イエ〱、放して下さりませ。

太郎　サア丶、一途に思ふは尤もながら、其方と女夫にならざるは、火尅金の生れゆゑ、家にか丶はる大凶なりと、博士の教へに婚姻せず、身持ち惰弱に勘氣を受け、家出なせしは我が方へ、一旦養女の其方ゆゑに、富士の家を繼がせねば、貰ひし親へ義理立たずと、わざとつれなくもてなせしも、今さら思へば若氣の誤まり。悔んで返らぬ我が身の上。過ぎつる事は赦してくりやれ。

ト 脇差を捥ぎ放す。この時、お角、スッと出て、太郎、お繁の中へ割つて入り、矢張り脇差へ手をかけ

かく　南無阿彌陀佛。

トお角、死なうとするを
茂兵　ヤ、お前は阿母。
太郎　なんで死なうと。
兩人　さつしやるぞ。
かく　なんで死ぬとはお情ない。
　ト合ひ方。
斯う云ふ事とは露知らず、始めて爰へござつた時、繪にあるやうな殿御ぢやと、フッと見初めて煩惱の、重るにつけて無理口說き、年中甲斐もないわたしが戀路、今さらどうも面目ない。最前からの樣子をば、聞けば聞くほど貞女の鏡、曇らぬ胸のお繁どの、それに引替へ日頃から、邪慳なこの身が恥かしい。死んで不足のないわたし、生き存へて何樂しみ。それぢやに依つて。
　トまた死なうとする。
しげ　アヽ待つて下さんせ。わたしが身から事起り、お前に過ちある時は、手は掛けねども親殺し。爰の道理を聞き分けて、どうぞ放して下さんせ。
　トお繁、脇差を取らうとする。
かく　イエ／＼、留めずと殺して下さんせ。
茂兵　お繁さまがあれ程に、事を分けたる今のお詞。

太郎　コレ、お角どの、どうぞ聞き分けて下されいなう。
かく　聞き分けました。
しげ　すりや、得心して下さんすか。
かく　サア、得心しました。
　ト脇差を放す。
今からわしも發起して、善心になる手初めに、富士太郎さまへ一つのお賴み。
太郎　ナニ、わしに賴みとは。
かく　お賴み申すは
　ト件の神酒德利に、三方に有り合ふ供物の土器を載せ、お繁の前へ直し
サア、お賴みと申すはこのお神酒、水も漏らさぬ水神の、一對揃ふ神酒德利、千代八千代まで土器の、結ぶの神のこの杯、行く末繁るお繁どのに、呑ませまして。
太郎　なんと云やるぞ。
かく　ハテ、例へ火尅金の生れでも、尼にならうと思ひ詰めた、せめて心の晴れるやう、受けておやりなされませ。
太郎　それぢやと云うて、どうしてマア。
かく　サ、お否とあらば、死にませうか。

ト脇差へ、手を掛けるを
太郎　ア、、これはしたり。
かく　そんなら御合點が參りましたか。
太郎　サ、それは。
かく　南無阿彌陀佛か。
太郎　サア、
かく　サア
兩人　サア〳〵〳〵。
かく　納めておやりなされませ。
ト太郎に呑み込ませる。
太郎　ムウ。
ト術なき思ひ入れにて、頷く。
茂兵　オ、、こりや阿母、出來ました。その杯が何より
の、親御樣への好き追善。若旦那も御得心の上は、ちつ
とも早う、お繁さま。
しげ　イエ〳〵、それでは梅ケ枝どのへ、どうもわたしの
心が濟まぬ。
かく　ハテサテ、それは要らぬ遠慮。國主に七人、下々で
も、てかけ妾はある習ひ。
しげ　それぢやと云うて、尼になる身で。
かく　サア、その尼になる精進固め、善は急げぢや、サア
サア、早う。
茂兵　それ〳〵、花に嵐のないうちに。
かく　三々九度の床杯、ひツくるめて、早く〳〵。
太郎　それぢやと云うて、今さらどうも。
しげ　わたしや恥かしいわいなア。
かく　なに恥かしい事があるものかいなア。
ト無理にお繁に、土器にて、件の酒を注ぎ、呑ませ、
太郎へさし、酒を注ぐ。太郎、是非なく呑む。
千秋萬歲、千箱の玉を奉る。
ト兩人の呑みしを見て、お角、につたりと、思ひ入
れ。
茂兵　お繁さまのお望みも叶ひ、此やうなおめでたい事は
ござりませぬ。ナウ、阿母。
かく　サイナウ、仲人はお主が役、待ち女郎はこの婆ア、
頭に祝ふ友白髮、仲ようお暮らしなされませ。
茂兵　ヘイ〳〵、おめでたう
兩人　ござりまする。
トばた〳〵になり、向うより若い衆一人、走り出て來
り、門口から

若衆　茂兵衞どの、何か御詮議の事があるから、たつた今
　會所まで、ござれ〳〵。
茂兵　ナニ、御詮議だ。そりやアなんの詮議だ。
若衆　サア、なんの御詮議かは知らぬが、たつた今ござれ
　と會所の云ひつけ。サア〳〵、早くござりませ〳〵。
茂兵　エヽ、喧ましい。今行くわえ。
若衆　早くござれや。
　ト若い衆、云ひ捨てゝ、引返して入る。
かく　コレ、茂兵衞、御詮議とあるが、なんぞ心がゝりな
　事ではあるまいかの。
茂兵　ナニ、氣遣ひな事がござりませう。併し、富士太郎
　さまの御浪人、もしや胡亂と
かく　ヤ。
茂兵　ナニ、不時の災難、無實の難題。もしや先刻の侍ひ
　が……なんにしろ會所とあれば、行かずばなるまいか。
かく　それ〳〵、御用とあるからは、早く行つて來たがよ
　い。
茂兵　それぢやアちよつと、行つて來ますから、後で母さ
　ん、お床を延べて
かく　オヽ、そりやわしが呑み込んでゐるわいの。

茂兵　よろしう頼みました。
太郎　そんなら行きやるか。
しげ　早う戻つてたもいなう。
茂兵　畏まりました。
かく　コレ、茂兵衞、必らずゆるりと
茂兵　ヤ。
かく　イヤ、ちつとも早く。
茂兵　ドレ、行つて來ようか。
　ト唄になり、茂兵衞、向うへ入る。お角、跡見送り
かく　早う歸つて來やよ。
　ト思ひ入れ。時の鐘になり、太郎、お繁、毒の廻りし
　こなしにて
太郎　ヤヽ、合點ゆかぬは胸苦しく、俄かに五臓惱亂なし
しげ　わたしも共にこの苦しみ。
　ト兩人、苦しみながら、心得ぬこなし。お角、兩人を
　とくと見て
かく　オヽ、苦しからう〳〵。
　ト嘲笑ふ。兩人、思ひ入れあつて
太郎　もしや、二人が
兩人　今呑みしは

かく　南蠻秘法の
兩人　エ。
かく　毒藥だ。
　トきつと云ふ。
兩人　エ、、、、。
　ト兩人、悶りするはずみに、血を吐き、苦痛の思ひ入れ。時の鐘、凄き合ひ方。太郎、口惜しきこなしにて、刀を抜かうとして、手の痺れる思ひ入れ。
かく　ヤレ、可哀さうに〳〵。
　ト太郎、また抜かうとするを、お角、足にて蹴倒す。
太郎　エ、、武士たる身にて云ひ甲斐なく、毒氣に手足の叶はぬか。チエ、口惜しい。
　トよろしく思ひ入れ。お繁、お角に縋り
しげ　コレ、お角どの、なんの恨みにわたしらを、毒を盛つて殺さうとは。
かく　オ、、頼まれた。
太郎　そりや何者に。
かく　淺間狹右衛門照政さまに。
　ト合ひ方、消す。
兩人　エ、、その照政が何ゆゑに。

かく　オ、、うぬらを殺す一部始終、冥土の土産に云つて聞かせる。
兩人　チエ。
　ト口惜しきこなし。
かく　苦しからうが、よつく聞け。
　ト合ひ方になり、神酒の臺へ腰を掛け
いつぞや都浮田の森で、淺間狹右衛門照政さまが、うぬらが親の左京之進を、舞樂の遺恨に騙し討。手がゝりなければ誰れあつて、敵と云ふは知らざれど、惡事は千里、油斷は大敵、それゆゑ忰の富士太郎、殺してくれゝば百兩の、褒美と聞いた地獄耳。見る目嗅ぐ鼻、邪魔になる、茂兵衛を釣り出し祝言も、仕込んだ毒の鬼殺し。閻魔の帳附け三々九度、死出の山路の床入りに、謠がはりの法蓮陀佛。なんとめでたい事であらうが。
　ト兩人、これを聞き、口惜しきこなし。
太郎　ムウ、すりや親人の敵たる
しげ　淺間が爲に二人とも
かく　不便ながらも返り討だ。
太郎　チエ、、日頃尋ねし親の敵、姓名知れても毒の爲、討つ事ならぬこの苦しみ。

ト太郎、腕き苦しむ。
しげ　エヽ、この、茂兵衞どのはどうしてか。早う戻つてくれぬかいなア。
かく　オヽ、その茂兵衞も後からやるワ。
太郎　エヽ、云はうやうな極重惡人。
兩人　思へば〳〵。
ト兩人、よろぼひ寄るを、お角、有り合ふ縫ひぐるみにて、くらはす。これにて兩人、ウンと倒れる。お角、見て
かく　ムウ、おツくたばつたか。茂兵衞めが歸らぬうちに、褒美の金を、オヽ、さうだ。
ト門口へ出る。雨車になる。
エヽ、ぼろ〳〵と降つて來たわえ。
ト下手にある箕を引ツかけ、竹笠をかむり、時の鐘、合ひ方にて、行きかけると、向うより茂兵衞、番傘をさし、足早に出て來り、行き合ひ、お角恟りして、笠にて顔を隱し、摺れ違つて向うへ入る。お角を見て、茂兵衞、心得ぬこなしにて、本舞臺へ來り
茂兵　阿母、いま歸りました。
ト内へ入る。兩人を見て、恟りし

ヤ、こりやお二人には
ト兩人を抱き起す。これにて兩人、心附き
太郎　おのれ、お角め。
ト武者振りつくを、茂兵衞、留めて
茂兵　コレ、若旦那、茂兵衞でござります。
ト太郎、茂兵衞を見て
太郎　オヽ、茂兵衞か。
兩人　遲かつた〳〵。
ト苦しきこなし。
茂兵　モシ、こりや何ゆゑでござりまする。
太郎　ムウ、其方が親のお角めが
しげ　毒酒を呑まして。
茂兵　エヽ……。
ト恟りする。兩人、ウンと反る。茂兵衞、介抱して
モシ、氣をしつかりと持たつしやりませ、若旦那樣、お繁さまいなう。
ト呼び生ける。バタ〳〵になり、向うより泥介、雨に逢ひしこなしにて、走り出て來り、門口へ來て
泥介　ヤレ〳〵、俄雨でぐつすりになつた。
ト云ひながら、門口を開け、内へ入り、茂兵衞、見て

茂兵　ヤ、泥介どのか。
　ト愕り、こなし。
泥介　茂兵衛さま、御免なされませ。
　ト太郎、お繁を見て、愕りし
　ヤ、、こりやお二人樣には、如何なされました。
　ト兩人に縋り、思ひ入れ。
茂兵　ア、、こなたの前も云ひ譯ないが、阿母めが惡企みで、毒酒を盛つてお二人を。
泥介　エ、、、、、すりや、お角どのが。エ、、殘念な。いま小梅にて摺れ違ひしが、知らぬ事とて見遁がせしか。
茂兵　ナニ、すりや、小梅通りを、ムウ。
　ト戸棚より脇差を出し
　泥介どの、跡をば頼む。
　ト門口へ行きかけるを
泥介　ア、コレ、茂兵衛どの、血相變へて、いづくへござる。
茂兵　サア、親と云ふ字にこれまでは、胴慾非道も堪えしが、お主の御身にや替へられぬ。毒酒なしたるその譯を、すべよく云へばその通り、手強き時は覺えの業物。
　トこれにて、脇差を差し
泥介　すりや、親に替へても主家のお爲を。
茂兵　今が茂兵衛の絕體絕命。小梅通りと聞くからは、跡追ひかけて事の實否を。
泥介　オ、、それならば、ちつとも早く。
茂兵　業平橋を目當にて。
　ト門口へ出る。
泥介　怪我せぬやうに。
茂兵　合點だ。
　ト屋體囃子になり、茂兵衛、一散に向うへ入る。泥介は兩人の介抱をする。この見得よろしく、道具廻る。
　本舞臺、向う棕梠伏せの高土手、後ろ黑幕、小高き藪疊、松の立ち木、同じく吊り枝、すべて、小梅堤の體。爰に以前のお角、捨て石に腰を掛け居る。時の鐘、雨車、蛙の聲にて道具、納まる。
　トお角、空を見て
かく　エ、、大分降つて來たわえ、あの無理助野郎め、どこへ行きやアがつたか。早く逢ひたいものだのに、忌々しい奴だなア。

ト時の鐘、バタ／＼になり、向うより茂兵衛、頰冠り一本差し、尻端折りにて、走り出て、直ぐに舞臺へ來る。お角、無理助と心得

誰れだ／＼。無理助どのか。

トこれを聞き、茂兵衛、頷き、側へ來る。

コレ、まんまと首尾よく毒酒にて、女房ぐるめ、おッ殺したわえ。

トこれにて茂兵衛、思ひ入れあつて

茂兵　ムウ。すりやこなさんが。

ト手拭を取る。お角、透し見て、恟りして

かく　ヤア、茂兵衛か。

ト逃げようとするを、茂兵衛、キッと捕へ

茂兵　阿母、待たつせえ。

トきつと云ふ。お角、思ひ入れあつて

かく　ムウ、待てとはなんだ。

茂兵　云つて下せえ。

かく　云へとは何を。

茂兵　富士太郎さま御夫婦に、毒酒を呑まして殺した譯を。

かく　ヤ。

茂兵　聞かせて下せえ。

ト合ひ方、蛙の聲。

かく　イヤ、知らねえ、覺えはねえ。

茂兵　サア、さう云はずとも。

かく　エヽ、イケしつこい。

茂兵　すりや、どうあつても。

ト袖を取るを、振り拂ひ

かく　知らぬわい。

トきつと云ふ。

茂兵　ムウ、知らぬと云へば。

ト茂兵衛、思ひ入れあつて、キッとなる。お角、見て

かく　なんだ／＼、目に角立て、どうせうと思ふのだ。コレ、姑は親だぞ。

茂兵　ムウ。

かく　わりや、親に手向ひするのか。

茂兵　何しにわしが。

かく　手向ひせずば。

ト思ひ入れあつて、茂兵衛を足蹴にする。茂兵衛、ザッと思ひ入れ。雨車になり、お角、思ひ入れあつて

ア、また降つて來たわえ。

ト茂兵衛、思ひ入れあつて

茂兵　コレ、阿母。しつこいやうだが、この茂兵衛が一生の願ひ。

かく　ムウ、云つてくれろか。

茂兵　サア、殺した譯を。

かく　云つて聞かさうか。

茂兵　どうぞ、それを。

かく　只は否だ。

茂兵　ヤ。

かく　富士太郎を殺すには、百兩と云ふ褒美があるゆゑ、頼み手を云はせるからは、われも百兩、金を寄越すか。

茂兵　サア、金と云つては

かく　よもやあるまい。大枚百兩と云ふ金ぢやもの、どうしてどうして。金がなければ、マア、否だ。

茂兵　サア、拵らへぬではなけれども、寐耳に水の大枚百兩。

かく　オヽサ、あらう筈がない。そんなしみッたれな、男にかゝつては居られぬ。ドレ〳〵、金の蔓でも尋ねませう。

トお角、行かうとする。茂兵衛、裾を捕へ

茂兵　コレ、阿母、しみつたれでもこれまでに、お前に不自由はさせませぬ。世間へ面を張る茂兵衛、明日にも金が出來たなら、百兩はさて措いて、いくらでも進ぜませう。生さぬ仲でも親子のよしみ。わしを不便と思ひやり、どうぞ頼んだその人を、云つて聞かせて下さりませ。コレ、拜みます〳〵。

かく　イヽヤ、明日まで待つ事は否ぢや。なんぢや、それに、親子々々と、お爲でかしは措いてもらはう。例へ夫婦親子でも、金錢づくでは愛想が盡きるものぢや。まして根が他人ぢやもの、どうして〳〵、迂濶に油斷がなるものか。お心よしのわしを騙して、頼み手を云はさうとは、ほんに〳〵、押しの強い野郎ぢやなう。

茂兵　すりや、これ程に尋ねても。

かく　くどいわえ。

茂兵　チエ、こなたはなう。

ト脇差の柄へ手をかけるを、お角、見て

かく　なんだ。見りやア脇差の柄へ手をかけ、わしを切る氣か。

茂兵　イヤ、どうしまして。

ト手を放す。

かく　イヤ、切る氣であらう。切られませう〳〵。サア、切らつしやれ。
　ト茂兵衞の顏を覗き見て
どうした、切らぬか。その根性では切られまい。イケ張合ひのない、この面わえ。
　トくらはす。
茂兵　ムウ、なんぼ親でも、そりや又あんまり。
　ト無念のこなし。
かく　その面はなんだ。この親を睨むと、比目魚になるぞよ。コレ、びく〳〵せずとも、お母さんの云ふ事を、コレ。
　ト茂兵衞の胸倉を取り、引き廻して
聞き居れやい。コレ、善にもせよ惡にもせよ、親に付くのが子の習ひ、それになんぞや主持ち顏。殺した譯を聞いたらば、われは故主へ義理が立たうが、云つて聞かせるおれが義理はどうする。褒美を取つて頼まれたお人へ、面が合はされうか。われさへ善ければこの親は、のめつて死んでも構はぬか。人に大事を頼まれて、うかうかそれを云ふやうな、燒の廻つたお角ぢやと、思つて居るがいとしほな。今頃二人は死出の旅、道に迷つて居るだらう。われも暇をやる程に、道案内に地獄へでも、勝手な方へ連れて行け。名僧よりも有り難い、親が引導取らしてくれるワ。
　ト合ひ方、消す。
茂兵　エヽ、コレ、假にも親と思ふゆゑ、手を提げ無念を堪らゆれど、茂兵衞の爲にやァ主人の敵。
かく　なにを。
　ト切つてかゝるを、茂兵衞、脇差を引ツたくり
茂兵　命を捨てゝ
　ト切りつける。
かく　アヽ、人殺し、親殺しだ。
　トお角、糊紅になり
茂兵　堪忍さつせえ〳〵。
　ト又、一かせ切る。
かく　親殺しだ。
茂兵　コレ。
　ト茂兵衞、お角の口を押へ、キツと見得。これより誂らへの鳴り物になり、いろ〳〵立廻り、トヾ、よろしく見得。バタ〳〵になり、橋がゝりより、以前の無理助、出て來り、これを見て

無理　ヤア、お角か。
かく　無理助どのか。此奴めを
無理　合點だ。
茂兵　ムウ。さてはわれも荷擔人だな。
ト　お角は手負ひの立廻り。無理助、抜きつれてかゝ
る。誂らへの鳴り物になり、三人、よろしく立廻り。
お角、よき程に、へたばる。無理助をキッと留める。
この時、上手より、太郎、泥介、附き添ひ出て來る。
茂兵衞、太郎を見て
茂兵　ヤ、あなたは富士太郎さま。合點の行かぬ、どうし
てあなたは。
太郎　オヽ、不審は尤も。最前毒氣に中たりしも、日頃信
ずる觀音の、廣大無邊の利益にて、夢ともなく現ともな
く、閻浮の尊像拜すと思へば、忽ちに毒氣を去り
泥介　お繁さま諸ともに、常の如くに御全快。それゆゑこ
の事知らさん爲、お供いたして參りましたが、お角どの
を助けんと思ひしに、早まつた事しましたなア。
茂兵　すりや、觀世音の利益にて、お二人ともに御無事で
あつたか。チエ、忝ない。
太郎　まだその上に喜びは、日頃尋ぬる敵が知れた。

茂兵　ナニ、敵が知れましたとか。
太郎　オヽ、敵と云ふは、淺間狹右衞門照政。
茂兵　すりや、淺間狹右衞門であつたるか。
泥介　その敵に頼まれて、毒酒を盛りしお角どの、息ある
うちに紛失の、寶の行くへを。
茂兵　イヤ、その二品の盗賊を、詮議いたすはこの老耄。
ト　無理助に活を入れる。これにて心附く。茂兵衞、刀
をさしつけ
サア、富士の重寶達多丸、舞樂の一卷、奪ひしは何者な
るか。白状しろ。
無理　サア、それは。
茂兵　云はずばおのれ、たつた一突き。
無理　ア、コレ／＼、云ふから命は助けて下され。
泥介　サア、キリ／＼と吐かし居らう。
無理　オヽ、その二品を盗んだは、矢張り淺間狹右衞門さ
まだ。
三人　すりや、二品の盗賊も。
ト　思ひ入れ。無理助、隙を窺ひ
無理　觀念。
ト　切つてかゝるを、ちよつと立廻り

太泥　敵に荷擔の
茂兵　此奴は血祭り。
無理　ウア、。
　ト切り倒す。この時、本釣り鐘。
泥助　ア、心がらとは云ひながら、果敢ない最期のお角どの。
太郎　敵を餘所に父の仇、我れは淺間が行くへをば。
茂兵　アイヤ、その狹右衛門は廓にて、月大盡と變名なし、梅ケ枝どのへ通ふ客。
太郎　すりや、この程より噂のある、月大盡が照政よな。
泥介　さすれば、あなたは色に事寄せ。
茂兵　二つの寶を所持なし居るか
太郎　とくと樣子を糺した上
茂兵　サ、、若旦那には大事の御身、泥介と諸ともに。
　ト行けと云ふ思ひ入れ。
太郎　とは云へこの場を
泥介　見捨てゝは
茂兵　母と此奴は相討ちと、一旦遁がれる親殺し。爰構はずと。
泥介　ござりませ。

　ト兩人は、これにて花道へかゝる。この時、お角の死骸、すつくと立つを、茂兵衛、髻を捕へる。茂兵衛、チッと思ひ入れ。
茂兵　コレ、阿母、どうぞ迷はず成佛さつせえ。本望遂げたその上で、富士のお家を再興なし、死んで未來で云ひ譯しますぞ。
太郎　惡人ながらも
泥介　不便な最期。
茂兵　ア、、コレ。
　トお角を、切り返す。バッタリ倒るゝを、見て
ござりませ。
　トお角の死骸を見て、茂兵衛、手を合せるを、木の頭。太郎、涙を拭ふ。茂兵衛は口のうちにて、念佛を唱ふる心、よろしく、本釣り鐘の送り
ひやうし幕
　ト太郎、泥介は、愁ひの思ひ入れにて、向うへ入る。跡、シヤギリ

五幕目

根岸通茶店の場
奈須野屋寮の場
田中衣紋坂の場

役名——富士太郎知之。男達、望月駒七。同、鏡臺三藏。同、田毎四十八。同、姥捨石六。大工、三吉。同、元五郎。番新、八重咲。葛城屋梅ヶ枝。彫物師、左甚五郎。

本舞臺、三間、風雅なる枝折り門、左右、建仁寺垣、見越しの松、上手、枝垂れ櫻の立ち木、日覆ひより吊り枝。下の方、松の立ち木、王子道谷中道と記せし石の榜示杭、この側、葭簀張りの出茶屋、根岸通りの體。茶屋男、床几を並べ、町人、侍ひ、鮨屋、簪賣り、皆々、茶を呑み居る。寮の騒ぎ唄、小太鼓の通り神樂にて、幕明く。

茶屋　サア、どなたもお茶を、お上がりなされませ。

侍ひ　どこの寮だか、大層に騒ぐ。今日は天氣がよくて、どこも彼處も夥しい人だ。

町人　左樣でござります。觀音樣の開帳から向島、定めてお前方も、商ひが澤山あらうね。

鮨屋　イヤモ、今年のやうに人が出て、商ひのある事は覺えません。どこの店も鮨を漬けたやうサ。

簪賣　わたしも評判のよいとてつる簪、酒は拳酒、色品が珍らしいから、大層賣れます。

町人　イヤ、珍らしいと云へば、吉原の葛城屋の、梅ヶ枝と云ふ花魁が、久しく病氣で、この根岸の寮に來てゐたが、病氣が癒つて今日夕方に、本宅へ歸るとの事。

侍ひ　その梅ヶ枝に惚れて通ふ、月大盡と云ふ客の趣向で、根岸から吉原へ、道中姿で廓入りするとの噂。それに違ひはないかの。

茶屋　ハイ、その葛城屋の寮は、この裏手でござりますから、爰らでも評判がござります。

簪賣　成る程、これまで聞かない珍らしい趣向。定めし大層な入りであらうね。

侍ひ　さう云ふ事なら、これから上野の方をぶらついて、歸りにその道中を見物しよう。

鮨屋　おいらも鮨を思ひ入れ賣つて、梅ヶ枝さんの廓入りを見たいものだ。

簪賣　コレ／＼、よしにするがいゝ。蛇ぬら／＼遲く歸つ

て、婆樣に叱られるだらう。
町人　違ひない。あんまり蛙、ひよこ〳〵、歩かないがよい。
鮨屋　もう、八ツ過ぎか知ら。なんぢやか、がく〳〵腹が減つて來た。サア、とてつると出掛けようか。
茶屋　マア、虎はほう〳〵、お靜かになされませ。
侍ひ　狐でサア〳〵、來やれ〳〵。
茶屋　ドレ、わたしも、水を一杯汲んで來ませう。
ト右の鳴り物にて、皆々、上下へ入る。直ぐに、派手なる唄になり、向うより對の男達、駒七、三藏、四十八、石六、一本差し、下駄がけにて出て、直ぐに舞臺へ來り
駒七　なんと、爰らで一服、のんで行かうぢやねえか。
三藏　それがよからう。茶を一杯貰はう。
四十　なんだ、茶屋はゐねえのか。ハテ、不用心な。
石六　よし〳〵、呑みたくば手酌でやらうかすべい。
ト皆々よろしく、床几へ掛けて
駒七　仲間の頭、月大盡が惚れてござる、葛城屋の梅ヶ枝太夫、久しい病氣が全快して、今日本宅へ引移り。
三藏　頭の趣向で根岸から、道中姿で大門を、入ると云ふも好いぎゐん。
四十　併し、大門は入つても、頭を振りつけ、肝心の、床入りをさせぬ手强い女郎。
石六　それと云ふも梅ヶ枝は、雪とか云ふ瘦浪人の、間夫があるを合點で、揚詰めにして口說く頭。
駒七　病氣の間も待ち焦れ、今夜やう〳〵引移りを、昨夜から葛城屋に居續けで、今朝から仲間に、迎へに行けときつい待ち兼ね。
三藏　なんぼ頭の云ひ附けでも、朝から行くのも野暮らしく、向島をぶらついて、先で存分身拵らへの、出來た時分に仕掛ける魂膽。
四十　この位に女郎子供の心意氣を、思ひ遣つてやらないと、通り者とは云はれない。さうして見ると、女郎買ひも、むづかしいものだ。
石六　まだ餘ッぽど日も高し、これから駐春亭へ行つて湯へ入り、腹をしつかり拵らへたら、丁度時刻も吉原へ。
駒七　梅ヶ枝太夫のお御輿を、引立て役の更科組。
三藏　手柄の程は田川屋へ。
四十　早く行つて、呑みたいな〳〵。
ト吉例のやうに云ふ。

石六　エヽ、飛んだ茶番だ。
駒七　そんなら一緒に
四人　サア、行かうか。
ト皆々思ひ入れ。右の唄、通り神樂にて、道具、廻る。
本舞臺、三間、中足本緣附き、大和葺きの二重、伊豫簀を下ろし、上下建仁寺垣、枝垂れ櫻の立ち木、日覆ひより吊り枝、舞臺前、山吹の土手、板折り戸、すべて奈須野屋寮の體。通り神樂にて、道具とまる。
ト謡らへの兩吟になり、向うより富士太郎、五十日鬘、着流し、大小にて、文を讀みながら出て、花道にとまる。これと一時に、二重の伊豫簀を卷き上げる。梅ケ枝、傾城、扱帶形、鏡臺に向ひ、番新、八重咲、梅ケ枝へ簪を差させ、身拵らへの體。新造一重振袖の形、長き煙管を持ち、禿、ゆかり本を見て居る。兩方よろしく、唄一くさり、切れる。右の合ひ方、太郎、思ひ入れ。
太郎　花の香は、散りにし枝にとまらねど、移らん袖に梅ケ枝が、その移り香に引かされて、夜毎日毎に通ふ神。
梅枝　文の便りを松蔭の、爰は根岸の假住居、今日廓出る身仕舞ひも、浮かぬ心の十斗鏡。
太郎　移り變らぬ仲々を、人目籬にせきせかれ
梅枝　間夫と云ふ名もいつしかに
太郎　逢はれぬ首尾を
梅枝　戀ひ焦れ
太郎　待たるゝ身より待つ身とは
梅枝　ハテ、よう云うた
兩人　ものぢやなア。
トまた唄になり、太郎、文を懷へ入れながら、舞臺へ來る。此うち梅ケ枝、身拵らへする事あつて、八重咲、手を拭きながら
八重　モシ、花魁、これでようござんすかえ。
梅枝　八重咲さん、お有り難うござんす。久しぶりでの身拵らへ、眞に頭が重うござんす。
一重　さうでござんせう。サア、一服お上がりなさんせいなア。
ト莨を吸ひつけて、梅ケ枝へ出す。
八重　この子は本ばかり見てゐずと、はき〳〵用を足した

がよいぞえ。
ゆか　それでもわたしや、この本が面白いわいなア。
ト此うち、太郎、思ひ入れ。
太郎　そこに居やるは、梅ケ枝ぢやないか。
ト梅ケ枝、これを聞いて
梅枝　ほんに、お前は雪さん、よう來て下さんしたなア。
八重　モウ〳〵、花魁とわたしらが
新造　毎日々々、主のお噂。
兩人　サア〳〵、こちらへお入りなさんせ。
ト右の合ひ方。兩人、太郎を二重へ連れて上がる。
梅枝　久しう便りを聞かぬゆゑ、眞に苦勞でござんした。
よう顏見せて下さんしたなア。
太郎　わしも逢ひたいは山々、病氣で爰へ來て居やるとは
聞いたなれど、せかれて居れば儘ならず、思ひがけない
其方の文、封切る間さへ待ち兼ねて、やう〳〵忍んで來
たわいの。
梅枝　わたしが病氣も本腹ゆゑ、出勤せいと親方さんの
勸め。心に濟まねど勤めの身、廓へ歸れば又いつか、逢
ふ事もならぬゆゑ、八重咲さんの計らひで、文で知らせ
た今日の首尾。

太郎　いつもながら八重咲の深切、忝ない。揚げ代の滯り
が濟んで、晴れて逢はれるやうになつたら、この禮はキ
ツとしますぞや。
八重　なんのマア、勤めの身は同じ事、世話にもなつたり
なられたり、そのお禮には及びませぬ。
梅枝　モシ、苦勞にしなさんすな。わたしが出勤した上
は、その滯りも都合してあげる程に、必らず案じて下さ
んすな。
太郎　何から何まで其方の世話、忝ないぞや。
梅枝　それはさうと、お前を急に呼びにあげたは、話さに
やならぬ事があるゆゑ。
太郎　わしも其方に折入つて、頼みたい事。イヤ、たんと
話しがあるわいの。
八重　久しぶりで何かの話し。わたしらは奥へ行て、コ
レ、一重さん、身拵らへをしなさんせ。
一重　アイ〳〵、そんならどうでも、本宅へ行くのかい
な。
八重　ハテ、知れた事。モシ、花魁、雪さん、お久しぶり
でござんすな。
太郎　されば、此やうな事は、數へて見れば

梅枝　朝な夕なに待ち詫びし
太郎　その溜め〳〵を
八重　併し、病氣に障らぬやう。
兩人　ヤ。
八重　お樂しみなさんせい。
　ト流行り唄になり、八重咲、新造、禿、奥へ入る。兩人、思ひ入れ。
梅枝　ほんにマア、何から話してよからうやら、あんまり嬉しうて、さつぱり口へ出やんせぬ。さうして、お前の頼みと云はしやんすわえ。
太郎　サア、わしが其方へ頼みと云ふは、一方ならぬ一大事、其方の誓言、見た上で。
梅枝　變つた事を云はしやんす。これまで深う馴れ馴染み、取交せし互ひの起請、まだその上に、誓言見たいとあるからは。それ〳〵。
　ト合ひ方になり、梅ケ枝、鏡臺を引寄せ
　賤しい流れの身ながらも、心は曇らぬお前の女房。この鏡は女子の魂ひ。苦界の種なる髮の飾り。この簪で、カウ〳〵。
　ト簪を拔きて、鏡を打つ。
太郎　オヽ、出かしやつた。金打代り、天晴れ心底。
梅枝　これでお前のお頼みを、云うて聞かせて下さんせいなア。
太郎　如何にも。改めて其方へ頼み。
梅枝　して、その頼みとはえ。
太郎　どうぞ客が拵らへてもらひたい。
　ト合ひ方消す。
梅枝　ムウ。わたしは元より勤めの身。夜毎に變る枕の數。
太郎　それぢやに依つて、改めて客を拵らへてたも。
梅枝　して、そのお客はえ。
太郎　外でもない、月大盡ぢや。
梅枝　エヽ。
太郎　サア、斯うばかりでは悔りは道理。わしが云ふ事、一通り、とつくりと聞いてたも。
　ト變つた合ひ方。
　もと我が父は住吉の樂人、富士左京之進常雪どの、未だ在世のその砌り、我れは若氣の誤まりにて、好色ゆゑに勘當受けしが、その後父は、都浮田の森にて、人手にか

かり敢へない御最期。剩さへ舞樂の一卷、達多丸の劒、奪ひ取られしゆゑ、何卒して二品を詮議仕出し、敵を討ち、再び家名を興さんと、思へど敵の知れざるゆゑ、空しく月日を送りしに、觀世音の功力にや、計らず知れし敵の姓名。以前は同じ樂人にて、淺間狹右衞門照政なれど、これぞと云ふに證據なければ、寶の盜賊、父の仇と、討つ事ならぬも武士の表。いま月大盡と變名して、其方に執心なすこそ幸ひ、色に事寄せ彼れが素性、探り負ふせてもらはん爲、嫌うてゐやる月大盡、客にしてくれいと頼むのは、口惜しく思へども、この身の望み叶へたさ。其方の心底見拔きしゆゑ、頼みと云ふはこの通り。コレ、梅ケ枝、どうぞ聞分けてたもいなう。

ト思ひ入れにて云ふ。梅ケ枝、思ひ入れあつて

梅枝　嬉しうござんす、雪さん、よう云うて下さんした、それ程までの一大事、女房と思うて打明かし、よう頼んで下さんした。如何にもお頼み、聞分けませう。

太郎　すりや、月大盡、いよ〳〵其方は。

梅枝　今日の廓出も月大盡の揚詰め。心に染まねどお前のお頼み。

太郎　客にしてたもるかや。

梅枝　アイナア。

太郎　なんにも云はぬ、忝ない。

ト手を合せる。

梅枝　アレ、女房のわたしに、なんの禮。

太郎　その女房を得心で、嫌な枕を交はさせる

梅枝　サア、そこが勤めの手練手管。騙して探るはわたしが胸。添ひ寐はお前を退けて、なんの帶紐解かうぞいな。

ト寄り添ふ。

太郎　そんなら、見る影もないこのわしを、其方はそれほど。

梅枝　思ふが無理か、コレ、雪さん。

トじつと太郎の顏を見て

なぜ此やうに

太郎　ヤ。

梅枝　惚れたのぢやぞいなア。

ト兩人、ヂッと抱きつく。なまめいた合ひ方になり。

兩人、思ひ入れあつて

太郎　此やうな事は久し振りぢやなア。

梅枝　わたしや嬉しうて、のぼせたわいなア。

太郎　シタガ、わしが爰へ來てゐる事が、月大盡に聞えたら、大抵ではあるまい。誰れぞに見附けられぬうち、今日はもう歸りませう。
梅枝　それぢやと云うて、お前、此まゝ歸らしやんすか。
太郎　爰にゐたは山々なれど、ひよつと誰れぞに見附けられては悪い程に。
梅枝　なんの事ぢやぞいな。やう／＼の思ひ、久し振りで逢ふと其まゝ、歸らう／＼と、ソワ／＼しなさんすは、ハア、、聞えた。わしが病氣の其うちに、外に面白い事が出來たのでござんせう。
太郎　なんのマア、わが身もわしが心を知らぬかなんぞのやうに、嗜なんだがよいわいの。
梅枝　イエ／＼、云はしやんすな。外に色さんが出來たのに違ひござんせぬ。其やうな水臭いお前に、用はござんせぬ程に、早う歸らしやんせ。
太郎　歸らいでよいものか。最前からわしが歸らうと云うて居るものを、わが身がなんのかのと留めたぢやないか。
梅枝　なんのわたしが留めやうぞいな。早う歸らしやんせ。

太郎　オヽ、歸るとも／＼。此やうな所に居るものか。
梅枝　サア／＼、早う歸つたが、ようござんすわいなア。
太郎　今歸る所ぢや。きつい腹の立てやうぢやな。
梅枝　わたしが勝手に腹立つるのを、構うて下さんすな。
太郎　なんの構ふものか。此やうな事と知つたらば、來るのではなかつたもの。ドレ、歸りませう。
ト大小を差し、二重より下りながら梅ヶ枝の方を見る、梅ヶ枝も太郎の方を見て、兩人、顔見合せ、又あちらを、ちやつと向いて、思ひ入れ。太郎、下手へ行きながら
サア、今歸るぞや。ドレ、歸りませう。
ト門口を開けようとする。梅ヶ枝、思ひ入れ。
梅枝　モシ、お前、ほんまに歸らしやんすか。
太郎　知れた事、わが身が歸れと云うたぢやないか。
梅枝　それでもお前が、歸りたいと云はしやんすゆゑ。
太郎　それぢやに依つて歸るのぢや。
梅枝　歸らしやんすはよいけれど、わたしが用があるわいな。
ト云ひながら、梅ヶ枝、二重より下りて、太郎の側へ來る。

太郎　わが身の用は、この頃に聞きに來よう。
ト外へ出ようとする。
梅枝　ハテマア、ちよつとこちらを向かしやんせ。
太郎　こちら向いたがどうする。
トこちらを向く。
梅枝　アイ、斯うするわいなア。
ト手早く太郎の刀を取つて、梅ヶ枝、二重へ上がる。
太郎　これはしたり、惡い事しやんな。
梅枝　こりやわたしが、預かつて置かうわいなア。
太郎　滅相な。此方へ返してたも。
梅枝　これが欲しくば、ちやつと爰へ。
太郎　さま〳〵な事云やる。
ト太郎、二重へ來て
サア、來た程に、返してたも。
梅枝　ようござんした、これも此方へ。
トまた脇差を取る。
太郎　これはしたり、どうするのぢや。
梅枝　アイ、斯うするわいなア。
ト太郎の帶を解く。
太郎　わしが帶ばかりほどいて、蟲のよい。

梅枝　わたしのも解いて下さんせい。
太郎　大事ないかや。
梅枝　アイ。
トじつと抱きつく。太郎、其まゝ、梅ヶ枝の扱帶を解
き
太郎　幸ひ爰にこの搔卷。
ト側にある搔卷を引寄せる。
梅枝　枕が一つで。
ト思ひ入れ。
太郎　枕代りは。
ト莨箱を取り、以前の草双紙を載せる。
梅枝　わたしやどうやら
太郎　ヤ。
梅枝　オヽ寒。
ト兩人、抱きつく。流行り唄の合ひ方。奧より、八重
咲、出て、この體を見て、衝立の蔭より
八重　モシ花魁、行つてもようござんすかえ。
梅枝　隨分ようござんす。
ト八重咲、こちらへ來て
八重　いま表から、月大盡の仲間の一座の衆が、どや〳〵

と、花魁の迎ひぢやと云うて來たゆゑに、二階で酒を呑ませて置きましたが、斯う云ふ所を見たならば、喧ましうござんすぞえ。

梅枝　そんなら迎へに來たのかえ。しんに自烈たうござんすなア。

太郎　それぢやに依つて最前から、わしが歸らうと云ふものを。

　ト太郎、起きようとするを、梅ケ枝、留めて

梅枝　それぢやと云うて、これがどうして。

八重　それでは、わたしが困るわいな。

梅枝　エヽモ、わたしや、むちやくちやぢやわいな。

　ト抱きつく。

太郎　八重咲、堪忍してたもや。

　ト太郎、搔卷を、すつぽりかむる。八重咲、思ひ入れ。

八重　花魁、澤山でありますよ。

　トあち向いで、簪で鬢を搔く。この見得、流行り唄にて、道具、廻る。

　本舞臺、元の出茶屋の道具へ戻る。

　ト茶屋男、釜の下を焚いて居る。騷ぎ唄にて、向うより甚五郎、ぼつと鬘、羽織、着流し、彫り物大工三吉、元五郎、股引、腹掛けにて、出て、花道にて

三吉　なんと、甚五郎どの、今日はいゝ日和だね。

甚五　されば誠に暖うて、汗びつしよりになりました。

元五　向うの茶店で、茶を一杯呑んで行きませうか。

甚五　さうしませう。わしもこの間から、時候中りのせいか、昨夜から腹が痛んで、今朝は大きによござつたがまた最前からちく〳〵痛んでなりませぬ。ちと休んで行きませう。

三吉　それはさぞ、難儀でござりませう。マア、向うへ行て、一服やりませう。

甚五　サア〳〵、ござれ〳〵。

　ト右鳴り物にて、三人、舞臺へ來て

モシ、茶を一杯下され。サア、お前方も掛けさつしやれ。

　ト三人、床几へ掛ける。茶を出す。

茶屋　どなたもお茶を上がりませ。

三吉　甚五郎どの、廣德寺の門の彫り物は、立派に出來ましたね。

甚五　さればでござる。わしも年久しく王子村に居て、彫り物渡世をして居るところ、今度廣德寺から、大門欄間へ龍を彫つてくれいとの誂らへ。末代までも殘る事ゆゑ、隨分念に念を入れて彫り上げ、今日はお前方を頼んで仕上げも出來て、わしも重荷を下ろしました。

元五　イヤモう、大抵な骨折りではない。誠に龍が生きて居るやうに見えます。

三吉　次手ながら尋ねますが、わたしどもは近頃王子村へ引移りましたから、詳しい事は知りませぬが、王子村は淺草の觀音樣の、御領地と云ふやうな事でござりますかね。

甚五　されば、あの村は、叢雲の王子さまの御領地ゆゑ、それで王子村と呼べども、その昔金龍山の舊地であつたゆゑ、今でも百姓衆が觀音樣の、役を勤めに出ますわいの。

元五　アヽ、さう云ふ事かね。それで樣子が解りました。そして甚五郎どの、腹の痛みは、ちとようござりますかね。

甚五　忝なうござります。どうもまた痛みます。どうでも時候の惡いせいと見えます。

三吉　それは困つたものだ。時に、茶屋の御亭主、吉原の女郎屋、葛城屋とやらの寮が、この根岸にあつて、花魁達が今日引移りと聞いたが、それに違ひはないかね。

茶屋　ハイ、葛城屋の梅ケ枝さんと云ふ花魁が、病氣で居られましたが、本腹して今日引移りでござります。

元五　その噂を聞いたゆゑ、さぞ立派だらうから、わたしども見物しようと思つて、それにこの甚五郎どのは、生れついて堅いと云はうか偏屈と云はうか、まだ吉原へ行つた事はないと云はしやつたの。

甚五　イヤモ、女子と云ふものは、兩親が持たせてくれた嬶の外、女子の側へ寄つた事もないゆゑ、其やうな遊所なぞは、覗いて見た事もござらぬわいの。

三吉　サア、その堅苦しいお前ゆゑ、話の種に花魁を、見せようと思つて連れて來たのサ。

元五　モシ、茶屋の、その引越しは、もう追ツつけ通りませうかね。

茶屋　イエ〳〵、まだちつと間がござりませう。惡くすると、どうで夜に入りませうよ。

甚五　それ見さつしやれ。それだからわしは、腹は痛むし、開帳へ參つたから、早う歸らうと云ふを、爰まで引

ツ張つて來て、夜に入つては歸りが遲くなりますぞや。

三吉　さうサ。あんまり遲くなつては、皆内で案じやうから、もう直ぐに歸りませうか。

元五　折角これまで來たからは、見て行かうではござらぬか。

甚五　早く内へ歸つて、仕事の出來上がつた祝ひに、今夜はお二人に、酒を一杯振舞ひませう。

大一　それは有り難い。御馳走ならば、ちつとも早く歸りたいが、お前が腹が痛んでは、困つたものだ。見て行きたいは行きたし、どうしたものであらう。

ト矢張り右の鳴り物にて、橋がゝりより、權兵衞、使ひの形にて出て、三人を見て

權兵　オ、甚五郎どの、二人の衆も爰に居られたか。いい所で逢ひました。

三吉　お前は隣の權兵衞どの。どこへ行きなすつた。

權兵　イヤ、わしは元五郎どの、こなたの迎ひに廣德寺まで行つたところ、もう仕事を仕舞うて、歸らしやつたと聞いたから、定めて開帳參りから、この道通りと追ひかけて迎ひに來ました。

元五　そしてそれは、何御用でござります。

權兵　されば、萬屋の千右衞門どのゝ賴母子講が、急に今夜になりましたから、世話人衆がお前方の、迎へに行けと云はれたゆゑ、それで急いで來ました。

元五　それは大きに御苦勞でござります、そんなら直ぐに歸りませう。サア、甚五郎さん、そろ〳〵出掛けませうか。

甚五　アイ、行くは行きますが、最前から云ふ通り、腹が痛みますから、もう少し休んで行きませう。お前方、先へ歸つて下され。

三吉　それは困つたものだ。併し、お前一人置いて行くも氣がゝりだ。もう一服のんで、一緒に行きませう。

三吉　さうサ。日の暮れるに間はあるし、權兵衞さんを先へ歸つてもらつて、わたしどもは一緒に行きませう。

甚五　イヤ〳〵、これでは氣の毒ぢや。お前方は先へ行つて下され。斯う痛んでは、わしは駕籠に乘つて歸りませう。

三吉　それがよい。モシ、茶屋の御亭主、お世話ながら駕籠を賴んで下され。

茶屋　ハイ〳〵。駕籠屋は金杉にござります。呼んで來て上げませう。

三吉　どうぞ早く頼みます。

茶屋　ハイ〳〵、畏まりました。

　ト茶屋男、橋がゝりへ入る。

元五　ヤレ〳〵、腹の痛いを我慢しては歩かれぬ。ア、、なんぞ藥でもあればいゝ。

三吉　合憎持ち合はせもなし、困つたものだ。大方駕籠は今來るだらう。先へ行かうぢやアねえか。

甚五　どうぞさうして下され。大きにお世話でござりました。

元五　アイ〳〵、そろ〳〵先へ行きます。大事になされませ。

三吉　コレ〳〵、晩の約束を、又忘れなさるなよ。

甚五　イヤも、何もなけれど、待つて居ますぞや。

兩人　そんなら甚五郎どの。

甚五　靜かに行かしやりませ。

　ト右鳴り物にて、大工兩人、上手へ入る。甚五郎、思ひ入れ。

大きに世話でござりました。この間からの時候中りか、昨夜からしく〳〵痛み出したが、最前から、アイタ、、タ。ついにこんな事はないゆゑ、藥の用意もなし、困つたものだ。アイタ、、、。

　ト思ひ入れ。右の唄。橋がゝりより駕籠屋兩人、駕籠舁き、出て

駕一　モシ、駕籠にお乘りなさるゝは、お前さんかね。

甚五　オ、、駕籠の衆か。大きに御苦勞でござります。アイタ、、、。

駕二　サア、お乘りなされまし。モシ、どうぞなすつたのかね。

甚五　アイ、最前から腹が痛うて。アイタ、、、。

駕一　それは困つたものだ。藥でも上がりましたか。

甚五　その藥がなくて、難儀して居ります。

駕二　モシ、三の輪にいゝ萬金丹がござります。棒組、ちよつと買つて來て進ぜう。

　ト腰の錢入れを、取つて渡す。

駕一　アイ、直ぐに行つて來ます。

　ト駕籠屋一、錢入れを持ち、橋がゝりへ入る。

駕二　モシ、ちつと叩いて上げませうか。

甚五　そんならどうぞ、お頼み申します。アイタ、、、。

　ト捨ぜりふ、下の方にて、甚五郎の脊中を叩く。踊り地になり、上手より、以前の駒七三藏四十八石六先に、

梅ヶ枝、裲襠、駒下駄にて、一重に手を曳かれ、禿、
八重咲、後より仲居二人、新造一人、若い衆三人、長
柄を持ち、出て來り

駒七　コレサ、太夫、お頭の待ち兼ねだ。

四人　サア／＼、早く歩かつせえ／＼。

梅枝　モシ、わたしやちつと、爰で休んで行きたい。皆さ
ん、掛けなさんせ。

女皆　アイ／＼。

ト皆々、上手の床几へ掛ける。

駒七　これはしたり、さう落ちつかれてはならぬ。腹散々
身拵らへで幕を引ッ張り、やう／＼寮を出て、半町そこ
ら歩いたばかり

三藏　もう爰でお小休みとは、お供廻りが甚だ迷惑。

梅枝　それぢやと云うて、わたしやしんどうてならぬもの。

四十　もう追ッつけ日暮れ前だ。日のあるうちに大門へ、
道中姿で入れると云ふ、お頭の思ひつき。

石六　定めし頭は仲の町で、首を長くしてお待ち兼ね。迎
ひに來た四人の顏を立てゝ

四人　サア／＼、早く／＼。

梅枝　イエ／＼、まだ行かれぬわいな。

四人　そりや又なぜ。

梅枝　わたしが病氣の本腹するやうに、お行の松の不動樣
へ、願込めをした程に、お禮參りをして行くわいな。

一重　モシ、不動樣へは、今朝あれほど

梅枝　ア、コレ、この子とした事が、あれほど先刻不動樣
へ、お參りすると云うたぢやないかえ。

四人　おいら達も、一緒に行かう。

梅枝　イエ／＼、殿達と一緒に參つては、罰があたる程に、
お前方は先へ廓へ。

駒七　イヤ／＼、頭の云ひつけ。是非とも同道して行かね
ば。

梅枝　ならぬとあれば、今宵廓へ戻る事は、否でござんす。

四人　どうしたと。

梅枝　ハテ、お客であらうが親方さんでも、わたしが否と
云ふからは、今宵は愚か、いつまでも、戻る事はならぬ
ぞえ。

三藏　ア、コレ、それでも折角、頭の待ち兼ね。

梅枝　そんなら先へ行かしやんせ。

四十　然らば先へ參る程に、日の暮れぬうち。

四人　キッと廓へ。

梅枝　オヽくど。
四人　そんなら、太夫。
梅枝　ハテ、ござんせいなア。
石六　アイヽ。
　ト子役のやうに云ふ。
男一　エヽ、何を馬鹿な。
四人　サア、行かう。
　ト矢張り踊り地。四人、思ひ入れあつて、向うへ入る。
一重　モシ、花魁、また不動様へ、お參りなさんすかえ。
梅枝　なんのマア、今のやうに云うたのは、一緒に行くのがうるさいゆゑぢやわいな。
八重　わたしや又花魁が、ほんまに不動様へ、お參りなさんすかと思うて、嬉しうござんしたわいな。
仲居　イエ〳〵、不動様どころぢやござんせぬ。月大盡さまのお待ち兼ね。
同　お嫌ぢやあらうが、太夫さん、少しも早う。ナア、皆さん、
八重　さう云ふ事なら、もう黄昏、迎ひの見えぬ其うちに。
梅枝　皆も一緒に。
皆々　そんなら花魁。

梅枝　子供、來や。
禿　アイ……。
　ト賑やかなる出の鳴り物になり、若い衆、長柄をさしかけ、梅ケ枝、新造に手を引かれ、子役、女形、皆々若い衆、附いて、向うへ入る。この以前より、甚五郎、梅ケ枝を見て、腹の痛みを忘れ、顔に見惚れ、うつかりと跡を見送つて居る。此うち、駕籠舁き一、出て來り
駕一　モシ、藥を買つて來ました。お痛みはどうでございます。
駕二　サア、よろしくば、駕籠にお乘りなされませ。
兩人　申し〳〵。
　ト云へども、甚五郎、耳に入らぬ思ひ入れ。始終右の鳴り物にて、甚五郎、梅ケ枝の跡を、見惚れながら、そろ〳〵と、向うへ入る。駕籠舁き兩人、呆れ、顔見合はせ、モシ〳〵と云ひながら、駕籠を擔ぎ、附いて、向うへ入る。矢張り右鳴り物にて、知らせなしに、道具廻る。
　本舞臺、向う一面、田中の遠見。上手、編笠茶屋、

柳の立ち木、正面、所々、櫻の立ち木、日覆ひより吊り枝、下手も編笠茶屋、給心に飾り、すべて衣紋坂、下り口の體。右鳴り物にて、道具、靜かにとまる。

ト矢張り右鳴り物にて、梅ヶ枝、先に、女形皆々、若い衆附き、出て、捨ぜりふにて、舞臺へかゝり。跡より甚五郎、この後を、見惚れながら、駕籠舁き兩人、附き出る。上手より、幕明きの仕出し四人、捨ぜりふにて、梅ヶ枝を見ながら、甚五郎と行き違ふゆゑ、甚五郎、四人が邪魔になり、梅ヶ枝が見えぬ思ひ入れ。皆々を掻き分け、駕籠舁き附いて、舞臺へ來る。此うち、梅ヶ枝、皆々は、東の花道より、靜かに東の揚げ幕へ入る。仕出しは向うへ入る。此うち、甚五郎、舞臺よき所にて、伸び上がり〱、梅ヶ枝の跡を見送り、もう見えぬと云ふ思ひ入れにて、ホッと溜息を吐く。暮れ六ツの本釣り鐘。駕籠舁き兩人、思ひ入れ、下手へ向けて、駕籠を下ろし

兩人 申し〱。

ト甚五郎の脊中を叩く。これにて甚五郎、愕り、後向きに、駕籠の垂れ、ばらりと下りる。其まゝ駕籠を舁き上げるを、木の頭。甚五郎、駕籠の窓を明けるを、二度目の木の頭。甚五郎、東の向うを見詰める。本釣り鐘のだら、早めたる唄にて、よろしく

ひやうし 幕

大詰

吉原葛城屋の場
衣紋坂仕返の場

役名＝富士太郎知之。同下部、土子泥介。葛城屋仲居、不破のお關。同、お鶴。同、おさん。同およし。新造、一重。造り手、お爪。男達、望月駒七。同、鏡臺三藏。同、姥捨石六。同、田毎四十八、番新、八重咲。貸物屋、丹七。禿、ゆかり。船宿、筑波屋茂兵衛。葛城屋梅ヶ枝。淺間狹右衛門照政。

本舞臺、三間の間、赤塗りの大格子、上の方、一間の入口、葛城屋と記せし長暖簾、下の方、手桶を積みし用水桶、すべて吉原葛城屋格子先の體。爰に遣り手お爪、煙管を振り上げ、禿を折檻してゐる。前

幕の八重咲、新造一重、留めてゐる。下の方に、若い者、取りさへて居る。上の方に床几を直し、更科紬の男達駒七三藏四十八石六、一本差しにて腰を掛け、莨のみ居る。この見得、鳴り物入り、吉原雀の唄にて幕明く。

四人　サア、濟まねえぞ／＼。

若者　マア／＼、どなた樣も、お靜かになされて下さりませ。

駒七　イヤ、靜かにならねえワ。舞樂に秀でし月大盡、舞ひ御鏡の臨時會に

三藏　忝なくも鎌倉の、召しに隨ひ後の月、上京なして久し振り

四十　歸り廓の大一座、揚詰めにせし梅ケ枝が、雪とか吐かす浪人へ

石六　文の取遣りされた日にやア、男を磨く顏が立たねえ。

四人　それぢやア濟まねえぞ。

つめ　サア、その便りはこの小びつちよ。あなた方への云ひ譯に、腹の癒る程折檻して

八重　ア、コレ、禿子供を其やうにせずと

ゆか　もう堪忍して下さんせいなア。

若者　それ／＼、文の取り遣りしたにもせよ、この子が知つた事でもなし。

つめ　ナニサ、お前方の知つた事ぢやアない。折檻するは遣り手の役。どこがどこまで、取遣りの、洗ひ方せにやならぬわいの。

石六　オヽ、さうとも／＼。しかも慥かな證據と云ふは、先刻箕輪の土手續き

四十　新造どもにその小びつちよ、連れ立ち歸るを遠目でも

三藏　見たは違はぬ、梅ケ枝から、慥かに雪へ迎へ文。

駒七　今日一日はお頭に、買はれた身分でありながら、盜みを賣る氣に見えるわえ。

つめ　サア、遣り手のわたしに斷わらず、廓の外へ出て濟むか。新造衆とあるからは、お前方も一緒であらうがな。

八重　イエ／＼、なんのわたしらは、旦那さんにお願ひ申して、あの根岸の不動樣へ、お願ひがあつて月參り。

一重　その子も行きたいと云ふゆゑに、それで連れて行たのぢやわいな。

駒七　イヤ／＼、その手は食はぬ。信心參りに行つたとは、この場をくろめる一寸遁がれ。

三藏　誠は太夫の云ひつけで、間夫の男へ文詮索、迎へに遣つたに違ひはあるめえ。
四十　今日この店で梅ケ枝が、張り番しろと頭から、云ひつけられたこの四人。
石六　それゆゑ間夫へ小びつちよが、こつそり文を送つたを、見かじつたゆゑこの詮索。
つめ　そりやア現在この餓鬼の、口から云つたは根が正直。サア、雪さんへ花魁の、使ひに行つたと爰で云や。
八重　コレ〳〵、こなたの覚えの通り、不動様へ行つたと云や。不動様であらうがの。
ゆか　アイ、それに違ひはないわいな。
若者　それ〳〵、子供は正直だ。もう堪忍してやんなさいな。
つめ　エヽ、忌々しい、強情な餓鬼だぞ。よし〳〵、騙しで行かずば、この上に、小刀針の折檻しても。
　ト立ちかける。
八重　ハテ、もう好い加減に。
　ト立ちかける。出の鳴り物になり、お爪、禿を追ひ廻し、花道へかゝる。この時、向うより、お關、仲居の拵らへにて、箱ぶらを持ち、出て来り、花道にて、逃げ行く禿を圍ひ、お爪を留めて
せき　お爪どん、待たしやんせいなア。
　トこれにて、皆々、見て
駒七　ヤア、さう云ふ其方は
四人　仲居のお關か。
つめ　なんでこの場の折檻を。
せき　留めて出たのは花に風、女だてらに喧嘩買ひ、喧嘩にあらぬ折檻も、子供の事とは云ひながら、梅ケ枝さんの禿衆ゆゑ、皆さん方が荒々しう、打ち叩きをなさんしたら、おつな所から花に風。サア、月大盡さまのお望みを、散らさぬやうにこの折檻。不破のお關が留めました。皆さん始めお爪どん、わたしに預けて下さんせいなア。
　ト右の鳴り物にて、平舞臺へ来る。
若者　こりや好い所へ、お關どん。
一重　よう来て下さんしたなア。
駒七　イ、ヤ、例へお關が挨拶でも、料簡ならぬと云ふ譯は。
三藏　張りか意氣地か知らねえが、襟元知らぬあの梅ケ枝。
四十　来る夜も〳〵振り通す、病の元は雪とやら

石六　その間夫狂ひも根強く、今も今とてこの餓鬼が
つめ　文く使ひをしたゆゑに、それでわたしがこの場の折檻。
せき　ハテ、そりやさうでもござんせうが、そこを柳になさんして、花を咲かせる仕樣はいろ〳〵。兎角木折りで行かぬが緩路。皆さん方も譯知つた、粹のやうにもござんせぬ。もう好い加減になさんせいなア。
駒七　ムウ。一旦達師が云ひ出して、料簡し憎い所なれど
三藏　頼む其方の云ふ通り、あの梅ヶ枝が禿ゆゑ
四十　此奴を責めたら飛ばツちりが、どこからかゝつて、その時は、
石六　頭の望みもちや〳〵むちやく。こりや料簡を、せずばなるまい。
駒七　コレ、お爪、もう小びつちよを、赦してやりやれ。
つめ　イエ〳〵、どこがどこまで洗ひ方と、云ふを云はぬは花魁の、機嫌をわたしも損ねては、何かにつけて大きな出入り。あなた方さへよいならば、今日の所は赦す程に、重ねて氣を附けや。ホヽ……ほんにわたしや、餘ッぽど甚助強い生れぢやわいな。
八重　それ〳〵、ゆかりや、堪忍してやると云はしやんす程に、泣き顔せずと早う行きや。
ゆか　アイ〳〵。
若者　又爰にゐたら叱られうぞえ。そして、日暮れの事なれば、お部屋でも、たんと御用があらうわいの。
せき　サア、機嫌直して、早く〳〵。
ゆか　アイ〳〵。
つめ　エヽ、まだ吠えて居るのか。大概にしや。イヤ、大概と云へばあなた方も、もう張り番は大概にして、氣附けに二階でわつさりと、御酒になされてはどうでござります。
せき　ほんにそれがようござんす。わたしもお相を致しませうわいな。
駒七　そんならこの場はこれぎりに
三藏　これから二階で君達の
四十　手柄はし勝ち引きつけて
石六　さへつ押へつ、分捕り高名。
駒七　組打ちなどはおいらが得手物。
ト八重咲に抱きつく。
八重　また悪洒落な事ばかり。
四人　そんならお關。

せき　ドレ、御一緒に。
四人　サア、酒だ〳〵。
ト吉原雀の唄になり、この人數、殘らず暖簾口へ入る。トこの唄にて、向うよりお鶴、仲居の形にて出て來る。跡より泥介、着流し、一本差し、小さな箱提灯を、疊み提ぎ、出て來り、花道にて
つる　モシ〳〵、お前は泥介さんぢやござんせぬかえ。
泥介　オヽ、お鶴どのではござらぬか。
つる　後から見て、よう似たお方ぢやと思うたら、矢張り違はなんだ。ほんに粹な風ぢやわいなア。
泥介　コレサ、さう煽てちやアよくあるめえ。粹で水際の立つた女は、お前に限る奴よ。
つる　又そんな世辭ばつかり。
泥介　イヤ、世辭やこまとやらではない。
つる　エヽ、モワ、其やうな事云はずと、一緒にござんせいなア。
泥介　イヤ、逆行とは有り難いわい。ハヽヽヽヽ。
ト矢張り右の唄にて、本舞臺の方へ來り、床几へかけて
つる　さうして今日は、雪さんのお使ひにござんしたのかえ。
泥介　イヤ〳〵、旦那のお迎ひに參つたのぢや。
つる　何を云はしやんす。まだ雪さんは、お出でなさんせぬわいなア。
泥介　なんの、お出でなされぬ事があるものか。今朝早くからお出でなされたのに。
つる　それぢやと云うて、お出でなさんせぬものを。
泥介　そんならもしや筑波屋へ。何にしろ、ちよつと尋ねて見て下され。
つる　アイ〳〵、見て來て上げる程に、そこに待つてなさんせえ。
泥介　合點ぢや〳〵。
つる　ドレ、尋ねて上げようかいな。
ト矢張り右の唄にて、お鶴暖簾口へ入る。泥介、跡見送り、
泥介　ハテナア。なんでもこちらへ、お出でなされた筈だが。
ト思ひ入れあつて
それにつけてもこの程より、梅ケ枝太夫を揚詰めの、月大盡こそ親旦那の、正しく敵と知れてはあれど、これぞ

と云ふ證據なければ、名乘り合せて討つ事ならず、それゆゑ筑波屋茂兵衞どの、わざと敵へ取入つて、とくと實否を糺す計略。どうぞ首尾よく御本望、遂げる仕樣が、ありさうなものぢやなア。

ト腕を組み、思案の思ひ入れ。暖簾口より、お鶴、出て、泥介の脊中を叩き

つる　何を考へて居やしやんすぞいなア。

泥介　エ、、悸りしたわい。

つる　モシ、雲さんはお出でなさんせねど、花魁がお前に逢ひたいと云はしやんすゆゑ、ちやつとござんせいなア。

泥介　そんなら旦那は、いよ／＼まだか。

つる　イエ、八重咲さんの云はしやんすには、是非お出でなさんす筈ぢやといな。

泥介　それぢやア旦那のお出でまで、部屋でゆるりと待ちませうか。

つる　それがようございすわいな。

ト泥介、立ち上がり、思ひ入れあつて

泥介　もしや今の一大事を。

つる　エ、、一大事とは。

泥介　それなら知らぬか。

ト安堵の思ひ入れ。

つる　イエ、知つて居るわいな。

泥介　エ、、そりや何を。

ト悸り思ひ入れ。

つる　八重咲さんに惚れてゐやしやんすを。

泥介　矢ッ張り知らぬか。

つる　イエ、知つて居るわいな。

泥介　なんの事だ。ハ、、、、、。

つる　サア、ござんせいなア。

ト矢張り吉原雀の唄にて、兩人、暖簾口へ入る。この唄にて、道具、廻る。

本舞臺、一面の平舞臺、向う暖簾、上下、塗り骨の大障子、櫛形の欄間、すべて大座敷の體。踊り地にて、道具、とまる。

ト矢張り右の鳴り物にて、奥より男達四人出て來り

駒七　なんと、女郎の部屋も窮屈だ。爰でわつさり飲み直さうぢやアねえか。

三藏　その事／＼。どうで今夜は呑み明かしだ。コレ／＼、女ども、酒だ／＼。

仲居　アイ〳〵。

　ト奥より、おさん、およし、仲居にて、酒肴を持ち、出て來り

さん　オヤ〳〵、今お積りになつたのに、又お始めさなるかえ。

四十　知れた事だ。女郎にや可愛がられず、酒でも飮まにやア詰まらねえ。

よし　イエ〳〵、其やうに御酒をあげると、花魁方に叱られますわいな。

石六　エヽ、お爲ごかしの盗意見、誰れが構ふ奴がある者だ。

駒七　なんでもいゝから、始めろ〳〵。

　ト杯を取る。およし、酌をする。

三藏　この頃頭に胡麻を摺り、どこへ行くにもお側去らず。時に、合點のゆかねえは、あの船宿の筑波屋茂兵衞。

四十　これまで四人が口說いても、挺でもいかねえ梅ケ枝を

石六　どうか彼奴がこぢつけて、今夜頭に取持つさうだ。

駒七　それに又、仲居のお關も、太夫と頭を寢かすと云ふが

さん　それでは茂兵衞さんとお關さんは、取持ちの威勢爭ひでござんすね。

よし　そりや茂兵衞さんの、口說き上手には、叶ふまいわいな。

さん　ほんにあの茂兵衞さんは、氣障がなうてすつきりと、好いお方でござんすなア。

よし　オヤ、きつい惚氣やうぢやわいな。

駒七　サア〳〵、その口へ吞んだり〳〵。

さん　イエ〳〵、わたしやいけぬわいな。

　ト嫌がるおさんに、捨ぜりふにて、無理に酒を注ぐ。矢張り踊り地にて、奥より以前の泥介、出て來り

泥介　イヤ、旦那のお供でたま〳〵來るゆゑ、勝手の知れないこの二階、どつちへ行つてよからうやら。ハテ、困つた事ぢやわい。

　ト云ひながら、花道の方へ行きかける。四人、これを見て

四人　ヤイ〳〵、奴め、待ちやアがれ。

　ト泥介、思ひ入れあつて

泥介　待てと云はつしやるは、わしが事かえ。

四人　知れた事だ。

泥介　ついぞ近附きでもないお人。なんぞ用でもござりますか。
石六　オヽ、用があるから呼んだのだ。
四人　マア、下に居ろえ。
泥介　ヘ、イ。
ト合ひ方になり、泥介、よき所へ住ふ。兩人、泥介を見て
さん　ヤ、お前はいつも雪さんの
よし　お供にお出での奴さん。
兩人　悪い所へ
四人　イヤ、ようせたなア。
トこれにて、泥介、思ひ入れ
駒七　コレ、奴さん、わりやア盲目か知らねえが、いま廓おやア隠れのねえ
三藏　更科組と立てらるゝ、おいらが酒宴のこの座敷へ
四十　どう云ふ譯で挨拶なく、なぜ泥臑で踏ん込んだ。
石六　喧嘩を買ひにうせたのか。こりや此まゝにやア濟まされねえ。
泥介　これは〳〵、左樣な名だゝるお方とは知らず、廓の勝手を存ぜぬ儘、うか〳〵入りし不調法、田舍者ぢやと思し召し、眞平御免下さりませ。
ト泥介、手を突き、思ひ入れ。
さん　アレ、あのやうにあやまつておや。
よし　赦してお上げなさんせいなア。
駒七　イヽヤ、頭から戀の遺恨ある、雪とやらが下郎なら
三藏　只は赦さぬ所なれど、廓の勝手を知らぬ奴。
四十　相手にするも大人氣ない。更科組の名折れゆゑ
泥介　すりや、お料簡下さりまするか。
男四　オヽ、赦してくれる、その代り、近附きがてらに一杯吞みやれ。
孃介　ヘイ、有り難うはござりまするが、
駒七　更科組の酒は吞まぬか。
泥介　全く以て。
石六　さうでなければ、これで吞みやれ。
ト大平の蓋を、突きつける。
泥介　エ、アノ、これで。
石六　オヽ。更科組の姥捨石六。
駒七　望月駒七。
三藏　鏡臺三藏。
四十　田毎四十八。以後の近附き

四人　なみ〳〵呑みやれ。
泥介　それぢやと云うて
四人　呑まざア四人が、相手にならうか。
泥介　サア、それは
四人　キリ〳〵呑むか。
泥介　サア
四人　サア
皆々　サア〳〵〳〵
四人　呑みやアがれ。
トきつと云ふ。泥介、當惑の思ひ入れ。矢張り踊り地にて、橋がゝりより、呉服屋手代丹七、包みを脊負ひ出て來り
丹七　どうぞ雪さまに、逢ひたいものだが。
ト泥介を見て
オヽ、さうだ。お前は雪さまの奴どのだの。どなたも御免なされませ。イヤ、こなたは〳〵、太い人だ。旦那どのとこなたの着物、金も拂はず吉原三界、着て歩かれて堪るものか。サア、女郎を買ふ金があるなら、後とも云はずたつた今、耳を揃へて拂はつせえ。それとも金がないならば、身ぐるみ脱いで返さつせえ。

泥介　これはしたり、粗相を云はしやるな。過分の手附けが渡してあるて。
丹七　イヤ、手附け〳〵と大笑ひだ。五兩や三兩の端下金で、のめ〳〵着られて堪るものか。サア、脱いでもらひませう〳〵。先づこなたから、キリ〳〵脱いでもらひませう。
駒七　なんと、呆れたものぢやアねえか。よしや風だの丹前だのと、古代模樣の伊達小袖も
三藏　僅かな金で呉服屋を、馬喰町の旅籠屋とは、押しの重たい素浪人。
四十　ハアヽ、苅豆屋と云ふ事か。そんな太え事をして、派手な形をしようより
石六　赤合羽でも引ッ掛けて、鳥脅しでもすりやアいゝに、
四人　ハヽヽヽヽ。
丹七　サア〳〵、奴どの、金が出來ずば脱ぎなせえ。
泥介　サア、こなたの云ふのも尤もだが、どうぞ明日まで
丹七　イヤ〳〵、明日どころか半時も待たれねえ。
泥介　サア、さうではあらうが、
丹七　エヽ、しつこい。キリ〳〵と脱ぎなさいな。
ト泥介、捨ぜりふにて詫びるを、丹七、構はず、着物

を脱がせる。泥介、襦袢一つになる。丹七、着物を風呂敷に包み

これでこなたは元々だが、旦那の殘りが四兩二分、今渡してもらひませう。

泥介　でも、今と云つては

丹七　出來ないのか。

泥介　サア。

丹七　出來ざアこれも仕方がない。百貫の抵當に笠一蓋、ドレ、襦袢でも引ッ剝いで。

ト泥介へかゝる。この時、後へ茂兵衞、船宿の亭主、派手な拵らへにて出て、丹七を突き廻し、見事に投げる。

アイタ……。

トこれにて、皆々、茂兵衞を見て

駒七　ヤ、誰れかと思やア

四人　筑波屋茂兵衞が。

茂兵　皆さん、御免なされませ。

ト眞中へ住ふ。丹七、起き上がり

丹七　アイタヽヽヽヽ。コレ、なんでおれを投げたのだ。

茂兵　何か樣子は知らねえが、些細な事でこのお方が、いかい難儀をさつしやるを、見て居られぬがわしが病。不肖ぢやアあらうが茂兵衞が挨拶。この金持つてこなさんは、夜の更けぬうち歸らつしやれ。

ト紙包みの金を、抛り遣る。丹七、開き見て

丹七　ヤ、こりやア小判で丁度五兩。

泥介　ア、モシ、お前にその金、出させては

茂兵　ハテ、なんであらうと、マア、任せて置かつしやれ

ト押へて

イヤ、吳服屋どん、それで足りずば殘りの金は、何時でも茂兵衞が內へ、書附け持つて取りにござれ。

丹七　イエ〳〵、お手附けを引きますれば、これでお釣が餘ります。

茂兵　釣が來るなら骨折り賃、莨でも買ひなせえな。

丹七　ヘイ〳〵〳〵、それは有り難うござります。ヘ、ヽヽ、ヽ、奴さん、また御用があるなら、お賴み申します。ヘ、ヽ、ヽ、ヽ。イヤ、私しは、もうお暇いたしませう。えて斯う時は竹篦返し、打たれた上に損もあらうかと、唄を讀むのも古いから、ドレ、新らしく歸りませう。

ト丹七、橋がゝりへ入る。

駒七　サア、其方が濟んだら、下司奴。

三藏　この杯はどうするのだ。

ト泥介へ杯を突きつける。

茂兵　イヤ、この杯は、マア、待ちやれ。

四人　なんでお主が、留め立てするのだ。

茂兵　ハテ、なんでとは知れた事。呑めるものならいざ知らず、下戸に强いるは大きな野暮。それで茂兵衞がこの杯、ちよつとお相と出掛けました。

駒七　イヽヤ、ならねえ、その奴は、雪とやら云ふ間夫が下部。

三藏　この葛城屋に居るからは、慥かに雪めも一緒にて

四十　月大盡の揚詰めの、梅ケ枝太夫が横盤を

石六　切りにうせたに違ひはない。それぢやに依つて

四人　免されぬのだ。

茂兵　そりやア云はゞ小さな料簡。月大盡が梅ケ枝を、揚詰めにして置いても、雪とやらとは深い仲、手引きがあらうがあるまいが、間夫に逢ふのが勤めの樂しみ。それを遺恨に根も葉もない、些細な喧嘩は仲間の名折れ。弱い者をば助けるが、男を磨く達師の意地。及ばずながら筑波屋茂兵衞、情は情、喧嘩は喧嘩。梅ケ枝太夫の事ならば、月大盡の立つやうに、間夫があるなら突き出させ、例へ三日が一日でも、淸く心に隨ふやう、口說き落して見せませう。それぢやに依つて何事も、この場はわしに預けてと、サア、出過ぎた事も持ち前の、入らぬお世話の苦勞性、腹も立たうが、わしも出面、爰は器用に預けて下せえ。

駒七　ムウ。イヤ、どうあつてもと云ふ所だが

三藏　お爲ごかしの、ぬらくら挨拶。

四十　鰻登りに乘せられて

石六　この場はお主に

四人　預けてやらうワ。

茂兵　そりやア何より、嬉しうございます。

さん　サア、茂兵衞さんの挨拶で、この場が濟めば奴さん。

よし　早う勝手へござんして、酒など呑んで、あの、お方の。

茂兵　ア、コレ、物數云はずと早う奥へ。

泥介　なんとお禮を申さうやら、エヽ、忝ない、茂兵衞どの。

ト泥介、茂兵衞、思ひ入れあつて

茂兵　ハテ、何事も。サア、わしに任せて、みんなも奥で

四人　緣起直しに

茂兵　呑み明かさうかい。

四人　そんなら茂兵衞。

茂兵　マア〳〵、先へ。

四人　ドリヤ、行かうかい。

仲居　サア、ござんせいなア。

ト踊り地にて、男達四人、おさん、およし、附いて奥へ入る。茂兵衞、泥介、殘りて、あたりへ思ひ入れあつて、衝立に掛けある振り袖を取り

茂兵　泥介どの、着憎からうが、これを着なせえ。

ト引ッ掛ける。

泥介　イエ〳〵、これでよろしうござりまする。

茂兵　ハテ、裸ぢやア見つともない。

ト無理に着せる。

泥介　左樣なら少しのうち、借用いたします。

ト泥介、捨ぜりふにて、着てして、何かの事は。

茂兵　コレ。

トあたりへ思ひ入れあつて、泥介に囁く。

泥介　ムウ、すりや、梅ケ枝どのと云ひ合せ。

茂兵　紛失なせし二品を

泥介　今宵のうちに

茂兵　詮議の的は

泥介　淺間狹右衞門。

茂兵　コレ、密かに〳〵。

ト兩人、思ひ入れ。吉原雀の唄にて、この道具廻る。

本舞臺、上手二間、中足大和葺きの亭屋體。茶壁、床、違ひ棚、前側、障子たてきり、下手、九尺、常足の屋體、赤壁、障子たてきり、正面、奥座敷の體、土橋を掛け、舞臺前まで、泉水。よき所より、振りよき〳〵、泉水へ差出しの枝、櫻の立ち本、同じく吊り枝、日覆より、月を出し、すべて葛城屋離れ座敷の體。合ひ方。

ト直ぐに、誂らへの獨吟になり、よき程に、上手の屋體、障子、引抜く。内に淺間狹右衞門、羽織衣裳、好みの拵らへ、刀掛けへ大小を掛け、短檠を照らし、脇息に靠れ、見臺に向ひ、本を見て居る。よき程に、唄一くさり切れる。右の合ひ方、蟲の聲。狹右衞門、琴に聽き惚れる思ひ入れ。

狹右　一聲の鳳管は、秋泰嶺の雲を驚ろかし、數柏の霓裳は緱候山の月を送ると、詠み連ねたる唐歌に、面影映す糸竹の、實にも優しき、あの一節。朧の月も雲隱れ。ハテ心憎き風情ぢやなア。

トまた月を隱す。また唄になり、狹右衞門、思ひ入れあつて、床の間の笛を取つて來り、思ひ入れあつて、琴に合はせて調べる。よき程に、下の屋體の障子、引拔く。内に、梅ケ枝、傾城、好みの拵らへ、短檠を照らし、琴を彈いてゐる。よき程に、唄、切れる。梅ケ枝、笛の音に、思ひ入れあつて

梅枝　忍び路の、しるべともなる笛の調べ。如何なる人のすさみなるか。心耳を澄ます、あの音聲。聞くにつけてもこの身ほど、便り少なき川竹の、ほんに辛氣な身の上ぢやなア。

トまた唄になり、狹右衞門、そろ〱下りて、庭下駄を穿き、笛を吹きながら、泉水の側へ來る。梅ケ枝、笛の音の近附くに、思ひ入れあつて、琴を止め、庭下駄を穿き、そろ〱泉水の側へ來る。狹右衞門、琴の止みしゆゑ、笛を止め、下の方を窺ふ。梅ケ枝も上の方を窺ふこなしあつて

梅枝　それにお出でなさんすお方、先程よりの優しい笛の音色。憚りながら、今一曲お聽かせなされて下さんせいなア。

狹右　これは〱、痛み入つたるお詞。梁の塵も踊るべき今の爪音、妙なる曲に心浮かれ、揃はぬ調子も好きの道、妨げいたして近頃氣の毒。

梅枝　なんのマア、賤しい勸めの浮かれ女が、聽きも及ばぬ面白さ。

狹右　イヤ〱、月も恥づべき糸の淸濁、御苦勞ながら次の唱歌を。

梅枝　どうぞあなたのお調べを。

狹右　イヤ、そもじの曲を

梅枝　是非にま一度

狹右　所望がしたい。

トこれにて、月、出て、兩人、顏見合せ

梅枝　ヤ、お前は、月さんぢやござんせぬか。

狹右　さう云やるは梅ケ枝太夫か。

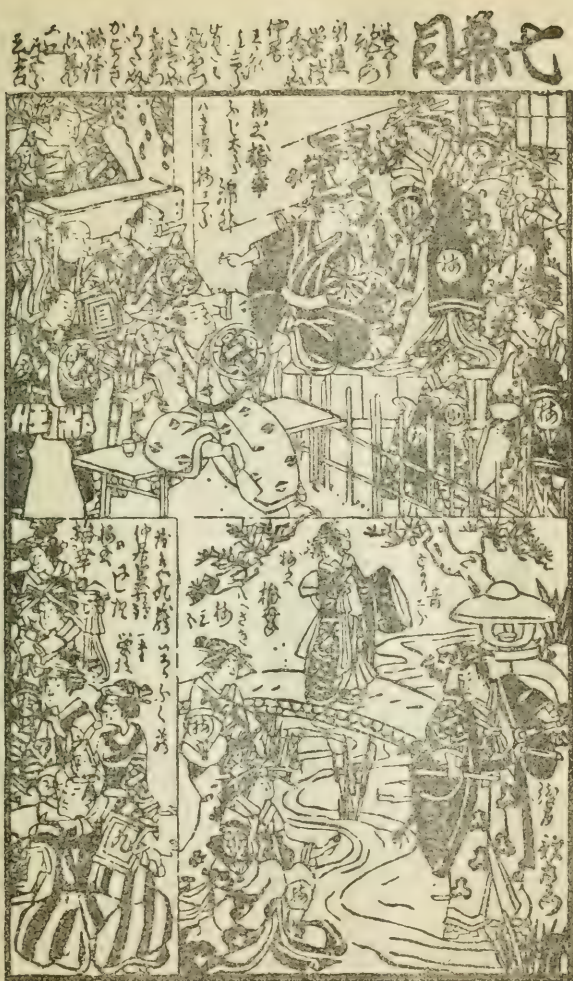
梅枝　そんなら今の笛竹は

狹右　最前からの一曲は

梅枝　月さんか。

狹右　梅ケ枝か。
梅枝　なんの事ぢやぞいなア。
ト思ひ入れ。また唄になり、下の屋體より、八重咲、出て來て
八重　モシ、花魁、端近くへ出て、何をしてお出でなさんす。
梅枝　わたしや笛の音……サア、泉水の蛙の聲を、聞いてゐたわいなア。
八重　そんな事より、ちやつと身仕舞ひをなさんせいなア。
梅枝　それでもわたしや
八重　ハテ、ちやつとござんせいなア。
梅枝　エヽモ、忙しない、靜かにしなさんせいなア。
ト唄になり、梅ケ枝、八重咲、屋體へ戻る。此うち狹右衞門も屋體へ戻り、手を打つ。奧より、禿、出て來る。狹右衞門、床の間の料紙、硯を持つて來いと云ひつける。禿、取つて來る。此うち八重咲、鏡臺を、梅ケ枝の前へ直す。狹右衞門、短册に、歌の上の句を書き、件の笛と一緒に、袱紗に包み、禿に渡して、囁く。禿、呑み込み、庭へ下りる。此うち八重咲、梅ケ枝の髮を撫でつけ居る。禿、正面の土橋を渡り、こちらの屋體へ來る。これにて、唄、切れる。
ゆか　申し、花魁、月大盡さんがこの笛を、お前に上げいと、云はしやんしたわいなア。
ト笛を出す。梅ケ枝、思ひ入れ。
梅枝　なんと云やる。月大盡さんがこの笛を。
禿　ちやつと見やしやんせいなア。
トまた唄になり、梅ケ枝、袱紗を明け、短册の歌を見て、いろ／＼思ひ入れ。硯を取つて來いと云ふゆゑ、八重咲、硯箱を出す。梅ケ枝短册へ、下の句を書き、また袱紗に包み、禿、また土橋を渡り、上の屋體へ來る。此うち、梅ケ枝は、短册を眺め居る。よき程に、唄切れる。
申し月さん、お志しは嬉しいけれど、此まゝお返し申しますと、花魁の素氣ないお返事。
ト出す。狹右衞門、思ひ入れ。
狹右　ムウ。茨の花は手折り難しと、誰れやらが口吟み、情を知らぬ氣強い梅ケ枝。
ト袱紗を明け、短册、持つてゐるゆゑ、開き見て、讀み下し、思ひ入れあつて
返歌は今の一首の下の句。これではまんざら……コレ、

初演の

繪番附

其方はお關に、

ト禿に囁く。禿、呑み込み、奥へ入る。狭右衛門短冊を持ち、そろ〳〵下りて、泉水の側へ來る。梅ケ枝も短冊を持ち、庭へ下りる。八重咲、心得ぬこなしあつて、附いて下りる。梅ケ枝、泉水の側へ來て

梅枝　たぞ知らぬ面影山の春霞

狭右　引く甲斐あらば、ほだしともあれ。

梅枝　面影山の春霞

狭右　引く甲斐あらば

ト知らせにつき、月、隱れる。

梅枝　月も雲間に

狭右　思へば本意ない

梅枝　ほだしも切れて

狭右　ヤ。

ト泉水より水鳥、數多、引いて取る。兩方より透し見て、兩人、泉水の側へ、よろ〳〵とする。八重咲、思ひ入れ。

八重　ア、モシ、危ない。

梅枝　ほんに辛氣な。

トとひよ。

狭右　不粹な雲なア。

ト唄の納まりて、兩人、本意なき思ひ入れ、この仕組みよろしく、道具廻る。

本舞臺、三間の間、常足の二重、向う茶壁、櫛形の欄間、二重に短冊を照らし、六枚屏風を立て、爰に新造一重、禿、仲居おさん、およし、床を敷き、煙草盆など直し居る。右の合ひ方にて、道具納まる。

一重　コレ、およしどん、あのお關どんの云ひ附けで、この座敷へ床を取れと云はしやんしたが、

さん　こりや一體、どのお客のお床でござんすえ。

よし　月大盡さんが梅ケ枝さんを、口說いて居やしやんしたところ、慥かお關どんの取持ちで、花魁が得心しなんして、今夜爰へ寐さんすとの事ぢやぞえ。

さん　それでは雪さんが聞かんしたら、大抵ではござんすまい。

一重　サア、それも大方お關どんが、呑み込んでの事でるらうわいな。

トこの時、奥にて

つめ　サア〳〵、泥坊だ〳〵。

ト ばた〳〵になり、奥より遣り手お爪、泥介を引摺り出て來る。跡より仲居二人附いて出る。

さん　コレ〳〵、お爪どん、仰山らしい。

よし　なんでござんすぞいなア。

つめ　なんだところ、大膽な。この部屋から盜んだか、新造衆の振り袖を、コレ、この通り引ッ張つて、廊下をまご〳〵して居たは、大概知れた枕探し。

泥介　ア、コレ〳〵滅相な。なんでわしが盜みをば

つめ　なぜせぬ者が振り袖を、そぐはぬ形に着てゐたのだ。

泥介　サア、これは最前、餘儀ない譯で、わしが着物を取られしゆゑ

つめ　なんと。

泥介　借り受けましたのでござります。

つめ　ムウ。借り受けたとは。そりや誰れから。

泥介　サア、筑波…イヤサ、ついその名をば忘れました。

つめ　エ、借りたとは云ひ譯は暗い。なんでも泥坊だ泥坊だ。

さん　ア、コレ、お爪どん、そりや借りなさんしたに、違ひはござんすまい。

一重　どう云ふ譯か知らぬけれど、主に限つて其やうな

よし　盜み騙りをしなさんせぬは

ほう　皆わたしらが好い證人。

仲二　もう堪忍して

皆々　あげなさんせいなア。

つめ　イエ〳〵、なんぼお前方が贔屓をしても、こればつかりは赦されぬ。先刻二階の部屋々々で、ヤレ、紙入れだの煙管だの、櫛簪がなくなつたと云ふは、斯う云ふ泥坊が枕探しをするゆゑだ。そりやモウ、二階の物は仕方もないが、お客の物が塵ッ葉一本、違ひがあつては遣り手が濟まぬ。それぢやに依つて詮議するのだ。

泥介　エ、云はして置けば、樣々の惡口雜言。それには なんぞ證據があるか。

つめ　證據と云ふはこの振り袖。なんでこれを着てゐたのだ。

泥介　サア、それは。

つめ　よもや貸し手はあるまいがな。

ト この時、八重咲、後に窺ひ居て

八重　イエ、その振り袖の貸し手がござんす。

皆々　ヤ、お前は八重咲さん。

つめ　貸し手があるとは、そりや誰れぢやえ。

八重　アイ、外でもござんせぬ、花魁でござんす。
つめ　エヽ、すりや梅ケ枝さんが。
八重　貸したが悪うござんすかえ。
つめ　サア、それは。
八重　物を借りたが泥棒なら、お前も泥棒でござんすぞえ。
つめ　そりや又なんで。
八重　なんでどころか花魁から、一兩々々幾度か、お前、泥棒でござすぞえ。
つめ　サア。
さん　ほんに、これ〳〵、わたしが帯を、去年の暮れから二年越し、今に返さぬ泥棒さん。
よし　わたしも袷に單衣物、ちよつと〻云うてそれつきり。これも泥棒でござんすか。
仲一　まだその上に蒔繪の櫛、松葉流しの簪泥棒。
一重　寒いにちよつと、襦袢泥棒。
仲二　鼻緒が切れて下駄泥棒。
ゆか　わたしが貰つた百錢まで、たうとう返さぬ大泥棒。
　ト皆々、遣り手を取卷き、喧ましく云ふ。
つめ　アヽ、コレ〳〵、もう泥棒はやめだ〳〵。
八重　そんなら主も、泥棒ではござんせぬか。
つめ　ないとも〳〵。わしと同じやうな、正直正路な人ちやわいの。
八重　ほんにお前は
皆々　正直さうぢやわいなア。
つめ　みんながさう云ふわいの。ホヽヽヽ。
　ト思ひ入れあつて
オヽ、さつぱりと忘れてゐたが、奥の客にお座敷を、泥棒して來ねばならぬ。
皆々　ナニ、泥棒とはえ。
つめ　エヽ、かぶれた奴サ。
　ト合ひ方にて、お爪、奥へ入る。皆々、跡見送り、
皆々　ほんに、好い氣味でござんしたなア。
　ト泥介、思ひ入れあつて
泥介　これは〳〵、お前方の執成しで、思はぬ難儀を遁がれました。何を云ふにもこの振り袖、茂兵衛どのから借りたゆゑ、名前を出してよい事やら、悪い事やら知れぬゆゑ、云ひ譯せうにも云ひ譯ならず、びつしより汗になりました。
八重　サア、わたしもさうと知つたゆゑ、花魁の名で脅しかけ、貸したと云ふは、ほんの間に合ひ。

さん　流石は八重咲さん、きついものでござんすなア。
八重　エヽモウ、氣恥かしうござんすわいな。
泥介　イヤ／＼、人を助ける當意卽妙、どうでも廓の育ちだけ、只の女子の及ばぬ事だ。
八重　オヤ、お前までが同じやうに。
泥介　こりや追従ではない、禮を云ふのぢや。
八重　なんの事ぢやぞいなア。
ト此の時、バタ／＼になり、向うより幕明きの若い者、走り出て來り、花道にて
若者　モシ／＼、八重咲さん、いま雪さんがお出でなされましたが、こちらへお連れ申しませうか。
八重　アイ、座敷は月さんゆゑ、爰へお連れ申して下さんせ。
若者　アイ／＼。
ト引返して入る。泥介、思ひ入れあつて
泥介　ヤア／＼、そんなら爰へ旦那樣が、お出でなされるか。こりや、この形ではお目にかゝれぬわえ。
八重　モシ、お前はわたしと、奧へござんせいなア。
仲居　ほんに、それがようござんすわいな。
八重　そんなら雪さんを、お賴み申しますぞえ。

一重　わたしや花魁に、お知らせ申すわいな。
八重　サア、泥介さんはわたしと一緒に。
泥介　御苦勞ながら
八重　サア、ござんせいなア。
ト流行り唄にて、泥介、八重咲、新造、禿、奧へ入る。向うにて
若者　マア／＼、こちらへお出でなされませ。
ト唄になり、向うより太郎、羽織衣裳、好みの拵らへ禿に手を引かれて、若い者、附き、出て來り
太郎　アヽ、誰れやらが發句に、闇の夜も吉原ばかり月夜かな、とは、よう云ひ叶へた廓の賑ひ。實に不夜城とも云はうかい。
若者　それに又この節は、觀音樣のお開帳ゆゑ、一倍賑やかでござります。
太郎　それはさうと、梅ヶ枝は客か。
若者　へイ、更科組のお客樣が
太郎　ムウ、すりや、淺間に。
若者　エ。
太郎　イヤ、朝は早う、起してくりやれ。
若者　畏まりました。

禿　サア、雪さん、早うござんせいなア。
太郎　エ、、忙しない。いま行くわいの。
ト右の唄にて、本舞臺へ來る。
さん　これは雪さん。
四人　ようお出でなさんしたなア。
太郎　オ、、皆揃うて居やつたか。さて、この間は逢ひませぬの。
四人　ほんに、久しうお出でなさんせなんだなア。
太郎　サア、來たうて／＼ならぬけれど、知つての通り揚げ代の、勘定濟まぬそれゆゑに、二階を堰かれて後の月、根岸の寮で逢うたぎりゆゑ、早う來たう思うたところ、あの梅ヶ枝が才覺で、やう／＼濟んで二月越し、晴れて廓の馴染みの顏、見るやうになつたわいの。
よし　サア、其やうに承りましたゆゑ、先刻にからあなたのお出でを
仲一　梅ヶ枝さんは云ふに及ばず
仲二　皆待ち兼ねて居りました。
太郎　ほんに、さうであつたかいの。これはさうと梅ヶ枝は、客ぢやさうだの。
よし　ハイ、折惡しう揚詰めの。
太郎　ムウ、月とやらが來てゐるか。
さん　ハイ、居續けでござんすわいな。
太郎　イヤ、さう聞いては油斷がならぬ。わしが堰かれて來ぬうちに、梅ヶ枝が月とやらに、抱かれて寐はせぬかいの。
さん　これはしたり、雪さんとした事が、あのやうに嫌うてござんす梅ヶ枝さん
仲一　いつもお座敷ばかりぢやわいな。
太郎　キツとそれに違ひはないか。
仲二　そりや皆が、證人でござんすわいな。
太郎　イヤ、受取り憎い證人ぢやわいの。
皆々　ホ、、、、ハ、、、、。
若者　イヤ、それどころぢやござりませぬ。あなたのお出でが遲いゆゑ、先刻にから花魁は、大癇癪でござりますぜ。
太郎　そりや又なんぞ、怒つてゐるか。
さん　イエ／＼、いつもの癇癪ゆゑ、あなたと云ふお醫者樣の、お顏を見れば藥より、直おさまるは知れた事。
太郎　エ、、また煽て居るか。
さん　イエ／＼、ほんまの事でござりますわいな。

太郎　そんなら早う、皆の者。
皆々　今宵はしつぽり
よし　梅ケ枝さんと
太郎　エヽ、のろい奴なア。
皆々　サア、お出でなさんせいなア。
ト吉原雀の唄にて、太郎、先に、おさん、およし、若い者、禿、奥へ入る。仲居両人殘り
仲一　ドレ、わたしらは、お床を敷いたを、お鶴どんに
両人　知らさうわいな。
トこの時、奥にて
つる　サア〳〵、月さん、ござんせいなア。
ト女郎の誠の唄になり、上手より、お鶴、狭右衛門の手を取り、二重へ出て
モシ、皆さん、ようござんすかえ。
皆々　アイ、お床を取りましたわいなア。
つる　サア、月さん、爰へお出でなされませ。
狭右　コレ、仲居ども、身共を誰れと寐かすのぢや。
つる　アノマア、白々しい顔わいなア。あなたが常々お關どんに、梅ケ枝さんを取持つてくれいと、仰しやつたではござんせぬか。

狭右　そりや身共が頼んだのぢや。
つる　お關どんがいろ〳〵と、梅ケ枝さんに譯を云はしやんしたに依つて、梅ケ枝さんも得心で、今宵爰で寐なさんすのぢやござんせぬか。
狭右　そりやお關が身共にも、追ッつけ太夫に逢はす程に、皆の者に云ひつけてあるから、床へ入つて待つてゐいと、云うたは云うたけれども
皆々　それ見やしやんせいなア。
狭右　併し、餘り急な事ゆゑ、もし又お關がいつものやうに、騙すのではあるまいかと
つる　あなたも、マア、疑ひ深い事ばかり。サア、この事をお關さんに、早う知らせやうぢやござんせぬか。
仲一　ほんに、さうしやうわいな。
皆々　モシ、月さん。
狭右　皆も御苦勞。
皆々　お樂しみなさんせ。
ト唄にて、屏風を立て廻し、皆々、下座へ入る。
狭右　これまで夜毎に通へども、身共が心に隨はぬ、あの梅ケ枝、飽くまで口說き落さんと、思ふ折柄公用にと、是非なく他行の其うちも、只明暮れと心にかゝり、やう

やう歸宅のその夜より、又も通へど返事もなきに、思はず最前離れ座敷で、横笛に添へて送りし歌の上の句、又引く甲斐あらばと下の句を、送り越せしは梅ケ枝が、身共へ靡く戀歌の返事。今宵しつぽり得心させ、抱かせて寐かすとお關が詞。なんだか心嬉しくて、どうか上氣したやうな心持ちぢや。併し、もう連れて來さうなものぢや。ハテ、待つ身になるなの譬へぢやなア。

ト思ひ入れ。文の便りの唄になり、下の障子より、お鶴、お關に裲襠を着せ、手を引き、出て、お關に囁やき、お鶴、思ひ入れあつて、屏風をソッと明け

つる　モシ、月さん、今お關どんが用がござんすゆゑ、わたしが梅ケ枝さんをお連れ申しましたぞえ。

狹右　それは忝ない〱。コレ、梅ケ枝、なんの恥かしい事があらう。サア〱、爰へ〱。

つる　アモシ、なんぼ勤めはして居なさんしても、これまで嫌うた仲ゆゑに、いま得心をなさんして見れば、恥かしいはこりや尤も。何かのお話し濟むまでは、灯があつては面伏せ。こりやいつそ、隱しませう。短檠へなんぞ被うて。

ト お鶴、あたりを見て、刀掛けの袱紗を取つて、短檠へ掛け

斯うして置けばお互ひに、ソレ、恥かしい事はござんせぬ。

ト お關の手を取り

サア、お關、イヤサ、奥へ、心遣ひをせずと、早う月さんの側へ寄らしやんせいなア。

ト お關を、布團の上へ乘せる。兩人、恥かしき思ひ入れ。

申し、月さん、日頃の思ひ、今宵はたんと。

狹右　エ。

つる　話しをなさんせいなア。

ト 唄になり、お鶴、思ひ入れあつて、下手へ入る。跡、合ひ方。兩人、こなしあつて

狹右　コレ、梅ケ枝、生娘かなんぞのやうに、固うして居る事があるものか。その上お鶴が粹を通して、灯も暗うしてあれば、何も恥かしい事はないわいの。

ト お關の手を取り、引寄せ

日頃焦れて居た上に、最前其方の爪音に、猶々身共が思ひは百倍、書いて送りし歌の下の句。ほだしとなりし今宵の首尾。コレ、いつまでも其やうに、思はせ振りをしや

らずと、もう大概に身共が思ひを、晴らさしてくれいや
い。コレ、梅ケ枝、なぜ默つて居やる、物を云はぬかい
の。コレ〳〵、梅ケ枝、もつと此方へ寄りやと云ふに。
ト狹右衞門、手を取りに下手へ行く。入れ替つて覆を
取つて、顏を見て
ヤ、こりや梅ケ枝と思ひの外、そちや仲居のお關ぢやな
いか。
せき　月さん、さぞわたしが憎うござりませう。堪忍して
下さんせいなア。
狹右　ムウ、どうした事やら譯が解らぬ。
せき　サア、とても叶はぬわたしが願ひ、お前の手にかけ
潔う、早う殺して下さんせ。
狹右　ナニ、殺してくれとは、そりや何ゆゑ。
せき　何ゆゑとは、申し月さん。
ト思ひ入れ、そこにある銚子より、酒を茶碗へ注ぎ、
グッと呑み
ほんにあなたは、胴慾なお方でござんす。
狹右　なんと。
ト誂への合ひ方になり
せき　恥かしい事ながら、初に御見のその時から、フッと迷
うたわしが因果、どうで女子に生れたからは、あんな殿
御と只一夜さ、添臥しなさばそれきりに、死んでもこの
身の本望と、思ひのたけの屆くやう、觀音樣へ火の物斷
ち。その甲斐もなう叶はぬ戀。それゆゑお前を僞つて、
梅ケ枝さんを取持つと、云うて逢うたはこれまでに、朋
輩衆を賴んでも、梅ケ枝さんへ思ひを掛け、得心して下
さんせぬ、お前の心の氣強さと、梅ケ枝さんの從はぬ、
氣強い心と思ひ比べて、コレ申し、今宵一夜の添臥しに、
願ひを叶へて下さんせ。モシ、斯うした首尾になつたの
に、今さらお前に嫌はれては、朋輩衆へどうしてマア、
逢はせる顏がござんせう。とても願ひが叶はねば、生き
て居る氣はござんせぬ。これ程までに思ふ心、ちつとは
不便と汲み分けて、どうぞ叶へて下さんせ。モシ、お情
でござりますわいなア。
狹右　それ程までに身共が事、思うてくれる優しい心、決
して惡うは思はねども、其方に枕を交しては
せき　梅ケ枝さんへ立たぬかえ。
狹右　さうではなけれど、どうも今さら
せき　そんならこれ程、焦れても
狹右　この事ばかりは

せき 叶はぬかいなア。ハア〳〵。

ト泣き落す。狹右衞門、思ひ入れあつて

狹右 拙き身共をそれ程まで、思ふ優しき其方が心底、仇には思はぬ、忝ない。いま其方が云ふ通り、つれない身共と、つれない梅ヶ枝、儘にならぬが戀路の迷ひ。どう思ひ諦めても、諦められぬ我が煩惱。今宵思ひを晴らさんと、思ひし折に思はぬ妨げ。取りも直さず潁川にて耳を洗ひし許由が例し、心の迷ひを晴らすには、フム、幸ひのこの一焚き、それ〳〵。

ト狹右衞門、思ひ入れあつて、懷中より香包みを出し、火入れの灰をならし、香をくゆらす。お關、この香に思ひ入れあつて、香包みに目を附ける。

せき ハテ、合點のゆかぬ。いま月さんが一焚きの、香の薫りをさくにつけ、疊紙までどうやら覺えの……こりやコレ、花筐と名附けし名香。

狹右 ムウ。この一焚きを花筐と、どうして其方が。

せき 知つたは矢ツ張り、コレ、爰に。

トお關、鏡袋より、同じ香包みを出す。狹右衞門、取つて、開き見て

狹右 ヤ、こりやコレ、正しく一木の名木。

ムウ。これを所持して居る其方は。

せき 幼い折りに親々が、お許しありし云ひ號けの

狹右 井筒民部が娘の藤浪。

せき 淺間狹右衞門照政さま。

狹右 コレ、その名を滅多に云ふまいぞ。

トお關、思ひ入れあつて

せき さうぢや。

ト狹右衞門の一腰を取つて、死なうとする。狹右衞門留めて

狹右 コレ、待て。そちやなんで死ぬる。

せき なんでとはお情ない。云ひ號けのある身にて、どした因果かあなたに迷ひ、恥かしいありたけを、云うたあなたは云ひ號けの、定まる毀御と知れたる上は、どして生きて居られませう。離して殺して下さりませ。

狹右 これはしたり、その心なら、死ぬには及ばぬ。

せき それぢやと云うて

狹右 ハテ、待てと云はゞ、マア〳〵、待て。

ト一腰を取る。

せき わたしや、恥かしい〳〵、恥かしいわいなア。

狹右　なに面目ない事があるものか。云ひ號けとは露知らず、身共を焦れ慕うたも、親と親とが許せしを、結ぶの神の引合はせ。
せき　それでもあなたはわたしをば、お嫌ひなさるぢやござりませぬか
狹右　そりや云ひ號けと知らぬ先。
せき　そんなら叶へて下さんすか。
狹右　定まる妻とあるからは
せき　お嫌ぢやあらうが、どうぞ女夫に
狹右　これは術ない。
せき　エ。
狹右　なんの見捨てゝよいものか。
　ト　お關を引寄せる。
せき　でも、あなたには、梅ケ枝さんに
狹右　ハテ、それは當座の浮氣の花。
せき　そんなら眞實
狹右　身共が手活け。
せき　嬉しうござんす。
狹右　女房ども。
せき　二世の我が夫。

狹右　コレ。
　ト　兩人、寄り添はうとして、お關、恥かしきこなしにて、手早く鼻紙にて、灯を消す。
　身に浸み渡る
せき　エ。
狹右　戀風ぢやなア。
　ト　兩人、寄り添ふ。唄、時の鐘にて、道具廻る。
本舞臺、平舞臺、上下九尺の中二階、障子たてきり向う、床の間、夜具棚、簞笥なぞの書割り、下手、折り廻し、塗り骨障子、よき所に誂らへの鏡臺。爰に梅ケ枝、以前の形にて、煙草盆を扣へ、煙管を突き、思案の體。この見得、合ひ方にて道具納まる。
梅枝　思ひ廻せばこの身ほど、因果な者が世にあらうか。幼ない時から眞實の、兩親には生き別れ、義理ある父さん母さんの、爲に沈みし憂き苦界。フトした事から二世までと、云ひ交した富士太郎さん、賤しいわたしを賴みに思ひ、お身の大事を打明けて、斯うしてくれいと切なる賴み。主の爲ゆゑ兎やかうと、思ふ所に月さんは、都とやらへ行かしやんして、仇に月日を過ごせし

も、二月越しで月さんの、昨日からの揚詰めに、今日雪さんが又來やしやんすれば、今宵につゞまり仕方なう、心にもない月さんへ、最前戀歌の下の句を、書いて送りは送つたけれど、嫌な枕がどうしてマア。とは云へ大事の主の頼み、こりやどうしたら、よからうぞいなア。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、奥より茂兵衞、出て來り梅ケ枝を見て

茂兵　花魁、大分濟まぬ顔附きだが、どうぞしたのかえ。

梅枝　アイ、なんぢややら、氣合ひが惡うてならぬわいな。

茂兵　それは困つたものだ。

ト側へ住ひ

大方また若旦那の事で

ト思ひ入れあつて

併し、可愛い男で苦勞をするは、これも勤めの樂しみかい。

ト茂兵衞、莨をのみ居る。梅ケ枝、思ひ入れあつて

梅枝　茂兵衞さん、推量して下さんせいなア。

トわつと泣く。

茂兵　コレ、花魁、譯も云はずに、どうしたのだ。

梅枝　サア、わたしや雪さんのお頼みゆゑ

茂兵　ムウ。若旦那の頼みとは、月大盡に從ふ心か。

梅枝　アイナア。

茂兵　すりや、二品を詮儀の爲に。

梅枝　心に嫌な月さんと、枕交さにやならぬわいなア。

茂兵　オヽ、そりやよう得心して下さつた。忝ない〱。

ト思ひ入れあつて

モシ、花魁、その心なら、もう一つ、茂兵衞が頼みを聞いて下され。

梅枝　いつにない改まつた、お前がわたしに頼みとは。

茂兵　サア、どうも云ひ憎い譯なれど、枕を交す覺悟なら、とても の事に若旦那と、なんと切れては下されぬか。

梅枝　エヽ、そりやマアなんで、どう云ふ譯で。

茂兵　譯と云ふのは、邪智深き、月大盡ゆゑ迂濶には、所詮心は許さぬゆゑ、若旦那をば突き出して、枕交さば思案の外、大事を明かすは知れた事。それゆゑ無理な事ながら、上邊ばかりの緣切りを、どうぞ聞き屆けて下されい。

梅枝　そりやお前の頼みなれど、二世を盟ひの雪さんと、

噓にも緣が切られうかいな。わたしやいつそ死にたいわいなア。

茂兵　尤もだ〳〵。飽きも飽かれもせぬ仲を、一日なりと別るゝは、辛い切ない事であらう。何不自由なく若旦那へ、これまで貢いだ深切に、アヽ、傾城に誠なしとは、傾城の誠のあるまで買はぬ野暮。力づくでも金づくでも自由にならぬ貞節な、流れの操を蔭ながら、褒めてゐたのも義理ゆゑに、破らにやならぬ夫の爲。紛失なせし二品の、手がゝり知るれば親旦那の、敵と名乘つて討たるれど、證據なければ討つ事ならず、それゆゑ上邊の緣切りも、直ぐには行かぬ月大盡。若旦那をば突き出して、枕交さば心を許し、寶の在所知れるは必定。さすれば日頃の恨みも晴れ、本望遂ぐるはこなさんの、たつた一つの心ばかり。死なうと思ふ命を長らへ、貞女を捨てて貞女を立つる、常磐御前がよい手本。切ない淚を內へこぼし、笑つて抱かれて寢て下され。

ト思ひ入れにて云ふ。梅ケ枝、思ひ入れあつて

梅枝　事を分けてのお前の賴み。否と云はれぬ義理ゆゑに。

茂兵　すりや、得心して下さるか。エヽ、忝ない。

梅枝　サア、何事も主の爲ゆゑ、諦めては居るけれど、斯うした譯と知らぬ人は、金に目がくれ突き出して、襟元に附く梅ケ枝と、明日から人の口の端に、かゝるが口惜しうござんすわいなア。

茂兵　サア、例へどのやうに云はうとも、それはほんの當座のうち。

梅枝　それぢやと云うて

茂兵　ハテ、人の噂も七十五日ぢや。

トこの時、奧にて

八重　サア〳〵、雪さん、早うござんせいなア。

梅枝　エ、すりや爰へ雪さんが。ハア。

ト思ひ入れあつて、泣き伏す。

茂兵　エヽ、氣の弱い。それぢやア賴みを反古にするのか。

梅枝　サア、それは

茂兵　ハテ、身を捨てゝこそ、浮かむ瀨もあり。

梅枝　ムウ。

ト思ひ入れ。

茂兵　心を鬼に持たつしやい。

ト唄になり、思ひ入れあつて、茂兵衞、下の二階へ上

がる。梅ケ枝、ヂツと思ひ入れ。この時、奥にて

八重　サア〳〵、ござんせいなア。

ト流行り唄にて、奥より八重咲、先に、太郎、新造一重、附いて、出て來り

太郎　コレ、首尾がよくば、早う梅ケ枝に逢はしてくりやれ。

八重　そりや合點ぢやわいなア。

一重　モシ、花魁は爰にござんしたわいなア。

太郎　オヽ、爰に居やつたか。

トこれにて梅ケ枝、脇を向き、ヂツとこなし。太郎、側へ座り

コレ、梅ケ枝、度々の文に、其方の深切、忝ないぞや。

八重　モシ、そんな事は捨てゝ置いて、もつと側へ寄らしやんせいなア。

ト梅ケ枝を側へ突きやる。太郎、梅ケ枝を見て

太郎　梅ケ枝〳〵、どうぞしやつたか。

梅枝　アイ。

太郎　オヽ、最前積が發つたと聞いたが、さうか〳〵。

梅枝　アイ。

太郎　エヽ、なんの事ぢや。案じてゐるに、ちやつと云うて聞かしやいの。

梅枝　マア、さうぢやさうにござんす。

太郎　何を云やるぞいの。

八重　モシイナア、雫さん、お前も粹のやうにもない。早う花魁に詫び言なさんせいなア。

太郎　ナニ、詫び言せいとは。

八重　サア、ツイ手を突いてあやまつたら

一重　濟まうわいなア。

太郎　それぢやと云うて、おりや何も機嫌損ねた覺えはないぞや。

八重　イエ〳〵、あんまりない事もござんすまい。わたしが惡い事は云はぬに依つて、遲うなつたを堪忍してくれいと、早う云はしやんせいなア。

太郎　これは迷惑な事ぢや。

ト太郎、思ひ入れあつて

コレ、梅ケ枝、遲うなつたはおれが惡い。コレ、この通り〳〵。

ト手を突いて、辭儀する。

八重　まだ頭が高いわいな。

太郎　ハイ〳〵。

八新　ト辭儀する。

太郎　サア〱、これではよもや花魁も癇癪は納まつたか。

ト思ひ入れ。梅ケ枝、こなしあつて

梅枝　雪さん、お前今頃、何しにござんしたのぢやえ。

太郎　サア、この間頼んだ首尾も聞きたし、また二つには其方に逢ひたく、早う來ようと思うたところが、何やかやで遲うなり、さぞ待兼ねたであらうな。

梅枝　先刻にからどのやうに。

ト梅ケ枝、顏見合せ、下を向く。下の二階には、茂兵衞、梅ケ枝を見て、拜む。これにて梅ケ枝、チッと思ひ入れあつて

エ、モウ、なんのお前を待たうぞいな。

トつんとする。

太郎　コレ、梅ケ枝、どうしたものぢや。久しぶりで來た身共、機嫌直して此方を向きやれな。

八重　モシ、花魁、好い加減に堪忍してあげなさんせいなア。

太郎　コレ、さうして後月、根岸の寮で頼んだ事は。

梅枝　頼んだ事とは、なんでござんすえ。

太郎　寮で頼んだ、二品の。

ト云ひかけるを、かぶせて

梅枝　エ、コレ、其やうな事は知らぬわいな。

太郎　ナニ、知らぬ。串談はよしにしやれ。

ト太郎、思ひ入れ。

八重　モシ花魁、常に變りし顏の色艷、どうぞなさんしたかえ。

梅枝　イエ〱、わたしやちつと嬉しい事があつて、氣が勇んでならぬわいな。

太郎　それに又、なんで其やうに濟まぬ顏。

梅枝　サア、これは。

太郎　どうも合點がゆかぬわいの。

ト二階より、狹右衞門、窺ふ。

梅枝　サア、その合點のゆくやうに、女子の魂ひ鏡にかけお前に頼みがござんすわいな。

ト鏡臺の鏡を取り、太郎の前へ出す。

太郎　ムウ。鏡にかけて頼みとは。

ト鏡を取上げて、思ひ入れ。

梅枝　切れて下さんせ。

太郎　ヤ。切れて下されとは。

梅枝　わたしや色が出來たゆゑ。
太郎　なんと。
梅枝　迷ひに曇る心の鏡。
ト　この鏡に、狹右衛門の顏、映る心。太郎、見て
狹茂　ヤ。
ト　三人、顏見合はせ、上下一時に、障子を閉める。
太郎　ムウ。
ト　さてはこれゆゑと云ふこなし。
鏡は月に嘗ふれば
梅枝　月大盡に
太郎　從ふ心か。
梅枝　アイナア。
ト　變ひのこなし。太郎、忝ない、と云ふ思ひ入れ。
太郎　すりや、眞實に。
梅枝　アイ、甲斐性のないに、わたしやフッツリ
太郎　愛想が盡きたか。
梅枝　知れた事いなア。
太郎　ムウ。
ト　思ひ入れ。この時、お爪先に、男達四人、仲居、殘らず、出て來り

つめ　オヽ、花魁、樣子は殘らず聞きました。よう突き出す氣にならしやんした。それがお前の身の爲ぢやわいなア。
駒七　それ〳〵、所詮末の遂げられぬ、痩せ浪人に心中立て
三藏　破れ扇に古編笠、四海浪で暮らさうより
四十　榮耀榮華はし次第の、更科組の頭分
石六　月大盡に牛を馬、乘替へるとは當世だ。
梅枝　サア、それぢやに依つて雪さんと、切れる心になつたわいな。
太郎　オヽ、そりや此方も望むところ。後とも云はず切れてやるわえ。
四人　ヤ。
つめ　コレ、雪さん、そりやほんまでござんすかえ。
太郎　ハテ、心の腐つた彼奴が事。
梅枝　なんのわたしが
太郎　アヽ、コレ、心の腐つた其方ゆゑ、疾から飽きて居たのぢやわい。
つる　こりやマア、どう云ふ譯か知らねども。
八重　今の今まで。

さん　深い馴染みのお二人が
よし　今となつての退去りは
太郎　サア、それには深い、イヤサ、深い馴染みも、愛想が盡きた。
駒七　ムウ、すりや御浪人には
四人　いよ〳〵以て
ト太郎、思ひ入れあつて
太郎　ハテ、武士の詞に二言はござらぬ。
駒七　イヤ、その誓言を聞く上は
三藏　これから太夫が
四人　身請けの一埒。
つめ　その身請けの相談は、わたしが旦那へ掛合ひで、今に取引きする約束。
太郎　ムウ。
ト思ひ入れ。
駒七　それぢやア今宵は、廓の名殘り。
三藏　明日から女房に形振りも
四十　誰れ憚らずお頭の
石六　世間晴れての御新造樣。
四人　イヤ、嬉しい事であらうなア。

八重　こりやマア、どうやら
女皆　ほんまのやうに
つめ　こりやをかしいわいの。そんならまだ皆さんは、嘘ぢやとばかり思うてかいな。オヽ、笑止々々。誠も誠、初めから、月大盡と花魁は、さしある仲もいつしかに、折れて今ではほんまの色事。斯うした譯も有やうは、皆花魁の云ひつけで、雪さんの手を切つてしまふ、裏の裏行く狂言ぢやわいなア。
太郎　ヤ。
つめ　サア、身貧なお前に心中立て、うつら〳〵と暮らさうより、月大盡に從つて、立身出世が好みぢやわいな。
トこれにて、太郎、もしやと云ふ思ひ入れにて
太郎　すりや、本心梅ケ枝は。
梅枝　お前にふつ〳〵愛想が盡き、顏を見るさへ嫌ぢやわいな。
太郎　ムウ。コレ、梅ケ枝、そりや、アノ、ほんまに云やるのか。それでは兼ねて賴んだ事も……イヤサ、兼ねて、深う云ひ交せしも
梅枝　切れる心になつたれば
太郎　なんと。

梅枝　云ひ交せしは反古ぢやわいな。
太郎　ムウ。
　トきつと思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり
　コレ、梅ケ枝、それでは其方、濟むまいがや。
梅枝　サア、濟むも濟まぬもござんせぬ。ほんの當座の浮氣から、末も遂げぬ間夫狂ひ。苦勞するのは壽命の毒。襟に着くのが當世と、廓に派手な月さんと、深うなつたもこの身の納まり。脇目で見たら義理知らず、道知らずとも思はんせうが、そこが思案の外とやら。綾や錦と引替へて、前垂帶で水仕業、手鍋提げてと口では云へど、實は乘りたい玉の輿。乘替へさうなものぢやわいなア。
女皆　そんなら眞實、雪さんを
太郎　突き出す心か、コレ、梅ケ枝。
梅枝　アイ、嘘に愛想が盡かされやうかいな。
太郎　ムウ。
駒七　なんと、皆見たか。餅さへ食へば正月と、うからうからと鼻毛を延ばし
三藏　河岸の蛙と花魁を、うぬが色だと眞面目に請け
四十　自惚れるのは流行に、餘ッぽど遲れた大間拔け。
石六　優しい詞をかけられるを、誠と思つて居るうちに、突き出されるは當り前。
駒七　見りやア見る程、馬鹿な面だ。
四人　ム、ハ、、、、、。
　ト太郎、思ひ入れあつて
太郎　コレ、梅ケ枝、其方の性根が腐つたからは、なんにも云はぬ。戻してくりやれ。
梅枝　そりや何をえ。
太郎　證據代りに預けたる、身共が父の戒名を。
梅枝　エ。
　ト思ひ入れ。
太郎　心腐つた其方に、片時なりとも渡しちや置かれぬ。サ、とつと、出して、返し居らう。
梅枝　サア、これはな。
駒七　コレサ、花魁、どうしたものだ。あつて益ないその戒名。
四人　キリ〱戻して、やらつせえ。
　ト梅ケ出が懷より引出す。
梅枝　ア、コレ。
　ト戒名を出し、思ひ入れあつて
　サア、勝手に持つて行かしやんせいなア。

ト出すを、駒七、取つて、火鉢へ打ち込む。掛け煙
硝。太郎、見て
太郎　ヤ、、、。こりやコレ、父の戒名まで。
四人　火中なしたは頭へ心中。
ト太郎、口惜しき思ひ入れ。
太郎　ムウ。よもや〳〵と思ひしに、そちや眞實性根ま
で、廓の水に染まつたのぢやな。さうした心と露知ら
ず、身に替へ難き大事の……サア、大事も何も打明けて
底の底まで深うなり、人も知つたる二人が仲。それを今
さら心變り、現在身共が恨みある……サア、戀の恨みの
月とやらに、從ふのみか剩さへ、起請代りの戒名まで、
燒き失ひし罰知らず、如何に勤めの習ひとて、不心中と
も惡人とも、例へやうなき人でなし。人の皮着た人畜め
が。
ト思ひ入れ。
梅枝　サア、尤もでござんす。惡態口は覺悟の上、どうで
この身は
ト思ひ入れ。
月さんに、任せたからはしつぽりと、互ひの胸も明かし合
ひ、望み叶へば女夫の約束。ソレ、矢ッ張りお前の爲。

サア、主の爲になる事なら、例へこの身は、切り刻まれ
うとまゝ。わたしや、アノ、本望でござんすわいな。
太郎　ムウ。
つめ　コレ〳〵、いくら精腹立てなんしても、云ひ交した
る肝心の、梅ケ枝さんが裏腹では、どうも仕樣があるま
いわいな。
駒七　サア、足元の明るいうち
四人　キリ〳〵と、歸つた〳〵。
ト四人、太郎を突き出す。この時、奥より、泥介、飛
んで出て、太郎を圍ふ。
泥介　コレ〳〵、こりや若旦那を、どうするのだ。
駒七　どうも斯うもいらねえわえ。頭が揚げの花魁へ
三藏　兎や斯う吐かして、突き出され
四十　引ッ込みのねえ痩浪人。
石六　家來の役だ、連れて歸りやれ。
泥介　すりや、なんと云ふ。梅ケ枝どのが突き出したと
は、ハア、、そんなら月大盡の襟に附いたのだな。
四人　知れた事だ。
トこれにて、泥介、キッとなつて
泥介　コレ、梅ケ枝どの、それぢやアこなた、濟むまいぞ

え。

梅枝　エヽモヽお前方の知つた事ぢやござんせぬ、捨てゝ置いて下さんせ。

泥介　如何に騙すが商賣でも、これまで深く云ひ交せし、旦那を突き出し、その上に、客もあらうに張り合つた、月大盡の女房になるとは、そりやア畜生だ。エヽ、茲な狐女郎の狸女郎の、もゝんぢい女郎めが。これ程云つても口惜しくもないか。イヤサ、腹は立たねえか。

梅枝　なに腹が立たうぞいな。お前方の云ふ事は、わたしや空吹く風ぢやわいな。

泥介　うぬ、さう吐かしやア。

ト立ちかゝる。太郎、留めて

太郎　コリヤ〳〵、泥介、どうしたものだ。身共でさへ此やうに、無念をヂッと堪えて居るも、大事の…イヤサ、大事ない程に、心の腐つた奴に構はず

泥介　それだと云つて。

太郎　ハテ、何も云はずに、控へて居やれ。

ト泥介を引据ゑる。

泥介　エヽ、忌々しい。

駒七　サア、何も思ひ殘す事はあるまい。

四人　キリ〳〵と歸らつせえ。

太郎　オヽ、いま歸るわえ。なんの、居ろと云うたとて、こんな所に居るものか。只今歸るわえ。

ト立ち上がる。泥介、思ひ入れ。

泥介　アヽモシ、今お歸りなされては、何かの一儀は。

太郎　エヽ、其方が何存じて。浪人なれども武士の家來。その有樣は何事だ。見るもなか〳〵穢らはしい。主と思ふな、暇をくれるぞ。

泥介　ナニ、下郎めにお暇を。

太郎　七生までの勘當ぢやぞ。

泥介　そりや又あんまり

つめ　コリヤ〳〵、お前方の爭ひは、外へ出してもらひませう。

四人　エヽ、キリ〳〵と歸りやアがれ。

ト太郎、泥介を下の方へ突き出す。

太郎　アヽ、これと云ふのも親の罰。修羅の迷ひを晴らすは敵……イヤサ、肩身の狹い今日の仕儀。さうとも知らず、うか〳〵と、寳の詮議今にし得ず、剩さへ、色に性根を奪はれし、不忠不孝の富士太郎、かゝる恥辱は……アヽ、云へば云ふ程、この身の恥。

ト花道へ行きかける。

泥介　何卒下郎が勘當を

ト云ふを、構はす

太郎　明日ありと、思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の

梅枝　エ。

太郎　吹かぬものかは。

ト舞臺を、キッと見込む。唄になり、太郎、向うへ入る。泥介、思ひ入れあつて

泥介　思ひがけない旦那の勘當。お詫びをしようにもならぬ仕儀。さはさりながら、捨てゝ置かれぬ旦那の身の上。こりや見え隱れにお跡を慕ひ。オヽ、さうだ。

ト早き唄にて、泥介、逸散に、向うへ入る。合ひ方にて、上下の二階より、狹右衞門、茂兵衞、下りて來り

茂兵　イヤ、花魁、御苦勞々々々。モシ、月さん、御覽じましたか。

狹右　オヽ、様子は殘らず、二階で見て居た。

梅枝　そんなら、わたしの心が知れたかえ。

狹右　忝ない、心底とつくり見屆けた。

茂兵　なんと、茂兵衞が取持ちは、どんなものでござります。

狹右　イヤ、恐れ入つたわえ。

茂兵　サア、今からはあなたの女房。

ト梅ケ枝を、狹右衞門の側へ突きやる。

梅枝　モシ、可愛がつて下さんせえ。

ト狹右衞門に寄り添ふ。

四人　イヨ、色男さま／＼。

狹右　コレ、あまり煽てゝくれるな／＼。

駒七　申し、頭、今日は如何なる吉日にや、日頃の思ひに骨折らず、梅ケ枝太夫が御持參で

三藏　これまで辛く當つたも、碎けて今日の床の內。

四十　互ひに汗をかきのめす、手練手管に日頃の本望

石六　こんな事には寸善尺魔、又ぞろ御意の變らぬうち

四人　ドレ、我れ／＼は粹を通して

狹右　オヽ、サ、直さま今宵は梅ケ枝を、連れて歸れば其方達は、亭主に掛け合ひ、何かの手筈。

四人　合點でござります。

茂兵　サア、仲居衆は離れ座敷へ、お床を廻して置きなせえ。

仲皆　アイ／＼、合點ぢやわいな。

駒七　エ、、氣の悪い話しだなア。
三藏　定めて今宵は二人ながら
四人　ア、、行きます〱と
狭右　どうしたと。
石六　イヤサ、茶屋へ行きますと云ふ事サ。
茂兵　エ、、何を云ふのだ。
つる　サア皆さん。
男一　オ、、送つてくれろ〱。
ト門口へ出て
狭右　皆の者。
四人　そんなら頭
茂兵　月大盡さま。
狭右　茂兵衛、大儀。
女皆　サア、ござんせいなア。
ト踊り地になり、お鶴、箱ぶらを持ち、男達四人は向うへ、茂兵衛、お爪、八重咲、おさん、およし、仲居一は、奥へ入る。狭右衛門、梅ケ枝、殘り、兩人、顔見合せ、フムと思ひ入れ。合ひ方。
梅枝　人のそしりも空吹く風、嫉氣になつた雪さんを、突き出しは出すものゝ、あなたの心が、もし、ひよつと、變り易いは男の癖
狭右　ハテ、氣の悪い。そもじが今の愛想づかし、あの心底を見る上は、出雲の神を誓ひに立て、なんの變つてよいものか。
梅枝　すりや、最前あげた歌の下の句。
狭右　サ、それゆゑにこそ、今の仕儀。心の隈を拂ひし上は、誰れ憚らず身共が女房。
梅枝　そんならキッと。
狭右　云うた詞に二言はないわえ。
梅枝　エ、、嬉しうござんす。サア、月さん、行て寐ようわいな。
ト狭右衛門の手を取り、行かうとする。よき時分より、お關、出かゝり、聞いて居て、この時、兩人を隔て
せき　エヘン〱。
ト眞中へ座る。狭右衛門、梅ケ枝、お關を見て
梅枝　誰れかと思へば、お關どん。
狭右　そちやいつの間に。
せき　アイ、先刻にから殘らず聞いて、呆れて爰へ出たわいなア。
梅枝　お關どん、お前そりや何を云ふのぢやぞいなア。

せき　何をとは梅ケ枝さん、お前はなア〳〵。
ト浮いたる合ひ方になり
あらう事かあるまい事か、お前と雪さんとのその仲は、昨日や今日の事ではござんせぬぞえ。互ひに深う云ひ交し、雨の夜、風の訪れにも、逢るお客は身の爲と、割つて口說けど振り通し、情を立て拔くお前の氣象。例へせいてもせかれても忍ばす程の二人の仲。內證を知つた蟲藥、それと見通し奧二階、廻し枕の括り目の、惡い心の梅ケ枝さん。知らぬ事なら是非もなし、誰れ知らぬ者もない、積り積つた雪の戶を、今さらお前が突き出して、月さんに抱かれて寐ても、濟むかいなア〳〵。月さんはわたしが大事の……イヽエイナ、大事のお客であらうがまゝ、如何に女郎衆の習ひぢやとて、そりやあんまりな不心中。勤めの意氣地が立つまいぞえ。

梅枝　モシ、お關どん、なんぢやいな、お前は仲居さんぢやぞえ。わたしに向つて大膽な。そりや意氣地を敎へられて立つかいなア。例へこれまで雪さんと、云ひ交して居たればとて、飽きたに依つて切れたのは、こりや月さんへわたしが心中。なんの濟まうが濟むまいが、いらぬお世話ぢや。片腋へ寄つて居たがよいわいなア。

せき　イヽエ、寄つては居ますまい。斯うなつたれば是非がない。モシ、花魁、梅ケ枝さん、爰にござんす月さんは、憚りながらこのお關が、出雲で結んだ

狹右　ア、コレ。

せき　色でござんす。殿御でござんす。マア、さう思うて下さんせ。

梅枝　モシ、月さん、こりやどうしたのでござんすえ。わたしや呆れて物が云はれぬわいな。コレ、お關どん、ようも〳〵厚かましい、そんな事が云はれた事ぢや。モシ、月さん、お前、覺えはあるまいなア。

狹右　サア、最前お鶴が手引きして、其方と思ひ床の間違ひ

梅枝　そんなら、ほんまに

狹右　イヤモ、面目次第もない。

せき　なに面目なからうぞいな。戀は仕勝ちでござんすわいな。

梅枝　イエ〳〵、さうはならぬわいな。例へ枕は交さずとも、雪さんに見換へた月さん、お前に取られて立つものかいな。

せき　立つも立たぬもござんせぬ。例へお前は花魁でも、

戀の道は又格別。わたしがならぬ、アイ、ならぬわいなア。

梅枝　ならぬと云うて此まゝに、なんの捨てゝ置かうぞいな。モシ、月さん、こんな所に居やうより、サア、奥へござんせいなア。

せき　エ、モ措いて下さんせ。モシ、月さん、それではお前立つかいなア。

狹右　立つも立たぬも戀の道、なんにも云はず默つて居や。

せき　イエ〳〵、默つては居られませぬ。現在わたしは云ひ號け。

狹右　ア、コレ、それを滅多に

せき　イエ〳〵、それでも

ト云ふ口を押へ、

狹右　すりや、其方は悋氣するか。

せき　サア、女子に生れた役目ぢやもの。

ト狹右衞門、お關の顏をヂッと見て

狹右　嫉妬ゆゑに大事を漏らすは、昔よりまゝある例し。不便ながらも

せき　エ。

狹右　サア、不便な梅ヶ枝、いつかな思ひ切られぬわえ。

せき　そんならどうでも。

狹右　今より女房。

せき　そりやお胴慾な淺間さま。

ト寄るを、狹右衞門、拔打ちに、お關を一刀切る。梅ケ枝、狹右衞門に縋る。お關、狹右衞門の手に縋り

エ、情ない、現在女房を手にかけて

狹右　今より女房は、この梅ケ枝。

梅枝　それではどうも

狹右　ハテ、苦しうない。一度の枕で思はずも、女夫の契約なしたるお關、我が手にかけて

せき　そりや又あんまり

ト寄るを、狹右衞門、ポンとお關の首を切る。

梅枝　アレエ。

ト逃げようとするを、狹右衞門、引寄せる。

梅枝　嬉しうござんす。

ト思ひ入れ。この時、茂兵衞、ツカ〳〵と出て、鼻紙で、刀の血を拭ふ。狹右衞門、茂兵衞を見て

狹右　ヤ、茂兵衞か。

茂兵　イヤ、天晴れな。ドレ、お刀を。

狹右　それには及ばぬ。

茂兵　モシ、憎うはあるまいかな。

ト刀へ目を附ける。梅ケ枝、思ひ入れあつて、この時、茂兵衞。ちよつと刀の寸を見る事あつて、狭右衞門、手早く刀を、しやんと納め、梅ケ枝を引寄せる。茂兵衞は脇を向き、よろしくこなし。これをキザミにて、拍子、幕。時の鐘ツナギにて、引返す。

本舞臺、向う黒幕、下手より正面、五十間の片遠見。上の方、高札場、下の方、柳の立ち木、日覆より、同じく吊り枝、すべて、衣紋坂の體、流行り唄にて、幕明く。

ト右の合ひ方にて、按摩、卵賣り、吉原通ひの仕出し、出て來り、捨ぜりふにて、行き違ひ、向うと上の方へ入る。ト本釣り鐘、誂らへの唄淨瑠璃になり、向うより太郎、大小尻端折り、蛇の目の傘、足駄にて、出て來る。ズツと後より、泥介、以前の形へ、赤合羽を引ツかけ、見え隱れに附いて、出て、窺ふ。太郎、花道にて、思ひ入れあつて

太郎　思ふに違ふ梅ケ枝が、心變りの上からは、正しく身共が頼みの一々、物語りしに疑ひなし。戀の遺恨の淺間狭右衞門、梅ケ枝めを根曳きなし。根岸の寮へ歸り道、窺ひ寄つて討つて捨て、奪ひ取つたる達多丸、舞樂の一卷取返し、日頃狙ひし仇敵、おのれ狭右衞門、今こそ思ひ

トきつと云ふ。この時、奥にて、人聲するゆゑ、透し見て

あの駕籠こそは慥かに狭右衞門、爰に待ち受け、オ、さうだ。

トきつと見得。唄淨瑠璃になり、本舞臺へ來り、身拵らへする。泥介は窺ひながら、太郎に見えぬやう下の方へ忍ぶ。此うち奥より、葛城屋と記せし提灯をつけし、駕籠、舁き出る。太郎、これを見て、キツとなり、棒鼻を取つて押し戻し、垂れを上げる。駕籠舁き、逃げて入る。駕籠の内に駒七、乘つて居る。太郎、抜討ちに切りつける。駒七、一かせ切られながら、切り結ぶ。泥介、出て、駕籠を片附け、いろ〳〵あせる事。

ト、太郎、駒七を、切り倒す。この時、上手より、三藏、頰かむりにて、出て來るを、太郎、やり過ごし、透し見て、後より切りつける。三藏、抜き合せ、ちよつと立廻り、切り倒す。泥介、ツカ〳〵と寄つて、刀

の血を拭ふ。太郎、思ひ入れ。泥介、勘當を許してくれと云ふこなし。太郎、ならぬと云ふ思ひ入れ。爰へ、吉原通ひの仕出し二三人、出て來る。太郎、一人々々に透し見て、これではないと云ふ思ひ入れ。また上手より、四十八、酒に醉ひしこなし、捨ぜりふにて、出て來るを、太郎、ズツと寄つて、切りつける。四十八、拔き合せ、烈しき立廻りあつて、タヂ／＼となり

四十　ヤア、人殺しだ／＼。

ト云ふゆゑ、太郎、見事に切り倒す。泥介、死骸を片附ける。此うち始終、唄淨瑠璃。よき程にバタ／＼になり、上手より、中通り若い者大勢、五十軒と記せし提灯、六尺棒を持ち、出て來り

大勢　ヤア、人殺しだ／＼。

トばら／＼と取卷くを、泥介、六尺棒を引つたくり、矢庭に叩きたてる。皆々、向うへ逃げて入る。泥介、跡を追つて入る。太郎、跡見送り、思ひ入れ。また雨車、唄淨瑠璃になり、上手より、石六、笠を向うへ向け、安下駄にて、出て來るを、太郎、透し見て、引き戻す。石六、太郎を見て

石六　ヤ、富士太郎か。

ト云ふを、太郎、切りつける。石六、拔き合せ、よろしく立廻りあつて、トヾ石六を切り倒し、太郎、ホツと思ひ入れ。これにて、唄、切れる。

太郎　敵淺間と思ひの外、惡事に荷擔の四人の者。後より駕籠の來たらぬは、さては淺間は梅ケ枝諸とも、廓に居るに疑ひなし。これより忍んで、たつた一討ち。ムウ、さうだ。

ト時の鐘、合ひ方にて、大門口より、茂兵衞、窺ひながら、出て來る。太郎、思ひ入れあつて

おのれも淺間が

ト切つてかゝるを、ちよつと立廻つて、しつかと留め

茂兵　モシ、若旦那ぢやござりませぬか。

太郎　オヽ、茂兵衞か。

茂兵　マア／＼、お待ちなされませ。

ト太郎、口惜しき思ひ入れにて

太郎　コレ、茂兵衞、口惜しいわい。大事を頼み梅ケ枝は、照政めに從うて、我れを誣に突き出せし、人でなしの犬畜生、遺恨重なる淺間諸とも、討つて捨てんと思ひの外、切り殺せしは四人の荷擔人。所詮願ひの叶はぬ上は、これより廓へ切り入つて、本意を遂げるか遂げざるか、富

士太郎が絶體絶命。
茂兵　サア、そのお腹立ちは尤もだが、梅ケ枝どのゝ退去りは、みんなあなたのお爲ゆゑ、
太郎　なんと。
茂兵　紛失なせし二品を、詮議の爲でござりまする。
太郎　ムウ。すりや、本心某を。
茂兵　突き出す所存でない證據は、この茂兵衛めが頼んだ縁切り。
太郎　ヤ、、そんなら二品を、取返さんばつかりに。
茂兵　心にもない愛想づかし。
太郎　して、二品の手がゝりは。
茂兵　それも最前。モシ
ト茂兵衛、太郎に囁く。太郎、頷く。この見得。時の鐘、合ひ方にて、この道具、廻す。
本舞臺、三間の間、中足大和葺きの亭屋體、向う風雅なる瓦燈口、銀襖、上下、建仁寺垣、植込み、石燈籠、下草、よろしく、二重に短檠を灯し、六枚屛風を立て、蒲團の上に、狭右衛門、梅ケ枝、しどけなき形、手水鉢にて、手を濯ぎ居る。時の鐘、なまめいたる合ひ方にて、よろしく、道具納まる。
梅枝　月さん。
狭右　梅ケ枝。
梅枝　オ、、しんど。
狭右　よかつたなア。
梅枝　モシ、月さん、必らず變つて下さんすなえ。
狭右　なんの、變つてよいものか。
ト梅ケ枝、狭右衛門の懐へ、手を入れ
梅枝　尋ねたい事がござんす。お前の肌に着けて居やしんす、こりやなんでござんすえ。
狭右　ヤ。
ト狭右衛門、ギックリ、思ひ入れ。兩人、別れて
梅枝　その守のやうな物は、なんぢやぞいなア。
狭右　こりや大事の守ぢや。
梅枝　その守を、わたしに見せて下さんせいなア。
狭右　ヤ。
梅枝　サア、なんぢやゝら、有り難さうな、その守。
狭右　イヽヤ、こりや有り難い守ぢやない。
梅枝　ハ、ア、聞えた。お關どんの起請でござんせうな。
梅右　なんの／＼、例へ起請があるにもせよ、其方が見る

前で手にかけたりや、もう疑ひを晴らしても、よささう
なものではないか。

梅枝　イエ〳〵、其やうに云はしやんしても、わたしに見せて下さんせぬからは、お關さんよりまだ增した、云ひ交した女子の起請でござんせう。さうとは知らず、あなたの心にほだされて、誠を明かして何もかも、云うた詞が恥かしい。かゝる心と知るならば、斯うした譯にもなるまいに、そりや胴慾でござんすわいなア。

狹右　ハテ、疑ひ深い。其やうに思ふなら、これを見せるまでもない、身共が心中を見せよう。

ト狹右衞門、脇差を拔き、枕の上にて、小指を切り

サア、これで疑ひ晴らしてたも

梅枝　嬉しうござんす。お前の心中見るには、わたしも

ト同じく小指を切る。

狹右　それで身共も、疑ひ晴れた。

梅枝　エ、そんならお心、打明けて

狹右　なんの隱さう

梅枝　大事の守を

狹右　見せてくれろ。併し互ひに

ト下にある指を見る。トどろ〳〵のやうに、かすめた風の音にて、兩人の血汐、一つになる事。兩人、これを見て、驚ろき、顏見合せ、思ひ入れ。誂らへの合ひ方になり

狹右　ハテ心得ぬ。すべて生血の混ずるは、親子兄弟骨肉なり。

梅枝　わたしが指のこの血汐と

狹右　身共が指のこの血汐と

梅枝　外へも散らで

狹右　合體なすは

梅枝　もしや二人は

狹右　ムウ。

ト思ひ入れあつて

コリヤ、梅ケ枝、其方が所持なす守を見せよ。

梅枝　アイ。

ト懷より、錦の守り袋を出し

この守は父さんの、わたしに添へし筐とやら。

ト狹右衞門、取つて見て

狹右　ヤ、こりやコレ、世にも類なき二重鶴の裝束切れ、

梅枝　中に入れたる短册に、小式部が歌の上の句ばかり

狹右　子を捨てる、藪はあれども深緣。

梅枝　エヽ、どうしてそれを

狹右　サア、知つて居るにも仔細があるが、所持なし居るにも仔細ぞあらん。其方の素性、守の歌、包まず語れ、ド、どうぢや。

梅枝　サア、お話し申すも恥かしながら、もと私しは捨子にて、藁の上から阿彌陀ヶ池の、又平と云ふ人に拾はれ永の年月眞實の、親と思うて暮らすうち、身貧を貢ぎのその爲に、流れの里へ身を沈めし、その時聞きしわたしが素性。親は知れねどその折に、添へてありしはこの守と、聞いて朝夕親達に、仕へる心で肌身離さず、大事にかけて居りますわいな。

狹右　ムウ。

ト合ひ方、きつぱりして

思ひ出だせば、我が父部屋住みの時なりしが、手廻りの女に手を掛け、計らず懷胎なせしところ、祖父將監が怒りを恐れ、密かに知るべの方に於て、出生なしたる一人の女子、朋友の聞え、祖父の手前、後日の證據と短册に、この上の句を直筆に書き、二重鶴の守に入れ、阿彌陀ヶ池へ捨て置きしと聞きしが、今この守に證據の手跡。

ト恟り、思ひ入れ。

梅枝　殊に血汐の一つに寄りしは、

狹右　疑ひもなき血筋の印。

梅枝　そんなら尋ねる、この年月

狹右　廻り〳〵て、其方と身共は

梅枝　そんならお前は、現在の

狹右　妹であつたか。

ト兩人、顏見合せ

兩人　ヤア〳〵〳〵。

梅枝　恥かしいわいなア。

ト打伏して泣く。狹右衞門、思ひ入れあつて、短檠の灯を消す。時の鐘。梅ヶ枝、思ひ入れあつて

モシ、なんで灯を

狹右　サア、灯があつては面目なうて、どうも顏が合はされぬ。

ト時の鐘、かすめし風の音。狹右衞門、思ひ入れあつて、刀を探り取り、肌を脫ぎ、腹へ突き立て、苦痛を隱す思ひ入れ。梅ヶ枝、物音に、合點のゆかぬこなし。狹右衞門、思ひ入れあつて

梅ヶ枝〳〵。

梅枝　アイ〳〵。

狹右　顏が見えねば恥かしい事はない。爰へ〳〵。
ト梅ケ枝、探りながら側へ寄る。狹右衛門、その手を
取り
コリヤ妹、親はなくとも子は育つ、よく無事でゐてくれ
た。
ト苦しき思ひ入れ。竹笛入りの合ひ方。梅ケ枝、合點
のゆかぬこなし。探り見て、腹切つて居るゆゑ、恟り
驚き
梅枝　ヤ、、こりや、お前は、
狹右　ア、、浮世に因果も多からうが、また此やうな淺ま
しい、因果が外にあらうかい。燒野の雉子、夜の鶴、子
を憐れむは親の習ひ、身共はそれに引替へて、隱し子ゆ
ゑに父上が、捨てたこなたはこの年月、他人の手鹽で人
となり、その上辛い廓の勤めに、盡きせぬ緣か十餘年、
たつた二人の兄妹が、廻り〳〵て今宵のしだら、現在妹
と……ア、、思ひ廻せば廻す程、五體も裂かれ、四十四の、
骨骨までも碎くる思ひ。これもよく〳〵前生の、報いや
業と諦らめて、堪忍してくれ、コレ妹。どうぞ堪えてく
れやい。
ト思ひ入れにて云ふ。この時分より、太郎、泥介、上

下の柴垣の蔭より、窺ふ。瓦燈口より、茂兵衛、窺ひ
居る。梅ケ枝、思ひ入れあつて
梅枝　ア、、勿體ない事云うて下さりませ。わたしゆゑに
兄さまで、同じ因果に導く不孝。お免しなされて下さり
ませ。筐こそ、今は仇なれ、この守、持つてゐたのが二
人が因果。
狹右　兄妹と名乘り合はざれば、これまで二世と云ひ交し
た、夫富士太郎に賴まれて、肌を穢して舞樂の一卷、奪
ひ取る所存であらうがな。
梅枝　サア、それは。
狹右　それこそ貞女、天晴れ出かした、と云ふに云はれぬ
今宵のしだら。一旦身共が手に入る寶。
ト云ひながら、懷より一卷を出し
身はひしびしほになるとても、人手に渡さぬ武士の意地。
併し、此やうな暗がりでは、ひよつとこの一卷を、誰れ
ぞ身共が隙を窺ひ、奪ひ取られては
ト云ひながら、梅ケ枝の手へ渡す。
南無三、油斷大敵ぢやなア。
梅枝　エ、、嬉しうござんす。この品持つて居やしやんす
からは、そんなら左京さまの

狹右　敵と云ふはこの狹右衞門。
　ト これを聞き、太郎、泥介、出て
太郎　さう云ふ聲は、淺間狹右衞門、父の敵。
泥介　主人の仇。
太郎　サア、立ち上がつて
兩人　勝負なせ。
　ト この時、後へ茂兵衞、手燭を持ち、出る。この灯にて、皆々、顏見合せ
梅枝　ヤ、富士太郎さんか。恥かしいわいなア。
太郎　ムウ。狹右衞門がこの體は。
茂兵　すりや、これまでの先非を悔み
泥介　覺悟極めし切腹よな。
太郎　切腹なして落命せんより、名乘り合うて潔く、何ゆゑ勝負は遂げざるぞ。
狹右　イヽヤ、例へ名乘り合はずとも、いま富士太郎が手にかゝり、死ぬるも同じこの自殺。
太郎　なんと。
狹右　いつぞや都で左京之進、汝が本心見屆けて、舞樂の一卷、達多丸、讓りくれよと頼みし折、騙し寄つて討つて捨て、奪ひ取つたる二品の、今この刀で切腹なせば、取りも直さず汝が刀で、手は下ろさずとも父の仇、淺間を討つたも、これ同然。只殘念なは舞樂の一卷、闇に紛れて最前誰れやら。
梅枝　その一卷は即ち爰に。
　ト 出す。
太郎　こりや、疑ひもなき舞樂の一卷、忝ない。
梅枝　あなたへお渡し申し上げなば、最早この世に用なきわたし。皆樣、おさらば。
　ト 狹右衞門の脇差を取り、自害する。皆々、悄り、思ひ入れ。
太郎　ヤヽ、こりや、梅ケ枝は自殺なせしか。
狹右　出かした妹。
茂兵　エヽ、早まつた事
三人　致したなア。
　ト 思ひ入れ。狹右衞門も、よろしくこなし。梅ケ枝、思ひ入れあつて
梅枝　サア、知らぬ事とは云ひながら、現在兄とこの世から、畜生道になつた上、二世と盟ひし富士太郎さまと、添ふに添はれぬ敵同士。親と夫へ云ひ譯に、死ぬるを不便と思し召し、この世の縁は薄くとも、どうぞ未來は

ト苦しき思ひ入れ。
茂兵　オヽ、例へ敵の筋にもせよ、親子は一世と云ふから
は、あの世の契りを、若旦那。
太郎　云ふにやあ及ぶ、二世の妻、半座を分けて待つて居
やれ。
梅枝　エヽ、嬉しうござりまする。
茂兵　イザ、若旦那には紛失の、舞樂の一卷、戻りし上は
泥介　本地へ歸參の御用意あつて
太郎　富士の家名を、直さま再興。
三人　エヽ、忝ない。
ト狹右衛門、思ひ入れ。
狹右　口惜しや殘念や。富士にゆかりの奴ばらは、片ッ端
から返り討と、思ひし事も水の泡。斯く深手を負ふ上は、
所詮叶はぬ淺間狹右衛門。イデ、首取れよ、富士太郎。
太郎　惡に強きは善にも強しと、天晴れ健氣な汝が生害。
茂兵　定まり事とは云ひながら、別れ程經し兄妹が
狹右　知らで暮らせし十餘年、因果は廻る車の輪。
泥介　綱手に絡む惡緣も
梅枝　切れて一世の憂き別れ。
太郎　生者必滅、會者定離。

茂兵　愛別離苦を
皆々　目の前に
ト七ッの本釣り鐘の頭。
狹右　最早鷄鳴、近附く致死期。
茂兵　兄妹夫婦が別れの曉。
梅枝　そんならこれが
ト這ひ寄らうとするを
狹右　未練な事を。
トきつと云ふ。
太郎　イデ、某が介錯せん。
ト刀を拔いて、後へ廻る。狹右衛門、思ひ入れあつて、
狹右　ヤレ待て、太郎。
太郎　サア、云ひ置く事のあるならば
狹右　この期に及んで、何云ひ置かん。これにて介錯。
太郎　オヽ、心得た。
ト刀を振り上げる。狹右衛門、仰向くを、木の頭。狹
右衛門は、刀を引き廻す。梅ケ枝は、バッタリ落入る。
これをキザミに、よろしく、　ひやうし　幕

福聚海駒量傳記（終り）

東西々々いづれも様おすゝめの
笠松峠登り三里下りが三里の六
冊を合巻に仕立て後篇に仕り候

新板越白浪

初演の繪番附表紙

（上の文字は當時の作者が書き入れしもの）

新板越白浪

序幕

新潟濱邊の場
笠松峠の場
信濃川殺しの場

役名――夏目四郎左衞門。下部、磯平。宇佐美源吾。浪人、勘藏。同、眼助。同、典八。同、大七。同、久六。村越傳藏。奴、岡平。小路伴内。微塵のお松。

本舞臺、正面一間の濱納屋、この側に捨て碇、上下、磯邊、地がすりの浪手摺り、向う一面、淺黄幕、よき所に松の立ち木、日覆より同じく吊り枝、すべて越後の國新潟濱の體。爰に丸物の傳馬船一艘伏せてあり。船乗り浪藏、まいはだを打つてゐる。上手に宇佐美源吾、職人の拵らへにて、手拭に刷毛を二三枚と小刀をくろみ、提げてゐる。浪の音、おけさ正直ならの唄にて幕明く。

源吾　成る程、お前方の商賣も、丹靑なものだねえ。

浪藏　イヤモウ、ちつと捨てゝ置くと、直ぐに惡くなりやす。さうしてお前は、どこへ。

源吾　わしやア、寒空に向つたから、障子を貼りに行きやした。

浪藏　ア、左樣かね。經師屋さんなぞは綺麗な商賣。わしらも船乘りを、早く切り上げたいものだ。

ト向うより侍ひ勘藏、眼助、酒に醉つたる思ひ入れにて出て來る。後より典八、大七、久六、そぼろなる浪人の拵らへ、少し醉つたるこなしにて出て、直ぐに本舞臺へ來り

五人　カウ、お主は宇佐美源吾だな。どこへ行つたのだえ

源吾　こりやア、お揃ひでござりますな。

勘藏　お揃ひで錢なしが、聞いて呆れらア。

典八　おいら達が、鎌倉に居た時分は、お主は夏目四郎太夫の若黨であつたつけ。

眼助　こちとらが夏目へ劍術の稽古に行つた時分は、いち

めてやつたな。
大七　夏目の親仁が、腹を切つてから跡は散り〴〵。
久六　お主は、兄貴の機平を便つて、この越路へ來て、この頃ぢやア經師屋商買をして居るさうだ。そりやアさうと、あの時分、この越後から夏目の養子に來た四郎三郎、あれッきり逐電してしまつたな。
源吾　サア、その若旦那にも、どこにどうしてお出でなさるやら。
勘藏　それもその筈、養父四郎太夫が切腹の場所にも居合はさず、また實父逸見甚左衛門どのは、殿から預かりの刀を失つて、そのお咎めで今に閉門。
眼助　どうして故郷のこの土地へ、足踏みがなるものか。
典八　あの四郎三郎は夏目へ養子に來ねえ前は、逸見雅次郎と云つたげな。
浪藏　ヤレ〳〵、やう〳〵の事で、まいはだを打つてしまつた。
久六　エヽ、藪から棒に、悧りした。
浪藏　經師屋さん、わたしもこれから笛の稽古に行くから、そこまで一緒に行きませう。
源吾　そんならさうしませう……左樣なら、いづれも樣。
典八　この次に
五人　遊びに行くぞよ。
源吾　お待ち申して居りまする……サア、行きませう。
ト源吾先に、船乘り附いて、向うへ入る。
橋がゝりより、村越傳藏、浪人の拵らへにて出て來たり
傳藏　お主達は、そこに居つたか。
五人　おてまへは
勘藏　村越傳藏どの。
傳藏　何をしてゐるのだ。
大七　寒氣が立つて來たから
久六　貴公を待ちながら、日向ぼつこをして居たのサ。
傳藏　さうして、この中から頼んだ、小路伴内どのゝ一件ば、どうしてくれた。また典膳に……イヤ、この國へ來ては、名も變へて鹿野苑軍八、彼奴にさう云つてくれたか。
眼助　毎日のやうに云へど、さつぱり取り合はぬから。
傳藏　そんならお主達は頼まねえ。いま、身共は伴内どのの陣屋へ行かれぬ體だから、いゝ事にしやアがつて取り合はねえのだな。それも一昨年の暮、鎌倉で軍八めが小

狐丸の刀を盜んでくれと頼んだから、甚左衞門が預かりの隙を窺ひ、伴内とおれとで盜んで、鎌倉へ送つてやつたら、飛脚便りに二人が中へ十兩禮だ。鎌倉より出府した時、たんまりと强請らうと思つてゐる間に、しくじつて國屋敷へ追ひまくられ、五十嵐の苗跡も削られ、今ぢやア鹿野苑軍八と名乘り、表の陣屋の留守居格。これから彼奴が詰所へ暴れ込み、何もかもぶちまけてやらにやアならねえ。

勘藏　コレサ、そりやア短氣だらうぜ。

眼助　お主ばかりぢやアねえ。夏目の老ばれも、我れ〳〵が手傳つて闇討ちにして

典八　切腹したつもりに巧く拵らへ

大七　後の師範に軍八を立てたれど、その骨折り代も、いまだに下らねえ。

久六　その時、四郎太夫が預かりの、文宜王の黄金の像を盜んだのを、五人の中へ預けたまゝ

勘藏　知らぬ顏の半兵衞よ。

傳藏　さうして、その尊像は。

勘藏　いつでも褌にくるんで持つて居るのサ。

　ト袱紗包みの尊像を出して見せる。

傳藏　よし〳〵。さういふ事なら、この手紙を讀んで聞かさう。

　ト懷中より密書を出し

前の所は讀むにやア及ばねえ……然れば、一昨年極月、お頼みにつき、甚左衞門が預かりの小狐丸の刀、盜み取り、差上げ候ふ褒美の後金、まつた其許夏目四郎太夫を殺害の砌り、五人の者御助力いたし候ふゆゑ、首尾よく仕負ふせ、安穩に居られ候ふを、只今以て何の御挨拶もこれなく、甚だ心外の至りに候ふ、早速お報いこれなきに於ては、家老衆中へ訴人仕るべく候ふ、鹿野苑軍八どのへ、小路伴内、村越傳藏、外五人……これを屆けてやつたら、本音を出すに違ひねえ。

勘藏　成る程、おれがしつかり屆けてやらう。

　ト密書を受取り、懷へ入れる。

傳藏　それに、伴内どのが近習役を勤めて居た時より、同家中の名越長兵衞が、妹の美鳥を、いろ〳〵と口說けども、云ひ號けの雅次郎に操を立てゝ聞き入れず。所がこの頃、この新潟白山の宮へ參詣に行つたとの事。どうせ戾りは三文濵道、待伏せして引ッ捕へ、伴内どのが日頃の望みを晴らさせにやアならぬか、どうか手傳つてくれめ

えか。

大七　そりやア易い事だ。

眼助　おれは、軍八へこの狀を渡した上、直ぐに後から。

勘藏　用が濟んだらいつもの內へ。

典八　此方は美鳥の歸るを待つて

大七　何かの事は、彼の所で。

傳藏　サア、來やれ。

ト この人數、上手へ入ろ。知らせにて、この道具、上下へ引いて取り、淺黃幕を切つて落す。

本舞臺、向う一面に山幕。上手に、山のなだれの張り物、笠松峠と記せし石の榜示杭、これより下、笠松の並木、日覆より同じく吊り枝、山颪にて道具納まる。

ト 下手より、旅人の仕出し三人出ろ。これと一時に、上手より百姓、塔婆を提げ、出て來り、舞臺にて行き合ひ

旅一　モシお百姓、明るいうちに赤塚まで行かれませうかな。

百姓　途方もねえ事を云はつせえ。この笠松峠は、登りが三里、それに下りの三里は、六七里にも向ふ難所、川端へ行かぬうちに、日は暮れてしまひますワ。

旅二　そりやア大層遠いが、後へ歸るも殘念だ。

旅三　行くとしよう。

百姓　命が惜しくなくば、勝手にさつしやれ。この峠を越しては、三人ながら、どうして夜中まで命が持つものか。

三人　エヽ、なぜ〳〵。

百姓　サア、この節は大泥坊がこの近所に住んで、夕方から先は、旅人でも所の者でも、切り殺して盜み取るゆゑ、今頃からは往來が止まりますワ。

三人　ヨウ。

百姓　この塔婆も、一昨日、向うの森の下で侍ひが殺されて居たゆゑ、村の者が彼處へ埋め、今お寺で回向してもらつて、立つてやらうと持つて來たのでござる。

旅一　それを聞いて、わしは慄へて、一寸も步かれぬわえ。

百姓　イヤモウ、所の者でさへ、怖氣を慄ふものを、旅人衆は尤もの事だ。

旅三　アヽ、助け船〳〵。

ト三人とも慄へ出す。

百姓　サア〳〵、早うござれ〳〵。

ト百姓は、三人を連れ、橋がゝりへ入る。向うより源吾先に、夏目四郎左衛門、旅形。岡平、下郎の旅形にて椎津藩中夏目四郎左衛門と記せし繪符の附きし兩掛けを擔ぎ、附き添ひ出て來り

四郎　コリヤ若い者、この近邊に人足はあるまいか。

源吾　ヘイ、丁度取込み時にて、みな野に出て居りますゆゑ、雇はれる者はござりませぬ。

岡平　貴樣、麓まで、酒手で擔いではくれまいか。

源吾　どう致しまして、私しはこの頃まで、鎌倉の夏目さまに若黨奉公を致して、力業を致した事は。

四郎　すりや、鎌倉の夏目の家に。

源吾　ヤア、あなたは夏目の旦那樣。

四郎　オヽ、源吾であつたか。

岡平　ヤア、源吾どのか……何は兎もあれ、マア、向うの森の下へお出でなされませ。

四郎　然らば、左樣いたさう。

ト三人、本舞臺へ來り

源吾　旦那樣にも御機嫌よろしく、おめでたう存じまする……岡平、お互ひに達者で、此やうなめでたい事はないな。

岡平　イヤ、思ひがけない所で逢ひましたな。

四郎　して、磯平も息災で居るであらうな。

源吾　有り難う存じまする。お聞き及びもござりませうが、邊見甚左衛門さま、お預かりの御寶劍、紛失より御蟄居にて、兄磯平も、晝夜身を粉に碎き居りますれど、今以て寶の在所が。

岡平　サア、それゆゑに、旦那樣にも、今度のお下りでござるわいの。

四郎　某とても、一家たる甚左衛門の災難心ならず、老職方へ願ひを立て、罷り下りしが、其方も存じの通り、手前が家に重代の、黄金の像も紛失なし、今以て行くへ知れず、尊像詮議二つには、甚左衛門が安否、まつた國遠なせし悴四郎三郎が行くへも尋ねんと、道中質素に下り參つた。

源吾　それは甚左衛門さまにも、さぞかしお喜びでござりませう。少しも早くお供いたして。

岡平　ア、イヤ、お忍びのお下りゆゑ、直ぐに御城下へお出でも異なもの。

四郎　某は、八彦の町へ旅宿を取り、明朝家老中に着屆けを致せば、大儀ながら甚左衞門へ、この由を傳へておくりやれ。

源吾　畏まりました。私しは西坂より出雲崎へ、あなた樣には海道をお下りがよろしうございまするが、この節山賊が出まして、甚だ物騷でございますれば。

四郎　只今も、峠の茶店で左樣申したが、何程の事があらう。其方は少しも早う。

源吾　岡平、氣を附けて上げて下され。

岡平　ナニ、案じさつしやるな。

源吾　左樣なら旦那樣。

四郎　急いで行きやれ。

ト四郎左衞門、岡平は上手へ、源吾は、橋がゝりへ入る。後知らせに付き、この道具ぶん廻はす。

本舞臺、向う一面の浪幕、奥深に一の手、二の手の浪手摺り、下の方、鮭突き小家、眞中の浪手摺り、あふりにて人の出る事あり、これより下手へ九尺の高二重、山の蹴込み、阪の登り口の體。蛇籠柵みをあしらひ、浪手摺り、後ろ蛇籠の三段、川へ下り口の心、柳の立ち木、日覆より柳の吊り枝、信濃川の模樣、時の鐘、浪の音にて道具納まる。

ト向うよりお松、世話娘、振り袖の着附け、これを返し前の浪人五人、追ひ驅け出て、直ぐに本舞臺へ來り

勘藏　いゝ日に出るとは今日の事だ。

眼助　小路伴内どのが、引ッ淩つてくれろと云つたは、この女に違ひねえ。

典八　美鳥といふのは、お主の事であらう。

大七　いゝ所へ連れて行く。

久六　何も怖がる事はねえ。

五人　早く歩め〳〵。

まつ　ア、モシ、わたしは左樣な名ではございませぬ。どうぞお免しなされて下さりませ。

勘藏　これはしたり、生肝でも取ると云ふではねえ……何にしろ、傳藏どのは、元から心安いと云ふから、早く來て落ちつかせてやればいゝに。

四人　何をして居やアがるか。

ト上手より傳藏、うろ〳〵出て來て

傳藏　どうした〳〵。

五人　オヽ、傳藏どのか。早く／＼。
傳藏　こりやア有り難い……コレ美鳥、久し振りだな……
　ヤア、こりやア逢つた／＼。
勘藏　ナニ、逢つた……道理でおかしな鹽梅と思つた。併
　し、此まゝ追ッ放すも惜しいものだ。
眼助　みんなして、念佛講とやらかさうか。
五人　それがいゝ／＼。
まつ　アレエ。
　ト逃げようとして爭ふ。橋がゝりより、四郎左衞門、
　岡平出て來り
四郎　年端も行かぬ小娘を、憎き奴ばら。
　ト皆々を投げ退け、お松を圍ふ。
皆々　この二本棒め、邪魔をしやアがるな。
傳藏　叩き締めろ／＼。
皆々　合點だ。
　ト打つてかゝる。四郎左衞門、刀を拔き、切り立て
　る。皆々上手へ逃げて入る。此うち、お松は泣いて居
　る。
岡平　旦那樣、みな逃げてしまひました。
四郎　只今噂のあつた盜賊と申すは、彼奴等が事ぢやな。

　手前は又、どれ程の手剛い者共かと存じた。
岡平　左樣にござりまする。盜賊の張本が、大勢手下を從
　へてあると申しましたゆゑ、有やうは氣味が惡うござり
　ました。
また　どなた樣か存じませぬが、遁がれ難ない災難を、あ
　なた樣のお庇で……アイタヽヽ。
　ト癪の痛みしこなし
四郎　コリヤ娘、如何いたした。只今の災難にて、ハッと
　思ひ、癪氣が差込んだと相見える。丁度持ち合はせしこ
　の藥……コリヤ／＼、清水があるなら汲んで參れ。
岡平　畏まりました。
　ト腰の水呑を取り、上手の浪間へ水を汲みに行く。四
　郎左衞門、印籠より藥を出し、お松に含ませ、岡平、
　水を呑ませる。
まつ　ア、……どう致した事やら。チヽヽ。
　ト物の云はれぬこなしにて、地へ指にて文字を書く。
四郎　なんぢや……癪が痛んでお禮さへ申されませぬ……
　母樣の病氣ゆゑ、お醫者樣を呼びに行く道にて、今の惡
　者に出合ひしに、あなた樣がお出でなされ、危ふい命を
　助かりまして、嬉しいと思ふと、ついに覺えぬこの苦し

み……オヽ、尤もぢや。

ト　お松は岡平へ書いて見せる。

岡平　ナニ〳〵、わたしが在所は、ツイこの川向うでござりまするが、母様はわたしが手一つでの看病ゆゑ、さぞかし待ち久しう思うて居られませうなれど。

四郎　この體にては、一足も歩かれませぬ程に、お情と思し召されて、この由を母へ、お言傳をお頼み申し上げまする……斯く癪に惱みながらも、母の病苦を案じる孝心。

岡平　ヤレ〳〵、可哀さうに。いつそわたしが、背負つて行つて遣りませうか。

四郎　成る程、それは背負つて遣はせ。

岡平　アヽ、旦那、おんぶするはようござりますが、この兩掛けをどう致しませう。輕い物ならあなたにお頼みもなりますれど、お刀やお金が入つて、大層な貫目でござりますゆゑ。

ト　お松、これを聞き、ちよつと思ひ入れ。

四郎　イヤ、然らば身共が、この女を背負つて遣はさう。

岡平　それは後生になりますでござりませう。憚りながら左樣なされておやりなされませ。

ト　お松、四郎左衞門の袖を引き、また地に書く。

四郎　ナニ〳〵、苦しうない、お助け下られた上、餘り勿體ない……なんの〳〵、苦しうない、早く〳〵。

ト　お松を背負ふ。

岡平　御苦勞さまでござりまする。

ト　兩掛けを擔ぎ、下手の坂へ登る。日覆より灯入りの半月を出す。

旦那樣、聞いたよりは廣い川でござりますな。

四郎　其方、瀨踏みを致しやれ。

岡平　畏まりました。

ト　水の音烈しく、岡平、蛇籠を下り、浪手摺りの中へ入り、川を渡る。よき程に

ヤア〳〵、河童かなんだか。アレ旦那樣、わしの足を足を。アヽ〳〵。

ト　兩掛けを擔ぎし儘、沈む。四郎左衞門は身支度して、お松を背負ひ、これを知らずに下手の坂へ登り、川中へ入り、眞中まで渡り來る。知らせにつき月を隱す。

四郎　ハテ、折の惡い雲隱れぢやな。

ト　お松、背負はれながら思ひ入れあつて、合口を取り

初演の繪番附

衞門の咽喉へ突き立てる。
出し、口に啣へてキッと見得あつて拔き放し、四郎左
四郎　ヤア、さてはおのれは、物取りよな。
ト苦しみながら、お松を脊より振り落す、直ぐに取り押へんとする。お松、下より又、四郎左衞門の脇腹へ突ッ込み抉る。四郎左衞門、苦しみながら、兩人とも川中へ沈む。よき程にお松、四郎左衞門の大小を抱へ合口を逆手に持ち、中洲へ出て、水を吹き、ホッと息をして、キッと見得。これにて月の出て、お松、件の大小を拔き、月明りにて見て、身拵らへをする。月また隱れて、上下、鮭小家より、小路伴內、黑羽二重の着附け、大小、五十日鬘にて窺ひ出る。これと一緖に橋がゝりより、下郞磯平、赤合羽、草鞋、饅頭笠を翳し、小田原提灯を持ち出て窺ふ。伴內、お松へ探り寄り、捕へんとする。お松、身をかはす。磯平、小田原提灯を差出すを、お松、打ち落す。これよりだんまり模樣の立廻りあつて、トゞ伴內すり脫け、下手へ行く。磯平、お松を突き廻し、伴內の鐺を捕へ引き戾し、三人別れて見得。伴內、切つてかゝるを、磯平は鞘の儘受け止める。お松、件の大小を探り、取り上げる。此うち伴內は、花道まで行き、磯平は、お松の大小へ手を掛け引き附ける。これを木の頭。伴內は一散に向うへ入る。磯平、お松、向うを見込む。この仕組みよろしく

ひやうし幕

二幕目

新潟稽古所の場
同　濱邊の場

役名——夏目四郎三郎實ハ邊見雅次郎。同云ひ號け、美鳥。同奴、磯平。宿老、九四郎。下男、九助。百姓、米作。村越傳藏。茶の師匠、啓伯。若い者、阿手吉。名越長兵衞。小路伴內。微塵流のお松。

本舞臺、平舞臺、上手、一間の附け屋體折り廻し、障子たてきり、向うまひら戶の押入れ、下手へ寄せて床の間、これに八彥明神畫像の掛け物を掛け、眞中、暖簾口、この下赤壁、よき處に竹刀、木刀、面小手、具足など掛けあり、この側に微塵流劍法指南

微塵お松、と記せし板札。いつもの處に門口、この下一間の腰障子、隣家の體。これに三條長岡上下船宿と、筆太に記せし木札を掛け、すべて越後新潟町、お松住居の體。爰に宿老九四郎、針箱の上へ義太夫の本を載せ、扇拍子にて、阿波の鳴戸の淨瑠璃を語りゐる。下手に下男九助、百姓米作仕合ひをしてゐる。大太鼓入り、おけさ節にて幕明く。

九助　ソレ來た〳〵……ヨウ〳〵。
米作　ドツコイヨウ〳〵。
九四　刀の詮議濟むまでの、夫の命助けてたべと。
ト此うち九助、米作を打ち据ゑ
九助　どうだ。恐れ入つたか。
米作　アイタ、、、。
九助　また晩に、代稽古をしてやらう。
宿老　年はやう〳〵とを〳〵の、道をかけたる笈摺に。
ト九助は、九四郎の後へ廻り、首を押へる。
九四　コレ、これが肝腎の處ぢやワ。
九助　どこの國にか、劍術の稽古場へ來て、義太夫を語ると云ふがあるものか。
九四　内で淩ふと、嬶が小言を吐かすゆゑ、爰へ來て語るのぢや。
九助　イヤ、義太夫より劍術を遣つて見さつせえ。おれが代稽古をしてやらう。
九四　べら坊め、生兵法大疵の元だワ。
米作　イヤ、爰の師匠どのに教はつたら大磐石だ。
九助　女でこそあれ、微塵流の達人、即ち名前も微塵のお松と、人も知つたる先生だ。それに引替へ、その齡で、義太夫を語るとは厚かましい。
九五　べら坊づらめ、それには藥と云ふものがあつて、段段と好い聲になるわえ。即ち高金を出して求めた、和蘭から渡つたこれが即ち、ズボウトウと云ふ妙藥だワ。
ト藥を出して見せる。
九助　それはよいが、お前は淨瑠璃より、首を大層振るが、しまひには振り切るでござらう。
九四　首が切れて堪まるものか、泥坊でもしやアしめえし。
米作　イヤ、泥坊と云へば、この節自來也とか云ふ、大泥坊がこの國を徘徊するから、見附け次第に召捕れ、とのお布令が廻つたと云ふ事だ。
九四　サア、今隣り町から來た人相書、この盜人は方々の

屋敷へ入つて、刀を目がけ、また躍り込んで、小さな尊像を盗むと云ふ事ぢや。

ト人相書を出す。

九助　ハヽア、いゝ男だ。先頃も高田の御堂へ入つたとの事。この人相書に書いてあるだらうね。

九四　なんと書いてあるか、おれが知るものか。

九助　それが一つ讀めなくつて、宿老も氣が強え。

九四　われが世話で勤めても居やアしまいし、打ッちやッて置け。

九助　イヤ、そんな大事のお布令なら、宿老が讀んで、觸れて歩かなくつちや役柄が勤まるめえ。唐變木め。

九四　うぬ、唐變木と吐かしたな。もう料簡が。

米作　これはしたり、譯もない事を。

ト兩人、竹刀を取つて打ち合ひ、九助、誤まつて八彥明神の掛け物を破る。兩人、これを知らず打ち合ふ。ところへ前幕の浪人勘藏、橋がゝりより出で來り

勘藏　微塵先生を内かな……ハヽア、お稽古かな。

ト内へ入る。兩人、間違へて勘藏を打ち据ゑる。この時、勘藏は以前の密書を落す。

アイタヽヽ。

米作　オヽ、お前は昨日弟子入りをしたお侍ひか。

九四　オヽ、ほんにこれは……誠にこれは、ほんの間違ひと申すものぢや。

三人　どうぞ御料簡下さりませ。

勘藏　劍術修業の者には、間々ある事でござるて。して、お松どのには。

九四　師匠は、寺參りに行かれましたが。

九助　もう程なく歸りますから、私しどもをお相手に、お立合ひなされませ。

勘藏　イヤ、今ので懲り〳〵致した。有りやうは、さる人に頼まれて、好い緣談の口があるゆゑ、門弟になつてお世話を致さうと存じて。

ト此うち九助、茶を酌み

九助　それは大きにお世話、お茶でもお上がりなされませ。

米作　爰の師匠どのは、どこかに歷とした御亭主があるゆゑ、あのやうな今年二つになる子供がござりまするのぢや。

勘藏　それは大きな見そこなひ。併し、こちらの口も惜しい處ゆゑ、先の御亭主の方が片附くなら、どうか相談を

致したいものでござる。
九四　何も縁づく、談じて御覽じろ。
勘藏　併し手前、後程出直して參らう。
九助　これはお早々。
九四　一昨日お出でなされませ。
ト勘藏、橋がゝりへ入る。
米作　あのべら坊めが來たので、喧嘩が宿替へをしてしまつた
九助　今さら蒔き直しもなるまい。
ト向うより丁稚、風呂敷包みを脊負ひ、足早に出て、直ぐに、本舞臺へ來り、内へ入り
丁稚　今おかみさんが、そこに歸つてお出でなさるから、先へ知らせに來たのだ。それに九四郎さんにも、九助さんにも、留守を賴んでお氣の毒だから、お酒を上げてくれろと云ひなすつた。
九四　それは有り難い。有やうは、今日は此方のちつさが誕生日だから、内々は附込んで參つたのぢや。
ト九助、掛け物に心付き
九助　カウ、大變々々、八彦明神さまの御影を誰れが破つた。

九四　ヤア、おいらぢやない／＼。
九助　ドッコイ、先刻お前をぶたうとして、今の二本棒を揆つた時、やツつけたに違ひない。
九四　イヤ、お主が竹刀を振り出したゆゑ、突き破つたのだ。
丁稚　これサ、裏打ちをすりやアいゝぢやねえか。
米作　成る程、さうして置いたら、師匠も氣が附くめえ。
九四　お主、ちよつと裏打ちをしてくれぬか。
九助　丁度爰に糊もある。
九四　待て／＼。爰に何やら。
ト密書を取り上げる。
丁稚　反古でもなんでもいゝから、早く寄越した。
ト取急ぎ、裏打ちをしようとして、また破り
九四　オヽ、みんな破つてしまつた……エヽ、倒し者めが。
丁稚　オヽ、新町の經師屋へ持つて行つて、そつくり直してもらはう。
米作　それがいゝ／＼。
九助　早く／＼。
丁稚　合點だ／＼。

ト密書にて裏打ちを仕掛けし儘、持つて橋がゝりへ、走り入る。
米作　先づあれでよいワ……併し、師匠が歸つて來て、床の間に、御影がなければ氣に掛けやう……オヽ、丁度似寄りのこの掛け物。
ト床の間に立てかけある掛け物を出す。
九助　エヽ、そりやア雛の掛け物だわな。
九四　處で、この人相書を貼りつけて置いてはどうぢや。
米作　奇妙々々。
ト三人して絵姿を貼りつけ
九四　これでよい〳〵。
ト床の間へ掛け
時に、もう一段美音を發しようか。
九助　此方も一精仕合ひの稽古を。
米作　然らば相手に立合はうか。
ト宿老は淨瑠璃を語りかける。九助は仕合ひにかゝる。向うより船乘り浪藏、笛を腰に差し、櫂を擔ぎ、後よりお松、赤子を抱き、出で來り
まつ　そこへござんすは、お隣の浪藏さんではござりませぬか。

浪藏　オヽ、お松さん、どこへお出でなされました。
まつ　ハイ、今日は坊主めが誕生日ゆゑ、白山さまへお參りに行きました。
浪藏　道理こそ、今朝赤飯を下された。いつもながら貰うてばつかり。
まつ　なのんマア……わたしの處は、外の稽古と違ひ、さぞお喧ましうございませう。
浪藏　イヤ、わしらが内へも、若い者が寄つて、毎晩笛やら、鉦やら、太鼓やらで、騒々しい事でござります。
まつ　何は兎もあれ、參りませう。
浪藏　オヽ、わしは向うの店へ煙管を忘れて來た。ちよつと戻つて取つて來ませう。ヤレ〳〵、とんだ事をしました。
ト引返して、向うへ入る。お松、本舞臺へ來る。これと一時に、以前の丁稚、橋がゝりより出て來り
丁稚　今お歸りなすつたか。
まつ　わが身は又、道寄りをしをつたな。
丁稚　イエ、ナニ經師……ナニ、ちよつと歸つて、いま酒を云つて來ましたのサ。
ト九四郎、門口を明け

九四　ヨウ、師匠お歸りか。

米作　サア、足を濯いで上げませう。

ト小盥に、水を汲み、持ち出る。

まつ　これは憚り。

九助　マア、坊さまを。

ト抱子を取る。米作は、お松の足を洗ひしまふ。

丁稚　サア、おれにも洗つておくれ。

ト足を出す。

米作　エヽ、ふざけるなえ。

九四　待ち兼ねた〳〵。もう少し早く歸らしやると、阿波の十郎兵衛召捕りの段を聽かせるものを。

まつ　それは殘り多い事でござんしたなア。

ト上手へ住ふ。盥は其まゝに置く事。

お宿老樣も、九助さんも、留守をお頼み申し、大きにお待遠でござりましたらう。併し、これで氣が濟んだわいなア。

丁稚　氣が濟まぬのはおればかりだ。盆も疾に過ぎたのに、未だに宿下りにもやつてはくれず。

九助　オヽ、おれも阿母から頼まれたつけ。親仁の寺參りもさせたし、また悪い噂もあれば、一晩泊りの暇を貰うてくれと云ひましたつけ。

まつ　ほんに丁度今日は、この雅之助が喜びぢやに依つて、九助さんと一緒に、宿下りに行たがよいぞや。

丁稚　アヽ、嬉しいなア。

九四　わしもモウ、お暇仕らう。

まつ　アレサ、今日は折角の心祝ひ、おいしくはあるまいが。

九四　有やうは、待つて居たのぢや。ハヽヽヽヽ。

九助　そんなら奥で、この顔で。

米作　わしもお酌をしながら。

丁稚　側から肴の撮み喰ひ。

九四　ドレ、お馳走になりませうか。

ト九四郎先に、四人、奥へ入る。

まつ　ヤレ〳〵、今日は思うたより草臥れた。併し、この子の誕生日に、神參りをした心は、灸をすゑたと同じやうぢやわいなア……これにつけても四郎三郎さま・鎌倉にて不思議に馴れ染め、親御の難儀に暇乞ひさへ、そこそこに泣き別れ、跡でこの子を產み落し、お跡を慕ひ、且は寶の詮議をせんと、そこよと爰よと尋ぬるうちも、藝はこの身の幸ひと、女だてらに劍術の、指南はほんの

表向き、空恐ろしい盗賊の。
ト淨瑠璃の本を取上げて
この淨瑠璃の銀十郎も、果は刃に非業の刑罪。苦勞苦患も夫の爲。只忘られぬは四郎三郎さま、御無事なお顏を見た上で、この子を一目。
ト赤子笛になり、抱子を搖りながら
ア、思ふまい〳〵。ドレ、添へ乳して寢させませうか。
ト上の方へ、小蒲團を敷き、添へ乳をする。向うより船乘り浪藏先に、四郎三郎、深編笠、大小、浪人、目病みの拵らへにて、浪藏の持ちし笛を持ち添へ、引かれながら出て。
四郎　これは〳〵、どなたか存じませぬが、思ひがけない御厄介になりまして、有り難う存じまする。
浪藏　なんの〳〵のお前樣、謠を謳はつしやるとは、樂しみな事でござんせうが……それ〳〵、道が惡いぞや。
四郎　ハイ〳〵、晝のうちは、微かに見えまするなれど、夕方から少しも分りませぬ。併し、これからは往還でござりまするから、そろ〳〵と參りませう。
浪藏　充分氣を附けてござらつしやい。

ト本舞臺へ來り、浪藏は、下手の內へ入る。四郎三郎は、門口へ立ち
ト謠を謳ひ
四郎　吾妻遊びの數々に、その名も月の色人は。
まつ　ドレ〳〵、手の內を進ぜませう。
長々の浪人に、御憐愍をお賴み申します。
ト起きて門口へ來り、巾着より錢を出して遣る。
四郎　有り難うござります。
まつ　見れば、お目が惡いやうに。
四郎　ハイ、俄盲目でござります。
まつ　物ごし格好、心の迷ひか。
ト以前の盥に映るを、目を附け
ヤア、あなたは尋ぬる四郎三郎さま。
四郎　さう云ふ女中の聲は慥かに。
まつ　鎌倉にてお別れ申した、お松でござりまする。
四郎　エ、……どうして爰に。
まつ　ようマア御無事で
四郎　居やつたなう。
まつ　マア〳〵、お入りなさんせ。
ト四郎三郎、編笠を取り、お松、介抱しながら內へ入

り
ア、、嬉しや〳〵、今も今とてお前の事を……それはさうとお前の眼病、いつの頃より其やうに。

四郎　サア、宗近の刀、尊像の詮議に心を苦しめ、遂には脾胃を破りてこの眼病。それは格別、どうして其方は鎌倉を。

まつ　サア、立退いたその譯は跡での事。マア、それよりは喜ばすものがござんす。

ト抱子を連れて來り

これを見て下さんせいなア。

ト四郎三郎へ渡す。

四郎　ヤア、こりや幼な子。

まつ　アイナア。お別れ申したその跡で、お前の胤を産み落し、大事に育てめぐり逢ひ、褒められやうと幾夜の思ひ。

四郎　すりや、みごもりして産み落し……オヽ、こりや、しかも男の子。お松、出かした、夏目の嫡子……その名跡の氏系圖、絶えるも今宵明け六ツの、鐘を限りに。

まつ　すりや、今以て二品の。

四郎　實は皆暮れ行くへ知れず。お預かりの身の親人には、夜明け限りに御切腹。

まつ　エヽ。

四郎　この身に元より覺悟の上。されば可愛や悴にも。

まつ　わたしもせめて二品を、尋ね求めてお前にと、晝は稽古に人集め、夜は可愛や、この子を肌に

四郎　脊負うて何れへ。

まつ　エヽ。サア、神々樣に願掛けても、今に行くへが。

四郎　知れぬは寶、知れたるは、思ひがけない微塵のお松。定めて其方はわしが事を。

まつ　忘れぬ印は、齒も染めず、髪も油氣ない同然。

四郎　そんなら、わしを眞實の

まつ　男は一人、子一人に、後家立て通すをいろ〳〵と、云ふを手強く懲らすゆゑ、あれは鬼神と異名のお松。今宵は共に

四郎　三人ふところ。

まつ　どうやら夢ではないかいなア。

ト向うより、屋敷の娘の拵らへにて美鳥、走り出て、直ぐに内へ入り、門口を締め、窺ひゐる。後から傳藏、追ひかけ出て、直ぐに門口へ來り

傳藏　爰明けろ〳〵。

美鳥　イヤ、明けぬわいなア。

ト四郎三郎、お松は、呆氣に取られしこなしにて、見てゐる。此うち又、下部磯平、走り出て

磯平　うぬ、狼藉者。

傳藏　何を、二才め。

トちよつと立廻り、傳藏、あしらひ兼れ、橋がゝりへ逃げて入る。

磯平　イケ圖太い奴だ……モシ、お孃樣、宇佐美磯平でござりまする。もう惡者は追ひ返してござりまする。

美鳥　それでもどうやら。

トそつと門口を明け

ア、磯平、よう來てたもつたなう。

磯平　私しが草履の鼻緒を立てるうち、慥か彼奴は、お話しのあつた、小路作内とやらの、荷擔人の奴等。

まつ　アヽ、申し、女中さんえ。內へ斷わりなしに、馴れ馴れしいのも程のあるものぢやわいなア。

美鳥　ハイ、御免なされて下さりませ。私しは三條の者でござりまするが、白山さまへ參りましたところ、只今道にて狼藉者に出會ひ

磯平　無法を働らきまするゆゑ、私しが防いで居りまするうち、御寮人樣は逃げてお內へ駈け込まれ、それゆゑ急難を、助かりましてござりまする。

美鳥　これと申すもお內のお庇、有り難う存じまする。

磯平　無禮の段は、御免なされて下さりませ。

まつ　其やうに仰しやつては、却つてお氣の毒でござりまする。

四郎　併し、どこも怪我はござりませなんだか。

美鳥　イエ〱、仕合せと、怪我もなく、只驚いて

ト四郎三郎を見て

美鳥　ヤア、あなたは我が夫、雅次郎さま。

四郎　エ。

美鳥　わたしはあなたの云ひ號け、美鳥でござりまする。おなつかしうござりましたわいなア。

磯平　オヽ、若旦那だ〱……モウお前樣は、磯平が爰に居りまするに、素知らぬ顏は、お情ない。今日に迫つた親旦那のお身の上。それゆゑにこそ、美鳥さまも白山さまへ嚴しいお願ひ。そのお供をして來た磯平を、なぜ見ぬ顏をさつしやりまする。そりやお胴慾だ〱だわい……それに引替へ、御寮人樣、慥かに雅次郎さまは、御本國にござつたに相違ないと、下郎めを連れ、お下りなされ

その跡より名越さまにも、お國詰め。

美鳥　千辛萬苦も、あなたに逢ひたいばつかり。

四郎　その恨みは尤も至極。某とても其方の事、思はぬにてはなけれども。

磯平　ヤレマア、これで一方の重荷を、下ろしたと云ふものだ。

まつ　コレ、女中さん、例へ元は雅次郎さんと云はしやんせうが、このお方は、夏目四郎三郎さまと云つて、鎌倉に居る時から、二世掛けて約束した、アイ、わたしが男、苦勞苦患でやう〳〵と、尋ね當つた大事の夫を、我が夫とは馴れ〳〵しい。キリ〳〵出て行つて下さんせ。エ、モウ、折助さんも行きなきんせいなア。

磯平　折助とは御挨拶だ。

美鳥　そんならお前は。

四郎　サア、鎌倉にて、フトした事より。

磯平　オ、さうだ。いつぞや芝居へお迎ひに行つた時。

美鳥　噂に聞いたお松さんとは、お前でござんしたか。そのお方と、ようマァ爰で……そりやあんまりぢやわいなア。

ト寄り添ひ泣く。

まつ　エ、其方へ退いて居やしやんせいなア。

ト美鳥を突き飛ばす。

磯平　エ、コレ、大事の美鳥さまを。

トお松を突き退ける。

四郎　マア〳〵、これには譯のある事。

磯平　イ、ヤ、譯も糸瓜も構はねえ……ヤイ、踏んばり女め。誰れに斷わつて貰つた。雅やちんころぢやアあるめえし、大殿様よりお許しで、夫婦にならしやつたのだ。それを横取りしやアがつて、うぬは間男ぢやアねえ間女だ。サア、美鳥さま、後にやアこの磯平が控へてゐる。喧嘩に負けて堪るものかえ。

ト立ちかゝるを

四郎　コレ磯平、聊爾いたすな。迷惑いたすは某ばかりぢや。

トお松、抱子を連れ出て

まつ　オホ、、、。なんと云はしやんしたとて、コレ、此方には、此やうな雅之助と云ふ、今年二つになる男の子がある身。そのわたしを措いて、外に女房があつてよいものかなア。

磯平　モシ若旦那、こんな物をいつの間に、拵らへなすつ

た。

四郎　サア、思ひがけなく儲けた悴。

美島　もうこの上は、さうぢや。

　ト自害しようとする。

礎平　ヤア、滅法な、早まつた事を。

四郎　コレ、短氣な心を出して、身共に難儀をかける所存か……國元に居る時、大殿樣の御媒介。さうなる時は、この身は猶さら。

美島　そんなら添うて下さりまするか。

四郎　添はいでならうか、親々の。

まつ　モシ、それではわたしに僞はり云うて

四郎　さうではなけれど。

美島　わたしは疾から。

まつ　エヽ、人の内へ駈け込んで、無理ばかり云はしやんすと、斯うしてやるぞえ。

　ト床の間へ飾りある、膳椀を抛る。

四郎　アヽコレ、悴が危ない。此方へおこせ。

礎平　サア、お前樣も、ソレ、この盥を。

　ト下手の盥を持つて來る。

美島　こりや、水が入つてゐるわいの。

礎平　エヽ、意氣地のない。斯う明けて抛るのだ。

　ト水を表へこぼす。

美島　大事ないかや。

四郎　これはしたり、輪が刎ねてはならぬ。

まつ　エヽ、モウ、斯うするわいなア。

　ト床の間の、掛け物を抛る。

美島　わたしも斯うするわいなア。

　ト重さうに盥を持ち、ソツと下に置く。

礎平　エヽ、そりやなんのこつてござります。斯うなされませ。

　ト盥を打ちつける。これにて盥刎ねて毀れる。奥より九四郎、九助、兩人走り出て來て

九四　アヽ、騒々々々。

九助　桑原々々。

兩人　世話し〳〵。

　ト皆々惘りして、跡へ寄り、見てゐる。

九四　ヘヽ、町内の長を致す者の思ひつきは、どんなものぢやえ。

九助　忽ち喧嘩は立去つてしまつた。

まつ　イエ、そこに居りますわいなア。

九四　ナニ、そこに居る……オヽ、この穢苦しい浪人か。サア、出て行け〳〵。

まつ　アヽコレ、そのお方は、大事の人。常々お話し申しました、こちの人が見えましてござりまする。

九四　何處へ〳〵。

四郎　即ち私しでござりまする。

九四　これは〳〵。ツイ見落しましてござりまする。

まつ　マア、聞いて下さりませ。久し振りで夫が歸り、そこへアノ女中が、女房ぢやと申して參りましたゆゑ、腹が立つて〳〵。

九四　イヤ、こりや尤もぢやわいなう。

四郎　イヤ申し、御町内の長もなさるゝお方と承はりましたが、どうぞこの場の納まりまするやう、お願ひ申しまする。

九四　これは〳〵御挨拶。併しながら、わしの支配内に、女を二人持つたる男のあるのも、云はゞ外聞、お手柄な事でござります。

ト磯平、ムッとして、九助を連れて下手へ來り

磯平　モシ〳〵、お前は先づ町内で人の世話でもやきさうなお方と見掛けて申しまするが、爰にござるのは、あの維次郎さまの云ひ號けの女房、そこへ渡りも附けないで、先へ子を拵らへると云ふ事がござりませうか。

九助　イヤ、こりやお前方が至極尤もぢや。

まつ　アレ、彼方には加勢が殖えたわいなア。モシ、わたしが無理かいなア。

九四　サヽ、尤もぢやと云ふに。

九助　年端も行かない娘御が、恥かしいを捨てゝ云ふのが、九四郎さん、分らねえのか。

九四　それだから尤もだと云ふに。

まつ　それでもわたしや、子まで生したる程の事。わたしの云ふが無理かいなア。

九四　どうしても御尤もだと云ふに、

磯平　ハア、この九四郎め、どつちも尤もだと吐かしやアがる。

女二　尤もとはわたしかいなア。

磯九　おれか〳〵。

ト四人、一時に九四郎を突き廻す

九四　アヽ、癪が〳〵。ムウ、ヽヽヽ。

トわざと目を廻す。

四郎　ヤア、九四郎どの、なんと致されしか。

磯平　なんだ、癪が差込んだか。
九助　大變だ〳〵。
まつ　なんぞ藥はないかいなア。
九助　オツと、先刻見て置いた。
ト上手の針箱の抽出しへ入れし以前の藥を出し、手早く服ませ
皆々　九四郎どのやアい。
九四　ウ、ヽ。
ト首を振る。
四郎　どうぢやな、心が附いたか。
ト九四郎、起き直つて
九四　エヘン、天道もお惠みあつて、國次の刀の詮議濟むまでの。
九助　コレ〳〵、目を廻して氣附けを服ましたに、淨瑠璃を語る奴があるものか。
九四　氣附けなら語りはせぬが、ありやア、ズボウトウだわえ。
磯平　サア、仲人の氣が附いたら、燒餅喧嘩の蒔き直しだぞ。
九四　始まるのなら又癪だ……ウ、ヽ、。

九助　ア、コレ、情ない。それぢやア喧嘩は止めだ〳〵。
四郎　モシ、どうかあなたの御才覺で。
九四　どちらをどうとも云はれぬゆゑ、亭主を一日替りにしては、どうでござらう。
九助　成る程、流石は宿老、一生の智恵ぢや。
四郎　そんなら二人は。
まつ　美鳥さんさへ御料簡をさしやんすりや。
美鳥　私しぢやとて、なんの、否やが。
磯平　さう仰しやつて下されば、三方四方、納まると申すもの。
九四　善は急げぢや。わつさり〆めて、雙方機嫌も。
皆々　ヨイ〳〵〳〵。
四郎　これはどなたも、有り難う存じまする。
ト奧より以前の米作と丁稚出て來り
丁稚　九助さん、もう行かうぢやないか。
九助　ほんに、待遠だつたらう。
九四　そんなら、わしらも開きませう。
磯平　お靜かにお出でなされませ。
四郎　ちと又、どうぞお話しに。
九四　其うちに又、上がりませう。

ト四人、門口へ出て

磯平　然らば皆樣。

九助　二人のお内儀、今宵は定めし。

四郎　エ。

九四　頬ちはぬやうなされや。

ト四人、向うへ入る。

磯平　モシ、若旦那樣の御樣子、御存じかは知らねえが、二品の日延べも明日の明け六ッ限り。寺泊の本陣にて、御切腹さつしやらねばならぬ手詰め。なか〳〵、さうしてござる處ぢやござりますまいぞや。

四郎　サ、松山のわしが母の處にて、その樣子を聞いたゆゑ、今宵夜船で寺泊へ立越え、日延べを願ひ、もし叶はぬその時は、親人に代つてわしが一命。

女兩　エ、。

四郎　イヤサ、命を的に親人を救ふ所存。

美鳥　今また爰へ來る道の、狼藉者の詞の端に、文宣王の尊像を、目利きせよと突きつけたが、見覺えあるあなたの養父、四郎太夫さま御所持の尊像。これを其方へやる程に、女房になれと無體の有り條。やう〳〵振り切り來るは來たれど。

四郎　ヤ、、すりや、その者どもが尊像を。

磯平　よろしうござりまする。新潟中を駈け廻り、その者どもをば引ッ捕へて、詮議を遂げん。併し、名越さまにも申し上げ、手分けをなして、彼奴等が居所。

四郎　身共も共にと思へども、儘にならぬこの眼病。

まつ　主に代つて、わたしが一緒に。

美鳥　どうして、女子のお前の手に。

四郎　イヤ、氣遣ひしやんな。男も及ばぬ力弘。

まつ　勝手知つたる裏道傳ひ。

磯平　下郎は別れて東海道。

四郎　怪我せぬやうに。

まつ　アイ、……モシ、あの子を賴みましたぞえ。

美鳥　合點でござんす。

磯平　さうだ。

ト磯平は向うへ、お松は橋がゝりへ入る。

美鳥　ほんにマア、男勝りのお松さん。それに引替へ、はしたない悋氣事。今さら思へば恥かしいわいなア。

ト赤子泣になり

四郎　オ、、坊主が目を覺まし居つた。ア、、折の惡い。

美鳥　イエ、乳は出ずとも、わたしが肌に。

美島　ソレ、默つたわいなア……ほんに髭は、爭はれぬものぢやわいなア。

ト抱子を抱き上げる。これにて、泣き止む。

四郎　ア、世が世の時なら、誕生日の祝ひにも。

美島　そんなら今日が、誕生日でござんしたか。道理こそ、あそこに達士神の畫像が飾つてござんした。

ト掛け物を持ち來り

盜賊の張本、尾形自來也の人相書。

四郎　ナニ、すりや、達士神の御影でなく、劍に心掛くるとある、自來也が人相……すりやお松にも、誰が身に係はりし、劍ゆゑにその自來也……イヤ、繪姿を飾り、劍の在所を知らん爲、一日も早く召捕らるゝやう、神佛へ祈誓をかけしと覺えたり。して、その人相書の面體は。

美島　色白くして鼻筋通り、眼中清しく、痩せ形、左の眼尻に一つの黑子。

四郎　ムウ。女房お松も慥かに左に一つの黑子……ハテナア。

ト橋がゝりより阿手吉、女郎屋の若い者、ばつち、尻端折りの拵らへ、跡より頰冠りの男二人、四つ手駕籠を舁き出で來り

阿手　モシ、啓伯さん、稽古所へ參りましたよ。

啓伯　オヽ、早かつた。駕籠の衆御苦勞。

ト駕籠の垂れを上げる。内に啓伯、茶の湯の師匠の拵らへにて、乘り居て出る。此うち阿手吉、門口へ來り

阿手　ハイ、御免なさい。

啓伯　お松さん、この間はお目にかゝりません。

ト入る。

四郎　お松は、只今急に用向きがござつて、ちと戻るには間がござりませう。私しへ仰せ置かれませ。

阿手　左やうなら御免なされませ。

ト兩人、住ふ。

エヽ、お初にお目にかゝります。私しは出雲崎の角屋と申しまする、女郎屋の若い者でござりまするが、先達てお松さんが相談がしたい奉公人があるとのお手紙でござりましたゆゑ、參りましてござりますが。

四郎　それはハヤ生憎な事でござつた。いづれこの新潟には止宿でござらうから、戻り次第に御挨拶申さするでござりませう。

啓伯　さて愚老は、空日庵啓伯と申す、茶の湯指南を致す者でござるが、內職に小道具を賣買いたしまするゆゑ、

お松どのが、文宣王の黃金の像が出たら、知らせてくれと度々のお頼み。その稀れな寶物で、松山の仲間の處で手に入りましたゆゑ、駕籠に乘つて、宙を駈けて持參いたしましたが、お留守とは、こりや急ぎ損を致しましたわえ。

四郎　すりや、文宣王の黃金の像を、御持參なされましたかな。ドレ、ちよつと拜見……と申したところがこの眼病。

美鳥　夏目のお家の尊像なれば、私しがよう覺えて。

啓伯　イヤ、棗が宅にござります。先づ尊像を御覽なされい。

ト懷中より取出し、美鳥へ渡す。

阿手　エ。

美鳥　こりや、疑ひもなき紛失の。

四郎　すりや、養父の汚名となつたる尊像。

啓伯　モシ〳〵、そんなら盜み物と云ふやうな事でござりますか。オヽ、怖や〳〵。直ぐに元へ返さねばならぬ。それをこちらへ下さりませ。

ト取つて、行かうとする。

四郎　ア、モシ、成る程、譯のある品ではござれど、今その詮議立てを致しては、又ぞろ行くへを失ふ道理。どうぞお讓りなされては下さりませぬか。

啓伯　サア、お松どのゝお頼みと云ひ、其やうに云はるゝなら、隨分賣つても進ぜるが、必らず跡で祟りのないやうに。

四郎　其方さまへ、御難儀をかけるやうな事に仕らぬ。してその價は。

啓伯　根が高い代物ゆゑ、口錢なぞは取りませぬが、先の云ひ置きが五十兩。それも金子と引替へでなくつては賣らぬ約束。

四郎　すりや、アノ只今直ぐに。

啓伯　金がなけりやア、代物を。

四郎　さうでもあらうが。

啓伯　そんなら金子を。

四郎　サアそれは。

啓伯　出來ねば品を

兩人　サア〳〵〳〵

啓伯　どうして下さるのだ。

ト四郎三郎、當惑のこなし。

美鳥　ア、モシ、只今金子を差上げませう。

四郎　どうして其方がその金を。
美鳥　マア、わたしに任せて下さんせ……モシ、お前様、ちつとお目にかゝりたうござります。
ト美鳥、阿手吉を連れ、下手へ來り
お聞きなさるゝ手詰めのお金、私しのやうな不束者でも、お抱へなされて下されまするか。
阿手　お前なら、たつた一年で五十兩に買ひませう。ソレ改めて見さつしやい。
ト胴卷に入れし包み金を出し、美鳥へ渡す。
美鳥　チエヽ、有り難うござります……そんならあなた、このお金で。
ト啓伯に渡す。
こちの人、わたしに暇を下さんせ。
四郎　オヽ、邪まながら、手詰めの難儀。その身を賣つて、某を救ふ其方の貞節心。コレ、なんにも云はぬ、嬉しいぞよ。
美鳥　例へ死すともいとはねど、勤めした身と疎まれやうかと、それはつかりが心がゝり。
四郎　某ゆゑにその身をば、苦界に沈めた大恩人。なんの變つてよいものか。

阿手　イヤ、その嘆きは尤もなれど、長い年期と云ふでもなし
啓伯　一年立つは夢の間ぢや……イヤ、立つと云へば、こちらも直ぐにお立ちとしませうか。
阿手　證文は明日ゆつくり。
四郎　左やうでござるか。よろしきやうに。
美鳥　こちの人、もう行きますぞえ。
四郎　オヽ、隨分わが身も息災で。
啓伯　ソレ、代物は、しつかりお前に。
ト煙管の雁首を拔き、尊像と摺替へ、袱紗に包み、四郎三郎へ渡す。
四郎　何かとあなたのお世話さま。
啓伯　なんのお前、捨てる神ありや。
阿手　助ける駕籠で。
ト手を取る。
四郎　もう、行きやるか。
美鳥　さらばでござんす。
ト門口へ出て駕籠へ乘り、泣き落す。赤子泣く、啓伯、門口を締め
啓伯　急げ。

駕雨　合點だ。

ト花道へかゝる。向うより名越長兵衛、ぶッ裂き羽織、野袴、大小にて、中間先に、箱提灯を持ち、後より若黨附き出て來り、花道にて行き合ひ、駕籠は向うへ入る。

長兵　案內いたせ。

中間　ハッ。

ト舞臺へ來り

頼まう〳〵。

四郎　どなたでござるか。主の松は、留守でござる。

若黨　イヤ〳〵、こなたに邊見雅次郎と申す御人が居らると承つたが、左やうなお方はござるかな。

四郎　ナニ、雅次郎は手前でござるが。

長兵　イヤ、拙者でござる。

四郎　さう云ふお聲は。

長兵　名越長兵衛でござる……コリヤ、其方どもは、同役衆へ、手前跡より乘船いたす程に、お先へお出でになるやうに申して參れ。

若仲　ハッ。畏まりました。

ト橋がゝりへ入る。

長兵　雅次郎どの、一別以來。

四郎　これは〳〵名越どの、思ひがけない。そこは端近、先づ〳〵あれへ。

長兵　然らば御免下されい。

ト上手へ通り、住ふ。

四郎　イヤモ、貴殿にお目にかゝるも、面目なきこの仕合せ。寶詮議のその爲に、國遠なして早三年。拙者が胸中、御推察下されい。

長兵　何はさて措き、養父實父の計らざる難儀。最早今日に迫つたる日延べの限り。今以て寶の在所の知れぬは、是非もなき仕合せ。只今磯平が爰にござる由申せしゆゑ、早速尋ね參つてござる。

四郎　文宣王の尊像は、計らず只今手に入りしゆゑ、先づ一品を差出して、宗近の刀の儀は、今暫らく御猶豫を願はんと存じまする。尊像は即ちこれに。

ト袱紗包みを出す。

長兵　そんならこれが……先づは重疊。さぞかし心配の召されたでござらう。美鳥が緣に繋がれ居れば、手前も心を盡し申したれど

ト袱紗を解き見て

四郎　雅次郎どの、こりや、餘像ではござらぬぞ。

長兵　何とぞ致しましたか。

四郎　探つて見やれ。

　ト四郎三郎、撫でゝ見て

長兵　ヤヽ、こりやコレ、煙管の。エヽヽヽ。さうぢや。

　ト行かうとするを

四郎　コリヤ、血相して何れへ參る。

長兵　ハテ、騙りに參りし兩人の。

四郎　その眼病を附け込んで、騙りし曲者、どうして御身の手に合はうか。

長兵　ではござれども、手延びになつては

四郎　イヤ、詮議せうにもその眼病。

長兵　チエ、。

　ト口惜しきこなし。

四郎　勞して功なき今の後悔、殊には磯平に樣子を聞けば、昔馴染みの女を使り、親の大事も上の空、詮議も餘所に身を持ち崩し、兩眼盲ゐしも天罰と知らざるか。アノ茲な不孝者めが。

長兵　ト以前の若黨、中間出て來り

若中　お迎ひ。

長兵　オヽ、直さま參る。

　ト立ち上がる。

四郎　アヽイヤ、暫らく。左やう思し召すは無理ならねど、も、去年の春の騷動より、寳詮議に心を碎き、晝夜を分たず駈け廻り、遂には內障の病にて。

長兵　ヤア、その云ひ譯聞きには參らぬ。同役もろとも寺泊の陣屋へ、夜明けるまでに着いたし、甚左衞門が切腹の席へ立會へと、老臣方の嚴しい仰せ。

四郎　磯平、お松、只今にも戾りなば、

長兵　手分け致して取返へさば。

四郎　夜明けぬうちに本陣まで

長兵　必らず吉左右

四郎　長兵衞どの。

長兵　お待ち申す。

　ト中間、先へ立ち、名越長兵衞、若黨附き添ひ、向うへ入る。

四郎　寳の日延べの日限も……今二時。こりや斯うしては

　ト我れを忘れ、行かうとして、門口へ當り、たぢ〳〵として、以前の足附きの日向膳に躓き

行くに行かれぬこの眼病……チエ、。

ト撞と座り、膳を舞臺へ打ちつけ
口惜しい。
トこの仕組みよろしく、早き合ひ方にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、序幕の道具へ戻る。後ろ一面黒幕、上手に船小家、眞中に船を俯伏せになし、下手に蘆原、松の立ち木、日覆より同じく吊り枝、灯入りの半月を下ろし、爰に以前の四つ手駕籠を置き、小路伴内、浪人者の拵らへにて、美鳥を後抱へにしてゐる。上手に傳藏、立ちかゝり、下手に啓伯、阿手吉、以前の衣裳を脱ぎ捨て、そぼろなる拵らへにて、外に惡る者大勢居並び、一升德利、茶碗竹の皮包みを並べ、酒を呑みゐる。浪の音にて道具納まる。

啓伯　コレサ、親分の女房になりやア、いゝ目が出らア。

阿手　お主が亭主は盲目ぢやねえか。それぢやアいゝ目が出ねえぢやねえか。

傳藏　てめえの云ふのは、洒落だか理屈だか分らねえ。

伴内　コレ美鳥、其方も氣強い者だなア。おれが屋敷にゐるうちから、附けつ廻はしつ口說いても、聞き入れねえが、もう斯うなつたら仕方がねえ。いゝ加減に、色よい返事をしてくれてもいゝぢやねえか。

美鳥　エ、穢らはしい。さてはわしを斯うせう爲、五十兩の金を出して。

阿手　オツと、その金は石ツころだ。

啓伯　お前に渡した尊像は、おれが煙管の雁首にて、正眞の代物は、即ちこれに。

ト尊像を出す。

伴内　コレサ、落すといけねえ。此方へ寄越せ。

美鳥　すりや、誠の寶は。

ト取りにかゝる。

伴内　ドツコイシヨ、これが欲しくば抱かれて寢るか。

美鳥　チエヽ、云はうやうない極惡人。死んでも肌身は。

傳藏　イケ強情なトチあまめだ。

伴内　エヽ、面倒な。手足を引ツ張れ。

皆々　合點だ。

ト皆々、美鳥を捕へようとする。美鳥、啓伯の脇差を拔き、振り廻す。

皆々　ヤア、危ねえ／＼。

ト向うより礒平、小田原提灯を提げ、早足に出て來り

磯平　最前美鳥さまへ狼藉を致せしはこの濱手。

　ト舞臺へ來り、皆々を左右に投げる。

啓伯　ヤア、おつな奴が出現したぞよ。

美鳥　ヤヽ、其方は磯平、よう來てたもつたわいなう。

磯平　お氣遣ひはござりませぬ。して、又、誠の尊像は。

美鳥　浪人なしたる小路伴內。

伴內　おれがしつかり持つてゐるワ。

磯平　先づおのれから。

伴內　疊んでしまへ。

皆々　合點だ。

　ト船道具を使ひ、面白き仕拔きの立廻り。此うち伴內は尊像を懷へ隱し、美鳥に猿轡を嵌ませ、啓伯、手傳つて上手の船小家の內へ入る。磯平、立廻り十分ありて、トヾ皆々を仕留める。好き程に小家の內より美鳥、取亂せし形にて走り出て

美鳥　口惜しい〳〵わいなう。

磯平　ヤヽ、さては多勢を相手にするうち。

美鳥　伴內と、あの惡者が。恥かしい〳〵わいなう。

磯平　エヽ、惡と無法の小路伴內。一寸試しに。

　ト伴內、頰冠りにて、出て窺ひ居て

伴內　ウアハヽヽ、腹が立つか。美鳥はおれが弄さんだ。人の花とせんよりは、主從ともに死出三途。覺悟しろ。

磯平　さう云ふおのれを。

伴內　なにを。

　ト切つてかゝるを磯平、ちよつと留める。啓伯、阿手吉、起き上がつて、切つてかゝり、立廻つて、磯平、伴內を一かせ切ろ。阿手吉、かゝるを切り下げ、返す刀に啓伯を、及び腰に切らうとして、誤まつて美鳥を、大袈裟に切る。これにて美鳥倒れる。

磯平　ヤヽヽ。美鳥さまを。

伴內　オヽ、おのれは主を殺したな。

磯平　エヽ、毒を喰はゞ皿。

伴內　ところを。

　ト組みつく。傳藏、磯平の足へかぢりつくを蹴返し、阿手吉と三人を切る。三人は、よろぼひながら逃げて入る。トヾ伴內を切り倒し、止めを刺し、美鳥を抱き起し

磯平　美鳥さま〳〵、急所はよけてござります。お心慥かに、お持ちなされませ…エヽ、絆は切れたか。モシ、堪忍さつしやりませ。尊像を若旦那へ手渡しをして、跡

初演の繪番附

より追ッつきます……何はともあれ、ソレ。

ト作内の懐中を尋ねても尊像なきゆゑ、驚ろき所々を捜し、トヾ頬冠りに心附き、頭を探り、髷の間より取り出し

こりやコレ尊像。チエヽ、忝ない。

ト懐中して、一散に花道中程まで行く。美鳥、息を吹き返し、ウンと唸して起き上がり、又バッタリ落入る。磯平、これを見て、手を合せ

免して下され。南無阿彌陀佛。

ト氣を替へて

さうだ。

ト向うへ走り入る。どらの送りにて、よろしく道具ぶん廻す。

本舞臺、元の屋體に戻り、爰に四郎三郎、抱子を寢させ、思案に耽りゐる。靜かなる合ひ方にて、道具納まる。

四郎　兎や斯う云ふ間に時刻が移る。親人に成り代り、命を捨てゝ又の日延べを。それにつけても美鳥が身の上、悪者どもに連れて行かれ、さぞ今頃は難儀に遭はん。又二つには、あのお松、さぞや跡にて歎くであらう……女房の歸らぬうち、少しも早う。さうぢや〳〵。

ト大小を探り、死支度をする。向うよりお松、走り出て來り

まつ　今宵につゞまる寶の日限り。この夜明けなば、舅御の御切腹、そのお命を助けん爲、よる夜中をもいとはずに。

四郎　死ぬる今宵に我が倅と、逢ふも盡させぬ一世の奇縁。

まつ　夫ゆゑには石ともなり、鬼ともなつて二品を。

四郎　見る事ならぬ、我が子の面ざし。

まつ　思へば因果な

兩人　身の上ぢやなア。

ト お松、舞臺へ來り、門口を明ける。四郎三郎、慟りして、脇差を隠し

四郎　誰れぢや〳〵。

まつ　アイ、松でござんす。

四郎　オヽ、お松か。さうして、手蔓に取りついたかや。

まつ　どこをどう尋ねても、皆暮れ行くへが……さうして美鳥さんはえ。

四郎　サア、粹なやうでもまだ初心、其方へ義理が立たぬ

とて、いま本町の知る邊の方へ。

まつ　なんのわたしに斟酌に要らぬ事……それはさうと、この年月、お前に巡り逢ひたいと、八幡の明神さまへ大願立て、百日の夜參り。丁度今宵が滿願日、思はず巡り逢うたゆゑ、お禮參りに行きたうござんす。

四郎　女の身にて、ハテ、深切な。夜更けぬうちに、早う行たがよい。

まつ　そんならちよつと、髮撫でつけて

ト赤子啼になり

オヽ、折の惡い、坊が目を覺ましたわいなア。お前、ちよつと抱いて下さんせ。

ト四郎三郎、探り〳〵赤子を抱き上げる。お松は、鏡臺を出し、髮を撫でつける。

四郎　オヽ、たがよ〳〵。母は用事があるゆゑ、父に抱れて居や。オヽよい子ぢや〳〵。

ト赤子泣きやむ。

コレお松、參詣には每夜、この坊主を抱いて行きやるかや。

まつ　どうして置いて行かれませうぞいなア。

四郎　せめて末期の。

まつ　エ。

四郎　イヤ、せめて此やうに親子三人ゐるところを、親人にお目にかけたなら、さぞお喜びであらうもの。

まつ　今宵に迫るお身の御難儀。どうぞ首尾よう忍び入り

四郎　ナニ、忍ぶとは。

まつ　サア、日延べの願ひを。

四郎　どうぞ叶へて下さればよいがなア。

トまた赤子泣く。お松、鏡臺を片附け、手遊びの笛を取つて

まつ　オヽ、可哀さうに〳〵。ソレ、此やうな物を。

ト笛を吹く。これより床の淨瑠璃になり

〽合圖と心得こなたなる、井戸より出づる早風藤次。

ト橋がゝりより九助、黑の出立ちの盜賊の拵らへにて出て來る。お松も門口へ來り

九助　頭、合圖の呼子は。

まつ　ソレ。

ト手遊びの笛を投げてやる。

九助　合點でごんす。

〽これ幸ひと呼子の笛、取るより早く吹き立つれば、時分はよしと數多の手下、てん手に得物を引提げて、遠慮

會釋も荒男の子、門口に立ちはだかり。
ト橋がゝりより、中通り手明き殘らず黑出立ちにて、得物、龕燈を持ち出て來る。九助、ツッと門口を明け、目くばせする。お松、大事ないと云ふこなし。皆々內へ入る。

四郎　コレお松、門口には、どなたかござるかや。

まつ　イエ、アノ門には、それ〲、今宵は講中のお方が誘うて下されたのでござんす……これは〲、どなたも御苦勞さまでござりまする。

ト呑み込ませる。

皆々　オイ〲。

四郎　それはマア、御深切に……コレお松、早う支度して行きや。

まつ　アイ〲……大きにお待遠でござりませう。

ト此うち、手下は戸棚より、どてら、素網、丸括け、脇差、なぞ取出し、お松に着せ替へ、草鞋を穿かせる。始終手下、拔き足にてする事。

まつ　ほんにわたしの支度ばかりして、お前の寢所を。

四郎　イヤ、わが身の戻るまで、起きてゐずば義理が惡い。

まつ　なんの、女房に遠慮があるものかいなア。

ト手下に指揮をする。皆々、床を敷き、枕を出し、屛風を立てる。

爰へ床を取つて置くぞえ。ほんに夜道は物騷な。犬威しに、これを差して行きませう……その子は爰へ下さんせ。

ト抱き取り

皆さん、大きにお待ち遠でござりました。

〽一腰押ッ取り脇挾み、すつくと立つたるその風情、女姿は何處へやら、男出立ちのその風情、恐ろしくも又目覺ましく。

四郎　母の所へ行き居つたら、直ぐに泊り居つた。正直な者ぢやなう。

まつ　こちの人、ちよつと膳拵らへして置かうわいなア。

ト手下に指揮する。手下、拔き足にて奧より、膳拵らへをして、持つて出て、よろしき所へ置く。

四郎　イヤ、わしはこの眼病ゆゑ、夜は食事はせぬ程に。

まつ　そんならこちの人。

四郎　隨分無事で

まつ　歸らいでかいなア。

トどろ〲になり、口覆より七星、現はれる。

今宵の分野も最早子の刻、八彥の宿は破軍の劍先。

この身を捨てゝも舅御を。
四郎　ナニ、舅御とは。
まつ　サア、舅御様の御無事も願うて。
四郎　助けん爲にこの身を捨て
まつ　今宵は是非とも。
九助　そんなら。
皆々　頭。
四郎　門にはどうやら。
まつ　アヽモシ。
ト門口を締める。
四郎　氣を附けて行きや。
まつ　行て來るぞえ。
ト花道の附け際まで行き
サヽ、行かうかえ。
〽事とも思はぬ大膽者、數多の手下引連れて。
手皆　少しも早く。
まつ　コレサ、小せえのが、おびえらアな。
ト赤子笛になり、お松、抱子をいぶりながら、男のやうなる六法にて、手下、皆々續いて、向うへ入る。
〽跡には一人四郎三郎、兎やせん角やと思案の體、やうやうに顏を上げ
四郎　お松は舅の急難を、救はん爲に夜の道。
〽我れは預けの親の爲、切腹なして貰の日延べ。
それとも知らず神詣で、歸り來つてさぞや歎かん。又二つにはあの美鳥、思へば不便の事ぢやなア……モシ、親仁様、逆さまながら悴が事、何卒頼み上げまする。せめて一事書き殘し、二人の女の貞節や、我が子の事を頼みたいにも目は見えず。情ない身の、成行きぢやなア。
〽身を悔みたる無念泣き、理りせめて哀れなり。
我れながら未練の繰言。少しも早う、さうぢや〳〵。
〽探り〳〵て傍へなる、差添拔いて我が腹へ、突き立てんとせしその處へ、宙を飛んで驅け來る磯平。
ト磯平、驅け出て内へ入り
磯平　エヽ、コレ若旦那、待たつしやりませ。誠の鐐像が手に入りましたぞ。
四郎　オヽ、磯平か。誠の鐐像手に入りしとは。
磯平　サア、小路件内と云ふ浪人、美鳥さまに無禮を云ひかけ、聞入れないを根に持つて、惡者どもを語らひ、狼藉なせしはこの濱と、案に違はず、お孃様を、寄つてかかつて無禮の有り條。中へ飛び込み切りまくり、件内始

め荷擔人まで、殘らず仕留めて寶の尊像、奪ひ返して參りました。即ち爰に。

ト尊像を渡す。

四郎　チエ、忝ない。これと申すも其方が働らき……して〱美鳥は。

磯平　サア、その美鳥さまには……南無阿彌陀佛。

〽云ひつゝ我れと我が腹へ、刀をガバと突き立つれば。

ト磯平、切腹する。

四郎　ヤ、磯平、如何いたした。

ト探り見て

ヤ、何ゆゑあつて切腹なせしぞ、樣子を云やれ、ナ、なんと。

〽問はれて苦しき息をつき。

磯平　サ、下郎の悲しさ生兵法、返す刀に誤まつて、美鳥さまに思はぬ深手。それゆゑにこそ敢へない御最期。主を殺せし申し譯、御推量なされて下さりませ。

〽忠義の爲に誤まつて、不忠となつたる身の因果と、齒を喰ひしばり身を踠き、悲嘆の涙に伏し沈む。四郎三郎も涙を拂ひ。

四郎　例へ汝が殺せしとも、助けん爲に手の廻り、切腹いたすに及ぶまじきに、早まつた事しやつたなア。さは云へ美鳥も某ゆゑ、苦海に沈む覺悟はあれど、惡者どもの手籠めになり

磯平　果は刃に非業の御最期。

四郎　斯くも不運な主從夫婦

磯平　如何なる宿世の業なるか

四郎　情なき身の

兩人　成行きぢやなア。

〽主從手に手取り交はし、嘆き悲しむその折柄、かすかに聞ゆる時の鐘。

ト寺の鐘鳴る。

四郎　ヤ、ありやもう九ツ。

磯平　少しも早く本陣へ。

四郎　寶の尊像差上げて、刀の日延べを

磯平　とは云へ臆病、どうしてお一人。

四郎　氣遣ひ致すな。親の命を助ける心、これより直ぐに。

ト下手より船乘り浪藏、櫂を擔ぎ出かゝりゐて

浪藏　樣子はあらまし聞きました。わしが傳馬に乘せ申して

磯平　寺泊まで十里一飛び。
四郎　天の助けか。忝ない。
浪藏　サヽ、ござりませ。
ト四郎三郎、門口へ出る。橋がゝりより、以前の阿手吉、斑口を布にて結へ出て
阿手　先刻の返報。
トかゝる。浪藏、櫂にて支へるを引ッたくり、四郎三郎に打つてかゝり、ちよつと立廻つて櫂を引取る。これにて阿手吉、見事に内へ返り込む。磯平、引きつけ
磯平　ちつとも早う。
四郎　これが別れの。
阿手　なにを。
ト起き上がるを磯平、捻ぢ伏せ
磯平　未練な事を。
四郎　さらば。
〽さらばとばかり云ひなして、本陣さして。
ト四郎三郎、櫂を杖に、よろぼひながら、向うへ入る。磯平、阿手吉を引き廻す。浪藏は、下手に慄へて居る。この仕組みよろしく、三重、時の鐘の送りにて、幕。

大詰　寺泊本陣の場

役名——夏目四郎三郎 實ハ邊見権次郎。宇佐美源吾。名越長兵衛。邊見甚左衛門。鹿野苑軍八。盗賊、尾形白來也 實ハ微塵のお松。

本舞臺、三間の間、高足本緣附き、欄間に藤橘の紋附きし幕を張り、向う紗綾形襖、白洲障子、上下とも網代塀、日覆より紅葉の吊り枝、すべて寺泊、本陣の體。爰に銀燭臺を照らし、二重上手に、鹿野苑軍八、上下にて住ひ、下手に名越長兵衛、上下にて住ひ、平舞臺、下手に邊見甚左衛門、老けたる拵らへ、麻上下にて平伏してゐる。左右に侍ひ、麻上下股立ちにて扣へ、中の舞にて幕明く。

侍一　推しての強訴は。
二人　無禮でござらう。
長兵　兩人扣へい。
兩人　ハア。

長兵　紛失の寶、詮議日延べは、日限とはいへ、願ひと申すを、取上げぬは役目の不覺。

軍八　アヽ、イヤ名越氏、邊見甚左衞門が科と云ふは、殿よりお預かりの小狐丸の一腰、盜まれたは一昨年の暮、詮議中三年立つても知れぬ寶、知れる期はござるまい。云ひ拵らへてもゝう叶はぬ、殿より御內意蒙むりて、捻ぢ首にしても飽きたらねど、朋友のよしみ、二つには又、名越氏の妹美鳥は、甚左衞門が悴雅次郎と緣を組まれ、云はゞ一家の因みもあれば、尋常の切腹に申し宥めしを、又ぞろ日延べに參りしは、武士に似合はぬ卑怯至極。切腹ならずば、介錯いたして遣はさう。ドレ。

ト立ちかゝる。

長兵　これは又御短慮千萬、全く甚左衞門どの儀、後れし所存はござるまい。

軍八　それになぜ、日延べの願ひを。

甚左　さればでござる。寶紛失いたせしより、切腹は兼ねての覺悟。併しながら、拙者相果てしとて、大切の小狐丸、殿の御手に入るにも非ず、お家を覆へさんと計る侫人あつて、深く秘め置くと推量いたせしゆゑ、草を分けて詮議せしに、この程笠松峠に、自來也と申す山賊住んで、打ち物又は尊像に、心をかけるとの風聞。さてこそ小狐丸の一腰、まつた悴が養父、夏目四郎太夫が所持の文宣王の像とても、もしや彼れが仕業もやと、存じ附きし折も折、只今出仕の道すがら、計らず彼の自來也を召捕り、網乘り物にて引立て參つてござる。

長兵　今に始めぬ邊見氏のお手柄。その曲者をこれへ呼び出し、甚左衞門どのゝ汚名を晴らすが肝要。

軍八　アイヤ、その自來也は、この頃の出來星、刀紛失は三年跡、彼れに覺えもなきは明白。まつた文宣王の像は、鎌倉にて失ひしとばかり、誠は雅次郎養子となり、四郎三郎とて、この國元まで聞えし惰弱者ゆゑ、養父の越度も顧みず、持ち出して質入なせしに疑ひなしと殿の賢察。それゆゑ忍び／＼に雅次郎を尋ねしところ、先刻當所の船場へ上がりしを、早速召捕り、網乘り物にて表門まで引立て參つた。

甚左　ナニ、すりや國遠なせし雅次郎を。

軍八　兩眼盲いたる晝の木兎。この場に於て、尊像の行くへをほざかしお目にかけう、

長兵　それとても、實父が今宵に迫る命と聞き、父に代つて切腹せんと。

初演の繪番附

甚左　さまよひ來りし伜が存念……何は兎もあれ、盜賊自來也をば詮議なし、覺えなき事明白たるその上は、潔よくこの場を去らず。

軍八　切腹さすは殿のお情。

長兵　ソレ、自來也を呼び出せ、

兩人　ハツ。

ト一人は本花道、一人は東の歩みの附け際にて

侍一　笠松峠の山賊、尾形自來也。

侍二　邊見雅次郎事、當時夏目四郎三郎。

兩人　急いでこれへ。

ト東西の揚げ幕の内にて

大勢　心得ました。

ト花道より大勢の捕り手、黑四天にて、網乘り物を舁き、絆天股引の侍ひ、銚子を抱き、同じ拵らへの侍ひ二人、十手を持ち、黑四天の捕り手二人附き添ひ出る。東の揚げ幕より四天の捕り手二人、網乘り物を舁き、後より股引絆天の侍ひ、四郎三郎の大小を持ち、同じ拵らへの捕り手二人、十手を持ち、附き添ひ、東西一時に出て、舞臺の上下へ乘り物を据ゑ

侍三　仰せに從ひ盜賊自來也。

侍四　邊見雅次郎。

皆々　引据ゑましてござりまする。

軍八　ソレ、引き出せ。

皆々　ハア……キリ〳〵出ませい。

ト時の太鼓になり、下手の乘り物の内よりお松、前幕の拵らへにて、太繩にかゝり出る。これと一時に、上手の乘り物より四郎三郎、腰繩にかゝり、足探りに出る。

まつ　ヤアお前は……イヤ、今とろ〳〵と寢たうちに、爰は寺泊の御本陣だな。

甚左　コリヤ、伜雅次郎、養父の汚名を雪ぎ、家を興さうとはせで、嘆きの上に嘆きをかける、不孝者めが。

四郎　ヤヽ、さう云ふお聲は親人樣。お身の上が氣遣はしさに、尋ね下りし折も折、罪なき某をこの繩目。何は然れ親人には、御存命にて忝ない。

軍八　ヤイ四郎三郎、汝鎌倉にて遊里に入り込み、養父四郎太夫が所持の黃金の像を盜み、質入れなして放埒に遣ひなくせし事、疾より殿には御賢察。其方が行くへを尋ねしに、當所の船場へさまよひ來りしこそ天の冥罰。サア、有體に白狀しやれ。

四郎　ムウ。さう云ふ聲は軍八どの。さてはその疑ひにて、身に覺えなきこの縄目を、

軍八　ヤア、覺えなきとは、一通りの申し譯。この上は拷問なして白狀さする……ソレ、用意いたせ。

皆々　心得ました。

長兵　ヤレ待て者ども。未だ雅次郎、答へもなきうち麁忽千萬……イヤナニ雅次郎、申し上げる事あらば、逐一に言上しやれ。

四郎　ハツ、實父甚左衞門、寶詮議の日延べも今日限り、切腹との沙汰承はり、何卒父に代り、腹切つて今暫しの日延べを願ひ、父の命を乞ひ請けて、今一應詮議をと心定めし時も時、家來の磯平が働らきにて、文宣王の尊像、計らずも手に入り、これまで持參仕りましてござりまする。

甚左　ナニ、黃金の尊像が。

ト嬉しきこなしあつて、氣を替へ、素知らぬ思ひ入れ。

軍八　イヤ、そりや似せ物に違ひない。

長兵　その品これへ。

侍ひ　ハツ。

四郎　御前、よしなに。

ト侍ひへ渡す。直ぐに取次ぐ。

長兵　ホ、オ、疑ひもなき黃金の像。これにて養父の汚名も晴れ……尊像出づる上からは、雅次郎の縄目を赦し、大小を與へい。

侍ひ　ハツ。

ト四郎三郎の腰縄を解き、大小を渡す。

長兵　この由殿へ申し上げ、汝が願ひも執成し致さん。大切に所持いたせ。

ト侍ひ、取次いで四郎三郎、懷中する。

この上は瀨見氏。

軍八　時刻延びれば生死の境。

四郎　それも偏へに名越氏。

長兵　萬事は胸に。

甚左　今宵の納まり。

軍八　思へば〱。

長兵　アイヤ、詮議の落着、相待ち申す。

ト正面の襖の内へ入る。

軍八　サ、甚左衞門、今半時の其うちに、刀の在所知れざれば、御身は切腹。

甚左　切腹いたすは覺悟の前……コレ白痴也、汝これまで

所々へ込み入り、分けて劍に心を掛け、盜み取りしと聞きつるが、小狐丸の劍をば、汝奪ひし覺えあるべし。この場で白狀いたしてしまへ。

まつ　豪家といへども金銀には目は掛けず、此方も望む小狐丸、千々に心を碎けども、今に於て手に入らず。仲間にあるなら手間暇なけれど、それも在所の知れざるは、思ひがけねえ素人が、どこぞへどめたに違ひない。盜人冥利、嘘はつかねえ。疑ひ晴らして下さりませ。

軍八　默れ白來也、思ひがけない素人が、持つてゐるとは奪ひし者を、わりや存じて申すか。

まつ　それが知れてあるならば、例へ大名高家でも、盜むになんの雜作があらうか。行くへが知れねえそれゆゑに、うから〳〵と無益の殺生。それを尋ねるお役人樣。

軍八　ヤ。

まつ　ちと御詮議が、まだるいかと存じまする。

四郎　成る程、一通りは聞えたが、委をよう聞けよ。その劍の預かりは、手前が親人、いま半時立つ時は、御切腹なされねばならぬ仕儀。存じ居る事なれば、白狀さへ致しなば、親人の命も助かる道理。得がたき寶と云ひながら、器物の爲に親の命、失ふ忰が口惜しさ、推量なして

コレ白來也、白狀を致しくりやれ。

まつ　そんならわたしが……イヤサ、わしがこの場で白狀すれば

甚左　切腹止まるのみならず、お家を窺ふ佞人を、詮議の手がゝり。

四郎　忠孝二つを立てさすも、汝が心只一つ。

まつ　成る程なア。孝行は天の寶、武士は忠義、女は貞節、切取り働らくこの身にも、心がゝりはアノ子忰、この身はどんな刑罰に遭ふとも、お前方の孫とも子とも思し召し、どうぞ生い先。

軍八　ハヽヽ、女のやうに盜人が、ぼろを出すも餓鬼が可愛さ。

まつ　その心さへあるならば、白狀しやう。邊見の家に預かりの小狐丸を奪ひしは、當時越路に隱れのねえ强盜の張本、斯く云ふ尾形白來也に違ひない。

甚左　然らば其方、奪ひ取つたに相違ないな。

四郎　して〳〵劍は、何れへ隱し置きたるや。

まつ　サアそれは。

軍八　盜まぬ物を盜んだと

甚左　白狀いたせし汝が心。

四郎　行くへが知れねば父上には
まつ　すりや、どうあつてもこの場にて
軍八　切腹さするはまだしもお慈悲。
甚左　最早近づく丑の刻。
四郎　コリヤ自來也、寶の在所申さねば、我れ〳〵親子が
一命のみか、主君のお家にかゝはる大事。
まつ　サア、その寶目を餘所に見るのがわしが商賣、知らぬ事は何所までも。
甚左　云はぬとあらば……ソレ者ども。
侍ひ　心得ました。
ト兩人、六尺棒を、繩の間へ入れ、こぢる。
これでも汝申さぬか。
まつ　イ、ヤ、知らねえ〳〵。盜み取つたと白狀した、その一言を科として、どうぞ早く殺して下せえ。
軍八　イヤサ、行くへが知れねば甚左衞門、切腹の用意、
とく〳〵おしやれ。
甚左　アイヤ、その前方に拙者が拷問……ソレ、子忰これへ。
ト以前の抱子を取り、刀を胸元へ突きつけ
ヤイ自來也、夢にも知らぬ幼な子も、男の子なりや科は同罪。この子忰めをこの場に於て
まつ　ア、コレ、滅多な事を。
四郎　サ、汝が忰を庇ふのも、我れ〳〵親子が寶ゆゑ、捨つる命も思ひは一つ。我が子可愛と思ふなら、どうぞ行くへを。
甚左　サ、白狀せずば、いつそ一突き。
まつ　コレ〳〵、その子は現在あなたの……サア、現在親の科ゆゑに、頑是ない子を殺さうとは。
四郎　非道と思はゞ劍の行くへ、云うてくりやれ。重罪人の盜賊に、手を合せて拜むわいなう。
まつ　イ、エイナア、サア、其方より此方から、拜みたうても手は叶はず、もうこの上は。
ト軍八へ思ひ入れして
云ふに云はれぬ因果なこの身……知らぬと云ふが、この身の誠。
四郎　それでは一人の親人が
軍八　ヤア、無駄な爭ひ。とく〳〵用意。
甚左　白狀せずば、忰は一突き。
まつ　それでも行くへは
四甚　ナ、なんと。

ト八ッの時計なる。

四郎　ヤ、最早刻限……兼ねての覺悟、冥途の魁け。

ト抱子を貫く。

まつ　エヽ、可愛や我が子は

ト寄らうとするを

四郎　おのれも道連れ。

ト盲討ちにお松の肩先を切り下げる。四郎三郎の前に置きたる尊像に、血汐のかゝりしこなしにて、ドロ〳〵にて悶絶する。此うち軍八、下へ下りて

軍八　いつそ身共が。

ト甚左衛門に切つてかゝる。甚左衛門、軍八の刀に目を附ける。軍八心附き、しやんと刀を納め

ムウ。自來也めがくたばつたる上は、殿へ願つて

甚左　すりや、日延べをば御主君へ。

軍八　如何にも執成し致してくれる。

甚左　ハテナア。

軍八　然らば邊見氏。

甚左　軍八どの。

軍八　後刻。

ト正面、襖の内へ入る。上下より絆天侍ひ六人出て

侍ひ　覺悟。

ト甚左衛門にかゝる。甚左衛門、立廻る。四郎三郎心附き、目の見えるこなしにて皆々を投げ退ける。六人上下へ逃げて入る。此うちお松、心附き起き上がり、抱子を抱き上げる。憂ひのこなし。

甚左　ヤ、コリヤ悴、そちや目が見ゆるか。

四郎　ホヽ、誠に兩眼明かなるは……ムウ、自來也を手に掛けし血潮のしたゝり、尊像へかゝると等しく、忽ち平癒なしたるは。

甚左　黑白邪正明かに。

四郎　大聖孔子の

甚左　威徳なるか。

兩人　チエ、忝ない。

ト兩人、尊像を伏し拜む。お松、女の思ひ入れになり

まつ　可愛や我が子は

四郎　ヤ、其方はお松。

まつ　お前はお目が見えるかいなア。

甚左　ナニ、自來也と云ひし盜賊は。

四郎　今の今まで女房とは露知らず、何ゆゑありて、この

妾。

甚左　コリヤ〳〵悴、女房と云やるからは

四郎　鎌倉表で聞れ染めし

甚左　アノ、微塵流の劔術に、手練なせしと聞き及ぶ

まつ　微塵のお松と申す者不束者。

甚左　そんなら殺せし幼な子は

まつ　あなたの初孫雅之助。

甚左　エヽ。

　ト愕り抱き取る。

四郎　さては手に掛けしは悴であつたか。コレお松、二年振りに巡り逢ひ、何卒親人の汚名を晴らし、初孫の雅之助をお目にかけ、我れも眼病平癒して、顔を見たいと思ひしに。

甚左　父親も祖父も、死顔に對面する、因果は又も世にあららか。

四郎　斯う云ふ事なら餘所ながらも、知らせてくれいで、ア、恨めしいぞや。

まつ　サヽ、そのお恨みは御尤もながら、女だてらに盗賊の首領なりと、なんとお前に明かされませう。あなたの御手にかゝらずとも、死なねばならぬわたしの身の上。その覺悟は、まツこの通り。

　ト刀を抜き、腹へ突き立てる。

四甚　ヤヽ、なんと。

まつ　この身の云ひ譯、聞いて下され……佛像の紛失より、あなたには御行くへ知れず、お跡を慕ひ来る道にて、山賊に騙かされ、連れ行かれしは黒姫山、尾形白來也が隠れ家にて、添臥しせいと無體の有り樣、遁がれん手段のなきのみか、見らるゝ通り懐妊ゆゑ、産み落したるその上にてと、騙しすかして折を窺ひ、酒に長せし夜半を幸ひ、白來也を刺し殺せし、手練に恐れ小賊ども、我れを二代目の白來也と、改め額いを幸ひ、御實父甚左衛門さまお預かりの、劔紛失より重きお咎め、又二つには佛像の在所を尋ね、お二人を世に出ださんと、所々へ入込み尋ぬれども、今に於て手がゝりなく、最前伊平どのが道々の話しに依り、この程計らず信濃川にて、我が手にかけし侍ひは、夏目四郎左衛門さまなりと、聞いて愕り、現在夫の兄御をば、手にかけたる大罪人、直ぐに自害と思ひしが、今宵に迫るあなたのお命、この本陣へ忍び入り、舅御を盗み出し、その上にて事を計らんと思ひしに、あなたの手練に召捕られしは、この身の因果、御

推量なされて下さりませ。
四郎　ヤヽ、すりや兄上を、信濃川にて其方が。
まつ　剱と見れば旅人を我が手にかけ、夫が難儀を救はんと、心を砕く甲斐もなく。
四郎　思ひがけない女房が、現在兄を討つたとは、情ない事してくれたなア。それのみならず親人を、助け出さんと入込みしも、寶の詮議と盗賊を、捕へて見れば我が子供。
甚左　孫とも知らずむごい呵責、この世からなる地獄の苦しみ。
まつ　親子々々が阿鼻焦熱
四郎　約束事とは云ひながら
まつ　因果同士の
三人　寄合ひぢやなア。
ト名越長兵衛出てゐる
長兵　ホヽウ、三人の愁傷察し入る。
四郎　エヽ、あなたは
甚左　名越長兵衛どの
四郎　何は兎もあれ、イザ尊像を。
ト長兵衛へ渡す。

長兵　委細はあれにて具さに聞く。女に稀れなるお松が貞節。天晴れ〳〵。
ト向うより宇佐美源吾、裏打ちにせし、前幕の密書を持ち、駈け出て、本舞臺へ來り
源吾　オヽ、若旦那様も、大旦那様も、これにお出でなされましたか。剱の行くへが知れました。
四郎　汝は源吾
甚左　剱の行くへが知れしとは。
長兵　して、その仔細は。
源吾　最前新潟の稽古場より、頼み來りし急ぎの仕事、八彦明神の畫像の掛け物、中より引裂き裏打ちに、貼つたる書き物。イザ、御覧下されませ。
四郎　ナニ、書き物とな。
ト讀み下し
ヤヽ、この書面の様子にては、小狐丸を盗みくれよと、その頼み手は鹿野苑軍八。
甚左　ムウ。最前の様子と云ひ、刀に人口を憚るは、慥かに曲者。
まつ　そんなら、わたしの疑ひは
四郎　如何にも晴れた……イデこの上は軍八を。

長兵　いそふれ者ども、早參れ。

四人　心得ました。

ト上下より侍ひ四人、袴股立ち、襷、鉢卷にて、十手を持ち出て來り

長兵　其方どもは奧へ踏ん込み、軍八を。

四人　心得ました。

ト奧へ入る。直ぐに二人、見事に返り出る。後より軍八、肩衣を脱ぎかけ、二人の手を取り出て

軍八　ヤア、理不盡に、なんと致す。

長兵　ヤア、小狐丸を奪ひし曲者。

四郎　最早叶はぬ。

捕手　覺悟いたせ。

軍八　ヤア、奪ひしなぞとは覺えなし。

長兵　ヤア、論は無益。者ども、ソレ。

ト四人、軍八にかゝる。ちよつと立廻り。二人を當て、二人を左右へ切り返し、軍八、拔刀にてキッとなる。

ドロ／＼、雷序になり、上手へ狐火現はれる。

四郎　ハテ心得ぬ、血潮の穢れにこの場の動搖。

甚左　數多の狐火あたりを照らし

軍八　館の內を守護なす有樣。

源吾　正しく尋ぬる小狐丸。

長兵　隱し持つたる鹿野苑軍八。サア尋常に

四郎　最早叶はぬ劍の盜賊。

皆々　繩にかゝれ。

軍八　ヤア小癪な。覺悟いたせ。

ト切つてかゝる。その手を四郎三郎取つて

四郎　ヤ、燒刃金色違ひなく、お家の重寶小狐丸。

甚左　さてこそ寶の盜賊は、軍八に相違ない。サア、眞直に白狀しやれ。

軍八　サアそれは。

長兵　但し踏みつけ、繩かけうか。

軍八　サアそれは

四人　サア／＼／＼、

軍八　この上は破れかぶれだ。覺悟しろ。

ト立廻り。四郎三郎當て、軍八倒れる。四郎三郎、軍八の刀を取り、鞘へ納め、長兵衞へ渡し

四郎　二品揃ふ上からは

甚左　御前よしなに、お執成しを。

長兵　お案じ召さるな。拙者が胸に。

まつ　チエ、忝ない。それで夏目のお家も再興。

長兵　錦を飾る出世の門出。

四郎　妻と悴は冥途の門出。

源吾　浮世は夢の小車や

甚左　めぐる因果にいとし子を

まつ　宵の乳房が末期の一滴。

四郎　思へば果敢なき

五人　浮世ぢやなア。

ト軍八心附き

軍八　おのれを生けては

ト甚左衛門へかゝる。甚左衛門、突き廻す。四郎三郎、軍八を引きつけ

四郎　最早この世の

まつ　名残りに我が子を。

ト抱子を抱き上げ、目の見えぬこなし。

四郎　人の命は草に置く、露より脆き

ト上手より以前の諸士一人出て、四郎三郎へかゝるを、見事に投げる。これを木の頭。

成行きぢやなア。

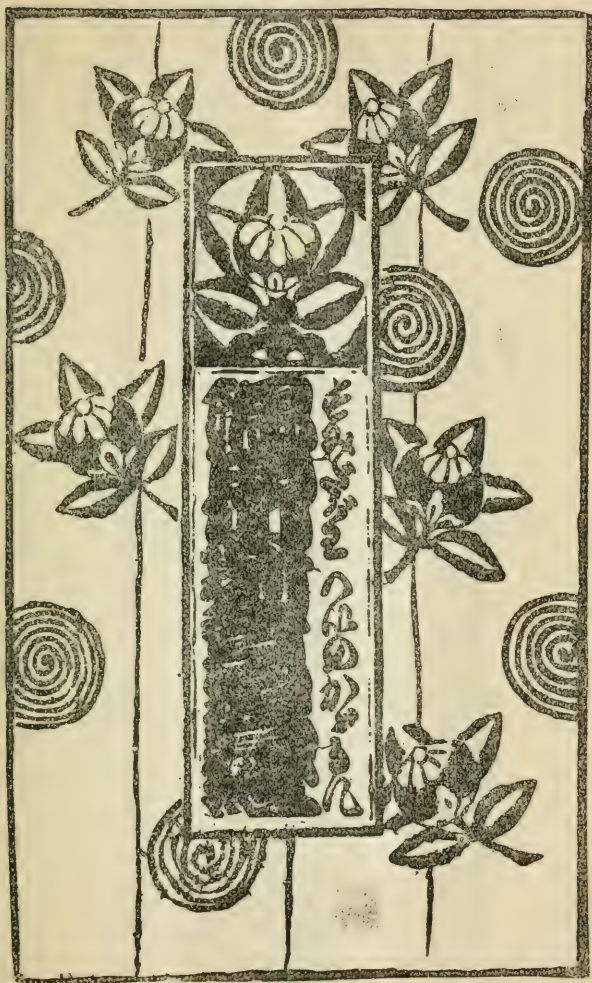
トこれにてお松、落入り、皆々愁ひのこなし。どらの送りにて、よろしく

新板越白浪（終り）

ひやうし　幕

ところ四谷の新宿町に
その名は誰れか白糸が
命のお八十と浮名を立つる
鈴木主水人情寄談

隅田川對高賀紋

初演繪番附表紙

隅田川對高賀紋

序幕　麹町貝坂の場

役名――白糸母、清瀧。侍ひ、伴藏。同、久馬。
橋本屋若い者、孫助。筑波根山平。

本舞臺、三間の間、上手へ掛けて奥深に竹矢來の片漏斗、柱際、赤土山のなだれ、下手、柳の立ち木、同じく吊り枝、滿月を引き出し、すべて麹町貝坂の體。爰に清瀧、菅笠を敷き、癪の差込みし思ひ入れにて惱み居る。これを伴藏、久馬、そぼろなる拵らへ、着流し、大小、草履、下駄にて介抱してゐる見得。禪のツトメにて幕明く。

伴藏　おつかア、しつかりして居ねえ。

久馬　こちとらも覺えがある。旅へ出て鹽梅の悪いのは悲しいものだ。

清瀧　知らぬ途中の夜道にて、持病が差込み、一足も歩まれませぬ。好い所へあなた方が、お通りかゝり下さりまして、御介抱にあづかり、やう／＼人心地になりましてござります。

伴藏　して、何處の宿屋へ行くのだか、先が知れてゐるのかえ。

清瀧　ハイ、四谷新宿とか申す所でござります。

久馬　そいつは、まだ餘ッぽどあらア。

清瀧　さうして爰は、なんと申す所でござります。

伴藏　爰は麹町の貝坂と云ふ所よ。

清瀧　これより新宿まで、何程ござります。

伴藏　さうサ、小一里もあるのサ。

清瀧　それはまだ餘程の道のり。その新宿に、橋本屋と申す女郎屋がござりますか。

久馬　おつな內を聞く。そりやアおらが色の內だ。

清瀧　そのお內へ、吉原の若菜屋より住替へとやらに參りました、白糸と申します女子がござりまするか。

伴藏　そりやおらが劍術の先生の妹だ。

清瀧　そんなら兄の捨五郎も、この鎌倉に……イヤ、その兄と仰しやるは、どのやうな人體でござりまする。

久馬　どのやうも此やうもない。いま後から來るから、用があるなら逢つたがいゝ。
作藏　お前は白糸の阿母か。
清瀧　お恥しながら、都に殘りし母親でござりまする。エヽモウ兄弟、この國に居るならば、なぜ文通にても云つておこさぬ。イヤモ、親の心子知らずとは、よう申したものでござりまする。
久馬　さう云ふうちに、向うから來る提灯がそれだ。
兩人　オヽイ〳〵。
ト向うより、山平、着流し、浪人の拵らへにて、串ざし團子を二本持ち、後より孫助、若い者の形にて、橋本屋と記せし小田原提灯を提げ、出て來る。
山平　氣の短かい附き馬だなア。金の出來るまで連れて歩くのは御定法だ。
孫助　へゝ、知つて居ますせ。連れ衆を先へはいて、足取りのいゝ所で消えてなくなるとは、古うござりますぜ。
山平　妹の主人方だから、理不盡な事が出來るものか。提灯持ちは先へ立つものだ。
孫助　附き馬は後から行くのは、御定法が開いて呆れらア。
ト山平、團子を喰ひながら、舞臺へ來り
山平　恐ろしい邪推者だ。勝手にしやがれ。
作藏　アヽ、コレ〳〵、そこどころぢやねえ。先生、おてまへ樣の御母公が京都からござつた。
山平　おらア親はねえ。
ト清瀧を見て
ヤア。
清瀧　其方は。
山平　こんたは。
作藏　そんなら矢ッ張り阿母か。
山平　コレサ〳〵、これにはいろ〳〵譯のある事。お身達の前ぢやア差合ひがあるから、一足先へ行つちやアくれまいか。
孫助　山平さん、退引きならなくなつてから、その婆アをだしに使ふのだね。
山平　云ひ草を云ふにやア及ばねえ。番町の伯父の所まで行きやア、みんた拂つてやらう。
孫助　爰へ來るまでに、何軒寄つたか知れねえが、みんなお斷りを喰ふ癖に。
山平　愚痴をこぼすなえ。斯うやつて百二十里先から、阿

母が下つて來るからにやア、いづれ土產が……そこらは推量して行けと云ふ事よ。

孫助　そんならキッとお頼み申しましたぜ。

ト孫助、伴藏、久馬、橋がゝりへ入る。

清瀧　甥の山平ではないか。

山平　お久し振りで逢ひました。

清瀧　其方のやうた惡黨が、よう今まで何事もなう居やつたなう。

山平　左やうサ。業が濟しねえから、今に達者で困りますのサ。

清瀧　エヽ、人でなしの口功者め。同家中、傳內が娘お八十を娶らんとせしに、承引せぬを遺恨に思ひ、柳の馬場で闇討ちになし、その夜眉間へ疵を受けしを、口論せしと夫ぞ僞はり、一時直しの妙藥で、その夜のうちに疵は平癒。傳內どのゝ娘には、夫を頼み敵を尋ね、この東路へ下りしが、性根惡さにおのれも國遠なし、白糸は幼少の時より、秋葉の館へ奉公に上げ置きしゆゑ、顏見知らぬを幸ひに、兄捨五郎が名を衒つて。

山平　オヽ、その通り。傳內を討つたる晩に、伯父貴があわてゝ藥を出す時、印籠に附いて出た捨五郎が臍の緒書……これを證據に兄と僞はり、去年から白糸のお庇で、小遣ひにも困らねえ。所へこんたが尋ねて行つて、兄でねえ、ヤレ、傳內を殺したと云はれると、色男の鈴木主水は、お八十が亭主ゆゑ、この首がころり。そこでこなたに折入つての頼み。

清瀧　憎いとは思へど甥の事。口外してくれなと云やるのか。

山平　イヤ、お前の命が貰ひてえのよ……イヤサ、白糸に逢はれちやア、仕組んで置いたもくが割れらア。コレサ、遺言があるなら、小短かく云ひねえ。骨はおれが拾つてやらア。

清瀧　云はう方なき極重惡人。年は寄つても前司が妻。やわか、おのれに。

ト懷劍にて、突いてかゝるを踏まへ

山平　エヽ、出し投けに、ふざけやアがるな。何所ぞの寺の卵塔場へでも、連れて行つてと、他人でねえから後々の事まで、心配してやるのに。

清瀧　さう云ふおのれを。

ト立廻り。懷劍を打ち落し、切り下げる。此うち中間、小風呂敷を抱へ、出て舞臺へ來り、この體を見て

慄へながら後へよつて、こなし。

山平　どうだ、苦しいか。ヤレ、可哀さうに。併し、錢金は浮世の寶。おれが預つてやりませう。

ト清瀧の懐中より打がへを引き出す。その手に縋るを、蹴飛ばす。

清瀧　一人の娘を、遙々と尋ねて來て、現在の甥に殺され死ぬるのか。エヽ、口惜しい……例へ此まゝ死ぬるとも、娘に逢うて、この無念、云ひ聞かさいで置くべきか。

山平　オヽ、跳け〳〵。先づこれで新宿の拂ひをして、跡がお身の廻りのお支度金。ア、有り難え。冥途へ行つたら、伯父貴にもよく云つて下せえ。ドレ引導を。

ト金を懐中して、脇腹を貫き、止めを刺す。この時、ドロ〳〵になり、灯入りの魂ひを引き上げる。山平、白刃を納め、これを見上げる。

ア、、氣味の悪い人玉だな。なんだか足がぞくついて來たぞ。

ト花道へ行く。

有り難え。わざ〳〵伯母御が持つて來た二十兩。

ト行く後より

中間　人殺し。

山平　ナニ。

中間　ではござりません。

ト慄へる。山平、足早に、向うへ入る。中間、見送りながら、血のりに辷つて、清瀧の側へこけかゝり

南無阿彌陀佛々々々々々。

トこの仕組みよろしく　ひやうし幕

二幕目　新宿橋本屋の場

浄瑠璃「重褄閨の小夜衣」清元連中

役名――鈴木主水。同女房、お八十。同下部、宇助。田舎者、勘右衛門。大工、孝吉。通人、文福女郎、おいろ。同、おかん。新造、お秋。若い者、孫助。同、喜助。同、太七。小間物屋治兵衞。茶屋女房、お大。侍ひ、伴藏。同、久馬。筑羽根山平。橋本屋白糸。

本舞臺、四間中足、沓脱ぎ付き。正面襖障子、下の

方、桔梗の紋の上に、横に橋本屋と染め出して暖簾、大行燈を据ゑ、上の方、越後屋と記せし引手茶屋、掛け行燈、向う黒板塀、この前に家名を鑄出せし鐵の用水桶、破風付きの小屋根、この上二階格子、すべて新宿旅籠屋の體。店先に女郎おかん、おいろ、簪を見てゐる。緣端に治兵衛、小間物屋の拵らへにて、荷包みを置き、商ひをしてゐる。平舞臺にお大、茶屋女房の拵らへ、ぶら提灯を持ち、五郎八、三八、幇間の拵らへ。孝吉、羽織、盲目縞の股引き、尻端折り、大紋附きの絆纏の若い衆を供に連れ、立ちかゝり居る。孫助、若い衆にて止めてゐる見得。騷ぎ唄にて幕明く。

だい　モシ孝さん、わたしどもの前は兎も角も、橋本屋の前を素通りとは、あんまりでござりまする。

三八　お大さん、お前は明日から、この土地の住居は出來れえ始末ぢやね。

孝吉　コレサ、今日は出入り屋敷の木寄せをして、木場へ行かねばならぬから、あの女に、よく云つて下せえ。

孫助　イエ、この中も、あゝ云ふ羽目でお歸し申したゆゑ、跡であのお子さんが、口惜しがつて、私しなぞは、煙管で前歯をみんな叩かれました。

孝吉　そんなら、用を片附け次第、遲くとも今夜來るから。

かん　イエ、そりやアなりません。旁々白糸さんに云ひつけられて居りますから。

三八　モシ、人に恨みが有るものか無きものか。

五郎　思ひ知らせん、思ひ知れ。

孫助　跡で又私しが、孫助々々いたしますねえ。申し、そんなに御用もござりませんねえ。

若者　左やうサ。

いろ　モシエ、いゝ加減に邪慳な思ひも、云つたがよいわいなア。

かん　思ひと云ふものが、ありますぞえ。

孝吉　思ひと云ふのは、彼方を向いて、舌を出すのかえ。

だい　其やうな事を、仰しやらずと。

いろ　實にお糸さんは、可哀想だよ。

孫助　決して惡止めは申しませぬ。

だい　ズッと、わたしがお請合ひ申します。

孫助　お客だよ。

　トこれにて、子役大勢。

子役　アイヽ。
ト よろしく、若い衆、附いて孝吉奥へ入る。橋がゝりより八五郎、勘太、そぼろなる拵らへ、一升樽、竹の皮を提げ、出て來り
八五　橋本屋だ。押上がれ〳〵。
勘太　お客だよウ、が聞いて呆れらア。オイ、賴むぜ。
ト 土足にて、上がりにかゝる。
孫助　アヽ、モシ〳〵、おふざけなすつちやアいけません。女郎衆も、お座敷もございません。
八五　あそこに居るので、間に合してやるべえ。
いろ　いけすかねえなう。
治兵　お間に合せたくないものだ。ハヽヽヽ。
八五　この野郎、ひよつとこを見るやうな面アしやがつて、サア、外聞が悪い。
孫助　お前方の事を云つたのぢやアねえ。
八五　この野郎を、しよびいて行け〳〵。
孫助　そりやア無理と云ふもの。
ト 摑み合ひになる。向うより平吉、大形の廣袖、下は浴衣、山吹の花を提げ、湯上がりの體にて出て來り、後より田舎者、勘右衞門、脚絆、尻からげ、馬の沓を提げ、篠竹を持ち、出て來り
勘右　コレ息子、橋本屋と云ふ女郎宿は向うかな。
平吉　わたしもそこへ行くのだから、一緒にお出でなせえ。
勘右　オヽ、喧嘩がばたつて居やアがらア。面白い〳〵。
ト 平吉、足早に來て、八五郎を突き退け、勘太の手を捻ぢ上げる。
だい　オヽ、お前は山口屋の平さん。
かん　ほんに、よう來て下さんしたなア。
八勘　アイタヽヽ。
勘太　そんならわれは、山口屋の平餓鬼だな。
八五　平でも虎でも料簡ならねえ。
八勘　うぬを、撲らして。
ト かゝるを、ちよつと立廻り、投げ返す。兩人、橋がかりへ逃げて入る。
だい　よい所へ平さんがござんして、直に濟んでしまうたわいなア。
いろ　あれで懲り〳〵しましたらうわいなア。
平吉　その代り、爰の內の寄せ場へ行つて、手妻をやつて見せねえ。

孫助　今のお禮だ。仕方がねえ。

女皆　サア、ござんせいなア。

ト平吉、女郎、孫助、治兵衛、奥へ入る。勘右衛門、見送り

勘右　成る程、在所の餓鬼と違つて、剛敵なものだ。

ト奥より若い者太七、出て來り

太七　あなた、お遊びでござりまするか。

勘右　ヨウ、貴樣人相を見るな。

太七　へ、、商賣でござりまするから、慥かあなた、お馴染がござりましたな。

勘右　イヤ、よく當てる男だ。去年普請の出來た頃に來て、それから日野の木家へ行つてゐたが、おらがお女郎は、吉原から博勞して來た、アノ、あんとか。

太七　お糸さんでござりませう。

勘右　また、當てやアがつた。

太七　今夜は二三人、お客樣が落ち合ひでござりまするから、廻しのござります所は、御勘辨下さりませ。

勘右　あの女郎め、おれに惚れ込んでゐるから、外の客の所へ行くこんではねえ。時に、連れがあるが、どつか廣い所へやつてもらひたいの。

太七　エ、、如何やうとも致します。お幾人樣でござります。

勘右　アニハア、まだ二才だから、惡くそべえて跳ね廻るから斷わつて置く。

ト花道付け際へ行き

ヤイ、牛太。掛合ひがおッついたから、引ッ張つて來い……アレ、子供が危ない。手綱を短かく取れえ。

太七　ア、、モシ／＼、お連れ樣とは、馬の事でござりますかえ。

勘右　知れた事だ。二才でふざけ廻るから斷わつたのだ。

太七　裏に馬繋ぎがござりますから、お引きなされまして

勘右　それなら先づ、馬繋ぎを見立て、からの事にしべえ。

太七　こいつは手古摺り……サア、お出でなされませ。

ト太七、案内して、橋がゝりへ入る。向うより、前島大九郎、遠國侍ひの拵らへ、梅の枝に、吸筒を付け、かたげ、後より下部宇助、ウロ／＼出て來り

宇助　慥かこの邊だと思つたが。

大九　これは唐土、かねきん山の麓。

宇助　モシ／＼、そんなら爰は、新宿ぢやアござりませぬ

か。
大九　ナニ、其方は何奴だ。
宇助　わしは新宿の、なんとか云ふ内へ參る者でござりまする。今お前さんが、これは唐土かねさん山の麓と仰しやりましたから。
大九　イヤ、あれは猩々の謡だ。謳つて聞かさう。足元はよろ／＼。
宇助　アヽ、それで思ひ出した。足元屋だつけ。
大九　エヽ、たわけ者め。橋本屋であらう。
宇助　ムウ、よく知つてゐなさるね。
大九　知らいでならうか。二世と交せし女の勤めてゐる宅ぢやもの。用事あらば、サア同道。
宇助　ハイ／＼。
ト舞臺へ來る。此うち孫助、奥より出る。
大九　誰れぞ頼まうぞよ。
孫助　ヨウ、大九郎さま、よう入らつしやりました。
大九　彼奴は、身共の事を、懐かしう思つて居やつたらうな。
孫助　あなたのお噂ばかり致して、御膳もろくにお上がりなされませぬ。

宇助　旨く云ふぜ。おらも御新……イヤナニ、旦那樣に云ひつかつて、先へ駈け拔けて來たが、なんとか云ふ女郎だつけ。
大九　たんと申さうとも、恐らく、お糸に越した美婦人は、又とあるものか。
宇助　そのお糸だ。
大九　ナニ、この者の主人もお糸を。
孫助　イエモウ、先へ五六人さま、上がつてお出でなされます。
大九　よいワ。例へ何十人落ち合ふとも、某をお敵が焦れてゐるであらう。
ト向うより四つ手駕籠を、若い者舁いて出て、直ぐに舞臺へ來る。
宇助　オヽ、駕籠屋さん、爰だ／＼、爰に違ひねえ。
孫助　これは、よう入らつしやりました。
駕屋　御家來さん、よくお聞きなすつて御覽じませ。
大九　ハテ、橋本なら、明るい内に違ひねえ。橋本の明るい内と云ふから。
孫助　イヤ、これは隅へは置かれませぬ。
大九　ズツと、眞中へ。

孫助　お客だよう。
子役　アイ〳〵。
　ト駕籠を見世へ横附けにする。この仕組みよろしく、道具ぶん廻す。
　本舞臺、上へ寄せて三間、折り廻しの唐紙、下手一間の廊下、左右灯入りの障子屋體、下の方、橋がゝりへ掛けて連子窓、八軒を灯し、橋がゝり揚げ幕、前、二階上がり口、手摺り舞臺。眞中に山平、伴藏、久馬、したゝかに醉つてゐる。女郎おかん、おいろ、藝者おかれ、酌をしてゐる。茶屋女房お大、肴を取り居る。側に燭臺、酒臺を取散らし、皆々狐拳をしてゐる。お廻りの合ひ方にて道具納まる。
久伴　そりや空相手で。
三人　イエ〳〵、づるうござります。
久馬　此奴は、おれが目が惡いと思つて、イカサマをしやアがる。その科に依つて、大きいのでやれ〳〵。
伴藏　べら坊め、おらア女と討死だ。
久馬　イヤ、さうは云はさぬ〳〵。
山平　ヤイ〳〵、よせえ、面白くもねえ酒だ。お上の御樣子も知りやアがらねえで。
だい　オヤ、急に堅氣におなりなすつたねえ。御機嫌だらうが、
山平　此奴等は、女郎が側にゐるから、おらが女め、人を白痴だと思つてゐやアがる。
　ト女郎お歌、出て來り
うた　アレマア、堪忍しておくんなさいまし。
山平　オヽ、お歌か。
久伴　サア、寐る事〳〵。
だい　中どん、お床を廻しておくれ。
　トあたりの酒肴を片附け、若い衆、中番、出て來り
若衆　お大さん、旦那のお床は、廻し床に致しませう。
だい　あなた方は、御存じのお部屋へ。
山平　おれ一人廻し床か。
かん　お歌さん、たんとお樂しみ。
いろ　羨やましうありますよ。
うた　察しておくんなさいまし。
女皆　左やうなら。
伴久　お床入り〳〵。
　ト皆々、下の廊下へ入る。
うた　山さん、ぬしやアあんまりでありますよ。ちつとの

間、腹を立てずに居ておくれてもよいではないかえ。
山平　イヤ、腹は立たねえが、一遍も顔を見せねえから。
うた　ナニ、今夜の客人は邪推もんで、子供を騙して、お前が上がつたと聞き、サア色男が來たから、有頂天になつてゐるから、性を附けてやらうのなんのと、さうしてよくお前の名まで知つてゐる。あんな好かねえ人はないわいなア。
山平　おれが名を知つてゐる。
うた　わちきと譯があると云はれて、お前、外聞が惡いかえ。
山平　さうぢやアねえが、人に遺恨を受けてゐる……イヤサ、何も惡い事をしたのぢやねえが。
うた　大方、どこぞの女郎衆でも、連れて出て
山平　イヤ、そんな浮氣の事ぢやねえ。
うた　そんなら打明けて云ひなさんせ、末始終、お前の所へ行かうと樂しんでゐるわちきに、隱し立てして、行く先が思ひやられるわいなア。
　ト泣く。
山平　さう云はれると仕樣がねえが、まだ〳〵てめえの心がどうも。

うた　オヤ、憎い。よくそんな口が云はれたものだねえ。帶を解きなさんせ。
　ト屏風を立て廻す。後にて
孝吉　エヽ、否だ〳〵。
皆々　マア〳〵、よろしうござりまする〳〵。
　ト孝吉、腹の立ちたる思ひ入れにて出るを、治郎八、おさと、おふく、おつる、おかめ、皆々藝者にて出て來り
孝吉　大概にしやアがれ。ちよつと顔を出すと其まゝだ。獨りで寐る位なら内へ寢らア。
ふく　モシ旦那、お前さんにもお似合ひなさいません。
さと　アレ、孝さん、お糸さんの心は、お前さんも、御存じぢやアござりませんか。
治郎　今夜は生憎、客人が立て込みまして、初會のお客の方へ、ちよつとお出でなさんしたのでござりませう。
つる　お前さんはお馴染の事、それで氣兼ねもないと思つて。
孝吉　エヽ、氣兼ねのねえも大概がいゝや。コレ、野郎はけちでもナ、下町ぢやア、相應に顔の賣れてる男だア。この宿へ來て、白痴にされたと云はれちやア顔が立たね

え。否だ〳〵。
ト孫助、出て來り
孫助　マア旦那、御料簡なされませ。
ト留めるを暴れて居る。よき時分、階子の上がり口より、白糸、好みの衣裳をかいどり、上がつて來り、孝吉の後より押へる。
孝吉　エ、、誰れだ〳〵。
白糸　誰れでもない、わちきだよ。なんだねえ男らしくもねえ、外の客たア違はアねえ、年季までも入れる相談をしたぢやないかね。本當に口惜しくなるよ。
ト孝吉を抓る。
孝吉　アイタヽヽ、ひどい事をするぜ。
白糸　さうして、この間の話しの事はえ。
孝吉　イヽヤ、如才があるものかえ。
ト腹掛けの隱しより、金を出して
コレ、これを取つて置かつし。
ト白糸にやる。
白糸　孝さん、後生だから、もうちつと部屋へ行つておくれ。今夜喧ましいお座敷さんのお初會で、誠に困つてゐるのだから……モシ、どうぞお附き申して行つておくんなさいましよ。
かめ　サア旦那、マアお部屋へ。
孝吉　いゝと云ふ事よ。おれも野暮は云はねえわな。
白糸　そんなら皆さん、お賴み申しますよ。
皆々　サア、入らつしやりませ。
ト孝吉、藝者皆々、下手の廊下へ入る。白糸、ツカツカと屏風を明ける。
山平　ア、誰れだ。不作法千萬な。
白糸　よいわね、わちきだわね。お客さん、ちよつと急用だよ。
山平　コレ〳〵、てめえも察しの惡い。
トお歌、白糸の側へ來り
うた　來なすつたかえ。
白糸　サア、それだから、お前の客人の積りにして、お針部屋の次の座敷へ入れ申すやうに、吉どんに云つて置いたから。
うた　わたしが都合よくして置くわいな……モシ、ちよつと行つて來ますよ。
ト上草履を履いて、逸散に階子口へ入る。
山平　なんの事だ、氣のきかねえ。

白糸　エヽ、モウ、せかれてゐる主水さんを隱してあるのゆゑ、氣が揉めて／＼。それはよいが、あの子にもお前が、わたしの實の兄さんと云ふ事を、よく口留めはして置いたが、お前、必らず柳の馬場で、傳内とか云ふ人を殺したと云ふ事を、あの子は元より、友達衆にも云ふ事はならぬぞえ。

山平　そりやア口が腐れても云ふ事ぢやない。お主もあの主水に惚れるはいゝが、必らず／＼敵はおれだ、と云つちやアくれめえなア。

白糸　勿體ない事云はしやんす。親なき後は兄を親、先立たしやんした父さんや、京都にござんす母さんの手前へ對して、お前を討たしてよいものかいなア。

山平　それ聞いて安堵した。いよ／＼年が明いて、主水とお主が夫婦になりやア、おらア又餓鬼の時から惚れてゐる、あのお八十を。

白糸　ほんに命知らずな。それはつかりはよしにして下さんせ。わたしや塚さんと云ふ客人が、身請けすると相談最中、それゆゑ今宵主水さんを。

山平　なんの、それを案じる事があるものか。年季を拔いて連れて行くまでは、金づくで自由にもならうが、それから先は、實の兄が爰に居たと飛び込んで、塚本屋の心で、儕はせて見せらア。

白糸　アヽ、其やうな不人情な。

山平　ハテ、可愛い男と添ふと云ふには、ちつとは横ツ倒しもしにやアならねえ。そりやアさうと三四兩、都合してくれねえか。

白糸　あの主水さんの見世の勘定、つかへてあるゆゑ、三方四方一時には。

山平　コレ／＼、たつた一人の兄さんぢやアねえか。さう色男ばかり可愛がつてゐちやア。

白糸　サアそれは知れてゐるけれど。

山平　けれどなら、貸してくれ。

白糸　ほんに、いつそ死んだなら、この思ひはあるまいわいなア。

　トおかめ、廊下より足早に出て來り

かめ　お糸さん／＼、大さんとやらが、大層怒つてお出でなさるから、ちよつと寐かしておくんなさいませ。

白糸　氣障だねえ。

　トおかめ、白糸、廊下へ入る。

山平　エヽ、あの女めのお蔭で女郎を追ひなくしてしまつ

た。

ト足音するゆゑ、横に狸寢入りをする。お歌、階下より上がり來て、屛風を明け

うた　オヽ、實のねえ、寐さしつたね……この間にちよつと。

ト行かうとする。

山平　アヽ、コレお歌、何所へ行く。狸だ〳〵。

うた　オヽ、嬉しいね。

ト九ツの拍子木、鳴る。廊下の奥にて

藝者　皆さん、時にお出でなさいませよ。

うた　エヽ、モウ、自烈てえ。

山平　また行くか。

うた　氣が落ちつかぬから。直だわね。

ト逸散に、階子を下りる。

山平　イヤ、とんだ番狂はせだ。どなたも時にお出でなさい。

ト枕二つ取つて、拍子木のやうに打つ。これをキッカケに、この道具、ぶん廻す。

本舞臺、以前の廊下を横に見たる通しの障子屋體出て正面になる。爰に太七、拍子木を持ち、お歌と立ちかゝりゐる見得にて、道具納まる。

太七　そんなら、帶紐解いても、本音を出さねえと云ふのか。

うた　なんぼう勤めの身ぢやとて、わたしやどうも、そればつかりは。

太七　コレサ、お前は惡い料簡だ。あれ程姉御も、事を分けて云つたのに。

うた　アイ、わたしや解らず屋ぢや程に、どうでしまひは、捨てられ者でござんす。

太七　コレ、そんなに潔白な事を云ふが、見て居ねえから、どんな事をするか。

うた　なんのマア。

ト女郎おかん、下手より出て來り

かん　お前方、暗がりで、何を爭つて居やしやんす。

太七　サア、お前も知つての通り、今夜は帶紐解いて彼奴を騙し、身の上を糺してくれろと頼めども、聞入れぬ上に、横に我慢を。

かん　サア、それも尤も。さりながら、お糸さんは元より人に知られてはならぬ大事。マア、ちよつと彼處の明

部屋で。
うた　わたしが心も、とつくり話した上。
ト下の障子屋體の内にて
孫助　オヤ〳〵、拍子木がどこかへ迷子になつてしまつたぜ。
かん　ちつとも早く。
ト拍子木を取る。
うた　ござんせいなア。
トずつと上の障子屋體へ、太七を連れて入る。おかん、不器用に、拍子木を叩き、橋がゝりへ入る。下の障子を引抜く。爰に勘右衛門、たけり立ち、孫助、詫びてゐる見得。
勘右　一體貴樣は、爰のなんだ。
孫助　若い者でござります。
勘右　頭禿らかした若い衆ちうがあるものか。
孫助　ヘイ、御尤もさまでござります。
勘右　親が長々の煩ひだと、ほろり〳〵お泣きやるゆゑ、おらもほろり〳〵と、角銀のう二つさアくれたら、せめて面でも持つて來べき筈だ。おれを在郷もんだと侮つて馬鹿にするのか。サア、あの女にくれた金返せ。

孫助　有やうはお部屋へその親御の所から、人が來てゐますから、只今あなたの下すつたを。
勘右　あんだと。
ト段々に聲高になる。上の障子を明ける。爰に喜助、蒲團の上に座り、煙管を廻してゐる。橋がゝりより白糸、上草履にて出て
白糸　ア、切ない。モシエ、爰の所をちつと擦つておくんなさいませ。
ト勘右衛門、不承々々に擦りながら
勘右　不便だから貴樣に云つて聞かせるのだ。
孫助　ヘイ、御尤もでござります。
白糸　本當に主は、曲つた事は云はつしやらねえから、お前も氣をお附けよ。
孫助　イエモウ、これに懲りぬ事はござりません。左やうなら、おしげりなさいませ。イヤ、とんだ所へ、引ッかかるもんだ。
ト藝者お龜、湯呑へ茶を入れ出て、上手へ行き
かめ　煮花が出來ました。お上がりなさいませ。
喜助　もういゝから、行つて寐ねえ、どうせ今夜は、盜まれねえやうに、枕の番はしつかりとしてゐるから。

かめ　悪口ばつかり、今直にお呼び申して來ます。

ト下手へ來る。白糸、泣く思ひ入れして、障子を締めようとするを

モシエ、お糸さん、文さんが歸らしやりますよ。

白糸　オヤさうかえ。モシ、ちよつと客人を歸して來ますから、寐さつしちやア嫌でありんすよ。

勘右　コレ、種蒔き前で忙がしいから、早く來なせえ。

白糸　ほんに儘にならねえ。自烈てえなう。

ト喜助と顏見合せ、屛風を締め寄せる。下手より治郎八、出て來り

治郎　お糸さん、ちよつと。

白糸　わちきはもう、どつこも行かないよ。

治郎　ナニ、文さんがお歸りなさるから。

白糸　歸るとえ。オヤ嬉しい。

トこなしあつて、治郎八に囁く。この仕組みよろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、上の方、屛風を立て廻し、蒲團の上に、文福、通人の拵らへにて酒を呑みゐる。藝者おつる、酌をして、酒肴を取散らし、由兵衞、嘉十、三八、藤八拳をして居る見得、拳唄にて道具納まる。

嘉十　モシ旦那、此奴等は相手にはなりません。お前さんなら、ちつとは歯ごたへがあらうかでござります。

文福　ついぞ勝つた事もねえ癖に。

三八　嘉州と拳をするのは、赤子の手を捻るやうなものだ。

嘉十　小雀どもが何を囀る。サア旦那。

文福　へ、、歎かはしい奴等だ。只の稽古では其方達の修行になりやせん。互ひに持ち場の品をかけて、手合せをしやせう。銘々羽織をかけませう。

三八　望む所でげす。我れと思はん者は進め〳〵。

ト三人、羽織をかけ、一人づゝ拳を打つて、皆々文福に負ける事あつて

嘉十　オ、、三枚ながら、旦那に取られるとは、意氣地のねえ手合ひだ。

文福　おつる、みんな明けてやつて、ちつと片附けらぢやないか。

三人　どうか、その羽織を。

文福　御懇望なら、賣買いたしやせう。

三人　何れも近日御勘定。

文福　最前貴公達に渡りを出した、あの金子を引換へ〳〵。
ト呟きながら、三人、祝儀包みを出す。
これでなければ、勵みになりやせん。
トこの時、孫助、出て
孫助　へイ嘉十さん、由兵衞さん、三八さん、お迎ひでござります。
文福　もう一拳いきやせう。
嘉十　眞平御免。
三人　左やうなら、御ゆるりと。
ト皆々入る。白糸、出て來り
白糸　文さん、見ぬ顏しておくんなんし。
ト懷中より剃刀を出し、枕の底へ、小指を當て、一つの枕にて、打たうとする。
文福　ア、コレ、何をするのだ。譯も解らずに、無闇な事をしちやアいけめえぢやねえか。
白糸　これまでいろ〳〵苦勞をかけて置きながら、今夜のやうな始末をすると、浮氣でもすると思ひなさんすに違ひない。これまで實を盡したる、わたしの心も水の泡かと思ひやア、口惜しくつて〳〵。
文福　これサ、お前も譯の解らぬ事を云ふぢやアねえか。何も今改まつて、そんな野暮らしい事をしなくつても、互ひに心は解つてゐやうぢやねえか。一昨日云つておこした金を持つて來た。ソレ、十兩あるぜ。また晦日時分は、半分でも持たせて寄越さう。なんの足しにもなるめえが、細く長く附合つてくんねえ。其うちにおれが財産にせえなつたら、直ぐに御新造だぜ。
白糸　サア、そればかりが樂しみに、どんな辛い事も辛抱がなると云ふもの。アイタ、、胸が痛くなつて來ました。
文福　おりやアまむし指だから、きくと云ふ事だ。
白糸　ほんによく勝手を知つてゐさつしやる。ぬしやア、女に氣を揉ませちやア、癪を發させて押してやるのだねえ。
文福　何を詰まらねえ邪推をしたものだ。おらア阿母樣の癪を押すから。
白糸　お前の阿母に、年中なつて押してもらひたいねえ。
トこの時、上の障子の内にて、手を叩く。白糸、文福に囁き、屛風を立て廻し、件の金を見て、ホツと溜息をつき、障子を明ける。爰に大九郎、胴慾き形、腕まくりにて、手を叩きゐる。

初演の繪番附

白糸　大さん、なんだねえ、わちきの氣にもなつてお見な。

大九　イヤ又、身共が氣にもなつて見るがよいワ。いつ來ても〳〵、ついに一夜、心よく寐さした事があるか。例へ一夜でも枕を交せば、身共は其方が夫ぢやぞ。なりや一度でも契つて、その後は時の廻り合せを、手前も待つ覺悟を定めて居る。武士を立て拔く時は、相客どもは敵も同じ事。打ち果して、我が一分を立てねば、先祖大織冠鎌足どのへ云ひ譯がないと云ふ所へ心が附かぬか。サア、我れと思はん者は、これへ出て勝負なせ。

白糸　そんな大きな聲をおしでない。

大九　大きな聲は生れつきだ。サア、覺悟いたせ。

白糸　わたしやモウ、覺悟したゆゑ、悲しくもなんともないぞえ。

大九　ナニ、覺悟したとは。

白糸　これまでお前、何事も打明けて、先の世までも夫婦だと云つた事をお忘れか。

大九　如何にも左やう。武士に二言があつてよいものか。

白糸　それを聞いて安心いたしました。有やうは、わたしやアお客の金を預かつて、鏡臺の抽出しへ入れて置いたを人に盜まれ、わたしが盜人だと、お部屋の折檻。口惜しいとは云ふものゝ、證據なければ是非がないゆゑ、わたしやお前と心中して、永い未來で添ひたい願ひ。

大九　エヽ、それでもハヤ、侍ひが首も縊らず、刺刀一本持ち合さねば。

白糸　さう思つたゆゑ、持つて來たこの剃刀。

大九　アヽ、危ない〳〵。

白糸　今さらお前、否になつたかえ。

大九　否ではないが、心中の一儀ばかりは。

白糸　さうした水臭い男と知らず、これまで實を盡したが口惜しい。どうでも否なら、無理心中に。

大九　アヽ、コレ〳〵、急くな〳〵。急く場所ではあるまいがや。して、金高は凡そ何程。

白糸　エヽ、恥かしい。どうもわたしにや。

大九　夫婦仲に何遠慮。早まるまい〳〵。

ト金入れを逆に振るふ。小判七枚、と額銀二つ出る。

大九　不足か知らねど、持合せたる七兩二分。

白糸　これ貰うては、お前の思惑。わたしや矢ツ張り。

大九　アヽ、コレ、なんの疑はう。どうぞ無難に納まるやうに。

白糸　お前と二人の命代りが。
大九　七兩二歩で一組とは
白糸　ほんに果敢ない
大九　安賣りぢやなア。
白糸　オヽ、寒。
大九　可愛の者やな〳〵。
トこの仕組みよろしく道具廻る。
本舞臺、四間の間、上の方、床の間、違ひ棚、この前に床を敷き、屏風を立て廻し、夜具戸棚、箪笥を畫きしこの右手に、奥二階まで見通しの廊下、すべて白糸部屋の體。爰に新造二人、禿二人、飯を喰ひしまひたるこなし、お歌、長火鉢にて、茶を焙じてゐる見得にて道具納まる。
新一　やう〳〵見通しの大一座が今引けるまで、御膳もろく〳〵食べさゝずに。
新二　可哀さうに、親の側に居たなら、まだマア、ろくろく乳も離れぬ子供が。
新一　ほんにさうでござんす。苦界の中へ賣つて寄越す、親の心が知れぬわいなア。

うた　皆さん、お茶が入つた程に、上がりなんせ。
新二　お客に上げましたかえ。
うた　爰に初穂を取つたわいな。
ト盆へ載せ、屏風の内へ差出し
お茶を爰へ置きますぞえ。
新一　ほんに今宵は、生憎にお糸さんの廻しの多さ。
うた　わつち達のやうな者でも、客人が落ち合うた時は、どうなと機嫌よう歸さうと思うても、ツイ〳〵腹を立てさせて、打ち叩かれする辛さは堪えもせうが、客人の上がらぬその夜の切なさは、ほんに地獄の苦しみも、これ程ではあるまいと思ふにつけ、どうぞ親達の側へ居て、例へ一日でも樂々と、人並の孝行をしたうござんすわいな。
新二　誰れの願ひもそればかり。
新一　臺は廊下へ出して置かうわいなア。
うた　お玉さん、下座敷へ行かしやんしたら……ナ。
トこなし。
新二　アイ、呑み込んで居るわいなア。
新一　サア、ござんせいなア。
ト皆々、下手の廊下へ入る。屏風の内に物云ふこなし。

うた　アイ……なんのマア、初めて此やうな所へお出でなさんして、しがない女郎の身の上話し。さぞお喧ましうて、およる事がなりますまいわいなア……サイナア、見通しの客人が連れ申したでござんす、清元の太夫さん達の、今に淨瑠璃が始まるといな……サア、なんと云ふ人やら。オヽ、あの人達が書いて置いたとて今爰に。

ト紙へ書いたる連名を出し、つぶ讀みに清元連中を讀み上げる。

わちきどもには解りませぬわいなア。ホヽヽヽ。

ト奧にて

若者　サア／＼太夫、今度の新淨瑠璃を

皆々　どうぞお願ひ申しまする。

若者　東西々々。

ト下手の張り物を打ち返す。爰に清元連中居並び

〽白糸の、昔なつかしなま中に、染めてしんくの八重結び、互ひにもつれ、今さらに、解く甲斐もなき物思ひ、あゝ、なんとせう。

トお歌、火鉢へ炭をついでやる。下手の障子をけはしく明け、白糸、好みの形に着替へ出て、跡を覗き、障子を閉めてこなし。

うた　いま呼びに行かうと思つて居たわいなア。

白糸　察しておくんなんし。今夜のやうな辛い事はありません。おとなしい文さんまでが、なんのかのと焦れ出して、ほんに泣きたくなりますよ。

ト屏風を明ける。爰に黑の紋附き羽織、頭巾をまぶかに冠りし侍ひ客、手持ちなく、座り居る。

白糸　モシエ、主に申し譯がありません。初會に上がらしつて、こんな始末をすると、さぞ腹が立ちなすつたであらうが、長酒のお客人が落ち合うて、やう／＼脱かして來ました。決して惡く思つておくんなさいますな……お歌、羽織も脱がせ申さないで。

うた　わちきもさう申したけれど、主が脱がつしやらぬゆゑ。

白糸　モシエ、本當に堪忍しておくんなさいませよ。

ト羽織を脱がせる。これにて一度に頭巾取れると、お八十にて、白糸、お歌、悔りして

白糸　ヤヽ、初會に上がつた侍ひと思ひの外。

うた　あなたは慥かに主水さまの。

八十　ハイ、女房お八十でござりまする。

白糸　エヽヽヽ。

〽思ひがけなき悔りに、なんといらへもなら柴の、顔に火を焚くばかりなり。

八十　サヽ、さぞ悔りさしやんしたでござんせう。客と僞はり上がつたは、夫の身と二つには、お前も肪張楽へ外聞にもならうかと、あなたこなたを思うてこの形。定めて恨みでも云ふかと思はさんせうが、さうした譯ぢやござんせぬ。折入つてお前に、お願ひがあつて來ましたわいなア。

白糸　勿體ないそのお詞、なんの御用か知らねども、仰しやつて下さりませ……差合ひな人でも來ては惡い程に、アノネ。

　ト お歌に囁く。

うた　アイ、わたしがよいやうにするわいな。あなた、御ゆるりと。

〽會釋も別に女客、どうか心も奧の間へ、とつかは急ぎ立つて行く。様子はなんと白糸は、お八十が前に身を寄せて。

白糸　云ひ譯ではござんせぬが、一通り聞いて下さんせ。吉原にゐるその頃は、まだ振り袖の、譯知らず。

〽しかも櫻の初日の夜、派手な一座のその中で、つい岡惚れの浮氣から、人の咎楽の忍び合ひ、末はどうした主水さん、拗んだ縁の橋本へ、住替へに出るそれまでは、妻子あるとは露知らず、始めて聞いて悲しさと、又いとしさがいや増して、深くなるとの野暮らしい、廓に二世と堀の内、苦界の中野楽しみも、今はせかれて逢ふ事も、たま玉川の流れの身、果は武藏野逃げ水と、逃げ歸れども世を過す、思案の外の仇結び、堪忍してとばかりにて、後は涙に暮うるむ。

八十　サア、勤めの中にも眞實を盡して、主を呼んで下さるお前の心、風の便りに聞く度喜びこそすれ、恨んだ事はござんせぬ。その誠あるお前ゆゑ、打明けて頼みと云ふは、外の事でもござんせぬ。去年の冬より病氣とて、勤めも引いて、一夜さへも内へ來ぬ事、お頭へ誰れか悪し様に申し上げたるゆゑにこそ、主水が身の上を糺々にお調べあると、お仲間より私しへ沙汰。夫に云へど浮の空、押返して云はうにも、片時内へ、歸らねば。

〽とりつく島も渚潜ぐ、海士の小船のつな手にも、漂ふ船にこの浦へ、來ても客には表向き、上がれぬ身ぢやと聞いたゆゑ。

どうか首尾して金調へ、肩身を廣うした上で、お前に逢

うてこの事を、云うてもらはうと思へども、今に都合も出來ぬゆゑ、是非泣く／＼も恥を捨て、頼むと云ふはこれ一つ。

〽又二つにはお德とて、今年七つの娘もあれば、養子貰うて跡に立て、身儘になつて青山の、樂人町を吹きかへて、主が願ひの町住居、お前を添はせ行く末は、便りない身のわたしゆゑ、眞實まことの兄弟と、互ひに心奥底も、話し合ふが樂しみと、打明かしたる夫思ひ、武家には惜しき粹ぞかし。

白糸　エヽ、お情過ぎて、わたしに罰が當りまする。いつぞや三囲で餘所ながら、お目にかゝつてあのやうな、御新造さんを持ちながら、賤しいわたしをどう斯うと、云うて下さんす主水さんのお心に迷ひ、我が物顏に引つけて置く勤めの片意地。モウ、この後はフッツリと。

八十　アヽ、これはしたり、わたしへ一途に義理立てして主にひよんな事でもあつては、男大事も水の泡。それよりは意見して、三度に一度は上がらぬやうにして下さんせ。必らずともに、縁を切るのぢや、ござんせぬぞえ。

白糸　何から何まで、事を分けて御深切。まだ／＼いろいろ話したい事もあれど、夜も更けたればお寒からう。わたしの着替へを。

八十　アヽイエ、人が疑ひ立たう程に、わたし矢ッ張り、この羽織を。

白糸　ドレ、お着せ申しませうわいなア。

ト下手にある羽織を取つて、お八十に着せる。この仕組み、知らせなしに、ぢり／＼と廻る。

本舞臺、下手にありし出入り障子、前づら廻しに附けて上へ開き、これに續いて下手へ掛け、奥深に障子を立てきろ。廊下になる。道具納まる。

〽實と誠が行き合ひの、透間の風をいとふなる、屛風が浦に醒かすみ、せかれては又登り來る、二階に足も引け過ぎを、濡れに寄るてふ貸し浴衣。

ト奥より主水、浴衣、扱帶、湯上がりの拵らへ、着物を抱へ、濡れ手拭にて顏を拭きながら出て來り

主水　アヽ、いゝ心持ちだ。やう／＼の思ひで湯へ入られた。かけが溜つて、爰の二階をせかれて上られぬと思へば、猶上がりたく因果な事だ。併しモウ、藏米もとまつてしまふし、親類殘らずいためたから、仕方がねえ。そ

りやアさうと、今夜はお糸が所へ上がつた座敷の客、頭巾を冠つてゐて、顏を見せねえと云ふ事だが、宵から一遍もおれが所へ來ねえと云ひ、この頃はなんだか奧齒に物の挾まつた處置振り、不料簡を出したに違えねえ……イヤ〱、あつちぢやアいゝ料簡だらう。なんにしろ、ソツと屛風越しに覗いてやるべえ。

〽丸にいの字の常に似ぬ、悋氣の角文字振り立てゝ、一間へ走り入る折柄。

ト浴衣の上へ、抱へて出たる女郎の肌脱ぎを引かけ、扱帶を自墮落に締め、次の間の障子をソツと明ける。お歌、窺ひ居る。主水、心附かず、上手の障子を明けようとするを

うた　これはしたり、初會の客人が來てゐさつしやる事を御存じありながら、主にも似合はぬ、どうさしやんしたのぢやいなア。

主水　ナニ、どうもしやしねえが……オヽ、斯うだ。いま風呂から上がつて、咽喉が渇くから、次の間に湯が沸いてゐるだらうと思つたから。

うた　そんなら、手を鳴らしなさんすりやよいに。

主水　それでも、隱れて上がつてゐるのだから。

うた　マア、何所へなと行て、寐てゐやしやんせ。いま都合して、お糸さんを上げるわいなア。

主水　ナニ、忙がしいに、寄越すには及ばねえ……オヽ、湯殿の棚へ腕守を忘れて來た。勿體ねえ。ドレ、ちよつと取つて來よう。

うた　アヽコレ、お部屋の日褄にかゝつては惡い。わたしが取つて來る。お湯も酌んで上げる程に、必らず彼處へ行つては惡いぞえ。

主水　ムウ。そんな野暮はしねえ。

うた　ドレ、取つて來ませうわいなア。

ト下手の奧へ入る。

〽とつかは立つて行く空の、はや更け渡る風の傳手、物思はする爪彈きは、どこの間夫めと忍びごま。

ト抜き足して、上手の障子屋體へ行き、氣味惡く跡先を見廻す。

〽餘所で解く帶をば知らでくけてゐる、糸より細い縁ぢやもの、つい、切れ易く綻びて、眞に恨みの淺ましく。

ト此うち主水、覗いて、腹の立ちしこなし、いろ〱思ひ入れ

主水　そりやこそ。薄ツ暗え所で、めそ〱泣いて居やが

る。あの鹽梅ぢやア、疾から色になつて居たと見える。こんな事とも知らねえで、女房の意見も馬の耳、しつこく云へば打ち叩き。お八十、堪忍してくれ……女郎の誠と玉子の四角、晦日々々に掛取りに責めらるゝも、あの腐れ女郎に騙されたばつかり。エヽ、どうしてくれう。

〽胸に据ゑ兼ね隔ての障子、砕けるばかり押明けて、白糸目掛け駈け寄りしが、侍ひ客の思惑を、流石に耻ぢて手持ちなく。

ト急き込みしこなしにて、キッと上手を見込む。これを知らせなしに又、元の道具へ戻る。主水、仕切りに障子を明け、駈け込んで、白糸に摑みつかうとして、屏風の影のお八十の氣を兼れ、腕を擦つてこなし。

主水 白糸ぢやアねえお糸、よくも今まで騙しやアがつたな。覺えてゐろ……サア、着物を出せ。先刻お歌が簞笥へ入れた筈。エヽ、出しやアがれ。

ト白糸、お八十に氣兼れ、よろしくあつて、涙を拭ひ簞笥より主水の着物を出し、着せ替へる。

主水 羽織を出せ……ナニ、着て來なんだ……ムウ、さうだ。暖たけえから、着て來ねえのだ。サア大小……大小も下へ行かにやア渡さねえのだ。エヽ、知つてゐらア。サ、歸るぞ。留めやがると合點しねえぞ。野郎の玉子だと、跡で古風な事を云つて、笑やアがるのも知れてゐる……オヽ、この寐卷も、いつそ斯うして。

ト引裂きにかゝる。お八十、前へ出て、その手を押へ留める。

モシ、憚りながらお前の知つた事ぢやア……ヤア、お主は。

八十 旦那どの、チエヽ、お前さんはなア。わたしが云へば悋氣らしう思はさんせうと、この子に意見を頼みに來たのも、家が大事、二つには娘のお德、明日が日にもお暇になつたら、何を活計に人らしう、育てなさんすお心ぞ。辨まへのない子心にも。

〽わたしが顔の痩せたのも、見て餘所ながら父さまへ、御意見申しお勤めも、懈怠ないやう勸めうと、ませた執成し可愛さは。

モシ、わたしばかりの子ぢやないぞえ。それにつけてもお糸どの、驚き入つた心の操。それに引替へお前の行跡、このお御帶はなんでござんす。イヽエイナ、このお髮の結ひやう。これが鎌倉お直參の風俗でござんすか。十九や二十歳ぢやござんせぬ。マア情ない心に、なつて

下さんしたなア。
〽眞實眞身の賜意見、お糸も涙押拭ひ。
白糸　この年月、御新造さんの御苦勞を、餘所に見なして聞入れず、二言めには今のやうに、譯も聞かずに打ち打擲、爰にござんしたが、餘所外の侍ひ衆なら、座敷へ入る無法者と、咎められたら、なんとさしやんす。モシ。
〽さうした邪慳なお前でも、せかれて後は身を狹う、人目忍ぶが味氣なく、あるとあらゆる嘘云うて、客に無心も誰れゆゑぞ、みんなお前に入り上げて、朋輩衆の借り小袖、破らるゝなら破つてと、部屋着と共に身を投げかけ、身もだへするこそ道理なれ。
ト白糸、懷中より以前の金、いくつも出し、こなし。
主水　アヽ、誤まつた〳〵。お糸、其方の深切。お八十、わが身の心配。なんと云はうやうもない。今までと違つてお前方が、さう得心して……ナニサ、相談づくで、おれが體を思つてくれる者を、ナニ惡く思ふものか。これまでの事は料簡してくれ。
〽心強きは折れ易く、眞實見えて賴もしゝ。
八十　何事もお前の身が大切ゆゑ。お糸どのと云ひ、わたしまで、詞が過ぎましたわいなア。

白糸　男にあやまらせるが、女の手柄でもござんせぬ。もうこの後は、お八十さんとは實の姉妹、
八十　何事も云ひ合して、お前に意見する程に、必らず惡う聞かしやんすなえ。
主水　どうして〳〵。二人仲よく、おれが爲を思つてくれるのを、聞入れずば直ぐに勘當……ナニサ、二人ともに突き出してしまひねえ。
八十　そんなら得心して下さんしたなア。
主水　大得心。
白糸　今夜歸つて、來月まで遠ざかつて下さんせ。
主水　エ……それでも今の金で、おれが爰の內の下りは、片附けてしまふだらう。
白糸　アレ、又あんな事を。
主水　アヽ、誤まつた。來月まで辛抱する〳〵。
八十　そんなら明日は出勤を屆けに出て、懈怠なく御番をお勤めなさんすかえ。
主水　勤め道具も、何もかも。
八十　ハテ、その心當てがなうて、なんのお前に、勤めてくれいと云ふかいなア。
主水　アヽ、誤まつた〳〵。

初演當時發行草双紙表紙

坂東しうかの白糸　澤村長十郎の主水

白糸 今宵一夜と云ひたいが、いとらしいお德さんが、さぞ待ち兼ねてゞござんせう。
八十 サア、わたしもあの子がないならば、今宵は仲よう三人と云ふところ。
白糸 何事もお八十さんと、話し合うてある程に、どうぞ心を入れ替へて。
　ト帶を出す。主水、締める。
八十 最早七ツに間もあるまい。
主水 道が不用心だのに。
白糸 そんな臆病なお武家さんがあるものかいなア。
八十 その侍ひが嫌ひなゆゑ
主水 女郎にあやまつてばかり居なくつちやアならねえ。
白糸 そんなら必らず。
主水 誰れが來るものか。二度と再び、うぬが面を見るものかえ。
白八 そりや何を云はしやんす。
主水 一體をよく、突き出さうとするゆゑ、此方も依怙地だ。今日まで惚れた顏をすりやアいゝかと思つて、コレ、われが兒だと云ふ、轡の紋附きを着て來る侍ひは、女郎にならねえ前からの色と云ふ事は、聞き糺して知つてゐるのだ。
白糸 滅相な。なんでお前に、嘘を云ふものかいなア。
主水 嘘でなくば、名はなんと云ふ。一體何所の生れだ……ソレ、云はれめえがな。その上目立つ眉間の疵。
白糸 エヽ。
主水 イヤサ、その色男があるとも知らず、嘘を儲けに通つたる、此方は白痴の行き止り。それとも兒なら名を云ふか……サア、こりやア云はれめえがな。
八十 樣子は何か知らねども
白糸 これには段々。
主水 譯も糸瓜もねえ。よく今まで思ひやり廻しやアがつた。エヽ、いつそ踏み殺して。
八十 これはしたり。
　ト幇間三八、出掛け居て、この中へ入り
三八 アヽモシ、主水さん、何事も私しに。
主水 てめえまでが、よく小馬鹿廻しにしやアがつたな。
三八 どう致しまして。
主水 大小持て。
三八 それは下へお出でなされませねば。
主水 それは知つてゐるわえ。おれは隱れて上がつてゐる

體だから、孫助にソツと云つて、見世まで持つて出て待つてゐろ……サア、お八十。

ト帶を締め直す。白糸、お八十と顔見合せ、こなし。白糸、涙を拭ひ、羽織をソツと、後より引ツかける。

エ、、體が穢れるわえ。

〽口惜し涙せきとめる、義理と情の潮ざかへ、今を名殘りと白糸が、胸に滿ちくる濁り水、別れ〳〵て。

トよろしくあつて

エ、、來いと云ふに。

トお八十の手を取る。

〽立歸る。

ト主水、三八、お八十、向うへ入る。

白糸　申し主水さん、堪忍して下さんせ。この年月いろいろと、云はしやんすけれど、云ふに云はれぬ入り譯を云へば義理ある兄さんは、お八十さんの兄御の敵、わたしが口から訴人も同然。包み隱した一人の苦しさ。お八十さんへの義理と云ひ、また二つにはお前の身の爲、とても逢はれぬこの身の上、短かい緣と締らめて、わたしは今宵死にまする。淺ましい勤めはして居れど、心は淸う持ちたいと、思つて居れど情なや、お前と云ふもの出來てから、段々積る見世の勘定、惡い事とは知りながら多くの客衆を蕩し込み、ありとあらゆる嘘云うて、才覺をしたこの金で、見世の拂ひも綺麗に濟まし、お前の肩身を廣うして、それをこの世の置き土産。わたしが死んだその跡は、只お八十さんと末長う、仲よう暮らして、未來は添うて下さんせ、こればつかりが今際の迷ひ。マア、この事を一筆、主水さんへ。

ト有り合ふ硯箱を持ち來り、文を書きかゝる。上手より山平、出て來り、見て居る。白糸、文を卷き、金を懐へ入れて、奥へ行きかゝる。

山平　この金を、おれに寄越せ。

ト取りにかゝる。

白糸　オ、兄さん、何をしなさんす。

山平　この金を貰ふのだ。

白糸　やう〳〵の事で拵らへたこのお金。どうしてお前に。

山平　エ、、罰當りめ。コレ、われが爲めにやア現在のお兄イ樣だ。これまでの舊惡の過ちが廻つて、高ぶけりをする路銀にお入用だ。

白糸　例へどのやうな事があらうとも、この金ばかりは上

げられぬわいなア。
山平　オヽ、さう吐かしやア、殺しても持つて行くのだ。
白糸　そりや、あんまりぢやわいなア。
山平　エヽ、喧ましいわえ。
ト懐中より、匕首を出して切つてかゝる。白糸、逃げ廻る。ドロ〳〵寝鳥になり、日覆より前幕の魂ひ下りて、山平の後へ消える。山平、うつとりとなる。白糸愕りして、フト懐劍に、目をつけ
白糸　オヽ、幸ひのこの懐劍。誰れも來ぬ間に、さうぢや。
ト懐劍を取つて、自害せうとする。山平、起き上がり白糸の手を捕へ
山平　コリヤ娘、必らず早まるまいぞ。
白糸　なんと云はしやんす。
山平　其方の母の、清瀧でござるわいの。
白糸　エヽ。
山平　其方を尋ね、はる〳〵と、爰へ參る道にて、この惡黨の手にかゝり、非業の最期をしたわいなう。
白糸　すりや母樣を、アノ兄さんが。
山平　イヤ〳〵、この山平は親子ならず、我が夫の甥なれど、性根が惡さに、寄せつけぬのぢやわいなう。
白糸　エヽ。
山平　それゆゑ其方達は、顏を知らぬ筈。同家中傳內どのを、柳の馬場にて討つたる時に、手疵を負うて逃げ込みしを、藥を與へしその時に、臍の緒を拾ひ取り、この地へ走つてこなたを尋ね、捨五郎と云ひしは僞はり。この事早う主水へ知らせ、わしが敵もとも〳〵に、討つて恨みを晴らしてたも。サヽ、早う〳〵。
ト伴藏、久馬、孫助、窺ひ居て思ひ入れ。
三人　その文遣つては。
ト支へるを、山平、後ろ髮を引きつけ
山平　まだその上に、わしが路用の金までも、此奴が取りその時、其方達三人も、道より歸つて妾が死骸を、取隱したる罪は同然。娘、さらば。
ト薄ドロ〳〵になり、山平、倒れる。これにて魂ひ引いて取る。三人、動かれることなし。
三人　ヤア、先生が目を廻した。水だ〳〵。
ト此うち白糸、手紙を書きしまひ
白糸　エヽ、どうぞこの手紙を、主水さんの所へやり、敵の樣子が知らしたいわいなア。

ト太七、出かゝり居て
太七　樣子は殘らず聞きました。わしが主水さまへ、この狀持つて。
白糸　ちつとも早う。
　ト文を取り、行きかゝる。
孫助　お主をやつては。
太七　喧ましいわえ。
　ト孫助と立廻つて、見事に投げ、向うへ走り入る。
三人　先生やアい。
　ト山平、心附き
山平　ムウ……オヽ、苦しい〳〵。おらアどうしたのだ。
孫助　どうしたどころか、貝坂で殺した婆アが乘り移り。
伴藏　兄弟でねえ事や、惡事を殘らずぶちまけた。
山平　アノ、この口で自身の事を。
久馬　まだその上に、白糸から主水へ屆ける文を持つて、太七めが駈け出した。
山平　ヤア、大變々々。こなた衆二人、跡より追ひつき、あの太七めを引ッ捕へて。
伴藏　オッと合點。
　ト伴藏、久馬附いて、橋がゝりへ入る。白糸、やるまいとあせるを、山平、引きつけ
山平　エヽ、これと云ふもわれが主水へ義理立てから……うぬから先へ。
　ト以前の短刀を取つて、白糸を切り下げる。
白糸　こりやわたしを、殺すのぢやな。
山引　知れた事だ。うぬを殺すが、まだしも腹いせ。
　ト切る。
白糸　エヽ口惜しい。現在母の敵と知らず、矢ッ張り元の兄さんと、これまで眞實貢いだが、腹が立つ〳〵わいなア。
山平　これから憎まれても、百年も生きにやアならねえ。その金を路銀に持つて行く。兄弟の緣切りにはちつと廉いが、負けてやるべえ。
白糸　この金、渡しやせぬ。
山平　エヽ、放しやアがれ。
　ト金を取り、蹴返して又切る。奥より善助、出て來り
善助　ヤヽ、こりやお糸さんを。
山平　エヽ、靜かにしろ〳〵。
孫助　先生、さうしてお身の上は。

山平　默つてゐろ。
孫助　ヤア、あすこへ來るのは、主水だ〳〵。
山平　そいつは巧え。コレ。
ト騒ぐ。
孫助　そんならお糸。ムウ、心中。
山平　裏梯子から。
孫助　早く〳〵。
トうろたへ、下手の障子屋體へ入る。主水、足早に出て、跡を振り返り。
主水　時ならぬ鳥啼きと云ひ、胸騒ぎ、なんでもお糸が、
ト舞臺へ來る。白糸、苦しみ居る。
ヤ、白糸を。こりや何者が手にかけた。コレ、深手なれども急所はよけた。心を慥かに、白糸やアい。
白糸　オ、主水さん、遅かつた〳〵。
主水　とは又何ゆゑ。
白糸　サア、お前に愛想を盡かされて、覺悟を極め、何かの事は文に詳しう。ムウ。
トうつとりとなる。
主水　すりや何所に。エヽ、コレ、心を慥かに。様子はどうぢや〳〵。

ト白糸、口へ指さし、物の云はれぬこなし。この時上下へ若い者、客、殘らず出て
若一　二階をせかれた業腹紛れ
若二　無理心中した鈴木主水。
皆々　引ッ立てろ〳〵。
主水　ヤア、聊爾いたかな。かゝる遊所へ參りしも、深い仔細があつての事。
若三　仔細も糸瓜もいらねえワ。殺さぬと云ふ證據があるか。
主水　かゝる場所へ參り合せしが、この身の災難……女も最早言舌廻らず、無證據なれば是非に及ばず。
皆々　庄屋どのへ、引ッ立てろ〳〵。
主水　喧ましいわえ。
ト振り返る。皆々、氣味惡きこなし。白糸、主水の手を取り、名殘りを惜しむこなし。
心底見えた。未來は必ず一蓮托生。心措きなう成佛いたせ……思へば不便な。
皆々　きり〳〵庄屋へ。
主水　案內いたせ。
ト木の頭、よろしく

ひやうし　幕

大　詰

青山樂人町主水內の場

役名——鈴木主水。同女房、お八十。同娘、お德。同一子、滿次郎。同下部、宅助。同、作助。同、下女、おさん。若い者、孫助。同、太七。筑波根山平。

本舞臺、向う一面の玉椿の塔婆垣、所々松の立ち木、爰に太七、前幕の形にて立ち身、伴藏、久馬、支へてゐる見得、禪のツトメにて幕明く。

伴藏　大事を聞いた、二才野郎め。

久馬　うぬをやつてなるものかえ。

太七　べら坊め、おれは元、主水さまに大恩を受けた者ゆゑ、堅田傳內さまを討つた奴を嗅ぎ出さうと、わざと惡場所へ入込みし甲斐あつて、今日と云ふ今日敵が知れ、樂人町へ知らせに行く。邪魔しやアがると、殺すぞよ。

久馬　その口の乾かねえうち、屋敷へしよびいて本音を出させて

兩人　見せるのだわえ。

太七　なにを。

ト世話の立廻り、よろしくあつて、よさ程に、浪人四人出て來り

四人　捕まへたか〱。

伴藏　屋敷へ、引ッ擔いで行け。

皆々　合點だ。

ト縫ひぐるみにて、太七を引擔ぎ、天井持ちにして、橋がゝりへ入る。この仕組みよろしく道具廻る。

本舞臺、三間の間、常足。正面、石摺りの襖、上手、障子屋體、向うまひら戸の押入れ、下手、冠木門のうしろを見せ、左右、白壁、いつもの所に門口、鈴木主水と記せし表札。爰に宇助、天德寺を繼ぎ貼りをしてゐる。お德の子役、紙にて、姉さまを拵らへてゐる。おさん、下女にて髮を撫でつけてゐる見得。角兵衞獅子の鳴り物にて道具納る。

とく　わが身、御用をしまうたら、文金の姉さまを拵らへてたもいなう。

さん　文金なぞは野暮だから、わたしのやうな、小意氣な

年増の姉さまを拵らへて上げませう。

宇助　こいつは大笑ひだ。不景氣な化物の姉さまが、おもちやになるものか。

とく　また喧嘩をしやるかいなう。仲ようしてたもいなう。

宇助　ほんに昨夜は、御新造さまのお供に行つて、湯へも行かなんだ。ドレ、一風呂飛び込んで來うかい。

ト　繼貼りを片付ける。向うより下男作助、走り出て、舞臺へ來り

作助　御新造さん、大事だ〳〵。

宇助　これサ、作助どん、御新造さんは、坊さんを寐かしつけてお出でなさる〻

作助　それどころか、大事だ。御新造さんやアい。

八十　エ、モウ、忙しない。今行くわいの。

ト　お八十、滿次郎を抱き、奥より出て來る。

作助　御新造さん、昨夜お前を道で蒔いて、また新宿へ立歸つた馬鹿旦那め。引摺つて來ようと、お前に沙汰なしに駈けて行つたら、橋本屋の表は黒山の人だかり。子守ッ子に聞いたら、昨夜女郎と侍ひが心中した、そのお調べが來たのだと、聞いて悔り、戻つて來た。こりやマア、どうしませう。ソレ〳〵、てめえ達も、おれと一緒に氣を揉んでくれ〳〵。

さん　コレ〳〵作助さん、心中したは、慥かに旦那樣と云ふ事を聞いたかえ。

作助　ナニ、そんな無駄事を聞いてゐる暇があるものか。平常から旦那さまは、心中しさうな顔附きだから。

とく　申し母樣、父樣が、どうなされましたのでござりまするか。

ト　お八十の顔を覗く。お八十、泣き顔を隱す。

とく　コレ作助、譯を云うて聞かしやいなう。

作助　譯も糸瓜もないこの樣子。可愛いお子達を殘して。

八十　ア、コレ〳〵、人違ひするにも事に依る。小祿たり共鎌倉の御直參、それ程うろたへたお人とは……イヤサ、うろたへた事、なんでなされう。ちと嗜なみやいなう。

作助　それでも、昨夜心中したは、青山樂人町の

八十　アレ、まだ云やるかいなう。昨夜途中まで戻つて來る道で、御同役にお目にかゝり、俄に御用の筋があるゆゑ、これより同道して、出勤屆けを致すやうにと、直ぐにお勤め所へお出でなされ、もう今にお下がりなさる〻

に違ひない。ホヽヽ。

宇助　いつも、こんな頓馬な事ばつかり云つてゐるゆゑ。

さん　當には致しませぬが、今朝髪結ひ所へ剃刀を研ぎに參りました時、昨夜新宿の騷動のなんのと、話して居りましたが、わたしの顏を見ると止めて、あぢな顏をして居りました樣子。

作助　さうだらう〳〵。

八十　ハテ、もしさうした事があつたなら、早速内へも人が來る筈を、沙汰のないが論より證據。

宇助　わしが行つて、よく名前を聞いて來ませう。

滿次　坊も一緒に、行かうわいなう。

八十　これはしたり、面白い所かなんぞのやうに。われ達もどうしたものぢや。其やうな事があらうと思へば、わしが捨てゝは置かぬわいの。母は仕掛けたお仕事がある。皆を連れて、お庭へ出て遊んだがよいわいの。

滿次　廻り〳〵の小佛をして遊ばうかや。

作助　ア、鶴龜々々。佛のなんのと、其やうな事は、仰しやるものではござりませぬ。

滿次　そんなら、蓮の花が開いたをせうわいなア。

作助　エヽ、氣にかゝる事ばつかり。それより軍事が威勢がよい。

とく　わしも滿次郎も、討死とやらをせうわいなう。

作助　又そんな嫌な事。鬼渡し〳〵。

宇助　それがいつち　差合ひなしよ。

滿次　そんなら母樣。

八十　オヽ、怪我せぬやうに遊んでたも。

皆々　サア、お出でなされませ。

ト奥へ入る。

八十　昨夜主水どのが、途中より別れたは、橋本屋へござつたに違ひない。最前來た八百屋が話し、昨夜新宿に無理心中があつた、相手は侍ひとの噂。さては白糸どのが、わしに情を立て、云ひ懲らしたを腹立てゝ、ひよんな事でもさつしやつたか。お頭よりの仰せ渡されは、所詮鈴木の家は退轉、憂き恥を見やうより、死んだがましかと取つおいつ、その中へ作助が今の話し。疑ひもなき夫の身の上。又幼うても滿次郎は鈴木の世取り。男の子には、どのやうなお祟りあらうも知れず。どうぞ二人の子供の生い先。あの政吉に頼みたいにも、絶えて來やらぬは、下總へ戻つたか。こりやマア、なんとしたらよからうぞいなう。

ト向うより孫助、橋本屋の弓張を灯し、若い衆五人組三人、宿內行司弓張りを持ち、少し後より駕籠屋四つ手駕籠を舁き出て

孫助　向うへ見える門が、さうでござりまする。

若三　サア、早く〳〵。

ト舞臺へ來り

孫助　ハイ、御免なさいませ。私しは新宿の橋本屋から參りました。サア。

ト八十、惘り。三人、內へ入り、四つ手は外へ下ろし、駕籠舁き囁き、橋がゝりへ入る。

孫助　エ、、鈴木主水さまのお宅は、慥かこなたでござりましたな。

八十　左やうでござりますが夜中と申し、なんの御用で。

孫助　主水さまの御身分につきまして、珍事が出來ましたゆゑ、村役人のお衆を、同道申して參りました。

皆々　これは〳〵、お初にお目にかゝりました。

八十　して、珍事とは。

孫助　お糸と申す女郎に、主水さまがお馴染みなされ、舊冬から御勘定のたまり何やかやで、店をおせき申しましたが、昨晩忍んでお上がりなされまして、お糸に數ヶ所の手疵を負はせましたゆゑ、宿內の者が取押へまして、庄屋方へお連れ申しましたが、實に表沙汰になりますと一統の難儀でござりまするゆゑ、女の元方へも渡りをつけ、內濟に致せばと、皆さんもお骨をお折りなされまして

三人　御相談に上がりましてござりまする。

八十　それはマア、御深切と申し、ひよんな御苦勞をかけました。して、內々に致しまするには。

孫助　サア、養生代でござります。段々と掛合ひました所が、五十兩なら疵人を引取らうやうに申されまするが、それとても、當人は夢中で居りまするゆゑ、息を引取りますれば、據なく表沙汰に致しませねばなりませぬ。

八十　それはマア、金子で濟みまする事なら。と申して今が今だに十兩と申しては……恥を申さねば解りませぬが、兩三年以前より不如意になりまして、とはいへ金子で、女の手詰めの難儀を救はれるものを、こりやどうしたら。

孫助　左やうならお暇いたしませう。主水さんは自業自得だが、宿內こそいゝ迷惑だ。

八十　ア、モシ、暫くお待ちなされて

孫助　これはしたり、わたし等は待つて上げやうが、疵人が息を引取つては、なんにもなるめえぢやないか。

八十　サア、御尤もでござりまするが、どうか仕様が。こりやなんと致したらよからうぞいなア。

ト駕籠の垂れを上げ、山平、膏薬を貼り、前幕の形にて刀を提げ、出ながら

山平　その智惠を貸してやらう。

孫助　ナニ、相手方の

三人　アノ、お前が。

ト山平、内へ入り

八十　わたしへ智惠を貸してやらうと、仰しやる、お前は。

山平　お八十坊、見忘れるとは情ねえ。幼な馴染だ。覺えがあるか。

八十　オヽ、ほんに筑波根山平どの。

山平　主水に切られた白糸は、おれが義理ある妹のお糸、小さい時からかどわかされて、この關東へ賣られたから、こなた衆は知らぬ筈。ところで昨夜の寐耳に聞くと、恟りしめえ事か、出口の潛りへ額を打ちつけ、血の垂れるのもが氣が附かす、橋本屋へ行つて見たら、妹は半死半生。人に人が掛つて内濟にと頼むゆゑ、内々相談は決着したが、いま彼處で聞いてゐりやア、その内濟金も過急には出來ぬとの事。その金、おれが貸してやらう。併し、ちつとお主に頼みがあるが、それせえ得心してくれたら。

八十　マア、どのやうな事か知らねども、内々にて濟む事なら。

山平　それで直ぐに話しが分つた……オイ若い衆、疵養生の金は、おれが手へ入ると云ふものゝ、村役人の衆が立合つて、證文の取交しの濟むまでは、おれが自由にもならねえ。爰に今二十兩あるから、これを庄屋へ預けて、主水の體を明けて、内へ歸してくれにやア、後金の都合が出來めえから、主水をどうぞこの金で、繩をゆるめて歸して下せえ。

孫助　でも、あんな無法な人間だから。

山平　ハテ、なんであらうと事の濟む事。今に行つて詳しい譯を、云ひますと云うて下せえ。

孫助　畏まりました。

八十　お前さん方、大きに。

孫助　そんなら山平さん、へゝ、巧く……イヤ、お暇いた

しませう。

ト孫助、皆々附き添ひ、駕籠を置いて、橋がゝりへ入る。

八十　ほんにマア、思ひがけない所へござんして、主水も無難に戻つて來られるやうになり、この御恩は、死んでも忘れはしませぬわいなう。

山平　イヤモウ、子供の時から女房に持ちてえと、いろいろと手を廻したが、さうかうするうち傳内どのが闇討ちになつたとの事。せめて結納の取交しでもして置いたら、舅の敵取らうものと思つたが、その後鈴木と云ふ侍ひと夫婦になつて、關東へ下つたとの噂。それぢやア敵の手がゝりでもある事かと思つたら、未だに討つた沙汰もなく、果は女郎と無理心中……イヤサ、斯う云ふ邪慳な亭主に、操を立て拔くお前の眞實に、又一倍惚れたから、妹の九死一生にも構はず、わざ〳〵尋ねて來て、金を貸して、向う面の主水まで、戻るやうにしたおれが心、よもや情ないとは思ふめえの。

八十　サア、それぢやに依つて、御恩は死んでも

山平　オイ〳〵、死んだら忘れてもいゝから、この世だけおれが女房だよ。

八十　エヽ。

山平　京都にゐるうちも、いろ〳〵手を廻して文を遣つても見向きもしねえから、時節を待つたら叶はぬ事もあるめえと、巡り〳〵て十年の、今日といふ今日念願が屆いて、こんな嬉しい事はねえ。おれこそ死んでも忘れはしねえよ。

八十　それ程に思うて下さんすは嬉しいが、主あるこの身、どうも今さら。

山平　否ならおれも否だ。これから直ぐに表向き、主水めを召連れて訴へ、妹を殺した下手人。さすれば町内を引き廻し、女房子供までも死罪、樂しみにして居やれ。

ト立ちかゝる。

八十　でも氣の短い。マア〳〵待つて。

山平　得心するか。

八十　それぢやと云うて。

山平　否なら直ぐに。

八十　サア

兩人　サア〳〵

山平　疵人が死んだら、元も子も失なふ出入り。早く返事をしてくりやれな。

ト お八十、思ひ入れあつて

八十　如何にも心に隨ひませう。この年月、討たうと思つた敵は、去年御刑罪。せめて秋葉のお家の重寶、鯉魚の一軸尋ね出し、亡き父さんのお望みを、遂げさせんものと主水どのへ、賴みし事も水の泡。所詮この身は。

山平　死ぬには及ばぬ。その鯉魚の一軸も、若黨の政吉が、箱根山にて、花笠德次に取られたを手に入れて、ソレ、この通り。

ト 懷中より出し

これも夫婦になつた上は、お主に遣らう。

八十　そりやアノほんまに。

山平　お主に嘘を云ふものかいな。

八十　それ聞いて、お前の眞實、疑ひ晴れた。後金の都合して、主水どのゝ身拔けをさせ、手を切つてお前の女房に。

山平　どうやらあんまり巧過ぎて

八十　ハテ、僞はり云はいで

山平　直ぐに下手人。

八十　それも合點。

山平　それなら暫く

八十　奧の納戸で

山平　待つて居るよ。

ト 上手の障子屋體へ入る。正面の襖を明け、作助、様子を窺ひゐて

作助　御新造さん、お前本當に、あの侍ひの女房になる氣かえ。

八十　なんの、あのやうな者に、肌觸れる心はないけれど、否と云へば夫の命、二人の子供も刑罪と、聞いて身も世もあらばこそ、この身一つを捨てさへすれば、大勢の爲。常々話す通り、わしは元、鹽町の塚本屋と云ふ町人の娘、親子兄弟一つに居れば、非道の死をすると相見の敎へ。それゆゑ是非なく緣を切り、義絶はせざりしが、今日につゞまる夫の難儀、わしが命を何惜しまう。詳しく文に書く程に、四谷まで行き、後金の三十兩を借りて來てたも。

作助　それでも親子義絶では、お前の命がない。また嬢さまや坊さまは、路頭に迷はつしやりませう。イヤ／＼、およしなさい。

八十　サア、わしが身や、子供の事を思うてくれるは嬉しいが、便りしたとて、體に變事のない證據は、扇ケ谷に

御奉公してござる、姉さんの尾上さまへは、疾からお文の遣りとりして居れど、障りのないのがよい手本。

作助　イカサマ、それなら一度位はようござりませう。

八十　忝ない。ちよつと待つてたも。

ト文を書きかゝる。向うより主水、後より以前の五人組、三人附き添ひ、出て來る。

主水　これはハヤ、御苦勞千萬でござりました。内濟の後金今宵中に調達いたして、持參いたしまする程に、お役頭へも、よろしく申して下され。

五人　畏まりました。併し、私しどもの念でござりまするから。

若一　お宅まで送り屆け

若二　慥かにお預け申さねばなりませぬ。

主水　至極御尤もではござりまするが、手前も侍ひ。殊には妻子眷屬もござりますれば、決して逃げ隱れは仕りませぬ。

三人　ではござりまするが、それでは私しどもが。

主水　左やうなら宅の前まで、御同道下されい。

ト舞臺へ來り

サ、最早これにて御疑念はござるまい。

三人　左やうなら、隨分お早く。

主水　承知仕つてござる。

ト三人、橋がゝりへ入る。お八十、文を書き、封じて、作助に渡す。主水、俄に生醉ひの思ひ入れ。

ウ、イ。

ト作助、うつかり門口を明け、悑りし

作助　ヤア、化物が……そりやこそ／＼、御新造さん、幽靈旦那が迷うてござつた。南無阿彌陀佛々々々々々。

主水　何を此奴は、幽靈とは不屆き至極。併し、ぶら／＼ひよろ／＼戻つて來たから、生醉ひの幽靈と見立てた所はきつい。

ト内へ入り

祝儀を遣はさう。併し、今は持ち合せがない。水を大きな物へ、なみ／＼と持つて來い／＼。

八十　主水どの、どうなる事かと案じたに、思ひがけない酒機嫌。ようマア戻つて。

ト上手へこなしあつて

サア、よう戻られた義理でござんすなア。

主水　なぜ。戻つては惡いか……とあんまり立派に云はれたお住居でもないが、お女郎に掛けては立派なお侍ひ。

おれゆゑ白糸めは獨り心中、おれも切腹と覺悟いたしした所、其方が扱ひの金おこしたゆゑ、それ程までに女房が惚れてゐるものを、死んでは不便と、先づ心中は止めにして……鼻唄で戻つて來た。併し、心得ざるは金子の出所。キツと吟味遂げねばならぬ。

八十　サア、手詰めになつたそれゆゑに、脇から借りて。

主水　成る程、江戸は廣い、よく貸してくれる人があつた。そりや何れから。

八十　サア、わたしが前方、心安うしたお人が來合して。

主水　ハテナア。二十兩と云ふ金を……さては疾より密夫いたし居るな。

作助　お前、どこから聞いてござつた。

主水　うぬ、知るまいと思ふか。遊女狂ひのわれへの面當て、間男を稼ぐ事、疾よりも存じて居る。眞ツ二つとは思へども刀の穢れ、去つて遣はす。出てうせう。

八十　離別さるゝは疾より覺悟。さりながら、後金を渡さねば、盡せし心も水の泡。それゆゑこの身を捨てゝなりと、金調達して、お前の身抜けを。

作助　アレ〳〵、命を捨てゝも、お前を助けうと云ふ御新造に向つて、玆な旦那の罰當りめ……そんなら御新造さん、行つて參りませう。

主水　ヤイ〳〵、待て〳〵、後金も殘らず渡して濟まして戻つた。サ、娘お德、滿次郎、兩人連れて出てうせう。

八十　イエ〳〵、男の子は男に附くが世間の大法。娘は連れて別るゝ程に、離緣狀を書いて下さんせ……コレ皆の者、子供を連れて來やいなう。

宇助　ハイ〳〵。

ト奧よりお德、滿次郎を連れて、おさん、宇助、出て來り

とく　父樣。よう戻つて來て下さりました。もう何所へも行つて下さりますなえ。

ト寄り添ふ。

主水　エヽ、うるさい奴等。これだから素人を女房に持つと、第一子供が出來るので恐れる。

ト硯引寄せ、離緣狀を書くこなし。

さん　アレ〳〵、あんな事を仰しやりまする。

主水　ナニ、あんな事。主人の詞をさみ致すな。

さん　イエ、左やうでは。

主水　うぬ、詞を返す慮外者め。たつた今暇を遣はす、出てうせう。

八十　これまで遣うた者と違ひ、子供を大事にしてくれるこの者を。

主水　主人が心に叶はねば、何時でも暇を遣はす。とく其やうに仰しやらずと、遣うてやつて下さりませ。

主水　エ、、女の餓鬼と云ふものは、ようつべこべと、一旦ならぬと申したら、置く事ならん。

宇助　御堪忍ならずば、出ても參りませうが。

さん　いとしぼいお子さん方

作助　この行末がどうなるかと思ふと、涙が湧き出して。

主水　エ、、不緣起な奴等。ヤイ作助、あの者どもを追ひ出して居らぬか。

八十　樣子は何か知らねども、氣の毒ながら、わが身達、一先づ宿へ下がつてたも。

さん　左やうなら御新造さま。

宇助　もうお暇いたしまする。

滿次　坊も一緒に行きたいわいなう。

八十　ア、コレ、あの者どもは、お使ひに行くのぢやわいなう。

ト下手より宇助、古葛籠を持ち出し、以前の天德寺をからげ、おさん、柳行李と鏡立て一つに縛りしを抱へ出て

宇助　作助どの、お前に貸したその布子を、氣の毒だが返して下さい。

作助　ほんにこりや、お主の着物。

ト帶を解く。

八十　さうしてわが身、この頃まで着てゐた着物は。

作助　サア、薪屋の拂ひが喧ましさに……イヤサ、洗濯して、お庭に乾して。

ト襦袢一つになる。

さん　作助どの、明日取りに寄越す程に、お前の内へこの荷物を。

作助　オ、、内へ入れたら、戸をよく引寄せて置いて下せえ。

主水　まだ行きおらぬか。

ト宇助は橋がゝり、おさんは正面の門へ入る。

主水　側で口をきくものだから、書き損なつてばつかりゐるわえ。

八十　サア、滿次郎は男ぢやゆゑ、お前に渡しましたぞえ。

主水　慥かに受取つた。サ、、去り狀〳〵。

滿次　わしにもお猿を書いて下されいなう。

主水　オヽ、わが身は父が側にゐるゆゑ、猿でも犬でも、望み次第畫いてやりませう。

八十　これで心が、さつぱりとしたわいなア。

ト滿次郎、居眠りをしてゐる。

作助　オヽ、アレ〳〵、坊さまが居眠つてござる。とく母様、乳呑ましてやつて下さりませ。

八十　オヽ、可愛や。

ト上手へ行かうとする。以前より上手の障子を明け、山平出て

山平　イヽヤ、男の子は男に附くが大法。緣切つたれば赤の他人。

作助　オヽ、お前には先刻の

主水　そんなら女房に金貸した

山平　白糸が義理ある兄、妹が敵と云ふ所を、云はぬも思惑あつての事。

主水　フム。白糸の兄といへば、いつぞや三國にて。手に入る密書の隱し名に、みなの川と記せしは、貴樣の事であつたか。

山平　イヽヤ、みなの川とは……オヽ、さうだ。今下總の椎岡に、捨五郎とて、白糸が實の兄、十五の年に家出して、みなの川と名を呼び、角力となつてゐるとの噂。

主水　して、貴樣の眉間はどうして。

山平　昨夜の騷ぎのうろたへで、出口の潜りで妹が切疵、今をも知れぬ癖人に、おれが眉間の怪我も添へ、二十兩の手切れを出して、子附きの女房を貰ふ間男、それともそれを否だと云やア、表向き妹が下手人。サヽ、二つに一つの返事をしやれサ。

主水　誰れも否だとは申さぬ。さればこそ、この女に去り狀も遣はした。

山平　イヤ、酒の力を借りて離緣はしても、醉が醒めれば未練を起し、劒の鍔の白鞘おどかし、又は當座逃れう嘘の美人局であらうとも、此方には鯉魚の一軸、まさかの時は引き裂き捨てゝ、從類たやす分の事。

八十　お前も疑ひ深い。夫の邪慳に引替へて、幼な馴染のお前の深切、見返つてなんとせうぞいなア。

作助　成る程、御新造の云はつしやる通り、十分尤もだ。併しおらは、この子供衆を繼親にするのが不便で。

山平　ヘヽ、捨ッ放しの實親より、義理ある仲が遥かましだワ。ナウ女房。

ト手を取る。

主水　なんぼう去り狀を取つたればとて、亭主の內で間男と、痴話は恐れ入つた。譯道が附いたら、ちつとも早く。

八十　アイ、行かいでかいなア。

とく　母樣、わたしや爰の內を離れたうない程に、父樣に詫び言して、今までのやうにしてゐて下さりませいなア。

作助　オヽ、尤もだ。御新造さん、どうか蒔き直しは出來まいか。

八十　心の腐つた男に添うて、末始終どのやうな、目に遭ふも知れぬわいなう。

山平　兎角當時は見切りが肝心。

主水　イヤモウ、譬へに云ふ通り、女房と庇は、三年目に取替へたいもの。

八十　オヽ、よう云はしやんした、こちの人……ではない、赤の他人の主水どの、これがこの世の。

山平　ヤ。

八十　顏見る事も否ぢやわいなア。斯うやつてゐては果てしがつかぬ。親元も仲人も、上方なれば仕樣もあるまい。

山平　ハテ、貰ひ切つた上からは、直ぐに三田新町、おれが內まで駕籠を雇つて。

八十　サア、わたしは直ぐに行きたいけれど、子供を連れてよる夜中。

作助　今宵は、わしが內に泊つて。

主水　サア、兎も角も、この家には叶はぬ。

とく　そりや又あんまり。

主水　エヽ、親子の緣は切つてあるわい。

ト突き飛す。

八十　エヽ、マア、可哀さうに、泣きやんな。わしが合點のゆくやうに、云うて聞かす程に、この家を早う。

とく　でも、滿次郎を置いて行たなら。

作助　今に乳を探さつしやらうと思へば。

八十　ハテ、死んだと思へば、濟むわいなう。

山平　オヽ、流石はおれが女房ども。今宵はしつぽり。

主水　お樂しみだね。

ト作助、お德を脊負ひ、お八十を諫め、橋がゝりへ入る。

山平　お八十としつぽり、ドレ、祝言と出かけようかい。

主水　間男、ちつとお待ち。ちつとこなたに無心がある。

山平　ナニ、無心とは。

主水　なんと、最前云つた鯉魚の一軸、おれに買つてくれまいか。

山平　一文なしの、アノこなたが。
主水　ハテ、金錢は世界の湧き物。
山平　フム、さては女房と云ひ合ひの、この一軸を取らうばかり、わりや美人局だな。
主水　どうしてそんな。
山平　イヽヤさうだ。お八十が爲には大切な、秋葉の重寶鯉魚の一軸、心に掛けるからは、傳内が敵を助太刀して討つ所存。よもや違ひはあるめえがな。
主水　これは又、積りにも知れたもの、畢竟敵を討つが否さに身を持ち崩し、助太刀を頼んだ、女房を去つたのだ。
山平　イヤ、女房去れば、秋葉の家に緣もゆかりもねえお主が、なんで寶を。
主水　欲しい譯を聞いてくりやれ。おれも女房はおん出てしまふし、白糸は殺される。おまけにとんだ所へ行き合せ、切つた科を脊負ひ込んだれば、遲かれ早かれ、御改易になるは必定。そこであの一軸を持つて京都へ上り、秋葉の家を再興して、寶を持つて行つたを功に、執權職になつて、もう一花上げねばならぬ。なんと發明だらうがな。
山平　イヤハヤ、氣の長い詮索。今にもお糸が日々眠れば、否とも宿から表沙汰。さうなる時は、暗え所へ行かにやならねえ。掛替への體があるか。
主水　サ、それは。
山平　但し、たつた今、百兩の金を出しやア買つてやらう。
主水　百兩はさて措き、生憎當百の持ち合せもない。
山平　それ見やれ……さぞお八十が待ち兼ねてゐやう。

ト立ち上がる。

主水　これはしたり、氣の短けえ。例へ錢金はないにしろ、ちつと此方に當もあれば。
山平　そりや又どう云ふ。
主水　御覽の通り、女房は去り、家來は暇を遣はし、道具諸式は皆賣り代なして、殘るは荒神棚に犬猫ばかり、シタガ、先祖代々の屋敷は、まだ家質に置かぬゆゑ、これを當座の形として、僅か三日か四日のうちには、金調達して御勘定は、キッと辨まへる程に、その一軸を賣つて下せえ。
山平　否だ。人殺しの下手人となるお主ゆゑ、今にもお上のお手が入りやア、家藏はおのが自由にやアされぬゆゑ、否だ。

主水 ムヽ。

ト向うより太七、髮を亂し、文を持つて、息せき門口へ來て

太七 もし〳〵、爰明けて下さいませ。爰頼みます〳〵。

主水 どうれ。コリヤ、誰れも居らぬか。ナヽ、皆暇を遣はした。取次番にも主人にも兼帶……これは〳〵。

太七 それどころではござりません。お糸さんから寄越したこの文。敵が知れた……ヤア、そこに居る〳〵。

山平 南無三それを。

ト文を取つて、逃げようとする。主水、袴腰を取つて引据ゑ

主水 して〳〵様子は。

太七 その惡黨は、お糸さんが兄だと云つたのは皆噓で、殺された阿母さんが、その惡黨に乘り移り、何もかも白狀した上、お前さんへ送らうと云ふ念まで、其奴が皆取つて、お前さんを切り殺さうとする所へ、この文わしが受取つて來た。早く讀んで御覽なさいませ。

山平 何をおのれが。

ト起き返り、打つてかゝるを主水、刀を打ち落し、後へ手を捻ぢ上げ、踏み敷いて、文を開き

主水 ナニ、果敢なき露の命をも、詞短く書き殘し參らせ候ふ、さてはこの程は、心にもなき事のみ申し、お氣に逆らひ、お歸りの跡は只茫然と、甲斐なき事のみ思ひ續け參らせ候ふ、御新造さまのお心根をお察し申し上げ候へば。

山平 なにを。

トまた立廻つて主水、山平を押伏せ、脊中へ片足かけ

主水 御無理もなき事ゆゑ、それをお前樣に申し上げ候へば、この身に覺えもなき事の數々を、お腹立ちの餘りに御申しなされ、それを又御意見申し上げ候へば、御新造樣への義理。

ト此うち、落ち散りある刀を、山平、足にて寄せ、手に取り、打つてかゝる。主水、文を太七へ渡し、山平を、後向きに手を捻ぢ上げ

サ、その後を。

太七 いつそこの身がないならばと、思ひ切つても切られぬは、賤しきこの身を兎や斯うと、これまで深う云ひ交し、御不便かけられ候へども、この世は短き緣ぞと、思ひ諦らめ參らせ候ふ、未來の緣は、一つ蓮の臺に乘りまするやう、これのみ願ひ參らせ候ふ、どうぞ私しなき後

は、お家大事に、御夫婦仲御睦まじく、お子樣方をお育てなされ、不便と思し召し候へば、只一遍の御回向を、草葉の影より願ひ參らせ候ふ。

山平　なにを。

トまた立廻つて、主水、山平を太七の方へ突き飛し、よろけて來る。太七、手早く文を主水へ渡し、山平をしつかと捻ぢ伏せ。

太七　サアその後、お讀みなさいませ。

主水　このお金は、いろ〳〵の事に才角いたし候ふ間、これにて見世の下りを勘定なされ候へば、お前樣の肩身も廣うなり候ふ間、これをこの世の思ひ出に相果て參らせ候ふ……ヤ、、、。して〳〵金は……フム。さてはおのれが奪ひ取つたな。

山平　アイタ、、、。

主水　私し兄と申し候うて、常々參り候ふ者は、實は私し兄にてはなく、先年勘當受け候ふ伯父にて、その後、所所方々と、遠國へ參り居り候ふ事ゆゑ、私し見覺えなくその上貝坂とやらにて、私しの母さん清瀧を騙し討に致し路銀まで奪ひ取りし惡黨にて、お八十さんの親御傳内どのも、柳の馬場にて人知れず、闇討ちに致し候ふ由、その惡黨は四間の疵にて御座候ふ。私しの母さんが、この惡黨に乘り移り、悪事を殘らず口走り參らせ候ふ、この文御手元へ屆き候へば、これが慥かな證據に御座候ふ間、よく〳〵御詮議なされ、どうぞ敵をお取り下され候ふやう、くれ〴〵願ひ上げ參らせ候ふ、未だ申し殘したき事は山々ござ候へども、思ひ詰めてはなか〳〵心急がれ筆の運びも後や先、甲斐なき事のみ書き殘し參らせ候ふ、かしこ、主水さま、糸より。

ト此うちお八十、作助、お德を脊負ひ、門口へ來て、文の樣子を聞きゐて、門口を明け、内へ入り

八十　樣子はあれにて、殘らず聞きました。竊ろき入つた白糸さんの貞節。おのれ山平、ようも今まで安穩に居やつたなう。

ト主水、ソレと脇差をお八十に渡し

八十　親の敵、山平、覺悟。

主水　最早遁がれぬ男の佐。サア、尋常に勝負いたせ。

山平　何を小癪な。

トちよつと立廻つて、山平へ當て身を入れる。

主水　サア、お八十、一太刀討て。

八十　心得ました。親の敵、おのれ山平。

ト此うち皆々、助太刀の支度する。山平、心附き、お八十へ討つてかゝる。主水、お八十の手を持ち添へて山平の横腹を抉る。

チエ、、殘念や口惜しや。昨夜白糸を手に掛けたも、お主へ送る金が欲しさに、まんまとその場は仕負ふせたところ、橋本屋の二階梯子を、お主が上がる後ろ影、巧い所とその場を逃げ、白糸は無理心中と、人殺しの罪はお主に塗りつけ、直ぐにその足でお八十が所へ押しかけて、内濟金の入用を、深切ごかしに貸してやり、お八十を手に入れる一段としたものを、却つておのれが手にかかり、やみ／＼死するが口惜しい。

ト苦しむ。懐中より財布落ちる。此うち次第に弱り落入る。主水、止めを刺す。

作助　こりやコレお金。

ト主水へ渡す。主水、落ち散りありし一軸と一つにして

主水　これぞ白糸より我れへ送らんと、辛苦なしたる下りの金。殊には書置にて、この身の明りも立ち、秋葉の重寶たる鯉魚の一軸、手に入る上は、日ならずして都へ上り秋葉の家を再興なさん。

八十　これと云ふも白糸さんが。

太七　これでガラリと譯が解つた。死ぬ者あれば生き返る

八十　再び花咲く鈴木の家名

主水　今ぞこの身の。

ト皆々見得よろしく居並び、時の鐘、鶏笛にて

榮えぢやなア。

ト頭取出て

頭取　東西々々。先づ今日はこれぎり。

トめでたく打出し　　ひやうし　幕

隅田川對高賀紋（終り）

解說

渥美清太郎

本卷には、南北が死んで、默阿彌が認められるまでの約二十年の間、唯一の作家であつた三世櫻田治助の作を主として收めた。この間は、京坂劇壇は勿論、江戸劇壇も可なりな不振で、作家にもこれはといふ人はなく、僅かに治助が氣を吐いてゐるばかりであつた。治助は二世の門人で、初めは晉助といひ、後に師の舊名をついで松島半二となり、天保六年、三十四歳の時、治助の名を襲つて中村座の立作者になつた。以來、主として四世中村歌右衞門に隨ひ、彼れの作は殆んど全部書いてゐる。歌右衞門が歸坂してからも多く中村座にゐて、相當に作をしたが、默阿彌が書き出してからは殆んど引退同樣で、文久二年に門人木村園治へ四世を讓り、狂言堂左交を改めてスケに廻つた。死んだのは明治十年八月七日、七十六歳であつた。

彼れの作に、純創作といふ脚本は殆んどない。いづれも先輩の燒直しだ。燒直しが巧いので氣が附かないが、中には全然丸取りなのも澤山ある。百餘篇を作してはゐるが、純創作は實に僅かである。とばかりでは惡い所だけのやうだが、巧い所もある。わたしが一番巧いと思ふのは彼れの作の會話だ。默阿彌は淨瑠璃の感化を受けて、すべて七五調の音樂的な所を覘つたが、彼れの會話は全然そんな窮屈な束縛は受けない。尤も急所急所は七五調になるが、普通の會話はすべて當時のスケッチだ。少しも飾らない、氣取らない、當時そのまゝの會話なのである。その點、どの位當時の世相が明瞭になつて、興味深く、また有り難いかわからない。初世二世に比較すれば技倆は下であるが、この會話の點だけは三世が最も巧い。

花觀堂大和文庫

安政元年三月、中村座の初演。當時非常に人氣のあつた万亭應賀作の草双紙「釋迦八相倭文庫」を脚色したものである。默阿彌が「兒雷也豪傑譚」や「しらぬひ譚」を脚色して大いに當てたので、その眞似をしたのであるが、これはさほど喝采されなかつた。草双紙の畫面に隨つて、衣裳は全部日本風にしたのだが、元々緣の淺い印度の物語だけに、草双紙では受けても、觀るものとしては看客の氣に合はなかつたらしい。作としては、大詰が面白い。夢を淨瑠璃にした點に興味がある。治助は初世二世に似て、所作の

地を書く事は實に巧く、今日にも舞踊として澤山に殘つてゐる。

初演の役割は左の通りであつた。

委達太子（八世片岡我童）烏陀夷妻命婦、はしみつ太夫實ハ普賢菩薩（尾上菊次郎）下部舍梨平（中村芝雀）夜叉軍次、南花女（中村鶴藏）一子槃特（岩井松之助）若黨銀國子（市川猿三郎）阿羅々仙八（森田勘彌）吉祥女（中村歌六）右梵字太郎（澤村源之助）高賀童子（澤村訥升）りんどう女、伊喜女（荻野伊三郎）提婆達多（中山市藏）やすたら女（岩井粂三郎）乳人烏陀夷、舍人車匿（坂東彦三郎）

月梅攝景淸

義太夫「嬢景淸八島日記」三の切を增補しはもので、初めのうちは院本通り、たゞ原作では娘淸瀧であるのを、江戸で通りのいゝ人丸と改めだけの事であるが、後半には同じく義太夫の「赤松圓心綠陣幕」壇風の段を取入れて、景淸の祈りを見せ、原作では盲目のまゝ歸國する筋を、觀世音の靈驗で目が明く事に直し、「牢破りの荒事から、さらばさらばの段切れまで、スッカリ江戸式に改めたところが治助の腕である。これは先代芝翫に傳はつて殘り、今でも折々上演される。初演は嘉永元年正月の中村座で、その役割は左の通りであつた。

秩父庄司重忠（三世關三十郎）土屋三郎常義（尾上新七）三保谷四郎國俊（中山現十郎）肝煎り左次太夫（市川九藏）三浦之助義村（市川男女藏）景淸娘人丸（尾上菊次郎）惡七兵衞景淸（四世中村歌右衞門）

新造⿰舟罣奇談

嘉永五年五月、市村座の初演。女團七の狂言で、今でも夏になるとよく上演されるが、これも純創作ではなく、女團七の方は中村富十郎の「紅色桔梗女團七」や、市川門之助の「着替浴衣團七縞」を、いろ〳〵と作りかへたもので、また團七茂兵衞の件、釣舟三婦の件は、文化十年にやつた福森久助の「男作女吉原」を其まゝ借りて來たに過ぎない。原作の團七九郎兵衞一寸德兵衞を、團七茂兵衞、縺れ髮の德兵衞と直しただけである。斯ういふ點で治助は全く無遠慮を發揮した人である。併し、坂東しうかのお梶が巧かつたのと、しうか菊次郎の喧嘩の仲直りを見せたのが當つて大入を取り、後に三津五郎から今の源之助に傳はつて今日に殘つたのである。初演に淺田宗治をやつた澤村源之助といふのが、今の源之助の父なのだ。

縺れ髮の德兵衞、義平次婆アおかん（三世關三十郎）淺田宗治（澤村源之助）大鳥村の佐賀右衞門、後家妙願（中山文五郎）番頭傳八（中村翫太郎）飾磨大九郎（松本虎五郎）子分銕次（澤村銕次郎）木片の權次（坂東又八）但馬屋九平治（坂東鴻藏）なまの八五郎（關孫六）家主太郎兵衞（市川雷助）玉島屋庄右衞門（關十藏）助松主計（嵐吉三郎）藝者、一寸縞お辰（尾上菊次郎）但馬屋娘お仲（關三之助）仲買ひ彌市（中村翫右衞門）妹おてつ（中村歌女之丞）釣船女房おつぎ（嵐小六）一子三吉（澤村源平）神樂坂の大八（大谷友右衞門）藝者、團七縞お梶（坂東しうか）團七茂兵衞、釣船の三婦（澤村長十郎）

名譽仁政錄（めいよじんせいろく）

大岡政談のうち、葛屋喜八、雲霧仁左衞門、鈴川源十郎、霞のお千代、縛られ地藏の件を一括し、越後傳吉の筋まで匂はせたものである。初演にはまだこの外は、新左衞門の女房お時が女大婁寺の件、まだ信田小太郎のだんまり、七變化の所作なぞも攝めてあるのだが、或ひは脚本がなかつたり、又は全然不用なので拔いて、八幕だけ收錄したのである。治助の傑作といつてよからう。三幕目の龜四郎の件なぞ、人情話にも同じ筋があり、紅葉山人の「關東五郎」と同趣向であるが、どうもこの狂言が原作らしい。喜八もお梅も龜四郎も谷次も、實によく描けてゐる。裁判の件も少し長いが、變に型通りのお白州場でなく、變化が多くあつて面白い。五幕目の雨舍り淨瑠璃場は、治助得意の借り物で、文政七年八月、中村座所演「晉菊高麗戀」第二番目、大經師茂兵衞荒五郎茂兵衞と女房おさんの件を、大岡政談の二人半兵衞に持込んだなぞは、同じ借り物にしても甚だ巧い手法と云はねばならぬ。

須藤六郎右衞門、鄉戸の龜四郎、鍾馗半兵衞（三世關三十郎）下部磯平、早房の喜三郎 實ハ大佛六郎（澤村源之助）淺羽十郎（坂東橋藏）手代和三郎 實ハ入間守之助（坂東玉三郎）鳥野伴藏、手代甚助（中村翫太郎）鍛冶屋善太、若黨伊平（澤村銕次郎）鍛冶屋孫兵衞（松本虎五郎）金川又八、判人勘七（坂東鴻藏）荷持ち十藏（關十藏）筋川源十郎、淨雲園師 實ハ雲霧仁左衞門、春藤新左衞門（嵐吉三郎）喜八女房お梅、同妹お露（尾上菊次郎）後家おかん、大工金兵衞（中村翫右衞門）稻野屋娘おけい、妹おろく（中村歌女之丞）清三郎母深雪、喜八母おきぬ（嵐小六）須藤清三郎（中村芝雀）山脇十藏、狼の谷次（大谷友右衞門）新左衞門女房お時、十藏娘お菊、勝見妲えお千代（坂東しうか）葛屋

喜八、稲野屋半兵衛、青砥左衛門藤綱（澤村長十郎）

福聚海駒量傳記

弘化四年四月、河原崎座に書き卸した狂言で、主演の俳優が四世歌右衛門だけに、治助が作者の署名になつてはゐるが、大體は二世河竹新七、即ち默阿彌の作らしい。セリフを讀めば解る。治助臭が少くて默阿彌の味が濃い。恐らく治助の作つたのは、七笑ひの場だけであらうか。默阿彌は僅かに四幕目と大詰だけは書いてゐる。讀んでゐると明瞭にそれがわかる。序幕も默阿彌調だが、これは默阿彌の弟子が書いたのであらう。併し、いづれが書いたにしても餘り大したものではない。上方で流行つた「敵討高音鼓」富士淺間の狂言を土臺にして、それへ「けいせい品評林」不破名古屋を嵌め込み、その年正月から淺草觀音の開帳のあつたを當込んだものなのである。淺間狹右衛門の笑ひ場は、無論「天滿宮菜種御供」の時平七笑ひを持込んだので、左甚五郎の見初め場は「天滿宮愛梅恐櫻」の堤畑の十作を其まゝ借り受けたのである。どこからも借りないのは茂兵衛内の場だけであるが、これは又甘い幕である。

二番目として左甚五郎の京人形が附いてゐたが、これは「舞踊劇集」に入れた狂言と殆んど同じなので、省いたのである。また大切には、淺草祭の所作が附いてゐたが、これは默阿彌全集の第二十卷に出てゐる。

東金の五郎吉、富士太郎知之（松本錦升）藝子おくに。仲居不破のお關（市川新車）若黨土子泥介（中村芝雀）名古屋小山三（中村福助）金魚屋金八（松本小次郎）駒月駒七（中村翫右衛門）鏡臺三藏（中村鶯助）姥捨石六（關歌助）田毎四十八（關七右衛門）遣り手おつめ（尾上岩五郎）富士左京之進常雪、男達筑波屋茂兵衛（市川九藏）細川息女非筒姫（市川團之助）番新八重咲（尾上梅三郎）仲居おつる（中村芝鶴）富士妻三室、甚五郎女房おつや（嵐小六）不破伴作、叢雲王子（淺尾爲十郎）長谷部雲六、母お角（大谷友右衛門）富士娘早枝 後ニ茂兵衛女房おしげ、傾城梅ヶ枝（尾上梅幸）淺間狹右衛門照政、左甚五郎（四世中村歌右衛門）

新板越白波

嘉永四年九月、市村座の初演。鬼神のお松の狂言で、今だに上演を續けられてゐる、治助の作としては生命の長いものだが、實は全部が借り物で、序幕は大坂狂言の「遠江潟戀賊」三幕目以下は大南北の「曾我中村穐取込」を採つ

て、巧く繼ぎ合せたものである。題材に依つて古狂言を利用する治助の腕には驚くべきものがある。

夏目四郎左衞門、下郎磯平（嵐吉三郎）娘美鳥（藤川花友）宇佐美源吾（坂東橘藏）邊見甚左衞門（森田勘彌）小路伴內、鹿野苑軍八（大谷友右衞門）徽塵流のお松（坂東しうか）名越長兵衞（市川高麗藏）夏目四郎三郎實ハ邊見雅次郎（八世市川團十郎）

隅田川對高賀紋（すみだがはつひのかゞもん）

鈴木主水の狂言である。これは治助が全く他人の作を借りない脚本で、この頃瞽女が頻りに唄つた流行唄を種にしただけである。遊蕩の旗本に、今まで芝居には現はれぬ新宿の廓を配した趣向が大評判で大人氣を取つた。實際、主水といふ自墮落な侍ひや、七人廻しの件なぞ治助の壇場で放膽な脚色が頗る面白い。この頃折々出る鈴木主水は上方の劇で、この劇とは關係がない。たゞ東京で演じる時は、七人廻しの件と淸元を借りるだけである、

初演には、當時有名な天保水許傳も脚色してあつて、神力民五郎と左甚五郎の隣同士の場だの、花笠衞次と共崎政吉の達引だのといふ場があつたが。脚本が完全してゐなかつたので全部省いた。猶、鏡山もテレコになつて、烏啼きの場へは主水もお八十も出たものだが、すべて省かざるを得なかつた。嘉永五年三月市村座初演、

主水女房お八十（尾上菊次郎）若い者太七（坂東橘藏）下部宇助、通人文福（澤村宇十郎）大工孝吉（坂東鴻藏）百姓勘右衞門（中村傳右衞門）橋本屋お歌（中村歌女之丞）白糸お瀧（嵐小六）筑波根三平（大谷友右衞門）橋本屋白糸（坂東しうか）鈴木主水（澤村長十郎）

猶、豫約して置いた「名高手毬諷實錄」が、頁の關係で收錄出來なかつた事をお詫する。これは追加の卷に必ず入れる筈である。

本全集歌舞妓篇も、諸賢の御後援で、あと數册までとなつた。相當の量はあるが、併し、三百年間の華を咲かせた歌舞妓劇の重要な脚本は、まだこれだけではほんの九牛の一毛である、面白い狂言、大切な戲曲は山のやうに殘つてゐる。愛讀者の方からは盛んに追加を出せとの御投書がある。材料は揃つてゐる。いよ／＼相談が纏まつて、來年から追加十八卷を出版する事になつた。これで歌舞妓篇が五十册に達し、先づ／＼歌舞妓史上逸すべからざる脚本は、

網羅する事が出來る事になつた。從來の御厚情に甘へ、續いての御後援を懇願申し上げる次第である。細目その他は追つて發表するが、內容は大體左の通りである。

「探偵狂言集」——小間物屋彥兵衞、髮屋喜八、大久保武藏鐙、遠山政談、等。

「石川五右衞門狂言集」——山門五三桐、石田の局、稚兒淵、女五右衞門、等。

「太閤記狂言集」——繪本太功記、三國無双奴請狀、馬盥の光秀、日吉丸稚櫻、等。

「俠客狂言集」——黑船忠右衞門、雁金文七、雷電源八、幡隨長兵衞、等。

「情話狂言集」——三勝半七、お駒才三、お花半七、小いな半兵衞、等。

「續義太夫時代狂言集」——鬼一法眼三略卷、源平布引瀧、祇園祭禮信仰記、等。

「續々義太夫時代狂言集」——蘆屋道滿大內鏡、ひらがな盛衰記、妹脊山婦女庭訓、等。

「維新狂言集」——櫻田事件、坂下事件、桂小五郎、等。

「不破名古屋狂言集」——けいせい廓源氏、けいせい花繪合、東山殿劇場段幕、等。

「双蝶々狂言集」——蝶同孖梅菊、色情曲輪蝶花形、御攝曾我閏正月、等。

「お家騷動狂言集」——小笠原騷動、柳澤騷動、鍋島騷動、等。

「武勇傳狂言集」——宮本武藏、岩見重太郎、荒木又右衞門、等。

「續赤穗義士劇集」——日本花赤穗臘箍、松切り勘平、松浦の太鼓、山名の切捨御免、等。

「續文化文政江戶狂言集」——上州の團七、江戶の朝顏日記、江戶のお千代半兵衞、棲重噂菊月、等。

「京坂世話狂言集」——お八十藤兵衞、三人新兵衞おつま八郎兵衞、曾根崎五人斬、等。

「京坂二の替狂言集」——けいせい踏島臺、桑名屋德藏入船噺、けいせい素袍臺、等。

「江戶顏見世二番目狂言集」——十數種。

「續舞踊劇集」——數十種。

責任校訂　渥美清太郎

日本戯曲全集・第二十二卷
幕末江戸狂言・第廿四回配本

編纂者檢印

昭和五年十二月十五日印刷
昭和五年十二月十八日發行
（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　木呂子斗鬼次
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋三七・五一・六四一八四一
振替東京一六一八七

發販所　新倉東文堂

（神田區松下町七番地・明治印刷株式會社印刷）